

---

# 穢翼のユースティア 殺し屋から英雄へ

トリックマスター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

穢翼のユースティア 殺し屋から英雄へ

### 【Nコード】

N8389S

### 【作者名】

トリックマスター

### 【あらすじ】

どうもネット小説第2弾です、まだ前の小説が完結しておりませんが、穢翼のユースティアの結末が納得できなかったのこの小説も執筆させていただきました、穢翼のユースティアのメインヒロインのティアエンドの後日談ですので、ネタバレありとなっていますので、そういうのが嫌いな方はご遠慮ください。(ヒーローものとのコラボです。)

## プロローグ（前書き）

どうも、まだGXの小説が途中ですが、こちらの小説も始めさせて  
いただきました、こちらは、その後の後日談を私が特撮ものとコラ  
ボさせて、オリジナルストーリーを書きたいと思っています、ちな  
みに更新は、GXともども今後忙しくなると思うので不定期になる  
とは思いますが、よろしくお願いします。

## プロローグ

ここは、ノーヴァス・アイテル。

ここはかつて浮遊都市と呼ばれていた、しかし、1年前に起こった、ある事件によりここは浮遊都市ではなくなった。だがその代わりにここはかつての大崩落という恐怖から開放された。今は上層、牢獄という言葉もなく人々は新たな道を踏み出していた。

カイク「俺もいい加減に、新しい道を探すか．．．なあ？ティア．．．」

彼の名は、カイク・アストレア。1年前の事件において、現女王であるリシア・ド・ノーヴァス・ユーリイより、多大な功績を認められた彼であったが今は引き続き何でも屋をやって、生計を立てている。リシアからは近衛騎士団長を求められた彼だが、それを断り、現在はフィオネ・シルヴァリアが近衛騎士団長を務めている。そして、不触金鎖も現在ではリシアより都市の管理を任されており、頭であるジークフリード・グラードも多忙な身である、現在の不触金鎖は前のような殺し屋家業や娼婦館はなくなり、都市の管理が主な仕事と成り、娼婦たちも様々な分野の仕事についている状態である。カイク「さて、行ってくるティア．．．」

彼はこの都市を守り抜いた最愛の人であるユースティア・アストレアの写真に挨拶をして、出かけていった。彼は彼女が肉体を失い自分の前から消えた後も彼女との約束で生き続けていた、しかし、その後、彼の運命を大きく変える出来事と異形のものとの戦いが待っているとも知らずに。

## プロローグ（後書き）

どうも、穢翼のユースティア発売され、もうクリアしてしまい、結末に納得できなかったという思いから、このようなものを書かせていただきました、GXのほつも同時に書きますのでよろしくお願ひします。

## 第1話 再会の時（前書き）

どうも、とうとう本格的な話を始めます、ちなみに敵はオリジナルにしますので、よろしくお願いします。

## 第1話 再会の時

カイムは、エリス・フローラリアのところへ向かった。

エリスは、現在も医者を続けている、都市が現在の状態になった後は、医者不足があり彼女の存在は大きいものであった。

エリス「カイム、私に会いに来てくれたの？」

カイム「相変わらず、忙しそうだな。」

エリス「前に比べたら、暇なものよ、それよりこれからジークのところへ行くんでしょ？」

カイム「ああ、ちよつと依頼があつてな。」

エリス「だったら、この薬持つててくれない、ジークに頼まれたんだけど、中々行く機会がなくてね。」

カイム「わかつた、ジークに渡しておく。」

エリス「よろしくね、カイム。」

そう言つて、カイムはジークのところへ向かった。

エリス「...あの子がいなくなつてから、1年経つけど相変わらず、カイムはみんなの前では顔色一つ変えないでいるわね、まったく、あの子つたら、カイムをこんなにさせていなくなるなんて、迷惑よね。」

不触金鎖の館

現在は、城の近くの館に構えている。

オズ「おお、カイムさん。」

カイム「オズか、ジークは居るか？」

オズ「へい、頭なら部屋にいます。」

カイム「なら案内してくれ。」

オズ「わかりました。」

そう言つて、オズはカイム案内した。

オズ「お頭、カイムさんがお見えですが？」

ジーク「おお、そうか、入ってくれ。」

そういうとオズはカイムを部屋の中へと入れた。

カイム「よお、ジーク、相変わらず忙しそうだな。」

ジーク「まあな、牢獄時代に比べるとさらに面倒だな、しかし、その代わりに崩落の影響が皆無になったおかげで、小さな揉め事だけですんでるがな。」

カイム「それと、エリスのところへ寄った時にこの薬を渡されたが

ジーク「おお、そうか悪いな、俺も誰かに行かせようと思ってたところだったんだ。」

カイム「気にするな、ついでだ、それよりも俺に依頼とはなんだ？」

ジーク「ああ、実はな・・・」

ジークはカイムに話し始めた、数日前より夜になると異形の化け物に人々が襲われており、不触金鎖も

独自に調査を開始したが、若い衆の何名かが逆に返り討ちに遭い、命に別状はないらしいが、このまま

ほうっておくわけにもいかず、腕の立つものが必要と判断された結果、カイムに依頼しようと考えたと

いう。

ジーク「・・・というわけだ、カイム、やってくれるか？」

カイム「わかった、引き受ける、その異形の化け物が気になるしな。」

ジーク「すまん、ティアのことを思い出させるような依頼をして

カイム「・・・気にするな、それよりも、今夜から見張る、人にはできるだけ外出させないようにしてくれ。」

ジーク「わかった、それじゃ頼むぜ。」

その後、カイムは夜までジークと杯を交した。

そして、夜

カイル「・・・なんで、こんなにいるんだ？」

そう、今ここにはジークとカイル以外にフィオネ、エリスがいた。

エリス「カイルに何かあったら、私がいないと治療できないでしょ？」

フィオネ「私は、治安のためとはいえ、ジーク殿だけに押し付け  
るわけにはいかないでしょ。」

ジーク「・・・だそうだ、カイル諦めな。」

カイル「・・・しかたがないか・・・うん?・・・誰か来る!？」

カイルが何者かの気配を感じた。

ジーク「あれは、なんだ?明らかに人間の動きじゃねえ!」

カイル「(あの時、ティアが浄化したものとは違う。)」

フィオネ「そんなことより、正体を確かめるわよ。」

そう言つて、全員その異形の者の前へ出た。

ジーク「てめえ!いつたい何者だ!？」

???「なんだ、人間か、しかし、今までの人間とは違い力強さがある。」

エリス「な、何言っているのよ?」

カイル「最近の騒ぎはお前の仕事か?」

???「ああ、そうだな、俺の仕事といたら、俺の仕事だな。」

フィオネ「ふざけるな!お前はいつたい何者だ!？」

???「俺か?俺は中級妖魔のバザーだ。」

ジーク「中級妖魔?」

カイル「・・・妖魔、いつたいなんなんだ?」

バザー「詳しく知る必要はねえ、お前らは俺の力の糧になるんだから。」

カイル「下らん、逆に振り返ちにしてくれる。」

バザー「威勢がいいな、いくぜ!」

そう言つて、4人に人間離れした動きを見せた。

ジーク「くう!動きが早すぎる!」

フィオネ「応戦するのが精一杯だわ!」

そう言つて、4人は翻弄されていた。ちなみにエリスはカイクが自分の後ろに回らせている。

カイク「なんとか、突破口はないのか・・・」

とその時、突然この空間に光が集まりはじめた

バザー「な、なんだ、この光りは？」

その後あたりは光りに包まれて不思議な空間に4人は引きずりこまれた。

カイク「こ、ここは？」

エリス「少なくとも、さっきの場所じゃないわね。」

フィオネ「ねえ、あれは!？」

フィオネは誰かが近づいて来るのに気がついた。

その人物は4人がよく知っている人物だった。

カイク「ティア！」

ジーク「それにメルト!？」

そうカイクの最愛の人でありこの都市を守るため肉体を失ったユースティア・アストレアと大崩落で亡

くなったはずの酒場の女主人であるメルト・ログティエだった。

ティア「カイクさん、皆さんお久しぶりです。」

メルト「カイク、ジーク元気だった？」

カイク「ど、どうして、二人が？」

ジーク「そ、そうだ、それにメルトは死んだはずじゃ？」

メルト「実はね、私あの時ある人に助けられたの。」

エリス「ある人？」

メルト「ええ、赤い戦士に。」

フィオネ「赤い戦士？」

ティア「私はお母様が、今一度人間を信じてみようと私に新しい身体くださったんです。」

カイク「そ、そうだったのか・・・」

メルト「それよりも、今はそんな話をしている場合じゃないのよ、あの妖魔を倒さないと。」

カイル「し、しかし、俺達の方ではとても太刀打ちできるものじゃ  
．．．」

ジーク「そ、そうだが、メルト、あんな人間じゃねえ奴にどうやって。」

ティア「それなんですけど、これを受け取ってください。」

そう言つて、ティアとメルトが4人に鍵と四角いものを渡した。

カイル「これは？」

ティア「これはモバイレーツとレンジャーキーというものです。」

4人「『『『モバイレーツ!? レンジャーキー!?』』』」

困惑する4人にメルトが説明に入る。

メルト「それはね、赤い戦士が私とティアに託してくれたのかつて  
遠い昔にこの世界を数々の危機から守つた、伝説の英雄の力がある  
んですつて。」

ジーク「伝説の英雄？」

メルト「まあ、信じられないかもしれないけど、とりあえず持つて  
みなさい。」

そう言われ、4人はそれを受け取つた瞬間に頭の中に様々な記憶が  
駆け巡つてきた。

カイル「こ、これは!？」

ジーク「な、なんだ、この記憶は!？」

エリス「これが．．．」

フィオネ「英雄達の記憶．．．」

そして、6人は元場所に戻つてきた。

バザー「なんだつたんだ、今のは?つて、お前ら何で人数が増えて  
いるんだ?」

6人はバザーに向かい合つた。

カイル「．．．さっきの記憶のおかげで、今俺のなすべきことがわ  
かつた．．．」

ジーク「奇遇だな、俺もだ。」

エリス「さっきの映像のおかげで、この力の使い方がわかつたしね。

「ファイオネ「もう、先ほどのようにはいかない。」  
ティア「皆さん……」

「メルト「それじゃ、あいつをやっつけましょうか。」

「バザー「ガハハハハ！貴様ら学習能力がないのか？さっきの状況をみても貴様らが勝てる見込みなど万に一つもないわ。」

「カイル「それはどうかな？」

「そう言つて、6人は先ほどのモバイレーツとレンジャーキーを取り出した。」

「バザー「！な、なんだ、それは！？」

「カイル「行くぞ！」

「6人「……豪快チエンジ！！」「」

「モバイレーツ「ゴークイジャー！！」

「6人の姿が変わつた。」

「ジークは赤の戦士に、ファイオネは青の戦士に、メルトは黄色の戦士に、エリスは緑色の戦士に、ティアは桃色の戦士に、そして、カイルは様々な色が混じつた戦士にそれぞれ変身した。」

「カイル「ゴークイキング！」

「ジーク「ゴークイレッド！」

「ファイオネ「ゴークイブルー！」

「メルト「ゴークイイエロー！」

「エリス「ゴークイグリーン！」

「ティア「ゴークイピンク！」

「全員「……海賊戦隊ゴークイジャー！！」「」

「バザー「ご、ゴークイジャーだと？てめえら、いったい何もんだ……」

「カイル「お前ごとき答える必要はない。」

「ジーク「なぜなら、お前はここで消えるんだからな。」

「バザー「な、なんだと！ふざけやがって、上等だ！行くぜ！」

「カイル「みんな、行くぞ！」

そして、今戦いの火蓋が切って落とされた。

## 第1話 再会の時（後書き）

どうも、今回は初の変身で終わりにしました、敵は妖魔でオリジナルにします、また主人公のカイムだけオリジナルのゴーカイキングというものになりました。これはジャッカー電撃隊のビックワンのような感じで考えましたので、よろしくお願いします。

## 第2話 伝説の英雄の力(前書き)

どうも、今回は戦闘開始です、ちなみにゴークイジャーの追加戦士は別の人物にさせますので、また後のお楽しみということ、それでは

## 第2話 伝説の英雄の力

6人は、一斉にゴーカイサーベルとゴーカイガン取り出し、バザーに攻撃をかけた。

ジーク「オラオラ！」

カイク「ふん！」

バザーはゴーカイサーベルで斬りつけられて、さらにゴーカイガンで攻撃され吹き飛ばされた。

バザー「う、てめえ！やりやがったな、こうなったら、スカルソルジャーども、奴らを消せ！」

そう言つて、地面からガイコツの兵士が大量に出てきた。

カイク「雑魚が、また大量に．．．」

ジーク「カイク！雑魚は俺達がやる。お前はあいつを頼むぜ！」

カイク「わかった、頼む。」

そう言つて、カイクはバザーに向かっていった。

メルト「それじゃジーク、面倒だし、これ使う？」

そう言つて、別のレンジャーキーを取り出した。

エリス「そうね、別の力も使ってみましょう。」

フィオネ「意義はありません。」

ティア「お任せします。」

ジーク「なら、行くぜ！」

5人「『『豪快チエンジ！』『』『」

モバイレーツ「チエンジマンー！！」

5人の姿が電撃戦隊チエンジマンの姿になった。

スカルソルジャー「ガガガ！」

ジーク「行くぜ！」

5人はそれぞれの武器を出し、スカルソルジャーに向かって発射した。

ジーク「ドラゴンズーカ！」

フィオネ「ペガサスズーカ！」  
メルト「マーメイドズーカ！」  
エリス「グリフォンズーカ！」  
ティア「フェニックスズーカ！」  
スカルソルジャーを一掃していき、最後に残った奴らに対してバズーカを合体させた。  
5人「パワーバズーカ！」  
スカルソルジャーは全滅した。  
ジーク「さて、思ったより早く片付いたな。」  
フィオネ「改めて使ってみると、この力すごいですね。」  
ティア「それより、カイクさん大丈夫でしょうか？」  
メルト「大丈夫よ、カイクなら。」  
エリス「カイクがあんな奴に負けるわけないしね。」

そのころカイクは

カイク「ふん！」

バザー「ぐああ！」

バザーは完全に押されていた。

カイク「面倒だ、これで終わらす！」

そう言つて、レンジャーキーを取り出した。

カイク「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

カイクはデカマスターに姿を変えた。

バザー「姿が変わった!？」

カイク「百鬼夜行をぶった斬る、地獄の番犬デカマスター！」

バザー「ふ、ふざけやがって！」

そう言つて、バザーはカイクに向かっていった。

カイク「甘い、ディーソードベガ！」

カイクは剣を取り出し、バザーに斬りかかった。

バザー「ぐああ、この野郎！」

バザーはカイクに猪突猛進に突っ込んできた、それを見たカイクは剣を構えなおし、バザーを満月のように円を描いてから叩き斬った。カイク「ベガスラッシュ！」

バザー「ぐああ、ば、バカな、この俺が．．．妖魔は不死身のはずなのになぜ再生できない、うああああ！」

バザーは断末魔を上げ消滅した。

カイク「終わったか．．．」

その時、ジークたちも来て、カイクたちは変身を解除して元の姿に戻った。

ジーク「しかし、いったいこいつらは何なんだ？」

カイク「ティアとメルトは知らないのか？」

ティア「す、すみません．．．」

メルト「実は、私もよくわからないのよね、ただこれを預かった時に赤の戦士がこれがないと妖魔は倒せないって、言ったから。」

フィオネ「ともかく皆さん、一旦城へ行きましょう。リシア女王にこの経緯を説明しなければ．．．」

エリス「そうね、とにかく、二人には後で詳しく聞かせてもらうことにして．．．」

カイク「まずは、情報整理が先だな。」

そう言って、6人はリシアのいる城へ向かっていった。

## 第2話 伝説の英雄の力（後書き）

どうも、ゴークイキングは基本的に全ての戦士に変身できるような設定にしました。次回以降も様々戦士に変身させますが、スーパー戦隊以外のヒーローも出す予定なのでよろしくお願いします。

### 第3話 新英雄誕生（前書き）

どうも、今回は女王となったりリシアが初登場です。さらにバトルは無しで普通の話だけにします。

### 第3話 新英雄誕生

中級妖魔バザーとなる者を倒した後、カイクたちは女王となったりシアの元を訪れた。

リシア「皆のものこの度は、ご苦労であった、それにしてもユースティア・アストレア、それと初めて会うがカイクたちから話は聞いている。メルト・ログティエよ、よくぞ、彼らの力となってくれた、礼を言わせてくれ。」

ティア「い、いえ、私達はカイクさんたちを助けたかっただけですから．．．」

メルト「そうですね、私達は自分の知人を見殺しにはできなかつただけのことですので、女王様からわざわざお礼を言われることではありません。」

リシア「そうか、しかし、そうは言わずに言わせてくれ、本当にありがとう．．．」

ティア「女王様．．．」

フィオネ「陛下、そろそろ本題に．．．」

リシア「おお、そうだった、しかし、よもや異形の化け物の正体が妖魔なるものとな．．．」

カイク「女王は何か知っているのか？」

リシア「ここには、今お前達しかおらぬ、呼びやすい名で呼べばよい。」

カイク「．．．わかった、それじゃ、リシアはその妖魔について何か知っているのか？」

リシア「私も詳しいことは知らぬが、王室の研究室の調べでは太古の昔に存在した魔族の一種らしいな、しかし、何者かの手によって封印されたとの記述が見つかっておる。」

ジーク「．．．では女王、今度はこの力を見てもらいましょうか。」  
リシア「うむ、その妖魔を撃破した力見せてもらおう。」

そう言つて、6人はモバイレーツとレンジャーキーを取り出した。

6人「「「豪快チエンジ！」」」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

リシア「おお！それが謎の赤き戦士から託されたという、かつて遠い昔にこの世界を守つたとされる英雄の力か．．．」

その後、6人はすぐに元の姿に戻つた。

リシア「しかし、その力がなければ、奴らに勝てんとは、やはり、お前達に頼むしかないな、フィオネ、お前は特別任務を与える。今後カイムたちと行動を共にして、奴らに対応できるようにしろ。」  
フィオネ「は、わかりました！」

エリス「と、なると、私達がやらなきゃいけないのね。」

メルト「仕方がないわ、普通の人じゃこの力をまともに使えないでしょうしね。」

カイム「俺はやってやる、人の庭に土足で侵入されているようで気に入らん。」

ジーク「奇遇だな、俺もだ。」

リシア「なら、皆のもの頼む、こちらもできる限りお前達が動きやすいように協力させてもらう。」

ティア「あ、ありがとうございます。」

カイム「それじゃ、失礼する。」

そう言つて、6人は広間から退室した。

リシア「．．．しかし、あの力、すごいものがあるが、あの6人だけに全てを押し付けるような感じで、なんとも心苦しいものか．．．」

6人を見ながら、リシアは一人そう呟いた。

その後、6人は、モバイレーツが通信機能を使えることがわかつたので、とりあえず、何かが起こるまでいつもどおりに動くことで一致した。ちなみにメルトはクローディア、リサ、アイリスの三人が新たに始めた酒場で女店主として迎えられて、普段はそこにいるこ

とした、ちなみにフィオネはジークの館で必要な仕事を行っている。ティアはカイムの家に戻ったのだが、なぜかエリスも強引に家に転がり込んできた。

しかも……

カイム「……………」

エリス「ちよつと、ティア、カイムからもう少し離れなさいよ。」

ティア「嫌です、エリスさんの方こそ、もう少し離れたらいいじゃないですか。」

ティアは以前とは比べ物にならないくらいに積極的になり、エリス相手にカイムを巡って張り合っている状況である。

カイム「一難去つて、また一難か……………」

カイムは今の状況を苦笑しながら、二人には聞こえない声で呟いた。カイム「しかし、なぜだろうか、今この状況が居心地がいいのはなぜだろうか？ やつぱり、ティアやメルトが戻ってきたからか……………」

俺も結局は嬉しいのか……………」  
カイムはティアとメルトが戻ってきたことを心のそこから嬉しく思つて、笑みを浮かべていた。

### 第3話 新英雄誕生（後書き）

どうも、今回はわりと短めになりましたが、次回からは本格的にバトル要素を入れていきたいと思えますので、よろしくお願いします。

## 第4話 妖魔の謎（前書き）

どうも、GXと夜明け前のコラボも少しずつ、進めておりますがこちらも頑張って進めさせていただきます、読んでくれる方々のために頑張らせていただきます。今回は敵の姿が少し出てきます。

## 第4話 妖魔の謎

都市ノーヴァス・アイテルの地下

この場所はかつて下層と呼ばれていた場所、そこに今3人の男らしき人物が話し合っていた。

「???」どうやら、バザーがやられたようだな。」

「???」ふん、粹がつて出て行った割には情けない!」

「???」それよりも、いくら奴が油断していたとしても不死である我々妖魔が死ぬわけではない。」

「???」たしかに、それはおかしい話だ、それは確認しておく必要があるな、適当な下級妖魔を向かわせるか。」

「???」そうだな、お前に任せる。」

「???」わかった、さて誰がいいかな」

そう言うところ中心人物らしき男がカードを1枚のカードを引いた。

「???」こいつか．．．行って来いクラーザー。」

クラーザー「シャアア!」

クラゲとカニを合わせたような怪物を差し向けた。

「???」さてどうなるか、お手並み拝見だな．．．」

ノーヴァス・アイテルの都市の外

カイムは現在ジークと一緒に力を使いこなすためにいろいろと試していた。

他のメンバーはとりあえず高みの見物をしていた。

カイム「豪快チェンジ!」

モバイレーツ「ガオレンジャー!」

カイム「閃烈の銀狼!ガオシルバー!」

ジーク「ならこっちは、豪快チェンジ!」

モバイレーツ「ダイレンジャー!」

ジーク「リュウレンジャー!天火星!」

二人はそれぞれの武器を取り出した。

カイル「ガオハスラーロッド！」

ジーク「赤龍双龍剣！」

カイル・ジーク「はあ！！！」

二人はお互いに全力でぶつかり合った。

ティア「二人とも、やっぱりすごいですね。」

エリス「もうあんなに力を使いこなしている。」

フィオネ「私も負けていられませんね。」

メルト「でもまだね、赤の戦士の話による大いなる力が目覚めないと真の力が発動しないんですって。」

エリス「大いなる力って？」

メルト「ごめん、実は私も良くわからないのよね。」

フィオネ「自分達で見つけるしかないってことですね。」

とその時、地下から妖魔兵士スカルソルジャーと下級妖魔クラーザーが現れた。

カイル「！妖魔か！？」

ジーク「カイル！どうやらトレーニングは中止のようだぜ。」

メルト「私達も行くわよ！」

エリス「言われずとも！」

フィオネ「もちろんです！」

ティア「準備完了です！」

4人「「「豪快チェンジ！」「」」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

クラーザー「シャアア！」

スカルソルジャー「ガガガ！」

カイル「どうやら、知能は低いようだな。」

ジーク「行くぜ妖魔野郎、天火星稲妻炎上破！」

真っ先にジークは赤龍双龍剣に炎を纏わせてクラーザーに斬りかかった。

カイル「俺もいることを忘れるな、はあ！」

カイムはガオハスラーロッドでジークと一緒に斬りかかった。その間、他の4人はスカルソルジャーに向かっていった、しかし、敵の数が無駄に多くきりが無い。

エリス「あゝ、もう面倒ね！」

ティア「だったら、チェンジしましょうか？」

メルト「そうね。」

フィオネ「それじゃこれを使いましょう。」

そう言つて、別のレンジャーキーを取り出した。

4人「「「豪快チェンジ！」「」」

モバイレーツ「ゴオンジャー！」

スカルソルジャー「ガガガ！」

メルト「レーシングバレット、バレットクラッシュ！」

フィオネ「ガレージランチャー、ランチャースターター！」

エリス「ブリッジアックス、アックスツーリング！」

ティア「カウルレーザー、レーザーハイビーム！」

次々と片付けていき、残り少なくなったところで4人集まってマントンガンを取り出した。

4人「ゴオンキャノンボール！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルソルジャーは全滅した。

そして、カイムとジークはクラーザーを追い詰めていた。

ジーク「決めるぜ、カイム！」

カイム「ああ」

ジーク「気力遠隔斬り！」

カイム「銀狼満月斬り！」

クラーザー「シャアア！」

クラーザーは爆発した。

都市ノーヴァス・アイテルの地下

????「やはり、下級妖魔の奴では力不足だったか……」

「????心配するな、手は打ってある、行け．．．デビルズスパイダー。」

そう言つて、50cmくらいはある大きな蜘蛛を向かわせた。

ティア「カイクさん！ジークさん！」

カイク「ティア、みんな。」

メルト「意外と呆気なかったわね。」

ジーク「ああ、こいつはおそらく前の奴より地位が低い奴なんだろうぜ。」

フィオネ「なぜそう思われるのですか？」

ジーク「前の奴は中級妖魔つて名乗っていたからな、それに比べてこいつは知能が低いからなそんな奴が喋れる奴より位が上のわけないさ。」

エリス「たしかにそうね．．．ん？何あの大きい蜘蛛は？」

そこの現れたのは先ほど謎の男の手によって放たれたデビルズスパイダーがクラーザーの所へ行き、奴の亡骸の中に入つていった。

ティア「な、なんですか、あの蜘蛛は？」

カイク「！みんな離れる！」

カイクは真つ先に気付き、みんなを引き離れた。その瞬間なんと先ほど倒したクラーザーが巨大化して復活した。

ジーク「な、なんだ！？あんなに巨大化しやがったぜ！？」

エリス「ティア！メルト！あんだ達なんとする方法はないの？」

ティア「す、すいません．．．」

メルト「さすがに私達も知らないわ。」

エリス「もう！肝心な時に．．．」

フィオネ「今はそれどこじゃないでしょう、とにかく行かなければ．．．」

カイク「とにかく、行くしかない、行くぞ。」

そう言つて、カイクたちは巨大化したクラーザーに向かつていった。

#### 第4話 妖魔の謎（後書き）

どうも、今回は巨大戦の手前で終わらせました。ちなみにゴーカイガレオンは当然登場しますが、カイクのゴーカイキングは歴代スーパー戦隊のロボットを使わせませぬ、一気に登場させませぬが、いろいろ登場させたいと考えておりますのでよろしくお願いします。それではまた次回。

## 第5話 大いなる力(前書き)

どうも、今回は巨大ロボット戦です、今回はゴークイオーとカイクイムが乗る歴代スーパー戦隊のロボットの1体が登場します。

## 第5話 大いなる力

カイクたちは巨大化したクラーザーに対してゴーカイガンで攻撃をかけた。

ジーク「くそ、やっぱり手応えがねえ！」

カイク「これだけでかいとな．．．」

エリス「でもどうするの、このままだと．．．」

メルト「そうね、このままだと街のほうへ．．．」

フィオネ「それだけは絶対に避けなければ．．．」

ティア「で、でも止めるどころか聞いてませんよ。」

6人は攻撃を加えながら打開策を考えていた。とその時ティアとメルトが何かを思い出した。

ティア・メルト「そうだ！思い出した！」

カイク「何を思い出したんだ？」

メルト「それがね、赤の戦士からね、緊急事態になったらモバイルーツに5501の数字を打ちこめって、言われてたんだ。」

エリス「それを早く言いなさい！」

ティア「す、すみません、あとカイクさん！カイクさんはこれを．．．」

そう言つて、通常のレンジャーキーとは違うキーと大きめのプレスを渡した。

カイク「これは？」

ティア「それはですね、キングインストローラーとキングキーです。」  
ジーク「なんだそれ？」

ティア「わからないんですけど、カイクさんのゴーカイキングしか使えないレンジャーキーだそうです。」

メルト「ちなみにキングキーはまだその1本しか見つかってないからね、赤の戦士曰く他のキーはどこかで眠っているって話だから。」

カイク「成る程な．．．」

フィオネ「そんなことより！早くあいつを止めなければ！」

ジーク「おっと、そうだったな、行くぜ！カイル！」

カイル「ああ！」

そう言うとジークはモバイレーツに5501の番号を入力し、カイルはキングインストローラーにキングキーを差し込んだ。そしたら、どこからともなく巨大な赤い船が来た、そして、キングインストローラーを通じて異空間から巨大ロボットが現れた、そのロボットはなんとフラツシユキングだった。

キングインストローラー「フラツシユキング！」

ジーク「よしこれなら、あいつを止められるぜ、行くぜみんな！」

そう言つて、カイル以外のメンバーはゴーカイガレオンへ乗り込み、カイルはフラツシユキングへ乗り込んだ。

それを見ていたあの謎の3人は

「？」「まずいな、どうする巨大スカルソルジャー達も出すか？」

「？」「そうだな、あいつ一人ではすぐにやられて、力をよく見ることができない。」

「？」「やれやれ、次から次へと妙な力を使う奴らだな・・・」

その直後、でかい先ほどのスカルソルジャーが現れた。

カイル「あいつらもでかくなれるのか？」

ジーク「カイル！雑魚は俺達がやる、お前はあいつを頼む、あの野郎、相変わらず街に向かってやがる！」

カイル「わかった、頼む。」

そう言つて、カイルはクラーザーのところへ行き、他の5人は巨大スカルソルジャーに向かっていった。

ジーク「行くぜ！みんな！」

4人「了解！」「」

5人「海賊合体！」「」

その後、4体の小型メカが現れてそれと合体を始めた。

5人「完成！ゴーカイオー！」「」

ジーク「派手に行くぜ！」

ゴーカイオーで敵に向かっていた。  
巨大スカルソルジャー「ガガガガ！」  
ジーク「ゴーカイケン！」  
巨大な2本の剣で巨大スカルソルジャーを斬りつけていった。  
ジーク「一気に畳み掛けるぜ！」  
5人「「「レンジャーキーセット！」「」」  
ゴーカイオーの全ハッチが開放され、いろんなところか大砲があられた。  
5人「「「ゴーカイスターバースト！」「」」  
巨大スカルソルジャーたちは大量の砲弾の餌食になり全滅した。  
メルト「あとはカイムのほうね。」

その頃カイムは、クラーザーに追いついて相手をしていた。  
カイム「キングミサイル！」  
クラーザー「シャアア！」  
攻撃を食らいながらもクラーザーは反撃を試みようとする。  
カイム「キングビーム！」  
クラーザー「シャアア！」  
クラーザーが吹き飛ばされて倒れた。  
カイム「よし、今だ！コズモソード！」  
カイムがそう言うと、またもや異空間から戦闘母艦スターコンドルが現れ、そこからコズモソードが射出され、フラッシュキングはジャンプしてそれを受け取り、クラーザーに向かっていった。  
カイム「とどめだ、スーパーコズモフラッシュ！」  
コズモソードにフラッシュキングの額からエネルギーを与え、何回転からしてからクラーザーを一刀両断した。  
クラーザー「シャアア！」  
クラーザーは爆死した。  
ジーク「カイム！」  
カイム「みんな、どうやらそっちも片付いたな。」

エリス「ええ、カイムのほうもね。」

メルト「まさか、カイムとジークの訓練からこんなことになるなんてね……」

フィオネ「敵は我々を待つてはくれないということですね。」

ティア「これからどうなるんでしょうか。」

カイム「どうなるか関係ない、俺達とはにかく降りかかる火の粉を払うだけだ。」

ジーク「そうだな、カイムの言うとおりだな、とりあえず今日は街へ戻るか。」

その後、ゴーカイガレオンは街の外に停泊させ、フラッシュキングは異空間の中に戻っていった。

ジーク「カイムのほうは良いよな、そうやって置く場所に困らないからな。」

カイム「しかし、そっちはいざという時にすぐに乗り込めるからな。」

ジーク「まあ、たしかにな、とにかく今日はゆっくり休ませてもらうぜ、じゃあなカイム。」

カイム「ああ、またな。」  
そう言つて、みんな自然解散した。

都市ノーヴァス・アイテルの地下

「???」 「やはり、あの力はレジェンド戦隊の力か?」

「???」 「間違いなくそうだろうな、忌々しい奴らめ、この時代なら奴らはいないと踏んでいたのだから。」

「???」 「心配するな、どうやら奴らはまだレジェンド戦隊の真の力を引き出しきれてはいない、あのお方が復活なされるまでに、なんとすればいいことだ。」

「???」 「それもそうだな、さて次はどうする?」

「???」 「私に考えがある。」

「???」 「ほう、聞かせてもらおうか。」

「???」下級妖魔と中級妖魔を合成させて、妖魔獣を作ろうと思う。

「なるほどな、それなら単体よりは使えそうだな、それに俺達上級妖魔と違い、中級と下級の妖魔は腐るほどいるから。実験台にするにはちょうどいい。」

「よし、それはお前に任せる、完成した俺のところへ来てくれ、俺もちょっと野暮用があつてな。」

「わかった。」

そう言つて、中心人物らしき男は立ち上がり下層のさらに下へ降りていった。

## 第5話 大いなる力（後書き）

どうも、巨大ロボット戦第1回目でした、本来はフラッシュキングのスーパーコズモフラッシュは5人揃わないと使えないのですが、使えるように設定を変更させていただきました、残りのロボットはその都度ロボットのレンジャーキーを見つけてから使えるようになりますのでよろしく願います。それではまた次回お会いしましょう。

## 第6話 ジャッジメント！マスター！（前書き）

どうも、今回はタイトルを見ればある程度予想はできますが、今回はあのスーパー戦隊のメンバー達が登場します。ちなみに今回はちょっと長くなっております。あと敵の幹部の一人の名前も判明いたします。

## 第6話 ジャッジメント！マスター！

都市ノーヴァス・アイテルの地下の最下層

先ほどの中心人物らしき男は下層で靈魂が漂っている場所に来ていた。

「？？」「さて、使えそうな魂はどれだ．．．うん？これにするか．．．」

とその時、先ほど作業にかかっていた男が降りてきた。

「？？」「ん？お前か、どうだ妖魔獣は完成したのか？」

「？？」「九分九厘はな．．．」

「？？」「どういうことだ？」

「？？」「実はな、肉体の合成はうまくいったんだがな、何せ二つの人格を融合させるのは思ったより難しく、仕方がないから人格を消去して器だけの状態の奴を数体作っただけの有様だ。」

「？？」「なるほどな、ならこの魂を使ったらどうだ。」

そう言うと男は先ほど回収した魂の一つを渡した。

「？？」「この魂は？」

「？？」「歴代のレジエンド戦隊の前の持ち主の一人に強い恨みを持つ魂だ。」

「？？」「なるほどな、たしかに器だけ作れば後は魂だけならここで調達すればいいことか．．．わかったあたりがたく使わせてもらおう、私は実験室に戻るが、お前は どうする？」

「？？」「俺はもうしばらく、ここで魂の吟味を行う。」

「？？」「わかった、魂の融合に成功したら適当に放っておくぞ。」

「？？」「ああ、まかせる。」

その後、男の一人は実験室に戻っていった。

「？？」「さて、後はどんな魂があるかな？」

残った男のほうは再び魂の物色を再開した。

都市ノーヴァス・アイテルの地下実験室

先ほどの男は実験室に戻り、魂の融合をさせようとしていた。

「???」人間たちにとっては、反魂の儀式は失敗しやすいものだし、しかし、魂の波動を自由に変化させることが我ら妖魔にはたやすいものだ、それでは．．．」

そう言つて、魂を合成した肉体に埋め込み自分の血をそれに浴びせた。

「???」これで完了だ．．．」

その直後、妖魔獣が目覚めた。

妖魔獣「うゝん、ここはどこだ?」

「???」ここは妖魔の巣窟だ。」

妖魔獣「貴様は誰だ?」

「???」そうだな、特に生まれもつた名はないが、同族からは「ルシフェル」と呼ばれている上級妖魔だ。」

妖魔獣「上級妖魔?なんだそれは?」

ルシフェル「その前に貴様、生前の名は覚えてるか?」

妖魔獣「．．．お、俺の名はボクデン星人ビスケスだ。」

ルシフェル「(なるほど、異星人の魂だったのか、となるとアリエナイザーか．．．)」

ビスケス「それよりも、説明してくれ、これはどういうことなのか。」

ルシフェル「ああ、説明してやろう、実はな．．．」

ルシフェルという上級妖魔はこの妖魔獣に現在の状態を含めて掻い摘んで説明した。

ビスケス「そ、その話は本当か?この時代にはSPDは存在しないと．．．」

ルシフェル「ああ、しかし、貴様にはこの6人の奴らを始末してもらいたい。」

そう言つてカイクたち6人の写真を渡した。

ビスケス「こいつらは?」

ルシフェル「そいつらは、貴様を葬ったドギー・クルーガーが率いていた特捜戦隊デカレンジャーを含めたレジェンド戦隊の力を受け継ぎし者たちだ。」

ビスケス「な、なんだと、あいつの力を受け継いでいるだと．．．」  
ルシフェル「ああ、だがまだその力を半分も引き出しきれではない、叩くなら今だ。」

ビスケス「なるほど、こいつらを潰せばいいのか、わかった引き受けてやる。ただし俺のやり方だな。」

ルシフェル「ああまかせる、あとちなみにそのカイクという男がドギー・クルーガーの力を使う。」

ビスケス「へえ、そいつはいい事を聞いた、こいつを始末するのは最後の楽しみにしておくか、それじゃ失礼するぜ。」

ルシフェル「まで、貴様の私物だ、持っていけ。」  
そう言うところある剣を渡した。

ビスケス「これは俺の剣だ、どうしてここにある？」  
ルシフェル「お前の記憶からできるだけ、それに近い剣を復元しただけだ。」

ビスケス「なるほどこいつはいいや、それじゃ行ってくるぜ。」  
そう言つて妖魔獣となつたビスケスは出て行った。  
ルシフェル「さて、奴のお手並み拝見といくかな。」

それから数日後

都市ノーヴァス・アイテル

酒場「新生ヴィノレタ」

メルト「それじゃ、ちよつと買出しに出かけてくるわ。」  
クローディア「ええ、いつてらっしゃい。」

リサ「いつてらっしゃい、お土産忘れないでね！」  
アイリス「いつてらっしゃい。」

3人の元娼婦の娘達に見送られて出かけていった。  
その後、メルトは買出しを順調にこなした。

メルト「え〜と、後はお土産でも買ってから帰ろうかしらね．．．」  
ビスケス「貴様、ゴーカイエローか？」

とその時、メルトは何者かに声をかけられた。

メルト「誰？、そ、その姿！？あなた妖魔ね．．．」

ビスケス「まあ、今はな、俺の名はビスケスだ、挨拶も早々で悪い勝負！」

そう言つて、いきなり斬りかかった。

メルト「いきなり女性に斬りかかるなんて、紳士的じゃないわね、でもやるしかない、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

メルト「行くわよ！」

そう言つて、ビスケスに向かつていった。

ビスケス「そらそら、どうした！？」

メルト「ぐうう！（なんなのこいつ？つ、強い、このままじゃ、こ  
うなつたら！）」

メルトは距離を置きレンジャーキーをモバイレーツに差し込んだ。

メルト「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「カクレンジャー！」

メルト「ニンジャイエロー！」

ビスケス「ほう、それがレジエンド戦隊の力が．．．」

メルト「余裕の顔をしているのも今のうちだけよ、カクレイザー！」

ビスケス「ふん！」

メルトはカクレイザーで攻撃をかけたがすべて剣で弾き飛ばされた。

メルト「え！あれを全て弾き飛ばした！？それなら、カクレマル！」

メルトはカクレイザーをカクレマルに変えた。

メルト「隠流、三段斬り！」

メルトはカクレマルで三角を描くように斬りつけたが、それをビスケスはいとも簡単に受け止めた。

メルト「そ、そんな．．．」

ビスケス「それで終わりか？それならこっちから行くぞ、ソードア

ルタイトル！」

そう言うのとビスケスの剣が光った。

メルト「そ、それってカイクが使うデカマスターのディーソードベ  
ガに似ている！？」

ビスケス「アルタイトルスラッシュ！」

メルト「きゃあああ！」

メルトは吹き飛ばされて変身が解除された。

メルト「う、ううう・・・」

ビスケス「俺の勝ちだな。」

とその時

フィオネ「ゴーカイガン！」

ビスケス「ぐああ！」

ジークとフィオネが駆けつけた。

ジーク「大丈夫か？メルト。」

メルト「ええ、何とかね・・・」

ジーク「てめえ、俺達の仲間に出した以上ただじゃすまさねえ  
ぞ。」

ビスケス「いいだろう、まとめて片付けてやる。」

フィオネ「それはこっちのセリフです！」

そう言うって、二人はビスケスに向かっていた。

ビスケス「ふん！」

ジーク「こ、こいつできる！」

フィオネ「ならこれで！」

そう言うって、二人はレンジャーキーを取り出した。

ジーク・フィオネ「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「シンケンジャー！」

ジーク「シンケンレッド。」

フィオネ「同じくブルー。」

ジーク・フィオネ「参る！」

二人はビスケスにシンケンマルで斬りかかった。

ジーク・フィオネ「はあ！」  
ビスケス「うおお！」

ジークとフィオネは連携攻撃でビスケスを押ししている。

ビスケス「なるほど、中々やるようだな、ならソードアルティル！」  
ジーク「こ、こいつはデカマスターの．．．」

フィオネ「デーソードベガ．．．？」

ビスケスは剣にエネルギーに集中させようとした時。

ティア・エリス「豪快チェンジ！」  
モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ティアとエリスも駆けつけた。

ジーク「エリス、ティア！」

ティア「大丈夫ですか？みなさん。」

フィオネ「私達は大丈夫です、それよりメルトさんを．．．」

エリス「わかつたわ、メルト大丈夫？」

メルト「ええ、ありがとうエリス。」

ビスケス「仲間が来やがったか、ん？話しに聞いていたドギーの奴の力が使える奴がないな．．．」

それを聞いたジークはエリスとティアを向いた。

ジーク「おい！カイクはどうした？」

エリス「そ、それが．．．」

ティア「3日前から帰ってこないんですよ。」

3人「ええ！？」

それを聞いたビスケスは拍子抜けした顔を浮かべた。

ビスケス「ちい、一番倒したい奴がないんなら、今日のところは  
お預けだ、じゃあな。」

そう言つてビスケスはその場から立ち去つていった。

ジーク「ま、待て！．．．逃げられたか。」

フィオネ「それよりお二人とも先ほどの話は本当なのですか？」

エリス「ええ、ちよつと用事があるからつて言つて．．．」

ティア「私もです、ただいつもと様子が変わったよな．．．」

エリス「それで私とティアの二人で探してたんだけど．．．」  
ジーク「まあカイムのことだ、そのうち帰ってくるだろう、それよりも今はあいつを倒すことを考えるか．．．」  
ファイオネ「そうですね、メルトさん、立てますか？」  
メルト「ありがとね、ファイオネ。」  
そう言つて、メルトをファイオネが肩を貸して「ヴィノレタ」へみんなで向かつていった。

その頃カイムは

カイム「ハアハアハア．．．」

ドギー「どうした？これで終わりか？」

カイム「まだまだ、はあ！」

ドギー「言つたはずだ、お前にはまだ足りないものがあると。」

カイム「ぐああ！」

カイムは剣を弾き飛ばされて吹き飛ばされた。

現在カイムはなんと今先代のデカマスターこと地獄の番犬アヌビス星人ドギー・クルーガーに鍛えられていた。

なぜこんなことになったかというところ、話は3日前にさかのぼり、その日の朝カイムは不思議な夢を見た、その夢でこの街の近くの山の中に見たこともない扉が出てくる夢であった。そこでカイムは気になりティアとエリスに出かけてくるといつて街の外へ出て行き、夢の記憶を頼りに近くの山頂のある洞窟で扉を発見した。

カイム「これか？俺が夢に見た扉は、しかし、どうすれば開くんだけ？ん？レンジャーキーが光った？」

カイムの持っていたデカレンジャーのレンジャーキーが光った。すると扉のくぼみも光り出した。

カイム「これをはめ込めということか？」

カイムは慎重にレンジャーキーを差し込むと扉が開き、カイムは扉の中に吸い込まれていった。

カイム「うあああ！」

その後、カイムは少しの間気を失った。

カイム「んん．．．こ、ここは？」

カイムは気がついたら何も見知らぬ空間の中に居た。

ドギー「お前が現在のレジェンド戦隊の力を使う者の一人か？」

カイム「あ、あんたは？」

ドギー「元宇宙警察地球署署長アヌビス星人ドギー・クルーガーだ。」

カイム「宇宙警察？アヌビス星人？」

ドギー「どうやら、この時代の人間は宇宙との干渉はほとんどない

ようだな、説明しよう．．．」

そう言うとドギーはカイムにわかるように説明した。

カイム「なるほど、ということはあんたが先代のデカレンジャーの

デカマスターか．．．」

そう言うとデカマスターのレンジャーキーを出した。

ドギー「そういうことだ、しかし私はすでに表の世界での肉体はな

い、この世界は英雄の魂が漂っている世界だ。」

カイム「そうだったのか．．．」

ドギー「お前がここに来たのは、私がお前をここに来るように夢に

暗示したからだ。」

カイム「なぜ、俺を？」

ドギー「お前は、俺の力をいや歴代戦士の力を全て使うことができ

る特別な存在だ、だからこそその力の一つである俺の力を使いこな

せなければならぬ、そこでお前は俺が鍛えてやる。」

カイム「あんたが？」

ドギー「ああ、お前のことは知っている。幼少の頃から殺し屋とし

て生きてきた、今はそれから足を洗ったようだが、それでもお前に

はデカマスターの力である銀河一刀流を秘奥義を使いこなすには至

らない。」

カイム「銀河一刀流の秘奥義？」

ドギー「ああそうだ、お前が使っていたの基本奥義だけだ、そして

そして

お前がもし秘奥義を使えるようになったら、キングキーとデカレンジャーの大いなる力を解放しよう。」

カイル「その話本当だろうな．．．」

ドギー「ああ本当だ、どうするやるか？」

カイル「．．．やってやるうじやないか。」

ドギー「よし、では行くぞ！」

そして、カイルはドギーの鍛錬に付き合うことになった。

そして、現在カイルはまだドギーにほとんど攻撃を当てることのできない状態だった。

カイル「ハアハア．．．」

ドギー「どうした、鍛えてやってからもう3日だぞ、敵は待つてはくれないぞ。」

カイル「ま、まだだ．．．」

そう言つて、カイルは立ち上がるうとした。

ドギー「そうか、なら次で決めてやるう、デイスwordベガ！」

カイル「（だめだ、これ以上動けない、終わりか．．．）」

ティア「（カイルさん）」

とその時カイルの頭にティアの顔が横切った。

カイル「（！ティア！？そうだ、俺にはあいつらが待っているんだ！）はああ！！」

カイルとドギーの剣がぶつかり合いなんと二人の剣が弾き飛ばされた。

ドギー「どうやら、わかつたようだな．．．」

カイル「．．．はい、わかりましたよ俺は一人じゃない。」

ドギー「そうだ、どんなに強くなるうが一人だけでは限界がある、しかし、仲間が居ればどんなことでも乗り越えられる。」

カイル「はい師匠、いやロジャー！ボス！」

ドギー「うむ」

とその時、複数の男女が現れた。それは先代のデカレンジャーのメンバーだった。

バン「ボス、どうやらうまくいったみたいですね。」

ホージー「これなら俺達の力を任せられるな。」

セン「いい目をしてるね。」

ジャスミン「銀髪くん、お願いね。」

ウメコ「私たちの分まで。」

テツ「なんかいいですね。」

スワン「ドギー、いい若者で良かったわね。」

ドギー「ああ、それじゃ約束どおり秘奥義と力を解放しようレンジ

ャーキーを。」

カイル「ロジャー！」

そう言つて、カイルはデカレンジャーの全部のレンジャーキーを出し、デカレンジャー達がそれに触れると光り出した。

ドギー「これでよし、あとこれは我々デカレンジャーのキングキータだ。」

カイル「これが・・・」

カイルはドギーからキングキーを受け取った。

ドギー「それとカイル、今出てきている妖魔の怪人なのだが、あれに使われている魂は俺の弟子だ、頼む俺の代わりにあいつを止めてくれ。」

ドギーはカイルに頭を下げた。

スワン「ドギー・・・私からもお願い、彼はね元はドギーの剣の師匠の息子だったんだけど、ドギーが後継者に選ばれてから間違つた道へと走つたの、ドギーも最初はなんとしようとしたんだけど、もう倒す以外に止める方法がないの・・・」

カイル「・・・わかりました、ボス俺が必ず奴を倒す。」

ドギー「カイル・・・ありがとう。」

そう言つてカイルは行こうとした時、バンたちがカイルを止めた。

カイル「まだ何か？」

バン「ああ、言い忘れるところだったぜ。」

ホージー「俺達の戦う時のポリシーだ。」

セン「ワイルドハード、クールハードだよ。」  
カイク「ワイルドハード？クールブレイン？」  
ジャスミン「そう燃えるハードで……」  
ウメコ「クールに戦う、それが……」  
テツ「僕達デカレンジャーです。」  
カイク「燃えるハードでクールに戦うか……いい響きだな、わかりました肝に銘じておきます、それじゃ！」  
そう言つて光りの先へカイクは走つていった。その後ろでバンが叫んでいた。  
バン「おい！これ持つてけ、それと頑張れよ！後輩！」  
そう言われてある分厚い本を渡され、激励の言葉をもらった。  
カイク「ロジャー！ありがとう先輩、ボス！」  
そして、カイクは元の世界に戻つていった。

次の日ジークたちはビスケスに呼び出されて街の外で戦つていた。メルトも怪我の治療を終わり戦列に加わりスカルソルジャーの大群を相手に戦っている。

メルト「ゴーカイサーベル！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

ジーク「ゴーカイガン！」

フィオネ「はあ！」

ティア「えい！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

蹴散らしてはいるのだが敵の数が圧倒的に多い。

エリス「あゝもう、うっとうしいわね。」

ジーク「だったら、行くぜ！」

そう言つと、5人はゴーカイガンにレンジャーキーをセットした。

5人「……レンジャーキーセット！」

ゴーカイガン「ファイナルウェーブ！」

5人「……ゴーカイブラスト！」

5人のゴーカイガンでスカルソルジャーの大群を一掃した。  
そして、高みの見物をしていたビスケスが5人に不意打ちをしてきた。

ビスケス「ソードアルタイル！ふん！」

ティア・エリス「きゃああ！」

ジーク「大丈夫か？」

メルト「ちよつと、あんた借りにも剣士でしょ何でこんな卑怯な手しか使わないのよ。」

ビスケス「うるさい、ようは勝てばいいんだよ、くらえ毒霧！」

ビスケスは口から毒の霧を出して動きを制限してきた。

フィオネ「こ、これでは動きが取れません・・・」

ジーク「くそ、これじゃ守りに徹するしか・・・」

ティア「カイクさん・・・」

とその時

カイク「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

カイク「無法な悪を迎えうち、恐怖の闇をぶち破る！ 夜明けの刑事：デカブレイク！」

ジーク「か、カイク！来やがったか！」

ティア「カイクさん！」

エリス「カイク！どこへ行ってたのよ！？」

メルト「まったく、心配かけて・・・」

フィオネ「しかし、ご無事で何よりです。」

カイク「すまなかったな、みんなあいつは俺がやる。ある人との約束でな、行くぞ！」

そう言つてカイクはビスケスに向かっていった。

カイク「ブレスロツトル！高速拳ライトニングフィスト！」

ビスケス「ぐああ！、こ、この！」

カイク「遅い！超電撃拳スーパーエレクトロフィスト！」

ブレスロツトルの電撃でビスケスは吹き飛ばされた。

ビスケス「お、おのれ、ならばソードアルティル！」

ビスケスは剣を構えエネルギーを集中させた。

カイル「ならば、俺はこれだな、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

カイル「百鬼夜行をぶった斬る！地獄の番犬デカマスター！」

ビスケス「いいぜ、その姿を見ると俺はあいつを思い出してむしろくしゃするんだよ！」

カイル「ドギー・クルーガーのことか？」

ビスケス「！な、なぜ貴様奴のことを！？」

カイル「ちよつと、銀河一刀流の秘奥義を伝授してもらってな。」

ビスケス「な、なんだと奴が・・・」

ジーク「か、カイルの奴何言っているんだ？」

メルト「もしかしたら、私が赤の戦士に会ったように別の人に会ったんじゃないの？」

フィオネ「なるほど、それでここ数日間居なかったというわけですね。」

エリス「それよりも、カイルの構えいつもと違うような気がするんだけど・・・」

ジーク「とりあえず、俺達は黙ってみてようぜ。」

ビスケスとカイルは剣を構え直し、同じタイミングで動いた。

ビスケス「くえ！アルティルスラッシュ！」

カイル「デーソードベガ！銀河一刀流秘奥義、ベガインパルス！」

ビスケスはカイルに触れることなく一刀両断された。

ビスケス「ば、バカなこの俺が・・・」

カイル「お前は一生ドギー・クルーガーには勝てない、お前のように父親の心を理解できない奴にはな・・・」

ビスケス「うああああ！！」

都市ノーヴァス・アイテルの地下

ルシフェル「やれやれ、やはり器をいくら強化しても宿す魂がああ

も愚かだと宝の持ち腐れただな、デビルズスパイダー！  
そう言つてルシフェルはまたあの蜘蛛を放った。

カイクたち

カイク「ん？あの蜘蛛は、まさか！？」

その直後、ビスケスは巨大化した。

ビスケス「がああああ！」

ジーク「．．．どうやら完全に理性は失われたようだな．．．」

カイク「そのようだな、とにかく行くか。」

カイクはキングインストローを取り出し、ジークはモバイルーツに5501の番号を入力した。

ジーク「行くぜ！」

5人「『海賊合体！』」

キングインストロー「デカバイクロボ！」

5人「『完成！ゴーカイオー！』」

ジーク「カイク、なんだそのロボットは？まさか新しいキングキーが見つかったのか？」

カイク「ああ、それとデカレンジャーのレンジャーキーをしてみる。

「  
そう言われてジークたちはデカレンジャーのレンジャーキーが光っているのに気付いた。

ティア「カイクさん、まさか！？」

カイク「ああ、デカレンジャーの大きいなる力が解放された。」

メルト「なるほどね、カイクのおかげか。」

フィオネ「さすがですね、カイクさん。」

エリス「で、どうするのジーク？」

ジーク「そんなの決まってるだろ？使っぜ！」

5人「『レンジャーキーセット！』」

5人「『完成！デカゴーカイオー！』」

ゴーカイオー「パトストライカー！」

パトストライカーは巨大ビスケスに体当たりをして横転させた。

カイク「次は俺だ！ソードトルネード！」

ビスケス「がああああ！」

カイクはデカバイクロボの剣で回転しながらビスケスに斬りつけた。  
カイク「ジーク！とどめだ！」

ジーク「任せろ！行くぜ！」

その後パトストライカーがゴーカイオーに戻り、デカゴーカイオーに戻った。

5人「○○ゴーカイフルブラスト！」

デカゴーカイオーの全身ガトリング砲でビスケスに浴びせた大爆発した。

ビスケス「がああああ！！！」

カイク「終わったか・・・（ボス、約束は守りましたよ・・・）」

英雄の聖地の世界

ドギー「・・・どうやらやってくれたようだなカイクは・・・」

スワン「そうね、これなら任せられるんじゃないのドギー。」

ドギー「ああ、あいつらならきつと他の力を解放させることができる。」

そう言つて、ドギーとスワンの二人は静かに消えていった。

都市ノーヴァス・アイテル

カイクはジークたちにこれまでの経緯を話した。

ジーク「ということは、お前は今まで修行してたということか？」

カイク「そうだな、みんなすまなかつた。」

ティア「もういいですよ、それよりもこの本にはいろいろなことが書いてありますね。」

メルト「そうね、妖魔のことやさっきのビスケスって奴のことが載っているわね。」

エリス「これがあればある程度敵の情報がわかるかもね。」

ファイオネ「これは一刻も早く女王様に報告したほうがいいかもしれないですね。」

カイク「そうだな、みんな行くか。」

カイクの一言でカイクたちは一旦城へ行き、リシアに会い今回のことを報告し、この本については一旦王室の研究室で記録をまとめた後、カイクたちへ返却された。

ジーク「しかし、いいなその燃えるハートでクールに戦うか、気に入ったぜそのキャッチフレーズ、今度から不触<sup>うち</sup>金鎖でもその方針で行こうかな。」

その後、カイクからの話を聞いてジークはデカレンジャーのポリシ  
ーが気に入ったという。

## 第6話 ジャッジメント！マスター！（後書き）

どうも、今回はボスの弟弟子のビスケスを妖魔として復活させました。ちなみ今後も過去の敵キャラをこのような形で復活させる予定です。よろしくお願いします。それではまた次回お会いしましょう。追伸 変身時の掛け声が間違っていたので直しましたすみませんでした。

## 第7話 未知なる世界への旅立ち（前書き）

どうも、忙しく更新が遅れてすみません、今回は過去のスーパー戦隊の関係者と次回以降に登場予定のキャラを登場させます。さらに残りの2人の名前も判明します。

## 第7話 未知なる世界への旅立ち

都市ノーヴァス・アイテル

カイクたちは、今女王のリシアと共に城の地下の宝物庫にいる。なぜここにいるのかという数日前からこの開かずの間と呼ばれている部屋から変な光を発見した、そこで万が一に備えてゴーカイジャーの力を使える6人を呼び調査を依頼した。

カイク「ここか？開かずの間というのは・・・」

リシア「そうだ、ここは今の王家が誕生する以前から存在する場所でな、なんでも大昔の記述が眠っているとのことだが、誕生した時から鍵が無く開けることができなくてな・・・」

とその時、6人の持っていたゴーカイジャーのレンジャーキーが飛んでいった。

ジーク「れ、レンジャーキーが!?!」

フィオネ「どうして!?!」

ティア「あれ？鍵穴に向かって行きますよ・・・」

メルト「どういうこと?」

エリス「こつちが聞きたいくらいよ。」

すると鍵穴がさらに5つ現れ、6つの穴に自動的にはめ込まれた

カイク「ま、まさかレンジャーキーがこの扉の鍵?」

その直後、扉が自動的に開いた。

カイク「レンジャーキーで開いたとなると・・・」

ジーク「レジェンド戦隊の記述が・・・」

リシア「うむ、その可能性が高そうだな、とりあえず、皆入ろう。」  
そう言ってリシアを中心にカイクとジークが先頭、リシアのそばにエリスとティア、フィオネとメルトが後ろを警戒しながら先へ進んでいった、すると先頭のカイクとジークが2体のカプセルを発見した。

ジーク「な、なんだあのカプセルは?」

全員で恐る恐る近づいてみる、すると一つのカプセルが急に開いてその中から一人の女性が横たわっていた。

ティア「こ、この人は？」

メルト「でも、この格好私達が着ている服とちよつと違うわね。」  
ファイオネ「死んでいるのでしょうか？」

エリス「それはないわ、見たところ眠っているだけみたいね．．．」  
とその時、その女性が目を覚ました。

???「うくん、あれから何年経ったんだろう?．．．ん?あなた達はもしかして今のレジエンド戦隊の力を使う人たち？」

カイク「あ、ああ、そうだけであんたはいつたい誰だ？」

???「あ、ごめんね、私の名はレオナ、昔はミスターボイスって呼ばれてもいたわ。」

ジーク「ミスターボイス？」

レオナ「そう私はね、昔あなた達を使うレジエンド戦隊の一つである、轟轟戦隊ボウケンジャーの司令官を務めていたの。」

ティア「レジエンド戦隊の関係者の方だったんですか．．．」

メルト「どうしてこんなところに．．．」

レオナ「妖魔を封印した時にいつの日か、蘇るかもしれないという考えから私はこの力を使う人たちを導くために眠りついていたの、この部屋はゴーカイジャーのレンジャーキーがないと開けることができなかつたの、だからこそ君達が力を受け継ぐものだってわかつたの。」

ファイオネ「そうだったんですか．．．」

エリス「しかし、これで納得ね、それと聞きたいんだけどもう一つのカプセルは何？」

レオナ「ああ、あれね、今開けるよ。」

そう言つて、レオナはカプセルに近づき何かしらの操作をして開けた。するとそこから鳥のような物体と一人の男が現れた。

???「ヤット出ラレタヨ！」

???「ふう、あれかどれくらい経ったんでしょうか？」

リシア「あれは？」

「???」「僕はナビイだよ。」

「???」「私は牧野と申します。」

二人のことについてレオナが説明した。

レオナ「このナビイは、君達の力になっっているゴーカイジャー達の遺産、そして、この牧野さんこと牧野先生は私と同じボウケンジャーのサポートをしていた人なの、この人も私と同じく君達を導く存在としてこのカプセルに入ってもらったの。」

カイム「そうだったのか・・・」

レオナ「それよりも君達の名前を覚えてもらえるかな？」

レオナに言われ、6人とリシアは自己紹介をした。

レオナ「なるほどね・・・君達はアカレッド君からその力を託されて、今デカレンジャーの大いなる力を解放したところだね。」

カイム「そうだ、以前謎の異世界でドギーいやボスと先輩達と会って、この本を渡された。」

そう言っただけのことなどが書かれていた本を渡した。

レオナ「これはね、私と牧野先生が書いたのあなた達にデカレンジャーが渡してくれたね。」

カイム「この本を読んだが、本当なのかこの都市はこの妖魔たちを封印するために存在したと・・・」

レオナ「ええ、正確に言えば妖魔の親玉がね、この都市を前の形にしたの、でもまだ後数千年は目覚めることはないから、今は残りの残党の妖魔を倒せば大丈夫なはず・・・」

とその時、何者かが宝物庫に入ってきた。

「???」「やれやれ、まさかレジエンド戦隊の関係者までいるとはな・・・」

ルシフェル「しかし、ようやくあのお方が復活する時が満ちた。」

「???」「これでようやく、外の世界でいや他の世界でも暴れることができるってもんだぜ。」

カイムたちは臨戦態勢に入った。

ジーク「てめえら、いったい何者だ!？」

フィオネ「この城にどうやって．．．」

ルシフェル「なに、ちよつと道案内してもらっただけだよ、彼女達にね。」

コレット「か、カイクさん、みなさん．．．」

ラヴィリア「も、申し訳ございません．．．」

カイク「コレット、ラヴィ!？」

このコレットはかつて聖女イレーヌと呼ばれていた少女で今は新生聖イレーヌ教会の大神官を務め、さらに世話係をしていたラヴィリアも副神官の立場になっている。

ティア「その人たちを離して下さい!」

ルシフェル「ああ、いいとも道案内してもらっただけだよ。」

そう言うところルシフェルは二人を離れた。

ジーク「大丈夫か!？」

コレット「だ、大丈夫です．．．」

ラヴィリア「すみません．．．」

カイク「お前達は、いったい何者なんだ!？」

???「そういえば、お前達にはまだ名を名乗っていなかったなこ

れは失礼、俺の名は上級妖魔の「アスラ」

ルシフェル「私は上級妖魔「ルシフェル」

???「俺は上級妖魔「バディン」

アスラ「俺達は妖魔の三巨頭。」

メルト「妖魔の三巨頭．．．」

牧野「あ、あなた達は!．．．しかし、妖魔の君はまだ目覚めの時では．．．」

ルシフェル「それなら心配はない、レジエンド戦隊の力によって封印されていたあのお方はもうじき封印を自力でお解きになる。」

レオナ「そ、そんなバカな、あの封印はあと数千年近く経過しなければ解くことはできないはず．．．」

リシア「そうなのか?」

ナビィ「ソウダヨ、アノ封印はソウトウキヨウリヨクナモノダツ  
ンダヨ。」

アスラ「まだ気が付かないのか？実はなあのお方が封印される直前  
にこの都市を含めた一部のエリアを特殊な空間に幽閉したんだ、こ  
の幽閉された空間ではな、時の流れが通常よりも10倍以上速いの  
さ。」

リシア「な、なんだと!？」

ジーク「そ、そんなことが・・・」

バディン「本当だ、本当の世界はまだ数百年しか経ってないからな。」

アスラ「さて、おしゃべりが過ぎたようだな、本来ならここで邪魔  
になるお前らを始末したいんだが、あのお方はお前達を試したいよ  
うだ、これからこの世界を元の世界に戻す、そして我々は今後元の  
世界である「地球」とそれ以外の平行世界へ暗躍を始める、止めら  
れるものなら止めてみる。」

カイク「そうは行くか!豪快チエンジ!」

モバイレーツ「ゴーカイジャー!」

カイク「ゴーカイサーベル!」

ルシフェル「ふ・・・」

カイクが3人に斬りかかるうとしたとき、何者かが現れてカイクを  
吹っ飛ばした。

カイク「ぐああ!」

みんな「カイク!」「」

ティア「カイクさん!」

エリス「大丈夫!？」

カイク「ああ、大丈夫だ。」

そして、その男が姿を現した。

???「いやいや、これは突然で失礼した申し遅れた私は「シユバ  
リエ」かつてレジェンド戦隊の一つであるファイブマンと戦ったこ  
とがあるものだ。」

ジーク「な、なんだと!？」

アスラ「こいつはな、死んで魂だけになっていたところを私が発見し、蘇生させた使えそうだし、それにこいつなら波長が合いそうだったからな。」

フィオネ「な、なんとという...」

メルト「し、死者を蘇らすなんて...」

ルシフェル「これが上級妖魔のなせる業だ、さてとそろそろか我が主妖魔の君「ジーン」様が復活なされるのは!」

その瞬間、都市全体が大きく揺れたその規模はかつての大崩落に匹敵している。さらに下層から巨大な闇が現れ突然消えた。

カイク「な、なんだこの揺れとあの影は!？」

アスラ「どうやら復活なされたようだな、ここに用はない、元の世界に戻してやったぞ。」

シュバリエ「ルシフェル、手始めにまずはどこに行く?」

ルシフェル「復活させたエージエンド・アブレラが気になる、1度ミッドチルダへ行くか。」

バディン「まあ、奴ならへまをやらないだろうがな...」

シュバリエ「それでは行こうか。」

カイク「ま、まて!」

カイクたちは4人に向かって行ったが、4人はまぼろしのように消えた、するとそこには一人の女性が倒れていた。

ルシフェル「(その女は、お前達へのプレゼントだ、本当の世界の今の現状がわからないと不便だろう、安心しろその女は一回死んだが、私が魂から復元した普通の人間だ害はない。それはまた会おう。」

そう言つて、声まで消えた。みんなその女性のところへ駆け寄つた。エリス「大丈夫、気を失っているだけみたい。」

フィオネ「でも、いったい誰なんですか、レオナさんと牧野先生は何かご存知ありませんか?」

レオナ「いや、まったく。」

牧野「わかりませんね、しかし、私たちのいた時代の服に似てますがね。」

????「うん、ここは？」

ジーク「気が付いたぞ。」

カイル「あんた、自分の名前を覚えているか？」

????「私の名はパピヨン・ノワールです、しかし、私はオービツトベースで死に、さらにレプリジンの私も消滅したはず・・・」

ティア「な、何を言っているのでしょうか？」

とりあえずお互いに情報交換をした。

パピヨン「そうですね・・・にわかには信じられません・・・しかし、私がこうして生き返ったのなら信じられます、あなた達があの伝説のレジエンド戦隊の力を受け継ぎもの・・・」

カイル「ああ、そういえばレオナ、牧野先生たちはボウケンジャーの関係者だったんだろ？だったらボウケンジャーの大いなる力を解放できるか？」

レオナ「ごめん、私達じゃできないの・・・」

牧野「デカレンジャーの時と同じで、その時が来るのを待つしか・・・」

ジーク「なんだ、てことは今まだデカレンジャーの力しか開放されてないのか・・・」

ナビィ「ダケドネ、コレハアルよ」

そう言つて、キングキーをカイルに渡した。

カイル「これが、ボウケンジャーのキングキーか・・・」

リシア「とりあえず、大広間に戻ろうか、いろいろ話し合わなければならぬことが山のようにある。」

その後、大広間に戻り、情報を整理し、話し合いの結果カイルたちは奴らを追うことになった。

リシア「頼むぞ、奴らを倒さねば世界の危機だ。」

ジーク「ああ」

カイル「わかっている。」

フィオネ「おまかせを。」

メルト「必ず。」

エリス「この世界を。」

ティア「救ってみせます、私達で．．．」

リシア「うむ、それとレオナ、牧野、ナビィ、パピヨンよこの者達を頼む。」

レオナ「ええ」

牧野「お任せください。」

ナビィ「僕ニマカセテ。」

パピヨン「これも私の運命です、できる限り彼らの力になります。」

リシア「うむ、出発は明日の明朝だそれまで旅支度を整えておくが  
良い。」

みんな「「ははは！」「」

その後、全員一旦自宅に戻った。

そして次の日

とうとう皆に見送られ旅立とうとしていた。

オズ「頭、カイクさん後のことは任せてください。」

ジーク「ああ、任せるぜ副頭。」

クローディア「メルトさん、カイクさん、エリスさんにみなさんお  
元気で。」

リサ「必ず、帰ってきてね。」

アイリス「今回ばかりは．．．絶対に帰って来い。」

エリス「3人とも怪我や病気に気をつけてね、私はいないんだから  
．．．」

メルト「ありがとう、3人とも店のことお願いね。」

コレット「ティアさん、カイクさん皆さんどうかご武運を．．．」

ラヴィリア「私達にはここで無事を祈ることしかできませんが．．．  
」

ティア「いえ、そのお気持ちだけで十分ですよ．．．」

リシア「フィオネ、頼むぞ。」

フィオネ「はい、陛下。」

カイク「それじゃ行くか。みんな行ってくる！」

5人「「「「「おお！」」」」」

見送り側「「「気をつけて！」」」

そう言つて、みんなゴーカイガレオンに乗り込み出発しようとしていた。

ジーク「さて、どこへ行く？」

カイク「たしか、ミッドチルダに行くとか言つてたな・・・」

レオナ「多分、それは別の世界ね。」

牧野「それなら次元を超えてそこへ向かきましょう。」

パピヨン「私もお手伝いします。」

ナビィ「ソレジャ、準備！準備！」

そう言つて、サブメンバーでゴーカイガレオンを操作し始めた。

メルト「・・・私たちつて、このゴーカイガレオン結構持て余してたのね。」

フィオネ「これを気に改めて使い方を理解しておいたほうがいいですね。」

ジーク「そうだな・・・」

エリス「他人ばかり頼りにしちゃいけないわね。」

ティア「到着するまで勉強しましょうか。」

カイク「仕方がないか・・・」

そう言つて、6人は目的地に到着するまでの間に勉強に励み、他の3人と鳥はミッドチルダへと向かう準備に入った。

## 第7話 未知なる世界への旅立ち（後書き）

どうも、第1章終了ということで、次回からガオガイガーとリリカルなのは話も入ってきます、ちなみにガオガイガーはソール11遊星主の戦いから1年後にGGGメンバーは奇跡的に帰ってきて、その後から5年後という設定でなのはstrickersの機動6課が立ち上がったばかりの時期という時間軸です、ちなみにシュバリ工を蘇らした設定は私が地球戦隊ファイブマンが好きだからです。

## 第8話 新世界で派手に登場（前書き）

どうも、第2章突入です、今回の話はなのはstrickersのホテルのオークションの話のときです、いよいよGGGとなのはの前にスーパー戦隊のカイムたちが現れます。それではよろしくお願ひします。

## 第8話 新世界で派手に登場

ここは魔法文化が発展している地球とは違う異世界ミッドチルダ  
ここには時空管理局と呼ばれる他の次元世界全体を管轄とする治安  
組織が存在する。

そして、この時空管理局でつい先日4年の歳月をかけて「古代遺物  
管理部 機動六課」通称機動六課が誕生したばかりで、総部隊長八  
神はやてを中心に管理局内でもずば抜けた魔導師たちと未来ある若  
者達で構成されている。この部隊は先日の初出勤でめざましい活躍  
をした。

そして、現在機動六課は次なる任務ためホテル・アグスタに来てい  
た。ここでは骨董品オークションが行われようとしていたため、そ  
の護衛を任務としていた。さらにはやてとなのはの故郷である第9  
7管理外世界である地球からGGGとその協力組織から獅子王凱、  
天海護、卯都木命、ルネ・カーディフ・獅子王、獅子王雷牙博士、  
猿頭寺耕助、火麻激、スワン・ホワイトそして数年前にGGG隊員  
になったソルダートJ、初野華、戒道幾巳のメンバーも来ていた、  
彼らGGGのメンバーは以前原種大戦の数年後に起きた、ソール1  
1遊星主の事件の後、数名のメンバーは帰還することなかったが、  
その一年後に奇跡的に帰還し、ソルダートJもGGGのメンバーと  
して凱とはもう一人の隊長として所属することになった。そして、  
護も成長し数年前より戒道と同じく機動部隊の一員として活躍する  
までに成長した。（現在二人は18歳）そして、護の彼女の華も命  
の後輩としてGGGへ特別に入隊した。そして、彼らは今回の骨董  
品オークションに招待された元GGG長官であり宇宙開発公団総裁  
大河幸太郎のガードも踏まえてこちらの世界に来ていた。

凱「久しぶりだな、はやて。」

はやて「凱さんたちも久しぶりやな、機動六課の立ち上げの際には  
本当GGGにはお世話になったわ。」

命「それよりはやてちゃん大丈夫？部隊の隊員て若い子も多いんでしょ、何かと大変じゃないの？」

はやて「大丈夫や私だけじゃなくて、なのはちゃんやフェイトちゃんもおるしな、それにみんないい子達やで。」

凱「そうか・・・」

はやて「ところで護君や幾巳君はどうしたんや？」

命「あの二人なら、華ちゃんと一緒になのはちゃんやフェイトちゃん達と会ってるよ、ちなみに」とルネは外で見張りをやっているよ。」

はやて「そつか、私も後で会っているいろいろ話したいことがいっぱいあるんや。」

そうして、凱と命ははやてと一緒に会場の中を見回ることにした。

その頃護達はなのは達に会っていた。

なのは「護君、幾巳君に華ちゃんまで久しぶりだね。」

護「なのはやフェイトこそ元気だった？」

フェイト「ええ、私達は元気よ、みんなも最近は落ち着いてきたみたいだね。」

戒道「ああ、バイオレットがつぶれたおかげで地球のほうではほとんど動くことが少なくなったからね。」

華「でも二人にまた会えて嬉しいな。」

なのは「にやははは、それにしても相変わらず護君と華ちゃんは仲が良いよね。」

フェイト「もうなのはってば・・・」

護・華「／／／／／」

二人はすっかり赤くなっていた。

一方外のほうでは

ソルダート「久しぶりだな、シグナム。」

シグナム「そつちこそ、相変わらず腕は落ちてはいないようだな。」

そんな会話を見ていたヴィータとルネは微笑ましく見ていた。  
ルネ「・・・相変わらずね、二人も。」

ヴィータ「ああ、まったくだぜ、まあ似たもの同士ってわけだな・・・  
ん？どうしたシャマル？」

シャマル「ガジェット反応よ。」

そう言われ、外のメンバーは臨戦態勢になり、ガジェットの相手に  
戦闘開始した。

一方とある場所では

???「エージェント・アブレラ、君のおかげで研究がいい感じで  
進んでいるよ。」

アブレラ「いやいや、こちらこそビジネスだし、それにお互いの利  
益が一致しただけの話ですよ、ドクタージェイル・スカリエッティ。

「

ジェイル「なら貴方から頂いたドROIDとガジェットたちを追加で  
出撃させよう。」

アブレラ「それと、ルシフェルのほうから連絡が有った、妖魔獣2  
体とスカルソルジャー達を遅れながら出撃させるから好きに使って  
くれとのことだ。」

ジェイル「それはいい、前から妖魔の力を見てみたいと思っていた  
んだ、それにこれならルーテシアに頼んだ件もやりやすい、なに  
しる今会場には地球のGGGのメンバーも来ていたからね心配だっ  
たんだよ。」

そう言つて、ジェイルはドROIDとガジェットたちを出撃させた。

外の戦闘が始まった時、凱は命と一緒に地下駐車場で、ある異様な  
ものを発見したが逃げられてしまった。その時、護から連絡が入  
った。

護「凱兄ちゃん！命姉ちゃん！」

凱「護、どうした？」

戒道「それが、ガジェットとそれとは違う人型ロボットが現れた。」  
命「何ですって!?!」

華「とにかく、フォワードのメンバーが危険だからって、ヴィータさんとルネさんが救援に向かったけど、私達も行きますので凱さんと命先輩も早く!」

凱「わかった!」

そう言つて、凱と命は外のメンバーのところへ向かった。それとは違うところから、なのはとフェイトも出撃した。

少し離れた森の中

ルーテシア「．．．ありがとうガリユー、それじゃそのままドクターに渡してきてね。」

その後、連絡が入った。

ジェイル「やあ、ルーテシア、本当にありがとう、後は離れてくれ、そろそろ妖魔が出てくると思うからね。」

ルーテシア「わかった．．．ドクター。」

そう言つて、ルーテシアはもう一人の男と一緒にその場から離れた。

フォワード陣

スバル「はああ!」

キャロ「フリードリヒ!」

エリオ「くそ!敵が多すぎる!」

ドロイド「ウーーン!」

敵に囲まれ、実戦経験の少ないメンバー達は焦っていた。

ティアナ「．．．こっとなつたら。」

シャーリー「!?ティアナ!無茶しないで!」

しかし、シャーリーの言葉は届かず、魔力の弾を無数に作りはじめた。

ティアナ「(こんな敵ぐらい、私だって!)くえ、クロスファイア．．．シュート!!」

ティアナは魔力で作られた弾をドロイドとガジエツトの大群に向かって発射し、大群を蹴散らしていった。しかし、その一つがウイングロードを走っていたスバルに向かって飛んでいった。

ティアナ「！スバル避けて！」

スバル「え！？」

スバルに直撃しそうになったその時、ヴィータが魔力の弾を弾き飛ばしてそれを敵に向かって飛ばした。

ヴィータはすぐにティアナへ向かって怒鳴った。

スバル「ヴィー、ヴィータ副隊長！」

ヴィータ「ティアナ！馬鹿！おめえ無茶やった上に味方撃ってどうすんだ！！」

ティアナ「え、え．．．」

スバル「ヴィー、ヴィータ副隊長、今はその．．．作戦の一つで．．．」

スバルが反論しようとしたが、それを遮るようにさらに怒鳴り散らした。

ヴィータ「ふざけるタコ、今のは直撃コースだよ！」

その後ルネも現れ、ティアナを後ろに下げた。

ルネ「味方から攻撃されたら洒落にならないわね、あんたは後ろに下がりな！」

ヴィータ「ルネの言うとおりだ、ここはあたしとルネでやる。二人まとめてすっこんでろ！」

そう言われ、スバルとヴィータは後ろに下げられた。その後、すべてガジエツトとドロイドを片付けた後、全員合流した。

凱「どうしたんだ？あの二人は．．．？」

ヴィータ「少し頭を冷やさせてやれ。」

ルネ「まったく．．．いい迷惑だわ。」

命「何かあつたの？」

ヴィータ「後で話す．．．」

その直後、護と戒道が何かを感じた。

護・戒道「「！！」」

ソルダート「「どうした二人とも？」」

護「わからないけど、何か気持ち悪い物が近づいている。」

戒道「ああ、どす黒い力を感じる・・・」

その直後、スカルソルジャーの大群（巨大も含む）と2体の異様な化け物が出てきた。

さらにそこには3人の男がいた。

なのは「あ、貴方達は？」

シグナム「名を名乗れ！」

アスラ「突然の登場で、すまない我々は上級妖魔、妖魔の三巨頭、

そして俺がリーダーのアスラだ。」

ルシフェル「私はルシフェル。」

バディン「俺の名は、バディンだ。」

フェイト「妖魔？」

ソルダート「「気をつける、こいつらは人間じゃない。」

シャマル「た、たしかにこの力は魔力ではないわ・・・」

アスラ「とりあえず、俺達は挨拶だけだ、お前達の相手はこの妖魔

獣どもがする、行け、ザルド、ハーガ。」

ザルド「はは！」

ハーガ「お任せを！」

ルシフェル「それでは、生きていたらまた会おう。」

そう言つて3人は姿を消した。

凱「今は目の前の敵を叩くしかない、ボルフォッグ！」

ボルフォッグ「了解です、凱機動隊長、護副隊長、幾巳副隊長、ア

ーマー射出します。」

そう言つて、3人にそれぞれのアーマーを射出し、戦闘態勢に入つた。

凱「みんな行くぞ！」

みんな「「「おお！！」」」

ルネ「フォーワード陣は下がってな。」

ヴィータ「そうだな、ここはあたし達がやる。」

そう言つて、4人のフォワードは後ろに下がった。

しかし、敵の数が多すぎてきりが無い。

その間に2体の妖魔獣は特殊能力で後ろの4人に回られてしまった。

シグナム「しまった！」

なのは「みんな逃げて！」

凱「ボルフォッグ！」

ボルフォッグ「だめです！敵が多すぎて近付けません！」

ソルダート「くう！私なら間に合つが、敵が行かせてくれそうも

ない……」

ルネ「くそ！」

ザルド「さて、誰から力の糧になつてもらおうかな？」

ティアナ「ふ、ふざけるな！」

エリオ「や、やられてたまるか。」

4人の攻撃がまったく効いていない。

ティアナ「う、嘘……」

スバル「ぜ、全然効いてない……」

キャロ「も、もう、これで終わりなんですか……」

ハーガ「そんな攻撃が我々に通用するものか、さておとなしく我々

の糧になつてもらおうか。」

ヴィータ「ティアナ！スバル！」

フェイト「エリオ！キャロ！」

なのは「もうだめなの！？」

凱「くそお！」

とその時、二人の妖魔に向かつて攻撃が浴びせられた。

ザルド・ハーガ「ぐあああ！」

上空を見ると巨大な海賊船らしきものがあり、そこから6人の男女

が飛び降りてきた。

ザルド「お、お前らは！？」

ハーガ「ど、どうして、ここまで！？」

カイル「お前らの上官が言ったんだろが、追ってこれるものなら追ってこいって。」

ジーク「そうだぜ、だから俺達は来たんだ。」

フィオネ「貴方達を追うために私達は。」

メルト「ここまで来たのよ。」

エリス「それにしても子供を攻撃するなんて悪趣味だわ、まったく

...

ティア「許しません、絶対に!」

その6人は今まで見たことがない服装をしていた。

凱「か、彼らはいったい?」

とその時、通信が入った。

パピヨン「凱さん、ルネ、その人たちは敵じゃありません。」

ルネ「!ば、パピヨンなの!?」

凱「そ、そんな馬鹿な、パピヨンはあの時...」

パピヨン「今は詳しく説明している暇はありません、私を信じてください、彼らは伝説の力を受け継ぐ人たちです。」

ソルダート「伝説の力?」

命「そ、それはいつたい...」

パピヨン「見ていればわかります。」

そう言っつて、6人に全員の視線が集まった。

エリオ「あ、あの、貴方達は?」

ジーク「俺達はただの通りすがりのお人よしだ。」

カイル「気にするな、下がってる。」

4人「...は、はい!」

そう言っつて、4人を下がらせた後、6人はモバイルーツとレンジャーキーを取り出した。

フェイト「あ、あれは!?」

シヤマル「い、いったい何をしよう...」

6人「...豪快チェンジ!」

モバイルーツ「ゴーカイジャー!」

その瞬間、6人は不思議な格好になった。

護「うわっはー！」

戒道「こ、これは!?!」

ルネ「な、何なのこいつらは...」

外野が不思議がつている中で6人は名乗りをあげた。

カイク「ゴークイキング」

ジーク「ゴークイレッド」

フィオネ「ゴークイブルー」

メルト「ゴークイイエロー」

エリス「ゴークイグリーン」

ティア「ゴークイピンク」

6人「「海賊戦隊ゴークイジャー!!!」」

ソルダート「海賊戦隊!?!」

シグナム「ゴークイジャーだと...」

凱「ま、まさかあの伝説のレジエンド戦隊か!?!」

ルネ「そ、そんな馬鹿なあれはおとぎ話でしょ...」

フェイト「ねえなのは、レジエンド戦隊ってなんのこと?」

なのは「私のいた世界だと、かつて遠い昔に世界を守った英雄のこ  
とをなんだけど、もう数百年前の話だから、そんな話おとぎ話だろ  
うって話になっちゃたんだよ。」

シグナム「しかし、実際に彼はそれを使っているということは、本  
当の話だったということか...」

そんな話を他のメンバーが話している間、ゴークイサーベルとゴーク  
イガンを取り出した。

カイク「さてと...」

ジーク「派手に行くぜ!」

その一声を皮切りに6人はバラバラになって敵に向かっていった。

その中で、武器を交換しながら敵を的確に倒している。

ソルダート「なんとということだ...」

シグナム「動きに無駄があるようで無駄がない。」

ヴィータ「しかも、あいつらコンビネーションが良すぎるぜ。」  
なのは「そうだね、まるで他の人の次の行動がわかってるかのよう  
に動いてるね。」

凱「よし！俺達も負けてられないぞ。」

みんな「「「おおお！！」」」

そう言つて、ゴーカイジャーの面子に混じつて敵を殲滅し始めた。

そんな中ザルドが身体に内蔵されたバルカン砲を出し、キャロとエ  
リオに向けて発射しようとしていた。

ザルド「くたばれ！ガキ共！」

フェイト「エリオ！キャロ！」

スバル「二人とも逃げて！」

ティアナ「ため、間に合わない。」

カイル「豪快チエンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

シヤマル「姿が変わった!？」

カイルは瞬時に二人の前に現れ盾になった。

ザルド「やったか？」

ところが煙の中からデカブレイクの姿になったカイルが平然と立っ  
ていた。

カイル「．．．大丈夫か？」

エリオ「は、はい大丈夫です、ありがとうございます。」

キャロ「そ、それよりもあなたは大丈夫なんですか？あれだけの攻  
撃を受けたのに．．．」

カイル「受けてないさ、受け止めたただけだ．．．」

そう言つて、手から先ほどのバルカン砲の弾丸が全て地面に叩きつ  
けられた。

ハーガ「ば、馬鹿な!？」

それにはゴーカイジャーの面子を除く全員が啞然とした。

ソルダート「あれを全て受け止めたというのか．．．」

シグナム「弾き飛ばすことよりも数段難しいことをあいつはやって

みせたというのか．．．」

なのは「レイジングハート、さっきの映像見れる？」

レイジングハート「了解、マスター。」

そう言つて、全員に動きを遅くして先ほどの映像を見た、するとカ  
イムは手のブレスを操作したと同時に目にも留まらぬスピードで弾  
丸を全て受け止めた。

凱「J以外でこれだけの動きができるのか．．．」

フェイト「そ、それだけじゃない、このスピードは秒速およそ30  
万km．．．」

シャマル「そ、それじゃ光りの速さで動いたというの．．．彼は．．  
．」

ヴィータ「なんて奴だ．．．」

ルネ「あの力、人間離れしすぎね．．．」

その後、カイムは敵のほうを向き直った。

カイム「無法な悪を迎えうち、恐怖の闇をぶち破る！ 夜明けの刑  
事、デカブレイク！」

護「よ、夜明けの刑事．．．」

戒道「デカブレイク．．．」

みんなが呆然としている中、カイムとジークは二人でそれぞれの妖  
魔獣2体を相手にしていた。

ジーク「オラオラオラ！」

ザルド「ぐあああ！」

カイム「ブレスロツトル！高速拳ライトニングフィスト！」

ハーガ「ぐああああ！」

カイムとジークの攻撃で二人の妖魔獣は吹き飛ばされた。

ジーク「カイム、とどめと行くぜ。」

カイム「ああ」

そう言つて、ジークはゴーカイサーベルにレンジャーキーを入れた。

ゴーカイサーベル「ファイナルウェーブ！」

カイム「正拳アクセルブロー奥義．．．」

ジーク「ゴークイストラッシュ！」

カイク「必殺拳ソニックハンマー！」

ザルド・ハーガ「ぐああああ！」

その後二人は爆発した。

そして、他の4人もスカルソルジャーの大群に向かって最後の攻撃をしようとしていた。

ゴークイガン「ファイナルウェーブ！」

4人「ゴークイブラスト！」

スカルソルジャー「ガガガ！」

スカルソルジャーもでかい奴以外は全て片付けた。

### 妖魔の三巨頭

ルシフェル「やれやれ、まあ、あの二人には始めから期待などはしてなかったが……」

バディン「それよりもあいつを行かせるぞ。」

アスラ「ああ、行けデビルズパイダー！」

雑魚を倒した直後、デビルズパイダーが2体現れて、倒した2体の妖魔獣が巨大化して復活した。

フェイト「嘘、巨大化したの!？」

ヴィータ「何なんだ、こいつはどういうカラクリだよ！」

凱「くそ！ギャレオンや他の勇者ロボット達は今こっちにいない……」

ソルダート「心配するな、凱！私のJアークで行く。」

その時、カイクたちが止めた。

カイク「待て、俺達が行く。」

ルネ「あ、あんた達が？」

ジーク「ああ、行くぜ……うん？なんだ牧野先生か……何!？」

今ゴークイガレオンが動かせないだと？」

牧野「ええ、今までろくな整備をされていなかったのに次元の壁を

越えさせいで．．．」  
パピヨン「どうやら限界だったようで、移動には問題はないのですが．．．」

レオナ「合体は無理ね、でもキング君の方は1度に複数のロボットを呼び出せるし、今日はそれで戦ってね。」

カイク「仕方がないか．．．キングインストラー！」

そう言つて、カイクはキングキーを2本差し込んだ。

すると巨大ロボットが次元の裂け目から現れた。

キングインストラー「デカウイングロボ、フラッシュキング！」

なのは「こ、こんなロボットまで持っているなんて．．．」

フェイト「す、すごい．．．」

カイク「ジーク、お前達はデカウイングロボで行け、俺はフラッシュキングで行く。」

ジーク「わかった、それなら豪快チェンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

ジーク「スワットモードオン！」

5人はデカレンジャーにチェンジし、さらにスワットモードになつてからデカウイングロボに乗り込んだ。

そして、2体のロボットは雑魚を全て蹴散らしながら、2体妖魔獣を相手にして戦った。

カイク「キングミサイル！」

ザルド「シャアア！」

カイク「キングビーム！」

ザルド「シャアア！」

ザルドは吹き飛ばされ、それを見たカイクはスターコンドルを呼び出した。

カイク「コスモソード！」

フラッシュキングはコスモソードを手にするとエネルギーを溜めて必殺技を叩き込んだ。

カイク「スーパークコスモフラッシュ！」

ザルド「シャアア!!!」

ザルドは完全に倒された。

エリオ「す、すごいです、あのロボット……」

キャロ「あんな簡単に倒しちゃうなんて……」

スバル「か、かつこいい……」

ティアナ「……なんなのこの人たちは……」

フォワードの4名は4者4様のリアクションをした。

そして、ジークたちの方は

ジーク「パトマグナム!」

ハーガ「ゴオオオ!」

ジーク「ダブルヒールスマッシュ!」

ハーガ「ゴオオオ!」

ハーガを地面にたたきつけた。

それ見た、ジークたちは

ティア「今ですね、ジークさん。」

エリス「こいつを……」

フィオネ「宇宙まで……」

メルト「運ぶわよ!」

ジーク「言われるまでもねえ、行くぜ!」

そう言つて、デカウイングロボはハーガを持ち上げて垂直に上昇を始めた。

シグナム「何をやる気だ?」

ソルダート「ま、まさか、あのまま宇宙へ行くだと……」

凱「ガオガイガーですら、そう簡単に行くものではなかったのに……」

シャマル「と、とりあえず映像が見れます。」

そう言つて、その場にいたメンバーで映像を見た。

フェイト「宇宙まで出て、いったい何を?」

デカウイングロボは成層圏を飛び出すと敵を宇宙空間に放り投げて変形した。

5人「特捜変形デカウイングキャノン！」  
「ヴィータへ、変形しやがった!？」

護「で、でかい・・・」

戒道「これだけの技術力は宇宙でもそうそうない・・・」

命「いったい、どれだけの技術が・・・」

華「す、すごい・・・」

ルネ「どうなってるのよ・・・こいつらは・・・」

ジーク「とどめだ!SPライセンスセット、コントローラーモード!  
」

5人「ファイナルバスター!」

ハーガ「ゴオオオ!!」

ハーガは宇宙の塵になった。

5人「ゴツチュー!」

そして、地上の雑魚もボルフォッグとフラッシュキングが全て倒した。

その後、6人は変身を解き、凱たちと会っていた。

凱「君達はなぜその力を持っているんだ?」

ジーク「話すと長くなる、とりあえずうちの船に乗っている人たちも呼ぶからこの建物中で後で会って話そう。」

なのは「・・・わかりました、それではうちの部隊長に伝えておきます・・・凱さんたちも良いですよね?」

凱「ああ、たのむなのは。」

そう言って、数時間後にまた会うことにしてその場は解散した。

## 第8話 新世界で派手に登場（後書き）

どうも、今回は他のメンバーにデカウイングロボに乗せるといふ本編では無いような場面を作りました、さて次回はどうとうパピヨンと猿頭寺を再会させられますのでどうか呼んでくれている方々へ、次回もよろしく願います。

## 第9話 集結する同志たち（前書き）

どうも今回は、全メンバーによる自己紹介と模擬戦があります。

## 第9話 集結する同志たち

その後、4時間後に骨董オークションが終了し、夜も更けた後カイルたち機動六課、GGGメンバーが一同にホテルの一室に集結した。猿頭寺「ぱ、パピヨンなのか!？」

パピヨン「ええ、耕助．．．今の私は元の私とレプリジンの意識が一つになった状態なの、だからあのときのことも覚えているわ．．．」

猿頭寺「パピヨン!」

パピヨン「耕助!」

二人は感激のあまりお互い抱き合った。

カイル「．．．まあ、あつちは一旦置いておいて、まずは互いの自己紹介から行こうか、俺の名はカイル・アストレアで「ゴークイキング」だ。」

ジーク「俺はジークフリード・グラードだ、ジークでいい「ゴークイレット」だ。」

フィオネ「私はフィオネ・シルヴァリアで、「ゴークイブルー」です。」

メルト「私はメルト・ログティエ、「ゴークイイエロー」よ。」

エリス「私はエリス・フロラリアで、私が「ゴークイグリーン」よ。」

ティア「私はユースティア・アストレアです、ティアと呼んでください、「ゴークイピンク」です。」

すると、凱が不思議なことに気が付いた。

凱「あれ?カイルとティアは同じ名があるけど．．．兄妹なのか?カイル「いや、俺がティアを引き取って俺の名をくれたんだ．．．」ティア「そうなんです、その時からカイルさんとは家族なんです。」命「そうなの．．．」

レオナ「それじゃ、自己紹介の続きね、私はレオナ、前世はレオン・

ジヨルダーナで轟轟戦隊ボウケンジャーの司令官もやってたの。」  
ナビィ「僕は、ナビィダヨ。」

フェイト「なんか、声がなのはとそっくり……」  
はやて「ホンマヤ……」

牧野「え、私は牧野森男と申します、同じく轟轟戦隊ボウケンジャーのメカなどを担当しております。」

それを聞いた獅子王博士が驚いた。

獅子王博士「ま、まさかあのルネッサンスの偉大なる画家にして発明家でもあつた天才とあの数百年前に突然消息不明になった牧野森男博士だというのが……」

凱「叔父さん、知っているのか？」

獅子王博士「ああ、まさに生きた伝説の天才じゃ……しかし、こうしてお会いできる日が夢にも思わなかったわ……」

牧野「いえいえ、レオナ君はともかく私はそんなもんじゃ……」

牧野先生は遠慮気味に答えた。

ジーク「それはともかく、今度はあんたらのことを教えてくれないか？」

はやて「ああ、すまへん大河総裁、うちらから紹介させてもらってええかな？」

大河「ああ、かまわんよ。」

はやて「おおきに、それじゃ私は八神はやてこの機動六課の部隊長を務めとるんよ。」

なのは「私は高町なのは、ここの隊長と教官を務めているよ。」

フェイト「私はフェイト・Ｔ・ハラオウン、なのはと同じく隊長を務めているわ。」

シグナム「私はシグナム、副隊長を務めさせてもらっている。」

ヴィータ「あたしはヴィータだ、同じく副隊長をやっている。」

シャマル「私はシャマル、主に医者をやらせてもらっているわ。」

エリス「へえ、あなたも医者なの後で少し話がしたいわね。」

シャマル「ええ、良いわよ。」

エリスとシャマルそんな話をしている中自己紹介が続いた。

シャーリー「私はシャリオ・フィニーノです、シャーリーって呼んでください、主にメカニックを担当しています。」

ヴァイス「俺はヴァイス・グランセニックだ、主にヘリのパイロットをしている。」

グリフィス「私はグリフィス・ロウランです、主にはやて部隊長の補佐をしています。」

リイン「私はリインと申します、同じくはやて部隊長の補佐をやっています。」

ティア「あゝの、この方どうしてこんなに小さいのですか？」

はやて「ああ、それはあとでおいおい説明するわ、さて次はうちの若いフォワード陣や」

そう言つて、4人が自己紹介を始めた。

スバル「私はスバル・ナカジマです、ゴークイジャーの皆さん。」

ティアナ「ティアナ・ランスターです、先ほどはありがとうございました。」

エリオ「エリオ・モンディアルです、どうもよろしく申し上げます」

キャロ「私はキャロ・ル・ルシエです、そしてこの子はフリードリヒつて言います。」

メルト「へえ、この世界にはこんな竜がいるんだ。」

はやて「さて、うちの紹介はこんなもんかな、それでは大河総裁をお願いします。」

大河「うむ、それでは我々の自己紹介だね、私は大河幸太郎、君達はパピヨン君から聞いているだろうが、私は元GGGの長官であり、

現在は地球の宇宙開発公団の総裁をしている。」

火麻「俺は火麻激だ、GGGの参謀を務めている。」

獅子王博士「僕ちゃんは獅子王雷牙で、科学者をやっております。」

猿頭寺「そして、申し遅れました私がオペレーターをやっている猿頭寺耕助です。」

凱「そして、ここからが機動部隊の紹介になる、俺はGGG機動部

隊長の獅子王凱だ。」

ソルダート」「同じく今、凱と一緒に隊長を務めているソルダートだ。」

ルネ「私はGGGの協力組織の「シャッセル」所属のルネ・カーデイフ・獅子王で、その獅子王雷牙の一応娘よ。」

天海護「僕はGGG機動部隊副隊長の天海護です。」

戒道「同じく副隊長の戒道幾巳。」

命「私は機動部隊のオペレーター担当の卯都木命よ。」

華「私は同じくオペレーターで命先輩の後輩の初野華です。」

スワン「ワタシハ、スワン・ホワイトデス、開発部のオペレーターを担当しています。」

こうして、一通りのメンバーの紹介は終わった。

そして、カイクたちははやて、大河総裁らに今までの経緯と敵の正体を例の本を渡して説明し、さらにカイクたちもこの世界の事と現状を把握した。

カイク「．．．なるほど、地球も俺達の世界が幽閉されていた間にいろいろあったのか．．．」

大河「うむ、しかし、一番驚いたのはその妖魔の君と呼ばれている「ジーン」と名乗る王の力だ、まさかそんなことができるとは．．．

「はやて「こりゃ、ミッドチルダと地球だけの問題だけではあらへん、全ての世界の問題や．．．」

ジーク「とりあえず、俺達はこれからもあいつらを追って行くつもりだぜ。」

それを聞いたGGGや六課のメンバーは全員同じ考えでいた。

そして、はやてが話を切り出した。

はやて「あの、それやったらうちの機動六課とGGGも協力させてもらわれへんやろうか。」

カイク「何？」

ジーク「まあ、こつちとしては味方が増えるのはいいが．．．」

フィオネ「しかし、今お会いした人たちを戦いに巻き込むのは．．．

」

火麻「何を言っただやがる！あいつらがいる限りどの世界も脅威にさらされるんだ。」

凱「火麻参謀の言うとおりだ、俺達はもう一緒に戦った同志だ。」

なのは「私たちも同じです、それにあなたたちはこの世界に不慣れなようですし、私たちがいるほうが動きやすいのではないですか？」

メルト「そ、それを言われるとね．．．」

エリス「言い返せないわね．．．」

ソルダート「私も同じだ、私たちの星と同じような悲劇を繰り返させたくはない．．．」

護「大丈夫だよ。」

戒道「僕らなら。」

フェイト「きつと、妖魔たちに立ち向かえます。」

その後、少し考えた後カイムは口を開いた。

カイム「．．．わかった、それじゃ共に戦おう、必ず妖魔たちを倒そう。」

その言葉に全員頷き、今ここにカイムたちは新たな同志を迎えた。

その後、カイムたちは大河総裁とはやてからの報告を受けた、地球の国連事務総長ロゼ・アプロヴァールとレオーネ・ラルゴ・ミゼツトの伝説の三提督からの特別な組織として地球とミッドチルダを中心に活動できるように特別な権限を与えられた。そして、ゴーカイガレオンばかりにいるわけにもいかず、そこで特別に機動六課の近辺にカイムが呼び出したデカベースを居住区として置かせてもらうことになった。

その後、シャリーはデカベースに来ていろいろとレオナや牧野先生に話を聞いたのは言うまでも無い。

そして、数日後

GGGのメンバーは凱、護、命、華、猿頭寺のメンバーはミッドチルダに残り、臨機応変に対応できるようにカイクたちと行動を共にすることとなり、デカベースに居座ることになった。

そしてカイクたちはできる限り任務の際は機動六課と行動を共にすることとなった。ちなみにカイクたちの服装は変わっている。六課とGGGのメンバーで服を選び、今はこの世界にあった服を着ている。

そして、カイクとジークは今シグナムとソルダートJの二人からの強い要望で模擬戦をすることになった。

なのは「それじゃ、4人とも制限時間は30分だからね。」

シグナム「わかっている、始めてくれ。」

ソルダートJ「右に同じだ。」

カイク「それじゃ、行くぜジーク。」

ジーク「おう！」

カイク・ジーク「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

カイク「ゴーカイキング」

ジーク「ゴーカイレッド」

お互いに戦闘態勢が整い、なのはが合図を出した。

なのは「それでは、始め！」

その合図と共にシグナムはカイクとソルダートJはジークと戦闘を始めた。

シグナム「やはり、やるなお前・・・」

カイク「それはお互い様だ、見たところ力に制約があるようだしな・・・」

シグナム「！ほう、私にリミッターがあることを見抜くとは、さすがだ、ならばなおのこと全力で行かせてもらおう！」

カイク「望むところだ！」

そしてジークとソルダートJの方は、さすがにソルダートJはスピ

ードが速く動きについていくのをやめカウンター攻撃に切り替えて戦っている。

ソルダートJ「さすがだな、スピードで勝負せずに自分のペースを守って戦うとは・・・」

ジーク「よく言っぜ、俺のカウンターをここしかないってところでかわしているくせによ。」

そう言っで、戦いが続いたが30分以上戦い続けがまったく決着が付かず、引き分けに終わった。

スバル「す、すごい、シグナム副隊長とJさん相手に二人とも一歩も引かないなんて・・・」

ティアナ「・・・この人たちも普通じゃない・・・」

エリオ「す、すごいです、カイルさんたちは！」

キャロ「私たちも負けてられません。」

なのは「うふふ、みんなにはいい刺激になったね。」

フェイト「ええ、でもさすがにこの結果は驚いたわね。」

ヴィータ「まったくだぜ。」

ルネ「それだけ、いろいろな修羅場を潜り抜けてきたってことね・・・」

はやて「ホンマにすごいわ、あの二人！」

外野陣がそれぞれの感想を述べている間、お互いに健闘を称えあっていた。

ソルダートJ「いい戦いだっぞ、久しぶりだこんなにさすががい戦いは・・・」

ジーク「俺もだぜ、次はゴーカイジャー以外の力を使わないといけないな・・・」

そう今回は模擬戦ということもあり、カイルとジークは他のレンジャーキーを使わなかった。

カイルとシグナムはガツチリと握手を交わした。

シグナム「さすがだ、今度はリミッターをはずした状態で勝負したものだ・・・」

カイル「俺もだ、その時は他のレンジャーキーの力を使わせてもらう。」

そうやって、模擬戦が終わり、残るメンバー以外のGGGのメンバーは一旦地球に戻った。それと入れ違いにギヤレオンなどの一部のGGGの戦力がデカベースに運び込まれたのはすぐのことだった。

## 第9話 集結する同志たち（後書き）

今回は、前回に比べて短めにしました、次回はとうとう新しい大いなる力が解放されます。それではまた次回お願いします。

## 第10話 伝説の力は勇氣ある者に（前書き）

今回は、あの戦隊の大いなる力が解放されます。さらに後に使用可能になる別の特撮ヒーローの武器をモデルにした私が考えたゴージャアのオリジナル武器が登場します。

## 第10話 伝説の力は勇氣ある者に

シャーリー、牧野先生、レオナの3人はレジェンド戦隊の変身システムを応用して、凱、護、戒道の3人のアーマーの強化及びプレスに圧縮分解して収納することに成功した。

牧野「これで、あなた達はいつでも臨戦態勢が取れますね。」

凱「ありがとうございます、これでボルフォッグの負担が減るな。」  
護「凱兄ちゃん、それじゃ戒道の分のプレスはオービットベースに転送しておくよ。」

凱「ああ、頼む護。」

そう言つて、転送装置で戒道のプレスを地球のオービットベースへ転送した。

その間、カイクたちはデカルムで話し合っていた。

カイク「とにかく、デカレンジャー以外の大いなる力も解放しないとな・・・。」

ジーク「そうだな、デカレンジャーのスイットモードやお前のデカマスターやデカブレイクの力はすごいが同じ力だけだと見抜かれる可能性がある、そろそろ新しい力を探さないとだな・・・となる、

おい鳥野郎！」

ナビィ「鳥ジャナイヨ、ナビィだよ、ソレジャ、レッツお宝ナビィ  
ゲート！・・・。フム、ソナタ達ランプをモッタ男がイイコト  
ヲ教エテクレルゾヨ」

エリス「ランプを持った男？」

ティア「な、なんですかそのキーワードは・・・。」

メルト「まさか、そのランプって魔法のランプじゃないわよね・・・」

「  
ファイオネ「しかし、探さなければいけませんね。」

カイク「俺は残る、全員探しに出たんじゃ何かあったときに困るだ  
ろうしな。」

ジーク「わかった、こっちはメルト、フィオネ、エリスの3人を連れて探してくる。」  
そう言つて、ジークたちはナビィを連れて整備が終了したゴーカイガレオンで出つて行つた。

ある研究所

ジェイル「素晴らしい、GGGのメンバーの力であるGストーンとJジュエルの力に機動六課のデータも取れただけでなく、よもやあのような6人がいようとは、さすがにデータは取りきれなかったがね……」

アブレラ「しかし、私にとっては忌々しい話だ、よもやデカレンジヤーの力をまたこの目に見ることに成るとはな……」  
ルシフェル「しかし、まだ奴らは一つの力しか解放していないようだ。」

ジェイル「なんと！あれだけの力でまだ他にも力が隠されているのか、ますます興味深い。」

シュバリエ「ドクター、取り込み中すまないが、そちらの装置を借りさせてもらつたよ。」

ジェイル「かまわないさ、それでシュバリエは何を生み出したんだい？」

シュバリエ「過去のDNAデータの銀河闘士と妖魔を融合させた名づけて「妖魔闘士」ガゴイドルギンだ。」

ルシフェル「ほう、さすがはシュバリエだ。」

ジェイル「これはすごい、後でデータだけ取らせてもらえないか？」  
シュバリエ「かまわないさ、それよりもここにいいワインがある一杯どうかな？」

アブレラ「そうだな、私は頂こう。」

ルシフェル「私も」

ジェイル「それでは私も」

シュバリエ「それでは……」

4人「乾杯！」

そう言つて、4人はシュバリエのワインを味わい至福の時を過ごした。

一方ジークたち

ジーク「たく、いったいどこにいるんだよそのランプを持った男つてのは・・・」

メルト「まあ、簡単に見つかるとは思つてないけどね・・・」  
ファイオネ「とにかく、早く見つけたいものですね。」  
エリス「同感ね。」

ジークたちはとりあえず街で聞き込みを試みたが、まったく手がかりがなく、とりあえずゴークイガレオンでいるんなところへ移動しながら手がかりを探した。

しかし、まったく手がかりが見つからなかった。

そんな中、はやてとフェイトに出会った。

はやて「あれ？ジークさん達やないか。」

ジーク「あれ？はやてとフェイトはこんなところで何をしてるんだ？」

フェイト「私達は聖王教会へはやてが用事がありました、それで皆さんは何をしているんですか？」

メルト「実はね・・・」

ジークたちははやてとフェイトに事情を話した。

はやて「なんやそのキーワードは・・・」

フェイト「さすがにミッドチルダでもそんな魔導師はいないと思うけど・・・」

ファイオネ「そうですか・・・」

はやて「そんなにがっかりせんといてえなあ、きっと見つかるわ。」  
フェイト「そうですよ。」

エリス「ありがとね、はやて、フェイト・・・」

とその時、6人の前に一人の男が現れた。

「???」やあ、誰かお探しかな?」

すると、手にランプがあることに気付いた。

ジーク「そ、それは!?!もしかしてあんたがランプを持つ男か?」

「???」「うん、たしかにこれはランプだけど普通のランプじゃないよ、これは魔法のランプだ。」

はやて「ま、魔法のランプ?そんなデバイス聞いたことがあらへん  
」

フィオネ「そ、そうなのですか?」

フェイト「ええ、通常は杖とかで、私達のデバイスは基本的に特殊で、こんなふうにはオリジナルのデバイスは、六課の人間以外にはほとんどありません。」

エリス「それじゃ、あなたはいつたい何者?」

「???」「そういえば自己紹介がまだだったね、僕の名は天空聖者サンジェル、地上ではヒカルって名前だ。」

メルト「天空聖者サンジェルって...たしか魔法戦隊マジレンジャーの!?!」

はやて「ええ!てことはこの人はその関係者ってことなんや。」

ヒカル「ああ、僕は輝く太陽のエレメント、天空勇者マジシャインだ...もつとも今は変身することができないがね。」

そうヒカルを始めとするレジェンド戦隊は今本来の力を使うことができない状態である。

フェイト「で、でも数百年前の人はどうして...」

ヒカル「ああ、そうか知らないのか僕は普通の人間じゃないからね、数百年程度じゃ死なないからね、それはそうと君達はゴークイジャの力を使うものたちだね、なら僕について来たまえ、マジレンジャーの大きいなる力を託そう。」

そう言つて、ジーク、フィオネ、メルト、エリスの4人は光に包まれてその場から消えた。

はやて「あ、あれ?ジークさん達はどこへいったんや?」

フェイト「きつと、力を受け取るために別の場所へいったんじゃな

いかしら？」

はやて「せやな、これはあの人らの問題や一応カイクさんたちにも連絡だけ入れとこうか？」

フェイト「そうだね。」

そう言つて、はやてとフェイトはデカベースに連絡を入れカイクたちに報告したが、カイクは「あいつらなら大丈夫だ」と至つて平然と答えた。

その後、ジークたちがヒカルと一緒に消えてから2日経過した、その間、デカベースでは牧野先生が新兵器の開発し、カイク達にそれを紹介していた。

ティア「牧野先生、これは？」

牧野「ええ、これは「ゴークイデリンガー」と「ゴークイキャリバー」&「ゴークイストリーマー」です。」

カイク「...先生、なんかパクつてねえか？」

牧野「い、いえ、真似したわけでは...。」

カイク「まあいい、それで先生これはどういう仕組みだ。」

牧野「ええ、まずのゴークイデリンガーは通常はサブマシンガンモードとファイナルキャノンモードがあり、このファイナルキャノンモードの破壊力はゴークイブラストの20倍以上の威力があります。さらにゴークイガンにジョイントし、レンジャーキーをセットするとファイナルウェーブモードになり、さらに威力が上がります。」

凱「す、凄いな...。」

牧野「まだです、さらにこのゴークイキャリバーは6人分製作中ですが、これはレーザーブレード、レーザーを発射することも可能です、そして、こちらのゴークイストリーマーはスピナーモードがあり、ドリル、マニピュレーター、パワーアーム等の機能を備え、最新鋭の新型のモーターにより、毎分1万回転します、あとゴークイキャリバーをジョイントさせてさらにレンジャーキーをセットすることで、毎秒100発のエネルギー弾を発射することができるマキ

シムモードが可能です。」

護「うわっはー！すごいや！」

命「それで、どこまで完成しているんですか？」

牧野「そ、それが、猿頭寺さん、パピヨンさん、シャーリーさんにも協力してもらったのですが・・・」

シャーリー「ファイナルキャノンモードとマキシムモードの発射時の衝撃がとてつもないんです。」

凱「猿頭寺オペレーター、どれだけあるんですか？」

猿頭寺「うん、ゴークイデリンガーは最大30G、ゴークイストリーマーは最大25Gとなっています。」

華「30G、25G！？そ、そんなに衝撃があるんですか？」

パピヨン「とりあえず、獅子王博士にも連絡して、近いうちこちらに来られるのでその時さらに負担を減らすまでは、使用できませんね・・・」

カイム「・・・わかった、それまで今までの武器で対応させてもらうさ・・・うん？どうした鳥？」

ナビィ「ダカラ鳥ジャナイヨ、ナビィダヨ、ソレヨリ妖魔がデタヨ！」

ティア「ええ！？」

凱「何だって！」

カイム「ジークたちがいないが、俺達だけでも出るぞ、ティア！ティア「はい、カイムさん！」

凱「俺達も行くぜ、カイム！」

シャーリー「私も六課に連絡しておきます。」

カイム「頼む、凱、シャーリー！」

そう言つて、途中で機動六課と合流して、妖魔が現れたところへ向かった。

ガーゴイドルギン「さてと、ここらでいいか、スカルソルジャー共行くぜ！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

街の中で暴れまわっていた、とその時カイクたちとGGGと機動六課のメンバーが来た。

カイク「ティア」「豪快チエンジ！」

モバイレーツ「ゴークイジャー！」

凱「護」「アーマーセットアップ！」

ガークイドルギン「来たか、うん？ゴークイジャーの面子が4人いないな、まあいいさ、こいつらを叩きのめせば、出てくるだろう。なのは「それはこっちのセリフだよ！行くよ、みんな！」

みんな「」「おう！」

そう言つて、雑魚を蹴散らしながらカイク、シグナム、凱の3人はガークイドルギンに攻撃を加えていた。

カイク「レンジャーキーセット！」

ゴークイサーベル「ファイナルウェーブ！」

カイク「ゴークイストラッシュ！」

シグナム「レヴァンティン！飛竜一閃！」

凱「ウィルブレード！」

ガークイドルギン「ぐううう！やるな、だが俺はガークイドルギンを元にシュバリエ様より作られた妖魔闘士だ、そう簡単には行かんぞ。」

カイク「ちい、シュバリエの奴、変なもの作りやがって、こうなつたら、ティア！」

ティア「はい！カイクさん！」

そう言つて、カイクとティアはゴークイサーベルとゴークイガンを交換し、カイクは渡されたゴークイサーベルにシンケンジャーのレンジャーキーをセットした。

カイク「行くぞ！シグナム！」

シグナム「心得た！」

二人は、武器を構え直しガークイドルギンに向かっていった。

シグナム「くらえ！紫電一閃！」

カイク「ゴークイストラッシュ！」

さすがにガーゴイドルギンは吹き飛ばされた。しかし、それはちょうどスカルソルジャーと戦うフォワード陣のところに吹き飛ばされる形となった。

凱「し、しまった!」

ガーゴイドルギン「いてて、やりやがったな、こうなったらこのガキ共を……」

ヴィータ「逃げる、お前ら!お前らがかなう相手じゃねえ!」

ティアナ「!!!こ、こんな奴ぐらい私だって、ヴァリアブルシュート!」

ガーゴイドルギン「ふん!」

ティアナの攻撃は弾き飛ばされた。

ティアナ「う、嘘、効かないなんて……」

スバル「ティア!くらえ!ディバインバスター!」

ガーゴイドルギン「何かしたか?」

スバル「そ、そんな……」

スバルの攻撃もまったく答えておらず、フォワード陣は絶望的な心境だった。

ガーゴイドルギン「今度こちらからだ、くらえ!ストームサンダー!」

なのは「スバル!ティアナ!」

エリオ「逃げてください!」

キャロ「だめ!間に合わない!」

二人は、敵の攻撃をかわすことができなかった。しかし、ティアナとスバルは無傷だった。

ガーゴイドルギン「な、何!?き、貴様!」

凱「カイク!」

ティア「カイクさん!」

そうカイクが二人を飛ばして自分が攻撃を受けた。

カイク「く……だ、大丈夫か?」

スバル「は、はい……」

ティアナ「それより、ど、どうして？」

カイル「お前らのところへ、こいつをふっ飛ばしちまったのは俺のミスだからな、それに攻撃の間合いが短くてチェンジしてたら、間に合わないと思ったからな・・・」

その直後、シグナムと凱がガーゴイドルギンに斬りかかり、スバルとティアナから引き離れた。

シグナム「二人とも、下がれ、ここは我々がやる。」

凱「カイル、お前も下がれ。」

カイル「俺は大丈夫だ、行くぞ。」

そう言つて、向かつていこうとしたとき、突然目の前が光、その中からジークたち4人が現れた。

カイル「ジーク！みんな！」

ティア「帰ってきたんですね。」

ジーク「当たり前だ、それよりもカイルこんな奴にてこずるなんてらしくねえな。」

フィオネ「遅くなりました、カイルさん、ティアさん。」

エリス「でも、その代わり手に入れてきたわよマジレンジャーの大いなる力を・・・」

カイル「ほ、本当か!？」

メルト「ええ、それとカイルこれを。」

メルトはカイルにキングキーとランプを渡した。

カイル「これは？」

ジーク「マジランプバスターだ、使い方はマジシャインになればわかる。」

カイル「わかった行くぜ、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「マジレンジャー！」

カイル「輝く太陽のエLEMENT、天空勇者マジシャイン！」

スモーク「それじゃ、新しい旦那、よろしく。」

カイル「ああ、行くぜマジランプバスター！」

そう言つて、カイルはランプをこすった後に魔力弾を発射した。

なのは「す、すごい、魔力弾が曲がって自分の狙いたい標的に的確に当てている……」

ティアナ「……精密射撃よりも難しいのに……く……」

ティアナは唇をかみ締めた。

ジーク「カイクばかりに頼ってもいられねえ、行くぜ豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー」

メルト「それじゃ、ジークさっそく使ってみましょうか、これ。」

ジーク「ああ、ティアもいいな？」

ティア「はい！」

5人「……豪快チェンジ！」

モバイレーツ「マジレンジャー」

5人はマジレンジャーの姿になった。

ジーク「ただだ、超魔法変身・マジ・マジ・マジ・マジ・マジロー！」

ジークたちは携帯のマジフォンを操作すると、マジレンジャーにチェンジした5人の姿がさらに変わった。

ジーク「レジエンドマジレット」

フィオネ「レジエンドマジブルー」

メルト「レジエンドマジイエロー」

エリス「レジエンドマジグリーン」

ティア「レジエンドマジピンク」

ジークたちはなんとレジエンドマジレンジャーにチェンジした。

ガーゴイドルギン「な、なんだと、これはマジレンジャーの大いなる力だというのが……」

ジーク「行くぜ、レジエンドファイヤー！」

フィオネ「レジエンドスプラッシュー！」

メルト「レジエンドサンダー！」

エリス「レジエンドグラウンド！」

ティア「レジエンドストーム！」

ガーゴイドルギン「ぐあああ！」

ガーゴイドルギンはさらに吹き飛ばされた。

エリオ「す、すごい、こんな高度な魔法が使えるんなんで・・・」  
キャロ「これが大いなる力・・・」

そしてガーゴイドルギンの前にカイクが立ちはだかった。

カイク「行くぜ、スモーカー、ルーマ・ゴー・ゴジカ。」

スモーカー「スモーカー・シャイニングアタック！」

ガーゴイドルギン「ば、馬鹿な、この俺が・・・ぐああああ！  
！」

ガーゴイドルギンは爆死した。

カイク「チエツクメイト！」

護「やった！」

シグナム「うむ、相変わらずうまく力を使いこなしているな。」

とその時、でかい物体が現れた。

なのは「な、何なのあれは？」

シュバリエ「あれは、ゴルリンMr.？だ。」

近くの建物の上にルシフェル、シュバリエ、アブレラがいた。

カイク「貴様は、シュバリエ！」

ジーク「それにルシフェルと、お前は確かエージェント・アブレラか！？」

アブレラ「そうだ、始めまして諸君。」

ルシフェル「しかし、これほど早く新しい力を使いこなすとはお前達は想像以上だ。」

シュバリエ「さて、次のお楽しみだ、ゴルリンMr.？は生命体を吸収し、その人格・姿・能力をコピーし、自らの身体を使って吸収したものを巨大化させて再生及び復活させることができるのだ。」

凱「そ、そんなことが・・・」

ルシフェル「さて、後はお手並み拝見と行こうか、では。」

そう言って、3人は姿を消した。

ジーク「カイク、お前はさっきのあいつらをかばった時のダメージがある、ここは俺達が行く。」

カイク「・・・わかった。」

凱「心配するな、今回は俺も戦えるからな、ギャレオン！」

ジーク「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ゴーカイガレオンとギャレオンとジエネシツクマシンが出撃した。

凱「命！」

デカベース

ここには、牧野、レオナ、シャーリー、獅子王博士達の協力でガオガイガーへの合体に必要なプログラムが存在した。ちなみ今回は異世界ということもあり、合体時の判断は凱に任されることになった。命「了解！ジエネシツクドライブ！」

凱「よっしゃ！ファイナルフュージョン！」

ジーク「俺達も行くぜ！」

5人「・・・海賊合体！」

凱「ガオガイガー！」

5人「・・・完成！ゴーカイオー！」

お互いに合体を完了させた。

ガーゴイルドルギン「2体も出て来やがったか。」

メルト「どうやら、今回の奴は意識があるみたいね。」

ジーク「なんだってかまいやしねえ、叩きのめすだけだ。」

凱「ジークの言うとおりだ、行くぞ、ウィルナイフ！」

Gガオガイガーが斬りつけ、ゴーカイオーも敵を斬りつけた。

ガーゴイルギン「おのれ！こうなったらストームサンダー！」

凱「甘い！プロテクトシールド！」

ガーゴイルギンの攻撃は完全に防がれた。

凱「プロウクンマグナム！」

Gガオガイガーの腕が飛び、ガーゴイルギンの身体を貫通した。

凱「今だ、ジーク！」

ジーク「おう！それじゃ行くぜ、レンジャーキーセット」

そう言つて、5人はマジレンジャーのレンジャーキーをセットした。

5人「っっ完成！マジゴーカイオー！」「っ」

ゴーカイオー「マジドラゴン！」

その後、マジドラゴンが分離して敵に向かっていった。

ガーゴイドルギン「な、なんだこれは？」

マジドラゴンはガーゴイドルギンに炎や竜巻を起こして攻撃して吹き飛ばした。

ガーゴイドルギン「ぐあああ！」

ジーク「とどめだ！」

5人「っっゴーカイマジバインド！」「っ」

マジドラゴンは魔法陣を放ちガーゴイドルギンにそれをぶつけた。

ガーゴイドルギン「ぐああああ！！！」

ガーゴイドルギンは爆発した。

5人「っっチエックメイト！」「っ」

こうして、戦いは終了した。

その後、六課のメンバーも含めて、デカベースのデカルームに集まっていた。

カイル「それで、その先代のマジシャインと会つて、どうしたんだ？」

ジーク「それがな、あの後俺達はお前がいったことがある英雄の聖地の世界へ飛ばされてな．．．」

ジークはあのとときのことを話し始めた。

2日前くらいの英雄の聖地の世界

ジーク「ここへ行け？」

ヒカル「そう、僕が作ったこの箱庭の世界でこの城にあるメダルをとってくるんだ、ただしこのメダルはマジレンジャーの力の源である人間が持っているある気持ちはないと取れないようになってい

んだ。」

メルト「ある気持ち？」

ヒカル「それは自分達で見つけるんだ、それじゃ行っておいで、ゴルド。」

そう言つて、4人は箱庭の世界でそれを取りに行かされ、見事に2日ばかりでクリアした。

ヒカル「どうやら、君達はいい勇気を持っているようだね、合格だ。」

フィオネ「勇気？」

ヒカル「そうだよ、マジレンジャーの力の源は勇気だ。」

そう言つと後ろから7人の男女が来た。

魁「君達が今のゴーカイジャーか。」

翼「俺達は...」

芳香「先代の...」

時人「マジレンジャーだ。」

麗「ちなみに私はヒカルの奥さんです。」

深雪「そして、私は母の深雪で。」

勇「俺が父の勇だ。レジエンド戦隊の後継者達。」

メルト「あなた達が...」

魁「そう君達は俺達の力を受け継ぐに相応しい、ねえ父さん。」

勇「うむ、それではこれが我々のキングキーだ。それとレンジャー

キーを...」

そう言つと4人はマジレンジャーのレンジャーキーを出すとその力を解放させてくれた。

ヒカル「それと、ゴーカイキングの彼にこのスモークキーを頼むよ。」

そう言つとヒカルはマジランプを差し出した。

ヒカル「どうやら、君達は戦士になる前からいろいろなことを乗り越えてきたからこそ強い心持っているようだね。」

深雪「あなた達なら大丈夫、私達のように家族の絆のようにあなた達には違う強い絆があるわ。」

勇「あふれる勇気とその絆があれば必ず切り抜けられる。」  
ジーク「．．．ああ、ありがとう先輩達、それじゃ俺達は行くぜ。」  
そう言つて4人はこの世界から去つていった。  
魁「行つちやつたな．．．」  
ヒカル「大丈夫さ、魁。」  
麗「そうよ、あの人たちなら。」  
翼「そうだな、他にもいい仲間がいるみたいだし。」  
芳香「きつと乗り越えられる。」  
詩人「俺達が出来たんだ。」  
深雪「うふふふ、あなたみんな本当に言うようになったわね。」  
勇「うむ、そうだな深雪。」  
そう言つてこの8人は静かにその場から消えていった。

現在デカベース

カイル「．．．勇気か。」  
凱「しかし、わかる気がするな、俺達のGストーンの力は持ち主の  
勇気に反応して無限に力を高めることができるんだ、勇気が折れな  
い限り必ず勝てる俺はそう信じてる。」  
ジーク「凱．．．そうだな、俺達にはお前達という強い味方がいる  
んだ。」  
なのは「そうだよ、みんないるんだし。」  
ヴィータ「そうだな、あたしらがいるんだからあいつらの好きには  
絶対させないぜ。」  
シグナム「ヴィータとなのはの言つとおりだ。」  
護「絶対大丈夫だよ。」  
カイル「そうだな．．．これだけの仲間がいれば乗り越えられるな  
どんな困難でも．．．」  
そう言つて、その場にいた全員頷いた。  
その後、カイルは大事をとつて半ば強制的にシャマルとエリスの二  
人に精密検査及び治療を受けた。

## 第10話 伝説の力は勇気ある者に（後書き）

どうも、今回はレジェンドマジレンジャーの力を使わせました、さらにわかる方はわかるとは思いますが機動刑事ジバンと特警ウインスペクターの武器をモデルにさせてもらいました、次回はなのは過去の話が出てくるティアナが中心の話にします。それでは次回またお会いしましょう。

## 第11話 何のための強さ(前書き)

どうも、今回は予告どおり、ティアナと一件となのはの過去の話です、後あるスーパー戦隊の話を少し紹介したと思いますのでよろしくお願いします。

## 第11話 何のための強さ

カイムはシャマルの検査がようやく終わった。

シャマル「まあ、身体はいたって問題は無いですけど、でもあまり無茶しないでくださいね。」

カイム「それは難しいな、俺は昔から死と隣り合わせの仕事をしていたんでね・・・」

シャマル「それはどんなお仕事なんですか？」

カイム「殺し屋だ。」

シャマル「え！？こ、殺し屋？」

カイム「嘘じゃない、ジークもそうだ俺は会った時に話したと思うが、大崩落の時に両親と兄を亡くして、その時身寄りがいなかった俺は男娼にされかけたところをジークの親父に引き取ってもらったんだ。」

シャマル「そ、そうだったんですか・・・」

カイム「気にするな、もう随分昔のことだ、それでは失礼させてもらおう。」

シャマル「ええ、お大事に。」

その後、カイムは部屋から退室した。

シャマル「そっか、彼にもまた暗い過去があるのね・・・」

シャマルは部屋から出て行ったカイムを見てそう呟いた。

その後カイムはデカベースの自分の部屋に戻ろうとしたとき

六課の外から誰かがいることに気付いた。

カイム「誰だ？」

ティアナ「あ、カイムさん・・・どうして、ここに？」

カイム「ああ、シャマル先生に一応検査を受けてな、そんなことより訓練してたのか？」

ティアナ「は、はい、始めてあった時やこの前の出勤の時も全部役

に立たないことが悔しくつて．．．」

カイク「気持ちわかるが、しかし、見たところ大分やっているよ  
うだけ、ある程度の休息も取らなければ強くなれないぞ。」

ティアナ「大丈夫です、これくらいなら．．．」

カイク「．．．お前さ、気になっていたんだが昔何かあったのか？」

ティアナ「！？な、なぜそう思うんですか？」

カイク「俺も昔いろいろあつてな、それでなんとなくわかるんだ．  
．」

ティアナ「．．．カイクさん少しお時間よろしいですか？」

カイク「ああ、いいぜ。」

その後、ティアナはカイクに自分の兄のことを話した。

カイク「．．．なるほどな、その尊敬する兄が侮辱されたことが許  
せなくつて、兄の汚名を晴らすために頑張っている．．．」

ティアナ「はい．．．」

カイク「そうか、それなら頑張れ、しかしだからといって無茶する  
と俺みたいになるからな．．．」

ティアナ「カイクさんみたいに？」

カイク「ああ、シヤマル先生には話したんだが、実は俺はな．．．  
そう言つて、カイクは今度は自分の過去を話し始めた。

ティアナ「そ、そんなことをカイクさんが．．．」

カイク「嘘じゃないさ、今更否定しようがない、しかし、本当に生  
き残るために必死だったんだ、それでジークの奴とは仲が良かった、  
その時から俺は一人じゃないって思った、お前もパートナーがいる  
んなら一人で悩みよりもう一人と悩め。」

ティアナ「は、はいカイクさん！」

カイク「さてと、話終わつたしそろそろ、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ティアナ「ど、どうして変身するんですか？」

カイク「まだまだ、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「マジレンジャー！」

カイルはマジシャインに変身した。

カイル「ルーマ・ゴンガ！」

そう言うとティアナは拘束された。

ティアナ「か、カイルさんいつたい何を？」

その後カイルは何も言わずにティアナを気絶させた。

カイル「．．．休ませないとお前さんの師匠に怒られそうだしな．．．

．．．そこに誰がいるんだろう？」

そう言つて、木の陰から出てきたのなのはだった。

なのは「やっぱりばれちゃった。」

カイル「俺の話も聞いていたのか？」

なのは「．．．うん、悪いとは思つたけど．．．」

カイル「失望したか、伝説の力を使っている奴がこんな元殺し屋だったなんて．．．」

なのは「ううん、そんなことないよ始めてあつたときにカイルさんたちが住んでいた環境は聞いていたからね．．．」

カイル「．．．そうか、こいつは頼む、俺はデカベースに戻るから．．．」

なのは「うん、わかつたお休みなさい、カイルさん。」

カイル「ああ、お休み。」

そう言つて、気絶させたティアナをなのはに預けてデカベースに戻り、なのはもティアナを部屋に届けた後部屋に戻った。

そして数日後、この日は模擬戦の日であつた。

ジーク「．．．カイル、お前この前さ、ティアナに何かしたのか？

お前のことすげえ目で睨んでたぜ。」

カイル「．．．ちよつとな。」

この日、カイルとジークは模擬戦の見学に来ていた。

ヴィータ「なあ？今日のティアナとスバルの奴さ、ちよつと変じやないか？」

フェイト「そうね、いっただうしたのかしら？」

エリオ「スバルさん、ティアさんはいつたい？」

キャロ「いつもと違う・・・」

ジーク「おい、ありや危険すぎるぜ、戦い方が・・・」

カイル「（ちい、変な方向に頑張りやがったか！）」

その後、なのはに動きを押さえ込まれた二人であったが、ティアナは少し距離を置いた。

ティアナ「私は！もう誰も傷つけないから！失くしたくないから・・・」

スバル「ティア・・・」

ティアナ「強くなりたいんです！」

なのは「・・・少し、頭冷やそうか・・・クロスファイア・・・」

スバル「！」

ティアナ「ファントムブレイ・・・」

なのは「シユート」

ティアナ「！？」

スバル「ティア！」

スバルはすぐにティアナを助けに行こうとしたが、身体を拘束された。

スバル「こ、これは！？」

なのは「じつとして、よく見てなさい・・・」

そう言つて、なのははさらにティアナに一撃を与えようとしていた。

スバル「なのはさん！！！」

カイル「まずい！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

カイル「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「マジレンジャー！」

カイルは瞬時にマジシャインに変身した。

カイル「ジング・マジュナ！」

その後ティアナは撃墜されて模擬戦は終了した。そしてスバルは終始なのはを睨みつけていた。

その日の夜なのはカイムを呼び出した。

なのは「なんで、余計なことをしたんですか？」

そうなのはカイムが防御魔法を使ったことを知っていた。

なのは「私のやり方は．．．指導は間違っていたんですか!？」

カイムは静かに口を開いた。

カイム「．．．お前の教えは立派だ、基礎をしつかりやって怪我しないようにカリキュラムを組んでやっているの立派だ、それにバカは一度痛い目をみないとわからないからな．．．」

なのは「だったら．．．」

カイム「だがな、最後の一撃ははっきり言って、個人的な感情だ!」  
なのは「!?!」

カイム「お前はプロフェッショナルだろうが、俺も殺し屋という仕事をしていたからな、なおのこと感情的になって取り返しのつかないことになるだけは避けなきゃならない。」

なのは「．．．そうだね、ごめんなさい．．．」

カイム「．．．謝るな、俺が勝手にお節介をしただけだ．．．」

なのは「ねえ、カイムさん、私の昔話に付き合ってもらえますか？」

カイム「ああ、この前は俺の昔のことを聞かれたからいいぜ。」

その後、なのはは昔の自分のことを話し始めた。

カイム「．．．なるほどな、しかし、だったらなおのこと新人の連中にそれを話してやるのがいいと思うけどな．．．」

なのは「うん、カイムさん、明日みんなに話すよ。」

とその時、警報が鳴り響いた。

カイム「! 事件か!？」

なのは「行きましよう! カイムさん!」

そう言っつて、二人はヘリポートに向かった。

敵は新型のガジェットドローンの空の編隊が数体で、戦力分析が目的だろうということで今回はなのは、フェイト、ヴィータ、カイム、

ティア、護の6人が出撃することになった。

カイル「ジーク、留守を頼むぞ。」

ジーク「わかつてるって、それよりも妖魔が出たらこっちも出撃するからな。」

エリス「本当は私も行きたかったんだけど・・・」

フィオネ「仕方ありませんよ、もしもの時に戦力をこれ以上割くわけにはいきませんから・・・」

メルト「ティアもカイルをお願いね。」

ティア「はい、任せて下さい!」

凱「頼むぞ、護!」

護「任せてよ、凱兄ちゃん!」

命「気をつけてね、護君。」

華「護君・・・」

護「大丈夫だよ、華ちゃん、命姉ちゃん、僕だってもう立派なGGの隊員なんだから!」

なのは「それじゃ、みんな行って来るね。」

フェイト「みんなはロビーで出動待機ね。」

ヴィータ「そっこの指揮はシグナムだ、よろしく頼むぞ。」

スバル・エリオ・キャロ「はい!」

しかし、ティアナだけはシヨックが抜けてないの返答が無い、それ

を見たなのはは。

なのは「・・・それからティアナは待機から外れとこうか。」

ティアナ「!」

スバル・エリオ・キャロ「!」

ヴィータ「そうだな、その方がいいそうしとけ。」

ジーク「そんな調子でここにいられたらこっちの士気に関わるしな

・・・」

ティアナ「・・・言うことが聞けない奴は使えないってことですか?」

なのは「え?」

ティアナは震えるような声でなのはに言った。

なのは「．．．自分で言ってるわからない？．．．当たり前のことだよ。」

ティアナ「現場での指示や命令は聞いています．．．教導だってサボらずやってます、それ以外の場所での努力まで．．．」

それを聞いてヴィータが近づこうとしたが、なのはが止めた。

ティアナ「教えられた通りじゃないとだめなんですか？．．．私は！なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能もキャラや凱さんたちみたいなレアスキルもないし、カイルさん達みたいに伝説の英雄の力があるわけでもない．．．少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなるとなれないじゃないですか！」

その瞬間、ティアナはシグナムに殴り飛ばされた。

フェイト「シグナム！」

凱「シグナム！」

なのは「シグナムさん！」

シグナム「心配するな、加減はした．．．駄々をこねるバカはなまじ付き合ってるから付け上がる。」

ジーク「そうだな．．．少し頭を冷やした方が良いな．．．」

シグナム「ヴァイス、もう出られるな？」

ヴァイス「乗り込んでいただければすぐにでも。」

そう言っつて、出撃メンバーだけ乗り込み出発しようとした、その際なのはは

なのは「ティアナ、思いつめてるみたいだけど、戻ってきたらゆっくり話そう!？」

ヴィータ「だから、付き合うなつてのに!」

カイル「．．．ヴィータ、言わせてやれ。」

ヴィータ「か、カイルまで!」

フェイト「か、カイルさんがそんなこというなんて．．．」

カイル「以外か？」

フエイト「い、いえ、イメージ的にいいですか・・・」

ティア「うふふふ、カイルさんはこう見えてとっても優しい方なんですよ。」

カイル「ティア、うるさいぞ。」

そんな会話をしている中、ヘリは目的に向かって飛んでいった。

シグナム「目障りだ、甘ったれてないでさっさと部屋にもどれ。」  
ジーク「そうだな」

エリオ「シグナム副隊長、ジークさんもうその辺で・・・」

キャロ「スバルさん、とりあえずロビーに・・・」

その時、スバルが口を開いた。

スバル「シグナム副隊長！」

シグナム「何だ？」

スバル「・・・め、命令違反は絶対だめだし、さっきのティアの物言いとかが止められなかった私は確かにだめだったと思います・・・  
だけど・・・自分なりに強くなるうとするのとか！きつい状況でも何とかしようと頑張るのって、そんなにいけないことなんじゃないか!？」

シグナムは黙ってスバルの言葉を聞いた。

スバル「じ、自分なりの努力とか・・・そういうこともやっちゃいけないでしょうか!」

シャーリー「自主練習はいいことだし、強くなるための努力はすごくいいことだよ。」

エリオ「シャーリーさん!」

シグナム「持ち場はどうした?」

シャーリー「メインオペレーターはリン曹長や牧野先生がいますから・・・なんかもう、みんな不器用で見てられなくて・・・みんなロビーに集まって、ジークさんたちも私が説明するから、なのはさ  
んのことと教導の意味を・・・」

そう言って、全員ロビーに集められ過去のデータを見せながらシャ

「リーはなのは過去の過去を語り始めた。彼女が9歳の時に魔法と出会い、それから命がけの実戦を繰り返すようになったことを．．．ジーク「そうか．．．彼女も始めは何も無かったってことか．．．」  
「シャーリー」ええ、ごく普通の女の子でした。本当なら友達と一緒に学校に行つて、家族と一緒に暮らして、そういう一生を送るはずだったんだけど、魔法に出会ったことで．．．」  
「フィオネ」しかも、こんな小さい子供の身体が耐えられるわけも無い攻撃を何回も使っていたなんて．．．」

「シャマル」そして、私達が深く関わった、闇の書事件．．．」  
「シグナム」襲撃戦での撃墜未満。そして、敗北、それに打ち勝つために選んだのは、当時はまだ安全性が危うかったカートリッジシステムの使用、体への負担を無視して自身の力を引き出すフルドライブ、エクセリオンモード、誰かを救うため、自分の思いを通すための無茶をなのは続けた．．．」

「エリス」そうね．．．これだけの出力だと、どうあがいたってまだ身体が成長途中の子供が耐えられるわけ無い．．．」

「シャーリー」そして事故が起きたのは、入局して2年目の冬、任務の帰り、ヴィータちゃんや部隊の人達と出かけた場所、不意に現れた未確認体の襲撃、いつものなのはちゃんなら何の問題もなく、味方を守って落とせる相手だったはずなんですけど、溜まっていた疲労と続けてきた無茶が、なのはちゃんの動きをほんのちよつと鈍らせちゃったの、その結果が、これ．．．」

その後、なのはの包帯が巻かれた映像がモニターに映し出された。  
「メルト」ひ、ひどい．．．」  
「シャマル」なのはちゃん。「無茶して迷惑かけてごめんなさい」って私達の前では笑ってたけど、もう飛べなくなるかもしれないとか立って歩けなくなるかもしれないって聞かされて、どんな思いだったのか．．．」

「華」私もお見舞いに行つたことがあるからはつきり覚えてる、あんなに苦しそうななのはちゃんを見てると本当に切なくて．．．」

命「華ちゃん・・・」

シグナム「無茶をしても、命を懸けて勝たねばならぬ闘いの場は確かにある、だがお前がミスショットしたあの場面、仲間の安全や、命を懸けてもどうしても撃たねばならない状況だったか？」

凱「訓練中に身に着けた技は、本来は仲間を守り、自分を守り、そして大切なものを守るためにあるんだ。」

ジーク「それがわからずに使ってたんじゃ、宝の持ち腐れって奴だ・・・」

シャーリー「なのはさんさ、皆に自分と同じ思いをさせたくないんだよ、だから絶対無茶なんかしないように皆が絶対無茶なんかしないようにって・・・本当に丁寧に、一生懸命考えて教えてくれてるんだよ。」

それを聞いたフォワード陣は涙目になった。

ジーク「さて、それじゃ次はこれを見てくれるか？」

シャーリー「それは？」

そう言つて、ジークは映写機のようなものを出した。

ジーク「これはな、牧野先生が作った、レンジャーキーに残っている戦士の記憶を映像化してみることができるんだ、俺達は持った時に頭の中に入ってきたから良いんだけどよ、今回の一件でちよつと見てもらいたいものがあるんだ。」

そう言つて、ジークはデカレンジャーのレンジャーキーを取り出し差しこみ映像を出した。

その頃シャーリーたちが話をしている間、現場では

カイル「あれか？」

なのは「ええ、それじゃカイルさん、ティアさん、護君、お願いします。」

カイル「わかった、行くぞティア！」

ティア「はい、カイルさん！」

カイル・ティア「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」  
カイルム・ティア「豪快チエンジ！」  
モバイレーツ「ジェットマン！」  
モバイレーツ「ゴセイジャー！」  
護「アーマーセットアップ！」  
なのは・フェイト・ヴィータ「セットアップ！」  
そして、戦闘開始された。  
カイルム「ウイングガンクトレット！」  
ティア「スカイククシヨット！」  
なのは「クロスファイアシユート！」  
フェイト「プラズマスマツシャー！」  
ヴィータ「ラケーテンハンマー！」  
護「ウィルナイフ！」  
その後、6人の手により敵は一瞬で殲滅された。

その頃、残っているメンバーにデカレンジャーの過去の事件ファイルである「スンダーズ・ファミリー」の事件の記憶を見せていた。そこにはデカレッドことバンが宇宙一のスペシャルポリスになるという夢を抱きながら亡くなった少年の母親から頼まれて、息子の夢を叶えてほしいと手紙をもらって、張り切っていたが、そのマフィアのドンであるサノアを部下のゾータクに奪還されてしまった。その時、敵が使っていたのがあのエージエント・アブレラがマツスルギアというものを使ったがために急遽新装備である通称「スワットモード」の取得をボスであるドギー・クルーガーに命令されて、別の惑星である惑星カダに向かったが、その途中で敵の襲撃を受けたと思っただが、すべて教官の仕組んだテストでありその時にデカレンジャーの5人はボロクソに言われたが、その後、訓練を受けることになり、バンは先走った行動が目立ち、その中でブンター教官から宇宙一のスペシャルポリスの条件は「宇宙一のスペシャルポリスになるための答えがあるとしたら、お前のようなヤツの決して見え

ないところにある」と言われ、バンは考えるようになり、最後の訓練で仲間のセンちゃんを撃たれ、ウメコも体力の限界になり、ホージーとジャスミンはバンに先に行かせ、目的のものを手に入れようとした瞬間、バンは自分が仲間を見ようとしなかったことに気が付き、バンは仲間の元へ戻った、その時、ブンター教官から制限時間がとつくに過ぎていたことを指摘され、バンに一人だけなら間に合ったはずだと言われた時、バンは「答えが見つかったからです。宇宙一のスペシャルポリスとは、宇宙一のチームの一員のことです。その答えを聞いてブンター教官はスワットモードを認めた。メルト「ティアナ、何か感じるものがあった?」ティアナ「宇宙一のチームの一員になること・・・」シグナム「そう、お前達は今はチームの一人だ、強くなるには一人だけではだめだということだ。」

なのは「にはははは、なんか面白いもの見ているね?」  
シャーリー「なのはさん!?!」  
ジーク「もう終わったのか?」  
カイル「ああ、雑魚だけだったしな。」  
フェイト「そしたら、こんなものを見てるんだもの・・・」  
ヴィータ「おもしれえ、続きを見せてもらっじゃんか。」  
ジーク「ああ、わかった。」

そう言っつて、ジークは続きを再生させた。

その後、ボスとデカブレイクことテツがつかまり、その二人を助けるため5人は地球へ帰還し、見事に新装備とチームワークでボスとテツを助け出した。その時、サノアとゾータクの二人に対して、バンが言い放った。

バン「チームは命令したりされたりじゃない!全員で動くから、すごい事が出来るんだ!」  
フォワード陣「!!」「!!」

なのは「いい言葉だね。」  
シャマル「そうね、みんながいるから不可能なことでもできてしま

うそれがチームなのよ。」

シグナム「そうだ、そして、だからこそ強くなれる。」

ヴィータ「わかったか？お前ら。」

フォワード陣「は、はい！」「」

その後、バンはみんなで宇宙一のスペシャルポリスになることを誓い合った。

そしてこの映像の後、なのはとティアナはちょっとお話をし、ようやくティアナとなのはは気持ちの整理がすんだ、その後、なのはに付き添ってもらってカイクムに話をした。

カイクム「．．．なんだ、ティアナ？」

ティアナ「あ．．．あのカイクムさん、この前はすみませんでした！それと今日防御魔法を張ってくれてありがとうございます！」

カイクム「別に俺の気まぐれだ、それに言ったただろう俺はお人好しなところがあるって、まあ、今度自主練がしたいのなら、俺が付き合っただけでもいいぞ、もっとも訓練や任務に支障が出ない程度だけだな。」

ティアナ「は、はい！ありがとうございますカイクムさん！」

カイクム「それでいいかな、高町教官殿？」

なのは「にはははは、その呼び方はくすぐったいです、いつもどおりでいいですよ、それじゃ今度から定期的にカイクムさんたちにも訓練を手伝ってもらってもいいですか？」

カイクム「．．．ああ、俺の訓練にもなるしな。」

なのは「私からも礼を言わせてください、ありがとうございます。」

カイクム「だからいいっての．．．まあ、どういたしまして．．．」  
そう言って、ティアナの一件は無事終了した。

## 第11話 何のための強さ（後書き）

どうも、今回はデカレンジャーのスイットモードの話を入れました、この言葉を聞きますと本当に何のためにチームがあるのかを考えさせられます、さて、今回は休日の話を入れたいと思いますのでどうぞ次回またよろしくお願いします。

## 第12話 戦士達の休息と謎の少女(前書き)

どうも、今回は前に紹介した新兵器が登場します、さらにアスラとバディンの2体の上級妖魔との戦闘もありますのでよろしくお願ひします。

## 第12話 戦士達の休息と謎の少女

前のなのはの過去が明らかになった出来事から数日が経過した、あの一件をきっかけにティアナを始めとした新人フォワードが前より動きに磨きがかかってきた。

そして、訓練の第2段階終了となり、フォワードの4人は特別休暇が出ることになった。

カイク「．．．そうか、あいつらは休みか．．．」

ティア「カイクさん、私たちもお休みしませんか？」

エリス「そうね、妖魔やガジェットが出ない限りフリーなんだしね。」

メルト「それにお金は管理局と地球の国連からもらっているから余裕でしょう？」

そう、このメンバーは管理局と地球の国連の特別部隊という扱いで結構な額をもらっていた。

フィオネ「そうですね、ここで休みを取ったらよろしいのではないのでしょうか？」

ジーク「．．．そうだな、よし、休みを取るか！．．．と言いたいところだが、俺とカイクは残るからお前らだけで行って来い。」

メルト「どうして？」

カイク「新兵器の改良が済んだからな、その実験だ。」

そう獅子王博士達が来て、ゴーカイデリンガー、ゴーカイストリーマーの発射時の衝撃の改良が完了して、実践テストをすることになっていた。

フィオネ「そうですか．．．」

ジーク「だから、お前らだけで行って来い。」

凱「そうだな、護と華ちゃんも一緒に非番だから道案内に二人をつけるからゆっくりしてくれば良いさ。」

ティア「．．．そうですね、カイクさんがいないのは残念ですけど．

「. . .」  
エリス「今回は、私達だけで行つて来るわ。」  
メルト「でも、お土産買つてくるから。」

ファイオネ「それじゃ行つて来ます。」  
カイク「あ、そうだちよつとまで、ティアこいつも一緒に連れて行つてくれないか？」

そう言つて、マジランプをティアに渡した。  
ティア「スモーキーを？」

カイク「ああ、こいつも遊びたいだろうからな、ただし、悪さしたら懲らしめてやつてくれ。」

スモーキー「だ、旦那、そんなおいらは昔とは違つぜ。」

ティア「わかりました、そうなつたら容赦しません。」

スモーキー「. . . おいらつて、信用されてないのか. . .」

メルト「違つわよ、一応念のためつてことよ。」

ティア「それじゃ改めて行つて来ます。」

カイク「ああ」

ジーク「行つて来い。」

そう言つて、ゴーカイジャーの女メンバーと護、華、スモーキーは出かけていった。

その後、カイクとジークは訓練場に行った。

牧野「すみませんね、こんなことまで. . .」

はやて「うちらは、かまいまへんよ、それに私も見てみたいし. . .」

「. . .」  
なのは「どれくらい威力なんだろうね新兵器つて？」

フェイト「そうだね、今後の戦力アップにも関わつてくるからね. . .」

「. . .」  
シャーリー「大丈夫ですよ、この私も協力したんですから. . .」

獅子王博士「そうだと、僕も最後の仕上げをしたんだから、想像以上の威力になっているさ。」

凱「それじゃ、とくと見せてもらおうか。」

猿頭寺「それじゃ、二人とも始めてください、まずはジークさんの  
ゴーカイキャリバーとゴーカイストリーマーからです。」

ジーク「了解！行くぜ、ゴーカイキャリバー！レーザーソード！」  
そして、訓練用のガジェットを一撃で真つ二つし、さらにレーザー  
ガンモードに切り替えて、目標を見事に一撃で粉碎した。

パピヨン「はい、OKです、ジークさん、次はゴーカイストリーマ  
ーを……。」

ジーク「おう、ゴーカイストリーマー！スピナーモード！」

ジークはドリル、マニピュレーター、パワーアームモードを使用し、  
性能どおりの動きをしている。

牧野「さて、ここまででは予定通りですね。」

猿頭寺「問題は……。」

パピヨン「マキシムモードですね……。」

シャーリー「それじゃ、ジークさんマキシムモードに移行してくだ  
さい。」

ジーク「了解！ゴーカイキャリバージョイント！レンジャーキーセ  
ット！」

ゴーカイストリーマー「マキシムモード！」

ジーク「マキシムモード！行くぜ！」

そう言つて、目標の訓練用ガジェット100体に向かって、エネル  
ギー弾が放たれた、そしてなんとわずか5秒で殲滅した。

なのは「う、嘘……。」

フェイト「わずか5秒で……。」

はやて「なんちゆう武器や……は！シャーリー、使用者にかかる  
負担はどれくらいや？」

シャーリー「発射終了時、最大15Gです。」

凱「そ、そんなにあるのか!?!」

獅子王博士「仕方が無いさ、これでも10G下げたんだから……」  
牧野「ジーク君、どうですか身体に変化はありますか。」

ジーク「ああ、そんなに変化ねえな、これくらいなら．．．」  
パピヨン「どうやら、ジークさんたちなら普通に使う分なら問題ないですね。」

猿頭寺「そうだね、パピヨン、しかし、次の問題はゴークイデリンガーだ。」

シャーリー「それじゃ、カイクさん、ゴークイデリンガーを．．．」

カイク「ああ、ゴークイデリンガーサブマシンガンモード！」

そして、試験用ガジェットを一気に殲滅した。

牧野「それではカイクさん、次はファイナルキャノンモードを．．．

」

カイク「了解、エネルギーチャージ！」

そう言つて、エネルギーをチャージし始めた。

カイク「ゴークイデリンガー、ファイナルキャノン！」

目標の試験用ガジェット100体が一撃のもとにすべて破壊された。

命「すごい．．．それで、猿頭寺オペレーター、今の負担は？」

猿頭寺「先ほどと同じ15Gですね．．．」

はやて「そして、問題はここからや．．．」

なのは「ファイナルウェーブモード．．．」

フェイト「うん．．．どれだけの負担が生じるのか．．．」

みんなの心配をよそにカイクはセットアップを始めた。

カイク「レンジャーキーセット！ゴークイガンセット！」

ゴークイデリンガー「ファイナルウェーブ！」

カイク「ゴークイデリンガー、ファイナルウェーブ！」

その瞬間、カイクの身体は後ろに下がり、目標になっていた、試験

用ガジェット200体は跡形も無く破壊された。

カイク「ぐ．．．」

ジーク「カイク！大丈夫か？」

カイク「ああ、大丈夫だ、少し反動が強かつたらしい．．．」

はやて「シャーリー！今のはどれくらいや？」

シャーリー「．．．反動数値25Gですね．．．」

なのは「そ、そんなに!?!」

フェイト「大丈夫なんですか、カイクさん!」

カイク「ああ、少し堪えたがな、しかし、一度の出撃にこれは何発も使えないってことだな...」

ジーク「そうだな、とりあえず一度の出撃につき一発限定ってことにしとくか。」

はやて「せやね、これだけ威力が強いと正直あぶないわ。」

獅子王「しかし、この新兵器をこんなに早く使いこなすとはさすがだね君たちは...」

こうして、新兵器実験は成功し、ここにいるメンバーはその後つかの間の休息を取った。

そして、街に出かけたメンバーは護と華に道案内してもらい各地を巡っていた。

ティア「本当に、すごいですねここは。」

エリス「ここに来る前にいろいろと知っておかなかったら大変だったわね。」

護「そういえば皆さんはこことは全然違うところに住んでいたんですよね?」

メルト「ええ、今の知識から言うのなら中世に近いくらいだったわね。」

フィオネ「そうですね、しかし、それでも生活できましたからね。」

華「そうだったんですか...」

そんな話をしているとティアナとスバルが歩いてきた。

ティアナ「皆さん!」

スバル「皆さんも街へ遊びに?」

メルト「ええ、そうよ。」

ティアナ「あれ?カイクさんたちは?」

ティア「カイクさんとジークさんは新兵器の実験で残ったんです。スバル「そうだったんですか...」

フィオネ「ところで、お二人が持っているそれは？」

スバル「ああ、これは私のお気に入りのおアイスクリームですよ、あそここの店にあるんで皆さんもどうですか？」

エリス「そうね、いただいてこようかしら。」

そう言つて、みんなでアイスクリームを買つてそれを食べていた（ちなみにスモーキーの分もティアが買つてあげた。）

スモーキー「いや、うめえニヤこれ。」

ティアナ「あんたつて、本当に変わった猫ね。」

スモーキー「ただの猫じゃニヤい、俺は魔法猫だつての。」

スバル「へえ、てことは魔法が使えるんだ？」

スモーキー「おうよ、とは言つても今の旦那からはあんまりむやみやたらに力を使うなつて言われてるしな・・・」

メルト「仕方が無いわよ、目立つと私達が戦いにくくなるからね・・・」

「」

ティアナ「そうそう、皆さん今日のニューズ見ました？」

フィオネ「ニューズですか？」

護「あのレジアス中将の演説？」

スバル「そうそう、あの人はね、時空管理局地上本部の総司令で古くから武闘派だから、いま防衛に必要なのは質量兵器の大量投入だつて、言つてたよね。」

華「言つてましたね・・・それにあの人つて機動六課やうちのGGGが好きではないですしね。」

ティア「そうなんですか？」

ティアナ「ええ、おそらくあなた達のことあまり快く思つてないと思つんです。」

フィオネ「おそらく、一気に敵を殲滅することに手っ取り早い方法を考えているんでしょう。」

メルト「そのために、少数精鋭の部隊よりも効率がいい質量兵器の方がいいつて考えなんでしょうね。」

護「でも、そんなの関係ないよ僕達は僕達のなすべきことをやるだ

けだよ。」

エリス「・・・そうね、護の言うとおりね。」

メルト「こんな子供教えられるなんて・・・」

フィオネ「私達もまだまだですね。」

ティア「ありがとう護君。」

ティアナ「護さん・・・」

スバル「やっぱり勇者は違うな。」

そんな話をしているとき突然、エリオからの全体通信が入った。

キャロ「こちらライトニング4緊急事態につき、現場状況を報告します、サードアベインF23の路地裏でレリックと思わしきケースを発見し、ケースを持っていたらしき女の子が一人を発見しました。指示をお願いします。」

それ聞いたなのはとフェイトはすぐに指示を出した。

なのは「スバル、ティアナ、ごめんお休みは一旦中断。」

スバル・ティアナ「はい!」

フェイト「救急の手配はこっちです、二人はそのままその子とケ

ースの保護、応急手当をしてあげて。」

エリオ・キャロ「はい!」

メルト「私達も行くわよ。」

3人「了解!」

はやて「全員待機体勢。席を外している子達は配置に戻ってなあ、安全確実に保護するよ。レリックもそしてその女の子もや。」

それを聞いた全メンバーはすぐさま持ち場に帰り、カイクとジークもなのはたちと一緒に現場に向かった。凱は万が一のため残ることになった。

そして、カイクたちが現場に到着した時には、すでに先に来ていたスバル、ティアナ、ティアたちが合流していて、フォワード陣と現状確認をした。

ジーク「なるほど・・・この子はこの下水道を通過してここまで来た

っていうことか．．．」

カイル「しかし、気になるのはケースがもう一つあってそのうち一つしかないってことだな．．．」

シャマル「バイタルは安定してるわね、危険な反応はないし、心配ないわ。」

ティア「そうですか．．．」

エリス「だから言ったでしょ、これでも一応医者なんだから。」

なのは「でも本当エリスさんがいてくれたおかげで応急処置がスムーズになつて本当に良かったよ。」

フェイト「それより、ごめんねせつかくのお休みを．．．」

エリオ「い、いえ。」

キャロ「平気です。」

なのは「とりあえず、ケースとこの女の子はそのままへりで搬送するから、みんなはこのまま現場調査ね。」

フォワード陣「．．．はい！」「．．．」

シャマル「あとカイルさんも一応同乗をお願いします。」

カイル「わかった、その方がいいだろう方がーに備えて保険はいた方が良くからな．．．エリス、ティアお前達もだ。」

ティア「はい！」

エリス「ええ、わかったわ。」

カイル「それじゃ、ジーク、メルト、フィオネ後は頼む。」

ジーク「わかったぜ。」

メルト「こつちは任せて。」

フィオネ「早くその子を．．．」

カイル「わかった．．．」

そう言つて、カイルはその女の子を抱きかかえてへりまで運んだ。

そして、その直後ガジェット反応が急激に増大した。

ジーク「早速来やがったか、行くぜ！」

3人「．．．豪快チェンジ！！」「．．．」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ティアナ「さて、みんな！短い休みを堪能したわね！」

スバル「お仕事モードに切り替えて、しっかり気合い入れていこう

！」

エリオ・キャロ「はい！」

フォワード陣「セツトアップ！」

護「アーマーセツトアップ！」

全員チェンジして、レリック探索に乗り出した。

なのはとフェイトも空のガジェットを倒すためセツトアップして向かっていった、さらに別の演習に参加していたヴィータも戻ってきた。

へりには今、カイク、ティア、エリス、シャマル、ヴァイス、保護した女の子が乗り込んでいる状態だった。

とあるビルの上

ウーノ「へりに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。

ルーテシア「お嬢様は地下の方に」

ルーテシア「うん」

ウーノ「騎士ゼストとアギト様は？」

ルーテシア「別行動」

ウーノ「お一人ですか？」

ルーテシア「一人じゃない．．．私にはガリユールがいる。」

ウーノ「．．．失礼しました、協力が必要なからお申し付けください、

最優勢で実行します。」

そうルーテシアが頷き、通信が切れた。

ルーテシア「行こうか、ガリユール．．．探しもの見つげるために．．．

。」

ジークとフォワード陣たちは地下水路をたどり、レリックを探索していた、さらに通信で途中スバルの姉が合流するという連絡も受け

た。

メルト「へえ、あなたにお姉さんがいたの？」

スバル「そうなんです。私と同じ魔導師なんです、しかも、私のシ  
ューティングアーツの師匠で歳も階級も二つ上なんですよ！」

フィオネ「そうですか、ぜひともお会いしたいですね。」

そんなことを言っているそばから、スバルの姉ギンガ・ナカジマが  
現れた。

スバル「ギン姉！」

ティアナ「ギンガさん！」

ギンガ「ここまでのガジェットは全部叩いてきたと思うから・・・  
うん？そちらの方は？」

ジーク「あなたがスバルの姉か、俺はジーク、ゴーカイレッドだ。」

フィオネ「私はフィオネ、ゴーカイブルーです。」

メルト「私がメルト、ゴーカイイエローね。」

護「そして僕が天海護、GGG機動部隊副隊長。」

ギンガ「そうか、あなた達があの噂の海賊戦隊ゴーカイジャーの方  
々とGGGの若き副隊長さん。お会いできて光栄です、それでは一  
緒にケースを探しましょう。」

ジーク「ああ、わかつてる。」

その頃、カイムはヘリの中で、シャマルに聞いた。

カイム「・・・シャマル先生、この子は人間じゃないんだろう？」

ティア・エリス「！？」

シャマル「・・・どうしてそう思われたのですか？」

カイム「・・・ティアも普通の人間じゃないってのは前に話したと  
思うが、それでなんとなくわかるんだ俺には・・・」

シャマル「・・・確証はありませんが、おそらくこの子は、人造魔  
導師の素材として生み出されたのではないかと思えます。」

カイム「人造魔導師！？」

ティア「なんですか、それは？」

そう言つて、シャマルは3人に詳しく説明した。

カイク「．．．なるほど、この世界にはそんな人工的に命を作り出す技術があつたのか．．．」

シャマル「ええ、しかし、それはすでに禁止されていて、それを使うのは気の狂つた人ぐらいで．．．」

エリス「．．．許せないわね．．．」

ティア「本当です、命を何だと思つているのでしょうか．．．」  
それを聞いた二人はかなり腹が立っていた。

カイク「（たとえ、この子が作られた存在であっても必ず守つてみせる、もう俺は誰かを殺すのではなく誰かを守るようになりたいからな．．．）」

そうカイクは心に誓い、この子の髪をそつと撫でた。

そして、海上では敵の数が多く凱がGガオガイガーで出撃し、敵を粉碎していた。

凱「ボルテイングドライバー！」

とその時、別の巨大ロボットが数体出現した。

凱「な、なんだこれは!？」

それはアブレラがジェルに渡した怪重機だった。

アブレラ「これで少しは時間稼ぎができる．．．」

さらに空の敵が多く、フェイトとなのはも苦戦を強いられた。

その状況を見かねてとうとうはやてもクロノとカリムに限定解除を頼み敵を殲滅に取り掛かった。

はやて「よし、久しぶりの遠距離広域魔法．．．いつてみようか！」

そして、地下では

ジーク「よし、これで雑魚は片付いたか、ケースまで後どのくらいだ？」

キャロ「はい、ケースの推定位置までもうすぐです。」

メルト「よし、行きましようー！」

そして、広い空間に出た。

フィオネ「ここにあるですか？」

キャラ「はい！たしかにここから反応があります。」

ジーク「よし、俺に任せろ！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ボウケンジャー！」

ギンガ「．．．本当に多彩な変身ね．．．」

ジーク「アクセルラー、サーチモード！．．．見つけた、これだ！」

ジークはボウケンジャーの力を使って見つけ、そのケースをキャラ口に渡した

その時、何かが近づいてきた。

メルト「な、何！？」

次の瞬間、キャラが敵の攻撃の衝撃で吹き飛ばされた。

そして、エリオはキャラを守るためにストラダで攻撃を仕掛けたが、弾き飛ばされて、頬にかすり傷を負った。

エリオ「くっ．．．」

キャラ「エリオ君！」

その瞬間、ケースを持った少女ルーテシアが現れた。

そして、お構い無しに魔法をぶつ放してきた。それを受けてエリオとキャラが吹き飛ばされた。

ジーク「てめえ！」

そう言つて、ジークはゴーカイスーベルでルーテシアに向かっていったが、ガリユーが盾になった。

ジーク「邪魔だ！」

ゴーカイスーベル「ファイナルウェーブ！」

ジーク「くらえ！ゴーカイスラッシュ！」

直撃させることができなかったが、いまの一撃でガリユーの肩の部分が少し損傷した。

ルーテシア「ガリユー．．．！」

その時、上から声が聞こえてきた。

アギト「たく、アタシ達に黙って勝手に出かけちゃったりするから

だぞ、ルーラーもガリユーム、もう本当に心配したんだからな？」  
フィオネ「誰です!？」

アギト「ま、もう大丈夫だぞルーラー、何しろこのアタシ烈火の劍精!アギト様が来たからな!」

メルト「な、なんのなのあれ?」

スバル「さ、さあ...?」

アギト「さあお前らまとめて!かかって来いや!」

それを聞いたジークは不敵な笑みを浮かべた。

ジーク「上等だ!行くぜ!」

3人「「「豪快チエンジ!」」」

モバイレーツ「フラッシュユマン!」

アギト「な、なんなんだよこいつら?」

ルーテシア「...これが、ドクターが言ってた伝説の英雄の力...」

「」

アギト「まじ!?!?てことはこいつらが噂のゴークイジャーって奴か!?!」

ジーク「俺はあの化け物をやる、二人はあの小さい奴を頼む。」

メルト・フィオネ「「了解!」」

アギト「小さいって言うな!」

ジーク「行くぜ!プリズム聖劍!はあ!」

ジークはプリズム聖劍でガリユームと接近戦を繰り広げている。

アギト「はあ!ふん!」

アギトは炎をメルトとフィオネに向かって飛ばしてきた。

メルト「プリズムバトン!スノーフリーズ!」

フィオネ「プリズムボール!ハリケーンボルト!」

アギト「ぐあああ!な、なんなんだよこいつらは滅茶苦茶強えじゃねえか!」

ジーク「これで決める、プリズム聖劍...ファイヤーサンダー!」

その時、アギトの腕に致命傷を負わせた。その間にルーテシアに向かってスバル、ティアナ、ギンガが詰め寄りケースを奪還すること

に成功する。

アギト「し、しまった!？」

ジーク「よし!よくやったぞお前ら!」

スバル「えへへへ、ジークさんたちのおかげです。」

ティアナ「ジークさんたちがあいつらをひきつけてくれたおかげですよ。」

ギンガ「こちらのケースは確保しました。」

アギト「まずい、ルーラー引き上げるよ。」

ルーテシア「でも、ケースが．．．」

アギト「あのゴーカイジャーって奴らただもんじゃねえよ、今は一旦引き上げてからだ。」

そう言つて、ルーテシアたちは引き上げた。

その後、全員で地上に脱出し、ヴィータ、リインと合流した。

その前にティアナとキャロが何かしていたことにジークたちは気付かなかつた。

そして、地上に出た瞬間、ルーテシア達に再度遭遇し、ヴィータとリインの協力もあつて二人を拘束した。

ヴィータ「．．．子供をいじめてるみてえでいい気分しねえが、市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他モロモロで逮捕する。」

ジーク「やれやれ、ようやく鬼ごっこは終わりだな。」

その頃とあるビル of 廃墟の屋上

クアットロ「デイエチちゃん。ちゃんと見えてる?」

デイエチ「ああ遮蔽物もないし、空気も澄んでる．．．よく見える。」

「  
デイエチと呼ばれた少女がそう言つてみているのはカイクたちが乗っている機動六課のヘリだった。」

「  
デイエチ「でもいいのか?クアットロ、撃っちゃって?ケースは残せるだろうけどマテリアルとゴーカイジャーって奴らも破壊しちゃ

うことになる。」

クアットロ「うふふ、ドクターとウーノ姉様曰くあのマテリアルが当たりなら、本当に聖王の器なら、砲撃ぐらいじゃ死なないって、それにゴーカイジャーの方は最悪の場合は変身に必要なものさえあればいいってさ。」

デイエチ「ふ〜ん」

そう説明が終わるとデイエチは布に包まれていた狙撃砲を出し、それをヘリに向けてロックした。その時、ウーノから通信が入った。

ウーノ「クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギトが掴まったわ。」

クアットロ「ああ、そういえば例のチビ騎士と下にいたゴーカイジャーの連中に掴まってましたね。」

ウーノ「今はセインが様子を窺っているけど・・・」

クアットロ「フォーローします?」

ウーノ「お願い」

そう言うとウーノは通信を切った。そして、クアットロはセインに通信を入れた。

クアットロ「セインちゃん?」

セイン「あいよ、クア姉。」

クアットロ「こっちから指示を出すわ、お姉さまの言つとおりに動いてね?」

セイン「ん〜、了解。」

そして、クアットロはルーテシアに通信を入れた。

クアットロ「はい、ルーお嬢様?」

ルーテシア「(クアットロ・・・)」

クアットロ「(なにやらピンチのようで、お邪魔でなければクアットロがお手伝いします。)」

ルーテシア「(・・・お願い。)」

クアットロ「(はい、それじゃお嬢様、クアットロの言つとおり  
の言葉をその赤い騎士に・・・)」

そして、上空でははやての力もあってようやく敵をあらかた殲滅した、そしてなのはとフェイトがヘリに近づこうとしていた。

なのは「見えた！」

フェイト「よかった、ヘリは無事・・・」

その時、なのはとフェイトは何かに気付いた。

なのは・フェイト「！！！」

異変に気付いた二人は急いでヘリに向かおうとするが

バディン「おっと、ここから先は行かせるわけには行かないぜ。」

なのは「あ、あなたたちは、たしか！」

フェイト「妖魔の三巨頭のアスラとバディン！」

アスラ「我々の名前を覚えていてくれるとは光栄だよ、S級魔導師

殿。」

なのは・フェイト「くっ・・・」

なのはとフェイトの前にこの二人が立ちはだかった。

遠くにいたはやても気付いた。

はやて「！！！」

ロングアーチのメンバーが気付いた時にはすでにエネルギーチャ

ジが始まっていた。

シャーリー「物理破壊型、推定Sランク！」

地上

ルーテシアがクアットロの言うとおりの言葉を言い始めた。

ルーテシア「逮捕はいいけど・・・」

全員「っん!?」「」

ルーテシア「大事なヘリは、放っておいていいの?」

全員「っ!!」「」

クアットロ「(あゝ、お嬢様、もう一言追加いいですか?)」

ルーテシア「あなたは・・・」

ヴィータ「ん?」

ルーテシア「また、守れないかもね・・・」

ヴィータ「!!」

その瞬間、ヘリに向かってSクラス砲撃が直撃した。

ジーク「カイクム!!」

フィオネ「エリスさん!ティアさん!」

メルト「う、嘘...」

ティアナ「そ、そんな...」

スバル「か、カイクムさんやシャマル先生達が...」

ヴィータ「てめえ!」

ヴィータは我を忘れてルーテシアに掴みかかった。

スバル「ヴィータ副隊長!落ち着いて!」

ヴィータ「うるせえ!おい、仲間がいるのか、どこにいる?言え!

答える!」

その直後、エリオの後ろから奇妙なのが近づいているのにジークが気付いた。

ジーク「エリオ!後ろだ!」

エリオ「え!?!」

その瞬間、地面から何かが出てきてエリオからケースを奪っていった。

エリオ「うわあ!」

メルト「エリオ君!」

ギンガ「大丈夫!?!」

セイン「いただき!」

フィオネ「し、しまった!?!」

ジーク「くそ!」

ティアナとジークがそれぞれ発砲したが、地面に消えて、その後ジーク、ヴィータ、ティアナはその場を少し離れた。

セイン「(ルーお嬢様、ナンバーズ6番セインです、私のISディープダイバーにてお助けします、フィールドとバリアをオフにして、じっとしてくださいね?)」

そう言われ、ルーテシアは静かに頷いた。

その瞬間、地面からセインが現れてルーテシアを連れて行った。  
ヴィータ「！こ、こいつ！」

ジーク「逃がすか！」

しかし、時すでに遅く逃げられてしまった、さらに今の騒ぎでリインが拘束していたアギトも逃げていった。

キャロ「あ、あのロストです．．．」

ヴィータ「くそ！」

ジーク「．．．俺としたことが．．．」

クアットロ「うふふのふ、どうこの完璧な計画は？」

デイエチ「黙って、いま命中確認中．．．あれ？まだ飛んでる！？」

クアットロ「ど、どういうこと！？」

へりはたしかに飛んでいた。

シャマル「こちらシャマル、カイルさんがとつさに飛び出して下さったおかげで無事です。」

シャーリー「ほ、本当ですか！？よかった．．．うん？何この測定数値は、け、計測不可能！？」

はやて「な、なんやて！？」

クアットロ「いったいどうなってるの！？」

デイエチ「！！あれは、なんだ！？」

そこには赤い鎧を着た一人の男が宙を浮いていた。

カイル「ふう、まさか、これを使う羽目になるとはな．．．」

そして、その手には先ほど受けた砲撃のエネルギーの塊があった。

クアットロ「う、嘘！？」

デイエチ「ば、馬鹿な、こっちもフルパワーじゃなかったけどあれを受け止めたというのか！？」

それを遠くで見ていたなのはとフェイトも啞然としていた。

なのは「す、すごい．．．」

フェイト「あ、あの姿はいつたい？」

姿を見たアスラとバディンはかなり驚いた表情を浮かべた。

アスラ「あ、あれは!？」

バディン「ま、まさか!？」

カイク「なのは、フェイト避ける!」

そう言つて、フェイトとなのはを回避させた後に先ほど受け止めたエネルギーをアスラとバディンに向けて飛ばした。

アスラ「くっ．．．」

バディン「あぶねえぜ、き、貴様、その姿は．．．」

アスラとバディンはかわしたがその先にいた敵の大群は全て消滅した。

フェイトとなのははカイクに近寄つた。

フェイト「す、すごい、カイクさん．．．」

なのは「あ、あのカイクさん．．．その姿は？」

カイク「．．．これか?これは、猛る烈火のエレメント、天空勇者ウルザードファイヤー!」

それを遠くで見っていたはやたとシャーリーも啞然としていた。

はやと「天空勇者．．．」

シャーリー「ウルザードファイヤー．．．」

ディエチ「な、何なんだよ、あのとてつもない化け物みたいな奴はさ!」

カイク「．．．なのは、フェイトあの二人は俺がやる、二人はこんなふざけたことをした奴を捕まえてくれ。」

なのは「うん、わかつた!」

フェイト「カイクさんも気をつけて．．．」

カイク「．．．ああ、わかつてるありがとう．．．」

そう言つて、二人はクアットロ、ディエチの方に向かった。

カイク「さて、始めようか?」

カイクはアスラとバディンに向き合った。

カイク「．．．さてと、貴様らが出てきたってことは、はやてたちが言っていたあのジェイル・スカリエツティに協力しているってことか．．．」

アスラ「ふん、そうだがそれを知って何になる？」

バディン「なぜなら、お前はここで消えてもらうからな！」

カイク「．．．アスラならともかく、お前のよ力だけのようなバカにやられる俺じゃない．．．」

バディン「な、なんだと貴様！」

そう言つて、バディンはカイクに自分の拳を叩き込もうとしたが、カイクはそれを軽々と受け止めた。

アスラ「（こ、これは、まさか、こいつはこの力を制御しているのか？）」

カイク「ふん！」

カイクはそのままバディンを斬りつけた。

バディン「ぐああ！」

バディンは吹き飛ばされた。

アスラ「バディン！おのれ、貴様！」

カイク「マジ・ゴル・ジー・マジカ．．．」

カイクがそう唱えると剣は巨大な炎纏った

カイク「ブレイジングストームスラッシュ！」

アスラ「バディン！ぐあああ！」

その一撃で二人はかなりのダメージを受けた、その時ルシフェルが現れた。

カイク「ルシフェル！」

ルシフェル「二人とも退け！お前達のダメージは相当なものだ。」

アスラ「やむ終えまい．．．」

バディン「次は必ず、貴様を殺す！」

そう言つて、3人は撤退した、その後カイクは近くのビルに降り立ち、ゴーカイキングに戻り、なのはとフェイトたちと合流した。

なのは「ごめん、カイクさん、犯人には逃げられちゃった．．．」

カイク「気にするな、とりあえず敵は追っ払ったからよしとしよう．

．．．」

フェイト「ええ、とりあえず下のヴィータやフォワード陣たちと連

絡を取りましようか・・・」

下のメンバーはヘリが無事なことにほっとした後、ヴィータははやてたちに報告をしていた。

ヴィータ「・・・こちらは最悪だ。召喚士一味には逃げられるしケースも持つて行かれちゃった、逃走経路もつかめねえ・・・」

スバル「あの、ヴィータ副隊長・・・」

スバルが何かを言おうとした時、ヴィータにグラーフアイゼンを突きつけられた。そして再び報告に戻った。

ヴィータ「・・・ああ、フォワード陣とジークたちはベストだった、今回は完全にあたしの失態だ・・・」

リン「リンもです・・・」

ティアナ「あの、副隊長・・・」

ヴィータ「なんだよ！報告中だぞ！」

ティアナ「あの、ずっと緊迫していたので切り出すタイミングが無かったんですけど・・・レリックには私達でちよっと・・・」

スバル「工夫してまして・・・」

ヴィータ「？」

スバル「ティアナ「ははは・・・」」

その後、逃走中のナンバーズのメンバーはケースの中身が無いことに気付いた。

そして、ティアナたちが種明かしをしていた。

ティアナ「・・・ケースはシルエットではなく本物でした、あたしのシルエットって衝撃に弱いんで、奪われた時点でバレちゃいますから・・・」

キャロ「・・・なので、ケースを開封して、レリック本体に嚴重な封印をかけて・・・」

スバル「その中身は・・・」

そう言つて、スバルはキャロの帽子を取った、すると花が咲いたようなヘアバンドが出てきた。

ジーク「こ、これは？」

ティアナ「こんな感じで・・・」

そう言っつて、ティアナが指を鳴らすとなんとヘアバンドがレリックに変わった。

エリオ「・・・敵との直接接触が一番少ない、キャロに持っつてもらおうつて・・・」

そう言われて、ヴィータ、ジーク、フィオネ、メルトは呆気に取られたような顔をして、リインはそれ聞いて感心していた。

その後、街の被害は相当なものだったが、何とか事件は終了した。

その後、カイクとティアはなのはと一緒に保護した女の子を聖王医療院へ連れて行き、女の子の様子を見ていた。

カイク「・・・よく眠っているな・・・」

ティア「そうですね・・・」

少女「うん・・・パパ・・・ママ・・・」

なのは「カイクさん、これを・・・」

そう言っつて、なのははカイクにウサギのぬいぐるみ渡した、それを受け取りカイクはその子の傍にそつと置いた。

カイク「大丈夫だ・・・」

なのは「ここにいますよ・・・」

ティア「だからゆっくりお休みなさい・・・」

そう言っつてカイクはその子の頬をそつと撫でた、そして3人はしばらくこの子のそばにすることにした。

## 第12話 戦士達の休息と謎の少女（後書き）

今回はヴィヴィオ初登場でした、このヴィヴィオの設定も少し変えようと思いますので、次回またよろしくお願いします。追伸、ウルザードファイヤーが空が飛べるかは劇中では明らかになっておりませんでしたが、天空勇者っていいですし、何より子供達の一部が空が飛べるので飛べることにしました。

### 第13話 予言と大いなる力（前書き）

どうも、今回は戦闘はありません、クロノ、カリムの二人が登場します。よろしくお願ひします。

### 第13話 予言と大いなる力

謎の少女を保護した事件から次の日になり、カイクとティアはなのは、シグナムと一緒にあの少女のいる聖王医療院へシグナムの運転で向かっていた。

カイク「すまん、シグナム運転させて・・・」

シグナム「気にするな、車はテストロツサからの借り物だ、それにお前は車の免許自体無いだろう？」

そうカイクは車とは無縁のところから来たから車の免許などあるはずも無い、しかし、ジークと一緒にバイクに興味を持ったので短期間でバイクの免許だけは持っている。

シグナム「・・・しかし、検査の白黒がついたが・・・」

ティア「・・・あの子、どうなるんでしょうか？」

ティアはこの前シャマルから人造魔導師のことを聞いたからあの子のことが心配だった。

なのは「・・・当面は、六課か教会で預かるしかないでしょうね・・・」

受け入れ先を探すにしても長期の安全確認が取れてからでないと・・・

「・・・」

カイク「最悪の場合はうちのデカベースでもいいぞ・・・」

なのは「そう言ってもらってありがとうございます、カイクさん・・・」

「・・・」

その直後、通信が入った。

シャツハ「騎士シグナム、聖王教会のシャツハ・ヌエラです！」

シグナム「どうなされました？」

シャツハ「すみません、こちらの不手際がありまして、検査の合間にあの子が姿を消してしまいました・・・」

カイク「何!？」

ティア「そ、そんな・・・」

その報告を聞き、シグナムはすぐに聖王医療院に向かった。

シャツハ「申し訳ありません．．．」

カイク「．．．状況は？」

シャツハ「あ、あなた達は？」

カイク「俺は、カイク、ゴーカイキングだ。」

ティア「私はティア、ゴーカイピンクです。」

シャツハ「そうですね、あなた達があのゴーカイジャーの方ですか．．．」

シグナム「それよりもシスター状況はどうなっています？」

シャツハ「はい．．．特別病棟とその周辺の封鎖と非難はすんでいます．．．今のところ、飛行や転移、侵入者の反応は見つかっていません．．．」

なのは「外には出られない筈ですよ．．．」

シャツハ「ええ．．．」

カイク「なら、手分けして探そう。」

なのは「そうですね。シグナム副隊長。」

シグナム「は！」

そして、カイクとティアは道があやふやということもあり、二人は一緒になって探すことになった。

その間、シグナムとシャツハが話をしていた。

シグナム「検査では、一応危険反応はなかったのですよね？」、

シャツハ「ええ、魔力量はそれなり高い数値でしたが．．．それも普通の子供の範疇でした．．．」

シグナム「しかしそれでも．．．」

シャツハ「悲しいことです．．．人造生命体なのは間違いないです．．．どんな潜在的な危険があるのか．．．」

その後、カイクとティアは外を回ってたとき、ウサギのぬいぐるみを持っているあの少女を発見した。

カイク「．．．ここにいたのか。」

少女「あ．．．」

少女は少しおびえたような表情浮かべていた。

ティア「．．．大丈夫だよ、さあ．．．」

そう言つて、ティアが近づこうとした時、シャツハがそれに気付き自身のデバイスを起動させた。

シャツハ「あれは！逆巻け、ヴィンデルシャフト！」

シャツハはティアと少女の間に入った。

少女「あ、ああ．．．」

カイル「．．．まで、怯えている、いかに危険があるにしろこつちから余計な刺激をしてどうする？」

シャツハ「は！す、すみません．．．」

カイルにそう論されて、シャツハはカイルに謝つた。

少女「うう．．．ああ．．．」

少女が泣きそうになり始めたがその後、なのはも来て、ティアとなのはで少女に話しかけた。

ティア「ごめんね、ビツクリさせちゃつて．．．」

なのは「私は高町なのは」

ティア「私はティア、そして、あの人はカイルさんだよ。あなたのお名前は？」

少女「ヴィい、ヴィヴィオ．．．」

なのは「ヴィヴィオか、可愛い名前だねヴィヴィオ、どこに行きたかつたの？」

ヴィヴィオ「パパ．．．ママ．．．いないの．．．」

ティア「そうなの．．．それじゃパパとママを探してたんだ．．．」  
なのは「そつか、それじゃ一緒に探そうか。」

そう言つて、カイルたちはその少女を連れ帰つた。

## 機動六課

ジーク「臨時査察？」

凱「機動六課に？」

はやて「はい、地上本部にそういう動きがあるんみたいなんです．．．」

フェイト「地上本部の査察はかなり厳しいって．．．」  
ジーク「そうなのか？」

凱「ああ、あのレジアス中將がトップだから機動六課はもちろんのことその上俺達GGGも目の敵にしているからな．．．」

はやて「凱さんの言う通りや．．．うちはただでさえ突っ込みどころ満載の部隊やしな．．．」

フェイト「今、配置やシフトの変更命令が出たりしたら、正直致命的だよ．．．」

はやて「何とか乗り切らんとな．．．」

フェイト「．．．ねえ、これ査察対策にも関係してくるんだけど．．．」

ジーク「なんかあるのか？」

フェイト「ええ、六課設立の本当の理由．．．そろそろ聞いていいかな？」

はやて「．．．せやね、まあええタイミングかな．．．今日これから聖王教会本部カリムのところへ報告に行くんよ、クロノ君も来る。」

フェイト「クロノも？」

ジーク「誰だ、それは？」

凱「フェイトの義理のお兄さんだよ。」

はやて「そこでののはちゃんと一緒にフェイトちゃんもついてきてくれるかな？後できれば凱さんとジークさんにカイクさんも．．．」

そこでまとめて話すから「

凱「俺はかまわない。」

フェイト「うん．．．なのはにも連絡しておく．．．なのは戻ってくるかな？」

ジーク「俺もいいで、カイクにも連絡しておくか。」

そう言つて、フェイトは通信で、ジークはモバイルーツで連絡しようとした瞬間、両方から同じ声が聞こえてきた。

ヴィヴィオ「うああああん！」

なのは「あゝ、もう泣かないで……」

カイル「……大丈夫だ、泣くな……」

ティア「二人は用事があるからね、私達と遊ぼう？」

その騒ぎを聞いたメンバーはなのはの部屋に向かった。

ジーク「……これはどういうことだ？」

メルト「実はね……」

カイルたちはヴィヴィオを聖王医療院から引き取ってきたのだが、カイルもなのはも用事があり行こうとしたら、ヴィヴィオが二人の服をつかんで行かせまいとして大泣きし始めたという。

はやて「エースオブエースとゴーカイキングにも勝てへん相手があるんやな……」

ヴィヴィオ「やだ！ いったっちゃやだ！ うああん！」

フェイトがぬいぐるみを拾い上げて、ヴィヴィオに近づいた。

フェイト「こんにちは」

ヴィヴィオ「!？」

フェイト「この子は、あなたの友達？」

なのは「ヴィヴィオ、こちらフェイトさん、なのはさんの大事なお友達。」

ティア「ヴィヴィオはなのはさんとカイルさんと一緒にいたいのか？」

ヴィヴィオ「……うん……」

フェイト「でも、なのはさんもカイルさんも大事な御用でお出かけしないといけないのにヴィヴィオがわがまま言うから困ってるよ。」

ティア「この子もほら困ってるよ。」

そう言つて、ティアはフェイトが持っているぬいぐるみを見せた。

フェイト「ヴィヴィオはなのはさんとカイルさんを困らせたいわけじゃないんだよね？」

それを見ていた外野は

スバル「フェイトさんとティアさんすごい……」

ティアナ「まあ、フェイトさんの場合は小さい頃からあんたらを世話してたからじゃないの？」

エリオ・キャロ「は、はい．．．」

ジーク「それとティアは昔上流貴族の召使いをしていたからな、その関係でその子供の世話をしていたみたいだな．．．」

スバル「そうだったんですか？」

メルト「ええ、その後カイルが引き取ったのよ。」

ティア「（カイルさん、スモーキーを貸してもらえませんか？）」

カイル「（スモーキーを？どうする気だ？）」

ティア「（いいから任せてください。）」

そう言つて、マジランプをティアに渡した。

ティア「ヴィヴィオ、これを見て。」

ヴィヴィオ「．．．？」

ティアはマジランプからスモーキーを出した。その瞬間ヴィヴィオは目を輝かせた。

ヴィヴィオ「うわあ．．．大きな猫．．．」

スモーキー「よう！お嬢ちゃん、おいらはスモーキーっていう魔法猫だ、お嬢ちゃんにちよつとした魔法を見せてやるよ。」

そう言つて、魔法で大きなキャンディーを作った。

ヴィヴィオ「うわあ．．．」

スモーキーはそのキャンディーをヴィヴィオにプレゼントした。

ティア「ヴィヴィオ、スモーキーにありがとうは？」

ヴィヴィオ「あ、ありがとう．．．」

フェイト「それじゃ、なのはさんとカイルさんが戻ってくるまでティアさんやスモーキーと一緒にいい子にしているね？」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言つて、ヴィヴィオはフェイトからぬいぐるみを受け取りスモーキーと遊び始めた。

カイル「．．．助かった、ティア。」

ティア「うふふふ、どういたしまして。」

なのは「フェイトちゃんありがとう。」

はやく「なるほどな．．．いや、実にいいものをみせてもらったわ。」

「そして、その後カイルとなのはは、はやてと一緒に聖王教会に向かった。その際カイルはヘリにマシンボクサーを乗せてほしいと頼み、それを乗せてから出発した。」

#### 聖王教会

はやての案内で教会に入ると出迎えてくれたのは、髪の高い金髪の女性が出迎えてくれた。

なのは「高町なのは一等空尉であります。」

フェイト「フェイト・T・ハラウン執務官です。」

凱「GGG機動部隊隊長獅子王凱です。」

カリム「ようこそ、始めまして、聖王教会教会騎士団騎士カリム・グラシアと申します。でそちらのお二人が・・・。」

カイル「ああ、紹介が遅れた俺はカイル・アストレアだ。」

ジーク「俺はジークフリード・グラードだ、ジークでいい。」

カリム「そうですね、あなた方がかの伝説の力であるレジエンド戦隊の力を受け継ぎ方々ですね、それではこちらへ。」

そう言つてカリムに案内されて部屋に入ると軍服の男が座っていた。それを見るなり、なのはとフェイトが敬礼をした。

なのは「失礼します。」

フェイト「クロノ提督、お久しぶりです。」

クロノ「ああ、フェイト執務官」

カリム「うふふ、お二人ともそう硬くならないで、私達は個人的にも友人ですから、いつも通りで平気ですよ、それと凱さん、カイルさん、ジークさんもさあどうぞ・・・。」

そう言われ、3人は席に座った。

クロノ「・・・と、騎士カリムが仰せだ。」

なのは「それじゃクロノ君、お久しぶり」

フェイト「お兄ちゃん、元気だった？」

クロノ「・・・それはよせ、お互いもういい年だぞ？」

フエイト「兄妹関係に年齢は関係ないよ、クロノ」

そのやり取りを見てカイクたちは二人の関係を理解した。

クロノ「凱さん、久しぶりだな。」

凱「ああ、クロノこそ元気そうだな。」

クロノ「そして、君達がああ伝説のレジエンド戦隊の・・・」

カイク「カイク・アストレア、ゴーカイキングだ。」

ジーク「ジークフリード・グラード、ジークで結構だ、ゴーカイレツドだ。」

お互いに自己紹介をし、はやてが本題を切り出した。

はやて「さて、昨日の動きのまとめと、改めて機動六課設立の裏表について、それから今後の話や。」

そして、まずクロノの口からその詳しい詳細が明らかになった。

クロノ「六課設立の表向き理由はロストロギア、レリックの対策と独立性の高い少数部隊の実験例が理由だ。知つてのとおり六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕とフエイトの母親で上官、リンディ・ハラオウンだ、それに加えて非公式だが、かの三提督も設立を認め協力の約束もしてくれている。」

カリム「その理由は私の能力と関係があります、私の能力・・・プロフェーテン・シュリフテン、これは、最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行う事が出来ます、二つの月の魔力が上手く揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しかできません。」

その後、カリムの周りを回っていた紙が1度なのはとフエイトのところへ行きまた離れていった。

カリム「預言の中身は古代ベルカ語で、解釈によって内容が変わる事もある難解な文章、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば、的中率や実用性は、割りとよく当たる占い程度、つまりはあんまり便利な能力ではないんですが・・・」

クロノ「聖王教会はもちろん、次元航空部隊のトップもこの預言は目に通す、信用するかはどうかは別にして、有識者による予想情報

の一つとしてな．．．」

はやて「ちなみに地上部隊はこの預言はお嫌いや、実質のトップがこの手のレアスキルとかお嫌いやからな。」

なのは「レジアス・ゲイズ中将だね．．．」

凱「やはりあの人か．．．」

カイル「．．．俺は昔のある男のことを思い出して、気にいらねえ奴だ．．．」

そうカイルはかつての実の兄であるルキウスことアイムと同じ空気が漂っているのを感じたためレジアス中将を見たときから毛嫌いしていた。

ジーク「カイル．．．」

クロノ「そんな騎士カリムの預言能力に、数年前から少しずつある事件が書き出された。」

カリム「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る、使者達は踊り、なかつ大地の法は虚しく焼け落ち、それを先駆けに、数多の海を守る法の船も砕け落ちる．．．」

なのは「そ！それって．．．」

凱「ま、まさか!？」

カリム「．．．ロストロギアをきっかけに始まる、管理局地上本部の壊滅と．．．そして、管理局システムの崩壊．．．」

それ聞いて、その場が一時騒然となった。

凱「管理局法では、たしか質量兵器は禁止だったな？」

カイル「そうなのか？」

フェイト「ええ、管理局は創設以来、平和のため安全のためにそういった質量兵器を根絶した．．．そしてロストロギアの規制を厳しくし、比較的クリーンな魔法文化が推奨され、今のシステムになったんです。」

ジーク「そうだったのか．．．」

フェイトがカイルとジークに説明し、カリムは話を戻した。

カリム「．．．情報源が不確定と言うこともあります、管理局崩

壊ということ自体が、現状ではありえない話ですから．．．」

はやて「そもそも地上本部がテロとクーデターに遭って、それがきっかけで管理局が崩壊なんて、考えづらいしな．．．」

クロノ「まあ、本局でも警戒強化をしているが．．．」

カリム「問題は、地上本部なんです．．．」

クロノ「ゲイズ中將は、予言そのものを信用しておられない、特別な対策は取らないそうだ．．．」

カリム「異なる組織同士が束ねるのは難しいことですから．．．」

凱「仕方が無い、それが人と言うものだ．．．」

はやて「それにただでさえミッド地上本部の発言力と影響力は問題視されてるしな．．．」

カイル「なるほど、そのために自由に動ける部隊が必要だったから、機動六課ができたわけか．．．」

カリム「その通りです．．．」

はやて「レリック事件で事が済めばよし、大きな事態に繋がっていくようなら最前線で事態の推移を見守って．．．」

なのは「地上本部が本腰を入れるか、主力投入まで前線で頑張ると．．．」

はやて「．．．それが六課の意義や．．．」

それを聞いていたジークとカイルも納得した。

カリム「．．．それだけではないんです．．．実はつい数日前より新たな予言があるのです．．．」

カイル「それが、俺達呼び出された理由か．．．」

カリム「はい．．．その予言は、かのすべての世界を食らい尽くす、魔族の王が蘇り、さらに様々な死者が蘇り、すべての世界は混沌と終焉へと進む、しかしその時、伝説の英雄の力を使いし戦士達が現れ、彼らに立ち向かう、しかし、すべての大いなる力が開放されねば、すべての世界の運命は終焉を迎えることを避けることができない．．．という内容です。」

凱「こ、これって．．．」

カイル「．．．妖魔か．．．」

はやて「おそらく、間違いないと思うで、以前カイルさん達からお借りした本に載っていた英雄達が倒した敵が復活したところを見るとな．．．」

クロノ「しかし、気になるのはその大いなる力だ、僕はそれが重要だと思う．．．」

カイル「はい．．．そこであなた達にその大いなる力を詳しく教えていただきたく、はやてに頼んでこちらに来ていただいたんです．．．どうか、教えていただけますでしょうか．．．」

それを聞いたカイルとジークは顔をあわせて頷いた。

カイル「．．．わかった、話そう、大いなる力とは何なのかを．．．」

そう言つて、ジークとカイルは凱、はやて達に説明した時よりも詳しく話した。

クロノ「．．．そんな力が秘められているのか、その大いなる力は．．．」

はやて「．．．本当や、これを見てくださいか？」

そう言つて、はやては事前にカイルたちから許可をもらつて持つてきていた前回のウルザードファイヤーの能力を見せた。

カイル「こ、これは！？測定不可能！？」

クロノ「ば、馬鹿な、本当に測定できないくらい力だったというのか！？」

はやて「ホンマや、私も確認したんや．．．」

カイル「．．．カイルさん、ジークさん、聖王教会教会騎士団騎士カイル・グラシアからお願いいたします、どうか、はやてたちに協力をして、管理局システムをお守りください、そしてこれは本当に勝手なお願いなのですが、あなた達は遠い昔様々な脅威から世界を守ってきた力を持っています、その力でその脅威から全ての世界を終焉の運命から救ってください．．．」

そう言つて、カイルとジークにカイルは頭を下げた。

クロノ「僕からもお願いする、頼む。」

そう言つて、クロノも顔を頭を下げた。

ジーク「顔を上げな。」

カイル「そうだな、綺麗な顔と色男が台無しだ。」

クロノ「そ、それじゃ!？」

カイル「俺達ゴーカイジャーは、すべて大いなる力を手に入れ、必ず様々な脅威を振り払つてみせる。」

ジーク「ああ、必ずだ!」

はやて「カイルさん、ジークさん・・・」

カリム「・・・ありがとうございます・・・うふふふ、それにしてもお二人はだいぶ女性の扱いに慣れていらつしやいますよね?・・・綺麗な顔つて面と向かつて言われたのは初めてだったもので」

そう言われて、カイルとジークは参つたなといった顔をした。

クロノ「その大いなる力について何か情報があつたら連絡してくれ、できるだけいろいろな情報を提供させてもらう。」

カリム「私の方でもいろいろと調べてみますので、お願いします。」

カイル「ありがとう、その時は頼む。」

そう言つて、カイルは二人に礼を言った。

その後、話が終わり、ヘリに乗り込もうとした時、

カイル「悪い、俺はこれから寄るところがある、先に戻ってくれ。」  
なのは「どこへ行くんですか?」

カイル「それはちょっと秘密だ、ヴィヴィオには早く帰つてくると言つといてくれ。」

フェイト「わかりました、それじゃカイルさんお気をつけて・・・」  
カイル「ああ、それじゃ行つてくる。」

そう言つて、カイルはマシンボクサーに乗つて走つていった。

ジーク「やれやれ、相変わらずフリーダムな奴だな、それじゃ戻ろうぜ・・・」

凱「ああ、そうだな」

その後、なのはたちは機動六課へ戻った。

### 機動六課

キャラ「．．．そして、次は隣町のパン屋さんへ出かけました。」  
ヴィヴィオはティアの膝の上で、キャラに絵本を読んでもらっていた。

なのは「ただいま」

フェイト「ただいま」

ジーク「今、戻ったぜ。」

ティア「お帰りなさい、皆さん。」

ヴィヴィオはなのはが帰ってきた事に気づき、ティアはヴィヴィオを抱いたままなのはたちのところへ行った。

なのは「ヴィヴィオ、ただいまいい子にしてた？」

ヴィヴィオ「うん．．．」

フェイト「．．．ありがとねエリオ、キャラも．．．」

エリオ「い、いえ」

キャラ「ヴィヴィオ、いい子でいてくれましたよ。」

なのは「そっか。」

するとヴィヴィオは周りを見渡し始めた。

ティア「どうしたの？」

ヴィヴィオ「．．．いない、どこ?．．．」

なのはたちはすぐにカイルのことだとわかった。

フェイト「ヴィヴィオ、カイルさんはまだちよつと御用があるの．．

．．」

なのは「すぐに帰ってくるから大丈夫だよ。」

ヴィヴィオ「うん．．．」

そう頷いたが少し寂しそうだった。

ティア「カイルさん．．．」

その時、カイルが帰ってきた。

カイル「今戻った、少し遅くなった。」

それを見たヴィヴィオはカイムの足に抱きつく。

カイム「ヴィヴィオ……」

ヴィヴィオ「んん……」

ヴィヴィオはカイムから離れようとしない。

なのは「それよりもカイムさん、どこへ行ってたんですか？」

フェイト「あれ？その箱は？」

カイム「ああ、これはアイスクリームだ。」

エリオ「アイスクリームですか？」

カイム「ああ、みんなの分もある、まずはほらヴィヴィオ。」

そう言って、ヴィヴィオにアイスクリームを渡した。

ヴィヴィオ「ありがとう……」

そう言って、ヴィヴィオはかなり嬉しそうだった。

ジーク「相変わらずだな、カイム、クールなようで甘い奴だよお前

は……おい、その箱俺に貸せ、それ全員分買ってきたんだろっ、

お前がその状態じゃ配れない無いだろっからな、俺が代わりに配っ

てきてやる。」

そうヴィヴィオはアイスクリームを食べながらも片方の手でカイム

の服の袖を離さないでいた。

カイム「……ああ、頼む、それとここにいるメンバーの分も置い

ていけ、ついでにスモーキーの分もある。」

スモーキー「本当ですか、旦那！ありがとうございますですニャ！」

カイム「今日は活躍だったからな、ちなみジークお前の分もあるか

らな……」

ジーク「へえ、たまには悪くねえな、いただきぜカイム。」

そう言って、この部屋のメンバーに届けた後ジークは他の部屋に行

って届けて回った。

なのは「よかったね、ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオ「うん！」

フェイト「うふふふ、カイムさんもお優しいですね。」

カイム「……気まぐれだ……」

そう言っただけで苦し紛れの照れ隠しをした。

キャロ「カイクさん、ありがとうございます。」

エリオ「ちょうど冷たいものがほしかったので……」

ティア「これって、昨日私達が食べたアイスクリームですよね？」

カイク「ああ、昨日聞いていたからな、それでな……」

そう言っただけで、みんなでアイスクリームを堪能した、ちなみにこのアイスクリームが好きなスバルはその後カイクにお礼を言いに来たの  
は言うまでも無い。

はやて部隊長室

はやて「ふう……グレハムおじさん……私の命はグレハムおじさんが育ててくれて、うちの子たちが守ってくれて、なのはちゃんたちに救ってもらって……あの子が……初代リインフォースが残してくれた命や……あんな悲しみは後悔なんて、この世界の誰にもあつたらアカン、私の命はそのためを使うんや……」

ジーク「そんなに分かひとりで生き急ぐな。」

はやて「！じ、ジークさん、いつの間におつたんや!？」

ジーク「さつきから、呼び出したけど返事が無いからな、それでいないのかと入ったら居て、独り言をしゃべっていたからな、聞くつもりはなかったが、なんとなくほっとけなくてな、俺も一つの組織の頭だからな……」

はやて「せやつたね、ジークさんたちのことはあつたときに聞かせてもらったわ。」

ジーク「それと、シグナムたちから聞いたからな、闇の書事件つてやつをよ……」

はやて「せやつたんか……」

ジーク「まあ、過去のこととはもかく今はなのはたちもいるし俺達もいるんだから一人で何でもかんでも背負い込むな。」

はやて「そう言っただけで聞くと、気分が少し楽になつたわありがとうジークさん……ところでどうしたんや？」

ジーク「ああ、カイムの奴がなヴィヴィオのためにみんなの分のアイスクリームを買ってきたから配ってたんだ、あいつは今ヴィヴィオに捕まっているからな．．．」

はやて「はははは、そうかカイムさんホンマに懐かれてしもうたな、ほんなら頂こうかな、カイムさんには後でお礼言わな。」

ジーク「これで全員分配り終わったな。」

はやて「ほなら、ここで食べませんか？ちょっとお話もしたいし．．．」

ジーク「そうだな、それじゃ失礼するぜ。」

そう言つて、空いている椅子に座った。

はやて「ジークさん、うちらも今後大いなる力の探索は全力でお手伝いさせてもらうわ、あの力はレリック以上の問題やからな．．．」

ジーク「ああ、頼むぜ。」

その後、この部屋でアイスクリームを食べながら他愛の無い話をし  
て盛り上がった。

### 第13話 予言と大いなる力（後書き）

どうも、カイクには私の設定でパパになってもらうことにしました、次回はいよいよ新しい大いなる力が手に入ります、どの戦隊かは次回明らかになりますのでまたよろしくお願いします。

## 第14話 目覚める百獣の獅子（前書き）

どうも今回はガオレンジャーの大きいなる力を解放されます、前回に比べると短いですがご了承ください。

## 第14話 目覚める百獣の獅子

臨時査察が無事に終了した次の日、話し合った結果ヴィヴィイオはカ  
イムが引き取りティア、なのは、フェイトが後見人となった。(な  
のはとフェイトの場合カイムたちはこちらに本籍がないためという  
ことで二人も後見人になった。)

そして、今機動六課のメンバーを含めデカベースのデカルムに集  
まり、大いなる力のことについて話し合っていた。

はやて「．．．というわけで今後機動六課は大いなる力の探索も作  
戦任務に加わることになったで、そこで、カイムさん、ジークさん  
お願いしますわ．．．」

カイム「わかった．．．それじゃ説明する．．．」

カイムとジークは大いなる力の細かい説明をここにいるメンバーに  
した。

フェイト「ということは大いなる力は少なくとも後32あると？」

メルト「ええ、そういうことになるわ。」

護「改めて聞くとすごいな．．．」

なのは「でも、どうやって探すんですか？」

ジーク「それはこの鳥野郎が知っている、おい鳥！」

ナビィ「ダカラ！トリジャナイヨ、ナビィダヨ、レッツお宝ナビゲ

ート！．．．フム、空島ニイル赤き聖ナル百獣ノ獅子ノ眠リヲトケ

ダツテサ．．．」

スバル「空島？」

ティアナ「な、何なんですかそれって．．．」

カイム「．．．こつちもよくわからねえな．．．牧野先生、それに  
該当するレジエンド戦隊はあるんですか？」

牧野「ええ、ありますよ、おそらくそれは天空島のことですよ、そ  
してそれは聖なる獣である百獣に選ばれた戦士百獣戦隊ガオレンジ  
ヤーの大いなる力だと思います。」

そう言つて、ガオレンジャーの詳細なデータをみんなに見せた。

ヴィータ「こ、こんなでかい獣みたことねえ．．．」

シグナム「うむ、しかし力強さがあるな．．．」

凱「しかし、これは地球のあるのではないのか？」

レオナ「それがね、昔の妖魔との戦いでこちらの世界に来たものもあつてね．．．それでナビィの探知能力は基本的に今いる世界にあるものにしか反応しないの．．．」

エリオ「つまりはこの天空島というものはこの世界にあると．．．レオナ「そういうこと。」

キャロ「で、でもどうやって見つけるんですか？」

カイル「地道に空を探すしかないな．．．」

はやて「なんか頭が痛くなってきたわ．．．」

ジーク「とりあえず、ゴーカイガレオンとカイルのマシンで探すしかないな．．．」

そんなわけで、機動六課のメンバーはゴーカイガレオンとカイルの出した、アルティメットダイボウケンで分かれて探すことになった。

カイルのアルティメットダイボウケンにはなのは、フェイト、ティア、エリオ、キャロのメンバーが乗っていた。

キャロ「見つかりませんね．．．」

フェイト「まあ、そんなに簡単に見つかるとは思ってないけどね．．．」

なのは「とにかく根気よく探すしかないよ。」

ティア「そうですね．．．」

エリオ「そういえば、ヴィヴィオは今どうしてるんですか？」

カイル「ああ、いい子に留守番してるよ、アイナさんが面倒見てくれている。」

なのは「今のところ、ザフィーラが護衛しているはずだから大丈夫だよ．．．」

その時、通信が入った。

カイル「こちらカイル、なんだはやてか．．．どうした？」

はやて「．．．あんな、ヴィヴィオがおらへんのや！」

ティア「ええ!？」

フェイト「ヴィヴィオが!？」

なのは「ど、どういうこと、はやてちゃん!？」

アイナ「すみません．．．皆さんが出かける際にちよつと目を離している際に．．．」

ザフィーラ「すまない．．．」

カイル「．．．ティア、操縦を頼む、俺はちよつと探してくる。」

ティア「．．．わかりました、任せてください。」

そう言つて、カイルはコックピットから出て行った。

カイルはゴーゴードンプのコックピットに向かった。するとそこに動く毛布があつた。カイルはそれを躊躇なく取つた。

ヴィヴィオ「あ．．．」

カイル「．．．いい子で留守番している約束だろう．．．」

ヴィヴィオ「．．．ご、ごめんなさい．．．」

そう言つと、カイルはヴィヴィオの頭はかなり弱めのゲンコツをやつた。

カイル「．．．もう約束破つちやだめだぞ．．．」

ヴィヴィオ「はい．．．ごめんなさいパパ．．．」

カイル「よしいい子だ、それじゃ行こうか。」

ヴィヴィオ「うん!」

そう言つてカイルはヴィヴィオを抱つこしてみんなのいるコックピットへ戻つた。

はやて「．．．やっぱり、そつちにおつたんやね．．．」

カイル「アイナさん、すみません．．．」

アイナ「いえいえ、こちらこそお手数をおかけします。」

そう言つて、通信を切つた。

なのは「こら、ヴィヴィオだめだよ、パパやママたちは大事なお仕事なんだから．．．」

ヴィヴィオ「ごめんなさい．．．」

フェイト「なのは、もう反省してるし、その辺で．．．」

ティア「そ、そうですね、ヴィヴィオはカイクさんに甘えたかったんですから．．．」

カイク「．．．それじゃ、ヴィヴィオいい子にしてるんだぞ。」  
ヴィヴィオ「うん！」

そんな出来事がありヴィヴィオはティアの膝上に座り探索を再開したが、それでも一向に見つからず2時間が経過した。

エリオ「．．．全然手がかりがありませんね．．．」

キャロ「本当にあるんでしょうか．．．その天空島．．．」

とその時、フェイトが何かに気付いた。

フェイト「あの〜カイクさん、あの雲なんですけど、さっきもあの場所にあつたような．．．」

カイク「．．．ちよつと調べてみるか．．．」

そう言つて、カイクは先ほどの映像と比較してみた。

なのは「本当だ、この雲、動かないし形も全然変わってないよ。」

カイク「どうやら、ここみたいだな．．．おい、ジーク。」

そう言つて、カイクはジークに連絡を取り、合流したあと雲の中に突入した。

天空島

その後、メンバーは島に降りた。

カイク「．．．本当にこんなところがあつたのか．．．」

ジーク「さてと、ここどこにいるんだ、その赤き獅子つてのは．．．」

とその時、一人の女性が出てきた、それはガオの巫女、テトムであった。

テトム「待つてたわ、ガオレンジャーの力を受け継ぎし、レジエンド戦隊の後継者の方々．．．」

フィオネ「あなたは？」

テトム「私の名はテトム、パワーアニマルに意思を伝える存在である、ガオの巫女。」

エリス「あ、あなたが・・・」

ティア「ガオレンジャーの協力者・・・」

テトム「そして、あなた達が来るのを待っていたわ、さあ、行きましようガオライオンが待っています。」

凱「ガオライオン？」

テトム「あなた方が探している、ガオレンジャーの大いなる力である、聖なる獣のリーダーよ。」

そう言つて、テトムはカイクたちを案内した。ちなみにヴィヴィオはカイクが抱っこして連れてくる。

そして、ガオライオンが眠っているところへ着いた。

テトム「こちらです、さあガオレンジャーのレンジャーキーを・・・

」

と言われ、カイクはヴィヴィオをなのはに預け、6人はレンジャーキーを取り出そうとしたその時

ルシフェル「なるほど、元の世界にないと思つたが、こんなところにあつたのか・・・」

テトム「！あ、あなたは！？」

ジーク「てめえは！ルシフェル！」

ルシフェル「生憎、アスラとバディンは先日の負傷が思ったより酷くてね、それで私が来たのだよ、それでは新型の妖魔獣を紹介しよう、出でよ妖魔獣ワームバット、スカルリッチ行け、それとこれはおまけだ。」

そう言うとスカルソルジャーの大群とバーツロイド、イーガロイドを出した。

スバル「こ、これって！？」

ティアナ「ホテルの時の奴に似てる！？」

ルシフェル「これは元々、アリエナイザー用のものだ、それではまた会おう諸君・・・後は任せる。（聖王の器があつたが、まあ今は

いいか、どうせ近いうちにジェイルが手に入れるだろうし、それに私達はデータさえあればあの小娘がどうなるうとかまわらないからな  
．．．」

ワームバット「はは！」

スカルリッチ「お任せを．．．」

ルシフェルは部下に任せ、その場から消えた。

メルト「逃げられた！」

ジーク「今はこいつらを倒すぜ！」

6人「豪快チエンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

フォワード陣「セットアップ！」

凱・護「アーマーセットアップ！」

なのは・フェイト「セットアップ！」

それぞれ戦闘態勢に入った。ちなみにヴィヴィオはテトムに頼み隠れてもらった。

ヴィヴィオ「パパ．．．ママ．．．」

テトム「大丈夫よ．．．彼らなら．．．」

カイルたちは次々と雑魚を片付けていった。

フォワード陣はワームバットとやり合っていた。

スバル「デイバインバスター！」

ティアナ「クロスファイアシュート！」

エリオ「はああ！」

キャロ「フリードリヒ！」

ワームバット「ぐあああ！こ、こいつら前のデータと違う！」

そして、なのはとフェイトもフォワード陣のフロアに入った。

その中で、突然ガオリオンが動き出した。

カイル「な、なんだ！？」

キャロ「．．．なにか、言いたい事があるみたい．．．」

そして次の瞬間、カイルたちはガオリオンと一緒にその場から消えた。

凱「カイクム!?」

フェイト「ジークさんたちまで!?!」

なのは「いったいどこへ...」

6人とテトムとヴィヴィオが消えながらも戦いは続いていた。

英雄の聖地の世界

カイクム「ここは...ヴィヴィオ大丈夫か?」

ヴィヴィオ「...うん、あ、パパ!」

そう言つて、ヴィヴィオはカイクムに抱きついてきた。

ジーク「カイクム!どうやら無事みたいだな...」

ティア「ここは?」

エリス「そっか、ティアはまだ来たこと無かつたわね、ここはあのレジェンド戦隊の人の魂が眠る英雄の聖地の世界よ。」

メルト「ということは、今度はガオレンジャーが出てきたりして...

」

フィオネ「まさか、そんな簡単には...」

走「それがあるんだな。」

その直後、テトムと一緒に後ろにガオライオンを引き連れて6人の男女が現れた。

カイクム「まさか、あんた達が...」

岳「そうだ...」

海「俺達が...」

草太郎「聖なる獣パワーアニマル選ばれた戦士...」

冴「百獣戦隊...」

月磨「ガオレンジャーだ...」

テトム「とりあえずあなた達はガオライオンに選ばれたから、あなたにこのキングキーを渡すわ、あとレンジャーキーの力も解放した

から、これからはあなた達がすべての世界を守ってね。」

走「大丈夫だ。」

岳「ガオライオンが選んだんだ。」

海「自信を持って。」

草太郎「君達なら」

冴「妖魔を倒せるよ。」

月磨「ガオライオンとともに戦え！」

カイム「．．．わかった、ありがとう先輩。」

ジーク「それじゃあな！」

フィオネ「私達は皆さんのところへ戻らなければいけないので．．．

」

メルト「大いなる力使わせてもらっわ。」

エリス「私達に任せて。」

ティア「必ず、勝ちます。」

ヴィヴィオ「パパ達、強いもん。」

テトム「うふふふ、そうねこの子のためにも負けちゃだめよ、それ

じゃ．．．」

カイム「ああ、それじゃ俺達は行くぜ．．．」

そう言っつて、光りの先へ消えていった。

天空島

カイムたちが消えた後も激しい戦闘が続いていたが、それでも数で押され始めた。

なのは「これじゃきりがないね．．．」

フェイト「みんな大丈夫？」

スバル「大丈夫ですよ！」

ティアナ「必ず、カイムさんたちは．．．」

エリオ「戻ってきます！」

キャロ「それまで必ず持ちこたえてみます。」

凱「護！こつちも負けてられないぞ！」

護「わかってるよ、凱兄ちゃん！」

スカルリツチ「強がりもそこまでだ．．．」

ワームバット「これで終わりにしてやる．．．」

2体の妖魔獣は本気を出そうとしていた、とその時

カイル「ちよつと待て！」

なのは「カイルさん！」

フェイト「皆さん！それにヴィヴィオも！」

カイル「ヴィヴィオスモーキーを持って隠れているんだ。」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言つて、マジランプを持って隠れた。

ジーク「それじゃ、力が開放されたばかりのこれ使ってみるか！」

6人「「「豪快チエンジ！」「」」

モバイレーツ「ガオレンジャー！」

エリオ「手に入れたんですね！」

キャロ「大いなる力を！」

ティアナ「さすが、カイルさんたちですね。」

スバル「いったいどんな力なんだろう？」

フェイト「さて、こつちはこのこうもりを片付けるよ。」

なのは「行くよ！みんな！」

フォワード陣「「「はい！」「」」

他のメンバーがワームバットに向かっていく中、カイルたちはスカルリッチに向かって名乗りを上げた。

ジーク「灼熱の獅子！ガオレット！」

メルト「孤高の荒鷲！ガオイエロー！」

フィオネ「怒涛の鮫！ガオブルー！」

エリス「鋼の猛牛！ガオブラック！」

ティア「麗しの白虎！ガオホワイト！」

カイル「閃烈の銀狼！ガオシルバー！」

ジーク「命あるところ、正義の雄叫びあり……」

6人「「「百獣戦隊ガオレンジャー！！」「」」

スカルリッチ「生意気な！」

そう言つて、スカルリッチは向かっていったがカイルたちはそれぞれ  
の武器で立ち向かった。

ジーク「ライオンファンゲ！」

メルト「イーグルソード！」

フィオネ「シャークカッター！」

エリス「バイソンアックス！」

ティア「タイガーバトン！」

カイク「ガオハスラーロッド！」

スカルリッチ「ぐあああ！」

スカルリッチは吹き飛ばされた。

ジーク「とどめだ！」

6人「破邪百獣剣！」

スカルリッチ「ば、馬鹿な……」

ジーク・カイク「邪気退散……」

スカルリッチは爆発した。

そして、ワームバットも追い詰められていた。

なのは「行くよ！フェイトちゃん！」

フェイト「こつちはいつでもいいよ！」

なのは「デイバインシューター！」

フェイト「プラズマバレット！」

ワームバット「ぐあああ！」

ワームバットも爆発した。

ルシフェル「……ゴルリンMr.？2号、3号行け……」

そう言つて、2体のゴルリンMr.？を出してきた。そして、2体を巨大化させた。

ジーク「往生際が悪い奴だぜ。」

そう言つて、ジークはゴーカイガレオンを呼び出した。

カイクはアルティメットダイボウケンに乗り込んだ、その際なのはたちも一緒に戦わせてほしいということでヴィヴィオを凱と護に任せ、残りのメンバーでアルティメットダイボウケンに乗り込んだ。

ジーク「行くぜ！海賊合体！」

5人「完成！ゴーカイオー！」

ジーク「さらに行くぜ！レンジャーキーセット！」

ガオライオン「ガオオオオ！」

ガオライオンがゴーカイオーの下半身に合体した。

5人「完成！ガオゴーカイオー！」

ジーク「行くぜ！」

そう言つて、ガオゴーカイオーでスカルリッチに突撃していった。

スカルリッチ「ぐあああ！」

一方空中戦を展開しているアルティメットダイボウケンはとどめの体制に入った。

カイル「くらえ！」

全員「アルティメットブラスター！」

ワームバット「ぐわああああ！」

そのままワームバットは空中で撃墜された。

そして、スカルリッチも追い込まれていた。

スカルリッチ「くっ．．．」

ジーク「とどめだ！行くぜ！」

5人「ゴーカイアニマルハート！」

スカルリッチ「お、おのれ．．あああ！」

スカルリッチも粉碎し、全ての敵を倒した。その後テトムが見つからなかったが天空島を離れるとまるでそこには最初から何もなかったの様に跡形もなくなった。

カイル「これで3つ目か．．まだまだ先だな．．．」

ヴィヴィオ「すう．．すう．．．」

そう言いつつ、カイルは静かに自分の膝で眠っているヴィヴィオの頭をそつと撫でた。

なのは「それじゃ、ヴィヴィオも寝てますし、帰りましょうか。」

カイル「ああ、それじゃ行こうか。」

フェイト「カイルさん、操縦の方は私たちでもできますからカイルさんはヴィヴィオをお願いします。」

カイク「ああ、ありがとうみんな・・・」  
ヴィヴィオ「うん・・・パパ、ママ、大好き・・・」  
そう言われて、カイク、なのは、フェイトそして通信を聞いていた  
ティアは照れたような顔をした。

## 第14話 目覚める百獣の獅子（後書き）

どうも、今回は急展開な内容でしたが、お恥ずかしながら私はガオレンジャーの内容をあまり詳しく知らないもので、このようになりました、次回は長い話になりますので次回もどうかよろしくお願ひします。

## 第15話 奪われた大切なもの（前書き）

どうも、今回は妖魔の三巨頭の本当の力が出てきます、そして起動六課の施設壊滅になるのでよろしくお願いします。

## 第15話 奪われた大切なもの

ガオライオンを手に入れてから数日が経過し、これといった緊急出勤もなく訓練の日々が続き、スバルの姉、ギンガとマリエルも加わりさらにますますにぎやかになっていった、ちなみ大いなる力の件は現在、近日に迫った公開意見陳述会のため一旦中止し、そちらの準備を進めていた、

現在は、みんなで朝食を食べている状態だった。

ヴィヴィオ「あ〜ん」

カイク「よく噛んで食べるよ。」

ヴィヴィオ「うん」

ジーク「すっかり父親だなカイクの奴・・・」

メルト「うふふふ、そうね。」

エリス「なんか新鮮よね・・・」

フィオネ「初めてお会いした時のカイクさんを思うと想像が出来ません・・・」

カイクとヴィヴィオのやり取りを微笑ましく見ている他のメンバーティアナ「しかし、それにしても子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いわよね。」

ギンガ「スバルの小さい頃もあんなだったわよね？」

スバル「え、え、そ、そうかな？・・・ノノノ」

シャマル「リインちゃんも」

リイン「ええ！？リインは始めから割と大人でした！」

シグナム「嘘をつけ・・・」

ヴィータ「身体はともかく、中身は子供だったじゃねえか。」

リイン「うゝ、はやてちゃん、違いますよね〜」

はやて「ふふふ、どうやったかな？」

そんな話してる中、ヴィヴィオが皿と睨めっこを始めた。

カイク「どうしたヴィヴィオ？」

「ヴィヴィオ」

ヴィヴィオはピーマンを皿の端によけた。

なのは「ヴィヴィオだめだよ、ピーマン残しちゃ。」

「ヴィヴィオ」うゝ、苦いの嫌い。」

フェイト「そんなことないよ、おいしいよ。」

ティア「しつかり食べないと大きくなれないよ。」

「ヴィヴィオ」うゝ．．．」

ヴィヴィオは難しそうな顔をした。

はやて「そやな、好き嫌いが多いとママ達みたいに美人になれへんよ。」

それを聞いたキャロはニンジンを経リオに渡そうとしたがすぐに引つ込めた。

フェイト「それに好き嫌いが多いとパパにだって嫌われちゃうよ？」

「ヴィヴィオ」パパ．．．」

カイク「そうだな、好き嫌いは少ない方が俺はいいな．．．」

ヴィヴィオはそうカイクに言われ、頑張ってピーマンを食べた。

その後、スバルとギンガはマリエルと一緒に定期健診のため出かけていった。

そして今シグナムとカイクがちょっと軽い模擬戦をしていた。

ちなみにカイクは変身していないがデイスwordベガを使って戦っている。

カイク「デイスwordベガ！はあ！」

シグナム「はああ！」

二人の激しい剣の打ち合いになっていた。

ティアナ「カイクさんすごいですね。あのシグナム副隊長相手に変身しないで剣で互角なんて．．．」

エリオ「本当ですね、すごい剣捌きですよ。」

なのは「ジークさん、カイクさんが使う剣の流派は何ですか？」

ジーク「ああ、元は我流で短剣だったんだがな、レジェンド戦隊の

人との修行でたしか銀河一刀流って剣を使っているんだ。」  
キャロ「ぎ、銀河一刀流ですか．．．名前からしてすごそうですね．．．」

その後、シグナムとカイムはある程度汗を流した後クールダウンした。

カイム「相変わらずだな、シグナム。」

シグナム「お前の方こそ、その銀河一刀流という剣、知る限りにおいて今までの中で最強だな．．．」

そう言っていると、ヴィヴィオがカイムたちのところへ来た。

ヴィヴィオ「パパ、ママ！．．．あ！」

その途中で転んだ。

ティア「ヴィヴィオ！」

フェイト「大丈夫？」

その時、カイムとなのはは止めた。

カイム「待て。」

なのは「大丈夫、地面柔らかいし、きれいに転んだ怪我してないみたい．．．ほらヴィヴィオ。」

カイム「ここまで自分で立って来い。」

ヴィヴィオ「うう、パパ、ママ．．．」

なのは「ほら、ヴィヴィオ。」

そう言つて、二人は自力で立たせようとする、

フェイト「なのは、カイムさんだめだよ。」

ティア「そうですね、ヴィヴィオはまだ小さいんですから．．．」

そう言つて、フェイトとティアがヴィヴィオに駆け寄り抱き上げて立たせた。

フェイト「ヴィヴィオ大丈夫？」

ヴィヴィオ「うう．．．フェイトママ．．．ティアママ．．．」

ティア「気をつけてね、ヴィヴィオが怪我したらパパもママ達も悲しいからね．．．」

ヴィヴィオ「うん．．．ごめんなさい．．．」

なのは「もうフェイトママとティアママは甘いよ。」  
フェイト「なのはママは厳しすぎです。」  
ティア「カイクパパもです。」  
カイク「俺はヴィヴィオのためにと思っただがな．．．」  
シグナム「ふふふ、お前達は本当に面白いな．．．」  
ジーク「ああ、しかしカイクがこんなになるなんてほんと昔は想像  
できなかつたな．．．」  
その後、スバル、ギンガ、マリエルがお土産のチョコポットを持っ  
て帰ってきた。

ミッドチルダ地上本部

オーリス「機動六課を査察しましたが、材料は出ませんでした．．．」  
レジラス「そうか．．．公開意見陳述会まで間もない、より有利な  
交渉材料を揃えておかねば．．．」

オーリス「引き続き、こちらの査察部を動かします．．．それより  
も本局査察部や一部の部隊がこちらを調べて回っているようです．．．」

レジラス「いつものことだ．．．いつものようにこなせ．．．」  
オーリス「本局査察部の査察官に一人．．．厄介な希少技能保有者  
がいます．．．本腰を入れられたらかなり深いところまで探られる  
可能性があります．．．」  
レジラス「ちい！．．．忌々しい．．．必要あつてのことだ．．．  
連中に理解させるにはまだ時間と実績がいる。」

オーリス「最高評議会からの支援は頂けないのでしょうか？」  
レジラス「わしが問い合わせる．．．アインヘリアルの方はどうだ  
？」

オーリス「3号機の最終確認が遅れています、順調です．．．」  
レジラス「遅らせるな．．．陳述会前に終わらせておけ．．．」  
オーリス「これから視察に行く予定です．．．」

そう言つて、オーリスは部屋から退室した。

そして夕方、部隊長室にはやて、なのは、フェイト、凱、カイク、ジークのメンバーがいた。

はやて「今日、教会の方から最新の予言解釈がきた．．．やっぱり、公開意見陳述会が狙われる可能性が高いそうや．．．」

なのは「フェイト、こうん．．．」

はやて「もちろん、警備はいつもよりずっと厳重になる、機動六課はもちろんGGGやカイクさんやジークさんたちにも警備に当たってもらう。」

凱「こっちは大丈夫だ。」

カイク「こっちは．．．」

ジーク「聞くまでもねえな。」

はやて「ホンマにありがとうございます．．．ホンマは前線メンバー総出で警備に当たりたいんやけど、中に入れるのは私となのはちゃん、フェイトちゃんの3人だけになりそうやわ．．．」

凱「仕方がないさ．．．」

フェイト「でも3人揃つてれば、大抵のことはなんとかなるよ。」

なのは「前線メンバーも大丈夫、しっかり鍛えてる．．．副隊長達も今までにないくらい万全だし．．．」

フェイト「みんなのデバイスリミッターも明日から3段階にあげて行くしね．．．」

はやて「ここを抑えれば、この事件は一気に好転すると思う。」

その言葉に全員頷いた。

なのは「きつと大丈夫．．．」

ジーク「俺達もいるからな．．．」

カイク「ああ、必ず阻止して見せるさ．．．」

そして、それから一週間が経過し、シグナム、はやて、フェイト以外のメンバーの前線のメンバーは会場の警備のため、前日から会場に向かうことになり、凱、護、カイクたちも向かうことになった。

カイク「うん？ヴィヴィオ！」  
アイナ「ごめんなさい、カイクさん、パパとママ達のお見送りをするんだって聞かなくて・・・」  
なのは「だめだよヴィヴィオ、アイナさんにわがまま言っちゃ。」  
ヴィヴィオ「ごめんなさい・・・」  
フェイト「カイクさんもなのはやティアさんも夜勤は始めてだから不安なんだよ。」  
ティア「ごめんね、パパとなのはママとティアママは外でお泊りだからね。」  
なのは「明日には帰ってくるからね・・・」  
ヴィヴィオ「・・・絶対？」  
カイク「ああ、絶対だ。」  
なのは「いい子で待っていてくれたら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作ってあげるから・・・」  
ティア「私はクリームパイを作ってあげるね。」  
カイク「俺は今度遊びに連れて行ってやるからな・・・あ、そうだヴィヴィオこれをやるよ。」  
そうやって、カイクはヴィヴィオの首にペンダントをかけた。  
ヴィヴィオ「これは？」  
カイク「それはお守りだ。キングメダルっていうからな・・・」  
ヴィヴィオ「ありがとうパパ・・・いい子にお留守番する。」  
カイク「ああ、なるべく早く帰るからな・・・」  
そうやってカイクはヴィヴィオの頭を撫でた。  
その後、メンバーヘリで会場に向かった。

次の日

とあるビルの屋上

アスラ「さて、ナンバーズも配置に付きつつあるな・・・」  
ルシフェル「・・・ああ、こちらも鎧の調整がようやく終わった。」  
バディン「これでようやく本気で戦えるってもんだぜ・・・」

アスラ「さてと、陽動は一部のナンバーズがする．．．俺達は例の小娘の回収の手伝いだ．．．」  
ルシフェル「心配はない、ゴーカイジャーのメンバーは全員会場にいる、それに妖魔獣サタンデュラハンとスカルソルジャーも配置してある。」  
アスラ「それじゃ、行くぞ。」  
ルシフェル・バディン「了解」  
3人は姿をくらました。

その頃、警備のメンバーは持ち場についていた。

カイル「．．．今のところは順調だな．．．」

ジーク「ああ、今のところはな．．．」

フィオネ「しかし、スカリエツティが背後にいるということは必ず妖魔も動きます．．．」

メルト「そうね、出来れば穏便に済ませたいわね．．．」

エリス「ええ、これだけ人が多いとやりづらいしね．．．」

ティア「できるだけ人を巻き込みたくないですね．．．」

とその時、建物のシステムダウンした。その直後、爆発が起きた。

ジーク「来やがったか!」

カイル「．．．どうやら、俺達の通信以外は使えないようになったな．．．」

メルト「どうやらそのようね．．．」

エリス「早く合流した方がいいわね。」

フィオネ「行きましょう!」

行こうとした時、カイルとジークが止まった。

メルト「どうしたの?」

ジーク「．．．カイル、お前は六課に戻れ．．．」

カイル「ああ、わかった．．．」

ティア「ど、どういうことですか?」

カイル「陽動の可能性がある．．．」

メルト「そっか、ここに今主力のほとんどが集結しているから．．．」  
ファイオネ「六課は今、ザフィーラさんとシャマル先生とヴァイスさんぐらいしか．．．」  
カイク「ああ、ここの守りを手薄にするわけにはいけない、ここは俺一人が行く。」

エリス「．．．わかったわ、頼むわよカイク．．．」  
ティア「気をつけて．．．」

カイク「ああ、行くぜ！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

カイク「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「マジレンジャー！」

カイク「マジ・マジユナ」

カイクはマジシャインになり、呪文を唱え六課に戻った。

会場内部

凱「どこだ！？ギンガ！スバル！」

護「凱兄ちゃん！あれなのはとティアナだよ！」

なのは「凱さん！護君！」

ティアナ「今ここにスバルが通りませんでしたか？」

凱「ああ、先ほどすごいスピードで向かっていたので見かけたんだが、見失ってしまった。」

護「ギンガを探しているって．．．」

ティアナ「大変！なのはさん！」

なのは「うん！凱さん！護君、お願いします。」

凱・護「了解！」

こうして、このメンバーでスバル・ギンガの探索に乗り出した。

フェイトとスバル・キャロはすぐに六課に向かったが、フェイトがナンバーズのメンバーに足止めを食らい、エリオとキャロを先に先に行かせた。

ヴィータはリインとユニゾンし、騎士ゼストと戦っていた。

#### 機動六課

オットー、デイト、ルーテシアの襲撃を受け、ザフィーラとシャマルが応戦していたが、歯が立たずザフィーラが負傷し絶体絶命であった。

シャマル「ザフィーラ！」

ザフィーラ「ぐっ．．．」

オットー「たった二人でよく守った、だが僕のIS、レイストーム前では無力だ．．．さよなら。」

とその時、見たことのない魔法陣が現れた。

カイル「ジング・マジユナ！」

そう言つて、防御フィールドを展開し、シャマルとザフィーラを守つた。

シャマル「カイルさん！」

カイル「大丈夫か？」

ザフィーラ「カイル．．．助かった。」

オットー「誰だあれは？」

デイト「あれはゴーカイジャーの一人．．．厄介なのが来た。」

カイル「よくも二人を痛めつけてくれたな、今度はこっちから行かせてもらう、マジランプバスター！」

オットー「ビームが不規則に曲がる？これではかわせない．．．」

デイト「なら接近するだけ．．．」

カイル「そうは行くか、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

カイル「百鬼夜行をぶった斬る！地獄の番犬デカマスター！デイスwordベガ！」

カイルはオットーのレイストームをデイスwordベガで返しつつ、デイトのツインブレイズをはじめ二人を圧倒している。

オットー「これはまずい．．．」

デイト「ええさすがに．．．」

とその時、アスラたちが現れた。

アスラ「お前達はこっちにむかっているガキ共をやれ。」

オットー「わかった．．．」

デイト「感謝する」

そう言つて、二人は離脱した。

カイク「貴様ら．．．」

ルシフェル「よく我々の読みに気付いたな、しかし、それなら何が狙いかはわかるだろうがな．．．」

カイク「！ヴィヴィオか！？」

バディン「そうだ！貴様がかわいがっているあの小娘だ！」

シャマル「な、何ですって！」

カイク「シャマル先生、ヴィヴィオは今どこに！？」

シャマル「今はバックヤードスタッフと一緒にいます．．．」

カイク「ヴィヴィオ．．．今行くからな．．．」

とその時、アスラたちがカイクの前に降り立った。

アスラ「待て、我々を無視していくのか？」

カイク「邪魔だ！どけ！」

ルシフェル「排除したければ、実力でするんだな、もっとも前回の貴様の力に敬意を表して我々も本気を出そう．．．」

カイク「な、なんだと？」

バディン「行くぜ！」

3人「！！妖魔外装！！！！」

すると3人の回りに鎧のようなものが現れ、身体に装着された。

カイク「．．．それがお前らの本気か．．．だがヴィヴィオの元に行くためにも負けるわけにいかねえ！」

そう言つて、カイクは3人相手に一人で戦いを挑んだ。

その頃ジークは、妖魔獣サタンデュラハンとスカルソルジャーの大軍と戦っていた。

ジーク「きりがねえ、こうなったら。」

5人「「「豪快チエンジ!」」」

モバイレーツ「ジユウレンジャー!」

ジーク「行くぜ、みんな!」

4人「「「了解!」」」

エリス「モスブレイカー!」

ティア「プテラアロー!」

フィオネ「トリケランス!」

メルト「サーベルダガー!」

ジーク「行くぜ!龍撃剣!」

そう言つて、5人の武器を合体させた。

ジーク「ハウリングギャノン!」

5人「「「発射!」」」

その一撃でスカルソルジャーは全滅した。

サタンデュラハン「お、おのれ...」

ジーク「行くぜ、豪快チエンジ!」

モバイレーツ「ゴーカイジャー!」

ジーク「ささつと片付けるぜ!ゴーカリストリマー!ゴーカイキ

ャリバージョイント!レンジャーキーセット!」

ゴーカリストリマー「マキシムモード!」

ジーク「マキシムモード!エネルギーチャージ!ファイヤー!」

サタンデュラハン「ぐああああ!」

ジークは毎秒100発のエネルギー弾を妖魔獣に浴びせ、妖魔獣は  
跡形もなく消滅した。

メルト「終わったわね...」

フィオネ「早く、他の方々と合流しましょう...」

エリス「そうね、急ぎましょう...」

ティア「カイクさん...」

ジーク「カイクなら大丈夫だ、あいつなら負けやしねえよ、それよ  
り行くぜ!」

そう言つて、なのはたちを探索し始めた。

#### 機動六課

カイムは一人孤軍奮闘して3人を相手に戦っている。

カイム「ベガスラッシュユ！」

バディン「ぐっ．．．さすがだな．．．」

アスラ「だがもう遅い、あの小娘はすでに回収が完了した。」

カイム「！何だと!？」

ルシフェル「これでここに用はない．．．お前達には消えてもらつ

」

そう言つと3人は攻撃目標をカイムではなく、シヤマルとザフィーラに向けた。

シヤマル「!？」

ザフィーラ「くそ．．．」

アスラ「さらばだ．．．」

そう言つて、3人は巨大なエネルギーの塊を二人に向けて飛ばした。しかし、二人は無事だった。

シヤマル「か、カイムさん!？」

ザフィーラ「お、お前．．．!？」

カイム「ぐっ．．．」

カイムが盾になり二人を守った。しかし、その衝撃で変身が解除された。

ルシフェル「やはりな、貴様に攻撃するよりもあいつらに攻撃すれば必ず貴様は自分の身体を盾にすると思つたから．．．」

バディン「潔いやつだな、それに免じて教えてやる、この場所はあと少しで上空の大型のガジェットドローンの総攻撃が始まる。」

アスラ「それが始めれば、もはやここは完全に終わりだな．．．それではさらばだ。」

そう言つて、3人は消えた。

シヤマル「カイムさん!しっかりしてください!」

カイク「．．．だ、大丈夫だ．．．それよりも．．．俺にはまだやる  
ことがある．．．キングインストローラー！」

キングインストローラー「デカベース！」

カイク「こんなこともあるのかと．．．一時的に異次元空間に戻し  
ておいて正解だったな．．．」

そうカイクは万が一を考えて、デカベースを一旦出かける間に異  
次元空間にしまっておいた。

ザフィーラ「しかし、これでいったい何を．．．」

カイク「見ていればわかるさ．．．行くぜ！」

そう言つて、カイクは傷ついた身体を引きずりながら二人を連れて  
デカベースに乗り込んだ。

カイク「超巨大起動、デカベースロボ！」

牧野「了解です！」

猿頭寺「オールチェック・グリーン！」

パピヨン「デカベースロボ、スクランブル！」

そう言つて、デカベースは巨大なロボットの姿になった。

シャマル「す、すごい．．．」

ザフィーラ「こんな、機能まであったのか．．．」

命「カイクさん、目標確認しました。」

カイク「了解だ．．．ヴォルカニック・バスター！」

デカベースロボの攻撃で上空のガジェットドローンは全て破壊され  
た。

カイク「死守できたか．．．」

その直後、カイクは倒れた。

シャマル「カイクさん！しっかりしてください！」

ザフィーラ「これは思ったより傷が深い．．．」

命「しっかり！カイクさん！」

猿頭寺「パピヨン！すぐにジークさんたちに連絡を！」

パピヨン「はい！」

カイク「．．．ヴィヴィオ．．．」

そう小さく呟いて気を失った。

ヴィヴィオ「...パパ...」

ルーテシアの連れて行かれたヴィヴィオもそう小さく呟いた。

その後、ジークたちはなのはたちと合流したが、そこでスバルの姉ギンガが捕まり、スバルも負傷し、さらにヴィータとリンもやられてしまい、そのうえエリオとキャロも撃墜され、そしてカイムは重傷を負い、その後、ジェイル・スカリエッティからの犯行声明が流され、今回の事件は最悪の結末で終了した。

カリム「...予言は覆らなかった...」

はやて「...まだや...起動六課、GGG、ゴージャイヤーは...まだ終わってない。」

## 第15話 奪われた大切なもの（後書き）

どうも、今回は思ったより短くなってしまいましたが、次回は新しい大いなる力が解放されます、そして、次の大いなる力の際にはカームたち以外のメンバーもパワーアップします、それではまた次回お会いしましょう。

## 第16話 戦士達に大いなる獣拳の力を（前書き）

どうも、今回はタイトルどおりゲキレンジャーの大いなる力が解放されます、さらに本来なら獣拳使いですが、機動六課メンバーとGGGメンバーも潜在能力が高まりますのでよろしくお願いします。

## 第16話 戦士達に大いなる獣拳の力を

その後、機動六課は壊滅的な被害を受けた、幸いデカベースがあつたためそこを拠点に機動六課の職員は対応に追われていた。そして負傷したメンバーは病院の方へ搬送され、カイクもまたシャマルとザフィーラをかばった時の怪我が思ったよりもひどく治療を受けることになり、今ティアがなのは手伝いをしている、とその時ティアとなのははヴィヴィオのウサギのぬいぐるみを発見した。

ティア「なのはさん、あれは・・・」

なのは「あ・・・ヴィヴィオ・・・」

そう言つて、二人はぬいぐるみを拾い上げて、必死に悲しみをこらえた。

地上本部

オーリス「八神二佐、お疲れ様です・・・」

はやて「オーリス三佐、後ほど少しお時間よろしいでしょうか？お伺いしたいことがあります・・・」

オーリス「・・・これから会議ですので、こちらからご連絡します。」

「  
はやて「はい・・・」

そう言つて、オーリスは会議へ向かった。

聖王医療院

シャリー「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・留守を預かっていたのに・・・六課のことを守れなくて・・・」

フェイト「シャリーのせいじゃないよ・・・」

カイク「そうだ、俺が不甲斐なかつただけの話だ・・・」

ヴィータ「そんなことはねえ、お前がいなかったら、シャマルもザフィーラも今頃は・・・」

シャマル「そうです、カイクさんはよくやってくれました、それにあの時デカベースロボを使わなかったら今頃、私達は．．．」  
アイナ「．．．それよりも、ヴィヴィオを預かっていたの．．．な  
んと言っているやら．．．」

カイク「．．．気にするな、よくやったよアイナさんは．．．ぐっ  
．．．」

そう言って、カイクは立ち上がるうとした。

エリス「カイク！」

ヴィータ「おい！無理すんな！」

シャマル「いけません！カイクさん、あなたはまだ安静にしていな  
いと．．．」

フェイト「そうですよ、今はジークさんたちが手伝ってくれていま  
すし．．．」

カイク「．．．大丈夫だ、ちょっと散歩してくるだけだ．．．」

そう言って、傷ついた身体を引きずるかのように病室を後にした。  
シャマル「．．．カイクさん、私達の前ではいつも通りですけど、  
内心はやっぱり．．．」

フェイト「きつと、ヴィヴィオのことが心配なんですね．．．」

ザフィーラ「カイク．．．」

エリス「．．．ティアがいなくなったときと同じね．．．」

カイクは中庭に来ていた。

カイク「．．．くそ！俺は．．．また守れなかったのか．．．ヴィ  
ヴィオ．．．」

ヴィヴィオ「（パパ！えへへ．．．）」

カイクの脳裏にヴィヴィオの笑顔は浮かびそして消えていった。

カイク「これだけの力があっても、いつも助けたいものを守れない  
！．．．ん？なんだこの光りは！？」

その時、カイクの前に光が集まりそこから一人の男が現れた。

ドギー「久しぶりだな、カイク。」

そこに現れたのはアヌビス星人ドギー・クルーガーであり、先代のデカレンジャーの総司令官であった。

カイル「ボス．．．どうしてここに？」

ドギー「我々は一定の時間ならばこちらの世界に来ることができんだ．．．それよりもだいたい派手にやられたな．．．」

カイル「傷はたいしたことはない．．．」

ドギー「．．．お前は、今自分が許せないんだな、あの子を守れなかったことが、しかし、まだ終わったわけじゃない、お前達にはまだやることもある。」

カイル「やること？」

ドギー「そうだ、お前達はあの機動六課のメンバーやGGGのメンバーを含めてある場所に行かなければ行けない。」

カイル「ボス、それはいつたい．．．」

ドギー「話は関係者を全員集めてから話した方がいいだろう、カイル全員を集めてくれ．．．お前があの子を救うためにもどうしても必要なことだ．．．」

カイル「．．．わかりました、できる限りのメンバーを集めます。」

地上本部

オーリス「．．．それで私に聞きたいことは？」

はやて「レジアス中將のお仕事についてです。」

オーリス「極秘事項が多分に含まれます、個人として回答できることはほとんどありませんが．．．」

はやて「．．．聞くだけ聞いていただけますか？」

聖王医療院

ここでは現在、スバルとギンガの父であるゲンヤ・ナカジマから戦闘機人についてのこととスバルとギンガのことについてを聞いていた。

ゲンヤ「まずはどっから話したらいいもんかな．．．」

クロノ「．．．まず三佐が追っていた戦闘機人事件について．．．」  
フェイト「できれば、ギンガとスバルのこと．．．奥様のことに  
ついてても．．．」

ゲンヤ「．．．ああ、戦闘機人の大元は、人型戦闘機械．．．これ  
は随分と古くからある研究でな．．．古くは旧暦からだ、人間を模  
した機械兵器．．．いくつもの世界で、いろんな形式で開発された  
が、ものになった例はあまりない．．．それが、ある時期劇的な進  
化を遂げた．．．25年ばかり前のことだ。」

クロノ「機械と命の融合は特別な技術じゃない、人造骨格や人造臓  
器は古くから使われている。ただ．．．」

カリム「足りない機能を補うためですから、強化とは程遠く拒絶反  
応が長期使用においてのメンテナンスの必要があります。」

ゲンヤ「だがな、戦闘機人は素体になる人間の身体をいじくること  
でそれを解決しやがった．．．」

メルト「．．．そ、そんなことが．．．」  
フィオネ「そ、そこまでのことを．．．」

フェイト「誕生の段階で、戦闘機人のベースとなるよう、機械の身  
体を受け入れられるよう調整されて生まれてくる子供達、それを生  
み出す技術をあの男は生み出した．．．」

カリム「．．．それがジェイル・スカリエッティ．．．」

ゲンヤ「．．．11年前、まだスカリエッティなんて男が絡んでる  
なんて知らなかったが、うちに女房は陸戦魔導士として、捜査官と  
して、戦闘機人事件を追ってた．．．違法研究施設の制圧、暴走す  
る試作機の捕獲．．．スバルとギンガは事件の追跡中に助けた戦闘  
機人の実験体なんだ。」

全員「．．．！！！！」

ゲンヤ「．．．うちは、子供に恵まれなくてな、二人とも髪の色や  
顔立ちも自分と似てるしって．．．まあともかく、俺達の娘として、  
人間として育てるって言い出した．．．技術局でのメンテナンスだ  
の研究協力も多少あったが、二人とも実に普通に育ったよ．．．女

房が死んだのはあいつらにそれなりの物心がついた頃だった、極秘任務中の事故だとかで、死亡原因も真相もいまだに闇の中だがな、女房はどっかで見ちゃいけねえものを、踏み込んだじゃいけねえ場所に踏み込んだらうって思ってる．．．命を捨てる覚悟で事件を追っかけりゃ良かったんだが．．．女房との約束でな、ギンガとスバルをちゃんと育ててやるってな．．．だがまあずっと地道に調べていたんだ、そのうち告発の機会もあるかもしれないってな．．．八神は自分とこの事件に戦闘機人が絡むと予想して、俺に捜査を依頼してきた．．．あのちび狸はよ．．．」

それを聞いてなのは達は少し笑った。

ゲンヤ「まあ、うちの女房と娘達についてはこんなところだ．．．後は合同捜査の方だが、お嬢。」

フェイト「はい．．．」

そう言つてフェイトが説明を始めた。

#### 地上本部

はやて「．．．戦闘機人．．．人造魔導士．．．いずれもかつてはレジアス中將が局の戦力として採用しようとした技術です．．．」

オーリス「．．．随分と昔のことです．．．」

はやて「安定した数を揃えられる、一番可能な力．．．倫理的問題も問われず、量産によるコストダウンさえできれば、実用可能な計画．．．レジアス中將は、その計画をどこかで秘密裏に進めてはいませんかでしたか？．．．スカリエッティはその依頼先としては理想の存在です．．．違法研究者でなければ間違いなく歴史に名が残る存在ですから．．．おそらくは、スカリエッティとの司法取引が行われ、中將は機が熟するのを待っていた．．．スカリエッティは人造魔導士や戦闘機人を大量生産し、それを地上本部が発見、摘発する、という状況を作る、そうなれば摘発したそれらを試験運用．．．という形に持つていける．．．その途中つかまれない捜査員を事故死させるのも優秀な人造魔導士素体を得ることも．．．」

オーリス「くだらない妄想は、いい加減にしていたいただきたいものです。」

はやて「．．．ご意見を伺いたただけです。」

オーリス「あなたは入局１０年でしたか？」

はやて「はい」

オーリス「中将は４０年です．．．１０年前あなたが自分の命を惜しさに自分の騎士に犯罪行為を働かせていた時期にも、あなたがその年で、二佐にまで駆け上がった魔力の源、あなたの体に溶けたロスト・ロギア『闇の書』が、数多の命を奪い続けていた時期にも中将は、地上の平和を守るため、働いていました。」

ジーク「そうやって昔のことをそんなに蒸し返すんじゃないよ。あんたは自分の過去を変えられるとでも言うのか？」  
そう言つて、その場にジークが現れた。

オーリス「．．．あなたはたしか、あのゴーカイジャーの．．．」

ジーク「ああ、ゴーカイレッドのジークだ。」

はやて「ジークさん．．．」

ジーク「はやての、昔のことは聞いた、たしかにそれは消すことが出来ないことでもあるがな、しかし、それでも果たすべきことがあるんだよ．．．」

オーリス「あなたに何がわかるのですか？もしここで何かありましたら、あなた方の立場が悪くなるのもわかっているのですか？」

はやて「ジークさん．．．」

そう言われたが、ジークは不敵な笑みを浮かべて言い放った。

ジーク「上等だ．．．」

オーリス「．．．!」

ジーク「俺達は自分達の誇りと自分達を必要としてくれる人たちのために戦うだけだ、そのためにたとえ全世界を敵に回そうがな！」

ジークは今までに無いくらいの覇気を出した。

オーリス「．．．（な、何のこの人の覇気は．．．）」

はやて「．．．自分と闇の書の罪、否定はしません、そやけど、隠

された真実があるならそれを日の当たる場所に持つてくる、それが今のアタシの仕事です。」

オーリス「．．．聴取や捜査をしたいなら調査礼状か調査許可証を話しはそれからです．．．」

はやて「近いうちきつと．．．」

そう言うとオーリスは去っていった。

はやて「．．．ありがとうございます、ジークさん．．．」

ジーク「言っただろう、ただのお人よしだ．．．お前はただ自分のなすべきことをすればいいことだ．．．」

はやて「はい．．．でもさっきの言葉のうち一つ否定させてもらいます．．．」

ジーク「うん？」

はやて「どんなことがあってもうちらやGGGは絶対にジークさんたちの敵には回りません、それだけは覚えておいてください．．．」

ジーク「ああ、ありがとうございます。」

とその時、モバイレーツが鳴った。

ジーク「ああ、俺だ、カイムか！大丈夫なのか？．．．ああここにはやてもいる、わかった今行くぜ。」

その後、カイムはジークやなのは、凱たちに連絡を取り、病院のある部屋に集めた。

はやて「．．．それでカイムさん、そろそろうちらを集めた理由を話してくれへんか？」

カイム「ああ．．．説明するさ、しかし説明するのは俺じゃないこの人だ、ボスお願いします．．．」

ジーク「ぼ、ボスだと!？」

そう言つて、ドギー・クルーガーが入ってきた。

ティアナ「い、犬!？」

なのは「あ、あの、どちら様で．．．」

ドギー「自己紹介が遅れた、私は元宇宙警察地球署署長のドギー・

クルーガーだ、先代の特捜戦隊デカレンジャーの上司であった男だ。

全員「……ええ!?」「」

全員が驚きを隠せなかった。

その後、ドギーは詳細な説明をした。

はやて「……なるほど、それであなた方はその異世界の中にいると?」

ドギー「ああ、それで今回の事態を見かねて、わずかな時間ではあるが君達に勝つための秘策を授けに来た。」

なのは「勝つための秘策?」

フェイト「そ、そんなものがあるんですか?」

ドギー「ああ、その力は獣拳戦隊ゲキレンジャーの力である、「獣力開花」だ。」

凱「「獣力開花」?」

護「それはいつたい?」

ドギー「この力は本来は獣拳を使うものだけなのだが、その力を浴びたものに潜在能力を大きく引き上げ、秘められた力を開放させることが出来る。」

はやて「……そんな力があるんか……それが本当ならうちらにもまだ勝機があるってことや……しかし、それはどうやったら手に入るんですか?」

カリム「そ、そうです、その力のありかはどこにあるのですか?」

ドギー「獣源郷だ。」

クロノ「獣源郷?それはいつたいどこに?」

そう言つて、ドギーはあるデータを見せた。

ドギー「地球のこのあたりだ。」

凱「地球だつて!?!」

クロノ「今本部がこの状態だ、とてもじゃないけど地球にいけるものはなんて……」

カイル「……そうか!魔法特急トラベリオンエクスプレスなら……」

「カリーム「カイクさん、それはいつたいなんですか？」

カイク「魔法戦隊マジレンジャーの力の一つで、列車の一種だが、これには様々な世界へすぐに行くことが出来る。」

それを聞いた一同は全員頷いた。

クロノ「...これより、はやて部隊長を始めとした前線メンバーはGGメンバーとゴーカイジャーとともにその獣源郷へ向かってもらう。」

はやて「了解です！」

その言葉に機動六課のメンバー全員敬礼をした。

ドギー「俺がしてやれるのはこれくらいだ、後は頼むぞカイク、必ず獣力開花を成し遂げあの子を...ヴィヴィオを助けるんだ。」

カイク「ロジャー！ボス！」

5人「ロジャー！」

そう言つて、ドギーは消えたがその瞬間、その光りがそこにいたメンバーの傷を癒した。

なのは「...これでいつでも行けるね、それじゃ、はやてちゃん。」

はやて「せやな、それじゃ早速準備にかかろうか。」

そう言つて、カイクがトラベリオンエクスプレスを呼び出し、その間に機動六課のメンバーからはやて、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル、スバル、ティアナ、エリオ、キヤロのメンバーが向かうことになり、GGの方でも凱、護の二人が同行することになった。

そして、次の日トラベリオンエクスプレスで地球の獣源郷へ向かった。

## 獣源郷

シグナム「ここが、獣源郷か...」

ヴィータ「なんか不思議な感じだな...」

凱「しかし、ここに新たな力が．．．」

ジーク「ああ、間違いない。」

カイル「．．．（待つてるよ、ヴィヴィオ．．．俺は必ずお前を助けるからな．．．）」

その時、一人の人物が現れたそれはなんとマスター・シャーファーであった。

シャーファー「お前達が、ドギー・クルーガーが言っていたものたちか？」

なのは「ね、猫!？」

フェイト「し、喋ってる．．．」

スバル「すごい．．．」

ティアナ「いったいどうなってるの？」

エリオ「あ、あの、あなたはいったい？」

シャーファー「ふむ、わしは「暮らしの中に修行あり 激獣拳とは日々よく生きることと見つけたり」の激獣フェリス拳のシャーフェーじや、お前達が求めている獣拳戦隊ゲキレンジャーの師匠でもある。」

キャロ「あ、あなたが師匠．．．」

はやて「ほんなら、その「獣力開花」を知ってるんですね？」

シャーファー「ふむ、知ってはいるが、お前達がそれを手に入れられるかは、獣拳の神に認められればの話じゃがな．．．」

護「獣拳の神？」

シャーファー「そう獣拳の創始者であるマスター・ブルーサーの意思、獣拳神サイダインにじゃよ．．．」

フィオネ「獣拳神．．．」

エリス「サイダイン．．．」

シャーファー「そこでじゃ、わしがお前達に修行をしようと思う、行くぞゲキワザ空空連鎖!」

そう言つと空間を引き裂きそこから空間が見えた。

キャロ「す、すごい．．．」

シャーファー「この空間の先にお前達自身と戦うんじゃよ、それから

一つ言っておくことがある．．．もしおぬし達が追い込まれたら、考えるな感じるんじゃ！いいな？」  
なのは「考えるな．．．」  
フエイト「感じる．．．」  
シグナム「ご忠告感謝する。」  
はやて「ほんなら、行ってみようか！」  
はやての一言にその中へみんな飛び込んでいった。  
シャーフー「さてと、ジャンたちの力を受け継ぐものと未来を担うものたちが果たして、この操獣刀を持つに値するかどうか．．．」  
そう言つて、カイクたちを見守っていた。

#### 異空間

カイク「こ、ここは？みんなは？」  
???「ここには今、我々しかいない。」  
カイク「誰だ！？．．．え！？」  
そこにいたのはカイク自身であった。  
もう一人のカイク「俺はそうだな、シャドーカイクとでも言つてもらうか、さてと早速で悪いが俺と戦ってもらうぞ、豪快チェンジ！」  
モバイレーツ「ゴーカイジャー！」  
なんと相手はゴーカイキングに変身した。  
カイク「．．．なるほど、そういうことか、ならこいつを倒せばいい訳か．．．行くぞ、豪快チェンジ！」  
モバイレーツ「ゴーカイジャー！」  
カイクも変身し、戦いを始めたが、カイクの癖を理解しているのか、カイクが一方的にやられている。  
カイク「く．．．こいつ、出来る。」  
シャドーカイク「どうした、お前の力はこんなものか．．．所詮お前はいつも肝心な時に何も守れない、あのヴィヴィオも今のお前では助けることが出来ない！」  
カイク「！言うな！レンジャーキーセット！」

ゴーカイサーベル「ファイナルウェーブ！」

カイル「ゴーカイスラッシュ！」

しかし、簡単にかわされてしまった。

カイル「何!？」

シャドーカイル「言ったはずだ、お前の考えていることぐらいわかるとな．．．今度こちらからだ、レンジャーキーセット！」

ゴーカイサーベル「ファイナルウェーブ！」

シャドーカイル「ゴーカイスラッシュ！」

カイル「ぐああ！」

そう言つて、直撃を食らい吹き飛ばされた。

カイル「．．．くっ．．．」

シャドーカイル「これで終わりか？ならせめて苦しまずに止めを刺してやる．．．」

カイル「ここまでなのか．．．」

シャーフー「（考えるな感じる!）」

カイル「考えるな．．．感じる．．．」

そう言つて、カイルは立ち上がりなそう呟いた。

シャドーカイル「これで終わりだ！ゴーカイスラッシュ！」

カイル「．．．．．見えた！ゴーカイブラスト！」

そう言つて、シャドーカイルにゴーカイガンを浴びせて吹き飛ばした。

シャドーカイル「ぐああ．．．き、急に動きが読めなくなった．．．」

カイル「．．．ゴーカイキャリバー．．．行くぜ．．．」

そう言つて、カイルは突然動きが見違えるようになり、シャドーカイルを押し始めた。

シャドーカイル「こ、これが．．．貴様の本当の力が．．．」

カイル「行くぜ．．．ゴーカイキャリバー、レーザーソード！レーザー

ザースラッシュ！」

シャドーカイルに強烈な一撃を与えて、カイルが勝った。

カイクム「・・・か、勝ったのか・・・？」  
そう言うと、空間が消えて元の場所に戻ってきた。

#### 獣源郷

カイクム「ここは、元の場所か・・・」

シヤマル「カイクムさん、どうやら戻ってこれたようですね・・・」

ジーク「俺達は自分自身と戦わされていたというのか・・・」

シャーファー「そうじゃ、しかし、今の戦いでお前達は試練を乗り越えたのじゃ、それではこれをやろう・・・」

そういうと、キングキーと操獣刀を渡した。

シグナム「キングキーはわかるとして・・・」

なのは「これは？」

シャーファー「操獣刀じゃ、それをかざすのじゃカイクム。」

カイクム「ああ、マスターシャーファー。」

そう言うて、カイクムがそれを掲げると突然地震が起きた。

ザフィーラ「な、なんだこの揺れは？」

フェイト「み、見て、あれは!？」

ティアアナ「巨大なサイ!？」

スバル「あれはいつたい、なんなの!？」

シャーファー「あれこそ獣拳神サイダイインじゃ、どうやらお前達はサイダイインに認められたということじゃな・・・」

その後サイダイインから不思議な光りがその場にいたメンバーに注がれた。

エリオ「こ、これは・・・」

キャロ「暖かい・・・」

凱「身体の中から力が湧き上がってくる・・・」

護「本当だ・・・」

ティア「これが・・・」

エリス「獣力開花・・・」

シャーファー「さてと・・・それじゃ、お前達も出てきたらどうだ。」

そう言う光りの中から先代のゲキレンジャーのメンバーが現れた。  
ジャン「お前等すげえな、もうワキワキだ！」  
レツ「これで君達の潜在能力は引き伸ばされた・・・」  
ラン「でもね、日々の精進を忘れないでね・・・」  
ゴウ「高みを目指し、そして・・・」  
ケン「学び変わる。」  
理央「そうすれば、必ず妖魔などに遅れは取らん。」  
メレ「ちゃんと勝つのよ。」  
カイル「ああ、必ず勝ち、そして、奪われたものは必ず取り返す。」  
はやて「せや、みなさんから教えてもらったことは絶対に忘れません！」  
ジャン「その意気だ！ぜつたいにゾワンゾワンを倒せよ！」  
ジーク「ああ、先輩！」  
シャーファー「それでは、頑張れ未来を担う戦士達よ。」  
そう言うマスターシャーファンたちは消えた。  
メルト「行っちゃったわね・・・」  
フィオネ「そうですね・・・しかし、得たものは大きかったです。」  
カイル「ああ」  
なのは「それじゃ、戻りましょうかミッドチルダに・・・」  
フェイト「来るべき決戦に備えて・・・」  
はやて「せやな、それじゃカイルさん戻りましょうか。」  
カイル「ああ、キングインストラー！」  
キングインストラー「トラベリオンエクスプレス！」  
再び、トラベリオンエクスプレスに乗り込みメンバーは獣源郷を後にした。  
シャーファー「・・・頼むぞ、カイルたちよ・・・必ずあの子を救うんじや・・・」  
それをマスターシャーファーは英雄の聖地から見届けていた。

ゆりかご内部

ルシフェル「どうやら、レリックの接続に成功したようだな．．．」  
ジェイル「ああ、これも君達のおかげだ。」

アスラ「気にするな、それよりもデータだけもらえれば我々は結構だ。」

ジェイル「ああ、それはルシフェルに渡したよ。」

アスラ「それなら、我々はこれで失礼する．．．」

そう言つて、アスラとルシフェルの二人はゆりかごから出て行つた。  
アスラ「ルシフェル．．．お前の占いの結果はどうだった？」

ルシフェル「．．．ゆりかごの壊滅とゴーカイキングの秘められし力の覚醒という結果だったな．．．」

アスラ「そうか．．．それよりもあの小娘についていたメダルをやつらにわからないようにしてきたが、よかつたのか？」

ルシフェル「．．．問題ないだろう、どうせ奴らとの縁はこれつきりだしな．．．それよりも地球の方はどうなっている？」

アスラ「ああ、アブレラとシュバリエが宇宙で戦力集めをしている．．．この世界の力ももう用はないしな．．．我々の目的はあくまで、

地球の方だからな．．．」

ルシフェル「その後、全ての世界に終焉をもたらす．．．それがジン様のお考えということだな．．．」

そう言つと二人は次元を裂いて消えた。

## 第16話 戦士達に大いなる獣拳の力を（後書き）

どうも、今回ボスを登場させましたが、たまにできてカイクたちが導くという存在にします、それと余談ですが、ゴーカイシルバーはある意味とんでもない奴でしたという感じでした、どうやって正式な仲間になるのが気になります。それでは次回は久しぶりに何回かに分けて話を出そうと思いますのでよろしくお願いします。

## 第17話 カイム覚醒 聖王の鎧と聖王の魂（前書き）

どうも、今回はちょっとオリジナル要素を多く取り入れた話にしました、それと歴代の戦隊の一部が出てきますのでご期待ください。そして、オリジナル設定ですがカイムの前世がヴィヴィオと関係があるという設定にしました。

## 第17話 カイム覚醒 聖王の鎧と聖王の魂

カイムたちが獣力開花を果たしてから一週間が過ぎようとしていた、その間はやてはクロノといろいろ話し合いをし、残りの前線メンバーも来るべき戦いに備えて鍛錬を行っていた、その中でカイムだけはこの前の獣力開花が発動した時から、妙な夢にうなされ始めていた、その内容は妖魔の君であるジーンと空飛ぶ船に乗って戦うという夢だった、しかし、カイム自身は夢ことだとこのことを誰にも話さず自分の内にしまいこんでいた。

### 安全評議会

「???」き、貴様は...?」

アスラ「邪魔な輩にはそろそろご退場願おうか...」

「???」協力感謝します...」

アスラ「気にするな、さてと...ルシフェル、ゆりかごの方はどうだ?」

そう言つて、ルシフェルに通信した。

ルシフェル「ああ、問題はない、後は時が来るのを待つだけの話だ...」

アスラ「わかった...俺はこれでジーン様の元に戻る...お前はゆりかご、バディンはスカリエッティのガードだから...」  
ルシフェル「わかつている、必ずエースオブエースはもちろんのこととカイム・アストレア...ゴーカイキングはここに必ず現れる...」

アスラ「その時は丁重におもてなしをしてやれ...」

ルシフェル「ああ、わかつている...」

そう言つて、通信を切った。

クアットロ「あら、ルシフェル様、いったいどなたとお話されていたんですか?」

ルシフェル「アスラにだ．．．」

デイエチ「そうですね．．．それでどんな内容ですか？」

ルシフェル「ただ頼まれた仕事をこなしたという報告だけだ．．．」  
クアットロ「さっすが、アスラ様ですね、仕事が本当に早いんですね。」

ルシフェル「．．．さてと俺はお姫様の様子でも見てくるかな．．．」

「  
そう言うって、ルシフェルはその場を後にし、ヴィヴィオのいる王座に行った。

ルシフェル「（．．．しかし、あのカイムの魂だが、おぼろげでしか確認できないから確証はないが、もしかしたら、あの魂の転生体か？．．．そうなる则该の娘と接触させると厄介なことになるかもしれん．．．）」

デカベース

全メンバーが集まり、牧野、レオナ、猿頭寺、ユーノ、アコースのメンバーが調べ上げた情報を知らせた。それは、スカリエツティの正体についてとあの男の目的とヴィヴィオの正体についてであった。彼自身がアルハザードの技術によって造られた人造生命体で、コードネーム「アンリミテッド・デザイア（無限の欲望）」であり、管理局最高評議会のメンバーの手により生み出された異能の天才児であったということ、ヴィヴィオが「最後のゆりかごの聖王オリヴィエ」のクローンであるという事実であった、さらにそのことによりやつは旧暦において一度は世界を滅ぼした強大な質量兵器、巨大飛行戦艦である「聖王のゆりかご」を起動させることであるという調査結果であった。

アコース「．．．以上が、こちらで調べ上げた限りの情報です．．．」

「  
ユーノ「実は、聖王教会に問い合わせたところ、古代ベルカが滅んだ後、様々な調査が行われ死亡した聖王が扱っていた物、俗に聖遺

物と呼ばれる物が発見され、それは聖王教会に管理されていたのですが、数年前に聖遺物の管理をしていた当時の司祭によって聖王の亡骸を包んだ布「聖骸布」が盗まれるという事件があり、それがスカリエツテイの計画のひとつだったんじゃないかと．．．」

カイル「．．．う．．．」

カイルはその話を聞いていると頭に突然何かが横切った。

ティア「カイルさん？」

エリス「ちよつと大丈夫？」

カイル「大丈夫だ、気にするな。」

その後、はやてはアースラの存在を明かし、こことデカベースを最後の砦とする決意を固めた。その直後、聖王のゆりかごが出現し、スカリエツテイからの通達からがあった。

ジェイル「私のスポンサー諸君、そしてこんな世界を作り出した管理局の諸君。偽善の平和を謳う聖王教会の諸君。見えるかい？」

これが君達が気にしながらも求めていた絶対の力．．．」

凱「こ、これが．．．ゆりかご．．．」

カイル「．．．(う．．．)．．．まただ、またあの変な頭痛だ．．．俺は

あれを知っているのか？」

その直後、大量のガジェットが現れナンバーズとさらわれたギンガ・ナカジマの姿あった。

スバル「ギン姉．．．」

ジーク「どうやら、ゆっくりしている時間はなさそうだな．．．」

はやて「せやね、早速やけど、メンバー編成や！」

その後カイル、ティア、はやて、なのは、ヴィータ、護がゆりかごへの突入を開始し、その際の護衛に凱のGガオガイガーが護衛を担当し、ジーク、フェイト、シャツハ、アコースがスカリエツテイのラボへ行き、地上部隊の応援にはフィオネ、メルト、エリス、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、シグナムのメンバーが行くことになった。

カイル「．．．必ず、ヴィヴィオを助けてみせる．．．」

なのは「ええ、カイクさんやりましょう．．．」

ティア「ヴィヴィオは私達の大切な子供です．．．」

そう3人は心に誓った。そして、別の場所では

牧野「．．．レオナ君、あの人たちに連絡とデータを転送しました  
が．．．」

レオナ「ええ、後はキング君が真の力を発揮さえすればきっと、この局面を乗り切れる．．．」

こうして二人は謎の作業を進めていた。

そして、作戦開始直前

隊長陣のリミッターは全てはずされ、全員戦闘態勢になっていた。

ジーク「それじゃ、地上の方は頼むぜメルト。」

メルト「ええ、まかせて。」

フィオネ「ジークさんもカイクさんたちもお気をつけて．．．」

エリス「あんまり無茶しないでよ．．．」

ティア「大丈夫です、私が付いてますから。」

カイク「それじゃ、それぞれの検討を祈るとしようか．．．行くぜ  
！」

6人「．．．豪快チエンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

その後、ジークはメガレッド、カイクはウルザードファイヤー、ティアはゴセイピンクにチエンジし、それぞれのメンバーとともに決戦の地へ向かった。

カイク「ジーク！死ぬなよ！」

ジーク「それはこっちのセリフだ！本当なら俺の背中を預けるのはお前だけだが、今回はフェイトたちに預けることにするぜ！」

ティア「ジークさん！お気をつけて！」

そう言つて、ジークはサイバースライダーでフェイトたちとともにジエイルのラボへと向かった。

なのは「カイクさん、行きましようヴィヴィオの元へ！」

カイルム「ああ、行くぜ！」  
そう言つて、ゆりかごへの突入を開始した。

地上

メルト「まずいわね、フォワードのみんなと引き離されるなんて．．．」

ファイオネ「それでもやるしかありません．．．」

エリス「さてと、雑魚を片付けてとつとみんなの応援に向かうわよ！」

そう言つて、3人はスカルソルジャーとガジェットの大群に向かつていった。

ラボ

ジーク「ここか？」

フェイト「ええ、間違いありません。」

ジーク「シスターたちとは別行動だが、こっちもさっさと行くこうぜ！」

フェイト「ええ！」

その時、突然壁が砕けた。

バディン「ちい！はずしたか！」

フェイト「あ、あなたはバディン！」

ジーク「てめえか！」

バディン「ここから先は俺とこの二人のナンバーズが相手になるぜ！」

そう言つと、奥からトーレとセツテが出てきた。

トーレ「ようこそ、フェイトお嬢様．．．」

セツテ「それとゴーカイレッド．．．」

ジーク「そう簡単に通してはくれそうにないか．．．行くぜ！」

フェイト「了解！」

そう言つて、二人は3人に向かつていった。

ゆりかご

カイク、ティア、なのは、ヴィータ、護は外のはやて、Gガオガイガーの援護もあり突入に成功した、しかしこの内部は高濃度のAMFがありなのはたちはきつい状況を強いられることとなりカイク、ティア、護が敵の殲滅に主にあたっていた、その後ゆりかごの停止とヴィヴィオの救出のため、ヴィータと護は、ゆりかごの駆動炉へ、カイク、なのは、ティアは王座へ向かった。

ルシフェル「どうやら、もうすぐ来そうだな・・・」

クアットロ「あら、それじゃディエチちゃんお願い。」

ディエチ「了解・・・」

そう言つて、ディエチは砲撃準備に入った。

ディエチ「(でも、こんなやり方どうしても納得が出来ない・・・

あんな小さな子供を使ってまで・・・)」

ディエチは複雑な気持ちになっていた。

地上

メルトたちは雑魚を一掃した後、フィオネとエリスがエリオとキャロの救援に向かい、メルトがティアナの救援に向かった。(スバルはギンガとの対決だったため、手を出すわけにはいかず、やむなくスバルに任せた。)

メルト「どこななの？ティアナ？・・・どうやら結界が張つてあるからこちらからはわからないのね、こうなったら、豪快チェンジ！」

モバレーツ「デカレンジャー！」

メルト「スワットモードオン！SPライセンスセット、ディーリボルバー！」

メルトはデカレンジャーのスワットモードにチェンジした。

メルト「感知システムオン！・・・あそこからエネルギー反応！あのビルね！」

そう言つて、メルトはティアナの救援に向かった。

ティアナ「はああ．．．」

デイド「鬼ごっこは終わり．．．」

ノーヴェ「これで終わりだ！」

その時、結界を破って、ノーヴェを蹴り飛ばしてメルトが来た。

メルト「ティアナ！大丈夫！？」

ティアナ「メルトさん！」

ノーヴェ「ぐあああ！」

ウエンディ「ノーヴェ姉！大丈夫ツスカ？」

デイド「どうやって、この結果の中へ？」

メルト「簡単なことよ、この場所がわかった後、この結界のデータをすぐにデカベースに転送してディーリボルバーに結界を破壊できるようにしたのよ。」

ウエンディ「そ、そんなことが．．．」

メルト「ちなみに外にいたあなた達の仲間も私達の仲間が確保したわ。」

デイド「オットーが．．．」

メルト「やれるわね、ティアナ？」

ティアナ「もちろんです、メルトさんが来たんならもう負けませんよ。」

ノーヴェ「粹がつてんじゃないよ！」

そう言つて、3人相手にティアナとメルトの2人で相手をしていた。

ラボ

ジーク「豪快チエンジ！」

モバイレーツ「ゲキレンジャー！」

ジーク「行くぜ！ゲキワザ咆哮弾！」

バディン「ぐあああ！」

セツテ「ぐっ．．．」

二人まとめて吹き飛ばした。

とその時、奥からスカリエッツィが姿を現した。

ジェイル「すばらしいよ、さすがはプレシア・テストロツサが生み出した人造魔導師と伝説の力を使うものだよ・・・」

フェイト「ジェイル・スカリエツティ・・・」

ジーク「てめえが・・・」

その瞬間、フェイトが捕縛されてしまった。

ジーク「フェイト！」

フェイト「きゃあああ！」

ジェイル「さあ、君も無駄な抵抗はやめて・・・とりあえずは変身を解除してもらおうか・・・」

ジーク「くっ・・・わかつたぜ・・・」

そう言つて、ジークは変身を解除した。

バディン「さてと、さっきはよくもやってくれたな、これはお返しだ！」

ジーク「ぐあああ！」

そう言つて、ジークはバディンに吹き飛ばされた。

ジェイル「おいおい、殺さないでくれよ彼もまた興味深い研究対象だからね・・・」

フェイト「・・・スカリエツティ・・・あなたという人は・・・」

ゆりかご内部

なのは「カイクさん！エネルギー反応です。」

カイク「ああ、わかっている、ここは俺がやる！ゴーカイデリング

ー！エネルギーチャージ！」

そう言つて、エネルギーをチャージし始めた。

カイク「ゴーカイデリングファイナルキャノン！」

ディエチ「へヴィバレル！」

両者の打ち合いだったが圧倒的な威力でディエチの砲撃は完全に吹き消された。

その後、なのはがディエチを捕縛し、3人は先へ向かった。

クアットロ「あら、ディエチちゃん捕まっちゃいましたか。」

ルシフェル「まもなくここに来るか、さっきも言ったが、絶対にゴ  
ーカイキングと聖王を絶対に接触させるな．．．」  
クアットロ「はい、（この人は思ったより臆病ですよね．．．聖  
王の鎧が出ればいくら彼でも勝てるわけないのに）」  
内心ルシフェルを小馬鹿にしたことを心の中で呟いたが、しかし、  
この忠告を聞かないことが後にとんでもないことにつながるとも知  
らずに．．．

ゆりかご王座

ティア「見えました！」

なのは「あれは!？」

カイル「ヴィヴィオ!！」

ヴィヴィオ「パパ．．．ママ．．．!！」

クアットロ「はい、みなさんようこそ、でももう陛下はあなた  
達の知っている陛下ではありませんよ。」

カイル「なんだと!！」

カイルはゴーカイデリンガーを発射したがかわされた。

そう言うと、クアットロはヴィヴィオに何かを吹き込んだ。

ヴィヴィオ「うあああ!！」

なのは「ヴィヴィオ!！」

カイル「貴様! いったい何をしている!？」

クアットロ「あら、ただ単に本当のパパとママのことを教えて、

あなたたちが偽者だつてことを教えているだけですよ。」

ティア「何ですって．．．!？」

その直後、ヴィヴィオの身体が光に包まれて聖王の鎧が身に纏われ  
た。

カイル「ヴィヴィオ．．．」

ヴィヴィオ「．．．あなた達は、私の本当のパパとママを殺した．．

」

なのは「違うよ! なのはママだよ!！」

ティア「私はティアママだよ！そして、こっちがあなたのパパ、カ  
イムパパだよ！思い出して！」

ヴィヴィオ「うるさい！お前たちは私のパパとママなんかじゃない  
！」

カイム・なのは・ティア「！！！！」

その言葉に愕然となった。

クアットロ「ふふふ、これでようやく終わりましたね．．．」

ルシフェル「それはどうか．．．もしかしたら最悪の事態になっ  
たかも知れんぞ．．．」

クアットロ「どうしてですか？見てくださいよ、陛下はあんなに圧  
倒的に敵を倒しているじゃありませんか。」

その光景をルシフェルに見せ、3人は圧倒され絶体絶命であった。

カイム「ヴィヴィオ．．．くっ．．．」

なのは「もうだめなの．．．」

ティア「ここまで来て．．．」

カイム「まだだ．．．まだ諦めない！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

カイム「デーソードベガ！」

カイムはしかしヴィヴィオに攻撃はせず、攻撃を防ぎつつヴィヴィ  
オに近づいた。

そして、カイムはヴィヴィオを抱きしめた。

ヴィヴィオ「は、放せ！お前なんか．．．」

カイム「ヴィヴィオ．．．お前がどんなに拒絶しようが、俺はお前  
を助けると誓った、だからお前の怒りを全て俺にぶつける！それで  
お前が救えるのなら、俺の命をくれてやる！」

ヴィヴィオ「くっ．．．な、何を言っている．．．」

その時、聖王の鎧がカイムに猛烈に反応している。

クアットロ「ど、どういうことですか！？」

ルシフェル「やはりな．．．」

クアットロ「ルシフェル様、何が起きているのですか？」

ルシフェル「簡単な話だ、聖王の鎧は血筋もそうだがそれ以外にもそれを使うことが出来る人間がいるということだ、もっともお前らのような科学に偏った奴らには理解できんがな・・・」  
クアットロ「それはいいたい・・・」

その直後、カイクとヴィヴィオの身体を不思議な光りが包み込み、ヴィヴィオを元の姿に戻し、さらにカイクの手にはヴィヴィオの身体にあつたレリックがあつた。

カイク「ヴィヴィオ・・・」

ヴィヴィオ「・・・パパ・・・本当にパパ？」

カイク「ああ、パパだ、ごめんな一人にして・・・」

ヴィヴィオ「うあああん！パパ！」

そう言つて、ヴィヴィオはカイクに抱きつき大泣きした。

クアットロ「ええ！ど、どうして陛下が元の姿に？」

ルシフェル「・・・つまりだ、奴は最後の聖王オリヴィエの父である先代の聖王の転生体だという事だ！」

クアットロ「！！」

そして、カイクの身体にレリックと聖王の鎧が形を変えてゴーカイキングに虹色に彩られた輝かしいアーマーが装着された。

さらにカイク、ティアの元からゲレンジャーのレンジャーキーがどこかへ飛んでいった。

ラボ

ウーノ「そ、そんな、馬鹿な・・・」

ジェイル「な、なんだ？あの鎧は！？」

とその時、フェイトの拘束が解除された。

ジーク「シャツハ！アコース！」

アコース「大丈夫ですか？」

シャツハ「遅れてすみません・・・」

バディン「てめえら！まとめてぶっ飛ばす！」

とその時、歩いてくる6人の男女がいた。

???「その言葉そっくりそのまま返してやるぜ！」

ジェイル「だ、誰だ！」

フェイト「あ、あなた達は!?!」

ジーク「先輩！」

そこにいたのはなんと百獣戦隊ガオレンジャーのメンバーが居た。

月磨「いったん、俺達の力、返してもらおうぞ後輩！」

そう言うレンジャーキー6人のもとに飛んで行き、形が変わった。

トーレ「そ、それは!?!」

セツテ「いったい、何者!?!」

6人「ガオアクセス! サモン・スピリット・オブ・ジ・アース  
!?!」

その瞬間、変身を遂げた。

ジェイル「こ、これは．．．まさか、お前達は!?!」

アコース「あなた達は、もしかして．．．」

走「灼熱の獅子! ガオレッド！」

岳「孤高の荒鷲! ガオイエロー！」

海「怒涛の鮫! ガオブルー！」

草太郎「鋼の猛牛! ガオブラック！」

冴「麗しの白虎! ガオホワイト！」

月磨「閃烈の銀狼! ガオシルバー！」

走「命あるところ、正義の雄叫びあり．．．」

6人「百獣戦隊ガオレンジャー! ! !」

ジェイル「ガオレンジャーだと．．．」

シャツハ「．．．どうやら、とてつもない味方が来てくださったみたいですね。」

走「行けるか! ジーク！」

ジーク「ああ、行くぜ! 豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ジーク「派手に行くぜ！」

フェイト「はい！」

そう言つて、敵に向かつていった。

地上

全員合流に成功したが、ルーテシアの暴走とナンバーズの執拗な攻撃に対してじわじわ追い詰められて行っている。

メルト「みんな大丈夫？」

エリオ「は、はい大丈夫です。」

キャロ「ルーテシア！もうやめて！」

ルーテシア「・・・」

ティアナ「さすがに・・・カートリッジがもう残り少ない・・・」

スバル「ギン姉・・・」

フィオネ「ここまでですか・・・」

エリス「もう打つ手がないの・・・」

とその時、8つの光りが集まった、そこから8人の男女が現れた。

ヒカル「大丈夫かい？」

魁「諦めんなよ！」

翼「俺達が手伝つてやるぜ！」

そこに居たのはなんと魔法戦隊マジレンジャーの家族全員だった。

エリオ「あ、あなたたちは？」

ティアナ「いつたい・・・」

フィオネ「ヒカルさんに、みなさんも!？」

エリス「ど、どうして!？」

その瞬間、マジレンジャーのレンジャーキーが彼らの元へ飛んできた。

勇「少し返してもらおうよ・・・」

スバル「も、もしかして・・・」

キャロ「あなた達は・・・!」

深雪「行くわよ。みんな」

全員「・・・おう!」「・・・」

6人「・・・天空聖者よ、我らに魔法の力を！ 魔法変身！ マージ・

マジ・マジロー！」「」

ヒカル「天空変身！ゴール・ゴル・ゴル・ゴルディーロ！」

勇「天空変身！ゴール・ゴル・ゴル・ゴルディーロ！」

8人は変身を完了させた。

ノーヴェ「な、なんのこいつら？」

ルーテシア「...!?!？」

勇「猛る烈火のエLEMENT！天空勇者ウルザードファイヤー！」

ヒカル「輝く太陽のエLEMENT！天空勇者マジシャイン！」

深雪「煌く氷のエLEMENT！白の魔法使い、マジマザー！」

詩人「唸る大地のエLEMENT！緑の魔法使い、マジグリーン！」

芳香「吹きゆく風のエLEMENT！桃色の魔法使い、マジピンク！」

麗「揺蕩う水のエLEMENT！青の魔法使い、マジブルー！」

翼「走る雷のエLEMENT！黄色の魔法使い、マジイエロー！」

魁「燃える炎のエLEMENT！赤の魔法使い、マジレッド！」

8人「...」勇気の絆が未来を拓く！ 我ら魔法家族！ 魔法戦隊マ

ジレンジャー！」「」

メルト「強力な味方が来てくれたわよ...」

ティアナ「マジレンジャー...この人たちと一緒になら必ず乗り切

つてみせる！」

スバル「うん！」

エリオ「はい！」

キャロ「ええ！」

魁「行くぜ！みんな！」

全員「...」おお！」「」

マジレンジャー続いて、フォワード陣とメルトたちも向かっていった。

ゆりかご駆動炉

ヴィータ「はああ...やっと着いたか...」

護「大丈夫？ヴィータ...」

ヴィータ「ああ、すまねえ、お前が運んでくれなかつたら持たなかつたかもな．．．」

敵の奇襲攻撃で負傷したヴィータだが、気力を振り絞って護と一緒に駆動炉へ到着した。

その時、以前倒したガーゴイドルギンが立ちはだかった。

ヴィータ「てめえ．．．そこをどきやがれ！」

ガーゴイドルギン「そうは行かないな．．．通りたければ俺を倒すんだな、もつとも俺は以前よりも数段パワーアップしている今の前から勝てるとは思えんがな．．．」

ヴィータ「くっ．．．護．．．ここはあたしが引き受ける．．．お前は駆動炉を破壊しろ！」

護「で、でも、ヴィータ、その身体で．．．」

ヴィータ「早くしろ！このままじゃ間に合わなくなる！」

とその時、7つの光りが現れた。さらに先ほど飛んでいったゲキレンジャーのレンジャーキーが来た。

ヴィータ「あ、あんたらは！」

ジャン「大丈夫だったか？」

レン「ここは僕達が力を貸そう。」

ケン「可愛い子ちゃんを痛めつけてくれた分、きつちりさせてもらうぜ。」

ラン「行くよ！みんな！」

ジャン「レッツ・ラン」「滾れ獣の力！」「」

ゴウ「響け獣の叫び！」

ケン「研ぎ澄ませ獣の刃！」

5人「」「ビースト・オン！」「」

理央・メレ「臨気外装！」

ガーゴイドルギン「き、貴様らは！？」

ジャン「身体に漲る、無限の力、アンブレイカブル・ボディ！ゲキレッド！」

ラン「日々是精進、心を磨く、オネスト・ハート！ゲキイエロー！」

レツ「技が彩る大輪の花、ファンタスティック・テクニク！ゲキブルー！」

ゴウ「紫激気、俺流、わが意を尽くす、アイアン・ウィル！ゲキバイオレット！」

ケン「才を磨いて、己の未来を切り開く、アメイジング・アビリティ！ゲキチヨッパ！」

理央「猛きこと獅子の如く、強きこと、また獅子の如く、我が名は理央、黒獅子！」

メレ「理央様の愛のために生き、理央様の愛のために戦うラブウォリアー、臨獣カメレオン拳使いのメレ！」

7人「燃え立つ激気は正義の証！獣拳戦隊ゲキレンジャー！！」

護「うわっはー！」

ヴィータ「こりゃ、百人力の味方が来たぜ！これでまだ戦えるってもんだぜ！」

そう言つて、ヴィータはデバイスを構えなおした。

ジャン「行くぜ！あのゾワンゾワンを倒すぞ！」

そう言つて、ヴィータはゲキレンジャーと一緒にガーゴイドルギンに向かっていった。

第17話 カイム覚醒 聖王の鎧と聖王の魂（後書き）

どうも、今回はちょっと半端で終わらせましたが、次回はJS事件のラストになります、あともう一つの戦隊も出す予定ですのでよろしくお願ひします。

## 第18話 野望の終焉と新たなる戦いへ（前書き）

どうも、ミッドチルダ編のラストです、今回はデカレンジャーも登場します、そしてGガオガイガーとのオリジナルの合体攻撃もあるのでよろしくお願ひします。

## 第18話 野望の終焉と新たなる戦いへ

ゆりかご玉座

カイル「こ、これは．．．？」

ドギー「それは、キングテクターだ．．．」

ティア「あ、あなたは!？」

なのは「クルーガーさん!」

そこにはなんとドギー・クルーガーと特捜戦隊デカレンジャーのメンバーがいた。

クアットロ「ど、どうなっていますの、ちび騎士のところにも変な奴らが現れるし．．．」

ルシフェル「．．．俺に聞くな．．．(どうやら、占いどおりになつてしまったようだな．．．仕方がないせめてもの義理立てだ。)

．．．妖魔獣ギガントバフオメット!

そういうと通常の妖魔獣よりも巨大な妖魔獣が現れた。さらにルシフェルとクアットロも現れた。

ルシフェル「遊びは終わりだ．．．」

クアットロ「ここからは、私達もお相手しますわ」

カイル「妖魔獣!?!．．．どうやらこいつについて聞くのは後回しだな．．．行くぞ、なのは、ティア!．．．ヴィヴィオは後ろに隠れてろ!」

ヴィヴィオ「う、うん、パパ!」

なのは「こっちは準備OKです!」

ティア「行きましょ!」

バン「後輩!俺達の手ちよつと返してもらっせ」

そういうとデカレンジャーのレンジャーキーがデカレンジャー元へ飛んでいき、形を変えた。

ジャスミン「それじゃ、ドンと行ってみよっ!」

ドギー「チェンジ、スタンバイ!」

7人「ロジャー！」」」

5人「エマーゼンシー、デカレンジャー！」」」

テツ「エマーゼンシー、デカブレイク！」

ドギー「エマーゼンシー、デカマスター！」

スワン「エマーゼンシー、デカスワン！」

8人はデカレンジャーに変身を完了した。

クアットロ「も、もしかして、この人たちも？」

ルシフェル「まさか、貴様たちとまた会うことになるとは……」

ドギー「それはこっちのセリフだ……ルシフェル、今度こそデリートしてくれる。」

ルシフェル「そう簡単に行くか……」

バン「それじゃ、久しぶりに行ってみる相棒！」

ホージー「ふ……ああ、行くぜ相棒！」

そう言うのと8人は、ルシフェルとクアットロの二人に向かいあった。

バン「一つ！非道な悪事を憎み！」

ホージー「二つ！不思議な事件を追って！」

セン「三つ！未来の科学で捜査！」

ジャスミン「四つ！よからぬ宇宙の悪を！」

ウメコ「五つ！一気にスピード退治！」

テツ「六つ！無敵が何かいい！」

6人「SPD！！！！」

バン「デカレッド！」

ホージー「デカブルー！」

セン「デカグリーン！」

ジャスミン「デカイエロー！」

ウメコ「デカピンク！」

テツ「デカブレイク！」

ドギー「百鬼夜行をぶった斬る！地獄の番犬デカマスター！」

スワン「真白き癒しのエトワール！デカスワン！」

8人「特捜戦隊デカレンジャー！！！！」

ヴィヴィオ「すごい！パパ達みたい！」

ジャスミン「ありがとね、お嬢ちゃん。」

クアットロ「いい気になっていられるのも今のうちだけですよ、もうすぐゆりかごは攻撃ポイントに到達しますからね．．．」

なのは「な、何ですって!？」

スワン「それなら心配ないわ、私がコンピュータのシステムを書き換えたからね、到達しても攻撃は自動じゃしてくれないわ。」

クアットロ「そ、そんな馬鹿な!？」

クアットロは慌ててシステムを確認したら、確かにシステムが書き換えられている。しかもAMFがオフになっている。

ドギー「スカリエッティのような、天才は一人ではないということだ．．．」

クアットロ「こ、こんなことが．．．」

ルシフェル「こいつらを叩きのめしてから、再度書き換えればそれでいい話だ．．．行け！ギガントバフォメット！」

ギガントバフォメット「ははは！」

そう言つて、ギガントバフォメットは突っ込んできた。

バン「そうは行くか！スワットモードオン！SPライセンスセット！ディーリボルバー！」

そう言つて、5人はスワットモードにチェンジし、敵に向かっていった。

バン・ホージー「はあ！」

セン・ジャスミン・ウメコ「はああ!!」

まず5人がそれぞれ連携し、ディーリボルバーを発射した。

ギガントバフォメット「ぐあああ！」

デカブレイク「ブレスロツトル！高速拳ライトニングフィスト！」

デカマスター「ディーソードベガ！ベガスラッシュ！」

デカスワン「スワンレインボー！」

クアットロ「やりますね〜ですけど、私を捉えることは出来ませんよ〜」

そう言つて、自分のISであるシルバーカーテンを使った。

なのは「見えなくなつた!？」

ホージー「ふ．．．甘いぜ!感知システム．．．そこだ!」

そう言つて、ディーリボルバーで攻撃した時そこから姿を現した。

クアットロ「ど、どうして、私の居場所が?」

セン「俺達のこのスワットモードにはありとあらゆるステルス装置にも判別できる感知システムがあるんだよ。」

なのは「今度こっちからだよ!ブラスターモード!スターライトブレイカー!」

その一撃で、クアットロは行動不能になり、さらにギガントバフオメットをその場所から吹き飛ばした。その後クアットロを確保した。ルシフェル「こうなつたら．．．再度システムを起動させねば．．．」

そう言つて、ルシフェルは中枢部に向かった。

カイク「．．．俺がこの先に行く、なのはとティアはヴィヴィオをつれて先に脱出しろ!」

なのは「え!で、でも!」

ティア「カイクさんはどうするんですか!？」

カイク「．．．どうやら、俺にはこれを止める義務があるようだぜ．

．．．そうだろう先輩、ボス．．．」

ドギー「．．．ああそうだ、お前は実はこのヴィヴィオの元となつている聖王の父親の転生体なんだ．．．」

なのは「ティア!」

スワン「彼はね、本当はこれを使って妖魔を殲滅しようとしたの．

．私達レジエンド戦隊と一緒に．．．」

テツ「でも途中で戦死したため、これの本当の使い方をされることなく終わつたんだ．．．」

それを聞いた、なのはとティアは黙ってしまった。

カイク「大丈夫だ．．．俺は必ず帰ってくる．．．ヴィヴィオを頼む．．．」

なのは「カイクさん．．．」  
ティア「わかりました．．．」  
ヴィヴィオ「．．．パパ、絶対に帰ってきてね．．．」  
カイク「ああ、約束は守る．．．」  
そう言つて、カイクはキングスインストローラーを起動させてから奥へ単身突入していった。  
ドギー「．．．さて、俺達は自分のなすべきことをなすだけだ．．．」  
「  
そう言つて、なのは、ティア、ヴィヴィオとデカレンジャーのメンバーは脱出を開始した。」

#### 駆動炉

5人「『激気！』」  
2人「『臨気！』」  
7人「『注入！』」  
ゲキレンジャーのメンバーはヴィータに力を注入した。  
ヴィータ「よし！アイゼン！ぶち抜け！！」  
ガーゴイドルギン「ぐあああ！！」  
ガーゴイドルギンが爆死した。  
ジャン「やったな！」  
ヴィータ「ああ．．．後は護がやってくれば．．．」  
護はヘルアンドヘブンで駆動炉を破壊しようとしていた。  
護「ヴィータ！」  
護の両手から放たれたエネルギーが駆動炉を完全に破壊した。  
護「．．．はあ．．．はあ．．．これでやっと．．．」  
ヴィータ「護！よくやったぞ！なのはたちから連絡があつた。ヴィオの救出に成功したつて．．．」  
護「本当！」  
ヴィータ「ああ！後は、カイクが中枢部を破壊して脱出すれば終わる、あたし達も脱出だ！」

そう言つて、ゲキレンジャーを伴つて、ヴィータたちも脱出した。

地上

こちらはマジレンジャーの協力もあり、ナンバーズの捕縛、ルーテシア、ギンガの保護に成功した。

スバル「ギン姉．．．」

ギンガ「．．．スバル．．．これを．．．」

そう言つて、自分のデバイスであるブリッツキヤリバーをスバルに渡した。

スバル「ギン姉．．．これつて．．．」

ギンガ「まだ、終わつてないわ、あなたはまだ助けに行かなければいけない人がいるの．．．」

スバル「．．．わかつてるギン姉．．．」

そうギンガの言葉にスバルは頷いた。

その後、ヴァイスのヘリでメルト、フィオネ、エリス、スバル、ティアナ、ギンガを乗せてゆりかごへ向かった。

勇「後は彼らだけで十分だな．．．」

深雪「ええ、そうね。」

ヒカル「さて、我々は帰りましょうか．．．」

そう言つて、マジレンジャーは元の世界へ帰つていった。

ラボ

6人「破邪百獣剣！」

バディン「ぐあああ！」

走・月磨「邪気退散．．．」

バディンはガオレンジャーの一撃を受けて吹き飛ばされた。

バディン「これ以上付き合つつもりはない、撤退する。」

そう言つて、バディンは姿を消した。

ジーク「先輩！こつちも片がついたぜ！」

ジーク、フェイトはアコースとシャツハの協力でスカリエツティと

ナンバーズを全て確保した。

走「そうか！」

そして、その直後、エリオとキャロが駆けつけた。

エリオ「フェイトさん！ジークさん！」

フェイト「エリオ！キャロ！」

キャロ「ご無事ですか？．．．ってその方々は？」

フェイト「私達の命の恩人、百獣戦隊ガオレンジャーの方よ。」

エリオ「あなた方が．．．フェイトさんたちを助けてくれてありがとうございました。」

岳「気にすんな」

海「俺達は俺達のなすべきことをやっただけだ．．．」

フェイト「さて、エリオ、キャロ、スカリエツティと戦闘機人を連行するよ。」

エリオ・キャロ「はい！！！」

そう言つて、メンバーはラボを調査員達にまかせて、その場を離れた。

ジーク「．．．カイム、後はお前の方だぜ．．．」

ゆりかご中枢部

ルシフェル「来たか．．．ゴーカイキング．．．」

カイム「今度こそ、追い詰めたぜルシフェル、覚悟しろ。」

ルシフェル「勘違いするな、俺はここを死に場所にするつもりはない、俺はこれから地球へ行き、戦力を集めなければならないのだ。」

カイム「なんだと！地球へ！」

ルシフェル「そのためにお前にはこのギガントバフォメットと戦ってもらう．．．もっともお前がこいつを倒してもここから脱出できなければ意味はない、先ほどこの場所を吹き飛ばすぐらいの爆弾をセットさせてもらった。」

カイム「何！？」

ルシフェル「これの解除は私でなければ不可能、爆発は残り20分

だ、ではさらばだ。」

そう言つて、姿を消した。

ギガントバフォメット「これで貴様も終わりだな……。」

カイル「まだだ……俺は最後まで足掻いてやる……レンジャー

キーセット、ゴーカイガンセット!」

ゴーカイデリンガー「ファイナルウエーブ!」

ギガントバフォメット「死ねええ!!!」

カイル「ゴーカイデリンガーファイナルウエーブモード!」

カイルはゴーカイデリンガーを発射して、ギガントバフォメットは完全消滅した。

ギガントバフォメット「ぐあああ!!!」

しかしカイルは今の攻撃を使ってしまったため、立ち上がるのが精一杯だった。

カイル「……ぐっ……さすがになのはやティアをかばつてゴーカイデリンガーを撃ちすぎたな……もうこれ以上は身体が動かない……これまでか……ごめん、ヴィヴィオ、パパは約束守れそうもない……。」

その時、壁をぶつ壊しバイクに乗り、スバルとティアナが救出に来た。

スバル「カイルさん!」

ティアナ「無事ですか!」

カイル「……スバル……ティアナ……どうして……ここに?」

スバル「何言ってるんですか!カイルさんは私達の仲間で、私達に本当の強さとそれに必要なことを教えてくれた大切な人です!」

ティアナ「そうです!カイルさんがいたからこそ、私達はここまで来れたんです!だから今度は私達がカイルさんの力になりたいんです!」

カイル「……二人とも……ありがとう……。」

スバル「絶対にカイルさんをヴィヴィオのところへ連れて行きます

！  
カイル「ああ．．．強くなつたな、二人とも．．．」  
そう言うと、スバルはカイルに肩を貸して、ティアナのバイクに乗せ脱出した。

ゆりかご外部

シャーリー「大変です！ゆりかごの中枢部で爆発がありました！  
はやて「なんやて！」

ヴィヴィオ「パパ！」

なのは「お願い．．．スバル、ティアナ．．．」

ティア「カイルさんをどうか．．．」

とその時、ウイングロードがでてきたそこからスバルとティアナとそしてバイクの後ろに乗ったカイルがいた。

メルト「カイル！」

エリス「まったく冷や冷やさせて．．．」

フィオネ「よかった．．．」

ヴィータ「やったぜ！カイル、よくやったぞスバル！ティアナ！」

その直後、上空で待機していたGガオガイガーのもとにデカウイングロボが現れた。

バン「よくやったぜ！後輩！」

ホージー「後の処理は俺達がするぜ！」

セン「それじゃ、久しぶりに行こうか！」

ジャスミン「それじゃ、そのライオン君！」

凱「お、俺か！？」

ウメコ「そう、ちょっと手伝ってね。」

凱「ああ、なんだかよくわからないけどわかった。」

5人「」「特捜変形デカウイングキャノン！！」「」

その直後、Gガオガイガーがデカウイングキャノンを持ち構えた。

凱「こつちの準備はOKだ！」

バン「一気に行くぜ！SPライセンスセット！コントローラーモ―

ド！」

凱・デカレンジャー「『ジエネシックススペシャルファイナルバスター！』」

この一撃でゆりかごは完全に破壊された。

5人「『ゴツチユー！』」

バン「これにて一件コンプリート！」

その言葉で今回の作戦は終了した。

デカベース

ヴィヴィオ「．．．パパ．．．」

カイル「．．．ヴィヴィオ．．．」

ヴィヴィオ「パパ！」

ヴィヴィオはカイルに向かっていき、カイルはヴィヴィオを思い切り抱きしめた。

カイル「ヴィヴィオ．．．ただいま．．．」

ヴィヴィオ「おかえりなさい．．．う、うあああん！パパ！」

その直後、ヴィヴィオは大泣きした。

なのは「よかった．．．ヴィヴィオ．．．」

ティア「本当に．．．」

ヴィータ「あれ？あのレジェンド戦隊の連中は？」

ジーク「ああ、あの人たちなら帰っていったよ、こっちにいられるのも限られているみたいだな．．．」

シグナム「そうか、できれば手合わせしていただきたかったがな．．．」

アギト「お前って奴は．．．」

シグナムは騎士ゼストから今回の事件の詳細なデータを手に入れ、さらにアギトを仲間に加えることで敵の大規模な殲滅に成功していた。

フィオネ「しかし、これで機動六課の方々は目的を達成されましたね．．．」

メルト「そうね、あとは機動六課の隊舎の修復だけね。」  
エリス「でも、そうなる後は解散するだけよ．．．」  
そう言つて、少し寂しい気持ちになつたが後に「JS事件」と呼ばれるこの事件は幕を閉じた。

そして、それから数ヶ月が経つた、機動六課も隊舎が修復され、比較的平穏な日々が続いていた。

ちなみにスカリエッティと一部のナンバーズは捜査に非協力的ということもあり、衛星軌道拘置所へ投獄された。そして、それ以外のナンバーズとルーテシア、アギトは海上隔離施設で更生プログラムをうける事になった、ヴィヴィオも検査を終え正式にカイムの養子になり、ヴィヴィオ・アストレアになった。そして、今日は機動六課の解散にして、スバルたちフォワード陣の卒業の日であった。

はやて「え、本来なら本日を持ちまして機動六課は解散ということになります、ここで重要な知らせがあります、心して聞いてください．．．」

その後、機動六課メンバーは衝撃の事実が明かされた。

デカベース

カイムたちは集まっていた。

カイム「．．．奴はたしかに次の目標は地球だと言つていた．．．」

ジーク「．．．となると、俺達も地球へ向かつた方がいいな．．．」

凱「俺達も引き続き、協力させてもらう。」

フィオネ「ありがとうございます、凱さん。」

メルト「でも、これからは機動六課のメンバーには頼めないわね。」

エリス「仕方ないわよ、あの子達には自分の道があるんだから．．．」

「  
護」とにかく、これから本格的に妖魔の攻撃が激しくなっていくわけだから．．．」

命「もうこれ以上、あの子達を巻き込むわけにはいかないわね．．．」

「  
牧野「それでは、私達の方で準備を進めましょうか．．．」  
猿頭寺「その方がいいですね．．．」  
パピヨン「はい、それでは地球のオービットベースに連絡を取りま  
す．．．」  
華「私も手伝います。」  
とその時、はやてたちが来た。  
はやて「勝手に話を進めんといてください。」  
ジーク「はやて！？どうした、機動六課は解散にあわせた送別会だ  
ろう？」  
なのは「いえ、まだ解散はしませんよ。」  
全員「「ええ！？」「」」  
フェイト「私達は、これから新たな任務のため機動六課は解散出来  
なくなつたんです。」  
カイク「新しい任務？」  
シグナム「ああ、それは．．．」  
ヴィータ「お前達と一緒に妖魔と戦い、そして本当の平和を取り戻  
せだ！」  
シヤマル「ちなみ、その前に配属が決まっていた人たちもいたんで  
すけど．．．」  
ザフィーラ「それぞれ自身の判断で残ることになってな．．．」  
ティア「どれだけの人が残つたんですか？」  
リン「それが、全員なんですよ！」  
そう言うとフォワード陣が姿を現した。  
スバル「カイクさん！私達も一緒に戦わせてください。」  
ティアナ「私達もカイクさんたちの仲間です。」  
エリオ「足を引っ張るような真似はしません．．．」  
キャロ「ですから、私達も戦わせてください．．．」  
はやて「ジークさん、私言うてましたよね、どんなことがあっても  
ジークさんたちの敵にはなりませんって．．．」

それを聞いたカイクとジークは静かに頷いた。

カイク「お前達の覚悟は聞いた。」

ジーク「一緒に戦おうぜ！」

全員「……はい!!」「……」

その言葉に機動六課のメンバー大きな声で答えた。

そして、その後地球ではデカベースを機動六課の拠点にすることになり、必要なものを移動させ、一旦異空間にしまった後、カイクが呼び出した魔法特急トラベリオンエクスプレスで人間の方は地球へ向かった。

海鳴市

ここの海上にデカベースが置かれることになり、滞在していたGGメンバーはオービットベースへ戻り、その入れ違いに機動六課のメンバーがここに住むことになった。

カイク「はやて!」

はやて「なんや、カイクさん？」

カイク「これを……」

はやて「なんやこれ？」

そう言つて、デカレンジャーが持っていたSPライセンスに似ているものを渡した。

カイク「それははやて用のマスターライセンスだ、それがあれば俺たちともある程度の状況でも通信は出来るし、何よりデカベースロボを起動させることが出来る、メンバーのリミッター解除されて、はやてはここに残ることが多くなるから、臨機応変にデカベースで指揮を執ることが多くなると思つてな……」

はやて「カイクさん……おおきに、これは私が大切に使わせてもらうわ。」

その時、遠くからカイクを呼ぶ声が聞こえた。

ヴィヴィオ「パパ!」

カイク「おっと、ヴィヴィオが呼んでるな……」

はやて「うふふ、早く行った方がええとちやいますか？」

カイル「ああ、それじゃ」

そう言っつて、カイルはヴィヴィオのところへ行った。

はやて「さて、またこんな形で地球に戻ってくるとは思わなかったな．．．明日から新しい戦いが始まるんや、それじゃ行っつてみようか！」

そう言っつて、はやては新設されたデカベースの部隊長室へ向かった。

## 第18話 野望の終焉と新たなる戦いへ（後書き）

どうも、次回から戦いの舞台が地球へと移ります、さらに今回はあまり語られなかったキングテクターの力についても次回説明したと思いますので、次回またよろしくお願いします。

## 第19話 蘇った史上最大の魔女（前書き）

どうも、今回のタイトルお分かりかと思いますが、今回はバンドー  
ラー味が復活します、ちなみになのはメンバーも巨大ロボットに乗  
れるように設定しましたのでよろしくお願いします（ちなみに条件  
があるロボットは条件がありますが）後今回は前に比べると少し話  
が短いのでご了承ください。

## 第19話 蘇った史上最大の魔女

異世界 妖魔の君の居城

ジーン「どうやら、このたびは失敗に終わったようだな．．．」

アスラ「．．．申し訳ありません．．．」

ルシフェル「．．．返答する言葉もございません．．．」

バディン「．．．奴らを侮っていました．．．」

ジーン「よい、お前達は何も成果を挙げなかったわけではない．．．それにシュバリエとアブレラが戻り、面白いものを持ってきた．．．これだ．．．」

そう言うとジーンは一つの壺を出した。

バディン「何ですか？この壺は？」

ルシフェル「こ、この壺はまさか？」

アスラ「知っているのか？ルシフェル？」

ジーン「ほう、さすがはルシフェルだ、そうこれはあの大サタンと契約を結び史上最大の魔女となったあの魔女バンドーラが封印された壺だ、魔力を失ったが、私の身体には大サタンの力がある．．．この大サタンの力をバンドーラに全て与えることで、さらなる力を持って復活するだろう．．．それでは封印を解こう．．．」

そう言つて、封印の壺の封印を解いた。

バンドーラ「こ、ここは？」

ブクバク「ば、バンドーラ．．．どこなんでしょうかね？」

トットバット「バカ！バンドーラ様がわからないのにお前が聞くな！」

プリプリカン「やめんか、喧嘩している場合か．．．プリプリ．．．」

グリフォーザー「バンドーラ様。」

ラミィ「ダーリン！気をつけて．．．」

グラミィ「父上！母上！ここには異様な空気が．．．」

バンドーラー一味は混乱していた。それを見たジーンはバンドーラーに話した。

ジーン「よくぞ蘇った、バンドーラーよ私は妖魔の君ジーンだ．．．」

バンドーラー「妖魔の君、ジーンだって！」

ブックバツク「バンドーラー様、知っているんですか？」

バンドーラー「ああ、あの全ての世界を意のままに出来る存在．．．それじゃここは．．．」

ジーン「．．．説明しよう．．．」

そう言つて、ジーンは説明し、バンドーラーに自分が持っていた大サタンの力を与え、バンドーラーの魔力が前より強くなり完全に戻った。バンドーラー「こりゃいい、それじゃジーンよ私も協力させてもらうよ．．．それじゃプリプリカン、さっそく．．．」

そう言つて、バンドーラーは上機嫌でプリプリカンに久しぶりのドーラモンスターを作らせた。

デカベースのデカルーム

今カイク、ジーク、はやて、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータのメンバーは牧野先生とレオナからキングテクターのことについて説明を聞いていた。

牧野「つまり、キングテクターは妖魔に対抗するためにレジェンド戦隊の英知と古代ベルカの協力もあり、完成させたものなんですよ、聖王の鎧はもともを真の力を封印するための形態で、さらにゴーカーキングだけは特別な人間しか変身出来ない様になっていたので、おそらく変身できるのは聖王の魂を持つカイク君とその遺伝子を持つヴィヴィオちゃんだけですな．．．」

レオナ「そうなの、悪用できないようにそういう風にしてあるの。」

はやて「それで、そのキングテクターにはどんな力があるんですか？ 牧野先生、レオナちゃん。」

レオナ「キングテクターには大いなる力が解放された歴代のレジェンド戦隊の力を豪快チェンジしなくても使うことが出来るの、それ

に空中だろうと宇宙でも自由に活動できるしね．．．」  
フェイト「あの力を自由に使えるの．．．」  
シグナム「すごいな．．．」  
なのは「でもそうになると、今使えるのは、デカレンジャー、マジレンジャー．．．」  
ヴィータ「ガオレンジャーにゲキレンジャーの4つの力が．．．」  
ジーク「しかし、それでもまだ足りねえな．．．」  
レオナ「そうなのだから早めに力を解放させたいんだけど．．．ナビの調子がね．．．」  
そうナビの調子が悪くエネルギーが溜まらないとお宝ナビゲートが使えないため、待つしかない状態だった。  
カイル「．．．とにかく、今は持てる力だけで戦うしかないさ．．．それより、なのはたちはそろそろ訓練の時間じゃないのか？」  
なのは「あ！そうだった、それじゃヴィータちゃん、フェイトちゃん行こう！」  
フェイト「ええ、なのは。」  
ヴィータ「また後でな。」  
そう言つて、3人はデカルームを後にした。  
はやて「まあなんや、とにかく妖魔が動くまでは前と同じ状態でやるしかないんや」  
シグナム「はい、主はやて」  
ジーク「違うない、さて俺はちよつと街を散策してくるわ。」  
そう言つて、ジークは出て行った。  
カイル「．．．さてと、俺もヴィイオを迎えに行くか．．．」  
そうヴィイオは今、海鳴市に数年前に作られたSet・ヒルデ魔法学院海鳴分校に通っている。  
はやて「ふふふ、すっかりお父さんやね。」  
カイル「ふ、俺も変われば変わるもんだ．．．」  
そう言つて、カイルは出て行った。

St・ヒルデ魔法学院海鳴市分校

ヴィヴィオは転校生扱いでみんなからの注目を集めた。

クラスメイト男「ねえ、ヴィヴィオちゃんはミッドチルダから来たの？」

クラスメイト女「ヴィヴィオちゃん、そのランプ何？」

カイムは念のためマジランプをヴィヴィオに持たせていた。

ヴィヴィオ「これはね、パパの大事なものでマジランプって言うの。」

クラスメイト全員「マジランプ!?」「」

そう言っているとヴィヴィオはマジランプからスモーキーを出した。

スモーキー「よお！ヴィヴィオ、学校は楽しんでるか？」

ヴィヴィオ「うん！みんな、これがマジランプに住んでる魔法猫のスモーキーだよ。」

そう言ってみんなに紹介し、ヴィヴィオはさらに注目的になった。

そして、下校の時、ヴィヴィオは一番最初に仲良くなったコロナ・ティミルにリオ・ウエズリーと一緒に下校していた。

リオ「ヴィヴィオのパパって、どんな人？」

ヴィヴィオ「とつても強くて、かつこいいの。」

コロナ「へえ、そうなんだ、会ってみたいなヴィヴィオのパパに。」

とその時、校門の外にカイムが立っていた。

コロナ「あれ？あの人誰だろう？」

リオ「でも、すごくかつこいい。」

さすがに元は男娼にされかけた男だけに顔立ちは女性を惹きつけてしまうカイムであった。

ヴィヴィオ「あ！パパだ！パパ！」

リオ・コロナ「ええ！ヴィヴィオのパパ!?」「」

カイム「ヴィヴィオ、迎えに来たぞ、楽しかったか？」

ヴィヴィオ「うん！お友達も出来たもん！」

カイム「君たちがヴィヴィオの友達か．．．初めましてヴィヴィオ

の父のカイムだ。」

コロナ「わ、私はコロナ・ティミルです！」

リオ「わ、私はリオ・ウエズリーです！初めまして！」

二人はカイムに挨拶した。

リオ「ヴィヴィオのパパ、カッコよくなっていいな・・・」

コロナ「ほんと・・・」

以前のカイムだったらあまりよい褒め言葉ではなかったが、今は不思議とこそばゆい気持ちになっていた。

カイム「ありがとう・・・さてヴィヴィオ、今日は登校初日だから一緒に帰ろうか？」

ヴィヴィオ「うん！それじゃリオとコロナまた明日！」

リオ「うん！」

コロナ「また明日ね！」

とその時、突然学校の回りに泥の化け物が現れた。

ゴーレム兵「ゴオオオ！」

生徒たち「きゃああ！」

カイム「ヴィヴィオ！スモーカーを持ってここで待ってる！」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言つて、カイムはデイスードベガでゴーレム兵たちを倒しにかかった。

カイム「はああ！」

リオ「すごい・・・ヴィヴィオのパパ・・・」

コロナ「太刀筋が見えない・・・」

ヴィヴィオ「パパはね、銀河一刀流っていう剣の免許皆伝なの。」

リオ・コロナ「銀河一刀流？」

その後、カイムはあっさりゴーレム兵たちを倒し終えた。

カイム「・・・今までの奴らとは違うな・・・」

とその時、シグナムが来た。

シグナム「すまない、カイム遅くなった。」

カイム「気にするな、それよりこいつらなんだが・・・」

シグナム「．．．ああ、こいつらは、いままでのスカルソルジャーとは違うタイプの敵だな．．．」

二人はそんな会話をしているとどこからともなく声が聞こえてきた。バンドーラ「あははははは！！」

カイク「誰だ！」

シグナム「姿を見せる！」

そこへ落雷とともにバンドーラが現れた。

バンドーラ「お前かい、ジュウレンジャーを始めとするレジェンド戦隊の力を使うものというの？」

カイク「それがなんだ、お前はいつたい何者だ？」

バンドーラ「そういえばまだ名乗っていなかったわね、私は史上最大の魔女バンドーラ！」

カイク「史上最大の魔女．．．」

シグナム「バンドーラだと．．．」

バンドーラ「もつとも、今回は私は挨拶程度だけどね、その代わりにこれをあげるよ、現れよドラミノタウロス！」

ドラミノタウロス「ゴオオオ！」

そう言うとバンドーラは姿を消した。

シグナム「カイクどうやら、こいつを始末しなければいけないようだぞ．．．」

カイク「わかつてる．．．行くぞ！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

カイク「ゴーカイキング！」

シグナム「レヴァンティン！」

カイクとシグナムは戦闘態勢に入った。それを見ていたヴィヴィオの友達の二人は驚きの表情をした。

リオ「ええ！ヴィヴィオのパパって、あの噂のゴーカイジャーだったの？」

コロナ「ヴィヴィオって、本当にすごい人の子供なんだ．．．」

そんなことを話しているとカイクとシグナムは圧倒的に敵を追い詰

めていった。

カイル「ふん！」

シグナム「はああ！」

ドールミノタウロス「ゴオオオ！」

ドールミノタウロスは吹き飛ばされた。

シグナム「一気に決めるぞ！」

カイル「ああ、さっそく使ってみるか、キングテクター！」

そう言うのとゴーカイキングにキングテクターが装着された。

カイル「デイスwordベガ！」

シグナム「レヴァンティン！」

レヴァンティン「エクスプローション！」

カイル「ベガスラッシュ！」

シグナム「紫電一閃！」

ドールミノタウロス「ゴオオオ！」

二人の一撃であつという間にドールモンスターは撃破された。

リオ「ヴィヴィオのパパ、本当に強いしかっこいい！」

コロナ「あの女の人も強い！」

バンドーラ「おのれ、あんなにあつさりとドールミノタウロスを倒すなんて……」

そう言つて、バンドーラはカイルたちの前に再び姿を現した。

カイル「バンドーラ！」

シグナム「思ったより、たいしたことはなかったぞ。」

バンドーラ「いい気になつていられるのも今だけだよ、これから私の本当の力を見せてやる。」

シグナム「本当の力？」

バンドーラ「大地に眠る悪霊たちよ、ドールミノタウロスに、はあ！力を与えよ！」

そう言うとバンドーラは自身の持っていた杖であるドールセプターを大地に向かって投げたその瞬間、地震が起こり、次の瞬間先ほど

倒したドローミノタウロスが巨大化し復活した。

シグナム「こ、これは・・・」

カイル「自分の力だけで、こんな芸当ができるのか・・・」

バンドーラ「あはははは、さあこのドローミノタウロスを倒してこらん。」

そう言うとバンドーラはまた姿を消した。

カイル「・・・やるしかないな・・・キングインストローラー！」

キングインストローラー「ゲキリントージャウルフ！」

シグナム「カイル、私も戦わせてくれ」

カイル「ああ、頼むシグナム」

そう言って二人はゲキリントージャウルフに乗り込んだ。

ドローミノタウロス「ゴオオオ！」

ドローミノタウロスはゲキリントージャウルフに攻撃を繰り返した。

シグナム「甘い！」

攻撃は見事に受け止められ、激臨剣で斬りつけられた。

カイル「はああ！」

さらに大狼狼脚で蹴り飛ばされ、吹き飛ばされた。

ドローミノタウロス「ゴオオオ！」

カイル「決めるぞ、シグナム」

シグナム「ああ」

カイル・シグナム「激臨狼斬！！！」

ゲキリントージャウルフはドローミノタウロスに大狼狼脚を浴びせて、さらに激臨剣で一刀両断した。

ドローミノタウロス「ゴオオオ！！！」

ドローミノタウロスは撃破された。

バンドーラ「くそ、憎たらしいたらありゃしない・・・覚えてる！」

そう言って、バンドーラはジーンたちの所へ戻った。

St・ヒルデ魔法学院海鳴市分校校門前

戦闘終了後、当然の如くヴィヴィオの友達のリオとコロナの二人から質問された。

リオ「あの〜、ヴィヴィオのパパって、ゴークイジャーなんですか？」

カイム「ああ、そうだ。」

それを聞いた二人は目を輝かせてカイムたちに言った。

コロナ「すごいなヴィヴィオのパパって」

リオ「あの〜、今度ヴィヴィオのお家遊びに行ってもいいですか？」

カイム「ああ、何もなければいつでも来てもいいさ。」

シグナム「ふふふ、これはいい友達を持ったな、ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオ「うん！」

カイム「それじゃ今度こそ帰るか、とその前にちょっと何かおやつでも食べていくか？」

ヴィヴィオ「うん！パパ大好き！」

カイム「君達もどうだ？」

コロナ・リオ「いいんですか？」

カイムは静かに頷いた。

コロナ「はい！」

リオ「喜んで！」

カイム「シグナムもどうだ？」

シグナム「そうだな、たまには付き合わせてもらおうか。」

そう言っただけでカイムたちは途中にあったクレープの屋台でクレープを食べてからリオとコロナを送り届けてからデカベースへ帰っていった。（ちなみに二人と別れ際に住所とTELをヴィヴィオと交換した。）

## 第19話 蘇った史上最大の魔女（後書き）

どうもヴィヴィオの友達は出会う時期が違いますが、オリジナルでこのときからの友達にしました、次回以降はゆったりとした話が続きますが、次回またお願いします。追伸グリフォーザーとラミイの子供の名前は完全にオリジナルです。

第20話 カイムと恭也 小太刀二刀御神流VS銀河一刀流（前書き）

どうも、最近忙しくて、やっと短めではありますが更新できるようになりました、今回のタイトルを見るとわかりますが、今回はなのはの兄である恭也が登場します、さらになのはの父と母も登場させます、あと話には関係ありませんがもうすぐゴーカイジャーの映画の公開ですね、後、ゴーカイシルバーはどうやらバスコって奴じゃない、別の男みたいですね、私個人としては早く見てみたい気持ちです、それで今回もよろしくお願いします。

## 第20話 カイムと恭也 小太刀二刀御神流VS銀河一刀流

魔女バンドーラの復活を知り、さらにカイムたちの戦力強化が図れる中、牧野先生がレオナ、シャーリー、マリエルの協力してもらいあるものを開発した。

はやて「牧野先生、これは？」

牧野「これはスーパーインストラーですよ。」

カイム「スーパーインストラー？」

ジーク「なんだそりゃ、見たところカイムの使うキングインストラーに似てるけどな……」

レオナ「そうなの、これはねキングインストラーの簡易型で、レジェンド戦隊のロボットをキングインストラーと同じように呼び出せるの、もつともキング君の奴と違って一体までけどね……」  
なのは「それでもすごいですね……」

シャーリー「ちなみにこれは機動六課のメンバー用ですよ、もつとも2つしかありませんけど……」

フェイト「私達用？」

マリエル「そうなんです、みなさんに渡したこの新しい通信機で転送されるので、いざというときはそれで呼び出していただければ大丈夫ですよ。」

ヴィータ「なるほどな、だから今更ながらこんなもん渡したのか。」  
そう言つて、ヴィータは渡された通信機を見ながらそう言った。

シグナム「しかし、これでカイムたちやGGGのメンバーに苦労をかけることも少なくなるな……」

カイム「ああ、あとはロボットをいかに操縦できるかだな……」  
シグナム「そうだな……だが、今のところ牧野先生に作ってもらったシミュレーションシステムでフォワード陣も含めた私達のトレーニングは順調だ。」

ジーク「ああ、後は実際に操縦してもらう方がいいな。」

そうやって、メンバーはデカベースの隣に新設された訓練場へ向かった。

## 訓練場

今機動六課の前線メンバーにレジェンド戦隊のロボットの操縦訓練が行われ、そして隊長陣の操縦訓練は問題なく終わり、次はフォワード陣とギンガの訓練の最中であり、今デカウイングロボの操縦訓練の最中である。

スバル「け、結構きついね・・・」

ティアナ「そ、そうね、いくら隊長たちを含めてみんなバリアジャケットがバージョンアップしたけど・・・」

エリオ「これは結構堪えますね・・・」

キヤロ「これだけの巨体で、これだけの動きが出来るとやっぱり相当なGがかかりますね・・・」

ギンガ「まあ、慣れるしかないわよね・・・」

その後、1時間後、ある程度こなせるようになり、本日の訓練は終了した。

訓練後カイク、ティア、ヴィヴィオ、スバル、ティアナはなのはの誘いでなのはの実家の翠屋へ行った。

## 翠屋

士郎「いらっしやい・・・って、なのは!？」

桃子「あら、お帰り、なのはどうしたの突然？」

なのは「うん、任務でしばらく地球に居ることになったから、それで私の知り合いを連れてきたの。」

スバル「始めまして、スバル・ナカジマです。」

ティアナ「ティアナ・ランスターです、なのはさんにはいつもお世話になっています。」

ティア「ユースティア・アストレアです、ティアって呼ばれています。」

カイル「カイル・アストレアだ。」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオ・アストレアです、始めまして。」

桃子「あら、可愛い子ね、私は高町桃子、なのはのお母さんよ、よろしくねヴィヴィオちゃん。」

ヴィヴィオ「うん！」

士郎「私は、高町士郎、なのはの父親だ。」

そう言つて、お互いに自己紹介した。

スバル・ティアナ「（なのさんのお母さんつて、こんなに若いの  
．．．？）」

若干スバルとティアナは驚いた表情を浮かべていた。

士郎「そうですね、あなた方があの噂のゴーカイジャーの方々ですか．．．」

ティア「いえ、私なんかカイルさん達に比べたら．．．」

ヴィヴィオ「そんなことないよ、ティアママもかっこいいよ。」

なのは「にやははは、そうだねティアさんも活躍してるよ。」

カイル「なのはとヴィヴィオの言うとおりだ、もっと自分に自身を持ってティア。」

ティア「はい、カイルさん、それとありがとうございますなのはさん、ヴィヴィオ。」

そう言つて、ティアはヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「えへへ」

桃子「ああ、それとなのはは今ね、恭也が忍ちゃんと一緒にドイツから帰つて来てるの。」

なのは「え、そうなんだ！」

その直後、奥の扉が開いた。

恭也「なのは！帰ってきたのか！？」

スバル「なのはさんこの人は？」

なのは「うん、この人は私のお兄ちゃんなの。」

ティアナ「な、なのはさんのお兄さんなんですネ、始めまして、私ティアナ・ランスターです。」

スバル「スバル・ナカジマです。」

ティア「ユースティア・アストレアです、ティアって呼んでください。」

カイク「カイク・アストレアだ、よろしく。」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオ・アストレアです、なのはママのお兄さん始めまして。」

その発言を聞いた瞬間、恭也が驚いた表情をした。

恭也「な、なのはこの子はお前の子供か？ いったい、誰との・・・」  
なのは「ち、違うよ、私は後見人でこちらのカイクさんの養子なんだよ。」

それを聞いた恭也はカイクに向き合った。

カイク「・・・なんだ？」

恭也「・・・あんた、なのはとどういう関係だ？」

カイク「別に、ただ一緒に戦っている大切な仲間なだけだが・・・」

恭也には大切という言葉しか聞こえていなかったらしく、恭也は突然カイクに木刀を突きつけて言い放った。

恭也「俺と勝負だ！」

なのは「ち、ちよつとお兄ちゃん!？」

桃子「もう、恭也つたら・・・」

士郎「いくらなんでも、なのはに対して過保護すぎるぞ・・・」

そんな周囲の言葉がある中、カイクは立ち上がった。

カイク「突然の勝負だが、売られた勝負は買ってやる。」

恭也「ふん、いい度胸だ、それでは道場まで来てもらう。」

そう言つて、二人は道場へ移動した。

## 道場

二人とも準備が整った。

カイク「お前は小太刀術の使い手か・・・」

恭也「そうだ、それでは行くぞ（なんだ、この男の構えは見たことがないぞ・・・）」

ヴィヴィオ「パパ、頑張れ！」

ティア「カイクさん、頑張ってください！」

なのは「カイクさん、遠慮しないでください！」

ティアナ「いいんですか？お兄さん応援しなくても．．．」

なのは「いいの、元々お兄ちゃんの勘違いで始まったことだし、少しくらいは頭冷やしてもらわないと．．．」

スバル「なのはさん．．．」

桃子「あらあら」

士郎「なのはも言うな、しかし、いくら彼が強くても恭也の腕前は、なのはもよく知っているはずだけどな．．．」

なのは「見てれば、わかるよ二人とも。」

その後、勝負が始まったがカイクはほとんど動かさず、攻撃を裁いて  
いるだけだった。

カイク「（こいつ、意外にやるな．．．）」

恭也「（こいつ、なんてやつださっきから足を動かさず、攻撃を全  
て裁ききっている）」

その後、カイクは少し後ろに下がった。

カイク「お前やるな．．．その強さに敬意を表して、お前に俺の銀  
河一刀流の技を見せてやる。」

恭也「銀河一刀流？」

士郎「聞いたことがないな．．．」

そう言うときカイクは剣を構えなおした。

それを見た恭也はすぐさま向かってきた。

恭也「はああああ！」

カイク「ベガスラッシュ！」

その瞬間、カイクは恭也の持っていた2つの木刀を粉碎し、木刀を  
恭也に突きつけた。

恭也「．．．」

カイク「俺の勝ちだな．．．」

そう言うとき、カイクは木刀を置き、ヴィヴィオの所へ行った。

ヴィヴィオ「パパ、抱っこ！」

カイル「ああ．．．」

カイルはヴィヴィオを抱っこした、その時ヴィヴィオはカイルの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「パパ、かつこよかったから、いいこ、いいこ。」

それを聞いたカイルは苦笑した。そして、それを見ていた他のメンバーも微笑ましく見ていた、その中で恭也本人はいまだに信じられないという感じで立ち尽くしていた。その後、恭也を置いてみんなで店に戻った。すると士郎がカイルに突然切り出した。

士郎「いや、驚いたよ、まさかあの恭也が圧倒されるとはね．．．  
どうだい、うちのなのはは？」

なのは「お、お父さん！何言ってるの、もう．．．／／／」

カイル「．．．残念ながら、そっちに怖い顔をしてきている奴がいるからそういう話は．．．」

ティア「．．．」

ティアはちよつと、面白くなさそうな顔をしていた。

ヴィヴィオ「ティアママ、どうしたの？」

ティア「え！？な、なんでもないよヴィヴィオ。」

そう言つて、必死に誤魔化していた。

スバル「わかりやすいな、ティアさんつて。」

ティアナ「（でも、案外なのはさんもカイルさんのこと気に入っていたりして．．．）」

桃子「（あらあら、なのはもまだまだ子供ね）」

そんなやり取りの中、なのは複雑そうな顔をし、ティアはさらに難しい顔をしていたという。

恭也「．．．こ、こんなことがあるのか．．．俺があんなに圧倒的に負けるなんて．．．」

その後、忍と妹の美由希の二人が帰ってくるまで恭也は立ち尽くしたままでいたという。

第20話 カイムと恭也 小太刀二刀御神流VS銀河一刀流（後書き）

今回は少し短めの話にしました、次回はちょっと戦闘を交えた話にしたいと思いますのでよろしくお願いします。

## 第21話　なのはとフェイト　カイクへの想い（前書き）

どうも、今回は特別編扱いでなのはとフェイトもカイクを好きになっ  
てもらいました、さらにエリスとティアにも穏便な性格になっ  
てもらいました、それではよろしく願います。

## 第21話　なのはとフェイト　カイルへの想い

### 訓練場

今、スバルとギンガの二人はカイルに格闘戦で訓練を受けていた。  
（ちなみにカイルはキングテクターを使わず、デカブレイクになっている。）

カイル「ブレスロトル！高速拳ライトニングフィスト！」  
スバルとギンガは何とか持ちこたえていた。

スバル「す、すごい、拳が見えないよ……」

ギンガ「そうね、でもまだやられたわけじゃないわよ、スバル！」  
スバル「うん！ギン姉」

そう言つて、二人はカイルに向かって攻撃を仕掛けた。

カイル「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ダイレンジャー！」

カイルはダイレンジャーのシレンジャーへチェンジした。

カイル「シレンジャー、天幻星！」

ギンガ「姿が変わった!？」

スバル「だけど、これなら！」

二人はカイルの死角について攻撃しようとした、しかし。

カイル「甘い、獅子拳無明無心！」

カイルはスバルとギンガの攻撃を軽やかに避けている。

なのは「すごい、カイルさん。」

ヴィータ「ああ、あの二人も無駄な動きは、していないのにあの動き……」

シグナム「うむ、そうだな、ところでジークあの技はいつたい？」

ジーク「ああ、あれは心を無にして敵の攻撃をかわす獅子拳無明無心って技だ。」

フェイト「す、すごい技ですね……」

その後、カイルは二人の攻撃を巧みにかわした。

カイル「これで決める、気力ボンバー！はあ！」

二人に溜めた気功弾を放った。

スバル・ギンガ「きゃあああ！！！」

二人は吹き飛ばされ、その直後なのはが来た。

なのは「はい、それじゃ訓練は終了、カイルさん、ありがとうございます、  
いました。」

カイル「気にするな、いいトレーニングだった、二人ともいい動き  
だったな。」

スバル「ありがとうございます、これも獣力開花のおかげですよ．  
．」

ギンガ「そうね、事件の後、私もその力を浴びたんだもんね．．．  
そう「JS事件」の後、ギンガもサイダインから獣力開花の力を浴  
びていた。」

カイル「それは違う、獣力開花はあくまで潜在能力を引き伸ばし、  
自分の身体の限界を上げるためのものだ、それ生かすには日々の鍛  
錬が必要だということだ、つまりは強くなったのはお前達の日ごろ  
の鍛錬のおかげだということだ。」

スバル「は、はい、そう言っていただけと励みになります。」

ギンガ「またお願いしますね、カイルさん。」

カイル「ああ、それじゃ今日の訓練はこれまでだな．．．」

ジーク「まったく、カイルお前は本当に戦闘のプロフェッショナル  
だな、いくらなんでもこんなに短期間で全ての戦闘スタイルをマス  
ター出来るお前には、さすがの俺も驚くぜ。」

カイル「よく言うぜ、お前だって似たようなものだろうが．．．」  
そんな話をしながら、みんなデカベースに戻った、その中でののは  
はカイルの後姿を見ていた。

なのは「カイルさん．．．」

前回実家に帰った時に父からカイルのこと言われたときから、なの  
はの中でカイルの存在が大きくなっていった。

なのはとフェイトの部屋

カイル「（お前はプロフェッショナルだろうが、俺も殺し屋という仕事をしていたからな、なおのこと感情的になって取り返しのつかないことになるだけは避けなきゃならない。」

カイル「（大丈夫だ．．．俺は必ず帰ってくる．．．ヴィヴィオを頼む．．．）」

なのは「カイルさん．．．ティアさんには申し訳ないけど．．．よく考えてみたら、私もいつしかあの人に頼っているような気がする．．．」

その直後、フェイトが入ってきた。

フェイト「なのは？」

なのは「ふ、フェイトちゃん！？どうしたの？」

フェイト「いや、さっきなのはの様子が変わったから、それで気になっただけ．．．」

なのは「そっか、ごめんね心配かけて、でも大丈夫だから．．．」

フェイト「．．．カイルさんのこと？」

なのは「！．．．どうしてわかったの？」

フェイト「実はね、私もなの．．．」

なのは「え！？フェイトちゃんも!？」

その言葉にさすがのなのはも驚きを隠せなかった。

フェイト「なのはは、いつから？」

なのは「この前、実家に帰った時かな、いや、ティアナの一件のときからかもしれない．．．フェイトちゃんは？」

フェイト「私はね．．．」

そう言って、フェイトはなのはに話し始めた。

## 回想

ミッドチルダから地球へ移動する数日前

フェイトがデスクワークの最中の時

カイル「ほら、コーヒーでも飲め煮詰めすぎるのも良くないぞ．．．」

「  
フェイト「あ、ありがとうございます．．．」  
そう言つて、カイクから差し出されたコーヒ―を飲みながら少しカイクと話をした。

カイク「大変そうだな、管理局の頭がいなくなっているいろいろと問題もあるだろうし．．．」

フェイト「いえ、私なんかよりはやての方が．．．今回だつて、管理局の上の人たちを納得させるためにいろいろと骨折ってくれたし．．．」

カイク「それでも、お前達が一緒に戦つてくれることが心強いさ、ありがとう。」

そう言つてカイクはフェイトに礼を言った。

フェイト「い、いえ、お礼が言いたいのは私の方です．．．ありがとうございます、カイクさん、何度もエリオやキャロを助けてくれて．．．」

カイク「気にするな、俺が勝手にやっただけのことだ、それにあいつらも頼もしくなってきたしな．．．それよりもお前はあの二人に戦つてほしくないだろう．．．」

フェイト「．．．カイクさんには適いませんね．．．そうです、私出来るだけあの二人には平穩に暮らしてほしいんです．．．」

カイク「．．．お前の過去についてはリンディさんから聞いた、お前が人とはちよつと違つてことも．．．」

フェイト「母さんからですか．．．」

カイク「ああ、ついでに俺の昔話もしてやる、俺は昔兄貴がいた、その兄貴は何をやらかしても優秀で親は兄貴しか見てなかった、俺はいつしか兄貴を殺してやりたいとさえ思った、でもある時にそんな兄貴を助けようとした、お笑いだろう？殺したいほど憎んでた兄貴を助けようとするなんて、でも俺は助けることが出来なかった、しかしその後兄貴は生きていたんだが、結局ティアを助けるために剣を交えて俺は兄貴を殺した．．．」

フェイト「カイクさん．．．」

フェイトはカイクの悲しい過去を黙って聞いていた。

カイク「たしかに人には過去をどうすることもできないかもしれないが、それでもどんな思い出でもそれを忘れちゃいけない、自分が生きているのは必ず意味がきつとあるだ、それを忘れなければ自分の存在なんてどうとでもなる。」

フェイト「．．．カイクさん．．．」

カイク「それとエリオとキャロをもっと信じてあの二人の出した選択を見届けて、危ない時は助けてやればいい話だ。」

フェイト「．．．そうですね、カイクさん少し心が穏やかになりました、ありがとうございます。」

カイク「礼なんていいって、それじゃ俺は失礼する．．．」

そう言つて、カイクは部屋から出て行つた。

フェイト「．．．カイクさん．．．」

その時、フェイトはカイクが去つた後も扉を見つめ続けた。

現在

デカベースのなのはとフェイトの部屋

なのは「．．．そうだったんだ、カイクさんって、お人よしだつて言つてたけど、ここまで来るとそんなレベルじゃないよね。」

フェイト「うふふふ、そうだよね、でもそれがあの人のいいところだと思う、だからティアさんやエリスさん、そして私達二人も．．．」

「

フェイトの一言で二人は静かになった。

なのは「ねえ、フェイトちゃん、明日さ、ティアさんとエリスさんに話してみようよ．．．」

フェイト「な、なのは！で、でも．．．」

なのは「たしかに途中で出てきた私達がこんなこと言うのはおかしいかもしれないけど、それでもやっぱりこのままにしておきたくない、だからあの二人に話しておきたいの．．．」

フエイト「．．．わかったよ、なのは、私も言うティアさんとエリスさんに．．．」  
なのは「うん、カイクさんが好きですって．．．」  
そう言っつて、二人は休んだ。

次の日

なのはとフエイトはティアとエリスを自分達の部屋に呼び出した。  
エリス「どうしたの二人とも？」

ティア「そうですよ、いきなり話があるなんて．．．」

なのは「驚かないで聞いてください．．．実は．．．」

エリス「カイクのことが好きだっつてことでしょ？」

フエイト「！ど、どうして、それを．．．」

ティア「このところのお二人の様子を見れば大体想像は付きますよ．

．．．おそらくカイクさんも気付いていると思います．．．」

なのは「あの、ごめんなさい！」

エリス「どうして謝るのかしら？」

フエイト「だ、だってあなた達はカイクさんのことが．．．」

ティア「ええ、好きですよ、でもだからといって独占しようなんて考えていませんから、たしかに少しくらいはカイクさんを独り占めしたいですけど．．．」

エリス「カイクは、いろいろあるからね、一人じゃ支えきれない男だっつてわかってるから．．．だから昔の私ならともかく、今の私なら全然平気よ、むしろよく言っつてくれたわ二人とも。」

なのは「ティアさん．．．エリスさん．．．」

ティア「だから、一緒にカイクさんを支えましょう。」

エリス「でも、抜け駆けはなしよ。」

なのは「フエイト「はい！」」

その後、なのはとフエイトもカイクと一緒に居ることが多くなっつたという。

## 第21話　なのはとフェイト　カイクへの想い（後書き）

どうも、最近忙しく戦闘無しの話が続いていますが、次は大いなる力はまだ先にして、スーパー戦隊の武器を手に入れる話にしたいと思いますのでよろしく願います。

追伸　今回から遅くなりましたがオリジナルの敵の幹部妖魔の三巨頭のプロフィールを乗せます。

アスラ　妖魔の三巨頭のリーダーで、戦闘スタイルは基本は妖術などと体術を基本に戦う、次元を自由に移動したり、別の世界のものをこちらに引きずり出すことが出来る、圧倒的な力を持ち妖魔の君であるジーンからもっとも信頼の厚い妖魔として慕われている妖魔の君の懐刀と呼ばれている。妖魔外装するとまるで阿修羅像のように背中から手が数本出てきた形態になる。ちなみに外道衆の血祭ドウコクとは旧知の仲である。

ルシフェル　妖魔の三巨頭の参謀格で様々の機械、妖術、魔法などにも精通し、さらに全ての世界の歴史を把握していると言っても過言ではないくらい（知識を持っている）（持っていない知識を探す方が大変と言っている）、そのため妖魔の間では妖魔始まって以来の大天才と呼ばれている、戦闘においても魔法や妖術を中心に　さらに敵の技をコピーしたりする戦法を取る、妖魔外装すると片方だけの黒い羽を広げた姿になる。さらに反魂の術のエキスパートであり、どんな生命体でも魂があれば蘇生させることが出来る。

バディン　妖魔の三巨頭の切り込み隊長で、とにかく自分の力に絶大な自信を持っている、単純に見るとパワー馬鹿だが、指揮官能力も高いため、残りの二人からも指揮を任せられるときがある、妖魔外装すると全身に巨大な鎧が装着されるが、見た目に反して装着前の

スピードの5倍以上の動きとパワーが上昇する。

第22話 蘇りし御大将 古代の力（前書き）

どうも、今回はあのシンケンジャーの最後の敵血祭ドウコクが復活します。さらにユースティアからの初登場キャラも出ますのでよろしく願います。

## 第22話 蘇りし御大将 古代の力

デカベース

ジーク「ズバーン？」

レオナ「ええ、ボウケンレッド君が使っていた、レムリア文明のプレシヤス、今で言うところのロストロギアだね。」

はやて「レムリア文明って、あの・・・」

シャーリー「たしか、古代ベルカやアトランティス文明なんかよりも古い古代文明ですよね。」

牧野「そうですね、その守り神とも言われている、ロストロギアなんです。妖魔との戦いの後にサージェス財団がロストロギアをいるるな場所に封印したんです・・・」

ヴィータ「それで、そいつを取りに行くのか？」

牧野「ええ、それでこちらの地図がありますので、扉を開けるにはレンジャーキーがないとだめですので、カイクさんたち言うてもらふことになります。」

カイク「わかった、ジーク早速出発しよう。」

ジーク「ああ、それじゃゴーカイガレオンを出すか・・・」

その後、本人の強い希望でなのは、フェイト、ヴィヴィオも同行することになった。

妖魔の君の居城

バンドーラ「ルシフェル、いったい何をしているんだい？」

ルシフェル「ああ、バンドーラか、こいつはアスラに頼まれたことな、ある奴を復活させてくれってな・・・」

トッドバット「ある奴？」

アスラ「俺の親しい友だ。」

バンドーラ「アスラかい。」

アスラ「突然すまない、それよりルシフェルどうだ？」

ルシフェル「ふ．．．心配するな、あと少しだ、それとついでに骨のシタリも蘇らせておいたぞ。」

アスラ「すまん、反魂の術は俺でも出来るが、強い奴を蘇らすとなるとな．．．さすがにお前に頼むしかない。」

ルシフェル「気にするな、俺もこついつた作業は好きでな．．．そろそろか、では．．．」

そう言うのとルシフェルは呪文を唱え始めた。

骨のシタリ「いよいよかい、ドキドキするね．．．」

ルシフェル「あの世を支配する外道の王よ、今こそ妖魔の力と融合し、現代に蘇れ、復活せよ外道衆御大将血祭ドウコク！！」

その瞬間、この部屋全体から今までに無いくらいの異様な力が場を支配した、そして、その中心から血祭ドウコクが現れた。

血祭ドウコク「ここはどこだ？」

骨のシタリ「ドウコク！本当にお前さんなのかい？」

血祭ドウコク「シタリか．．．久しぶりだな、ところでここは？」

アスラ「ここは妖魔の城だ．．．」

血祭ドウコク「！あ、アスラ！お前なのか！？」

アスラ「ああ、ルシフェルがお前を復活させた、久しぶりだなドウコク」

血祭ドウコク「そうか、そういうことか．．．」

ドウコクはすぐに状況を理解した、その後アスラとガッチリ握手を交わし、お互いに笑みを浮かべていた。

血祭ドウコク「そうか、俺がシンケンジャーの奴らに敗れた後、お前もシンケンジャーを含めたほかの奴らに封印されていたということか．．．」

ルシフェル「ああ、そうだ、ちなみにお前とシタリは妖魔の肉体も使用しているため、もう水切れの心配は一切ない．．．」

血祭ドウコク「そうか．．．だから俺の力が以前よりも上がっているのか、こいつはいいぜ、でそつちの奴らは？」

アスラ「ああ、それでは紹介しよう．．．」

そう言つて、バンドーラたちを紹介した、あとその場ではなかったが、宇宙に居るシュバリエとアブレラも連絡し紹介した。

バンドーラ「いや、あの大サタンに負けず劣らずの力を持っているとは、気に入ったよドウコク。」

血祭ドウコク「俺もだ．．．よろしくな、バンドーラ．．．」

ルシフェル「さてと、ゴーカイジャーと機動六課のメンバーが動いたようだな．．．早速だがバンドーラドライバーモンスターを出してくれ。」

バンドーラ「ああ、まかしておくね、プリプリカン！」

そう言つて、バンドーラはプリプリカンのいる部屋へ行った。

骨のシタリ「あたしも見せてもらおうかい、ここにはアヤカシの魂しかないからね、もしかしたらこっちもいろいろと出来るかもしれないしね．．．」

そう言つて、シタリもバンドーラについて行った。

血祭ドウコク「．．．俺もちょっと出てくるぜ．．．」

アスラ「そうか．．．復活した憂さ晴らしか？いいだろう、だがその前に我が主に会つていつてくれないか？」

血祭ドウコク「わかった．．．どれほどの奴なのか俺が見てやる．．．」

そう言つて、ドウコクはアスラについて行った。

日本

サージエス島

この島は人工的に作られた島で、カイクたちはここに来ていた。

ジーク「ここか．．．」

フィオネ「それでは行きましょう．．．」

とその時、カイクが立ち止まった。

メルト「どうしたのカイク？」

カイク「．．．誰かが俺を呼んでいる．．．」

エリス「え！？」

「????」(こつちへこい、カイクお前に渡すべきものがある・・・)

「カイク「悪い、俺はちょっとこのあたりを散策する・・・」

「ジーク「・・・わかった、以前にもお前は似たようなことがあったから・・・」

「カイク「すまん・・・」

「ティア「それじゃ、なのはさんとフェイトさんもカイクさんについていてください。」

「なのは「いいんですか?」

「エリス「カイクは一人になると無茶するからね、それにこつちは5人いないといざという時にゴーカイオーに乗る際に不便だしね・・・」

「フェイト「わかりました・・・それじゃヴィヴィオもこつちが連れて行きます。」

「ヴィヴィオ「うん!後でね、ティアママまたね!」

「ティア「うん気をつけてね、ヴィヴィオ。」

「そう言つて、二手に分かれた。

「ジークたちはその後、人口洞窟へ進みその奥に扉を発見した。

「ティア「ここですね・・・」

「ジーク「ああ、そうだな、それじゃさっそく・・・」

「5人はゴーカイジャーのレンジャーキーをセットしたその瞬間、扉が開いた。

「その中にはいろいろな物があつた、その奥に黄金に輝く剣があつた。

「フィオネ「これが・・・」

「メルト「ズバーン・・・」

「ジーク「どれどれ・・・」

「ジークが持った瞬間、剣の中心が光りジークはそれを回してみる、するとその瞬間、変形を始めた。

「ズバーン「ズバーン!」

エリス「きゃあ！」

ティア「は、話には聞いていましたが．．．」

メルト「まさか、本当にこんなになっっているなんてね．．．」

ジーク「まあいいさ、とりあえず．．．ズバーン俺達と一緒に来てくれ。」

ズバーン「ズズズン！」

そう言つて、デカベースに連絡を取りズバーンと一緒に外へ出た。

なのは達の方は、カイムの後をついていき海岸へ来た。

するとそこにマントを羽織った一人の男がいた。

カイム「．．．あんたか、俺を呼んだのは？」

「???」「そうだ、お前にこれを渡すために．．．」

そう言つて、キングキーとドラゴンレンジャーが使っていた獣奏剣が渡された。

なのは「こ、これは？」

フェイト「なんか笛のようにも見える剣ね．．．」

カイム「獣奏剣．．．たしか恐竜戦隊ジュウレンジャーのドラゴンレンジャーが持っていたものはずだが．．．あんたいったい何者だ？」

「???」「．．．名乗る必要はない．．．いや、お前に名乗る資格がないといつておこう．．．」

なのは「名乗る資格がない？」

カイム「お前、いつたいどういうことだ．．．」

とその時、空間が引き裂かれ、そこからなんと血祭ドウコクが姿を現した。

「???」「ま、まさか．．．!」

血祭ドウコク「これがこの世か．．．何年たつて変わらねえな．．．」

「カイムはすぐに気がついた．．．そして、すぐにヴィヴィオを後ろに下がらせた。」

カイル「ヴィヴィオ．．．スモーキーを持って後ろに下され．．．早くしろ。」

ヴィヴィオ「うん！」

ヴィヴィオはカイルに言われたとおりに後ろに下がった。

フェイト「カイルさん．．．あれはいつたい．．．？」

カイル「．．．どうやら、とんでもない奴まで蘇ったようだな．．．

血祭ドウコク．．．」

血祭ドウコク「ふん！俺を知っているってことは、お前か例のレジエンド戦隊の力を使う奴というのは．．．ちょうどいい、相手してもらおうか．．．」

そう言つて、ドウコクは剣を抜いた。

カイル「．．．やるしかないようだな、なのは、フェイト．．．危険だと思つたら、お前らは下がれ．．．正直こいつと戦うとなると勝てるかどうかわからない．．．」

なのは「カイルさん！」

フェイト「．．．（カイルさんがここまで弱気な発言をするなんて．．．こいつはそれほどの相手だというの？）」

二人はカイルの言葉に驚きながら、戦闘態勢に入ろうとしていた。

なのは「フェイト」「セットアップ！！」

カイル「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

カイル「行くぞ！」

なのは「フェイト」「はい！」

カイルはゴーカイサーベルとゴーカイガンでドウコクに攻撃を仕掛けたが、すべて攻撃を剣で弾かれている。

なのは「そ、そんな．．．」

フェイト「カイルさんが、ここまで押されるなんて．．．なのは、こつちも本気行くよ！」

なのは「うん！レイジングハート！行くよ！」

フェイト「バルディッシュ！」

二人は攻撃態勢に入り、カイクがよけたのを見計らって一斉に攻撃した。

なのは「全力全開！スターライトブレイカー！」

フェイト「ライオットザンバー・カラミティ！」

なのはが攻撃した後、フェイトがさかさず攻撃を仕掛けたが、しかしドウコクは平然と立っていた。

なのは「う、嘘．．．」

フェイト「こ、こんなことが．．．」

血祭ドウコク「ちょっとはやるようだな．．．小娘共の分際で．．．それに免じてこれでも食らえ！」

そう言つて、ドウコクは攻撃を飛ばしてきた。

ヴィヴィオ「なのはママ！フェイトママ！」

しかし、その攻撃をカイクがキングテクターを装着し二人を守った。

カイク「．．．やはり、これを使わないとだめか．．．」

血祭ドウコク「ほう、俺の攻撃を受けきるとはな．．．」

カイク「行くぞドウコク、デーソードベガ！」

カイクとドウコクは接近戦に持ち込み互角の戦いをしていた。

カイク「（さすがに、これでも互角の状態か．．．）」

血祭ドウコク「やるじゃねえか、俺と互角に戦える奴が居るとは．．．

．．．どうやら、今日はここまでだ．．．楽しみは後に取っておくとし

よう．．．お前、名は？」

カイク「．．．カイク・アストレア．．．ゴーカイキング．．．」

血祭ドウコク「ふん、その名前覚えておいてやる．．．」

そう言つて、ドウコクは次元の中へ消えていった。

カイク「くっ．．．」

カイクの左手から血が出ていた。

なのは「カイクさん！」

フェイト「大丈夫ですか？」

ヴィヴィオ「パパ！」

3人とも駆け寄ってきた。

カイクム「ああ、大丈夫だ二人をかばった時に少し食らってしまったようだ……」

その直後、突然地鳴りが発生し、次元を裂いてドーラタイタンと大量のスカルソルジャーが出てきた。

カイクム「くっ、こんな時に……」

その時、ジークたちとGGのメンバーが駆けつけた。

ジーク「カイクム！ここは俺達任せろ！」

凱「そうだ、少し休んでくれ」

カイクム「ああ、頼む……」

そう言つて、戦闘開始し、ゴーカイオーはドーラタイタンと戦つていた。

他の雑魚はGガオガイガーと超竜神とビックボルフォッグが相手をしていた。

凱「ウイルナイフ！」

超竜神「ダブルトンファー！」

ビックボルフォッグ「必殺、大回転魔弾！」

凱「これで終わりだ！プロウクンマグナム！」

GGメンバーのおかげで敵を完全に粉碎することに成功した。

そして、ジークたちはドーラタイタンを追い詰めていた。

ジーク「オラ！」

ドーラタイタン「ゴオオ！」

ティア「一気に決めましょう！」

そう言つて、5人はゲキレンジャーのレンジャーキーを出した。

5人「ゲキレンジャーキーセット！」

5人「ゲキレンジャーキーセット！」

ゴーカイオーの中からゲキビーストたちが現れて敵に突撃し、ドーラタイタンを倒した。

????「終わったか……」

そう言つて、マントの男は姿を消した。

その後、メンバーはデカベースに戻り、カイクからの報告を聞き、シヨックを隠せなかった。  
はやて「．．．そんな、リミッター無しなのはちゃんとフェイトちゃんでもだめやなんて．．．」  
ジーク「おそらく、カイクのキングテクターの装着の時以外では相手にならないだろうな．．．」  
シグナム「なんと恐ろしい相手か．．．」  
ヴィータ「あれ？そういえば、なのはたちは？」  
ティア「カイクさんのところへ行っています。」

#### 医務室

シャマル「かすり傷だから、止血はしたんで大丈夫ですよ。」  
カイク「すまない、シャマル先生．．．」  
その直後、ヴィヴィオとなのは、フェイトが来た。  
なのは「カイクさん．．．」  
フェイト「大丈夫ですか．．．」  
ヴィヴィオ「パパ．．．いたい？」  
そう言つて、ヴィヴィオはカイクの腕に手をやった。  
ヴィヴィオ「いたいのいたいの飛んでけ。」  
カイク「．．．ありがとうヴィヴィオ．．．」  
そう言つて、カイクはヴィヴィオの頭を撫でた。  
そしたらヴィヴィオは嬉しそうにな顔をした。  
なのは「フェイト」「（いいな）．．．」  
シャマル「あらあら、それじゃ私はちよつと失礼するわね。」  
そう言つて、シャマル先生は出て行った。  
カイク「しかし、なのは、フェイトお前達二人の応急処置のおかげで大事に至らずに済んだ、ありがとう。」  
なのは「い、いえこちらこそ．．．」  
フェイト「助けていたただいたわけですし．．．」  
カイク「そう言うな、なんか俺に出来ることがあるのなら言ってく

れ、出来る事ならやるから．．．」

それを聞いたなのはとフェイトは二人顔を合わせて頷いた。

なのは「そ、それじゃ、一ついいですか？」

カイル「ああ、いいぞ。」

フェイト「あの、私達と．．．」

なのは「フェイト」「デートしてください！」

それを聞いたカイルは少し考えたが、そのあと二人に向き直り

カイル「わかった、俺でよければいいぞ。」

なのは「フェイト」「よ、よかった」「」

それを聞いたなのはとフェイトは嬉しそうな顔をし、次の日以降なのは、フェイトの順番でデートすることになった、そんな中カイルは別のことを考えていた。

カイル「（しかし、あの男はいつたい．．．まさかな．．．あいつは死んだはずだ．．．）」

ヴィヴィオ「どうしたのパパ？」

カイル「いやなんでもない．．．」

ヴィヴィオ「？」

カイルはすぐに考えをやめた。

### 海鳴市の海岸

先ほどのマントを羽織った男は戦闘の最中に忽然と姿を消していた、そして、今海岸からデカベースを見ている、そして、顔をマントが取れるとなんとその正体はカイルの兄である、ルキウスだった。

ルキウス「カイル．．．俺はお前にこんな形でしか助けることが出来ない．．．お前とティアには大きな罪を犯した俺にはお前の前に出る資格がないから．．．」

そう言つて、ルキウスはその場から去つていった。

第22話 蘇りし御大将 古代の力（後書き）

どうも、今回はドウコクの登場とルキウスの登場で終わらせました、次の話は最後の方にもありましたが、なのは、フェイトとのカイクムのデートの話にしますのでよろしくお願いします。

### 第23話 キングに惚れた二人の魔導師（前書き）

どうも、今回はちょっと年齢指定向けの話になっています、後ゴークイシルバーの人物の種明かしもちょっとありますのでよろしくお願ひします。

## 第23話 キングに惚れた二人の魔導師

デカベース 牧野先生のラボ

カイク「牧野先生、これは？」

牧野「これはゴーカイスルラーですよ。」

ジーク「ゴーカイスルラー？」

はやて「なんですかそれ？」

レオナ「それはね、ゴーカイジャーの新しい戦士であるゴーカイシルバーに変身するためのアイテムなんだよ。」

はやて「へえ、ゴーカイジャーは他にもおったんや。」

牧野「元々、先代のゴーカイジャーが宇宙帝国ザンギャックと戦っていた時の6人目がゴーカイスルバーで、カイク君のゴーカイキングは妖魔大戦の時に新たに誕生させた戦士なんですよ。」

レオナ「だけど、このゴーカイスルラーは妖魔大戦の時にかなり破壊されて、まだ修復に時間がかかるの。」

ジーク「なるほどな、しかし、いったい誰にそれを渡すつもりだ？」

レオナ「それに関しては、キング君とレッド君に任せるよ。」

カイク「．．．そうか、わかった、それが完成したら教えてくれ、

ジーク、ちよつと来てくれ．．．」

ジーク「ああ、わかった。」

そう言つて、部屋から二人は出て行つた。

カイク「．．．ジーク、あのゴーカイスルラーなんだが、預けたい奴が居る．．．」

ジーク「ほう、お前がそんなことを言うつて事は腕の立つ奴なんだろうな？」

カイク「ああ、お前もよく知っている男だ．．．この前、この獣奏剣とキングキーを俺に渡した男だ．．．」

ジーク「．．．誰かわかったのか？」

カイル「．．．確証はないが、ルキウスだ。」

ジーク「！．．．ば、馬鹿な、だってあいつはお前が．．．」

カイル「．．．妖魔の事件以来、これだけ常識外のこと起きているんだ、奴が生きていたとしても考えられない話じゃない．．．」

ジーク「なるほどたしかにな．．．それであいつはお前に負い目があるから、お前の前に顔を出さなかったってわけか．．．それでカイルはどうして奴にゴーカイセルラーを奴に渡したいんだ？」

カイル「あいつに本当の償いの方法を教えてやるためだ．．．」

ジーク「．．．なるほどな、戦って罪を償えって話か、悪くねえ話だ、よし、ルキウスの件に関してはお前に任せる。」

カイル「ああ、すまん。」

ジーク「気にするな、それよりもなのはと出かけるんだろう？」

カイル「そうだったな、それじゃ行ってくる。」

ジーク「ああ、ヴィヴィオはティアたちが居るから大丈夫だから、気にするな。」

そう言つて、カイルはなのはのところへ向かった。

ジーク「やれやれ、相変わらずモテるな、カイルの奴はよ．．．」

そう呟き、ジークは部屋に戻った。

カイルはなのはと一緒に付き合い買い物に付き合っていた、さらにその間なのははカイルの腕を組んで歩いていた。

カイル「．．．歩きにくい．．．」

なのは「にやははは、いいじゃないですか、カイルさん減るもんじゃないし。」

そう言つて、なのははカイルから離れようとしなない。

カイルはその言葉に諦めた。その後、カイルとなのははウインドシヨッピングをした後、近くの海岸に来てた。

カイル「．．．しかし、どうして急に俺と出かけるなんて言い出したんだ？」

なのは「あ、あの、実はですね．．．こんなこと言われて迷惑かも

しれないですけど．．．聞いてください、実は．．．カイクさんが好きなんです．．．」

カイク「．．．そうか、最近のお前の様子からそうだと思っていたが、やっぱりな．．．」

なのは「ははは、カイクさんには適いませんね．．．」

カイク「．．．フェイトもか？」

なのは「はい．．．そうなんです．．．」

カイク「．．．俺のどこがいいんだ？こんな元殺し屋の男のどこが．．．」

なのは「カイクさんは素敵な方ですよ、ティアナの時やヴィヴィオのこと助けた時、この人は自分には無いものを持っているって．．．フェイトちゃんも自分の過去を聞いても態度を変えなかったって．．．」

カイク「．．．そうか、まあお前達が俺のことをどう思っているか、いいさ、お前達の気持ちまで踏みこむつもりはないからな．．．」

なのは「ありがとうございます、カイクさん．．．それじゃ、本当のお願いが．．．」

カイク「本当のお願い？」

なのは「．．．はい、私を抱いてください．．．／／／」

カイク「はあ！？」

その言葉にさすがに驚いた。

なのは「どうしたんですか？」

カイク「いや．．．なのはの口からそんな言葉が出るとは思わなかったからな．．．」

なのは「メルトさんに聞きましたよ、カイクさんとジークさんって女性経験豊富なんですってね。」

カイク「あ、あいつ．．．余計なことを．．．」

注 ちなみに設定でカイクはティア、エリス、フィオネと身体を重ねたことあります。

カイク「．．．わかった、お前が望むならいいだろう．．．」

なのは「は、はい／＼」

カイル「自分で言い出して、恥ずかしがるな．．．」

なのは「は、初めてなもので．．．」

カイル「ほう、初めてか．．．」

なのは「や、優しくしてください．．．／＼」

カイル「．．．善処しよう．．．」

その後、二人は人気のない場所へ移動し、なのははカイルに抱かれた。

行為の後、二人は帰り、カイルはエリスとティアからいろいろな質問を受けた。

次の日、この日はフェイトとのデートの日であった、カイルはフェイトと公園に来ていた。

フェイト「カイルさん、今日はありがとうございます。」

カイル「気にするな、俺が勝手にきっかけを作っただけだ．．．」

フェイト「．．．あの、カイルさん、なのはから聞いたんですよね？」

カイル「ああ．．．」

フェイト「おかしいと思わないんですか？」

カイル「別に、俺のとこだと不特定多数の女性と付き合うことなんて上流階級だと普通だったな．．．」

フェイト「そうですか．．．カイルさん、私のこの気持ちは嘘じゃありません．．．カイルさんが迷惑なら．．．」

カイル「．．．なのはにも言ったが、お前達の気持ちまで踏みにするつもりはないってな．．．」

フェイト「．．．ありがとうございます．．．あ、あの、カイルさんお願いします．．．」

カイル「．．．まさか、抱いてほしいって言うのか？」

フェイト「／＼／＼／＼」

フェイトは凶星を言われて、顔を真っ赤にした。

カイク「・・・わかった、お前みたいな美人に言われて、抱かないのは失礼だからな・・・」

フェイト「び、美人だなんて・・・／＼／＼」

カイク「謙遜するな、それじゃ行くぞ・・・」

フェイト「はい・・・初めてなので、お手柔らかに・・・」

そう言つて、カイクとフェイトとは近くの人気のないところへ行き、肌を重ねた。

その後、カイクとフェイトは近くのバーへ行き、話し合っていた。

カイク「大丈夫だったか？」

フェイト「はい、その・・・思ったよりは、痛くはなかったので・・・

／＼／

カイク「そうか・・・」

フェイト「カイクさん・・・いいんですよ？私達もカイクさんのこと好きなんつても・・・」

カイク「言つたはずだ、お前達の気持ちまで踏みにじることはしないと・・・」

フェイト「はい・・・カイクさん、ありがとうございます・・・」

カイク「それじゃ、乾杯するか？」

フェイト「はい、それじゃ・・・」

カイク・フェイト「乾杯！！」

二人は大人の夜を過ぎし、その後、遅くなつて帰つたため、二人揃つてティア、エリス、なのはから執拗に質問攻めを受けた。

### 第23話 キングに惚れた二人の魔導師（後書き）

今回は完全になのはとフェイトの二人が中心になっていました、今回は久しぶりに新しい大いなる力を解放させますのでよろしくお願います。

## 第24話 侍の魂は永遠（前書き）

どうも、今回はタイトル通り、シンケンジャーの大いなる力が解放されます、ちなみにゴセイジャーVSシンケンジャーで全員スーパーシンケンジャーになれたので、インロウマルを人数分ある設定にしました。

## 第24話 侍の魂は永遠

数日前のデートの一件の後からカイクが六課の訓練に付き合う回数が多くなった。

そして、ようやくナビィの調子が戻ったので、さっそくお宝ナビゲートをさせようとした。

はやて「ほなら、ナビィ頼むわ。」

ナビィ「オ任せ、レッツお宝ナビゲート！．．侍ノ眠リシ場所へ行ケ．．ダッテサ。」

シグナム「侍．．。」

なのは「なんか、時代がかかってるな。」

カイク「牧野先生、どこのことだと思う？」

牧野「おそらく、侍戦隊シンケンジャーのことで、天現寺という場所ではないでしょうか．．あそこには歴代のシンケンジャーの中心である、志葉家の墓がありますから．．。」

ジーク「なら話は早い、その場所は？」

レオナ「私たちのいた時代だと．．ここだね。」

そう言つて、モニターに地図を出した。

フェイト「海鳴市の近くですね．．。」

ジーク「よし、さっそく行つて来るか。」

その後、ゴークイジャーのメンバーと隊長、副隊長、ヴィヴィオのメンバーも同行し、天現寺へ向かった。ちなみにフォワード陣は万が一に備えて、留守番することになった。

天現寺

カイクたちは、事前の連絡のおかげで、住職の人に奥へと案内された。

浄寛「どうぞ、皆さんお掛けになってください。」

フェイト「すみません、ご住職。」

ヴィヴィオ「ありがとうございます。」

ヴィヴィオは丁寧に頭を下げた。

浄寛「おや？お嬢ちゃん、ご丁寧にありがとうございます。」

なのは「偉いよ、ヴィヴィオ。」

そう言つて、なのはヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「えへへ〜」

その後、修行僧が持ってきたお茶をみんなで飲んでいた。

カイル「・・・住職、それで、シンケンジャーの件なんだが・・・」

浄寛「わかっています・・・それでは、志葉家の歴代の当主が眠る場所、ご案内します。」

そう言つて、住職はメンバーを志葉家の墓の前へ案内した。

### 志葉家の墓

シグナム「ここが・・・」

ヴィータ「シンケンジャーの眠る場所か・・・」

そこには6つの墓が立っていた。

なのは「あゝ、1つは志葉家の墓だとして、残りの5つの墓は？」

浄寛「ああ、これは志葉家に仕えていた家臣の墓です・・・もつとも、1つは家臣ではなくご友人の墓ですが・・・」

ジーク「なるほどな・・・たしか、シンケンジャーはシンケンレックス以外のメンバーは、家臣と協力者だった聞いていたが・・・これはそいつらの墓か・・・」

浄寛「はい、なんでも妖魔大戦の時に志葉家を含めたレジェンド戦隊の戦いの際に、ここにシンケンジャーを証を残すのだという話だったようで・・・」

それを聞いて、皆感じるところがいろいろあったようそのまま沈黙した。

その直後、その場にいた、浄寛様以外のメンバーは光に包まれたその場から消えた。

浄寛「こ、これはいつたい・・・」

その直後、次元を裂いて骨のシタリが現れた。  
浄寛「お、お前達は？」

骨のシタリ「やれやれ、ここは変わってないようだね．．．まあいいさ、あの目障りなシンケンジャーの墓を破壊するだけさね、スカルソルジャー！ やっておしまい！」

そう言つて、スカルソルジャーをけしかけた。

修行僧「浄寛様！」

浄寛「みんな！ ゴーカイジャーの方々が戻るまで、ここはわしらだけで死守するんじゃ！」

修行僧達「は！」「は！」

住職と修行僧は武器を持ちスカルソルジャーに向かっていった。

英雄の聖地の世界

ヴィータ「またここか．．．」

シグナム「しかし、相変わらず、不思議なところだな．．．」

フェイト「そうね、この世界はミッドの管理局の本部で特定できないところだしね．．．」

なのは「ねえ、向こうから誰か来るよ！」

そう言つと7人の男女が現れた。

カイル「まさか、あんだ達は．．．」

薫「いかにも、私は18代目シンケンレッド、志葉薫。」

文瑠「そして、19代目当主シンケンレッド、志葉文瑠。」

流ノ介「同じくブルー、池波流ノ介。」

茉莉「同じくピンク、白石茉莉。」

千明「同じくグリーン、谷千明。」

ことは「同じくイエロー、花織ことは。」

源太「同じくゴールド、梅盛源太。」

ジーク「あんだ達がシンケンジャーか．．．」

薫「いかにも、しかし、ゆっくり話している時間はなくなってしまった。」

エリス「どういうこと?」

丈瑠「ご住職たちが妖魔になった、骨のシタリに襲われている。」  
ファイオネ「何ですって!?!」

メルト「早く戻らないと．．．」

源太「ちよつと待て、お前達をここに呼んだのは大いなる力を解放するためだ．．．」

ティア「本当ですか!?!」

茉莉「ええ、早くレンジャーキーを．．．」

カイル「ああ．．．」

そう言つて、シンケンジャーのレンジャーキーを出し、7人はそれに手をかざしレンジャーキーが光った。さらにその光りはゴーカイジャー、なのはたちにも降りそそがれた。

シグナム「これは．．．」

丈瑠「俺達のモチカラを与えた、獣力開花を果たしたお前達なら使えるはずだ。ドウコクが蘇った以上、その力は必要だ．．．」

薫「それと、丈瑠．．．」

丈瑠「はい、母上．．．これはお前達が持っていない秘伝ディスク、それとキングキーだ。」

流ノ介「それと、これはモウギューバズーカ、人数分の強化アイテムインロウマルだ。」

千明「これだけのことをやったんだ、負けたら承知ししねえぞ．．．」

「  
ヴィヴィオ「大丈夫!パパもママ達強いもん!」

ことは「ふふふ、お嬢ちゃんは、ホンマにお父さんとお母さんが好きなんやね。」

ヴィヴィオ「うん!」

茉莉「いい子だね．．．この子のためにも絶対に負けられないわね．．．」

カイル「ああ、先輩達の力．．．有効に使わせてもらう．．．」  
ジーク「それじゃ、早く戻ろうぜ!」

ヴィータ「そうだな、早くぶっ飛ばしに行こうぜ！」  
源太「ちよつと待て、この提灯を連れてってくれ！」  
ティア「何ですか、この提灯さんは？」  
ダイゴヨウ「おいらは、ダイゴヨウって言います、よろしく。」  
エリス「．．．また変なのが增えたわね．．．」  
メルト「まあ、とりあえず持つて行きましょうか。」  
薫「頼むぞ！みんな！私たちの代わりにドウコクと妖魔を．．．」  
丈瑠「倒してくれ！」  
カイル「わかった！任せてくれ！」  
そう言つて、カイルたちは、元の世界に戻つた。

天現寺

浄寛「くつ．．．」

修行僧「浄寛様！大丈夫ですか！？」

浄寛「大丈夫だ．．．」

骨のシタリ「抵抗しなければ、痛い目を見ないで済んだというのに

．．．お前達、やるんだ！」

そう言つて、スカルソルジャーたちに浄寛たちに最後の攻撃をしようとした、その時、どこからともなく攻撃が飛んできた。

スカルソルジャー「ガガガ！」

骨のシタリ「だ、誰だい！？」

カイル「そこまでだ！」

ジーク「それ以上、好きにはやらせねえ！」

シグナム「行くぞ！」

ゴーカイジャー「『豪快チェンジ！』」

モバイレーツ「『ゴーカイジャー！！』」

なのは・フェイト「『セットアップ！』」

シグナム「『レヴァンティン！』」

ヴィータ「『アイゼン！』」

カイル「『ゴーカイキング！』」

ジーク「ゴーカイレッド！」  
フィオネ「ゴーカイブルー！」  
メルト「ゴーカイエロー！」  
エリス「ゴーカイグリーン！」  
ティア「ゴーカイピンク！」  
カイク・ジーク「海賊戦隊！」  
ゴーカイジャー「ゴーカイジャー！！」  
カイク・シグナム「さて．．．」  
ジーク・ヴィータ「派手に行くぜ！」  
戦闘開始になり、カイクとジークは骨のシタリへ相手をしていた。  
骨のシタリ「ぐうう．．．やるじゃないか．．．こうなったら、ド  
ーラアヤカシ！ゴズナグモ！」  
ゴズナグモ「やれやれ．．．やっと俺の出番か．．．」  
カイク「こ、これは！？」  
骨のシタリ「あたしやが、バンドーラたちの技術を応用して、復活  
させたアヤカシ1号さ！それじゃ後は頼むよ。」  
そう言つて、ゴズナグモに後を任せて撤退した。  
ゴズナグモ「やれやれ、やっぱり人任せか．．．相変わらずだな．．．  
．．．まあいいさ、さて、行くぜ！」  
そう言つて、カイクたちに向かつてきた。すばやく動きで翻弄しよ  
うとする。  
ジーク「中々やるじゃなねえか、だったらこっちはこれだ！豪快チ  
エンジ！」  
モバイレーツ「シンケンジャー！」  
6人はシンケンジャーに変身した。  
ゴズナグモ「目障りな姿なりやがつて、これでも食らえ！」  
ゴーカイジャー「インロウマル！」  
ゴズナグモ「こ、これは！？」  
ゴズナグモの攻撃を防いだ後、煙の中から白い陣羽織を纏った6人  
の姿があった。

ジーク「スーパーシンケンレッド！」

カイル「スーパーシンケンゴールド！」

フィオネ「スーパーシンケンブルー！」

メルト「スーパーシンケンイエロー！」

エリス「スーパーシンケングリーン！」

ティア「スーパーシンケンピンク！」

ゴズナグモ「てめえら、こんなもんまで持ってやがったのか？」

ジーク「とつととケリをつけるか。行くぜ！」

ジーク「スーパーシンケンマル．．．」

カイル「スーパーサカナマル．．．」

ゴークイジャー「真・六重の太刀！！はああ！！」

そう言つて、シンケンマルから放たれたモチカラはゴズナグモを切り裂いた。

ゴズナグモ「ば、馬鹿な．．この俺が．．ぐあああ！」

ゴズナグモの身体が爆発した、そして、なのはたちもスカルソルジャーをあっという間に蹴散らした。

その直後、骨のシタリとバンドーラが現れた。

骨のシタリ「あちゃ、まさかシンケンジャーの力まで手に入れるとはね．．今回は試しだったから、さすがに2の目までは備えてないからね．．」

バンドーラ「大丈夫さ、シタリよ、あたしに任せな、大地に眠る悪霊たちよ、ゴズナグモに、はあ！力を与えよ！」

そう言つて、バンドーラはドーラセプターを大地に向かって投げ、ゴズナグモを巨大化させた。さらにスカルソルジャーの大群が出てきた。

骨のシタリ「こりやすごい！バンドーラ、たいしたもんだよあんたは。」

バンドーラ「ははは、そうかい、それじゃ私は向こうで面白いものを見つけたから、後で戻るとするよ。」

骨のシタリ「わかったよ、それじゃあたしや先に帰らせてもらおう。」

そう言って、二人は姿をした。

ジーク「往生際の悪い野郎だ。」

カイル「とにかく倒すか。」

そう言って、カイル以外のメンバーは元のゴークイジャーの姿に戻った後、ジークとカイルはゴークイガレオンとカイルはシンケンオーを召喚した。

キングインストラー「シンケンオー！」

カイル以外のゴークイジャーはゴークイガレオンに乗り、なのは達はカイルと一緒にシンケンオーに乗り込んだ。

ゴークイジャー「完成！ゴークイオー！」

カイル「さっそくだ、これを使うか。」

インロウマル「真侍合体ディスク！」

その後、さらに折神が現れ、シンケンオーに合体した。

カイル「ダイカイシンケンオー！天下統一！」

なのは「また合体しちゃった……」

シグナム「なるほど、そのインロウマルにはそのような機能があるのか……」

ヴィータ「もう何でもありだな……」

フェイト「でも、これなら……」

とその時、アルティメットダイボウケンが来た。

カイル「アルティメットダイボウケン!？」

シグナム「いったい誰が!？」

スバル「私達です！」

なのは「スバル！」

ギンガ「スーパーストラーで呼び出しました。カイルさんのキングキーを使って。」

ティアナ「それに、これだけでかいのが暴れていれば誰でも気付きますよ！」

エリオ「空のスカルソルジャーたちは、僕たちが相手します。」

キャロ「皆さんは、あの敵を。」

ウィータ「よし、よく言ったお前ら！任せるぜ！」

5人「了解！」「」

ジーク「中々、頼もしいじゃねえか、こっちも行くぜ、まずはこっちはこれだ！レンジャーキーセット！」

ゴーカイオー「牙吠！ガオライオン！」

ガオライオンが現れ、ゴーカイオーに合体した。

ゴーカイジャー「完成！ガオゴーカイオー！」「」

ジーク「まだ行くぜ！レンジャーキーセット！」

するとガオゴーカイオーが変形した。

ゴーカイジャー「完成！シンケンゴーカイオー！」「」

カイム「行くぞ！」

4人「了解！」「」

ジーク「オラ！」

カイム「はあ！」

2体のロボットはゴズナグモを斬りつけ吹き飛ばした。

ゴズナグモ「ぐあああ！」

空中の敵は、次々と蹴散らされていった、そして、スバルたちは一気に倒そうとしていた。

ティアナ「一気に決めるわよ！」

4人「了解！」「」

5人「アルティメットブラスター！」「」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルソルジャーの群は全滅した。そして、ゴズナグモと戦っているカイムとジークたちも最後の攻撃をしようとしていた。

ジーク「とどめだ、烈火大斬刀！」

ゴーカイジャー「ゴーカイ侍斬り！」

5人「二天一流乱れ斬り！」

ゴズナグモ「ぐあああ！」

ゴズナグモは爆発した。

ジーク「これにて一件落着だな。」

カイル「．．．いや、俺はまだ終わってない．．．」

そう言うとカイルはすぐにダイカイシンケオーから降り、その後、走ってどこかへ向かって行った。

なのは「カイルさん？」

ヴィータ「あいつどうしたんだ？」

フェイト「！．．．もしかして、なのは！」

なのは「あ！ヴィヴィオがいないから。」

シグナム「そうか、これだけの戦闘で気にしている暇がなかったかな．．．」

ティア「私達も行きましょう！」

エリス「そうね、怪我でもしてたら大変よ！」

それを聞いて、ティア、なのは、フェイト、エリスの4人もカイルの後を追った。

カイルはそのあたりの林を探していた、するとダイゴヨウを持ったヴィヴィオを発見した。

カイル「ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオ「パパ！」

そうやって、ヴィヴィオはカイルに駆け寄り抱きついてきた。

カイル「大丈夫か？」

ヴィヴィオ「うん！平気、パパが来てくれたもん。」

カイル「そうか．．．」

そうやって、カイルはヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「えへへへ」

ヴィヴィオは嬉しそうな顔をしていた、その横でダイゴヨウが口を開いた。

ダイゴヨウ「実はバンドーラに襲われそうだったんですが、変な男が来て．．．」

カイル「変な男？」

とそこへ、他の4人も来た。

なのは「ヴィヴィオ！」

フェイト「大丈夫！」

ヴィヴィオ「あ！ママ！」

ティア「大丈夫だった？」

ヴィヴィオ「うん！」

エリス「よかった．．．ところで、何かあったの？」

カイル「なんでも、バンドーラが現れたが誰かが助けたそうだ。」

フェイト「誰なんでしょうね？」

ティア「ダイゴヨウ、その時のことを話してくれない？」

ダイゴヨウ「へい、あれは少し前の時、あっしとお嬢ちゃんはここに飛ばされたんでやんす．．．」

## 回想

ヴィヴィオ「ここどこ？」

ダイゴヨウ「さあ？それよりお嬢ちゃんは怖くないのかい？」

ヴィヴィオ「うん、パパがきつと来てくれるもん。」

とその時、バンドーラが出てきた。

バンドーラ「おや、お嬢ちゃん、本当にパパが来ると思っているのかい、大人なんてもんは、身勝手な生き物さ、きつとパパもお嬢ちゃんのことなんか忘れてるさ。」

ヴィヴィオ「パパはそんなことないもん！パパはいつもヴィヴィオのこと大切にしてくれてるもん！」

ダイゴヨウ「くうう、パパのことを信じてるとはいい子じゃねえか、やい！バンドーラ、この子はな、お前の言葉なんて信じないっての！」

バンドーラ「くく、憎たらしいたらありやしない、あたしはこういう風な子供が一番嫌いなんだよ！くらえ！」

そう言つて、魔法をぶつけようとした時、ダイゴヨウも秘伝ディスクを発射しようとした時、突然！煙幕が張られて、ヴィヴィオとダ

イゴヨウを別の場所へ移動させた。

バンドーラ「くそ、逃げられた、いつたい誰だい、邪魔したのは  
」

その後、ヴィヴィオを安全の場所まで男は連れて行った、その男は  
ルキウスだった。

ルキウス「ここまで来れば、大丈夫だ．．．」

ヴィヴィオ「あ、ありがとうございます．．．」

そう言つて、ヴィヴィオは礼儀正しくお辞儀をした。

ルキウス「ほう．．．君は、礼儀正しいんだな、君の名は？」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオ・アストレアです。」

ルキウス「！（アストレアだと、さっきパパとか言つてたな．．

この子はまさかあいつの子供か？）」

ヴィヴィオ「あの、どうしたんですか？」

ルキウス「．．．すまない、君のお父さんの名前は？」

ヴィヴィオ「カイクム・アストレアです。」

ルキウス「（やはり、あいつの．．．）」

ダイゴヨウ「あの、どうしたんでやんすか？」

ルキウス「いや、なんでもない、早くお父さんのところへ戻つた方

がいいぞ。」

ヴィヴィオ「はい、あのおじさんの名前は？」

ルキウス「．．．名乗るほどのものじゃない（俺は、おじさんなの  
か．．．）、それじゃな。」

ルキウスはヴィヴィオの言葉に少しショックを受けていた、その後、  
ヴィヴィオとダイゴヨウの前から姿を消した。

現在

なのは「ねえ、ヴィヴィオ、その人どんな人だった？」

ヴィヴィオ「うんとね、若そうで、かつこよくって、そうパパに似  
てた。」

カイクム「．．．まさか．．．」

ティア「カイクさん．．．」

二人はすぐに気がついた。

フェイト「心当たりがあるんですか？」

カイク「ああ．．．多分、この前この獣奏剣を渡した男だ．．．」

なのは「あの人ですか．．．でもカイクさんと何の関係が？」

カイク「あいつの名はルキウス．．．またの名をアイム・アストレアだ．．．」

フェイト「え！それじゃ、あの方は．．．まさかカイクさんの．．．」

ティア「はい、お兄さんです．．．」

エリス「でも、あの方は死んだんじゃない．．．」

カイク「妖魔がいるんだ．．．生きていても不思議じゃないさ．．．とにかく、この件に関しては俺に任せてくれ。」

なのは「．．．わかりました、それじゃヴィヴィオも見つかつたし、戻りましょう。」

そう言って、その場を後にした。

その後、シャマルたちも来て、エリスも手伝い住職と修行僧の怪我の手当てをした。

## 第24話 侍の魂は永遠（後書き）

どうも、今回はアヤカシの2の目を使わずにバンドーラに巨大化させました、さらに機動六課のメンバーにも巨大ロボット戦をやらせることが出来ました、ゴークイシルバーはまだ出しませんが、そのうち映画を記念した特別編を出したいと思います、それでは次回またよろしく願います。

## 第25話 過去と未来をレスキュー（前書き）

どうも、今回はスバルとなのはとの出会いに少し変化を持たせました、実はあの時カイクモいたという設定にしました、それではよろしくお願いします。

## 第25話 過去と未来をレスキュー

新暦71年4月29日

ミッドチルダ北部臨海第八空港

スバル・ナカジマ、ギンガ・ナカジマはこの日、火災現場でなのはとフェイトに救助された、しかしこの話には続きがあった、それは、二人を救助し、はやてが消火に入ろうとした時、巨大なロボットが現れた。

ゲンヤ「な、なんだ、あれは？」

はやて「大きい・・・」

別の場所にいた、なのはたちも見ていた。

なのは「な、なんのあれは？」

フェイト「敵なの、味方なの・・・」

それをギンガとスバルも再会し、見ていた。

スバル「ギン姉、あれは？」

ギンガ「さあ、でもなんだろう、あのロボットを見てると安心する。」

「

???「ダブルウオーターシュート！」

すると、そのロボットは消火活動を始めた。するとわずか数分で全ての炎を鎮火した。

???「帰るの？」

???「ええ、長居は無用ね、あんまりここに居るわけにはいかな  
いからね・・・」

その時、はやてがそのロボットの前へ行った。

はやて「待て！そのロボットのパイロットへ、消火の協力は感謝します。しかし、いったいどの所属ですか？答えてください。」

すると、一人の銀色のスーツを纏った男が現れた。

ゲンヤ「お、お前さんは？」

???「眩き冒険者、ボウケンシルバーだ。」

なのは「眩き冒険者？」

フェイト「ボウケンシルバー？」

それを遠くで見っていた、ギンガとスバル。

スバル「か、かつこいい．．．」

ギンガ「本当．．．」

はやて「あの、どこ所属ですか？」

ボウケンシルバー「悪いがどうやら、時間だな、いずれまた会うことになるさ．．．」

そう言つて、彼がロボットに乗り込んだ途端に、ロボットは跡形もなく消えた。

ゲンヤ「消えちまいやがった．．．」

はやて「また会うことになるって．．．」

その言葉に疑問を残しつつ、この事件は幕を閉じた。

現在

カイルとヴィヴィオは、レオナに頼まれて、デカベースのロストロギア管理倉庫へ来ていた。

レオナ「あつた、これだ！」

ヴィヴィオ「なにそれ？」

レオナ「これはね、クロノスの書つていうロストロギアだよ。」

カイル「クロノスつて言うとなしか、時間神の名前だが．．．」

レオナ「そう、これは時を越えることができるの。」

ヴィヴィオ「すごい、どこの時代に行くの？」

レオナ「ちよつと、試すだけなんだけど、2時間くらいだけ今から5年位前のミッドチルダに行つて、このロストロギアが本物か試そうと思つてね．．．」

カイル「なるほど、それで俺を呼んだわけか．．．」

レオナ「そう、ヴィヴィオも一緒にいれば断らないと思つたからね。」

カイル「はあ．．．俺はいいが、俺の大事な娘を巻き込むな．．．」

まあいいさ付き合っつてやる。」

レオナ「それじゃ早速、この書に行きたい時代と場所を書いて、戻る時間も記載するとその場所に飛んでその時間に戻ってこられるの。」

「そう言っつて、さっき言っつた時間と場所を記載し、3人は消えた。その後3人が消えてから、5分が経過した時、ミッドチルダからクロノ、カリム、アコース、シャツハ、ゲンヤ、リンディが来た。

はやて「わざわざ、遠いところをご苦労さんです。」

クロノ「かまわんさ、そっちは妖魔との戦いで忙しいだろうし・・・

「ゲンヤ「うちの娘達は元気かい？」

リン「ええ、元気ですよ。」

カリム「あれ？カイルさんはどうされました？」

ジーク「ああ、あいつはレオナに連れられて、ロストログリア管理倉庫の方へ行つたな、ヴィヴィオも連れて・・・」

シャツハ「ヴィヴィオですか？」

アコース「何でまた？」

なのは「多分、ヴィヴィオがいればカイルさんは断らないと思つたからじゃないかな・・・」

牧野「やれやれ、レオナ君にも、困つたのですな。」

リンディ「そう、ヴィヴィオにも会いたかつたのに・・・」

フェイト「あの、母さん、クロノ、後でちよつとお話が・・・」

シャーリー「大変です！東京都心で原因不明の火災が発生しました！

はやて「なんやて！総員配置について、民間人の救助が最優先事項や！」

メンバー「了解！！！！」

ジーク「俺達も行くぜ！」

そう言っつて、総員出動した。

過去

カイル、ヴィヴィオ、レオナは過去のミッドチルダに飛ばされた。

カイル「これが、5年前のくらのミッドチルダか．．．」

レオナ「さすがにあんまり変わってないね、まあ、このロストロギアの力が本物だったってわかっただけでもよかった。」

すると、ヴィヴィオが何かに気付いた。

ヴィヴィオ「ねえパパ、向こうの建物が燃えてるような気がする．．．」

カイル「火災か！」

すると、空を見るとはやてがいるのに気がついた。

カイル「あれは、はやてか!?!」

レオナ「どうやら、これが昔スバルちゃん達がなのはちゃん達と会った時の事件ってわけね．．．どうするのキング君？」

カイル「．．．とりあえず、救助はあっちがやっているようだしな．．．炎の鎮火だけ手伝った方がいいな．．．」

レオナ「そうだね、歴史に干渉するのはよくないけど、早くしないと被害が拡大しそうだしね。」

カイル「決まりだな、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ボウケンジャー！」

カイル「このキングキーがあつてよかった、キングインストロー！」

キングインストロー「サイレンビルダー！」

カイル「よし、ヴィヴィオ、レオナ行くぞ！」

ヴィヴィオ「うん！」

レオナ「わかったよ。」

そう言つて、3人は乗り込んだ。

カイル「とりあえず、さっきの通信を聞いたが、どうやら救助は終わったようだな．．．」

レオナ「それじゃ、さっさと消火して退散しようキング君、歴史に

あんまり干渉しちゃいけないしね．．．」

カイル「わかってるさ．．．」

ヴィヴィオ「やっちゃえ、パパ！」

カイル「ああ！ダブルウォーターシュート！」

サイレンビルダーの放水ですぐに火が消された。

カイル「これで、大丈夫だな．．．」

ヴィヴィオ「帰るの？」

レオナ「ええ、長居は無用ね、あんまりここにいるわけにはいかな  
いからね．．．あと少して時間だしね。」

とその時、はやての声が聞こえてきた。

はやて「待て！そのロボットのパイロットへ、消火の協力は感謝し  
ます。しかし、いったいどこの所属ですか？答えてください。」

レオナ「だつてさ、どうする？」

カイル「時間はどれくらいだ？」

レオナ「あと3分くらいだね。」

カイル「．．．なら俺が出て時間を稼ぐ。」

レオナ「わかつたわ、ヴィヴィオを私に任せて。」

ヴィヴィオ「頑張れ！パパ！」

そう言つて、カイルはボウケンシルバーの姿ではやてたちの前に現  
れた。

ゲンヤ「お、お前さんは？」

カイル「眩き冒険者、ボウケンシルバーだ。」

なのは「眩き冒険者？」

フェイト「ボウケンシルバー？」

はやて「あゝ、どこ所属ですか？」

とその時、レオナから通信が入った。

レオナ「（キング君、後10秒ほどで転移が始まるから戻ってきて  
）」

カイル「了解．．．悪いがどうやら、時間だな、いずれまた会うこ  
とになるさ．．．」

そう言つて、彼がロボットに乗り込んだ途端に、ロボットは跡形もなく消えた。  
ゲンヤ「消えちまいやがった．．．」  
はやて「また会うことになるつて．．．」  
こうして、カイクたちは元の次代へ戻った。

現在

六課のメンバーとゴーカイジャーは、GGGの氷竜、炎竜を中心に消火活動をしていた。

炎竜「しかし、どうして、こんな火の気のないところで．．．」

氷竜「今は考えている暇はない、炎竜、消火に専念するぞ。」

炎竜「わかつてるよ、氷竜！」

そう言つて、消火を無事完了させた。

ジーク「まったく、どうなつてやがるんだ．．．」

とその時、巨大な敵が現れた。それはパイロウ星人だった。

パイロウ星人「こら！俺がせっかく起こした火を消すんじゃね！」

なのは「ええ！それじゃ．．．」

凱「こいつのせいだったのか．．．こいつはいつたい？」

牧野「（それは、パイロウ星人です、過去のデータによれば彼ら炎

そのもので、おそらくそのボディは活動するためのボディかと．．．

「  
ビルの上からアブレラが見ていた。

アブレラ「パイロウ星人用の新型の巨大フレイムギアだ、どれだけのものか試すにはちょうどいいな．．．」

パイロウ星人「これでも食らえ！」

そう言つて、炎竜、氷竜の2体に炎をぶつけた。

炎竜・氷竜「ぐあああ！」

炎竜、氷竜は吹き飛ばされたが、その後ろから風竜、雷竜が身体を支えた。

風竜「大丈夫ですか、炎竜先輩。」

雷竜「しつかりしてください、氷竜先輩。」

炎竜「ああ、サンキュー、後輩！」

氷竜「こうなったら、シンメトリカルドッキングだ！」

風竜・雷竜「了解！」

4体「シンメトリカルドッキング！」

4体の勇者ロボは合体態勢に入った。

超竜神「超竜神！」

撃龍神「撃龍神！」

パイロン星人「合体したところで、俺の敵じゃねえ！」

超竜神「その口を黙らせてやる！ダブルガン！」

撃龍神「攪拌槽！」

2体とも同時に攻撃をしたが、あまり効果がなかった。

アブレラ「その程度の攻撃では、あの改良したフレイムギアには効きはしない・・・」

パイロン星人「今度はこつちからだ！食らえ！」

超竜神と撃龍神はパイロン星人の炎を食らい吹き飛ばされた。

超竜神・撃龍神「ぐあああ！」

凱「超竜神、撃龍神！」

ジーク「こうなったら、こつちもゴーカイガレオンで・・・」

とその時、通信が入った。

カイル「心配ない、俺がやるぜ！」

ティア「カイルさん！」

メルト「ちよつと、どこへ行ってたのよ、連絡つかないし・・・」

レオナ「ごめん、私のせいでちよつと時間旅行へ行ってたの。」

フィオネ「時間旅行？」

カイル「とにかく下がってる、俺のサイレンビルダーでやる。」

そう言つて、ゴーゴーファイヤーとゴーゴーポリス、ゴーゴーエィダーが現れた。

なのは「あれは？」

ティア「ゴーゴーファイヤーとゴーゴーポリス、ゴーゴーエィダー」

です。」

フェイト「でもどこかで見たような．．．」

エリス「そう？あれは初めて出したロボットだから．．．」  
そんなことをしている間にカイムは合体しようとしていた。

カイム「緊急轟轟合体！」

そう言つて、合体を完了させた。

カイム「サイレンビルダー！合体完了！」

その姿を見たとき、一部のメンバーは大きな声を上げた。

一部のメンバー「あああ！！！！」

はやて「あのロボットは．．．」

ゲンヤ「間違いねえ！」

フェイト「なのは！」

なのは「うん！」

スバル「あの時、空港の火災現場に現れた．．．」

ギンガ「謎の巨大ロボット！」

ジーク「なんでお前ら、サイレンビルダーを知っているんだ？」

なのは「そ、それは．．．」

カイム「話は後だ、こいつを倒す！」

パイロン星人「ほざけ！」

そう言つて、カイムはパイロン星人に攻撃を仕掛けた。

カイム「食らえ！ナツクルバルカン！」

パイロン星人「ぐああ！」

パイロン星人が吹き飛ばされ、カイムはサイレンビルダーで超竜神と撃龍神に駆け寄る。

カイム「超竜神、撃龍神！立て！一気に決めるぞ！」

超竜神・撃龍神「了解！」

3体は並び立ち、一斉に攻撃態勢に入った。

超竜神「一気に行くぜ！一斉発射！」

撃龍神「唸れ疾風、轟け雷光！双頭龍！」

カイム「トリプルリキッドボンバー！」

3体のロボットの攻撃を食らいパイロン星人は爆発した。

パイロン星人「ぐあああ！」

アブレラ「やれやれ、まあデータが取れただけでもよしとするか……」

そう言つて、アブレラは去つていった。

デカベース

その後、デカベースに戻つた後、カイク、レオナは説明した。  
はやく「そやつたんか……」

ゲンヤ「これで謎が解けたわけだな……」

レオナ「ごめんなさいね、それでこのクロノスの書なんだけど……」

クロノ「わかつた、それはこつちで預かることにする……」

そう言つて、クロノはレオナからクロノスの書を預かつた。

カイク「それとスバル。」

スバル「は、はい！」

カイクはスバルにサイレンビルダーのキングキーを出して、それをスバルに渡した。

カイク「お前は、たしか救助隊志望だったよな、これは元々レスキュー用に開発されたものだ、お前が持つてたほうがいいだろう。」

スバル「いいんですか？」

カイク「ああ、お前ならきつと使いこなせるはずだ。」

スバル「は、はい！ありがとうございます！」

なのは「ありがとうございます、カイクさん！」

カイク「気にするな。」

その後、リンディがカイクを手招きした。

リンディ「カイクくん、ちよつといいかしら？」

カイク「ああ」

そう言つて、クロノとリンディと3人だけで集まつた。

リンディ「単刀直入に聞くわ、あなたフェイトのことどう思つてる

の？」

カイク「．．好きとか、そういう感情は一概に言えないが、今は大事な人の一人だとは思っている。」

クロノ「そうか、でもなぜだろう君なら、フェイトを任せられるような気がする．．．」

リンデイ「そうね、あなたがどういう人間かは、フェイトやなのはちゃん達から聞いたから、直に見てみたかったの、私個人のお願ひなんだけど．．．あの子をお願いします．．．」

カイク「確実に約束は出来ないが、善処しよう．．．」

クロノ「ふ、君らしいな、だがそれは君にとって肯定と受け取っていい答えだな。」

カイクの言葉に満足し、クロノはその場から去った。

それを入れ違いになのはとフェイトが来た。

なのは「フェイト」「カイクさん！」

リンデイ「あら、二人とも来たみたいね、それじゃ私はヴィヴィオのところへ行こうかしら、カイクくん、もしよかったらたまには私の相手もしてくれないかしら？あなた女性経験豊富で、かっこいいし。」

そう言つてリンデイもヴィヴィオの所へ行つた。

カイク「やれやれ、誰が漏らしたんだか．．．まあ、こんな話をするのはメルトしかいないがな．．．」

そんなことを呟いているとなのはとフェイトが傍に来た。

なのは「リンデイさんとクロノ君と何を話していたんですか？」

カイク「フェイトのことを頼むつて話だ。」

フェイト「わ、私を、もう、母さん達たら／＼」

そう言つて、赤らめた顔をした。

なのは「ずるいフェイトちゃん！それじゃ、カイクさんまた今度うちに来てください、改めてお父さんとお母さんに紹介します。」

カイク「はあ．．．もう好きにしてくれ。」

フェイト「それじゃ、勝手にあの時の消火の協力の時のお礼をさせ

てください。」

カイル「お礼？」

そう言っつて、二人はカイルのほっぺに口を近づけキスをした。

なのは「フェイト」「チュ！」

カイル「．．．これがお礼か？」

なのは「は、はい．．．／／／」

フェイト「もし、か、カイルさんが望むなら．．．他のことも．．．

大丈夫です．．．／／／」

カイル「（この二人は向こうで覗いているティアとエリスに気付いていないの？）」

その後、ティアとエリスも来てカイルは少し大変なことになったというの言うまでもない。（笑）

## 第25話 過去と未来をレスキュー（後書き）

どもう、ようやく他のGGGロボットとサイレンビルダーを出せました、ちなみにキングキーはそのロボットによって、レンジャーキーのように出せるのが違う設定です、今更ながらですが、ちなみ合体できるロボットならスーパーインストラーでも2つ目のキーを差し込むと自動的に合体が出来ます、それではまた次回お願いします。

第26話 パパのピンチ！？ヴィヴィオの豪快チエンジ！？（前書き）

どうも、今回はヴィヴィオが豪快チエンジします、さらになのはの友達のアリサとすずかも登場するのでよろしくお願いします。

## 第26話 パパのピンチ！？ヴィヴィオの豪快チェンジ！？

この日、なのはとフェイトはヴィヴィオを連れて、小学校時代からの親友のアリサ・バニングス、月村すずかに会いに行った。ちなみにはやてはこつちに来たリンディ、クロノ、ゲンヤ、カリム、アコース、シャツハとの話し合いのためデカベースに残った。

アリサ「なのは、フェイト、久しぶり！」

なのは「うん！久しぶり二人とも。」

すずか「ところで、二人ともこの子は？」

フェイト「ごめん、紹介が遅れたね、この子は私となのはが後見人になっている子なの。」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオ・アストレアです、始めまして。」

そう言つて、ヴィヴィオは二人にお辞儀をした。

アリサ「礼儀正しいわね、ところで二人が後見人つて事は、この子には親がいるつて事よね？」

アリサのその質問にヴィヴィオが答えた。

ヴィヴィオ「うん！パパがっこいいんだよ、なのはママとフェイトママもパパのこと好きなんだよね？」

ヴィヴィオの言葉になのはとフェイトは顔を赤らめた。

なのは「ち、ちよつと、ヴィヴィオ！／／／」

フェイト「そ、そうだよ、た、確かに好きだけど．．．／／／」

それを見た二人は、ニヤニヤした顔をした。

アリサ「へえ、あんた達がそんなになつちゃうなんてね。」

すずか「どんな人なの？教えて。」

フェイト「そ、それは．．．」

とその時、突然、街の真ん中に怪物が現れた。

怪物「ふう、ここが地球か．．．何年たつても変わらねえな、本当にムシャクシャするくらいにな！」

そう言つて、街の中で怪物は無差別に攻撃を始めた。

市民「「「きやあああ!」「」

市民「「「な、何なんだ!?あの怪物は?」「」

その騒ぎに当然なのはとフェイトも気付いた。

フェイト「なのは!」

なのは「うん!ごめん、アリサちゃん、すずかちゃん、少しヴィヴィオのことお願い。」

すずか「うん、わかった。」

アリサ「頼むわよ!」

なのは「うん!」

そう言つて、二人が行こうとしたとき、カイクたち6人が来た。

フェイト「カイクさん!」

ヴィヴィオ「あ!パパだ!」

カイク「なのは、フェイトか、ここは俺達がやる、二人はヴィヴィオを頼む!」

なのは「わかりました!」

フェイト「気をつけて...」

アリサ「へえ、あれが噂の想い人?なるほど結構かっこいい男じゃない。」

すずか「でもいいの二人とも、あの人たちに任せても?」

フェイト「大丈夫だよ。」

なのは「あの人たちなら負けないよ。」

そう言つてる間に6人はモバイルーツを取り出した。

6人「「「豪快チェンジ!」「」

モバイルーツ「ゴーカイジャー!」

カイク「ゴーカイキング!」

ジーク「ゴーカイレッド!」

フィオネ「ゴーカイブルー!」

メルト「ゴーカイイエロー!」

エリス「ゴーカイグリーン!」

ティア「ゴーカイピンク!」

カイク・ジーク「海賊戦隊！」

ゴークイジャー「ゴークイジャー！！」

それを見た、二人は驚いた声を上げた。

アリサ「ええ！あれって、まさか、噂のゴークイジャー！？」

「わずかあのゴークイキングって人が二人の好きな人が．．少し納得した気がする。」

そんな会話をしている中、戦闘が開始されようとしていた。

カイク「さて．．」

ジーク「派手に行くぜ！」

そう言つて、6人で怪物に向かつていった。

フィオネ「あなたはいったい何者ですか！？」

怪物「俺は、妖魔獣バイオオーガだ！」

メルト「なるほど、名前のとおり力の任せつてわけね。」

バイオオーガ「ほざけ！」

6人はコンビネーション攻撃でバイオオーガを圧倒していた。

エリス「さつさと決めましょう。」

ティア「そうですね、カイクさん、ジークさん！」

ジーク「ああ、行け！レンジャーキーセット！」

ゴークイガン・ゴークイサーベル「ファイナルウェーブ！」

ゴークイジャー「ゴークイスクランブル！」

バイオオーガ「ぐあああ！」

そう言つて、サーベルとガンの攻撃を一斉に浴びせてバイオオーガを倒した。

カイク「．．不気味なくらい、簡単に倒したな．．」

ジーク「．．そうだな．．今回は雑魚も出てこなかったしな．．

」

フィオネ「何かあるのでしょうか？」

メルト「とりあえず、戻つてから考えましょう。」

エリス「．．カイク、とりあえずこの妖魔獣の身体の一部を持ち

帰つて、調べてみるわ。」

カイクム「ああ、頼むエリス。」  
ティア「それじゃ、行きましようか。」  
そう言つて、カイクムとティア以外のメンバーはデカベースに戻り、二人はなのはたちのところへ行き、二人の親友のアリサとすずかにいろいろ質問された。

### 異世界 妖魔の君の居城

骨のシタリ「ルシフェル！？どういふことだい、お前さん、あんなに簡単に妖魔獣がやられたじゃないか！」  
血祭ドウコク「騒ぐなシタリ、ルシフェル、お前とはアスラの次に付き合いが長いからな、こいつのことだ何か策があつてのことだろう？」

ルシフェル「さすが、ドウコク鋭いな、これを見る。」

ルシフェルはある映像を見せた、そこにはとあるビルの中にいる先ほど倒されたバイオオーガが居た。

骨のシタリ「こ、これはどういふことだい？」

バンドーラ「あははは、あれはねある目的のために送り込んだこの妖魔獣自身が送り込んだ分身さ……」

骨のシタリ「ある目的？」

バンドーラ「ゴークカイジャーのリーダーは誰だい？」

ドウコク「たしか、ゴークカイキングとゴークカイレッドだな。」

バンドーラ「さすがドウコクだ、あの二人さえいなけりゃ、後はどうにでもなるつてことさ……」

ルシフェル「バンドーラに協力してもらい、あいつとのあいつの分身には男だけに感染するウイルスがあつたということだ、このウイルスに感染すると全身の機能が衰え最後にはすべての身体の機能が停止する、本体であるあいつを倒さないと元には戻らない……しかも、このウイルスは感染力が高く、空気伝染ですぐに感染するという仕組みになっているのさ」

アスラ「なるほど、だから今回あっさりとやられて見せたのか……」

「ドウコク「ほう．．．さすがルシフェルだ、相変わらず抜け目がないねえな．．．」

ルシフェル「調べたところによると、ゴーカイレットはともかくゴーカイキングはあのカイク以外は変身が出来ないようにしているようだ。」

骨のシタリ「これで目障りなゴーカイジャーを一網打尽に出来るってことだね。」

ルシフェル「．．．だといいがな．．．今までの例があるからな．．．」

そうルシフェルは小さく囁いた。

デカベース

次の日、カイクたちは朝食を食べていたのだが、その時からカイク、ジークを始めとする男性陣が身体の異変に悩まされていた。

ヴィヴィオ「パパ、大丈夫？」

カイク「あ、ああ大丈夫だ．．．くっ．．．（な、なんだ、身体が

昨日の夜から重い．．．だ、だめだ．．．意識が遠のく．．．）」

その直後、カイクは倒れた。

ヴィヴィオ「パパ!？」

ティア「カイクさんしっかりしてください!」

なのは「と、とりあえず医務室へ!」

そう言つて、カイクは医務室へ運ばれた。

その後、ジーク、牧野、クロノ、ゲンヤ、ヴァイス、アコース、グリフィス、エリオを始めとした男のメンバーが全員意識不明の状態になっていた。

はやて「これはいったいどういうことや?」

エリス「原因は、昨日の妖魔獣よ。」

そこへシャーリー、マリエル、レオナを伴ってエリスが現れた。

フェイト「どういうこと?」

シャーリー「これを見てください。」

そう言つて、昨日採取した妖魔獣の欠片の詳細なデータを見せた。  
なのは「こ、これは？」

マリエル「これは、男性のホルモンに反応するウイルスなの、このウイルスに感染したら身体の機能がどんどん低下していき、最終的には身体の全ての機能が停止してしまうという恐ろしいウイルスなの．．．」

リンディ「そ、そんなことが．．．」

カリム「それじゃ、このままじゃカイクさんやクロノ提督たちは．．．」

「．．．」

シャツハ「なにか方法はないのですか？」  
シャーリー「調べたところ、昨日倒した妖魔獣はどうやら本体ではないようです．．．さらにこのウイルスには特殊な呪いの術がかかっているようです．．．おそらく本体を葬らないと、元に戻すの不可能かと．．．」

フェイト「そんな！それじゃカイクさんたちは．．．」

レオナ「最悪、このまま目覚めない可能性があるの．．．すべての身体機能が停止するのに時間としては後6時間．．．」

ライン「それしかないんですか！？」

シヤマル「残念だけど事実よ、それまでに本体を倒せば身体機能が自動的に元に戻るはずだけど．．．」

シグナム「しかし、本体の居場所がわからない以上、どうすれば．．．」

「．．．」

キャロ「エリオ君．．．」  
ヴィータ「とにかく、時間の許す限り、探索するしかねえ、ティアナ！スバル！行くぞ！」

スバル・ティアナ「はい！」  
「．．．」  
そう言つて、3人は出て行った。

エリス「．．．おそらく、カイクとジークを狙ったのは間違いないわね．．．あの二人がいないと、私達にとってはかなり不利なもの．

「. . .」  
メルト「そうね、なんだかんだであの二人以外で最初から戦闘が  
来たのはフィオネだけだしね. . .」  
フィオネ「とにかく、私達も行きましょう. . .」  
ティア「そうですね、ボウケンシルバーのサガスナイパーで欠片の  
データをインストールすれば見つかるかもしれません。」  
なのは「私達も行きます。」  
フェイト「ヴィヴィオはカイクさんのことお願いね。」  
ヴィヴィオ「うん. . . パパ大丈夫だよね?」  
ティア「大丈夫だよ、ママ達が絶対に何とかするから. . .」  
そう言つて、前線メンバー全員で出撃していった。

その後、海鳴市の各地に昨日のバイオオーガが現れ、それぞれ分散  
して撃破に向かった。

スバル「振動拳!」  
ティアナ「ヴァリアブルバレット!」  
バイオオーガ「ぐあああ!」  
スバル「だめだ、これじゃないよ、ティア。」  
ティアナ「まだ時間がある限り、探すわよスバル!」  
スバル「うん!」

ヴィータ「アイゼン!ぶち抜け!」  
ギンガ「ナツクルバンカー!」  
バイオオーガ「ぐあああ!」  
ギンガ「これも違いますね. . .」  
ヴィータ「. . . 次に行くぞ。」

シグナム「飛竜一閃!」  
キャロ「フリードリヒ!」  
バイオオーガ「ぐあああ!」

キャロ「これも違います．．．」  
シグナム「．．．行くぞ。」

その頃、ティアたちはなのは、フェイト、シャツハと一緒にサガスナイパーで最もエネルギーの大きい地点である、とあるビルの中へ向かっていった。

ティア「ここです、ここから先ほどの妖魔獣とは比べのものならぬ  
いエネルギーが探知されています。」

なのは「残り時間は、後2時間．．．」

シャツハ「急ぎましょう、手遅れにならないうちに．．．」

バディン「おつと、ここから先は通さないぜ。」

フェイト「あなたは、バディン！」

バディン「そうだ、ここから先へ通りたければ俺を倒してから行け  
！」

メルト「やるしかないわね．．．行くわよ！みんな！豪快チェンジ  
！」

ボウケンシルバーに変身していたティア以外のメンバーは別の戦士  
にチェンジした。

モバイレーツ「キバレンジャー！」

モバイレーツ「キングレンジャー！」

モバイレーツ「メガレンジャー！」

それぞれ、フィオネがキバレンジャー、メルトがキングレンジャー、  
エリスがメガシルバーにチェンジした。

エリス「さつさとこいつを何とかして、カイクたちを助けるわよ！」  
ティア「当然です！」

フィオネ「退きなさい！」

バディン「そうは行くか！返り討ちにしてくれる！」

そう言つて、ゴーカイジャーとなのはたちと戦闘が開始された、そ  
んなことをしている間に残り30分を切ってしまった。しかし、建  
物の一部が壊れて、そこからバイオオーガの本体が吹き飛ばされて

出てきた。

バディン「バイオオーガ！どういうことだ!？」

バイオオーガ「申し訳ありません、バディン様、それがゴーカイキングが現れて．．．」

なのは「ええ!？」

フェイト「でもカイクさんは動けないはずだし．．．」

ティア「それにあれはカイクさん以外は変身できないはずだし．．．」

「  
シャツハ「いったい誰が？」

とそこへ、ゴーカイキングが降りてきた。

バディン「ば、馬鹿な、カイクは動けないはず．．．」

「???」「逃がさない!私がパパを助けるんだもん!」

フィオネ「パパ!？」

なのは「ま、まさか．．．」

フェイト「ヴィヴィオなの!？」

ヴィヴィオ「そうだよ、私ヴィヴィオだよ、ママ!」

エリス「ど、どうということ？」

メルト「さあ、私が聞きたいわ．．．」

シャツハ「ヴィヴィオ、いったいどうということなの？」

ヴィヴィオ「うん、あれは1時間前くらい．．．」

1時間前 デカベース

ヴィヴィオ「ねえレオナさん、まだなの？」

レオナ「どうやら、時間稼ぎされているようね．．．」

とその時、シャリーから連絡が入った。

シャリー「レオナさん、敵の本体の場所がわかりましたが．．．しかし、分身の数が多く、本体の居るところへ皆さんいけません、近くに居るのはさんやティアさんたちも妖魔のバディンに邪魔されて、向かえないそうなんです．．．」

レオナ「わかったよ、こうなったら奥の手を使うわ。」

シャーリー「奥の手？」

シャマル「それはいつたい？」

レオナ「見てればわかるわよ。」

そう言つて、通信を切り、レオナはヴィヴィオに向き合った。

レオナ「．．．ヴィヴィオ、パパを助けたいんだよね、それには一つだけとっておきの方法があるの．．．でもそれをするには、ヴィヴィオが戦わなくちゃいけないの．．．ヴィヴィオはパパを助けるために戦える？」

ヴィヴィオは少し考えた後、レオナの目を見て口を開いた。

ヴィヴィオ「うん、ヴィヴィオはパパが大好き、パパはいつもヴィヴィオを助けてくれた、だから今度はヴィヴィオがパパを助けたい！」

レオナ「．．．わかつたわ、それじゃまずこれを食べて。」

そう言つて、一つの果実を渡した。

ヴィヴィオ「これは？」

レオナ「それはグロウスの実っていうの、これを食べると10歳だけ成長するの、ただし半日経つと元に戻っちゃうけどね．．．大きくなってヴィヴィオがゴーカイキングになればきつとパパを助けられるよ。」

それを聞いたヴィヴィオはその実を見ながらレオナに言った。

ヴィヴィオ「ヴィヴィオやる、パパを助けるためだもん！」

そう言つて、ヴィヴィオはその実を食べ、その途端に10歳分成長した。

ヴィヴィオ「すっごい、これが私の10年後なんだ。」

レオナ「それと、これはキング君のレンジャーキーとヴィヴィオ用のモバイレーツだよ。」

ヴィヴィオ「ありがとうレオナさん。」

レオナ「それで、まずはね．．．」

その後、レオナから潜入ルートを聞き出し、なのはたちがバディンをひきつけている間にバイオオーガの本体のところへ向かったとい

う、そして、バイオオーガのところへ到着した時。

ヴィヴィオ「見つけた！ここまでだよ！」

バイオオーガ「な、なぜ、ここが．．．まあいいか、どうせ小娘一人だ、さしたる問題ではないだろう．．．」

ヴィヴィオ「それはどうかな、行くよ！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ヴィヴィオのゴーカイキングのスーツはカイムの物と違い腰にスカートが着いていた。

ヴィヴィオ「ゴーカイキング！」

バイオオーガ「な、何だと、こんな小娘が．．．」

ヴィヴィオ「行くよ！ゴーカイデリンガーサブマシンガンモード！」

バイオオーガ「ぐっ．．．あああ！」

そう言つて、ヴィヴィオはバイオオーガを吹き飛ばし、外へと追いつ出した。

現在

ヴィヴィオ「．．．というわけなの、わかった？ママ達。」

フェイト「そうだったの．．．」

ティア「ヴィヴィオ．．．」

なのは「偉いよ、ヴィヴィオそれじゃ一緒にあいつを倒そつか？」

ヴィヴィオ「うん！なのはママ！」

そう言つて、全員は一斉にバディンとバイオオーガに向かっていった。

なのは「ディバインシューター！」

フェイト「プラズマバレット！」

シャツハ「烈風一刃！」

ティア「サガスナイパー、サガスラッシュ！」

エリス「シルバーブレイザー、ブレイザーインパクト！」

フィオネ「白虎真剣、白虎一閃！」

メルト「キングステイク、キングビクトリーフラッシュ！」

バディン「ぐああ！」

バイオオーガ「ごおおお！」

二人は吹き飛ばされた。

ヴィヴィオ「これで決める、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

ヴィヴィオはデカブレイクになった。

ヴィヴィオ「パパを苦しめるのは絶対に許せない、ブレスロツトル  
！正拳アクセルブロー奥義、必殺拳ソニツクハンマー！」

ヴィヴィオの一撃がバイオオーガを一撃で粉砕した。

バイオオーガ「ば、バディン様！ぐああああ！！！」

ヴィヴィオ「ゴツチュー！」

その瞬間、他の分身たちも消えた。

スバル「ヴィータ副隊長！シグナム副隊長！」

シグナム「ああ」

ヴィータ「どうやら、本体を倒したらしいな……」

ティアナ「なのはさんとティアさんたちが……」

キャロ「とりあえず、巻き込まれた人の救助を……」

そう言つて、別の場所にいたメンバーは救助活動に入った。

バディン「お、おのれ……こうなったら、ゴルリンMr.？4号

こい！」

そう言つて、ゴルリンMr.？4号を呼び寄せてバイオオーガを巨  
大化させた。

フィオネ「どうしますか？ジークさんがいないとなるとゴーカイガ

レオンは……」

フェイト「スーパーストローラーを使うしか……」

とそこへ、通信が入った。

カイク「その心配はない、こいつは俺達がやる。」

そこへダイボイジャーへ乗ったカイクが現れた。

ヴィヴィオ「パパ！」

エリオ「ええ！？ヴ、ヴィヴィオが大人になつてる！？」  
ジーク「へえ、話には聞いていたが、ヴィヴィオも中々さまになつてるじゃねえか。」  
なのは「カイクさん！ジークさんも無事だったんですね。」  
クロノ「彼らだけじゃないさ。」  
フェイト「クロノ！？」  
アコース「あのままつてのは、男が廃るつてもんだよ。」  
ゲンヤ「久しぶりに暴れてみたくな。」  
ヴァイス「皆さんのおかげで、助かりましたぜ！」  
グリフィス「後は、こつちに任せてください！」  
ティア「皆さん元に戻ったんですね、よかった・・・」  
ヴィヴィオ「パパ・・・」  
そんなことを言っている間にダイボイジャーは巨大化したバイオオーガに向かつていった。  
バイオオーガ「また俺のウイルスを食らいたいのか、バカ共が食らえ！」  
ダイボイジャーに自分の菌をばら撒いたが、まったく効いていない。  
バイオオーガ「ど、どうということだ！？」  
ジーク「てめえのウイルスの成分はGGGの協力もあつて、とつくに分析済みだ。」  
クロノ「だから、それに対抗するためのワクチンが完成して、僕たち全員に摂取してもらったんだ。」  
ゲンヤ「そういうことだ、もうお前さんの攻撃は効かないってことだ。」  
バイオオーガ「そんなことが・・・」  
エリオ「今度はこつちの番です！」  
カイク「くられえ！ボイジャーキャノン！」  
バイオオーガに砲撃を食らわせた。  
バイオオーガ「ごおおお！」  
ジーク「オラ！」

今度はダイボイジャーの拳で思いつ切り吹き飛ばした。

バイオオーガ「ぐあああ！」

エリオ「今です！カイクさん！」

カイク「ああ！とどめだ、ハイパーチャージ！」

カイクがそう言うのとダイボイジャーの胸のタイヤと両拳の高速回転を始め、エネルギーが両拳に集まった。

男連中「っアドベンチャーダブルスクリーー！！」

ダイボイジャーはエネルギーがたまった拳をバイオオーガにぶつけ、その攻撃によってバイオオーガは完全に倒された。

バイオオーガ「ぐああああ！！」

とあるビルの屋上

ルシフェル「．．．聖王の器はやはりあの時始末すればよかったな．

．」

そう言うところルシフェルは姿を消した。

デカベース

カイクはその後、ヴィヴィオの活躍に対してご褒美をあげることにした、そしてヴィヴィオがねだった、それでそのご褒美はというと．

．

ヴィヴィオ「えへへへ、パパ」

大人モードのままカイクの腕に自分の腕を絡ませ寄り添っていた。

なのは「．．．」

フェイト「．．．」

エリス「．．．」

ティア「．．．」

それをジト目で見ている4人の姿があるが、そんなことを気にせずヴィヴィオは構わずカイクにさらにくつつき甘えていた。

カイク「．．．（やれやれ、一難去って、また一難か、しかし、娘がこんなに甘えてくるのもたまには悪くないかもな．．．）」

そうカイクは内心思っていた。

第26話 パパのピンチ！？ヴィヴィオの豪快チェンジ！？（後書き）

どうも、今回は女性陣の話でした、さて明日はいよいよ199ピロ一の公開の日です、劇場版の大いなる力が非常に気になる次第です。それではまた次回お願いします。

## 第27話 キングを愛した騎士（前書き）

どうも、今回は久しぶりにユースティアの舞台へ行きます、さらに騎士カリムもカイクムラブになってもらいます、ちなみにはやては別の人物と恋仲にする予定です。

## 第27話 キングを愛した騎士

前回の事件の後、話し合いの結果、デカベースに前回来たメンバーも妖魔に対抗するために留まることになり、その準備のためクロノ、リンデイ、ゲンヤは一旦ミッドチルダへ戻った。

カイク「それじゃ、ロツサ頼む。」

アコース「ああ、必ず探してみせる、君とはなんか気が合うしね。」  
カイク「そうかすまん、それじゃ。」

そう言つて、カイクはアコースにあることを頼んだそれは兄であるルキウスの行方を捜してほしいとの依頼であつた。二人は少し話して以来、ジークも含めて意気投合した。

その後、カイクは騎士カリムの依頼でシスターシャツハ、ヴィヴィオを伴い、魔法特急トラベリオンエクスプレスで都市ノーヴァス・アイテルへ向かった。

都市ノーヴァス・アイテル

カイク「...随分と変わったな...」

そう外の世界との交流（主にGGGなど）の影響で前の中世的な街並みから、近代的な街並み変化していた。とそこへクローディアがカイクに気付き駆け寄ってきた。

クローディア「カイクさん！帰ってきたんですか？」

カイク「よおクロ、元気だったか？」

クローディア「ええ、ところでそちらの方々は？」

カイク「ああ、こっちは異世界ミッドチルダ出身の人たちだ、今回は新生聖イレーヌ教会のコレットに用があつてな...」

クローディア「そうですか、初めまして私はクローディアと申します。」

カリム「初めまして、私は聖王教会の騎士カリム・グラシアと申します。」

シャツハ「私はシャツハ・ヌエラと申します。」

ヴィヴィオ「私はヴィヴィオ・アストレアです、初めまして。」

ヴィヴィオの名前を聞いて、クローディアはカイクに聞いた。

クローディア「あれ？カイクさん、この子は？」

カイク「ああ、俺が養子にした子だ。」

クローディア「そうだったんですか．．．可愛い子ですね。」

カイク「ああ」

ヴィヴィオ「ありがとうございます。」

クローディア「あらあら、お父さんと違って礼儀正しいのね。」

カイク「．．．余計なお世話だ．．．」

そう言つてクローディアはヴィヴィオの頭を撫でた。

その後、クローディアと別れて城へ向かった。カイクたちは城へ行き、そこでコレットとラヴィリアにさらに女王のリシアと面会していた、その時、真つ先にヴィヴィオを見て、カイクに聞いたのだした、その後3人はヴィヴィオのこと可愛がり、その間、カイクとカリムの二人はヴィヴィオを任せて少し出かけた。

カイク「しかし、カリムが街を見てみたいなんていうなんてな．．．

カリム「いえ、カイクさんの住んでいたところが見てみたいくて．．．

カイク「どうしてだ？」

そう言つとカリムは少し顔を赤らめて話した。

カリム「じ、実は．．．初めてお会いした時に綺麗な顔つて、言われた時から．．．カイクさん事が好きでした．．．／／／」

カイク「え!？」

鈍感ではないカイクだがさすがに気付かなかつた。

カイク「き、気付かなかつた．．．すまん．．．」

カリム「どうして謝れるのですか？私がカイクさんを勝手に好きになつただけの話ですし．．．」

カイク「いや．．．なんとなくな．．．しかし、なのはたちといい、

カイク「いや．．．なんとなくな．．．しかし、なのはたちといい、

カイク「いや．．．なんとなくな．．．しかし、なのはたちといい、

カイク「いや．．．なんとなくな．．．しかし、なのはたちといい、

カイク「いや．．．なんとなくな．．．しかし、なのはたちといい、

俺のどこがいいんだ？」

カリム「そんなことありませんよ、カイクさんはいつもヴィヴィオに優しいじゃありませんか、それに優しくも時には子供のことを思って、厳しく接することが出来る人です、それだけのことが出来る人はそうそういませんよ。」

カイク「そうか、ありがとう。」

とその時、カリムを狙ってフードを被った何者かが迫ってきた。

????「.....」

カリム「え！？」

しかし、その寸前でカイクがゴーカイサーベルでカリムを守った。

カイク「くっ！大丈夫か？」

カリム「はい、ありがとうございます。」

????「ちい.....」

カイク「逃がすか！」

カイクはゴーカイサーベルでフードを剥ぎ取った、その正体はかつてカイクもやりあったことある、かつて先代の近衛騎士団長と相打ちになり死んだはずの女殺し屋ガウだった。

カイク「お、お前は、ガウ！？」

カリム「知っていますのですか？カイクさん。」

カイク「ああ、昔やりあったことがある凄腕の殺し屋だ.....しかし、死んだはず.....」

ガウ「久しぶりだね、あたしは妖魔のルシフェルによって妖魔として蘇生させてもらったんだよ、しかししばらく見ないうちに強くてあたし好みのいい男になったね.....」

カイク「.....悪いがお前のような戦闘凶の女だけは願ひ下げだ.....」

ガウ「つれないね.....なら死にな！妖魔外装.....」

ガウの身体に蛇のような鎧が纏われた。

カイク「.....やるしかないようだな、カリム、下がってる.....」

カリム「はい！」

そう言つて、カイムはモバイレーツとレンジャーキーを取り出した。  
カイム「豪快チェンジ！」  
モバイレーツ「ゴーカイジャー！」  
カリム「は、始めて、目の前で見ました．．．」  
カイム「ゴーカイキング！」  
ガウ「へえ、それがあんたの今の力かい、それじゃさつそくため  
させてもらおうかい。」  
そう言つて、カイムに向かつてきた。  
カイム「はあ！」  
カイムはゴーカイサーベルとゴーカイガンを使って攻撃をかけてい  
た。  
ガウ「ふん！」  
ガウはそれを巧みに剣と鞭で応戦していた。  
カイム「さすがに一筋縄ではいかないか．．．なら、豪快チェンジ  
！」  
モバイレーツ「デカレンジャー！」  
カイムは瞬時にデカマスターにチェンジした。  
ガウ「姿が変わった!?」  
カイム「ディーソードベガ！」  
カイムはディーソードベガで攻撃をかけていた。  
ガウ「くっ．．．やるじゃないか、それが今のあんたの剣技のスタ  
イルつてわけかい．．．」  
カイム「そうなるな、行くぞ！ベガスラッシュ！」  
カイムは技をガウに叩き込みガウを吹き飛ばした。  
ガウ「ぐっ．．．さすがに今は堪えたよ．．．今日のところはこ  
れまでだね．．．」  
そう言つて、ガウは姿を消した。  
カイム「．．．逃がしたか．．．妖魔もいろいろな手を使ってくる  
な．．．まさかあいつが蘇るとは．．．」  
その直後、カイムの元へカリムが来た。

カリム「カイクさん、大丈夫ですか？」

カイク「ああ、問題ない、あいつもどうやら小手調べだったようだからな．．．」

カリム「そうですか．．．あ、あのカイクさん、ちょっとお礼がしたいので、少し屈んででもらえませんか？」

カイク「ああ、こうか？」

そう言つて、カイクは少ししゃがみカリムの顔の近くになった。

カリム「チュ！」

カリムはカイクの唇にキスをした。

カリム「．．．これがお礼です．．．／／／」

カイク「．．．ああ、ありがとう、それじゃヴィヴィオやシスターシャツハも心配しているだろうからな、とにかく戻るうか．．．」

カリム「ふふふ、そうですね。」

そう言つて、カイクとカリムは城へ戻つた、その間カリムはカイクの腕に自分の腕を絡ませていた。

その後、新生聖イレノ教会とミッドの聖王教会の話し合いは順調に終わり、メンバーは海鳴市に戻つた。その後、ヴィヴィオがカリムのことをティア、エリス、なのは、フェイトに話してしまい4人から執拗に問い詰められたのは言うまでもない。

さらにそれとは別の場所では

はやて「ねえ、ジークさん、明日私とお出かけしませんか？」

ジーク「ん？ああ、別にかまわねえけど．．．」

はやて「ホンマですか、それじゃ楽しみにしてますわ。」

はやては上機嫌で部隊長室へ戻つていった。

## 第27話 キングを愛した騎士（後書き）

どうも今回は比較的短めの話になりました、さらにユースティアの殺し屋ガウをやつと登場させることが出来ました、前から出したいとは思ってはいたのですが中々出す機会に恵まれません、ようやくです、それと余談ですが199ヒーローで11個の大いなる力が解放されましたね、あと半分ですがそれも楽しみです、次回は大きいなる力についての新しい話にしたいと思えますのでよろしくお願いします。

## 第28話 聖獣ラキアの願い（前書き）

どうも、今回は劇場版ではちょっと省略された形だったターボレンジャーの力が解放されます、ゴークイオーにどういう風に影響が出るのかはわからないため、ターボレンジャーの2体ロボットだけは出すのでよろしく願います。

## 第28話 聖獣ラキアの願い

この日、ヴィヴィオは学校の課外授業でプラネタリウムを見に来ていた。

ヴィヴィオ「きれい」

リオ「そうだね。」

コロナ「先生、あの星座は何ですか？」

先生「あれはね、星獣ラキアっていうのよ。」

リオ「ラキア？」

ヴィヴィオ「あ、知ってる！たしかパパが持つてる本に載ってた。」

コロナ「そうなの？」

先生「さすがゴーカイキングの娘さんね。」

ヴィヴィオ「えへへ」

コロナ「それでヴィヴィオ、ラキアって何の？」

ヴィヴィオ「たしか、妖精の守護獣でね、暴魔百族っていう悪魔を2万年間封印してた存在なんだって、ただレジェンド戦隊の一つの高速戦隊ターボレンジャーに後を任せて、命と引き換えに星座になっただって・・・」

リオ「へえ、すごいね。」

カイル「よく勉強してるな、ヴィヴィオ。」

フェイト「ふふふ、本当にヴィヴィオって本が好きね。」

とそこへ、カイルとフェイトが来た。

ヴィヴィオ「あ！パパ、フェイトママ！」

先生「ヴィヴィオのお父さん、どうしてここに？」

カイル「いえ、ちょっと・・・」

ヴィヴィオ「もしかして、フェイトママとデート？」

フェイト「うふふふ、そうね、ある意味ではデートだね。」

カイル「おい、フェイト・・・」

実は本当はナビィの占いで妖精の守護獣が知っているという結果だ

つたため、プラネタリウムで星獣ラキアのことを調べにきたのだが、その際にじゃんけんでカイクに同行するのを決め、その結果フェイトが勝つたため、カイクに同行することになったというのが本当の理由である。

リオ「(ねえ、ヴィヴィオのママって綺麗だね。)」

ヴィヴィオ「(うん、でも他にもいるよ、ママたちみんな綺麗だよ。)」

コロナ「(ええ!? ヴィヴィオのママって何人いるの?)」

そう言われ、ヴィヴィオはなのは、ティア、エリス、カリムの写真を出した。

ヴィヴィオ「(この人たちが、フェイトママも含めてみんなパパのことが好きな人たちだよ、だから私はみんなをママって呼んでいるの。)」

コロナ「(ヴィヴィオのパパって... 凄い人だね...)」

リオ「(さすが、ゴーカイジャーのリーダーだよ...)」

その後、お昼になりカイクとフェイトは先生の提案で、一緒に近く公園で食事を取ることになった。しかしその際、ヴィヴィオが連絡したのか、ティア、なのは、エリス、カリムも弁当を持ってやって来た。

ティア「カイクさん、さあどうぞ。」

なのは「カイクさん、この玉子焼きなんですけど、私が作ったんですよ。」

エリス「カイク、遠慮なく食べてね。」

フェイト「か、カイクさん、どうぞ遠慮なく...」

カリム「カイクさん、はい、あ〜ん...」

カイク「... 食べづらい...」

カイクは5人からおかずをそれぞれ箸で食べさせられている状態だった。

リオ「本当にヴィヴィオのパパって人気者だね。」

コロナ「両手に花どころか、両手両足でも足りないね。」

そんなことを子供達が面白そうにカイクたちの光景を見ていた。とその時、カイクはヴィヴィオが持っているラキアの像を見た。カイク「ヴィヴィオ、そのラキアの像はどうしたんだ？」  
ヴィヴィオ「出かける前にレオナさんがくれたの。」  
カイク「あいつ本当に何でも持つてるな．．．ん？なんだ、像が光った？」  
そう言つて、カイクがラキアの像を持った瞬間、あたり一面が光に包まれた。

英雄の聖地の世界

ティア「こ、ここは？」

カリム「どうやら、別の世界の世界のようですけど．．．  
なのは「カイクさん、もしかしてここって．．．」

カイク「ああ、英雄の聖地だな．．．」

フェイト「ということは、新しい大いなる力が．．．  
ラキア「その通りだ。」

そこへ聖獣ラキアが現れた。

エリス「きゃあ！もうなんなのよ、ビツクリしたじゃない。  
ヴィヴィオ「あ！ラキアだ。」

リオ「本当だ！」

コロナ「これが本物のラキア？」

先生「そ、そんな馬鹿な．．．」

男子生徒「すごい、これが妖精の守護獣か．．．」

女子生徒「すごい顔してるけど、なんだか安心できる．．．  
その後、ラキアの後ろから5人の男女が現れた。

力「君達が俺達の力を受け継ぎし者か．．．」  
大地「いい目をしている。」

洋平「ああ、それに今の地球はいい環境になったな．．．」

俊介「多くの人たちが地球のことを考えた結果だな。」

はるな「これなら、いつか妖精たち蘇り、共存できる日が来るかも

ね。」

エリス「あなた達が．．．」

ティア「高速戦隊ターボレンジャーですか？」

カ「ああ、そうだ。」

カイム「それじゃ、ターボレンジャーの大いなる力を．．．」

大地「そうだ、今まで、俺達は君たちの事を見ていたが君達なら俺達の力を預けられる．．．」

カ「さあ、レンジャーキーを．．．」

そう言つて、ターボレンジャーのレンジャーキーを出し、5人はレンジャーキーの力を解放した。

はるな「それとこれが私達のキングキーね。」

そう言つて、カイムはキングキーも受け取った。

ラキア「頼むぞ、戦士達よ、暴魔百族ですら妖魔には恐れ手を出さなかつた．．．しかし。奴らを野放しにしていれば、必ずこの世界だけではなく、全ての世界が滅んでしまう．．．」

カイム「．．．わかつていさ、俺は子供達．．．俺の大事な子供であるヴィヴィオが安心して暮らせる世界を守ってみせる．．．」

ヴィヴィオ「パパ．．．」

カ「いいお父さんだな、これなら大丈夫だな．．．」

大地「頼むぜ、後輩。」

ティア「はい、任せてください。」

なのは「私達も全力で一緒に戦います。」

フェイト「それが私達の決めた戦いです。」

ラキア「そうか．．．それでは若き戦士達よ、頼むぞ！」

そう言つて、光が消えて元の場所に戻った。

公園

カリム「どうやら戻つてこれたようですね．．．」

カイム「ああ．．．」

ティア「これで新しい大いなる力が解放されましたね。」

とその時、空間を引き裂いて妖魔獣が現れた。

妖魔獣「ここは？．．．うん？ゴーカイジャー！？ちょうどいい、  
てめらはこの妖魔獣スパイダーワーム様が地獄へ叩き落してやるぜ  
！」

とそこへジークたちも来た。

ジーク「よお、カイル、近くで妖魔の反応があったから、こっちに  
来たんだが．．．」

カイル「．．．ちょうどいい、ジーク今、ターボレンジャーの大い  
なる力が解放された．．．」

フィオネ「本当ですか？」

メルト「なるほどね、それじゃさっさと倒しましょうか」

カイル「カイル！先生！ヴィヴィオや子供達をお願いします！」

先生「わかりました。」

カイル「皆さんもお気をつけて．．．」

ヴィヴィオ「パパ、ママ頑張れ！」

そう言つて、先生は子供達を避難させた。

ジーク「行くぜ！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

なのは・フェイト「セットアップ！」

カイル「ゴーカイキング！」

ジーク「ゴーカイレッド！」

フィオネ「ゴーカイブルー！」

メルト「ゴーカイイエロー！」

エリス「ゴーカイグリーン！」

ティア「ゴーカイピンク！」

カイル・ジーク「海賊戦隊！」

ゴーカイジャー「ゴーカイジャー！！！！」

そう言つて、全員で向かっていった。

スパイダーワーム「そうは行くか！くらえ！」

そう言つて、糸を撒き散らし全員の武器に巻きつけ使用不能にした。

なのは「レイジングハート！」  
フェイト「バルディッシュ！」  
スパイダーワーム「どうだ、これでは攻撃が出来まい？」  
カイル「なら、こうするまでだ！はあ！」  
そう言つて、カイルは火の文字を空中に書き糸を焼き払つた。  
スパイダーワーム「な、なんだと!？」  
ジーク「よくやったぜ、カイル、ならこつちも行くぜ、豪快チェン  
ジ！」  
モバイレーツ「ターボレンジャー！」  
カイル以外のメンバーはターボレンジャーに変身した。  
ジーク「行くぜ！ターボレーザー！」  
5人「「「プラズマシールド!」「」」  
スパイダーワーム「ぐああ！」  
今の一撃でスパイダーワームは、かなり吹き飛ばされた。  
ジーク「行くぜ！コンビネーションアタックだ！」  
そう言つて、まずメルト、フィオネが攻撃を加え、その次にエリス、  
ティアが攻撃を加え、さらに陣形を組んだ4人の間からなのは、フ  
ェイト、カイル、ジークの順番で攻撃を加えた。  
なのは・フェイト「「ブラストカラミティ」」  
カイル「「ゴーカイスラッシュ！」」  
ジーク「GTクラッシュ！」  
スパイダーワーム「ぐああ、お、おのれ．．．」  
スパイダーワームはかなりのダメージをおつて、立ち上がるのがや  
つとであつた。  
ジーク「今だ！こいつでとどめだ、Vターボバズーカ！」  
そう言つて、Vターボバズーカが出現し、さらにVターボエンジン  
とドッキングされた。そして、ジークとカイルが後ろに並んで立ち、  
なのはとフェイトが二人の後ろに立つ形で左右に残りの4人が並ん  
で構えた。  
ジーク「Vターボエンジンオン！」

8人「レディ！」

カイル「マーク！」

その後、ターゲットをロックし、二人でトリガーを持ち発射態勢に入った。

ジーク・カイル「ゴー！」

スパイダーワーム「ぐあああ！」

スパイダーワームは爆発した。

ゴーカイジャー「ヴィクトリー！」

なのは「やった！」

フェイト「終わった……」

とそこへ、バンドーラが現れた。

バンドーラ「おのれ、こうなったら……大地に眠る悪霊たちよ、

スパイダーワームに、はあ！力を与えよ！」

バンドーラはドーラセプターを大地に向かって投げ、スパイダーワームを巨大化させた。

カイル「巨大化したか……」

ジーク「カイル、せっかくだ、お前のキングキーのロボットで戦うか？」

カイル「そうだな、ちょうどターボレンジャーには3体のロボットがあるしな……キングインストラー！」

キングインストラー「ターボロボ！ターボラガー！」

カイル以外のゴーカイジャーはターボロボへ乗り込み、カイル、なのは、フェイトはターボラガーに乗り込んだ！」

スパイダーワームはまたしても糸で動きを止めようとしたが、その前にターボロボとターボラガーは一斉に飛び道具を使った。

ジーク「同じ手を食らうか、食らえターボカノン！」

カイル「ビッググラガン！」

スパイダーワーム「ぐおおお！」

スパイダーワームは吹き飛ばされた。

ジーク「行くぜ！高速剣だ！」

カイク「こつちも行くぞ！」  
なのは・フェイト「はい！」  
カイク・なのは・フェイト「スクリューラガーキック！」  
5人「高速剣、ターボクラッシュ！」  
スパイダーワームはラガーの高速回転のキックを食らったあと、ターボロボの剣で斬られた。  
スパイダーワーム「ぐあああ！」  
スパイダーワームは2体のロボットの前に散った。

その後、事件が無事に解決した後、ヴィヴィオの提案で公園の植物の手入れをすることにした。

ジーク「やれやれ、戦いが終わってこんなことをやるとは思わなかったぜ……」

メルト「文句言わないの。」

フィオネ「そうですよ、子供達を見習ったらどうですか？」

そう言われ、ジークも渋々ながら、子供達に混じって作業を始めた。

カイク「しかし、こうやって、一人一人がこうやったことをすれば、ターボレンジャーが望んだラキアの願いに繋がるのかもしれないな。」

そう呟き、カイクはヴィヴィオと一緒に作業をした、その間カイクの回りには5人の女性がいたの言うまでもなかった。

## 第28話 聖獣ラキアの願い（後書き）

どうも、今回は思ったより短い話になってしまいました、次回はまた劇場版で開放された大いなる力の一つを解放しようと思います、多分今回のようにロボットは出しますが、ゴークイオーについては特に触れずに行こうと思いますので、そのところはご理解をお願いします。

## 第29話 地球（ほし）を護る天使の力（前書き）

どうも、今回はティアの羽と力の件について、オリジナルの設定を持たせましたので、今回は本格的な戦闘は無しです、それとなのはたちのジャケットに新装備が出るのでよろしくお願いします。

## 第29話 地球（ほし）を護る天使の力

前回ターボレンジャーからもらったキングキーのおかげで、デカベースの近くにターボビルダーを設置し、そこにクロノを筆頭にした新しくミッドから来たメンバーは基本的にそこに駐屯することになった。

そして、現在レジエンド戦隊の力を応用して、新たな強化ジャケットが完成した。その名もレンジャージャケットであり、事前に各六課メンバーの戦闘スタイルを元にレンジャーキーからの力を分析し、そこから作られた歴代レジエンド戦隊の力を宿したジャケットである。

シャリー「はい、それではこのレンジャージャケットの説明をします。まずなのはさん、フェイトさん、八神部隊長のジャケットは、天装戦隊ゴセイジャーの力が宿ってます、ただしレンジャーキーの大いなる力が解放されていないから、使える力は、まだ初歩的なものですけどね・・・」

なのは「まあ、仕方がないよ。」

フェイト「それでも今後の戦いがやりやすくなるね。」

はやて「ホンマやね。」

マリエル「そして、シグナムのジャケットは侍戦隊シンケンジャーの力、ヴィータのジャケットは爆竜戦隊アバレンジャーの力、シャルは星獣戦隊ギンガマンの力が宿ってるの、後ザフィーラにはジャケットは無いけど百獣戦隊ガオレンジャーの力を与えたの。」

牧野「さらにフォワード陣のメンバーにも、ギンガ君とスバル君のジャケットには五星戦隊ダイレンジャーの力、ティアナ君のジャケットには特捜戦隊デカレンジャーの力、エリオ君は恐竜戦隊ジュウレンジャーの力、キャロ君には魔法戦隊マジレンジャーの力が宿っています。」

レオナ「まあ、大いなる力が解放されていない戦隊もあるけど、後

は使いこなせるかは本人達次第って事だね。」

カイク「後は、実際に使ってみた方がいいな・・・」  
スバル「当然です！」

ティアナ「それではよろしくお願いします！」

ジーク「ああ、それじゃそれぞれ別れて指導に入るか。」

そうカイクたち6人がそれぞれ個別に指導をすることになっていた。

カイクは、なのは、フェイト、はやてを指導

ジークは、シグナム、ヴィータを指導

フィオネは、エリオ、ザフィーラを指導

メルトは、ギンガ、スバルを指導

エリスは、ティアナを指導

ティアは、シャマル、キヤロを指導

という組み合わせになった。

カイクサイド

カイク「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴセイジャー！」

カイクはゴセイナイトにチェンジした。

なのは「それじゃ、カイクさん・・・」

フェイト「よろしくお願いします。」

はやて「ほなら、カイクさん頼みますわ。」

カイク「わかった、それじゃ、天装術だがお前達はこのゴセイナイトの力を基本にそのジャケットは作られているが、俺の見たところ、なのははスカイツク、フェイトはランディツク、はやてはシーイツクの力を最初にやってから、他の天装術をやった方がいいな。」

3人「・・・はい！お願いします。」

そう言つて、カイクは天装術の基礎からを教えていた。

ジークサイド

ジーク「まずは、シンケンジャーから行くか、シグナムの能力を考

えると火のモチカラがいいな・・・」

シグナム「うむ、頼む。」

ヴィータ「あたしもいる事忘れるなよ。」

そう言つて、ジークはまずシグナムに火のモチカラの基礎を教え、その後、ヴィータには最初にアバレブラックの力のダイノスラストの技を見せ、それ以外の力も見せた。

フィオネサイド

フィオネ「それでは、まずエリオ君のジュウレンジャーの力の後、ザファイラのガオレンジャーの力ですね。」

エリオ「はい！お願いします。」

ザファイラ「頼む。」

その後、フィオネはエリオにティラノレンジャーをベースに戦闘を教えて、ザファイラには、ガオレンジャーのパワーアニマルの力を見せ、それを元にザファイラは自分なりの新しい技を編み出すきっかけを作った。

メルトサイド

メルト「それじゃ、二人ともダイレンジャーの力の基本を教えるわね。」

ギンガ「はい！」

スバル「お願いします、メルトさん！」

その後、二人に気力の基礎を教えた後、中国拳法の基礎を教えて、二人の格闘センスを高めることにした。

エリスサイド

エリス「それじゃ、デカレンジャーの力を使うわけだけど、私が教えるのはデカレッドが使っていたジュウクンドーね。」

ティアナ「はい、お願いします。」

その後、エリスはワンツーマンでティアナにデカレッドをベースに

戦闘スタイルを指導し、さらにデカブレイクの正拳アクセルブローの基礎も教えた。

ティアサイド

ティア「それじゃ、ギンガマンの力とマジレンジャーの力の指導をしますね。」

シャマル「ええ、お願い。」

キャロ「よろしくお願いします。」

その後、ティアはギンガマンのアースの力を指導し、その後、マジレンジャーの使う魔法を教えた。

そして、その訓練の日々が1週間過ぎ、一通り使いこなすことに成功した、このレンジャージャケットは通常は最初のジャケットの状態で、デバイスに命令するとこのジャケットになるというシステムである。そして、ティアはちょっとヴィヴィオと一緒に街へ出かけていた。

ティア「買い物も終わったし、それじゃヴィヴィオどこかでご飯食べたいところか？」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言つて、ティアは近くのレストランで食事を取り、その後二人で近くの公園に来ていた。

そこでヴィヴィオがティアに聞いてきた。

ヴィヴィオ「ねえ、ティアママ。」

ティア「うん、何ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「ママって、パパから聞いたんだけど天使なんだよね？」

ティア「うん、そうだよ、でも今は羽を自由にしたりできるようになってるから、今はあまり使わないかな・・・」

ヴィヴィオ「そうなんだ、羽があるって聞いてたから何で今はないのかなって思ったの。」

その時、ティアの羽が突然開いた。

ヴィヴィオ「ティアママ!？」

ティア「!ど、どうして、ゴーカイジャーになってから一度だって、自分の意思以外で現れたことがなかったのに...」

そして次の瞬間、二人は光に包まれてその場から消えてしまった。

英雄の聖地の世界

二人はまたしてもあの異世界の中にいた。

ヴィヴィオ「ティアママ、ここって...」

ティア「うん...英雄の聖地...ということは、また新しい大いなる力が...」

アラタ「その通りだよ、君か、僕たち護星天使の力を受け継いだのは。」

そこへゴセイジャーの5人とゴセイナイトが現れた。

ティア「あなた達は、もしかしてゴセイジャーですか？」

ハイド「ああ、そうだ。」

アグリ「実は、あることを君に教えなきゃいけないんだが...」

ティア「あること？」

モネ「実はね、ティアだっけ、あなたは私達、護星天使の力を受け継いでるのよ...」

ティア「え!？」

その言葉にティアは驚きを隠せなかった。

エリ「驚いたかもしれないけど、本当のことよ。」

ゴセイナイト「そうだ、君の母は遠い昔、神に許しをこいて天使の力を受け取ったが...実は我々が倒したブラジラの自我がまだ残っていて、奴は君の母を利用したんだ...」

ティア「お母様は、最初から利用されていたの...」

とそこへ、幻だがマスターヘッドが現れた。

マスターヘッド「だが、安心したまえ、君には新たな肉体を得る時に我々が本来の護星天使の力を与え、最愛の人の元へ戻したんだ...」

」

ティア「そうだったんですか．．．お母様があの時、天使から新たな肉体をあなたに言って言ったのは、このことだったんですね．．．でも、おかげでカイルさんたちとまた再会できたし、なによりこのヴィヴィオとも会うことができました、ありがとうございます。」

そう言って、ティアはヴィヴィオの頭を撫でた。  
ヴィヴィオ「えへへへ、でもヴィヴィオもティアママやパパ達に会えてよかったですよ。」

ティア「うふふふ、ありがとうヴィヴィオ。」  
モネ「いいお母さんだね。」

エリ「本当に、あなた達なら妖魔との戦いも、きつとなんとかなるなる。」

アグリ「そうだな、頼むぜ後輩！」

ハイド「それじゃ、俺達の大いなる力を解放しよう、レンジャーキーを．．．」

ティア「はい！」

そう言って、ティアはゴセイジャーのレンジャーキーを渡し、大いなる力を解放してもらった。さらにゴセイジャーの持っているキングキーも受け取った。

アラタ「それじゃ、データスにもよろしくね。」

ティア「データスって、誰ですか？」

ハイド「あれ？知らないのか？」

ティア「ええ、まったく．．．」

モネ「あのか、こんな機械を知らないかな？」

そう言って、ある絵を見せた、するとヴィヴィオが気付いた。

ヴィヴィオ「あ！知ってる、これって確か、牧野先生の作業場にあったよ。」

ティア「そういえば、あつたような．．．」

エリ「実はね、あれには不完全ながら、この世界にいる私達と連絡が取れるの。」

ティア「ええ！そうだったんですか。」

アグリ「どうやら、牧野先生とレオナの奴、話してなかったみたいだな・・・」

そんな話をしている中、マスターヘッドがゴセイナイトと話をしていた。

アラタ「どうしました、マスターヘッド、ゴセイナイト？」

マスターヘッド「うむ、実はゴセイナイトをゴーカイジャー達の元へ送ろうと思っている。」

ハイド「ゴセイナイトをですか？」

ゴセイナイト「うむ、とりあえず私は、いざという時以外は、ヘッダーの状態であれば邪魔にはならないだろう・・・」

ティア「いいんですか？」

マスターヘッド「うむ、力のほうをレンジャーキーにしておけば、今のゴーカイジャー達の力ですぐにゴセイパワーが回復するだろう。」

そうゴセイナイトはゴセイジャーたちと違い、エネルギー補充が自分で出来ないが、力のほうだけレンジャーキーの状態しておけば、カームたちは歴代の戦士達の特殊な力もすべて受け継いでいるため、ゴセイパワーの補充が可能である。

ティア「・・・わかりました、それじゃゴセイナイトさんをお借りします。」

マスターヘッド「うむ、頼む。」

アラタ「それじゃ、ティアもヴィヴィオもまたね。」

ティア「はい、ありがとうございます。」

ヴィヴィオ「ありがとうございます。」

そう言つて、ヴィヴィオは礼儀正しくお辞儀をする。

アグリ「へえ、小さいのに礼儀正しいな・・・モネも少しは見習ったらどうだ？」

モネ「余計なお世話だよ、お兄ちゃん。」

エリ「まあまあ。」

そんな話をしている間にヘッダー状態のゴセイナイトを連れて、テ

イアとヴィヴィオは元の世界に戻った。

海鳴市 デカベース

二人は、元の世界に戻った後、すぐにカイムはみんなに説明をし、その後、牧野先生とレオナがデータスを連れてきた。

データス「始めましてデス、僕データスデス。」

カイム「．．．あの不思議な機械は、こんなカラクリになってたのか．．．」

はやて「ホンマにビックリやわ．．．」

牧野「すみませんでした、今まで黙ってて．．．」

ジーク「なに構いやしねえさ、これからよろしくなデータス。」

データス「はいデス、よろしくお願いします、皆さん。」

なのは「うん、よろしくね。」

フェイト「こちらこそ。」

クロノ「しかし、これでいざという時は、レジェンド戦隊の方々に話が聞けるといわけか．．．」

こうしてデータスはみんなに紹介されて、仲間になった。

その後、ゴセイナイトはヘッダー状態で、カイムからヴィヴィオの護衛を頼まれ、ヴィヴィオと行動することになった。

第29話 地球（ほし）を護る天使の力（後書き）

どうも、今回はゴセイジャーの力を解放させました、後機動六課のメンバーに使ったスーパー戦隊の力は、個別に合いそうなものを組み合わせたのでよろしく願いします、次回は大きいなる力はちよつとお休みして、別の話にしたいと思えますのでよろしく願いします。

**第30話 正義・力・知恵・勇気・希望・愛（前書き）**

どうも、今回は直接の戦いはありませんが、エリオのことについての話にしています、そして、ゴークイキング専用の武器が登場します。それでは。

第30話 正義・力・知恵・勇気・希望・愛

デカベースの訓練場 AM4:00

カイムは、一緒に寝ていたヴィヴィオとなのは（ちなみその日に応じてテイア、エリス、なのは、フェイト、カリムが交代でカイムの部屋に来ている）を起こさないように起き、鍛錬をしていた。

カイム「デイスードベガ．．．」

カイムはデイスードベガの封印をあえて解かずに、目標を叩き斬っている。

訓練用のイーガドロイド20体を5分以内に片付けた。

カイム「．．ふ．．．終わったか．．．」

とそこへ、エリオが来た。

エリオ「カイムさん！」

カイム「エリオか、どうした？」

エリオ「いえ、少し早く目が覚めてしまって．．．それで訓練場から音が聞こえるんで来てみたら、カイムさんがいたので．．．」

カイム「そうか．．すまん、騒がせてしまって．．．」

エリオ「いえ、僕が気になっただけなんで、気にしないでください．．それにしてもすごいですね、変身してないのに、この高性能な

イーガドロイドを20体をあつという間に倒すなんて．．．」

カイム「別に、本物より性能が低い奴だ、たいしたことはないだろう．．．」

エリオ「でも、すごいですよ．．カイムさんの強さには本当に驚きますよ．．．」

カイム「ああ、ありがとう、エリオ。」

そう言われた後、エリオはデイスードベガについて聞いてみた。

エリオ「あの、カイムさん、その剣って．．前から気になっていたんですけど、その剣って実戦の

と訓練の時って、少し違いますよね？」

カイル「ああ、このデイスwordベガは通常は封印状態って言うてな、この状態だと威力を抑えられているんだ、わかりやすく言えばお前らのデバイスの非殺傷設定ってわけだな．．．」

シグナム「おや？カイルだけじゃなく、エリオもいたのか？」

エリオ「シグナム副隊長、アギトもおはようございます！」

シグナム「ああ、おはよう。」

アギト「おう、おはよう。」

エリオ「あれ？さっきカイルだけでなくって、言っていましたけど．．．」

シグナム「ああ、私はカイルの朝の鍛錬に付き合っているんだ、こうすれば気兼ねなくカイルとも手合わせが出来るしな．．．」

アギト「まあ、そういうことだ。」

エリオ「そうだったですか．．．」

シグナム「それじゃ、カイル今日は、アギトとのユニゾンとの調子を見るため、午前の本格的な模擬戦を頼むぞ。」

カイル「ああ、わかった。」

そう言つて、カイル、シグナム、アギトは訓練場を後にしようとしていた、その時、カイルの後姿をエリオは見ていた。

エリオ「（カイルさんって、戦闘に関しては本当に何でもできるよな．．．僕もカイルさんみたいに戦えたらな．．．）」

カイル「どうした、エリオ？」

エリオ「い、いえ、何でもありません。」

ふと声をかけられて、慌ててカイルたちの後について行った。

そして午前9：00、六課前線メンバー、さらにGGGから凱とソルダートJが来ていて、今カイルとシグナムの模擬戦が始まるうとしていた、ちなみにカイルはキングテクターを装着し、シグナムはアギトとユニゾンしつつ、さらにレンジャージャケットの状態だった。審判はなのはが行うことになった。

なのは「それでは、二人とも準備はいいですか？」

カイク「ああ、問題はない。」

シグナム「こちらもだ。」

なのは「それでは、始め！」

合図とともに二人は空中を舞台に激しくぶつかり合った。

シグナム「はあ！」

カイク「ふん！」

一進一退の攻防をみんなが見ていた。

ソルダート「さすが二人とも、まったく隙がないな出来れば私も奴らと手合わせがしたかったが……」

凱「仕方ないさ、とりあえず今回はじっくり拝見させてもらおうか。」

ソルダート「うむ、そうだな凱。」

そんな会話の中、お互いに必殺技を出し始めた。

シグナム「紫電一閃！」

カイク「ベガスラッシュ！」

お互いに技を相殺している。

ジーク「いいな、カイクの奴、あのキングテクターをつければチェンジしなくても空が飛べるんだもん……」

メルト「まあ、仕方がないわよあれはカイクにしか使えないしね。」

ティアナ「でも、相変わらずカイクさんって、すごいですね。」

スバル「ホント、あのシグナム副隊長相手に剣で互角の人なんて見たことないもん。」

その時、エリオの様子が気になってキャラは声をかけた。

キャラ「エリオ君、どうしたの？」

エリオ「い、いや、なんでもないよキャラ。(どうしたら、あんなふうには戦えるんだろう?)」

そんな中、シグナムとカイクは互いに剣を構えなおした。

シグナム「さすがだ、カイク、このままやっても埒が明かないだろう……なら、一気に決めさせてもらう、行くぞアギト！」

アギト「(おう!)」

そう言つて、アギトの力とデバイス用の火の秘伝ディスクをレヴァンティンにセットした、その直後レヴァンティンの炎がさらに燃え上がった。

カイク「そうか．．．なら俺も最強の技で迎え撃たせてもらう．．．」

「  
そう言うとカイクはデイスワードベガを鞘に一旦しまった。

フェイト「カイクさんはいつたいに何をしようと．．．」

ティア「あの構えは、たしか．．．」

フィオネ「カイクさんは銀河一刀流の秘奥義を出そうとしているのですね．．．」

ヴィータ「銀河一刀流の秘奥義？」

ジーク「ああ、俺達も一回しか見たことがねえが、とんでもねえ技だな。」

シャーリー「へえ、そんなんですか。」

エリス「ええ、多分驚くわよ。」

そんな中で、シグナムはカイクに向かっていった。

シグナム「真・火龍一閃！」

シグナムの攻撃がカイク目掛けて炸裂しようとしていたが、その瞬間カイクは鞘からデイスワードベガを引き抜いた。

カイク「デイスワードベガ！銀河一刀流、秘奥義ベガインパルス！」

シグナム「な、何!？」

アギト「(剣が伸びた!?)」

その一撃にシグナムは回避できずにプロテクションを展開したが、まったく役に立たず直撃を食らい地面に叩きつけられた。

シグナム「ぐあああ！」

ヴィータ「シグナム！」

カイク「安心しろ、デイスワードベガの威力を抑えて加減はした、多分シグナムならあれくらいで気を失いはしないさ．．．」

その言うとシグナムが立ち上がった。

シグナム「ふ．．．さすがだ．．．私の完敗だ．．．」

アギト「まったく無茶苦茶だぜ、カイムの旦那はよ．．．」  
今の一撃でユニゾンが解除されてしまった。

なのは「はい、そこまで勝者はカイムさんです！」

そう言つて、模擬戦は終了した。しかし、その際にシグナムがカイクムに呟いた。

シグナム「．．．お前のデイスwordベガ、そろそろまずいのではないのか？」

カイクム「．．．さすがにお前には隠せないか、ああ、この前データを通じてボスに連絡したら、俺が強くなりすぎて、デイスwordベガでさっきの技を使うのに持ちこたえるか怪しいものだってな．．．」

シグナム「そうだな、お前のさっきの技は威力が高すぎる、私だったからよかったものを、そうでなければいくら威力を抑えたとしても危険だな．．．」

カイクム「ああ、とりあえず牧野先生たちには相談したからな．．．」  
そんな会話をして、午前の訓練は終了した。

模擬戦の後、お昼の時間になったがその時、カイクムはちよつと牧野先生の所へ行つていた。

牧野「なるほど．．．しかし、ご安心あれ、こんなこともあるうかと、マリエルさん、シャリーさんの協力の元、カイクムの専用の武器が出来ました。」

カイクム「ホントか？」

マリエル「ええ、これですよ、名づけて「キングソードベガ」です。」

カイクム「．．．名前はあんまり変わらないんだな．．．」

シャリー「ま、まあ、いいじゃないですか、それですねこのキングソードベガはデバイスとしての機能がついているんですよ、で

すから自分の意思を持っているので、名前を呼んでみてください。」  
カイル「・・・わかった、それじゃ、お前の名称はベガだ。」  
ベガ「イエス、マスター。」

牧野「ちなみにそのキングソードベガはゴークイサーベルと同じようにレンジャーキーをセットすることでさらに威力を上げることが出来ますよ。」

カイル「そいつはいい、ありがとう3人とも、それじゃ昼にするか。」  
「  
そう言つて、作業場にいたメンバー全員で食堂に行った。

その後、ヴィヴィオが学校から帰ってきた、明日から土曜日を挟んだということもあり、休みを利用してリオとコロナがデカベースの寮に泊まりに来た。

リオ「よろしくお願ひします。」

コロナ「お世話になります。」

カイル「ああ、それじゃ建物の中を案内しようか。」

そう言つて、ヴィヴィオも伴つてリオとコロナにデカベースの施設を案内した。

その後、ヴィヴィオたちは部屋で遊び始めたので、カイルは訓練場に向かった。

そこではフォワード陣の訓練が終わり、なのは、ヴィータを含めた6人が来た。

なのは「あ、カイルさん！」

カイル「訓練は、終わりか？」

ヴィータ「ああ、みんな本当にいい動きになってきたぜ。」

スバル「これも、なのはさんたちやカイルさんたちのおかげですよ。」

ティアナ「そうですよ、ありがとうございます。」

カイル「いや、お前達の持っていたものが輝いただけの話だ・・・  
それより、エリオはどうしたんだ？」

4人のフオワード陣の中でエリオだけちょっと元気がなかった。

ヴィータ「いやな、今日エリオの奴、心ここにあらずだったからな、ちよっと訓練させなかつたんだ。」  
とそこへフェイトが来た。

フェイト「なのは、ごめんね遅くなって。」

なのは「うん、いいよそれよりエリオだけど．．．」

フェイト「エリオどうしたの？」

エリオ「い、いえ、なんでもないです．．．」

それを見たカイムは口を開いた。

カイム「．．．エリオ、ちよつとこい。」

エリオ「え？か、カイムさん!？」

そう言つて、カイムはエリオを連れて行った、それを見たフェイトとなのはは後を追つた。

そして、カイムはエリオをデカベースの屋上へ連れて行き、少し話し始めた。

カイム「．．．エリオ、お前はどうかやつたら強くなれるかつて考えて訓練に集中できなかつたんだらう？」

エリオ「．．．はい、カイムさんを見ていたら、どうしたらあんなに強くなれるのかなつて．．．」

カイム「．．．俺も始めは強くはなかつたさ、この力を手に入れたときにな銀河一刀流の師匠である、ドギー・クルーガーに教えてもらつたんだ、どんなに強くなるうが一人だけでは限界がある、しかし、仲間が居ればどんなことでも乗り越えられるつてな．．．」

フェイト「カイムさん．．．」

カイム「それといい事を教えてやる、お前のレンジャージャケットの力になっているジユウレンジャーの戦士達にはな、それぞれ自身の使命があつたんだ。」

エリオ「使命ですか？」

カイム「ああ、まずドラゴンレンジャーは力の戦士、マンモスレンジャーは知恵の戦士、トリケラレンジャーは勇気の戦士、タイガーレ

ンジャーは希望の戦士、プテラレンジャーは愛の戦士って言われてた。」

なのは「力、知恵、勇気、希望、愛・・・」

カイル「そして、それを束ねるためにはティラノレンジャーの使命が必要だ。」

エリオ「そ、それは？」

カイル「その5つを正しい方向へ導く正義の戦士だ。」

エリオ「正義の戦士・・・」

カイル「人にはそれぞれこの正義があるが、本当の正義というもののは先ほどの5つが揃ってこそ成り立つんだ、少しずつでいいだよ、お前はまだ子供なんだから・・・」

エリオ「は、はい！ありがとうございます。」

カイル「よし、それじゃ戻るか。」

そう言つて、エリオを連れて中に戻つた。

それを見ていた、なのはとフェイトはというと・・・

なのは「さすがカイルさんだね。」

フェイト「私達の出る幕はなかったね。」

そう言つて、二人も中に戻つた。

第30話 正義・力・知恵・勇気・希望・愛（後書き）

今回は、大いなる力は解放されませんでした。ジュウレンジャーの使命を出しました。次回もフォワードのメンバーを主役にした話にしたいと思っています。それではまた次回お願いします。

### 第31話 フォワード陣の新しい力(前書き)

どうも、今回はフォワード陣の戦闘が主にメインになります、さらに銭湯でエピソードもあるので、こっちの方は少し大人向けの話になっていますのでよろしくお願いします。

### 第31話 フォワード陣の新しい力

カイクとの話があった後、次の日エリオは見違えるほど動きがよくなった、しかし、その代わりにエリオはカイクのことを「お父さん」と呼ぶようになった、さらにそれに連れられてキャロまでカイクのことをそう呼ぶようになった。そして、その日の夜のことであった。メルト「お風呂が壊れた？」

シャーリー「ええ、明日中には直ると思うですけど・・・」

フェイト「でも、今日お風呂に入れないっていうのは・・・」

エリス「ちよつと、きついわね。」

とその時、はやてが口を開いた。

はやて「せや、スーパ―銭湯に行かへんか？」

その言葉に女性陣は全員賛成した。

そして、バックヤードのメンバーも交代で前線メンバーが戻ってきたら、行くことになり、とりあえずゴーカイジャーの面子と機動六課の前線メンバー、ヴィヴィオ、コロナ、リオを連れてスーパ―銭湯に行くことにした。（ちなみにクロノ、リンディ、カリムも同行した。）

その後、銭湯に到着した後、エリオは女湯に連れて行かれそうになったが、カイクたちが男湯に連れて行った。

女湯

メルト「それにしても広いわね。」

はやて「ええ、この辺りでは結構有名なんですよ。」

エリス「しかし、露天風呂まであるなんて思わなかったわ。」

ティア「そうですね、銭湯って調べて知ってましたけど、露天風呂があるなんて知りませんでした。」

なのは「ええ、これがスーパ―銭湯って言われている要因なんですよ。」

リンディ「気持ちいいわね」

フィオネ「ええ、しばしの休息になりますね。」

フェイト「あれ？ヴィヴィオとキャロは？」

なのは「そういえば、リオちゃんとコロナちゃんもいないよね？」

スバル「もしかして、男湯に行ったんじゃないですか？」

ティアナ「ありうるわね、キャロはまだ11歳だもんね。」

ギンガ「キャロちゃんも結構、行動力あるわね。」

はやて「せやな、ここは11歳以下だとどっちの風呂にも入れるようになってるしな。」

シグナム「まあ、カイルたちも居るから大丈夫だろう。」

ヴィータ「そうだな・・・」

シャマル「それにしても、いい気持ちですね。」

カリム「久しぶりにのんびりできますね。」

とその時、はやてがとんでもないことを口に出した。

はやて「ところで・・・なのはちゃん、フェイトちゃん・・・もしかして、胸大きくなったやない？」

なのは「え！？／＼／」

フェイト「は、はやて、な、何言ってるの！？／＼／」

あせる二人を尻目にはやては言葉が続けた。

はやて「いや、私の目に狂いはないで、もしかして、カイルさんと・・・もじ・・・」

その続きを言おうとしたはやての口を二人は塞いだ。

メルト「へえ、カイルもホント成長したわね・・・」

リンディ「あら、メルトさん随分とカイルさんことお詳しいですね。」

メルト「だって、私昔カイル、ジークの二人と身体重ねたことあるもの。」

なのは「フェイト・カリム」「！！」「！！」

はやて「！！」

メルトの発言に4人は驚きを隠せなかった。（ちなみにティア、エ

リス、フィオネは知っています。( )  
メルト「もしかして、4人ともカイクやジークとヤっちゃった？」  
はやて「わ、私はまだですよ！」  
カリム「わ、私もです．．．その．．．キスマです．．．」  
シグナム「主、まだということは．．．」  
ヴィータ「いずれはつてことだな．．．」  
シャマル「あら？なのはちゃんにフェイトちゃんはどつしたの？」  
なのは「フェイト」．．．／／／」  
二人は赤くなつて黙っていた。  
スバル「どつしたんですか？」  
ティアナ「顔が赤いですけど．．．」  
はやて「．．．まさか、二人とも．．．」  
なのは「フェイト」(コク)」  
二人は同時に頷いた。  
それに六課のメンバー全員叫んだ。  
メンバー「ええ!？」  
シグナム「ほ、本当か？」  
ヴィータ「ま、マジなのか？」  
シャマル「ど、どつなの二人とも？」  
なのは「う、うん．．．／／／」  
フェイト「そ、その．．．本当だよ．．．／／／」  
スバル「な、なのはさんとフェイトさんが．．．」  
ティアナ「か、カイクさんに．．．」  
ギンガ「抱かれた．．．」  
それを聞いたはやては叫んだ。  
はやて「私は、まだ経験ないちゆうことか!？」

男湯

カイク「．．．やかましいな．．．」  
ジーク「今の声つて、はやての声じゃないのか？」

クロノ「なんか、まだ経験がないって聞こえたが・・・」  
カイル「何のことだろうか？」

ジーク「さあな・・・」

ヴィヴィオ「パパ、背中洗ってあげるね。」

カイル「ああ、頼む。」

そう言つて、風呂から上がりヴィヴィオに背中を洗ってもらい、その後カイルはヴィヴィオとリオ、コロナの身体も洗ってあげた。ちなみにエリオはキャロと洗いつこしていた。

女湯

こっちでは、元ナンバーワン娼婦であるメルトがいろいろなテクニツクをティア、エリス、なのは、フェイト、はやて、カリムに伝授していた、しかもそれに便乗したリンディまでもがいろいろなもの  
を吹

き込んだ。ちなみにフィオネ、シグナム、ヴィータ、シャマル、スバル、ティアナ、ギンガは顔を赤らめながら逃げるように露天風呂に向かった。

その後、みんなでスーパー銭湯を後にし、入れ違いに残つたメンバーがスーパー銭湯に出かけていった、それから30分後、街の中に妖魔の反応があり、ここはカイルの発案でフォワード陣とギンガだけで出撃させた。

スバル「フォワード陣、ギン姉を含めた5名現場到着。」

そこで、街でスカルソルジャーの大群と妖魔獣が1体いた。

ティアナ「あんた妖魔獣ね!？」

妖魔獣「おうとも、俺は妖魔獣リザードウルフだ!」

ギンガ「これ以上好きにはさせないわ。」

リザードウルフ「上等だ!やれ、スカルソルジャー共!」

スカルソルジャー「ガガガ!」

エリオ「来ます!」

ティアナ「行くわよ！」

キャラ「はい！」

そう言つて、雑魚の片づけを始めた。

ギンガ「ナックルバンカー！」

スバル「リボルバーシユート！」

ティアナ「クロスファイアシユート！」

エリオ「メツサー・アングリフ！」

キャラ「ブーストアップ！ストライクパワー！」

それぞれ、自分のポジションですべてスカルソルジャーを撃破した。その後、しびれを切らしたリザードウルフが攻撃を仕掛けてきた。

リザードウルフ「おのれ、これでも食らえ！フレイムレイン！」

リザードウルフは上空から炎を降らせた。

キャラ「危ない！プロテクション！」

キャラは防御魔法でこの場を凌いだ。

ティアナ「こうなつたら行くわよ、みんな！」

4人「了解！」

そう言つて、5人はデバイスに命令した。

5人「レンジャージャケット、セットアップ！」

デバイス「イエス！」

そう言つと5人のバリアジャケットの上にさらに個別のジャケットが装着された。

リザードウルフ「な、なんだそれは！？」

リザードウルフはかなり驚いていたが、そんなことお構い無しに5人は向かつていった。

ティアナ「ムーンサルトショット！」

ティアナは前方宙返りをしながらクロスミラージュで攻撃をした。

リザードウルフ「ぐっ……」

スバル「炎上破、デイベインバスター！」

ギンガ「天風星一文字竜巻！」

リザードウルフ「ぐあああ！」

リザードウルフは吹き飛ばされた。

リザードウルフ「こうなったら．．．フレイムメテオ！」

そう言うのと巨大な炎の塊をぶつけようとした。

スバル「で、でかい！」

キャラ「私に任せてください！マジ・マジユナ！」

キャラが呪文を唱えると炎の塊が凍った。

リザードウルフ「ば、馬鹿な．．．」

ティアナ「まだよ！クロスリボルバー転送、クロスミラージュセツト！」

ティアナは転送されてきたリボルバー型の武器にクロスミラージュセツトした。

ティアナ「ヴァリアブルストライク！」

そう言うて、魔力弾をリザードウルフに浴びせた。

リザードウルフ「ぐあああ！．．．お、おのれ．．．」

リザードウルフはふらつきながらも立ち上がるうとしていた。

スバル「エリオ、とどめだよ！」

エリオ「はい！ストラダ、ソードモード！」

そう言うのとエリオのストラダが剣の状態になり、それで円を描いてから敵に斬りかかっていった。

エリオ「ストラダスラッシュ！」

エリオはリザードウルフの身体を横に一刀両断した。

リザードウルフ「ぐあああ！」

リザードウルフは爆発し倒された、しかし、その直後、バンドーラが現れた。

バンドーラ「おのれ、こうなったら．．．こうなったら．．．大地に眠る悪霊たちよ、リザードウルフに、はあ！力を与えよ！」

いつものようにバンドーラはドーラセプターを大地に向かって投げ、リザードウルフを巨大化させた。

ティアナ「ここは私達だけで行くわよ、スーパーインストラー！」  
そう言うのとティアナの元にスーパーインストラーが現れ、キング

キーを差し込んだ。

スーパーインストーラー「デカレンジャーロボ！」

5人はデカレンジャーロボに乗り込んだ。

ティアナ「行くわよ！シグナルキャノン！」

そう言つて、シグナルキャノンで攻撃を加えていった。

リザードウルフ「ぐああ！．．．舐めた真似を．．．これでも食らえ！フレイムレイン！」

またしても上空から炎の降らせた、しかし、今度は避けることが出来ずに食らつて倒れてしまった。

5人「うあああ！」

リザードウルフ「もう一度食らえ！」

そう言つて、攻撃を食らわせようとした時、デカバイクロボが突っ込んだ。

カイル「ソードトルネード！」

リザードウルフ「ぐああ！」

リザードウルフは吹き飛ばされた。

カイル「大丈夫か？」

スバル・ティアナ・ギンガ「カイルさん！」

エリオ・キャロ「お父さん！」

デカレンジャーロボは起き上がった。

カイル「よし、合体するぞ。」

スバル「え？」

ティアナ「が、合体つて．．．」

エリオ「お、お父さん、もしかして．．．」

キャロ「デカレンジャーロボと．．．」

ギンガ「デカバイクロボが合体できるんですか？」

カイル「ああ、宇宙警察のロボットは基本的に宇宙統一規格つて言つてな、先代のメカニックが合体機構を取り付けたんだ、それじゃ、行くぞ！」

5人「はい！」

カイク「超特捜合体！」

そう言うと、合体態勢に入り合体を完了させた。

カイク「ビルドアップ！スーパーデカレンジャーロボ！」

エリオ「す、すごい……」

ティアナ「こ、これがスーパーデカレンジャーロボ……」

カイク「さて、さつさと倒すぞ！」

キャロ「は、はい、お父さん！」

スバル「任せてください！」

そうやって、スーパーデカレンジャーロボで殴りつけ吹き飛ばした。

リザードウルフ「ぐっ……」

カイク「ガトリングパンチ！」

さらに追い討ちをかけて吹き飛ばした。

リザードウルフ「ぐおおお！」

カイク「行くぞ、5人とも！」

5人「……はい！」

そう言うとスーパーデカレンジャーロボで突っ込んで行き、技を繰り出した。

6人「……ダイナマイトアップー！！！」

リザードウルフ「ぐあああ！」

その一撃でリザードウルフは今度こそ倒された。

6人「……ゴツチューー！！！」

その後、デカベースに戻った後、フォワード陣はなのはたちから褒められた、その後エリオとキャロはカイクのところへ行き、お礼を言った後ヴィヴィオたちと一緒にレジエンド戦隊の話聞いていたという。しかし、スーパー銭湯での一件が後にカイクに大きく関わるものだとこのとき本人は知る由もなかった。

### 第31話 フォワード陣の新しい力（後書き）

どうも、今回の銭湯でもエピソードの話は後の話に持ってくる予定です、次回は他のメンバーも活躍させたいなあと思っています。それではまた次回。

### 第32話 脅威のルシフェル（前書き）

どうも、本当は昨日更新したかったのですが、体調不良で続きがかけませんでした、今回はルシフェルの特別設定とフェイトとカイクのちょっとしたイベントがあります。

### 第32話 脅威のルシフェル

先日の出勤から数日が経過したが、敵の動きがおとなしくなり、訓練だけで比較的穏やかな日々が続いていた。

デカベース 遊技場

ここはデカベースの地下に新設された施設の一つで一種のスポーツ施設であり様々なものがある。その中でカイムは今、アコースとビリヤードをしていた。

カイム「．．．そうか、まだ何にも手がかりはないか．．．」

アコース「ああ、すまないね。」

カイム「いや、構わないさ、それにまだゴーカイセルラーの修理が終わってないしな．．．」

アコースにカイムは兄であるルキウスの行方を追ってもらっていたが、手がかりが少なくさすがにまだ見つからない状態だった。

アコース「必ず見つけてみせる、待っててくれ、お義兄さん。」

カイム「．．．なんだその呼び方は．．．」

アコース「カリムのことを頼むってことだよ．．．それはいいけど、少し手加減してくれないか？」

二人はビリヤードをやっているのだが、カイムが圧倒的な実力を見せている状態だった。

カイム「さっきの発言で、手加減する気が失せたな．．．」

そう言つて、勝負をしていると、シャツハがヴィヴィオを連れてやってきた。

シャツハ「カイムさん、ここにいたんですか？ヴィヴィオが探してましたよ。」

ヴィヴィオ「パパ！」

そう言つて、ヴィヴィオはカイムに向かってきた、それを見たカイムはしゃがんでヴィヴィオを抱きとめ、抱っこした。

ヴィヴィオ「えへへへ」

ヴィヴィオは嬉しそうにカイクに甘えた。

シャツハ「うふふふ、本当に仲がよろしいのですね。」

カイク「．．．まあ、悪い気はしないな．．．」

とそこへエリオとキヤロも来た。

エリオ「お父さん、ここにいたんですか？」

キヤロ「ヴィヴィオもいたんだ？」

ヴィヴィオ「うん！」

エリオのお父さん発言にアコースは笑ってみせた。

アコース「へえ、一気に3人も子供が出来たのかい？」

シャツハ「ロツサ、からかうものじゃないですよ。」

そう言つて、シャツハにアコースは窘められた。

ヴィヴィオ「ビリヤードやってるの？だったらパパ、あれやって！」

エリオ「あれって？」

カイク「ああ、わかった。」

そう言つて、カイクはヴィヴィオを降ろして、ビリヤードの弾を並べた。

アコース「そ、それって．．．まさか、マシンガンショット？」

キヤロ「マシンガンショット？」

カイク「ああ、これは最初に打つボールよりも先に後から打つボールを先に順番どおりにポケットに入れることだ。」

そう言つて、ボールを配置し、カイクはそれをなんなくやって見せた。

シャツハ「す、すごい．．．」

アコース「こりゃ、驚いたよ、これはプロでも難しいトリックショットなんだけどな．．．」

ヴィヴィオ「やっぱパパ、すごい！」

ヴィヴィオは自分のことかのように喜んだ、それを見たカイクはヴィヴィオの頭を撫で、ヴィヴィオは嬉しそうな顔を浮かべた。

エリオ「お父さんって．．．」

キャロ「本当にいろいろいるなことが出来るんですね．．．」

カイク「なに、昔何でも屋をやっていたからな、それに歴代の先輩達の特異能力と特技も受け継いでいるからな．．．」

アコース「だけど、これだけのことをこなせるってことは、それだけ君が器用だっただよ。」

カイク「．．．褒め言葉として受け取っておく、ありがとう．．．」  
そう言っつて、その後カイクはヴィヴィオを連れて部屋に戻った。

同時刻 ノーヴァス・アイテル近くの荒野

ここには今、ルシフェルがいた。

ルシフェル「この時の宝玉があれば、あれを回収してこられる、たしか数百年前のここが戦場になったらしいからな．．．」  
そういとうとルシフェルは光に包まれその場から消えた。

次の日、デカベース

カイク「空間の歪み？」

シャーリー「ええ、昨日の午前0時ごろ、ノーヴァス・アイテルの方で僅かではあるんですけど反応があつたんです．．．GGの方で確認したらしいんですけど、反応は一瞬だったのでよくわからないそうです。」

ジーク「GGも確認したとなると、こりゃ調べてみる必要があるな．．．」

はやて「せやな、それじゃメンバーをして選抜して、行ってもらおうかな。」

そう言っつて、カイク、メルト、エリス、ライトニングの4名が現場に行くことになった。

ノーヴァス・アイテル近くの荒野

ヴァイスのヘリで現地に到着した後、その周辺を調べたが、手がかりがまったくと言っつてもいいほど見つからない状態だった。

フエイト「何も無いですね．．．」

メルト「ホントにここなのかしら？」

シグナム「しかし、反応があった以上、ここに何かがあると見てい  
いだろう．．．」

エリオ「とりあえず、もう少し調べてみましょう。」

キャロ「そうだね、エリオ君。」

エリス「ここであれこれ考えても仕方が無いわね。」

カイル「そうだな．．．」

そう言つて、みんなで周囲をさらに探索したとその時、センサーに  
空間の歪みが計測された。

フエイト「こ、これは？」

とそこへ空間が開かれて、そこからルシフェルが現れた。

ルシフェル「ふう．．．これで目的のものが手に入った．．．」

カイル「ルシフェル！」

メルト「あなただったのね!？」

ルシフェル「おや？これはゴーカイジャーと魔導師共か、こんなと  
ころで会えるとは．．．」

とその時、エリスの持っていたアクセルラーがとんでもない数値を  
叩き出した。

エリス「ど、どうということ？ハザードレベルが．．．800以上！  
？」

フエイト「800以上!？そんな、レリックやジュエルシードより  
も高い数値!？」

シグナム「貴様!いつたい何を持っている!？」

ルシフェル「どうやら、これの存在に気付いたようだな．．．いい  
だろう特別に教えてやろう。」

そう言つと懐から一つのカプセルを取り出した。

エリオ「あれは!？」

キャロ「いつたい．．．」

メルト「ルシフェル、それはいつたい何なの？」

ルシフェル「ふふふふ．．．これはデウス遺伝子だ。」

カイク・メルト・エリス「「「！」「」」」

その名前に3人は驚いた顔を浮かべた。

カイク「デウス遺伝子だと．．．」

ルシフェル「ほう．．．やはり、奴らの知識も受け継いでるだけあつて知っていたか．．．」

フェイト「カイクさん．．．デウス遺伝子っていったい．．．」

カイク「．．．デウス遺伝子、それは．．．」

そう言つてカイクたちは、デウス遺伝子と改造実験帝国メスの詳細なことをライトニングのメンバーに説明した。それを聞いたメンバーは様々な表情を浮かべた。

シグナム「そ、そんなことが．．．」

キャロ「ひ、酷すぎる．．．」

フェイト「昔にもそんなことがあつたんですね．．．」

エリオ「自分のためだけに多くの命を弄ぶなんて．．．」

驚く面々にさらに驚きの事実を告げた。

ルシフェル「ちなみにさらに教えておいてやる、大帝ラー・デウスを生み出したのはこの私だ。」

全員「「「！」「」」」

全員は驚きを隠せなかった。

メルト「あ、あなたが．．．」

エリス「改造実験帝国の支配者であつた、大帝ラー・デウスを．．．」

カイク「どういうことだ!？」

ルシフェル「いいだろう．．．教えてやる、元々私はこのデウス遺伝子を作り出し、そして、デウス遺伝子をこの世界の宇宙へ放つた、理由は様々な環境でも生きながらえることが出来るくらいに進化できれば、更なる強大な生物を誕生させることが出来ると思つたからだ．．．」

フェイト「た、ただそれだけの理由のために．．．」

ルシフェル「ただそれだけ？ 貴様ら人間と違い、我々妖魔は不老不死だからな、生きていく上では何らかの退屈しのぎがほしかったところだ、元より私は好奇心の塊でな．．．それにフェイト・Ｔ・ハラオウン、エリオ・モンディアル、貴様らは私が残した研究の一端から生まれたんだから．．．」

フェイト・エリオ「?!?」

その言葉に二人は驚きを隠せなかった。

ルシフェル「元々スカリエッティの元となった人物にこの技術を教えたのは私だということだ。そして、今は亡き管理局のあの脳髓どもに計画を進めさせるための技術提供をしたのも私だ。」

フェイト「あ、あなたが．．．」

それを聞いた、フェイトは今までに無いくらい感情を高まらせているのがわかった。

ルシフェル「どうした？ 元を辿れば私はお前の創造主ということになる、創造主に会えたのだ少しは喜んだらどうだ？」

フェイト「黙りなさい！ バルディッシュ！」

そう言うとフェイトは猛スピードでルシフェルに向かっていった。

ルシフェル「ふ．．．フィクスクラウド．．．」

そう言うとフェイトの身体にかなりの衝撃が走り、動けなくなってしまう。

フェイト「う、動かない．．．?」

シグナム「い、今の魔法か？」

ルシフェル「違うな、似ているがこれは紋章術というものだ．．．」

キャロ「紋章術？」

ルシフェル「俺達妖魔は、訓練などではほとんど戦闘能力の強化ができないが、その代わりに相手の力を吸収することでその持ち主の持っている力を自分のもの出来る、この力は別の世界で吸収したものだ．．．」

エリス「．．．なんて奴らなの．．．」

エリオ「フェイトさん！ 逃げてください！」

ルシフェル「．．．そうだ、これから面白い趣向を凝らそうか．．．」  
フェイト「な、何をするの？」

そう言うところルシフェルはフェイトに顔に近づき、何かした。するとフェイトの表情が変わった。

シグナム「テスタロッサ？」

フェイト「．．．」

フェイトの目つきが変わっていた。

エリオ「ふ、フェイトさん？」

カイル「ルシフェル！貴様いったい何をした！？」

ルシフェル「たいしたことじゃない、ちょっとした暗示をかけただけだ。」

メルト「暗示ですって！？」

ルシフェル「この暗示は、目の前の人間を無差別に襲わせるようにしただけだ．．．もっとも精神状態がパニックになれば元に戻るがな．．．」

カイル「．．．みんな、フェイトは俺が何とかする．．．みんなはあいつからデウス遺伝子を．．．」

シグナム「．．．わかった、頼む。」

そう言うって、カイルはフェイトに向かっていき、他のメンバーはルシフェルに向かっていった。

ルシフェル「お前らに付き合うつもりはない．．．と言いたいところだが少し貴様らの力を拝見させてもらうか．．．出でよ、妖魔獣士D・アイ。」

D・アイ「は！」

そう言うところルシフェルの前から魔法陣が現れ、一つ目の怪人が現れた。

シグナム「妖魔獣士？」

ルシフェル「そうだ、俺が遺伝子シンセサイザーで作り出した、妖魔獣士第1号だ。」

メルト「あなたも遺伝子シンセサイザーを使えたというの!？」  
ルシフェル「勘違いするな、元々これは俺が作り出したものだ。」  
エリス「何ですって!？」

D・アイ「おしゃべりは終わりだ!行け!スカルソルジャー、スカ  
ルナイト!」

そう言つて、スカルソルジャーとそれとは違う別の敵が複数現れた。  
スカルソルジャー「ガガガガ!」  
スカルナイト「カラカラカラ!」  
エリオ「今まで違う敵まで現れました。」

シグナム「なるほど、スカルソルジャーよりも上級戦士というわけ  
か...」

ルシフェル「さすがだな...その通りだ...さて、高みの見物  
をさせてもらおうか。」

そう言つとルシフェルは姿を消した。

カイクサイド

カイクはフェイトと戦っていたが、カイクはフェイトに攻撃するわ  
けにもいかず、防戦一方だった。

カイク「...くそ、なんとかして、正気に戻さなければ...  
待てよ、精神状態がパニックになればいいんだな、それなら...」

「  
そう考えた結果、カイクは変身を解除した。

ベガ「マスター、なぜ変身を解除されるのですか?生身では勝てま  
せんよ?」

カイク「俺に考えがある。」  
ベガ「...わかりました。」

そう言つて、キングソードベガを構えて、フェイトに向かっていた。  
フェイト「...バルディッシュ。」

しかし、フェイトはカイクに容赦なく攻撃を仕掛けてきた。  
カイク「くっ...」

カイムの腹部に攻撃がかすった、それでカイムの動きが少し鈍った。カイム「しまった!？」

カイムに攻撃が振り下ろされそうになった、その時、何かがフェイト目掛けて飛んできた、それはグランディオンヘッドだった。

ゴセイナイト「大丈夫か?カイム。」

カイム「ゴセイナイト!?どうしてここに?」

とそこへ、ヴィヴィオとザフィーラが来た。

ヴィヴィオ「パパ!」

ザフィーラ「カイム!」

カイム「ヴィヴィオにザフィーラまで...」

ザフィーラ「実はこちらで次元の歪みを感じして、なのはたちと共に来たんだ。」

ゴセイナイト「他のメンバーは、向こうのメンバーと合流したぞ。」

カイム「そうか...」

そう言うとカイムはゴセイナイトのレンジャーキーを取り出した。

カイム「...ゴセイナイト、ザフィーラ協力してくれ、フェイトを元に戻すために...」

ゴセイナイト「...わかった、その目は、何か考えがあるようだな...」

ザフィーラ「任せろ、盾の名を持つ以上、お前に指一本触れさせん。」

ヴィヴィオ「パパ、頑張つて。」

カイム「ああ、ヴィヴィオは後ろに隠れてる。」

ヴィヴィオ「うん!」

そう言つて、ヴィヴィオはマジランプを持って後ろに下がった、その後カイムはゴセイナイトにレンジャーキーを渡し、ゴセイナイトは元に戻った。

ゴセイナイト「行くぞ、ザフィーラ!」

ザフィーラ「心得た、ゴセイナイト!」

そう言つて、二人はフェイトに向かっていき、フェイトの身体を拘

束し、動きを封じた。

フェイト「．．．くっ．．．離せ．．．」

ザフィーラ「カイル、今だ！」

カイル「ああ、すまない！」

そう言つて、カイルはフェイトの顔に近づき、なんとフェイトにキスをした。

カイル「んんん．．．」

フェイト「!?!?．．．んんん．．．」

その直後、フェイトの表情が変わった。

フェイト「んんん．．．え!?か、カイルさん／／／」

カイル「どうやら、元に戻ったようだな．．．」

ザフィーラ「大胆だな、お前は。」

ゴセイナイト「まさか、このような手を使うとはな．．．」

ヴィヴィオ「パパ、凄い！」

スモーキー「だ、旦那、す、凄いことしたな．．．」

外野から色々いわれたが、カイルはすぐに真剣な顔になった。

カイル「．．．とりあえず、話は後でゆっくりな．．．」

フェイト「は、はい．．．その．．．ありがとうございます．．．」

／／／／

そう言つて、フェイトは顔を赤くしつつも嬉しそうな顔を浮かべていた。

カイル「ザフィーラ、ヴィヴィオを頼む。」

ザフィーラ「心得た。」

カイル「行くぞ、フェイト、ゴセイナイト。」

フェイト「はい！」

ゴセイナイト「うむ。」

そう言つて、他のメンバーの元へ戻った。

その他メンバーサイド

ここのメンバーは、ジーク、フィオネ、ティア、なのは、ティアナ、

スバル、ギンガ、さらにGGGからソルダート」が駆けつけ、雑魚を相手にしていた。

なのは「よし、これではあの妖魔獣士だけだよ。」

D・アイ「そう簡単に行くかな？私は妖魔獣とは違うぞ、食らえ！シャドウフレア！」

そう言う上空から黒い結晶体のようなものを降らせ、全員を襲った、なのはたちはプロテクションをかけたが防ぎきれずなんとか回避した。

ソルダート」「なんとこの威力だ・・・」

D・アイ「さて、次はどの紋章術を使つてやろうか・・・」

ジーク「上等だ、てめえが紋章術ならこっちはプリズムパワーだぜ、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「フラッシュユマン！」

ジークたちはフラッシュユマンにチェンジした。

ジーク「行くぜ！プリズム聖剣、ファイヤーサンダー！」

エリス「プリズムカイザー、ローリングナックル！」

フィオネ「プリズムボール、ハリケーンボルト！」

メルト「プリズムバトン、スーパーブリザード！」

ティア「プリズムブーツ、ボンバーキック！」

D・アイ「ぐあああ！」

D・アイは吹き飛ばされた。

D・アイ「お、おのれ・・・こうなったら・・・」

そう言つて、詠唱を唱えようとしていた。

なのは「させないよ！みんな！」

フォワード陣「はい！」

そう言つて、全員でバインドをかけ、動きを封じた。

D・アイ「う、動けない・・・」

シグナム「今だ、紫電一閃！」

ソルダート」「はあ！」

D・アイ「ぐおおお！」

そう言つて、二人で斬りつけダメージを与えた。

ジーク「よし！とどめだ、ローリングバルカンだ！」

4人「OK!!」

ジークが合図すると5人とも専用武器をセッティングしローリングバルカンを完成させた。

ゴーク「ローリングバルカン!!」

ジーク「メルト、サーチだ！」

メルト「OK!...サーチOK!」

ジーク「よし！ローリングバルカン！」

D・アイ「ぐあああ!!」

D・アイはローリングバルカンから発射された虹色の光線を浴びて爆発した。

ギンガ「やりましたね！」

ジーク「...いや、まだだ。」

ジークがそう言つるとルシフェルが現れた。

ルシフェル「中々やるな、だがこれで終わりではない、こいつを使つてみるか...クラージェン！」

クラージェン「キイキイ！」

そう言つと、巨大なクラゲが現れた。

ジーク「あ、あれは!？」

クラージェンから光線が放たれ、倒されたはずのD・アイが復活し、クラージェンは小さくなった。

ルシフェル「あつちの方も、どうやら片がついたようだな...人間とは面白い生き物だ、まさかあのような方法で元に戻すとは...面白い発見だったからよしとするか...さらばだ。」

そう言つとルシフェルは消えた。

ジーク「上等だ、行くぜ！」

そう言つて、ジーク達はゴークカイガレオンに乗り込み、ソルダートJはJアークを呼んだ。

ジーク「海賊合体！完成、ゴークカイオー！」

ソルダート」「メガフュージョン！キングジェイダー！」  
さらにそこへ、フラッシュキングに乗った、カイクとフェイト、さらにゴセイグランドが来た。

ジーク「カイク！」

ソルダート」「どうやら、そっちは解決したようだな。」

メルト「でもどうやって、洗脳を解いたの？」

フェイト「そ、それは．．．／／／」

エリス「なんで赤くなってるの？」

フィオネ「今はそれよりも目の前の敵を．．．」

ティア「そうですよ。」

ジーク「ああ、カイク、Ｊ、ゴセイナイト行くぜ！」

ゴセイナイト「心得た！」

ソルダート」「うむ！」

カイク「ああ」

D・アイ「しゃらくさい、出でよスカルソルジャー、スカルナイト共。」

そう言つて、巨大なスカルソルジャー、スカルナイトを呼び出した。

ジーク「またゾロゾロと出て来やがったか．．．」

カイク「ここは、俺とゴセイナイトでやる、お前達とＪはあの妖魔獣士を．．．」

ジーク「ああ、わかった、行くぜＪ！」

ソルダート」「ああ、行こう！」

そう言つて、二手に分かれて戦闘を開始した。

カイクサイド

カイク「キングミサイル！」

ゴセイナイト「シールオンキック！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

そう言つて、雑魚の大群を片付けていった。

カイク「よし、フェイト、コズモソードだ。」  
フェイト「わかりました。」

そう言うと異空間からスターコンドルが現れ、そこからコズモソードが射出され、それをジャンプしてキャッチした。

カイク「行くぞ、フェイト！」

フェイト「はい、カイクさん！」

カイク・フェイト「スーパークズモフラッシュュー！！」

ゴセイナイト「グランドラスティック！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

2体はすべてのスカルナイトをすべて倒した。

ジークサイド

ジーク「行くぜ！レンジャーキーセット！」

ゴークイジャー「完成、デカゴークイオー！！」

ゴークイオー「パストライカー！」

パストライカーを体当たりさせた。

D・アイ「ぐおおお、おのれ．．くらえ、ブラックセイバー！」

そう言つて、D・アイは黒い真空波を飛ばしてきた。

ソルダート「甘い、ES爆雷！」

そう言つて、空間の中にゴークイオーごと転移し攻撃を回避した。

D・アイ「何！？」

背後に現れ、パストライカーもゴークイオーに戻り、互いに攻撃態勢に入った。

ジーク「一気に行くぜ！」

ゴークイジャー「ゴークイフルブラスト！！」

ソルダート「反中間子砲！」

D・アイ「ぐあああ！」

D・アイは2体のロボットの攻撃であえなく粉碎された。

それを遠くで見ていたルシフェルは。

ルシフェル「うむ、どうやらレジエント戦隊のロボットどもめ、性

能が昔に比べると上がっているな．．．どうやら本格的に妖魔獣士の製造を行った方がいいな．．．」  
そう言つて、今度こそ本当に消えた。

その後、デカベースに戻つた後、みんなからフェイトをどうやって戻したのかを問い詰められていた。

メルト「どうやったの？」

カイル「そ、それはだな．．．」

なのは「どうしたの？フェイトちゃん。」

フェイト「え！？な、なんでもないよ。」

そう言つて、言いくそうにしていた時、ヴィヴィオが口を開いた。  
ヴィヴィオ「うんとねパパがね、フェイトママにチューしたんだよ。」

カイル・フェイト「ヴィ、ヴィヴィオ!？」  
全員「ええ!？」

その言葉に全員、驚いた声を上げた（特にティア、エリス、なのは、カリムの声が大きかった。）

その後、冷やかしとティアたちからの嫉妬を受けたフェイトとカイルは部屋に戻つた、今日はヴィヴィオはティアの部屋で寝ることになつた、その後、カイルの部屋にエリスとフェイトが来た、しかし、来ただけなら問題はなかつたが、二人ともなぜか、ナース服を着ていた。

カイル「．．．何やつてるんだ？」

フェイト「あ、あの、カイルさんには積極的に迫るようにと．．．  
／／／」

エリス「それに少し癒してあげようと思つてね．．．」

カイルはすぐにこんなことを吹き込んだ人物の顔を浮かべた。

カイル「（メルトの奴だな．．．まあいいか。）」

その後、カイルは開き直り、二人を手招きした。

カイル「．．．それじゃ、たっぷり可愛がつてやるよ．．．」

エリス「そう来なくつちや。」

フェイト「お、お願いします．．．／／／」

そう言つて、二人はカイクに徹底的に可愛がられた、次の日カイクは平然としていたが、二人は動けない状態だつたという。

エリス「か、カイクつて．．．本気出すと凄いわね．．．／／／」

フェイト「ほ、本当ですね．．．はふう．．．う、動けません．．．／／／」

二人はほぼ一日、身体を火照らせながらベットの上で過ごしたという。

カイク「うゝん、ちょっとやり過ぎたかな？手加減したつもりだつたんだが．．．」

カイクはさらりととんでもないことを呟いた。

### 第32話 脅威のルシフェル（後書き）

どうも、フラツシユマンの設定にオリジナル要素を持たせました。さらに最後はちょっと年齢制限的な話になりました、今回からたまたにスーパー戦隊の予習的な項目を出したいと思います。今回は改造実験帝国メスについてです。

#### 改造実験帝国メス

超新星フラツシマンが倒した組織で、宇宙を渡り歩き、様々な星の生命体を捕らえては生命改造実験を繰り返してきた、その本当の目的は支配者である大帝ラー・デウスを完全な生命体にして全宇宙に君臨することで、そのことはラー・デウスしか知らない事実であった。

#### 大帝ラー・デウス

改造実験帝国メスの支配者であり、顔は白い仮面、体は巨大な鎧に覆われている、その正体はデウス遺伝子液そのものだった、終盤で大博士リー・ケフレンの手によって遺伝子シンセサイザーで、獣戦士ザ・デウスーラに改造されたが、何度か元に戻ったりしたが、最終的に巨大化したときフラツシユキングに倒された、その後デウス遺伝子だけになったところを大博士リー・ケフレンに改造され、ザ・デーモスになった。

#### 大博士リー・ケフレン

宇宙最高の頭脳を誇る大博士で、遺伝子シンセサイザーを操って生命の改造を行い、今までにも多くの改造生命体や獣戦士を作り出し、自らを命の芸術家と称していた、マッドサイエンティストで、基本的に自分の生み出したものに対しては作品としてしか見ていないが、その中でラー・ネフェルにだけは娘のように可愛がっており、ラー・

ネフェル自身もリー・ケフレンを父親として慕っており、終盤でリー・ケフレン側についた。しかし、リー・ケフレンの正体は実は数百年前に地球から誘拐された、れっきとした地球人であり、ラー・デウスはある一定の段階まで研究が進んだら、次の人物を博士に仕立て上げ、それ使って自身の目的を果たそうとしていた、最終的にサー・カウラーを利用し、メスを手中に収めたが、最終的にフラッシュマンに倒された。(数百年も生きていられたのは遺伝子シンセサイザーによって身体を改造していたからである。)

サー・カウラー

宇宙をさすらい、メスに実験材料としての宇宙生物を供給してきた傭兵部隊である、通称エイリアンハンターのリーダーであり、フラッシュマンの5人を誘拐するように部下に指示した張本人であり、この男が5人の本当の両親を知っていた(ただし、結局イエローフラッシュしか両親がわからなかった。)性格は残忍だが、親分肌であり自分に忠誠を誓う部下に対する責任感は強い、実力は相当なもので最初はフラッシュマンの5人が束になってかかっても敵わなかった、元々野心家リー・ケフレンを始末し、メスに乗っ取るうとしたが、部下が獣戦士に改造されたのがきっかけでメスと手を切った(ちなみにリー・ケフレンの秘密を知っていたのはデウス以外ではカウラーのみ)その後、大帝ラー・デウスを1度は倒すものの、レッドフラッシュとの一騎打ちに敗れ、リー・ケフレンに最後の特攻をかけて散った。(その際にイエローフラッシュに両親のことを教えた。)

以上が改造実験帝国メスのとりあえずの重要人物でした、今後もこのような詳細を載せていくことがあるので、よろしく願います、それではまた次回お願いします。

### 第33話 兄弟の道が交わる時（前書き）

どうも、今回はとうとうゴークイシルバーを登場させます。ちなみにジユウレンジャーの大いなる力は解放済みになっているので、よろしく願います。

### 第33話 兄弟の道が交わる時

妖魔の君の居城

ルシフェルは研究室に入って、作業に取り掛かっていた。

ルシフェル「さて．．．久しぶりだな、遺伝子シンセサイザーを使うのは．．．」

そう言うとルシフェルは遺伝子シンセサイザーを奏ではじめた。

ルシフェル「．．．．．バイオブレンド．．．」

ルシフェルは妖魔の遺伝子と別の生物の遺伝子にさらに調整したデウス遺伝子を組み合わせた。

ルシフェル「誕生だ．．．妖魔獣士D・サラマンダー．．．」

ルシフェルが宣言すると、奥から誕生させた妖魔獣士が出てきた。

ルシフェル「後は、こいつに魂を宿すだけだ．．．」

そう言って、ルシフェルは反魂の術を使い、妖魔獣士に命を吹き込んだ。

ルシフェル「さて．．．後は、こっちの強化もするか．．．」

クラージェン「キイイキイイ？」

そう言うとルシフェルはクラージェンを見ながら呟いた。

デカベース

牧野「カイクくん、ジークくんお待たせしました、ついに直りましたよ。」

そう言うとゴーカイセルラーをカイクに渡した。

カイク「これがゴーカイセルラーか．．．」

ジーク「さてと、後はこれを渡す相手だが．．．」

はやて「アテはあるんですか？」

カイク「ああ、一人居る．．．」

とそこへ、通信が入った。

アコース「（カイク、待たせたね見つけたよ、お探しの人をね、今

一緒にいるよ、こつちに来てくれないか？」  
カイル「ああ、いいタイミングだ、こつちも渡すものが直ったからな．．．」

そう言つて、アコースは通信を切った。

カリム「カイルさん、いつたいどなたをお探しだったのですか？」

カイル「．．．俺の兄貴だ．．．」

クロノ「君のお兄さん．．．まさか、そのゴーカイセラーを渡す人というのは．．．」

そうクロノが感づくときカイルは静かに首を縦に振った。

カイル「それじゃ、ちよつと出かけてくる。」

そう言つて、出かけていこうとした。

なのは「ま、待つてください。」

フェイト「わ、私達も一緒に行きます。」

なのはとフェイトは慌ててカイルの後を追った。

海鳴市 海岸

ルキウス「．．．いつたい、いつまでここにいればいい？」

アコース「君に逢いたがつている客人が来るまでさ。」

そう言つて、ルキウスとアコースが待つているときカイルがなのはとフェイトと一緒に来た。

ルキウス「．．．カイルか。」

カイル「．．．久しぶりだな、ルキウス．．．」

なのは「こ、この人が、カイルさんの．．．」

フェイト「お兄さん．．．」

そう言つて、なのはとフェイトはルキウスの顔を見た。

ルキウス「．．．見たことがあるな、たしか、機動六課の．．．」

カイル「ああ、高町なのは一等空尉とフェイト・Ｔ・ハラオウンだ．

．．．ちなみに俺の女だ。」

カイルがそう紹介するとなのはとフェイトは顔を赤くし、嬉しそうに顔を紅らした。

ルキウス「．．．お前もつくづくいい女とは縁があるようだな．．．」  
カイル「．．．世間話をしに来たわけじゃない．．．お前にまず聞きたいことがある、あの時、お前は確かに死んだはずだ、どうして生きている？」  
ルキウスはそれを聞くと静かに口を開いた。  
ルキウス「．．．わかった、話そう．．．あれは、お前達がこの世界に戻ってきた時だ．．．」

#### 回想

???「目覚めて、ルキウスお兄ちゃん．．．」  
ルキウス「うっ．．．こ、ここは．．．?」  
???「ここは、英雄の聖地の世界だよ。」  
そう言うのとルキウスの前には、真っ白い装束を着た少女が立っていた。

ルキウス「お前は何者だ？」

???「私の名は命の精霊クロト。」

ルキウス「命の精霊クロトだと．．．俺は死んだはずじゃ．．．」

クロト「確かにお兄ちゃんは1度死んだわ、でもね、伝説の戦士達と私の力で蘇ったのよ。」

ルキウス「伝説の戦士達？」

クロト「説明するわね。」

そう言うて、クロトはルキウスに今までのことを話した。

ルキウス「．．．つまり、俺はその敵と戦うために再び蘇ったと．．．」

クロト「そうなの、さらにお兄ちゃんには、この人たちに会ってもらうわ。」

そう言うのとクロトの後ろから6人の男女が現れた、それは恐竜戦隊ジューレンジャーだった。

ルキウス「あ、あなた達は？」

ゲキ「俺達は恐竜戦隊ジュウレンジャーだ。」

ルキウス「あなた達が、クロトが言っていた伝説の戦士達の一つか．．．」

ゴウシ「そうだ、妖魔は俺達が封印した魔女バンドーラー一味を復活させた。」

ダン「だから、俺達の代わりに戦ってほしいんだ。」

ボーイ「ちなみに君の弟のカイム・アストレアは俺達の後輩の一人として戦っている。」

ルキウス「!? カイムが．．．」

メイ「そうよ、あなたの弟は海賊戦隊ゴーカイジャーのリーダー格の一人である、私達スーパー戦隊すべての力が自由に使えるゴーカイキングなのよ。」

ルキウス「．．．そうか、あいつが．．．」

ブライ「だが奴らは強い、だから君にも行ってもらい、これを．．．」

「  
そう言うとブライはキングキーと獣奏剣を渡した。

ルキウス「これは、確かあんた達の力か．．．」

ゲキ「俺達の大いなる力も解放しておく、必ず兄弟の絆で妖魔を倒してくれ。」

「  
そう言うと、ルキウスは光包まれ、海鳴市の海岸に倒れていた。

ルキウス「そうか．．．ここがクロトが説明した外の世界か．．．  
たしか、俺のいた場所とはまるで違う．．．」

ルキウスは立ち上がり、獣奏剣とキングキーを眺めながら呟いた。

ルキウス「．．．カイム、俺はお前に大きな罪を犯した、そんな俺にはお前と共に戦う資格などないんだ．．．」

「  
そう言つて、ルキウスはその場から去っていた。

現在

ルキウス「これが、俺が生きていた理由だ．．．」

「  
カイム「なるほど、だからジュウレンジャーの力だけでもう解放され

ていたのはそれが理由だったのか……」

なのは「カイクさん……」

その後、しばしの沈黙が流れた後、ルキウスは口を開いた。

ルキウス「……話は終わりだ、もう俺はお前の前に現れることも無いだろう……」

それを聞いたカイクはルキウスをの胸倉を掴んだ。

カイク「ふさげるな！」

そう言つて、カイクはルキウスを殴り飛ばした。

フェイト「か、カイクさん!？」

アコース「……カイク……」

それを黙つて他のメンバーは見届けていた。

デカベース

シャーリー「大変です、妖魔の反応です！」

はやて「どうします? ジークさん、今なのはちゃんたちは……」

ジーク「……かまわねえ、今回は俺達だけで行く、六課のメンバーは休んでな。」

シグナム「大丈夫か？」

ジーク「かまいやしねえ、必ずカイクが新しい仲間を連れてきてくれる。」

ヴィータ「……そうか、それじゃ頼むぜ。」

ジーク「ああ、それじゃ行くぜ！」

4人「……おー!」「」

そう言つて、ゴーカイジャーのメンバーだけで出撃して行った。

そして、現場に到着した。そこには妖魔獣士D・サラマンダー、スカルソルジャーとスカルナイトの大群が待ち構えていた。

D・サラマンダー「……来たか……」

ジーク「どうやら、俺達を待つていたようだな……」

D・サラマンダー「ルシフェル様もどうやら、お前達がそろそろ目障りになってきたようだから……ここで消えてもらおうか……」

「ファイオネ「そうは行きません！」  
メルト「みんな、行くわよ！」

そう言つて、みんなモバイレーツとレンジャーキーを取り出した。

5人「「「豪快チエンジ！」」「」

モバイレーツ「ゴークイジャー！」

ジーク「ゴークイレッド！」

フィオネ「ゴークイブルー！」

メルト「ゴークイイエロー！」

エリス「ゴークイグリーン！」

ティア「ゴークイピンク！」

ジーク「海賊戦隊！」

ゴークイジャー「「「ゴークイジャー！」」「」

D・サラマンダー「やれ、ソルジャー、ナイト共よ。」

そう言つて、下っ端をけしかけてきた。

スカルソルジャー「「「ガガガガ！」」「」

スカルナイト「「「カラカラカラ！」」「」

ジーク「さて．．．派手に行くぜ！」

そう言つて、全員で敵に向かっていった。

一方カイクムたちの方では

カイクム「．．．ルキウス、お前にはやることがある．．．これを使つて戦え、お前は自分の罪を償わずに生きようつてのか？」

そう言つて、ルキウスにゴークイセルラーとレンジャーキーを渡した。

ルキウス「．．．カイクム．．．」

カイクム「お前はもう、ルキウスじゃない．．．お前はアイクムに戻ればいいんだよ．．．」

そう言つとカイクムはジュウレンジャーのティラノレンジャーとドラゴンレンジャーのレンジャーキーを握らせた、その瞬間ゲキとブラ

イの記憶がルキウスの中を駆け巡った。

ルキウス「．．．これが、ジュウレンジャーの兄弟の絆か．．．」  
カイル「．．．自分の過去を変えることは出来はしない．．．しかし、それを償うことが出来る、そして、今こそ俺達の道が交わる時なんだよ。」

ルキウス「．．．カイル．．．負けたよ、わかった俺も戦おう、それが俺の償いになるのなら．．．」

カイル「ルキウス．．．いや、カイル．．．」

カイル「ああ、我が弟、本当に強くなつたな．．．」

フェイト「カイルさん．．．本当によかった．．．」

とそこへ、ジークからモバイルーツに連絡が入ってきた。

カイル「ジークか!?!」

ジーク「カイルか、雑魚は片付けたんだが、今回の妖魔獣士が思ったより強力でな、出来るだけ早く来てくれないか?」

カイル「ああ、わかった、今行くぜ。」

そう言つて、モバイルーツをしまつてカイルに向き合った。

カイル「行くぞ、カイル!」

カイル「ああ、わかった。」

そう言つてカイルはゴーカイスララーとレンジャーキーを握り締めた。

なのは「カイルさん、私達も行きます。」

カイル「ああ、行くぞ。」

そう言つて、4人で向かつていった、ちなみにアコースはターボビルダーに戻った。

ジークサイド

D・サラマンダー「中々やるな、だがこれはどうだ!」

そう言つと地割れを起こしそこから炎が噴出してきた。

ジーク「こ、こいつ無茶苦茶な奴だな!」

そう言つて、ジークたちは一箇所集められた。

D・サラマンダー「まだだ、また食らえ！」

D・サラマンダーが再度同じ攻撃をしようとしたとき、遠くから攻撃が飛んできた。

D・サラマンダー「ぐあああ！．．．だ、誰だ！？」

そこにはカイク、アイム、なのは、フェイトの4人がいた。

ジーク「カイク！」

ティア「そ、それにルキウスさんも．．．」

アイム「ティア、訂正しておく俺はもうルキウスではない．．．俺はアイム・アストレアだ！」

フィオネ「．．．新たな生き方を決められたのですね。」

メルト「とりあえず、新しい仲間が増えたって事よね。」

エリス「ともかく、さっさと倒しましょう。」

カイク「ああ、行くぜ！」

アイム「わかった、カイク！」

カイクはモバイレーツとレンジャーキーを取り出し、アイムはゴークイセルラーとゴークイシルバーのレンジャーキーを取り出した。

カイク・アイム「豪快チェンジ！！！」

モバイレーツ「ゴークイジャー！」

ゴークイセルラー「ゴークイジャー！」

なのは・フェイト「レンジャージャケット、セットアップ！！」  
そう言つて4人は変身を完了させた。

カイク「ゴークイキング！」

アイム「ゴークイシルバー！」

D・サラマンダーはゴークイシルバーの姿に驚いた。

D・サラマンダー「ば、馬鹿な、7人目のゴークイジャーだ．．．」

カイク「驚くのはやられてからにするんだな、行くぞ、キングソードベガ！」

アイム「ああ、ゴークイスピア！」

そう言つて、二人は連携でD・サラマンダーを吹き飛ばした。

D・サラマンダー「ぐおおお！．．．おのれ、ならばもう一度．．．」

なのは「させないよ！ツイストルネードカード！」

フェイト「ロツクラツシユカード！」

なのは・フェイト「天装！」

レイ・バル「イエス！」

そう言うと二人はそれぞれのデバイスにカードを重ねて、敵に竜巻と巨大な岩をぶつけた。

その一撃を受けてD・サラマンダーは吹き飛ばされた。

さらにそれに追い討ちをかけるようにカイクとアイクが連携攻撃を加えていた。

カイク「はあ！」

アイク「ふん！」

D・サラマンダー「ぐあああ！」

その一撃で思いつ切り吹き飛ばされ、ふらつきながら立ち上がろうとしていた。

ジーク「よし、とどめと行くぜ！」

カイク「ああ、なら俺はキングテクター！ガオハスラーロッド！」

カイクはキングテクターを装着し、その後、ガオハスラーロッドを出した。

ゴーカイジャー「レンジャーキーセット！！！」

アイク「レンジャーセット！」

ゴーカイサーベル・ゴーカイガン・ゴーカイスピア「ファイナルウェーブ！！！」

なのは・フェイト「ナイトダイナミックカード！」

レイ・バル「イエス！」

カイク「破邪聖獣球、マシンガンショット．．．」

D・サラマンダー「う．．．あ、あ．．．」

ゴーカイジャー「ゴーカイスクリンブル！！！」

アイク「ゴーカイシューティングスター！」

なのは・フェイト「ブラストパニッシュ！」

D・サラマンダーは全員の攻撃を一斉に受け、さらにカイムは一つの玉を宙に投げた後、それ以外の8つの玉をD・サラマンダー目掛けてぶつけ、その後、落ちてきた玉に標準を合わせた。

カイム「邪鬼玉砕……！」

そう言うと、タイミングよく落ちてきた玉を撃ち、D・サラマンダーにぶつけたその一撃で粉碎された。

D・サラマンダー「ぐああああ!!！」

D・サラマンダーは爆発した。

妖魔の君の居城

ルシフェル「やられたか……しかし、まさかゴーカイシルバーまで出てくるとはな……今回はここまでだな……とりあえず、D・クラーゲンの調子を確認してみるか……」

そう言うとD・クラーゲンを出撃させた。

カイムサイド

D・クラーゲンが現れた。

D・クラーゲン「キイキイキイ！」

カイム「あれは!?!」

ジーク「クラーゲン!?!」

なのは「で、でもちよつと姿が違いますよ?」

そんなことを言っている間にD・サラマンダーが巨大化した、その直後D・クラーゲンは姿を消した。

フェイト「……もしかして、あのルシフェルが強化したんじゃないんですか?」

メルト「たしかに……ありえるわね」

フィオネ「とりあえず、倒しましょう。」

ジーク「ああ、そうだなカイムここは俺達だけで行くぜ!」

カイム「ああ、頼む。」

そう言うと、ゴーカイガレオンを呼び出すとすぐに合体した。

ゴーカイジャー「完成！ゴーカイオー！」

ティア「それでは、一気に行きましょうか。」

ジーク「おう！レンジャーキーセット！」

ゴーカイオー「牙吠！ガオリオン！」

ゴーカイジャー「完成！ガオゴーカイオー！」

ジーク「行くぜ！ゴーカイアニマルハート！」

D・サラマンダー「ぐああ！おのれ．．．これでも食らえ！」

そう言つて、炎の塊をぶつけてきた。

ゴーカイジャー「うあああ！！！」

攻撃を食らい、ガオゴーカイオーは後ろ吹き飛ばされた。

ジーク「やってくれたな．．．なら今度はこっちがこれだ、レンジ

ヤーキーセット！」

ゴーカイジャー「完成！シンケンゴーカイオー！」

ジーク「オラ！ゴーカイナギナタ！」

D・サラマンダー「ぐおおお！」

シンケンゴーカイオーはD・サラマンダーを吹き飛ばした。

ジーク「とどめだ！烈火大斬刀！」

ゴーカイジャー「ゴーカイ侍斬り！！！」

D・サラマンダー「ぐああああ！！！」

D・サラマンダーは一刀両断され倒された。

アィムはジークたちの前で改めて今までのことを話した。

ティア「アィムさん．．．」

メルト「まあ、いいんじゃないの。」

フィオネ「カィムさんとジークさんが認めたのであれば．．．」

エリス「私達がとやかく言う資格は無いわね。」

ジーク「というわけだ、これからも頼むぜ。」

アィム「ああ．．．すまない、そして、よろしく頼む。」

カィム「．．．それじゃ、デカベースに戻ろうか．．．」

なのは「そうですね。」

フェイト「みんな心配してると思いますし・・・」

そう言っつて、みんなで新たな仲間になったルキウス改めアィムを連れてデカベースに戻った。

### 第33話 兄弟の道が交わる時（後書き）

今回は、ルキウスが正式に仲間になりました、次回は別の戦隊の大いなる力を解放させますのでよろしくお願いします。それではまた次回お願いします。

### 第34話 宇宙からの来訪者（前書き）

どうも、お待たせしました、最近忙しいのと体力不足で更新が遅れてしまった申し訳ありませんでした、今回はオリジナルですが宇宙警察が出てきます、この世界の宇宙警察はデカレンジャーの変身前くらいの装備しかない設定にあります。

### 第34話 宇宙からの来訪者

異世界 妖魔の君の居城

アスラ「．．．まさか、ゴーカイシルバーまで現れるとはな．．．」  
バンドーラ「くっ、忌々しいわ目障りなゴーカイジャーがまた一人増えるなんて．．．」

バディン「あの時、完全にあのゴーカイセラーを破壊していれば．．．」

ルシフェル「悔やんでも仕方が無い．．．それよりもアブレラが時間稼ぎのアリエナイザーを地球に向かわせたそうだ．．．ただしアブレラ曰く今のアリエナイザーは質がかなり低いらしいから本当に時間稼ぎにしかないそうだ．．．」

アスラ「かまわんさ、今は我々の方で妖魔獣士を始めとした、戦力を増やすことが最優先だ．．．」

血祭ドウコク「違いはない、それまでこっちは気長に待たせてもらうさ．．．」

ルシフェル「ああ、任せてもらおうか．．．」  
骨のシタリ「待っておくれ、あたしも行くよ．．．」

そう言つて、ルシフェルは研究室へ向かい、その後をシタリもルシフェルについて行った。

デカベース

アイルムがゴーカイシルバーとして正式に仲間になった、その後デカベースでみんなと自己紹介し、そこでアイルムからも一つの大いなる力をもらったことがわかった。

はやて「へえ、一気に二つ目も開放されたことになってたんですか．．．」

ジーク「それで、いつたい何の戦隊だ？」

アイルム「たしかタイムレンジャーと言っていたな．．．」

カイル「タイムレンジャーか．．．たしかにキングテクターを確認したら、タイムレンジャーのエンブレムが浮かんでたな．．．」  
ティア「いつたい、いつ力をもらったんですか？」  
カイル「あれは、お前達と会う2日前だったな．．．」  
そう言つて、みんなに話し始めた。

#### 回想

2日前のノーヴァス・アイテルから数キロ先にある洞窟で、カイルはそこで休んでいたのだが、目が覚めるとあの英雄の聖地の世界にいた。

カイル「う、うん．．．ここは？．．．またあの世界か．．．」

直人「ようやく会えたな。」

カイル「誰だ!？」

とそこへ、タイムレンジャーの5人とタイムファイヤーであった滝沢直人が現れた。

直人「俺達はタイムレンジャーだ。」

カイル「タイムレンジャー．．．」

ユウリ「そうよ、あなたはまだ迷っているようね。」

カイル「．．．」

アヤセ「まあ、そう簡単に答えは出せないだろうがな．．．」

ドモン「でもよ、きつと近いうちにいい答えが見つかるはずだ。」

シオン「だから、僕達から君にこれを．．．」

そう言つて、シオンはキングキーを渡した。

直人「俺は自分の運命を変えることが出来なかったが、お前ならばと変えられる。」

直人「そうだ、俺達の大いなる力もお前にやるから、きつと答えを見つけるよ、自分の未来は自分の手で掴め。」

カイル「自分の未来．．．」

ユウリ「それじゃ、また会いましょう。」

次の瞬間、光に包まれ、元の場所にいた。

アイム「・・・夢だったのか・・・」

しかし、そこにはキングキーがあった。

アイム「夢じゃなかった・・・答えが見つかるか・・・そのうち決めるさ・・・」

そして、その数日後にカイクたちと共に戦う道を選んだアイムだった。

現在

カイク「なるほどな・・・」

アイム「それでこれがその時に受け取ったキングキーだ。」

そう言っつて、アイムはカイクにキングキーを渡した。

ジーク「しかし、何はともあれ順調に大いなる力を解放できてるな・・・」

とその時、警報が鳴り響いた。

シャーリー「大変です、妖魔の反応ではないのですが、宇宙からの未確認の生命体が6体ほど地球に飛来しました・・・エネルギー数値はそれほど高くないのですが・・・」

はやて「シャーリー、場所はどこや？」

シャーリー「場所は、海鳴市のこのポイントです。」

そう言っつてマップを表示した。

カイク「翠屋の近くだと！？あそこにはヴィヴィオとリンディさんが居るんだ。」

そう言っつて、カイクは飛び出して行った。

ジーク「やれやれ・・・ヴィヴィオのことになるとすぐに動くんだからよ・・・」

アイム「たいしたレベルではないだろうが、俺が行こう。」

ジーク「ああ、頼むぜ。」

そう言っつて、アイムはカイクの後を追った。

翠屋

リンディがヴィヴィオを連れて、士郎と桃子に会いに来ていた。

リンディ「お久しぶりですね。士郎さん、桃子さん」

士郎「リンディさんもお元気そうで。」

桃子「ヴィヴィオもこんにちは。」

ヴィヴィオ「うん、士郎パパと桃子ママ。」

とそこへ、アリサとすずかが来た。

アリサ「お邪魔します。」

すずか「あれ？リンディさんにヴィヴィオも来てたの？」

リンディ「ええ、久しぶりね二人とも。」

ヴィヴィオ「こんにちは。」

そう言つて、ヴィヴィオは二人にお辞儀をする。

すずか「ヴィヴィオはお利口さんだね。」

そう言つて、すずかはヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「えへへへ。」

ヴィヴィオは嬉しそうな顔をした。

とその時、地震が起こった。

士郎「な、なんだ!？」

そう言つて、全員で表に出た。

そこには、4人の異形の姿をした男女がいた。

????「ふう、ここが地球か・・・こんな銀河の辺境の星にして

は、文明が進んでるな・・・」

????「いいじゃんか、兄貴。」

????「そうだよ、俺達の根城の星にするにはちょうどいい星じゃ

ん。」

????「それじゃ、やろうぜ。」

そう言つて、手当たり次第に持っていた重火器系統を乱射し始めた。

それを見たリンディとヴィヴィオが飛び出していった。

リンディ「あなた達！なんて事をしているの!？」

ヴィヴィオ「そうだよ、いけないことだよ!！」

それから少し遅れて、土郎、桃子、アリサ、すずかも来た。

土郎「君達はいったい何者だ!？」

「???」「あん?なんだてめらは?・・・まあいいさ、教えてやるぜ、俺達は宇宙マフィア、シザーブラザーズだ。」

桃子「シザーブラザーズ?」

アリサ「何それ?」

「???」「やはり、こんな田舎の星じゃ俺たちを知らないのは無理も無いか・・・教えてやるう俺は長男のホーンドだ。」

「???」「私は長女のジュリーよ。」

「???」「俺は次男のビツシュ。」

「???」「俺は三男のティックだ。」

そう言つて、名乗りを挙げているとき、二人ほど駆けつけてきた。リンデイ「あれは?」

「???」「待て!シザーブラザーズ共。」

ビツシュ「またか・・・宇宙警察か・・・」

ヴィヴィオ「宇宙警察?」

すずか「味方なのかな?」

「???」「下がってください、私達は宇宙警察の特別指定凶悪犯罪対策課所属のライと・・・」

「???」「レンです。」

そう言つて、二人は敵の前に立つた。

ライ「シザーブラザーズ、50人のスペシャルポリスを殺害・・・及び様々な惑星破壊行動により・・・ジャツジメント!」

そう言つて、自分達の持つていたSPライセンスを出してジャツジメントをした、その結果はデリート許可であつた。

レン「デリート許可!」

そう言つて、自分の持つていた銃で攻撃をした。

ホーンド「ふん!」

しかし、長男に銃弾を防がれた。

ライ「くっ・・・やはり、我々だけでは、勝てないのか・・・」

ヴィヴィオ「頑張れ！」

ビツシュ「うるせえガキだな．．．消えな！」

そう言つて、次男はヴィヴィオに攻撃を仕掛けようとした。

レン「しまった!？」

そう言つて、ヴィヴィオのところへ向かおうとした時、ジュリーが立ちはだかった。

ジュリー「どこへ行く気だい？」

レン「くっ．．．」

リンディ「ヴィヴィオ！」

そう言つて、リンディがヴィヴィオの前に立つた。

ヴィヴィオ「リンディママ！」

攻撃がリンディに当たりそうになった時、カイクがキングソードベガで弾き飛ばした。

ビツシュ「何!？」

カイク「どうやら間に合つたようだな．．．」

ヴィヴィオ「パパ！」

リンディ「カイクくん！」

カイクはヴィヴィオの頭を撫でた後、すぐにビツシュを睨みつけた。カイク「．．．俺の大事な娘にこんな真似して生きて帰れると思つな．．．」

とそこへアイムも来た。

アイム「カイク！」

アリサ「あれ、あなたは？」

すずか「なんだか、カイクさんに似ているような．．．」

リンディ「それはそうよ、彼はカイクくんのお兄さんのアイムくんよ。」

士郎「そうか、だから．．．」

桃子「も、もしかして、彼も？」

リンディ「ええ、そうですよ。」

そんな話をしている中、二人は敵に向き直つた。

ジュリー「兄貴、あの二人中々いい男じゃんか。」  
ホーンド「どうでもいい．．．俺達相手に睨みつけるとはいい度胸  
だぜ．．．」

ビツシュ「てめらも、この二人と同じ目に合わせてやるぜ。」  
そう言つて、ライとレンは倒されていた。

ライ「に、逃げる．．．」

レン「き、君達に勝てる相手ではない．．．」

カイクとアイムは二人を立ち上がらせ、後ろに下げた。

カイク「安心しろ、こんな奴らに負ける要因などない．．．」

ティツク「な、なんだと！」

アイム「行くぞ！」

そう言つて、二人はモバイレーツとゴークアイスルラーとレンジャー  
キーを取り出した。

ホーンド「な、なんだそれは!？」

カイク・アイム「豪快チエンジ!！」

モバイレーツ「ゴークイジャー!！」

ゴークアイスルラー「ゴークイジャー!！」

ジュリー「な、なんなのさ、あんたたちは?」

カイク「ゴークイキング!！」

アイム「ゴークアイスルバー!！」

ビツシュ「ゴークイキングに．．．ゴークアイスルバーだと．．．」

ティツク「ふざけるな!！」

そう言つて、ティツクが二人に向かっていったが、カイクはすぐさま  
キングソードベガで攻撃をした。

カイク「はあ!！」

ティツク「ぐああ!！」

ビツシュ「ティツク!！」

ホーンド「よ、よくも、俺の弟を．．．くらえ!！」

そう言つて、マシンガンをぶっ放してきた。しかもその攻撃は少し  
離れていたアリサとすずかに向かつてきた。

桃子「アリサちゃん！すずかちゃん！」

アトム「危ない！豪快チェンジ！」

ゴーカイセルラー「デカレンジャー！」

アトムはすぐにデカブレイクにチェンジした。

ビツシュ「やったか!？」

煙が晴れるとそこには弾丸を受け止めたデカブレイクにチェンジしたアトムが立っていった。

アトム「大丈夫か？」

アリサ「は、はい……」

すずか「あ、ありがとうございます。」

そう言うと二人はすぐに安全なところまで移動した。

アトム「そんな攻撃が俺達に通用すると思っっているのか？」

ジュリー「う、嘘……」

カトム「なら、俺はこれだな、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

カトムはなんとデカブライトにチェンジした。

二人に姿を見た、ライとレンは驚いた表情をした。

ライ「ば、馬鹿な、あれはデカスーツじゃ……!」

レン「宇宙警察に伝わる伝説の強化スーツがなぜ、こんな辺境惑星に……?」

驚いている二人を尻目に二人はそれぞれ、別れて二人ずつ相手をしていった。

カトム「ブレスロツトル！高速拳ライトニングフィスト！」

ビツシュ・ジュリー「ぐあああ！」

アトム「電撃拳エレクトロフィスト！」

ホーンド・ティツク「ぐあああ！」

4人とも吹き飛ばされた。

その後、二人は元の姿に戻った。

カトム「さてと……おい、その二人、こいつらは捕まえた方がいいのか？」

二人は啞然としていたが、カイムの言葉にすぐに我に振り返り答えた。  
ライ「い、いえ、すでにデリート許可が下りていますので．．．」  
アイルム「なら、倒しても問題はないわけか．．．」  
そう言うと二人は、それぞれ自分の武器にレンジャーキーをセットした。

キングソードベガ・ゴーカイスピア「ファイナルウェーブ！」  
ジュリー「な、何する気だい？」

ビツシュ「こんな辺境な星で、俺達が．．．」  
カイルム「言った筈だ、お前達は、俺の娘に手をかけようとしたからな、生かしては帰さないよ．．．」

ホーンド「ま、待て．．．」  
ティック「話せばわかる．．．」

アイルム「これだけのことをやって、今更か？」  
ホーンド「くっ．．．」

アイルム「ゴーカイスーパーノヴァ！」  
カイルム「ベガスラッシュ！」

アイルムはゴーカイスピアからエネルギー弾を4発打ち込んだ、その後カイルムは4人を一刀両断した。

4人「くっぐああああ！」「」  
カイルム・アイルム「ゴツチュー！」「」

シザーブラザーズは二人の手によって倒された、それをビルの屋上から見ていたエージェント・アブレラは。

アブレラ「ふん、やはりたいしたことは無かったか．．．時間稼ぎにしかならないくらいアリエナイザー共の質が落ちているな、まあその代わりに宇宙警察の装備と実力が低下しているから商売はしやすいがな．．．」

そう言つて、アブレラはその場から去っていった。

その後、翠屋で二人から事情を聞き、カイルムたちも自分たちのことを話した。

ライ「なるほど．．．だからあなた達は、その力を使うことが出来るのですね．．．」

レン「しかし、驚きました、我々ですら手こずってた、あのシザーブラザーズを二人だけでいとも簡単に倒すなんて．．．」

カイル「まあ、とりあえず宇宙警察の今の状態がよくわかった、それでこれからどうするつもりだ？」

ライ「一旦、宇宙警察本部に戻り、現状を報告させていただきます、その後、こちらの代表が地球に来られると思われれますので、どうか協力をお願いしますか？」

リンディ「わかりました、それではこちらの国連事務総長にも連絡をします。」

ライ「ありがとうございます。」

話し合いの後、二人は宇宙警察本部に戻っていった。

その後、カイルは土郎、桃子、リンディから娘のことを頼むと言われていた。

その光景をヴィヴィオはカイルの膝の上に乗り、笑顔で見ている。

しかし、その間アリサとすずかはカイルのことをずっと見つめていた。

アリサ「カイルさん．．．／／／」

すずか「かっこいいな．．．／／／」

そんな二人の視線にカイルはまったく気付かなかった。

### 第34話 宇宙からの来訪者（後書き）

タイムレンジャーの大いなる力も結局、手に入れていた設定にしました、現代人じゃないメンバーを組み合わせること考えた結果、このような結果になりました、ちなみにアイムはアリサとすずかとかくっつけようと思います、次回はちゃんとした大いなる力を手に入れる話にしたいと思いますのでよろしくお願いします。

### 第35話 アバレろ！荒ぶるダイノガッツの力（前書き）

どうも、今回はタイトルどおり、アバレンジャーの力が解放されま  
す、後前回に触れるのを忘れていたのですが、レンジャーキーはゴ  
ーカイジャーで確認されていないデカブライト以外にもゲストの戦  
士のレンジャーキーを出したいと思えますのでよろしくお願いしま  
す。

### 第35話 アバレろ！荒ぶるダイノガッツの力

宇宙警察との接触から数日が経過した、そしてもうすぐヴィヴィオの誕生日が近づいていた（ちなみにヴィヴィオを始めて保護した日を誕生日にした。）みんなで準備をしていた、そんな中カイムはデーターを通してドギー・クルーガー達と話していた。

ドギー「（誕生日プレゼント？）」

カイム「ああ、物以外に何かしてあげたいと思っているいろいろ考えてはいるんだが、どうしたものか・・・」

スワン「（それなら、何か料理を作ってあげたらいいんじゃない？）」

カイム「り、料理ですか・・・しかし、俺は自慢じゃないが料理は

・・・」

ドギー「（それなら、教えてもらえばいいんじゃないのか？ここに俺の行きつけの店のメニューのレシピをもらってある、それをお前にやる、誰か料理が得意な人に教えてもらって作ったらどうだ？）」

カイム「わかりました、やってみますよ、ありがとうボス、スワンさん。」

スワン「（いいのよ、それじゃヴィヴィオちゃんによろしくね。）」その会話の後、通信が切れた直後にレシピが転送されてきた。このレシピはドギーの行きつけのカレー屋の「恐竜や」のメニューのレシピだった。

カイム「・・・さて、問題は誰に聞くかな・・・いつものようにメルトやティアを頼るのみな・・・ん？待てよ、そうだ、あそこなら・・・」

そう言っつて、カイムは出かけて行った。

翠屋

士郎「料理を教えてください？」

カイル「ええ、ヴィヴィオの誕生が近いんで．．．」

桃子「あらあら、いいお父さんですね、それで何の料理を作るつもりなんですか？」

カイル「これなんですけど．．．」

そう言つて、「恐竜や」のメニューのレシピを見せた。

士郎「ふむ、これは中々．．．」

カイル「なんでも、俺の剣の師匠の行きつけの店の料理だから．．．」

桃子「面白そうね、やりましょう、あなた。」

そう言つて、快く引き受けてくれた、とその時なぜか牧野先生が来た。

牧野「やあ、カイルくん。」

カイル「牧野先生？どうしてここに？」

士郎「カイルくん、この人は？」

カイル「ああ、この人はレジェンド戦隊の一つである轟轟戦隊ボウケンジャーの関係者でメカニツクの牧野森男先生だ。」

牧野「どうもよろしくお願ひします。」

士郎「そうですか、こちらこそ．．．」

桃子「でも、どうしてこちらに？カイルさんに御用ですか？」

牧野「ええ、実はカイルくんがクルーガーさんからその料理を作ると聞いて私もお手伝いが出来ればと．．．」

カイル「あれ？牧野先生はボスの行きつけの店を知ってるのか？」

牧野「ええ、実はあの店には私も行きつけだったんですよ、ちなみに他にも様々な歴代戦隊の方の関係者があの店で知り合ってたんですよ．．．」

カイル「（この店には何かあったのか？）」

カイルは不思議に思った。

牧野「それで私はあの店の味を覚えているので、お手伝いになるかと．．．」

桃子「そうですか、それは助かります。」

カイル「そうか、助かった牧野先生。」  
士郎「うむ、それではカイルくん、支度をして厨房へ入りなさい、  
ーから指導しよう。」  
そう言つて、カイルは士郎、桃子の指導の下、まず料理の基礎をみ  
つちり叩き込まされた、その上で牧野先生の協力の下、カイル、士  
郎、桃子の3人はレシピを元に調理に入り、3日後にようやく、牧  
野先生が覚えている「恐竜や」のカレーが完成した。その後、カ  
イルはレシピをメモした後、お礼にレシピを士郎と桃子に譲つた。

そして、それから数日後いよいよヴィヴィオの誕生日の朝になった。  
ちなみにヴィヴィオ本人は、準備の間だけ、ティア、エリス、アイ  
ナさんの3人と一緒にお出かけすることになった。その間に残つた  
みんなで準備を進めていた。ちなみにカイルは料理の仕込を終えて、  
他の人の手伝いをした。

カイル「すまないな、みんな．．．」  
はやて「平気やで、カイルさん。」  
なのは「そうですよ。」

フェイト「ヴィヴィオは私達にとつても娘ですから．．．」  
ジーク「そういうことだ、俺達全員の娘つてことだから、気にする  
な。」

そう言つて、みんなで準備を進めていた。  
とその時、シャーリーから通信が入つた。

シャーリー「大変です！妖魔反応です！場所は東京都心です。」  
シグナム「くつ．．．こんな時に．．．」

ジーク「ここは残つてるメンバーで、さっさと片付けるぜ！」  
メルト「そうね。」

フィオネ「ヴィヴィオちゃんのためにも時間はかけられません。」  
その後、ジーク、フィオネ、メルト、アイム、ヴィータのメンバー  
が選抜され出動した。  
しかし、カイルも来た。

ジーク「カイク！」

ヴィータ「お前は、残れって．．．」

カイク「大丈夫だ、終わらせて必ず間に合わせる．．．」

カイク「．．．わかった、行くぞ。」

そう言っ、出撃した。

東京都心

ルシフェル「さて．．．D・フェザー、後は任せた、私はこれからあるものの回収を行う．．．」

D・フェザー「は！お任せを．．．」

そう言っ、ルシフェルは姿を消した。

D・フェザー「さて．．．行け！我が翼よ、この無様な文明を破壊しろ！」

D・フェザーは自分の翼をばら撒き、その羽が一斉に爆発した。

市民「．．．きゃああ！」

市民「．．．うあああ！」

人々が逃げ惑う、D・フェザーはさらに羽をばら撒いていた。

D・フェザー「はははは！逃げる、下等な生物ども！」

とその時、カイクたちが駆けつけた。

カイク「待て！」

D・フェザー「来たか．．．行け！スカルソルジャー、スカルナイトども！」

そう言っ、雑魚の大群を展開した。

ジーク「行くぜ！」

ヴィータ「アイゼン！」

ゴーカイジャー「．．．豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ゴーカイセルラー「ゴーカイジャー！」

カイク「ゴーカイキング！」

ジーク「ゴーカイレット！」

ファイオネ「ゴーカイブルー！」

メルト「ゴーカイエロー！」

アイム「ゴーカシルバー！」

ゴーカイジャー「海賊戦隊ゴーカイジャー！！」

カイク「さて．．．」

ジーク「派手に行くぜ！」

その言葉を皮切りに全員で敵に向かっていった。

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

敵の雑魚を的確に粉碎しているが、きりがない。

カイク「くっ．．．（このままじゃ、埒が明かない．．．）」

とその時、D・フェザーがカイクたちの前に現れた。

D・フェザー「しぶとい奴らめ、これでも食らえ、フェザーボム！」

そう言つて、自分の翼を飛ばして雑魚ごとカイクたちに攻撃をして

きた、その攻撃でカイクたちも吹き

飛ばされ、倒れた。

カイク「こ、こいつ．．．」

ヴィータ「部下ごと．．．」

D・フェザー「これで終わりだ！」

そう言つて、再度攻撃しようとしたその時、アバレンジャーのレン

ジャーキーが光り、次の瞬間、全員の前にアバレンジャーがいた。

凌駕「大丈夫ですか？」

カイク「あ、あんだ達は．．．」

ジーク「せ、先輩．．．」

幸人「しっかりしろ、娘が待っているんだろうが。」

カイク「そうだ．．．ヴィヴィオが待っているんだ．．．」

らんる「そうよ、頑張れ！」

アスカ「君は、娘を大事にしているようだね。」

カイク「ああ、俺はあの子に泣かれると悲しくなって、そして、あ

の子が笑うと俺は嬉しかった．．．だからこそ俺はあの子に笑顔で

いてもらいたい！」  
メルト「カイク・・・」  
フィオネ「カイクさん・・・」  
ヴィータ「カイク・・・」  
アイム「カイク・・・いい父親になったな・・・」  
ジーク「ああ、まっただけ。」  
壬琴「ふ・・・どこかの誰かさんと同じだな・・・久しぶりにときめいたぜ・・・受け取れ・・・」  
そう言つて、壬琴はキングキーを渡し、さらにアバレンジャーのレンジャーキーが光った。  
壬琴「俺達の大きいなる力も解放したぞ。」  
凌駕「さあ、張り切つて倒してください！」  
アスカ「頑張つてくださいよ。」  
幸人「負けるなよ。」  
らんる「そうたい！」  
カイク「ああ、ありがとう先輩。」  
そう言つと、光が消えて元の場所に戻つた。  
D・フェザー「な、なんだっただ、今は？」  
ジーク「さて・・・せつかくだから使わせてもらつぜ！」  
ゴーク「さあ、豪快チェンジ！」  
モバイレッツ「アバレンジャー！」  
ゴーク「アバレンジャー！」  
ヴィータ「アイゼン！レンジャージャケット！セットアップ！」  
アイゼン「イエス！」  
全員再度変身をした。  
D・フェザー「き、貴様ら・・・！」  
ジーク「元氣莫大！アバレッド！」  
フィオネ「本氣爆発！アバレブルー！」  
メルト「勇氣で驍進！アバレイエロー！」  
カイク「無敵の竜人魂！アバレブラック！」

アイム「ときめきの白眉！アバレキラー！」

ジーク「荒ぶるダイノガッツ！」

ゴークカイジャー「爆竜戦隊、アバレンジャー！！！！」  
そう言つて、名乗りを上げた。

D・フェザー「ふ、ふざけるな！」

そう言つて、またあの羽を飛ばそうとしてきた。

アイム「甘い！ウイングペンタクト！」

アイムはアバレキラーの羽根ペン型の剣を使って、同じものを描き  
全て打ち落とした。

D・フェザー「ば、馬鹿な……」

ジーク「今度はこつちからだ！ティラノロッド」

フィオネ「トリケラバンカー！」

メルト「プテラダガー！」

カイク「行くぞ！ヴィータ！」

ヴィータ「おう！」

カイク「ダイノスラスター！」

ヴィータ「アイゼン！」

カイク・ヴィータ「ダブルファイヤーインフェルノ！！！」

D・フェザー「ぐああああ！」

D・フェザーは思い切り吹き飛ばされた。

その後、ふらつきながら立ち上がるうとしていた。

ジーク「よし、とどめと行くぜ！」

そう言つて、カイクたちは武器を合体させた。さらにヴィータもジ  
ークの後ろで支えるようにして立った。

6人「スーペリアダイノボンバー！！！！」

カイク「必殺……」

アイム「スーペリア……」

ジーク・ヴィータ「ダイノダイナマイト！！！」

6人はD・フェザーに攻撃を放った。

D・フェザー「ぐああああ！！！」

D・フェザーは完全に粉碎された。

そこへ、アスラが現れた。

アスラ「今度は、アバレンジャーどもの力か・・・D・クラーゲン！」

D・クラーゲン「キイイキイイ！」

そう言うとまたしてもD・クラーゲンが現れ、D・フェザーを巨大化させた。

その後、アスラはD・クラーゲンとともに姿を消した。

ジーク「またか・・・」

アイム「ここは俺が行く。」

カイク「アイム？」

アイム「心配するな、ようやく俺の大いなる力が揃った、行くぞ！豪獣ドリル」

そう言つて、アイムはタイムファイヤーのレンジャーキーをゴーカイセルラーにセットした。

ゴーカイセルラー「豪獣ドリル！」

すると次元を裂いて巨大なドリルタンクが出てきた。

アイム「は！」

アイムはすぐさま乗り込んだ。

D・フェザー「な、なんだそれは？」

アイム「驚くのはまだこれからだ、レンジャーキーセット！」

豪獣ドリル「豪獣レックス！」

アイムがドラゴンレンジャーのレンジャーキーをセットすると恐竜型ロボットに変形した。

アイム「はあ！」

D・フェザー「ごおおお！」

アイムは豪獣レックスの尻尾のドリルで攻撃をしていた。

D・フェザー「おのれ、食らえ！フェザーボム！」

アイム「同じ手は通用しない、豪獣レーザー！」

アイムはレーザー攻撃で敵の背中の中の羽を全て焼き払った。

D・フェザー「お、俺の羽が!？」

ヴィータ「よし!これであいつには武器が無い!」

アイルム「とどめだ!レンジャーキーセット!」

豪獣レックス「豪獣神!」

アイルムがアバレキラのレンジャーキーをセットすると変形し、巨大な人型ロボットになった。

メルト「すごいわ!」

フィオネ「三段変形ですか。」

ジーク「やるじゃねえか!」

カイル「これが、アバレンジャーの力か・・・」

アイルム「行くぞ!レンジャーキーセット!必殺豪獣トリプルドリルドリーム!」

アイルムが3つのレンジャーキーをセットすると、分身して豪獣ドリル、豪獣レックス、豪獣神の3体が同時に敵にドリル攻撃を叩き込んだ。

D・フェザー「ぐああああ!!」

D・フェザーは爆発し、倒された。

それをビルの屋上から見ていたルシフェルは。

ルシフェル「まさか、あの力まで手に入れるとは・・・妖魔獣士の更なる製造が必要か・・・」

そう言つて、姿を消した。

デカベース

事件が解決し、カイルたちが戻ってきた頃にはみんなが準備を終わらせていた、そして、ティアたちがヴィヴィオを連れて帰ってきた。会場には、デカベース、ターボビルダーに居るメンバーはもちろんのこと、GGGのメンバーを含め、土郎、桃子、さすが、アリサ、リオ、コロナといった面々もいた。

全員「お誕生日おめでとう!ヴィヴィオ!」

ヴィヴィオ「あ・・・」

ヴィヴィオは一瞬驚いたが、すぐに状況を理解して、笑顔になった。  
なのは「さあ、ヴィヴィオ。」

フェイト「ケーキのろうそくを消してね。」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言つて、ヴィヴィオは息を吸い込んでロウソクの火を消した。

ヴィヴィオ「ふう〜。」

全員から拍手をもらった後、全員で並べてあつた料理を食べることにした、そんな中ヴィヴィオがカイムの作ったカレーを食べた。

ヴィヴィオ「このカレーおいしい！」

エリオ「ほんとだ！」

キャロ「これ誰が作ったんですか？」

なのは「実はね、カイムさんなんだよ。」

ヴィヴィオ「パパが!？」

フェイト「そうだよ、ヴィヴィオのためにつて．．．わざわざなのはのお父さんとお母さんのところへ行つて作ったんだよ。」

エリオ「お、お父さん．．．」

キャロ「やっぱり、優しいな．．．」

エリス「カイムらしいわよね。」

ティア「そうですね、物だけじゃなくちゃんと気持ちのこもったものあげるところが．．．」

ヴィヴィオ「パパ！」

そう言つて、ヴィヴィオはすぐさまカイムのところへ行つた。

カイム「どうした？」

ヴィヴィオ「パパ！ありがとう、ヴィヴィオのためにお料理作つてくれて．．．」

カイム「可愛い娘のためだ、気にするな．．．」

そう言つて、カイムはヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「そうだ！ねえパパ、もう少しししゃがんで。」

カイム「こうか？」

カイムはヴィヴィオに言われたとおりにししゃがんだ。

ヴィヴィオ「チュ！」

ヴィヴィオはカイムのほっぺたにキスをした。

ヴィヴィオ「えへへへ、これは私からのパパへのお礼だよ、ありがとう！」

その光景を見たみんなは微笑ましく見ていた。

その後、ヴィヴィオはみんなからの様々なプレゼントを受け取り、最高の誕生日を過ごした。

アイム「いい娘だな、大事にしてやれよ・・・」

カイム「わかつてるよ、あの笑顔はどんなことがあっても守って見せるさ・・・」

そう言って、みんなに囲まれ祝福されているヴィヴィオを見ていた。

### 第35話 アバレろ！荒ぶるダイノガッツの力（後書き）

今回はヴィヴィオの誕生日を入れた話にしました。次回はスーパー戦隊ではないのですが、新しい特撮ヒーローを登場させたいと思っていますのでよろしくお願いします。

### 第36話 復活！超人機メタルダー！（前書き）

どうも、今回はようやく初期段階から出す予定だったこのヒーローを出すことが出来ました、さらに初代リインフォースとトップガンダーも復活します、それでは、こいつはすごいぜ！

### 第36話 復活！超人機メタルダー！

異世界 妖魔の君の居城

ルシフェルは前回、D・フェザーをおとりに使い、あるものを回収していた。

シタリ「ルシフェル、なんだいそれは？」

ルシフェル「これか？これはな、ロストロギア闇の書の機能を司る管制人格だった、リインフォースの魂だ、本来ではあれば消滅したものだ、面白そうだから回収した。」

シタリ「あたしにや、よくわからないけど、まあ、それより完成した妖魔獣士の一体を譲ってくれないかい？」

ルシフェル「ああ、構わん、必要なものがあつたら使ってくれ。」

シタリ「感謝するよ、ルシフェル。」

そう言うつとシタリは妖魔獣士のうちの気に入ったものを持って行った。すると入れ違いに甲冑を身に纏った銀色の男が来た。

「ルシフェル様、私の出番はまだですか？」

ルシフェル「お前か．．．そうだな、このリインフォースの調整が終わつたらお前も私と一緒に来てもらう、お前は私の片腕なのだからな．．．」

「???」 「ありがたき幸せ．．．」

そう言うつと甲冑服の男はルシフェルの手伝いを始めた。

一方、カイムはヴィヴィオ、リオ、コロナにおねだりされて、泊りがけのキャンプに来ていた、ちなみにティア、なのは、フェイトとファワードのメンバーも来ていた、そんな中カイムは、エリオと一緒にテントの準備をしていた。

ヴィヴィオ「パパ！ちよつと川で遊んでくるね！」

カイム「ああ、だけどあんまり危ないことはするなよ！」

ヴィヴィオ「うん！行こう、リオ、コロナ！」

そう言つて、3人は着替えを持って川へ行つた。

カイル「一応、なのはとフェイトも一緒について行ってやってくれないか？」

なのは「わかりました。」

フェイト「それじゃ、お言葉に甘えて。」

そう言つて、二人もヴィヴィオたちの後について行つた。

その後、なのはとフェイトも交えてヴィヴィオたちは川で遊んだ、とその時ヴィヴィオがあるものを発見した。

ヴィヴィオ「あれ？なんだろうこれ？」

リオ「どうしたのヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「こんなものが落ちてた。」

コロナ「銃だよ、でももう使えなさそうだけど……」

とそこへなのはが駆け寄つてきた。

なのは「ヴィヴィオ？どうしたの？」

ヴィヴィオ「なのはママ、これなんだろう？」

そう言つて、かなり錆びついたライフル銃を渡した。

なのは「これは……何でこんなものが……でもだいぶ古いもの

だよな……」

フェイト「なのは、どうしたの？」

なのは「あ、フェイトちゃん、実はヴィヴィオがこんなものを見つ

けたんだよ。」

そう言つて、錆びついたライフル銃を見せた。

フェイト「これは……なんでこんなものが？うん？このボードに

なんか書いてあるよ、古くなつてるからよく読めないけど……」

とそこへ、カイルが来た。

カイル「おい、こつちの準備は出来たぞ……って、何でそんなも

の持つているんだ？」

ヴィヴィオ「あ！パパ、こんなのが落ちてたんだよ。」

そう言つて、ヴィヴィオはカイルにそれを渡した。

カイル「なんか書いてあるな……何々」わが最愛の友、ここに眠

る．．．」か．．．」

フェイト「カイクさん読めるんですか？」

カイク「ああ、少し掠れたところからそう書いてあるのが読めてな  
．．．」

リオ「ヴィヴィオのパパってやっぱりすごい！」

コロナ「ホントだよ。」

カイク「ははは、ありがとう。」

なのは「それより、ここに眠るってことは、ここに何かお墓があっ  
たってことですよね？」

カイク「それなら、これで調べるか、サガスナイパー、サーチモ  
ド！」

そう言っつて、カイクはサガスナイパーでこの辺りの地面をサーチし  
てみた、すると反応があり、それは金属反応だった。

カイク「金属反応!？」

フェイト「いったい何が埋まっているのですか？」

なのは「とにかく、みんな呼んでみようか？」

そう言っつて、フォワード陣とティアもここに呼んだ。

その後、みんなで反応があつた場所を掘り返した、すると黒いロボ  
ットのボディが出てきた。

スバル「なのはさん!これを見てください!」

なのは「こ、これは!？」

ティアナ「見たこと無いロボットですね．．．」

フェイト「GGGのロボットとも違うし．．．」

ティア「何なんでしょうか？」

エリオ「お父さん、どうします？」

カイク「．．．メカの専門家に聞くしかないだろう．．．とりあえ  
ずこのロボットをデカベースまで運ぶぞ。」

そう言っつて、カイクたちはキャンプを中断してこの黒いロボットを  
持って、一旦デカベースに戻った。

ちなみにその際、入れ違いにアイクとアコースが来て、この近辺を

調べることにした。

デカベース

その後、牧野先生、レオナ、シャーリー、マリエルにトランスポートで急遽来てくれた獅子王博士、猿頭寺、パピヨンのメンバーがロボットの修復作業を始め、3日ばかりでやっと元に戻すことが出来た。

猿頭寺「それでは、起動させます。」

そう言つて、エネルギーを注入するとその黒いロボットは起動した。???「う．．．こ、ここはどこだ？」

パピヨン「どうやら、成功ですね。」

獅子王博士「やれやれ、君の人格回路の修復にはかなりの労力がかかったよ．．．」

???「あんだ達は？」

カイム「相手に聞く前に自分から名乗るもんだらう。」

???「それは失礼した、俺の名はトップガンダーだ、しかし、俺は死んだはずじゃ．．．」

その後、カイムたちは事情を説明し、トップガンダーも自分のことを語った。

トップガンダー「そうか．．．感謝する．．．」

するとトップガンダーは思い出したかのように聞いた。

トップガンダー「．．．聞きたいことがある、メタルダーを知っているか？」

カイム「メタルダー？」

すると牧野先生が驚いた表情をあげた。

牧野先生「ええ！？ま、まさか、古賀先生が作り出した、あの人造人間．．．通称超人機メタルダー．．．」

獅子王博士「牧野先生、知っているんですか？」

レオナ「．．．古賀竜一郎博士、ロボット工学の権威で第2次世界大戦終結後、アメリカのNASAへ招かれ渡米、その後、NASA

をやめた後、しばらくして40数年ぶりに日本へ帰国、その後、謎の事故死を遂げた記録にある天才科学者だよ。」

トップガンダー「...訂正しておく、古賀博士は事故で亡くなっ  
たんじゃない、殺されたんだ...ネロス帝国に...」

牧野先生「な、なんと、先生が...」

それを聞いて牧野先生は愕然とした。とその時アコースとアイムか  
ら連絡が入った。

アイム「(カイク、こっちのある洞窟で妙な人型ロボットと犬の口  
ポットを発見した。)」

カイク「ロボットだと!？」

トップガンダー「メタルダー!」

カイク「...アイム、ロツサ、すまないがそのロボットをこっち  
へ運んでくれないか？」

ロツサ「(わかったよ)」

その後、二人はその2体のロボットをデカベースに運び込んだ。

トップガンダー「やはりメタルダーだ...しかし超重力エネルギー  
装置が破壊されている...これでは...」

ジーク「こっちの犬の方はどうするんだ？」

トップガンダー「スプリンガーの方はメタルダーが蘇れば、きっと  
目覚めるはずだが...」

ティア「牧野先生、どうにかありませんか？」

牧野先生「このエネルギー装置に関しての情報がないので...」

獅子王博士「僕もだよ...」

それを聞いたカイクは何かを閃いた。

カイク「それなら、作った人のところへ行けばいいんじゃないのか  
?」

メルト「ま、まさか過去へ行くって言うの？」

フィオネ「し、しかしどうやって？」

カイク「タイムジェットを使えばいいんじゃないのか？」

シャーリー「た、たしかにそれを使えば行けますね。」

カイル「俺の勘だが、このメタルダーの力が必要になると思うんだ。」

ジーク「俺も同感だ。」

リンディ「私が許可するわ、カイルくんお願いね。」

ヴィヴィオ「パパ、私も行ってみたい。」

カイル「．．．いい子にしているなら、いいぞ。」

ヴィヴィオ「うん！」

その後、タイムジェット を呼び出し、カイル、トップガンダー、フェイト、リンディ、牧野先生、レオナ、獅子王博士、ヴィヴィオのメンバーはメタルダー、スプリンガーを伴って、古賀博士が亡くなる1ヶ月前のアメリカへ飛んだ。

フェイト「ところで、牧野先生は古賀博士とはお知り合いなんですか？」

牧野先生「実は、昔お会いしたことがあって．．．」

リンディ「どんな方だったのですか？」

牧野先生「素晴らしい方でしたよ、第2次世界大戦で息子さんを亡くしたせいかな、とにかく世界平和を強く願っていた人で．．．」

獅子王博士「．．．たしかに文献によれば、力だけの解決ではなく汝の敵をも愛せよ．．．という精神だったと猿頭寺君が事前に調べた資料によれば書かれていた．．．」

トップガンダー「．．．教えてやる、古賀博士は、まだ目覚めて間もないメタルダーに敵を教えるために自ら敵の中へ飛び込んで行き、そして、亡くなった．．．」

フェイト「そ、そんなことを．．．」

レオナ「自らの命を投げ出してまで、彼に身を持って教えたのね．．．」

獅子王博士「とてもじゃないが、真似できる芸当ではない．．．」

カイル「．．．それほどの人なら、やはり早く会ってみたいな．．．」

ヴィヴィオ「ヴィヴィオも！」

それを聞いたカイムはヴィヴィオの頭を撫でた。

旧暦1987年2月16日

アメリカ ケンタッキー州 古賀博士の自宅

古賀博士は、NASAをやめた後、ここで一人で暮らしていた。するとそこへ誰かが尋ねてきた。

古賀博士「うん？誰だろうか？」

そう言つて、古賀博士は玄関へ出た、そこにはカイム、ヴィヴィオ、牧野先生、フェイト、リンデイがいた。

カイム「古賀博士ですね？」

古賀博士「ああ、君達は？」

リンデイ「突然のご訪問、お許しください、実は私達はあなたにある御用があつてきたんです。」

古賀博士「ある御用？」

牧野先生「．．．お久しぶりです、古賀先生．．．」

古賀博士「き、君は．．．ま、まさか牧野君か!？」

牧野先生「ええ、そうです、私ですよ。」

古賀博士は、驚きを隠せなかった、なぜなら古賀博士が知っている牧野先生よりもかなりの歳をとっていたからである、その後、古賀博士に詳しい経緯を話した、古賀博士は驚いたが、しかしカイムたちのことを信じ、話を聞いてくれた。

古賀博士「．．．そうか、君達は未来から来たのか．．．」

フェイト「信じてくれるのですか？」

古賀博士「君達の目が信じられる目だったからね．．．わかった、協力しよう、私をメタルダーのところへ連れて行ってくれ。」

リンデイ「ありがとうございます。」

ヴィヴィオ「ありがとうございます。」

古賀博士「おや、いい子だね。」

そう言つて、古賀博士はヴィヴィオの頭を撫でた、撫でられたヴィヴィオは嬉しそうに笑みを浮かべた。

カイル「．．．すみません。」

古賀博士「気にしなくて、それよりも君はこの子を大事にしているようだね。」

カイル「．．．俺は昔、親からの愛情をあまり受けたことが無くて、そのせいかあの子に俺と同じ思いを味わってほしくないだけです。」  
フェイト「カイルさん．．．」

それを聞いた古賀博士は、カイルを見て口を開いた。

古賀博士「そうか．．．大事にしてやりなさい、私は昔息子を失つてね．．．」

カイル「．．．それが古賀竜夫さんか？」

古賀博士「ああ、そうだよ、さて．．．それじゃ案内してくれ。」

その後、カイルは隠してあったタイムジェットへ古賀博士を案内した。そして、そこに残っていたトップガンダー、レオナ、獅子王博士とも会い、自己紹介をしたのち、古賀博士、牧野先生、レオナ、獅子王博士のメンバーで、メタルダーの修理を行っていた、それから2日後ようやく修理が終わった。

カイル「終わっただんですか？」

古賀博士「うむ、それとメタルダーの精神回路がここまで成長しているとは思わなかったよ、だからメタルダーの最終リミッターも解除させてもらったよ。」

リンディ「最終リミッター？」

古賀博士「うむ、メタルダーには精神が悪い方へ行った時に備えて、超重力エネルギー装置の出力を抑えていたんだ、しかし、それももはや必要ないだろう、それに君達の時代の技術のおかげで、メタルダーの制御装置はさらに優秀になった、これなら破壊される心配は無いだろう。」

トップガンダー「メタルダーにはまだ秘められた力があつたのか．．．」

獅子王博士「それでは、古賀博士、起動させましょう。」

古賀博士「うむ、それでは牧野君。」

牧野先生「はい。」

そう言つて、横たわるメタルダーを起動させた、するとメタルダーのボディが変わり、人間の姿に変わった。さらにスプリンガーも起動した。

メタルダー「こ、ここは？」

古賀博士「おお、目覚めてくれたかメタルダー、いや剣流星。」

流星「古賀博士！？ど、どうして．．．博士は死んだはずじゃ．．．

」

スプリンガー「メタルダー、どうやらそれだけじゃないようだぜ。」

トップガンダー「メタルダー．．．お前とまた会えるとは俺は嬉しいぞ。」

」

流星「ト、トップガンダー！？ど、どうして君が！？」

その後、みんなから事情を説明され、メタルダーは理解した。

流星「なるほど、僕はそんなに眠りについていただけなのか．．．」

古賀博士「剣流星、未来で君の力を必要としている、今度は未来の世界を守るんだ。」

流星「わかりました、古賀博士いやお父さん、僕は戦います、この

命をかけても．．．」

古賀博士「剣流星．．．」

ヴィヴィオ「ねえ、おじいちゃん。」

古賀博士「なんだい、ヴィヴィオちゃん？」

ヴィヴィオ「おじいちゃんとの記念写真がほしいって思ったの。」

カイク「それはいい、博士お願いします。」

古賀博士「．．．わかったよ、私も二人の息子と孫の写真がほしいからね．．．」

フェイト「二人の息子？」

古賀博士「ああ、カイクくん、君は竜夫とは違うが私のもう一人の息子のよう thinking 思えてならない。」

カイク「博士．．．」

古賀博士「君は親の愛情をあまり受けなかったと言つてたからね、

私も息子に十分なことをしてあげられなかったからね．．．」

カイル「博士．．．いや父さん．．．」

カイルは驚きながらも嬉しそうな顔をした。

その後、全員で記念写真を撮った後、古賀博士に写真の一枚を博士に渡した。

カイル「ありがとうございます、父さん。」

ヴィヴィオ「ありがとうございます、おじいちゃん。」

古賀博士「いや、お礼を言いたいのはこっちだよ、ありがとうございます、それとこれを．．．」

そう言つて、一枚のディスクを渡した。

フェイト「これは？」

古賀博士「それにはメタルダーの基本データが入っている、何かあればそれで何とかなるはずだ、牧野君、レオナ君、獅子王博士ならわかるはずだ。」

リンデイ「本当にありがとうございます、古賀博士。」

カイル「それなら父さん、これを．．．」

そう言つて、カイルは一枚の本を渡した。

古賀博士「これは？」

カイル「それには、父さんが調べている黒幕の正体が記されている。」

古賀博士「そうか、ありがとうございます有効に使わせてもらつよ。」

流星「それじゃ、お父さんお元気で。」

スプリンガー「博士に会えて嬉しかったぜ。」

トップガンダー「俺もだ。」

古賀博士「流星、スプリンガー、トップガンダー頑張ってくれ。」

獅子王博士「それじゃ、僕達は失礼しようか。」

リンデイ「そうですね。」

カイル「さようなら父さん。」

ヴィヴィオ「バイバイおじいちゃん。」

フェイト「ありがとうございます。」

牧野先生「先生もお元気で．．．」  
レオナ「それじゃ．．．」  
古賀博士「ああ、ありがとう。」  
そう言つて、タイムジェット にも乗り込み現代へ戻つた、それを消えるまで古賀博士は見届けた。  
古賀博士「．．．いい若者達だつたな、彼らなら流星たちを任せられる．．．それと頑張るんだカイル．．．」  
その後、カイルからもらった本から帝王ネロスの正体を知つた。  
古賀博士「やはり、あの男だつたか．．．村木國夫．．．奴が帝王ネロス．．．決めた、この時代のメタルダーを目覚めさせよう、奴を倒せるのはメタルダーしかない．．．」  
そして、それから1カ月後、古賀博士は日本へ向かい、この時代でのメタルダーの戦いが始まつた。

#### 現代

一方、こちらでは妖魔が現れ、残っていたメンバーで出撃した。  
ルシフェル「来たか．．．」  
そこにはルシフェル、バディンがいた。  
ジーク「またためえか、ルシフェル、バディン！」  
バディン「ゴーカイレッド、久方ぶりだな。」  
ルシフェル「それと魔導師ども．．．おや？ゴーカイキングとテストタロツサがいないようだか．．．」  
ヴィータ「ためえらなんか、あの二人がいなくても倒してやるよ。」  
ルシフェル「威勢がいいようだか．．．これを見る．．．」  
そう言うと3人の人影が出てきた。  
アイルム「お前はガウ!？」  
フィオネ「．．．カイルさんから報告はやはり本当だつたんですね．．．」  
シグナム「!?馬鹿な、初代リインフォース!？」  
なのは「ど、どうして!？」

初代リイン「．．．み、みんな．．．」

ガウ「またあんた達に会えるとはね．．．」

????「私は始めましてだな．．．私の名はクールギンだ．．．」

エリス「クールギン？」

ティア「見たこと無いですね．．．」

デカベース

基地にいたメンバーも衝撃を隠せなかった。

はやて「な、なんでリインフォースが!？」

リイン「どうなっているですか？」

シャマル「本物なの!？」

ザフィーラ「主ははやて、我々も現場へ．．．」

はやて「せやな、クロノ提督、カリム、後を頼みます。」

クロノ「ああ、任せろ。」

カリム「気をつけて．．．」

そう言つて、はやて、シャマル、ザフィーラ、リインは転移魔法で

現場に向かった。

ジークたち

現場に転移魔法ではやてたちが現れた。

はやて「リインフォース!？」

初代リイン「あ、主．．．」

シグナム「貴様!どういうつもりだ!？」

ルシフェル「おいおい、せっかく蘇生させてやったのにそんな言い

方は無いだろう?もっとも私が持っているこの反魂の杖がある限り、

奴の意識はあつても身体に関しては私の意のままだ．．．」

そう言つと、ルシフェルは杖をかざすと初代リインフォースは詠唱

をはじめ、次の瞬間、空から流星が降つてきた。

なのは「みんなプロテクションだよ!」

フォワード陣「はいい!」

ジーク「俺達もだ!？」

ゴークカイジャー「「豪快チェンジ!」」

モバイレーツ「シンケンジャー!」

ゴークカイセルラー「シンケンジャー!」

そう言つて、ジークたちはすぐにシンケンジャーにチェンジし「防」のモチカラと六課メンバーはプロテクションを使って攻撃を防ぎきつた。

ルシフェル「ほう．．．紋章術サザンクロスを防ぐとは中々やるな．．．」

初代リイン「あ、主．．．みんな、私を殺してくれ．．．こんな風に操られるくらいな．．．」

はやて「リイン．．．!」

ヴィータ「何とかならないのかよ!？」

シグナム「あの杖だ!？あの杖さえ破壊すれば．．．」

そう言つて、シグナムはレンジャージャケットを纏つてルシフェルの元へ向かつていった。

クールギン「ふん!」

しかし、シグナムの剣をクルーギンが防ぎきつた。

シグナム「くつ．．．こ、こいつできる．．．」

ルシフェル「クールギン、そいつの相手は任せた．．．」

クールギン「は!」

そう言つて、クールギンはシグナムの相手をし始めた。

バディン、ガウはゴークカイジャーの相手をしていた。

ルシフェルは初代リインフォースを使って、紋章術で六課メンバーを攻撃した。

さらにスカルナイト、スカルソルジャーを使って、さらに追い詰めていった。

ジーク「くつ．．．こいつら．．．」

メルト「早く帰ってきて、カイク．．．」

はやて「リインフォース!」

初代リイン「主．．．」

ヴィータ「何とかならねえのかよ！」

とその時、ルシフェルの持つていた反魂の杖にエネルギー弾が飛んできた、その直後、反魂の杖が消滅した。

初代リイン「う、動ける!?」

ルシフェル「くっ．．．誰だ!?」

が向いた先にはゴーカイキング、フェイト、剣流星、トップガンダ  
ーの4人が立っていた。

ティア「カイクさん！」

エリス「それにフェイトも！」

クールギン「き、貴様は!?」

流星「クールギン! 貴様も蘇ったのか!？」

トップガンダー「貴様のその杖が無い以上、そいつを縛ることも出  
来ないだろう。」

ルシフェル「まさか．．．この私が狙撃に気付かないとはな．．．」  
その後、すぐにはやてのところへ初代リインフォースは駆け寄った。

初代リイン「主、みんな！」

はやて「リイン！」

シヤマル「よかった．．．」

ヴィータ「ホントだぜ．．．」

シグナム「ルシフェル．．．貴様だけは絶対に許さん．．．」

ザフィーラ「同感だ．．．」

カイク「よし、反撃開始だ！」

フェイト「はい、カイクさん！」

そう言つて、カイクとフェイトはガウとバディンに向かっていった。  
その後、流星はルシフェルに向き合った。

ルシフェル「ば、馬鹿な、貴様は、力を失ったはず．．．」

流星「お前達のように、人の命や心を弄ぶ者たちが居る限り、僕は  
何度でも蘇る！」

バディン「ルシフェル、こいつはいったい何者だ!？」

その直後、流星の表情が変わった。

流星「怒る！」

その直後、流星の身体からエネルギーがほとばしり始めた。剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

ガウ「な、なんだい、あいつは!?」

クールギン「まさか、貴様とまた会うことになるとはな．．．」

ルシフェル「これが．．．あの伝説の人型ロボット、超人機メタルダーか．．．」

ルシフェルは驚いた表情を浮かべた。

メタルダー「行くぞ！」

そう言つて、メタルダーはルシフェル向かつていった。

初代リイン「よくも私を操ってくれたな！ルナライト！」

そう言つてリインフォースはルシフェルから与えられた、紋章術で攻撃をした。

ルシフェル「小賢しい真似を．．．エクスプロード！」

ルシフェルはさらに強力な紋章術を使つてきた、それを見たメタル

ダーは初代リインフォースを抱えて、助け出した。

メタルダー「大丈夫か？」

初代リイン「あ、ああ．．．ありがとう／＼」

初代リインフォースは顔を赤らめながらメタルダーに礼を言った。

その直後、トップガンダーがルシフェルに銃を放った。

ルシフェル「くっ．．．」

バディン「ルシフェル！」

その直後、メタルダーがバディンに向かつていった。

メタルダー「レーザーアーム！」

メタルダーはバディンの腕を切り落とした。

バディン「くおおお．．．俺の腕が．．．」

その一方で、カームはガウを相手にしてた。

カーム「キングソードベガ．．．ベガスラッシュ！」

ガウ「くっ．．．さすがだよ、カイク．．．今のさすがに堪えたよ．．．」  
戦況が不利になるとわかったルシフェルはすぐに指示を出した。  
ルシフェル「くっ．．．どうやら、お遊びが過ぎただな．．．引くぞ。」  
クルーギン「は！メタルダー、そしてネロス帝国の裏切り者トップガンダー、貴様らの息の根は私がつけてやる！」  
バディン「この次は、こうはいかんぞ！」  
ガウ「また会おうじゃないかい。カイク！」  
そう言つて、4人は姿を消した。

デカベース

戻ったメンバーは改めて、初代リインフォースと剣流星を交えて改めて自己紹介した。

その後、検査した結果、初代リインフォースは完全に新たな肉体を与えられていたことがわかった（簡単にいえば完全なホムンクルスの肉体に魂を吹き込んだ状態だった）、その後、初代リインはリインツヴァイと紛らわしいので、リンという愛称が与えられた。

シャーリー「いや、ホントに第2次世界大戦時に作られたとは思えませんが．．．」

マリエル「ほんとね．．．」

獅子王博士「僕ちゃんも信じられないがね．．．しかし、古賀博士はお会いできてよかったですあんな方はおそらくそう簡単にお目にかかれないだろうからな．．．」

クロノ「それほどの人物だったんですか？」

リンディ「ええ、ホントに素晴らしい方だったわ．．．」

流星「ともかく、妖魔との戦いには僕達も協力させてもらうよ、敵にクルーギンまでいる以上黙ってみているわけにはいかない．．．」  
トップガンダー「あの帝王ネロスの影武者だった、奴が生き返るとはな．．．」

カイク「メタルダー、いや剣流星、トップガンダー、スプリンガー、リンこれから俺達に協力してくれ。」

流星「もちろんだ。」

スプリンガー「メカの整備なんかは俺に任せな。」

トップガンダー「一度は死んだ身だ、俺も協力させてもらう。」

リン「主たちがいる以上私も異論は無い。」

ジーク「ああ、よろしく頼むぜ。」

そう言つて、ここに新たな仲間が加わつた。

その後、流星は牧野先生たちが用意してくれた資料を元に空白の歴史をメモリーに叩き込んだ。

### 第36話 復活！超人機メタルダー！（後書き）

どうも、今回はメタルダー復活編でした。おさらいにメタルダーの敵であったネロス帝国のことについて少し触れておきます。

#### ネロス帝国

表向きは世界有数の大企業桐原コンツェルンであり、株価の市場操作や兵器の密売によって多額の利益を得ており、経済面と軍事面の両面から世界を支配しようとしていた。裏ではヨロイ軍団、戦闘口ボット軍団、モンスター軍団、機甲軍団の4軍団を持ち、地下に築かれた巨大闘技場、ゴーストバンクを基地としており、そこから世界中に軍団員を送り込んで様々な場所で暗躍をしていた。軍団長は通称「凱聖」と呼ばれている。

#### 桐原剛造 帝王ネロス

ネロス帝国の支配者であり、表向きは桐原コンツェルンの総帥であり、表向きは慈善事業家としても名声を得ている一方で、本当の姿は冷酷非情で、裏切り者や弱者には一切の情けをかけず、一抹の不安も恐れも抱かぬよう邪魔者は全て抹殺するという人物である、しかし、自分に忠実であるものや有能なものにはある程度温情をかけるなどネロス帝国の者たちからはかなりの支持を受けている。その正体は第2次大戦時に日本陸軍が派遣した技術少佐である、村木國夫であり、超人機計画の際に古賀博士の助手をしていた、しかし、その計画の際に連合軍の捕虜を生体実験したことにより、古賀博士から追放され、さらに終戦後シンガポール刑務所でB級戦犯として絞首刑にあつたが、ひそかに関係者を買収し、身代わりを立てて逃亡、その後、アメリカの犯罪シンジケートの一員となり、完全な整形手術で桐原剛造となり、古賀博士から得た知識を元にネロス帝国を作り上げた。

## クールギン

ネロス帝国が誇る4軍団の一つヨロイ軍団の凱聖、実質No.2であり、銀の甲冑と鉄仮面に身を包んだ剣士で、冷静沈着な参謀格なネロスの懐刀である、メタルダーが目覚めた直後とはいえメタルダーを倒した唯一の男である、基本的には正々堂々を好むが、ネロスの命令とあらば卑怯な手を取る事も厭わない、その正体はネロスの影武者であり、仮面の下には桐原とまったく同じ顔がある。(クールギンは二つの仮面を被っていた。)

## バルスキ

ネロス帝国が誇る4軍団の一つ戦闘ロボット軍団の凱聖、部下思いで、自らの責任で最大限の配慮と温情をかけるため部下からの信頼は篤く、「責任は俺が取る」と言っているほどである、メタルダーの生き方に内心憧れていて、メタルダーとの最終決戦の際には、お前のように生きたかったと語っているほどであり、最後はメタルダーを自らの自爆巻き込まないように吹き飛ばして、死んでいった部下達の下へと旅立っていった。

## ドラング

ネロス帝国が誇る4軍団の一つ機甲軍団の凱聖、全身の各部や盾に装備されたビーム砲や右手に持っている剣を武器としている他、放電攻撃も可能で4軍団長最強の攻撃力を誇り、寡黙で任務遂行を絶対とする軍人肌であったが、メタルダーとの最終決戦の際には接近戦で戦い、メタルダーに敗れた。

## ゲルドリング

ネロス帝国が誇る4軍団の一つモンスター軍団の凱聖、様々な方言が混じった言葉を話す男で、他の軍団の任務を妨害してまで手柄を立てようとするなど欲深さを持つ一方で、自分の手を汚す気がなく、

バルスキーとクールギンとはそりが合わない、口八丁・手八丁 卑怯未練恥知らずをモットーにしているモンスター軍団を指揮しているためか、軍団員が敗れても「卑怯未練の手段が足りなかった」と言っているほどある、その後、一度はメタルダーに敗れるものの、タフさゆえに強化されメタルダーに戦いを挑むものの再度敗れ去った。

以上がネロス帝国の簡単な詳細でした、次回はまた別の大きいなる力を解放させる話にしようと思いますのでよろしくお願います。

### 第37話 放て、気力技！（前書き）

どうも、更新が遅れて申し訳ありませんでした、今回はダイレンジャーの力を解放させます、それとカイクムにだけ天宝来来の玉とは少し違ってもっと強力なアイテムを持たせようと思っていますのでよろしくお願いします。

### 第37話 放て、気力技！

異世界 妖魔の君の居城

前回のメタルダーの登場にはさすがのアスラ、ルシフェル、バディンの3人も驚きを隠せなかった。

アスラ「．．．まさか、あのようなロボットまでいようとは．．．バディン「くっ．．．まさか、妖魔の鎧を纏っていたのにも関わらず、腕を切り落とされるとはな．．．」

血祭ドウコク「まさか、バディンがやられるとはな．．．」

バンドーラ「あゝ、頭が痛くなる．．．」

ルシフェル「．．．しかし、実に興味深い．．．いったいどういうことだ？あのロボットの構造だと部品の交換では強化できないようになっていて．．．しかし、前の戦いでは明らかにスペック以上の能力を秘めていた．．．」

クールギン「ルシフェル様、メタルダーの始末は我が手で．．．」

ルシフェル「待て、お前は私の大事な片腕だ、軽々しい真似はやめる。」

クールギン「はは！」

ルシフェル「安心しろ、そろそろシュバリエが戻ってくるはずだ、奴が作り出した新たな妖魔闘士が完成したはずだ、それを見てからだ。」

シタリ「あたしもようやく新しい妖魔アヤカシを完成したから連れて行くよ。」

そう言っつて、ルシフェルはまた研究室へ籠りはじめ、シタリは地球へ向かった。

デカベース

一方こちらでは、剣流星、トップガンダー、スプリンガー、リンを新たに仲間に加わった。

そして現在、GGGのメンバーにも映像を送り、全員でレオナ、牧野先生の発案である「レジェンド大戦」の映像を見ていた。そこではまず天装戦隊ゴセイジャーがゴセイナイトと共に宇宙帝国ザンギヤックと戦い劣勢になっていた、とそこへある男が現れた。

海城「レッドビュート！34番目のスーパー戦隊、ゴセイジャーの諸君だな……」

モネ「あなたは！？初代スーパー戦隊、ゴレンジャーの……」

海城「ああ、アカレンジャー！」

とその時、スゴミンが背後からアカレンジャーに攻撃をかけようとしたとき、別の戦士が防いだ。

エリ「ジャツカー電撃隊の……！」

番場「ビツクワン！33のスーパー戦隊が、まもなく結集する……全員命を捨てる覚悟だ……」

海城「やってくれるな？君達も……」

アラタ「やります、この星を守るためなら……」

ゴセイジャー「……うん！」「」

海城「よし、行くぞ！」

番場「おう！」

その後、別のメンバーが足止めをしている間にアカレンジャー、ビツクワンの連れられ、ゴセイジャーは全スーパー戦隊の場所へ行き、戦闘を開始した、しかし、敵の圧倒的な数に徐々に追い詰められいき、アカレンジャーを始めとするスーパー戦隊が集まりあることをしようとしていた。

アカレンジャー「行くぞみんな！スーパー戦隊のすべての力を結集して、地球を守るんだ！」

全スーパー戦隊「……おう！」「」

勇「我々も力を捧げよう……この星の全ての家族の未来を守るために……」

番外戦士「……おう！！（了解！！）」「」

そう言っつて、別のところで戦っていたメンバーも自分たちの力を一

つにし、その力は光となつてザンギャツクの艦隊を全滅させた、しかし、その代償として、その力はすべて宇宙の果てに消えたという。そして、数年後レンジャーキーとなったスーパー戦隊の力を持つて、この地球へきたのが、先代の海賊戦隊ゴーカイジャーだったということであつた。

牧野先生「．．．これが、後に言われている「レジェンド大戦」です。．．．」

流星「す、すごい．．．」

シグナム「うむ、あれだけの敵を前にしながら、まったく臆することなく．．．」

ヴィータ「敵に向かつて行けるなんてな．．．」

ソルダートJ「うむ、まさしく真の戦士だ。」

はやて「．．．この世界はこれだけの英雄が命を懸けて守ってきたもんやった．．．」

凱「だからこそ、今度は俺達を守るんだ。」

護「そうだよ。」

戒道「ああ、彼らのように．．．」

ルネ「自分たちの力を失つてまで守るなんて、たいした連中だよ．．．」

この記録を見た後、みんなの士気が上がったのは言うまでも無かつた。

試写会の後、全員で訓練をしてた。そんな中シャーリーとマリエルが流星に気になったことを聞いてきた。

シャーリー「そっいえば、流星さん。」

流星「なんですか？」

シャーリー「流星さんの身体は、ロボットなのに部品の交換による強化が出来ないんですよね？」

マリエル「そうね、不思議な構造ですよ。」

とそこへ、スプリンガーと獅子王博士が来た。

獅子王博士「それは僕らから説明しよう。」

スプリンガー「実は古賀博士は、流星ことメタルダーに二つの能力を与えた、一つは戦闘において相手の動きを分析し、なお相手の動きを学習する戦闘回路、もう一つは知性、理性といった人間となら変わらない感情が組み込まれた自省回路だ。」

マリエル「自省回路ってなんですか？」

獅子王博士「うむ、この回路はメタルダーが高い能力を持っていたため古賀博士が組み込んだ回路で、自分で自分の感情を制御できるなにせ古賀博士の考えが「力だけの解決ではなく汝の敵をも愛せよ」という考えだったらしくてね。」

シャーリー「そうですか．．．でももし能力を分析されたらその時点でまずいんじゃない？」

獅子王博士「その心配は無いよ、彼の場合は代わりに、学習により精神力を鍛え、それによって、自省回路の能力を強化することが出来るようにして、自省回路の能力が強化されるとそれとバランスを取るために戦闘回路に精神波が送られ、今度は戦闘力が強化されると学習による性能アップして、動力炉の超重力エネルギーの出力が強化され、強くなるというシステムになっているんだよ。」

スプリンガー「さすが獅子王博士だ、この短期間でメタルダーの構造をここまで理解できる人はそうはいないぜ。」

シャーリー「す、すごいシステムですね．．．」

マリエル「ホント、これならパーツの組み換えによる強化は不要になっってくるわけよね。」

そう言っで、メタルダーのすごさを改めて理解した二人であった。

一方カイムはヴィヴィオと一緒に体力トレーニングを行っていた。カイム「よし、ヴィヴィオちよつと休憩するか？」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言っで、二人は休憩に入った。そこへティア、フェイトが飲み物を持って来た。

ティア「カイクさんもヴィヴィオもお疲れさまです。」  
フェイト「はい、どうぞ。」  
カイク「ああ、ありがとう。」  
ヴィヴィオ「ありがとうティアママ、フェイトママ。」  
ティア「ヴィヴィオも頑張ってるね。」  
ヴィヴィオ「うん、だってパパの子だもん。」  
フェイト「うふふふ、そうねカイクさんの子供だもんね。」  
そう言つて、少し話をしているところへ流星、スプリンガーが来た。  
流星「カイク、ここにいたのか。」  
カイク「流星か。」  
ヴィヴィオ「こんにちは。」  
そう言つて、ヴィヴィオは流星にお辞儀をした。  
スプリンガー「へえ、礼儀正しいじゃないか。」  
ヴィヴィオ「えへへへ。」  
流星「ところで、何をしていたんだ？」  
カイク「ああ、ヴィヴィオの体力トレーニングをしていたんだ。」  
スプリンガー「体力トレーニング？」  
ティア「ええ、ヴィヴィオがパパの子だから強くなるんだって……」  
「  
フェイト「私はあまり賛成できませんけどね……」  
流星「カイクはいいのかい？」  
カイク「ヴィヴィオが自分でちゃんと決めたことなら俺がとやかく言う問題じゃない、俺の言うとおりに練習するようになって条件付だ  
がな……」  
「  
ヴィヴィオ「パパはね、小さい時はとにかく体力や基礎をつけるこ  
とだつて、焦つても強くなれないって、だからパパの言うとおりにす  
る、だってパパに嫌われたくないもん。」  
「  
そう言つて、ヴィヴィオはカイクに抱きついた。  
流星「君達親子は仲がいいんだな……」  
「  
ティア「うふふふ、そうですね。」

カイルは照れたような顔を浮かべ、話題を変えようと流星に声をかけた。

カイル「ところで流星、俺に何かようなのか？」

流星「ああ、君は歴代のレジェンド戦隊の戦闘スタイルをすべて体得しているって聞いたからね、それでその中から僕の戦いの参考になれるものがあるかもって思ったんだ。」

カイル「なるほど．．．確かお前は相手の動きを瞬時に分析して、自分のもの出来るんだったな．．．いいだろう、これからやるヴィヴィオの基礎トレーニングやるからみてる、俺が今ヴィヴィオに教えている正拳アクセルブローを．．．」

そう言つて、カイルはヴィヴィオに基礎トレーニングを始めた。それを流星は一瞬も目を離すことなくすべて見ていた。別のところでは牧野先生、レオナ、アイルが何か話をしていた。

海鳴市 ビルの屋上

シュバリエ「さて、行け、新生妖魔闘士D・キマイラギン！」

D・キマイラギン「はは！」

とそこへシタリが妖魔アヤカシを連れてきた。

シタリ「おや？シュバリエじゃないかい。」

シュバリエ「おお、シタリかそつちは新しい妖魔アヤカシか？」

シタリ「そうだよ、せっかくだ2体で適当に暴れさせようかい？」

シュバリエ「そうだな、では頼む。」

シタリ「決まりだね、それじゃつておいでD・ヤナスダレ．．．」

D・ヤナスダレ「まったく．．．無駄だが、まあいいさ．．．」

そう言つて、D・ヤナスダレ、D・キマイラギンの2体が街中で適当に暴れ始めた。さらにスカルソルジャー、スカルナイトも出してさらに被害が増している。

とそこへ、ゴーカイジャー、六課の前線メンバー（ギンガも含む）、剣流星、トップガンダーが現場に駆けつけた。

カイル「そこまでだ。」

D・キマイラギン「来たか．．．」  
D・ヤナスダレ「まったく無駄だな．．．」  
ジーク「言ってくれるじゃねえか、行くぜ！」  
ゴークカイジャー「『豪快チエンジ！』」  
モバイレーツ「『ゴークカイジャー！』」  
ゴークカyselラー「『ゴークカイジャー！』」  
なのは・フェイト「『セットアップ！』」  
シグナム「『レヴァンティン！』」  
ヴィータ「『アイゼン！』」  
フォワード陣「『『セットアップ！』』」  
流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

カイク「『ゴークキキング！』」  
ジーク「『ゴークイレッド！』」  
フィオネ「『ゴークイブルー！』」  
メルト「『ゴークイイエロー！』」  
エリス「『ゴークイグリーン！』」  
ティア「『ゴークイピンク！』」  
アイク「『ゴークイシルバー！』」  
カイク・ジーク「『海賊戦隊！』」  
ゴークカイジャー「『『ゴークカイジャー！』』」  
カイク「さて．．．」  
ジーク「派手に行くぜ！」

そう言つて、全員で2体の敵とスカルソルジャー、スカルナイトの大軍に向かつていった。

スカルソルジャー「『『ガガガガ！』』」  
スカルナイト「『『カラカラカラ！』』」

雑魚を他のメンバーが相手をしている間にカイクたちが2体のところへ向かつていった。

カイク「ジーク！」

ジーク「ああ、行くぜ！レンジャーキーセット！」

ゴーク「カイサーベル・ゴークイガン」「ファイナルウェーブ！」

ゴーク「カイジャー」「ゴークイスクランブル！」」「」

ジーク「私たちは一斉攻撃をしたがD・ヤナスダレが前に出て、攻撃を受け流した。」

メルト「嘘！？」

フィオネ「攻撃を受け流した！？」

D・ヤナスダレ「ふん．．．まったく無駄だな．．．」

カイク「なら．．．キングソードベガ！」

そう言つて、カイクはキングソードベガで切りかかろうとした、しかし捕らえることが難しい。

カイク「くっ．．．こいつ．．．」

D・キマイラギン「俺もいることを忘れるな、オラ！」

そう言つて、カイクはD・キマイラギンの攻撃で吹き飛ばされた。

エリス「カイク！」

ティア「大丈夫ですか？」

カイク「ああ、こうなつたら別の力を使うしか．．．」

とその時、ダイレンジャーのレンジャーキーが光りだした。

次の瞬間、ゴークイジャー、スバル、ギンガのメンバーは光りの中にいた。

スバル「こ、これは？」

ギンガ「誰かいますよ！」

カイク「だ、誰だ！？」

そこにはダイレンジャー、キバレンジャー、亀夫がいた。

亮「君達が今のゴークイジャーか？」

ジーク「ま、まさか、ダイレンジャーか？」

亮「ああ、そうだ。」

大五「苦戦しているようだな。」

メルト「だって、あいつに攻撃が効かないから．．．」

将児「あの妖魔アヤカシには物理攻撃が通用しないようだから、俺達の力を使え。」

フィオネ「皆さんの？」

大五「ああ、気力技なら受け流すことが出来ないはずだ。」

知「さあ、レンジャーキーを．．．」

ティア「は、はい。」

そう言つてレンジャーキーの力が解放された、さらにスバルとギンガを含め全員に天宝来来の玉とカイクには少し違う宝珠が渡された。リン「あなた達にもあなた達専用の「天宝来来の玉」とそれとゴークイキング君には道士・嘉翊の魂と私達7人の気力を合わせて誕生させた「天宝来来の宝珠」を与えるわ。その天宝来来の宝珠は天宝来来の玉の10倍以上の力があるの。」

コウ「僕たちの代わりに妖魔を倒してよね。」

亀夫「僕も力になる、だから必ず倒んだや。」

そう言つと亀夫はカイクにキングキーを託し、自身もキングキーになった。

亮「さあ、後は全力で戦うだけだ！」

将児「負けるんじゃないぞ！」

知「この人たちなら大丈夫でしょう。」

リン「そうね。」

大五「頼むぞ。」

コウ「僕達に出来るのはここまでだけど．．．」

ジーク「十分だ、ありがとよ。」

アイム「後は、あいつらを倒すだけだ。」

亮「任せませ！後輩達！」

そう言つと全員、元の場所に戻っていた。

D・キマイラギン「な、なんだ？今の光りは．．．」

D・ヤナスダレ「まあ、何をやっても無駄だな．．．」

ジーク「無駄かどうかは、その身で思い知るんだな、行くぜ！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ダイレンジャー！」  
ゴーカイセルラー「キバレンジャー！」  
カイル「キングテクター！」  
スバル、ギンガ「レンジャージャケット！セットアップ！」  
D・キマイラギン「姿が変わった？」  
D・ヤナスダレ「無駄なことだ……」  
カイル「それはどうかな？行くぜ、アイル！」  
アイル「ああ、行くぞ！気力技！」  
カイル・アイル「吼新星乱れやまびこ！デュエツトバージョン！」  
二人は音の攻撃でD・キマイラギンとD・ヤナスダレの2体にダメージを与えた。  
D・キマイラギン・D・ヤナスダレ「ぐあああ！」  
ジーク「まだだ、次はこれだ！大輪剣！」  
ゴーカイジャー「大輪剣気力シュート！」  
スバル・ギンガ「気力ボンバー！」  
ジークたちの一斉攻撃がD・ヤナスダレに致命傷を与えた。  
D・キマイラギン「お、おのれ……」  
そこへ、カイルと元の姿に戻ったアイルが立ちはだかった。  
カイル「さあ、決めるとするか。」  
アイル「ああ、早速試してみるか、レンジャーキー！」  
そう言うと15個のレンジャーキーを取り出し、それを一つに纏め上げゴールドアンカーキーになった。  
アイル「豪快チェンジ！」  
ゴーカイセルラー「ゴーカイシルバー、ゴールドモード！」  
ゴーカイセルラーにセットした瞬間、ゴーカイシルバーは金色の鎧を纏った。  
カイル「レンジャーキーセット！ゴーカイガンセット！ゴーカイデリンガー、ファイナルウェーブモード！」  
ゴーカイデリンガー「ファイナルウェーブ！」

アイム「レンジャーキーセット！」

ゴーカイスピア「ファイナルウェーブ！」

アイム「ゴーカイレジェンドリーム！」

カイク「ゴーカイデリンガーファイナルウェーブ！」

D・キマイラギン「ぐああああ！！！」

D・キマイラギンに二人の攻撃が炸裂し、完全に倒された。

一方、D・ヤナスダレと戦っているジークたちはとどめに入ろうと  
していた。

ジーク「とどめだ！スーパー気力バズーカ！」

そう言うと、どこからともなく巨大なバズーカが現れた

フィオネ「スターカッターセット！」

ティア「天宝来来の玉セット！」

エリス「装填！」

フィオネ「セーフティロック解除！」

メルト「スターソードオン！」

ジーク「よし！スーパー気力バズーカ！」

ゴーカイジャー「ファイヤー！」

D・ヤナスダレ「ば、馬鹿な、こ、こんな無駄な．．．ぐあああああ  
あ！！！」

D・ヤナスダレは完全に倒され、ジークたちも元の姿に戻った。

とあるビルの上

シュバリエ「また新しい力か．．．」

シタリ「まさか、あいつがやられるとはね．．．」

シュバリエ「では、次の舞台へ移行だ！ゴルリンMr．？5号、6

号カモン！」

そう言うと2体のゴルリンMr．？が現れた。

そして、やられた2体を吸収し、同じ姿になった。

ジーク「上等だ！」

アイム「臨むところだ！」

カイク「ならこっちはさつき手に入った力使わせてもらっ、キング  
インストローラー！」

キングインストローラー「大連王！」

ゴーカイセルラー「豪獣ドリル！」

カイク「スバル、ギンガ行くぞ！」

スバル「はい！」

ギンガ「任せてください！」

そう言っつて、スバルとギンガはカイクと一緒に大連王に乗り込んだ。

ゴーカイジャー「完成！ゴーカイオー！」

アイム「豪獣レックス！」

カイク達がD・キマイラギンの相手をし、D・ヤナスダレの相手を  
ジーク達がすることにした。

カイク「はああ！大王剣！」

D・キマイラギン「ぐああ．．．おのれ、これでも食らえ！」

そう言っつて、火炎放射を大連王に食らわせようとした。

スバル「そうはいかないよ、大連王幻霧隠れ！」

そう言っつと大連王は姿を消し、霧の中から幻の爆撃機がD・キマイ  
ラギンを攻撃した。

D・キマイラギン「ぐあああ！」

ギンガ「今です！カイクさん！」

カイク「ああ、行くぞ大王剣！」

カイク・スバル・ギンガ「大王剣！疾風怒濤！」

大連王はD・キマイラギン大王剣の太刀で倒された。

ジークサイド

ジーク「一気に決めるぞ！レンジャーキーセット！」

ゴーカイジャー「完成！マジゴーカイオー！」

ジーク「俺達が動きを封じる、とどめは任せたぜ！」

アイム「ああ、わかった！」

「ゴーカイジャー」「ゴーカイマジバインド!」「」

そう言つて、魔法陣をD・ヤナスダレにぶつけダメージを与えると同時に動きを封じた。

アイム「よし!レンジャーキーセット!」

豪獣レックス「豪獣神!」

アイム「まだだ、レンジャーキーセット!必殺豪獣トリプルドリルドリーム!」

D・ヤナスダレ「ぐあああ!」

D・ヤナスダレは攻撃を受け流すことが出来ずに倒した。

シュバリエ「負けたか...」

シタリ「まあ仕方ないさね、とりあえず今日のところは引き上げるでしょうか。」

そう言つてシタリとシュバリエは姿を消した。

デカベース

ティアナ「へえ、それが気力の元でもある天宝来来の玉ね...」

スバル「これで私のレンジャージャケットの力もさらに磨きがかかったしね。」

エリオ「ところでお父さんの持っている玉は他のものとは少し違ってみたいんですけど...」

カイク「ああ、これは天宝来来の宝珠と違って、天宝来来の玉の10倍以上の力があるそうだ。」

キャロ「やつぱり、お父さんはすごいな...」

アイム「まあ、それだけ期待される負担も大きいというものだ。」

ジーク「まあ、順調に力が解放されているんだ、いい感じじゃねえか。」

そう言つて、カイクたちは六課のメンバーと一緒にダイレンジャーの力を試した。

その後、新たに手に入ったダイレンジャーの力を見た剣流星は中国拳法にも興味を示し、ダイレンジャーの戦闘スタイルを自分のコン

コンピューターにインプットしたのは言っまでも無かった。

### 第37話 放て、気力技！（後書き）

どうも、次はなるべく早く更新できるようにしたいです、次回は過去のスーパージョウの登場させ、一緒に戦わせようと考えていますので、よろしくお願いします。

### 第38話 古代の冥王と偉大なる冒険者達（前書き）

どうも、今回は長い話になってしまいました、本来なら後2年後くらいなのですがイクスを出して、オリジナルの話にします、さらに今回はボウケンジャーのメンバーも一緒に戦います。

### 第38話 古代の冥王と偉大なる冒険者達

デカベース

カイル「ミッドで妖魔の反応が？」

クロノ「ああ、被害は出てはいないんだが、一応調べてもらえないだろうか．．．」

カイル「そういえば、ヴィヴィオが最近ミッドの遺跡の夢を見るって言ってたな．．．」

リンディ「ヴィヴィオが？」

カイル「ああ、今回の件と何か関係がかもしれないな、今回はヴィヴィオも連れて行くか．．．」

ジーク「だがよ、全員で行くってわけには行かないだろう？」

リンディ「そうね、とりあえずゴーカイジャーのメンバーとヴィヴィオには行ってもらうにしろ、問題は他のメンバーよね．．．」

カイル「なら、流星とフォワード陣を借りていいか？」

ジーク「そうだな、とりあえず隊長陣がこっちにいれば何とかなるだろう。」

はやて「しかし、それやとジークさんたちが．．．」

????「それなら、俺達と一緒にいこう。」

とそこへ牧野先生とレオナと一緒に6人の男女が来た。

クロノ「あ、あなた達は？」

レオナ「彼らは、轟轟戦隊ボウケンジャーだよ。」

全員「ええええ！？」

それを聞いて一同驚いた。

その後、明石から説明を受け、みんな納得した。

カイル「．．．なるほど、今回の事件にはプレシヤス．．．もといロストロギアが絡んでいると考えて、こっちに来たのか。」

暁「ああ、改めて自己紹介させてもらう、俺は明石暁、ボウケンレツドだ。」

真墨「俺は伊能真墨、ボウケンブラックだ。」

蒼太「僕は最上蒼太、ボウケンブルーさ。」

菜月「私は間宮菜月、ボウケンイエローだよ。」

さくら「私は西堀さくら、ボウケンピンクです。」

映土「俺様は高丘映土、ボウケンシルバーだ。」

牧野「明石君たちが一緒なら問題ないでしょう。」

牧野先生の言葉にクロノとリンディは顔合わせて納得した。

クロノ「そうですね、これなら心配は無いですよ。」

リンディ「ええ、そうね、それでは明石さん、よろしくお願ひします。」

暁「ああ、それじゃカイル、ジーク、俺達のレンジャーキーを．．．

カイル「ああ、わかった先輩。」

そう言つて、ボウケンジャーのレンジャーキーを一旦返した。

真墨「よし、これで戦えるぜ。」

菜月「真墨、張り切ってるね。」

真墨「ああ、久しぶりだからな、菜月。」

蒼太「それじゃチーフ、さっそく場所の特定をしますね。」

暁「ああ頼む、蒼太．．．俺の勘だが、プレシヤス．．．いやロス  
トログアが関係しているとなると、おそらく動いているのはルシフ  
エルだろうな．．．」

さくら「そうですね、あの男なら動きそうですね。」

映土「またあいつか．．．あの時、倒せなかったのは歯がゆいな。」

菜月「まあまあ、映ちゃん。」

牧野「それじゃ、明石君頼みますよ。」

暁「ええ、任せてください牧野先生、ミスターボイス。」

その後、話し合いの結果、ゴーカイジャー、ボウケンジャー、剣流星、  
フォワード陣4名、カリム、シャツハ、ヴィヴィオが行くことにな  
った。

ミッドチルダ マリンガーデン遺跡

蒼太「チーフ、反応があったのはこの辺りです。」

カリム「まさか、ここで反応があるなんて・・・」

カイル「こんなところに遺跡があるなんて・・・」

暁「ここは古代ベルカのガレアの王に関する重要なものが眠っている。」

カリム「明石さん、どうしてそれを知っているんですか？」

さくら「私達は古代ベルカの王族の方々と面識があるんです。」

蒼太「まあ正確には言えば、歴代のスーパー戦隊のメンバーは全員だけだね。」

カイル「そうか、俺のゴーカイキングのレンジャーキーやキングテクターも古代ベルカの協力で作られたって言ってたな。」

そんな会話をしていると待ち合わせしていたユーノとルーテシアが来た。今回の一件を連絡したら協力したいと申し出た。

ユーノ「すみません、遅くなって。」

ルーテシア「エリオ、キャロ、ヴィヴィオ、それにみんなも元気だった？」

キャロ「ルーちゃんも久しぶりだね。」

ヴィヴィオ「ルールー元気だった？」

そう言つて、ルーテシア、キャロ、ヴィヴィオは話し始めた。

ユーノ「・・・元気そうだね、カイル。」

カイル「ああ、久しぶりだな・・・」

二人は顔を合わせてそう言つた、以前は年上ということもあり敬語を使っていたのだが、なのは達との関係をユーノに話した後からカイルは普通に話すように頼んだ。（ちなみに話した後、ユーノは複雑そうな顔したあと笑顔でなのは達を頼むとカイルに頼んだ。）

カイル「ところでユーノ、この遺跡についてなんだが・・・」

ユーノ「うん、実は無限書庫と牧野先生達が持っていた資料を照らし合わせた結果、ここには約1000年前の古代ベルカのガレア王国の王である通称冥王イクスヴェリアが眠っているって・・・」

真墨「よく知っているな、その通りだ。」

映士「まあ、ある意味ロストロギアとも言ってもいい代物だな．．．

「とそこへ、急激な妖魔反応が発生し、そこからルシフェル、アスラ、ガウ、クールギンが現れた。」

ルシフェル「おや？誰かと思えば、ゴーカイジャー、メタルダーに若手の魔導師ども．．．」

暁「それだけじゃないさ、ルシフェル、アスラ、随分と久しぶりだな。」

アスラ「き、貴様ら、ボウケンジャーども！？」

菜月「さすがに菜月たちのこと覚えてたみたいだね。」

さくら「あなた達は、ここでいったい何をしているのですか！？」

ルシフェル「知れたことを、冥王イクスヴェリアの回収だ、これのコアを作るためのな．．．」

そう言つて、複数の女性が現れた。

カイク「な、なんだこれは！？」

映士「！？ま、まさかこれは．．．明石！」

暁「ああ．．．ルシフェル、それはマリアージュだろう。」

ユイノ「ええ！？あの古代ベルカ時代に作られた人間の屍を利用した兵器．．．」

カリム「なぜあなたがそれを持っているのですか！？」

ルシフェル「ああ、これはスカリエッティと結託して、これを目覚めさせた男を殺して、我が配下にしたんだ。」

ルーテシア「な、なんてやつらなの．．．」

ティアナ「こいつらに常識は通用しない．．．」

ルシフェル「さて、おしゃべりは終わりだ、このマリアージュとついでに私のが新たに作り上げたものの調整をさせてもらおうか．．．

「そう言うと、あるロングライフルを取り出した、さらにレンジャーキーに似たものを出した。」

スバル「え、そ、それって、レンジャーキー!?」

シヤツハ「どうして、妖魔がレンジャーキーを・・・」

ルシフェル「これはアンチレンジャーキーだ。」

蒼太「!?チーフ、あれは、リュウオーン、闇のヤイバ、それにク

エスターのガイとレイじゃ・・・」

暁「ああ・・・ルシフェルお前、さては力だけを抽出し、レンジャーキーと同じものを作ったな・・・」

ルシフェル「さすがは明石暁、不滅の牙、ボウケンレッドだな、その通りだ、お前達にはこいつらの相手もしてもらおう。」

そう言つとライフルにアンチレンジャーキーをセットして発射し、実体化させた。

リュウオーン「・・・・・・・・・・」

闇のヤイバ「・・・・・・・・・・」

ガイ「・・・・・・・・・・」

レイ「・・・・・・・・・・」

ジーク「どうやら、屍同然らしいな・・・」

アスラ「それでは、行くぞ。」

そう言つて、4人は後をマリアージュとアンチレンジャーキーで召喚したリュウオーンらに任せて遺跡の中へ入っていった。

アイム「ここは俺がやる、みんなは先へ行け!」

映士「俺様も行くぜ、後輩!」

エリオ「僕達も残ります。」

キャロ「お父さんたちは、早く遺跡の中へ。」

そう言つて、フォワード陣が前に出た。

暁「ここは映士達に任せて、俺達は奴らを追うぞ!」

カイル「わかった、頼む。」

ティア「気をつけて!」

真墨「映士!頼むぜ!」

そう言つて、他のメンバーは遺跡の中へ突入していった。

映士「行くぜ!ゴーゴーチエンジャー、スタートアップ!」

アイム「豪快チェンジ！」  
ゴークアイセルラー「ゴークアイジャー！」  
フォワード陣「セツトアップ！」  
全員変身を完了させ、敵に向かって行った。

マリンガーデン遺跡内部

突入したメンバーだが、そこでガウとクールギンさらにシュバリエが立ちはだかった。

流星「クールギン！」

クールギン「ルシフェル様の元へいかせん・・・」

ガウ「ここから先へ行きたかったら、私たちを倒してから行くんだね。」

シュバリエ「その通りだ、相手をしてもらおうか。」

流星「ここは僕が相手をする。」

真墨「よし、俺も残るぜ。」

菜月「真墨、菜月もやるよ。」

エリス「私も残るわ。」

メルト「みんなは先へ早く！」

ジーク「ああ、頼むぜ！」

そう言つて、残ったメンバーはさらに奥へと進んだ。

流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

真墨・菜月「レディ、ボウケンジャー、スタートアップ！」

エリス・メルト「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴークアイジャー！」

真墨「行くぜ！」

そう言つて、変身して敵に向かっていった。

さらに奥へと進んだメンバーは今度はブラジラ、バイオハンターシルバとスカルソルジャーの大群が立ちはだかった。

ブラジラ「……………」  
シルバ「……………」  
スカルソルジャー「カラカラカラ！」  
カイク「どうやら、あの二人もアンチレンジャーキーで召喚されたみたいだな……………」  
さくら「暁さん、ここは私達が食い止めます。」  
蒼太「久しぶりに行きますよ。」  
暁「ああ頼む、さくら、蒼太。」  
フィオネ「ティアさん、私たちも。」  
ティア「ええ、カイクさんたちは早く最深部へ！」  
カイク「わかった、頼む。」  
ヴィヴィオ「ティアママ、頑張つて！」  
そう言つて、カイク、ジーク、明石、カリム、シャツハ、ヴィヴィオ、ルーテシア、ユーノは奥へ進んでいった。  
さくら「行きます！」  
さくら・蒼太「レディ、ボウケンジャー、スタートアップ！」  
フィオネ・ティア「豪快チェンジ！」  
モバイレーツ「ゴーカイジャー！」  
ティア「ここから先は私達が相手です！」  
そう言つて、敵の撃破に向かった。  
その後、残りのメンバーはようやく最深部へ到着した。  
ルシフェル「来たか……………」  
そこにはルシフェルとアスラがいた。  
暁「…………どうやら、俺達が来るのを待っていたようだな。」  
アスラ「その通りだ、出でよ、D・デスペラート。」  
D・デスペラート「……………」  
ジーク「な、なんだこいつは？」  
暁「お前達、デスペラートを復活させたのか？」  
カリム「明石さん、あの怪物を知っているんですか？」  
暁「パンドラの函は知っていますよね？」

シャツハ「はい、この世の全ての災厄が入ったといわれるロストロギアですよね……」

暁「あいつは、その災厄が形を成した存在だ。」

ユーノ「パンドラの函の災厄が実体化した存在……」

カイク「……相手が誰であれ、やるしかない。」

ジーク「ああ、行くぜ！」

暁「レディ、ボウケンジャー、スタートアップ！」

カイク・ジーク「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

シャツハ「逆巻け、ヴィンデルシャフト！」

ルーテシア「ガリユー！お願い！」

ガリユー「(コク)」

カイク「カリム、ユーノ、ヴィヴィオを頼む！」

カリム「わかりました。」

ユーノ「頼みます。」

そう言つて、少し離れた。

カイク「行くぞ！キングソードベガ！」

ボウケンレッド「サイブレード！」

ジーク「派手に行くぜ！」

そう言つて、全員で敵に向かっていった。

カイクとジークはルシフェルとアスラに向かっていった。

カイク「はあ！」

ジーク「オラ！」

ルシフェル「小賢しい……ならば、エナジーアロー！」

そう言つて、ジークの方に紋章術で攻撃を仕掛けてきた、その衝撃でジークは扉の向こうに吹き飛ばされた。

ジーク「ぐああ！」

カイク「ジーク！……こうなつたら、ゴセイナイト！」

ゴセイナイト「わかった。」

そう言つとヴィヴィオの守りに入っていた、ヘッダー状態のゴセイ

ナイトにレンジャーキーを渡し、ゴセイナイトの状態に戻した。  
ゴセイナイト「ここからは私のターンだ！」

そう言うとゴセイナイトはアスラたちに向かって行った、その間にルシフェルは奥へと向かっていた。

一方、吹き飛ばされたジークはそこで横たわる一人の少女を見つけた。

ジーク「こ、ここは？．．．この子供は誰だ？」

???「うーん、だ、誰ですか？」

ジーク「俺の名はジークだ、お前さんの名前は？」

???「私の名はガレア王国の王、イクスヴェリアです。」

ジーク「何、お前さんがマリアージユをコアを作り、コントロールできる力を持つ、冥王の呼び名をもつ存在か．．．」

イクス「ち、違います、私はたしかにコアを作る力を持つてはいますが、コントロールすることは出来ません．．．それにマリアージユも私も存在してはいけません．．．」

ジーク「．．．何かわけありのようだな、聞かせてもらおうか？」

イクス「はい．．．」

その後、ジークは今の現状を話した後、イクスから詳しい事情を聞きだした。

ジーク「なるほどな、お前さんは自分の力のために眠りについたのか．．．」

イクス「はい．．．だから、私はいてはいけない存在なんです．．．」

ジーク「それは違うぜ、この世に生まれた以上は、誰にだって生きる権利はあるし、幸せになる権利だってあるさ。」

イクス「．．．で、でも．．．」

ジーク「お前さん、親との思い出は？」

イクス「余りありません．．．」

ジーク「だったら、俺がお前の親になってやるよ．．．」

イクス「ジークさんが、お父様．．．」

ジーク「迷惑か？」

イクス「い、いえ、そんなこと無いです、そ、その、ちょっと嬉しかっただけだったので．．．」

そう言つて、イクスはジークに駆け寄ろうとしたが、フラツと倒れそうになつたのでジークが慌てて支えた。

ジーク「大丈夫か？」

イクス「は、はい、大丈夫です、お父様．．．／／／」

そう言つと恥ずかしそうだが嬉しそうにジークのことをそう呼んだ。とそこへ、ルシフェルが来た。

ルシフェル「おや？どうやら、冥王のお目覚めのようなな、まあいいさ、私が興味があるのは貴様の力だけだ、どうせマリアージュのコントロールはこいつには出来ないしな．．．」

ジーク「てめえ、やっぱり最初からすべて知つてやがつたのか！？」

イクス「お父様、彼はいつたい．．．」

ジーク「奴は上級妖魔のルシフェルだ．．．」

イクス「妖魔．．．やはり、この時代にもいたのですね．．．」

ルシフェル「さて話は終わりだ、力だけ頂こうか．．．」

ジーク「俺の娘に手を出すんじゃねえ！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ジークはすぐにゴーカイレッドに姿を変えた。

イクス「お、お父様の姿が変わつた．．．」

ルシフェル「やはり、カイクと同じだな貴様も．．．しかし、いいのか？みたところあの冥王の身体はおそらくあと少しでまた眠りにつく。」

ジーク「な、なんだと！？」

ルシフェル「やはり、人間とは、感情に流されやすい生き物だな．．．

．まあそのおかげで信じられないくらい力を発揮することが出来るのだからがな．．．グレムリンレアー！」

そう言つと無数の餓鬼が現れて、ジークを襲つてきた。その間にイクスに近寄り、ルシフェルは力を吸収した。

イクス「お、お父様．．．」

ジーク「イクス！邪魔だ、レンジャーキーセット！」

ゴーク「カイサーベル・ゴークイガン」「ファイナルウェーブ！」

ジーク「ゴークイスクランブル！」

ジークは一斉に大量の餓鬼を粉碎した。

その後、ジークはすぐにイクスに駆け寄った。

ジーク「イクス！」

イクス「お、お父様．．．また起きたら、そう呼んでもいいですか？」

ジーク「ああ、お前は俺の娘だ。」

イクス「ありがとうございます．．．」

そう言つて、また眠りついた。それをジークは抱えてルシフェルを睨みつけた。

ジーク「ルシフェル、てめえ．．．」

ルシフェル「おいおい、私のせいではない、元々これだけの眠りついていたのだ身体不全に陥るのは当然だ、まあ強力な生命発生装置があれば完全な状態で目覚めさせることが可能だがな．．．」

そう言つて、ルシフェルは姿を消した、それと同時にそれぞれの敵も姿を消した。そして、全員外に出て対峙した。

ルシフェル「さて、D・デスペラートよ、お前にこの力を与えよう。」

「  
そう言つて、イクスから奪った力をD・デスペラートに与えた。

D・デスペラート「．．．．．」

その瞬間、外のメンバーが全滅させたマリアーヂュがまた現れた。

ジーク「．．．フォワード陣、ここは俺たちがする、イクスを頼む．

．  
」

ティアナ「わかりました。」

そう言つて、フォワード陣や他のメンバーを下がらせ、ゴークイジャー、ボウケンジャー、ゴセイナイト、メタルダーが前に立った、その時、ジークの持っていたズバーンも大剣人モードになった。

ズバーン「ズバーン！」

菜月「ズバーン、久しぶり。」

暁「また一緒に戦ってくれ、ズバーン。」

ズバーン「ズンズン（コクコク）」

相手はD・デスペラート、マリアーヂュ、アンチレンジャーキーで召喚されたブラジラ、シルバ、リュウオーン、闇のヤイバ、ガイ、レイと大量のスカルソルジャーとスカルナイトが立ちはだかった。そしてアスラ・ルシフェルたちは高みの見物をしていた。

ティア「こ、こんなにたくさんいるなんて・・・」

暁「こいつはちよつとした冒険だな。」

フィオネ「冒険？」

暁「ああ、冒険者というものはピンチの時こそ、力を発揮する。」

ジーク「まあ、俺達も一応海賊戦隊だからな、冒険者ではあるな、気に入ったぜ先輩。」

カイム「行くぞ！」

そう言つて、名乗りを上げ始めた。

暁「熱き冒険者！ボウケンレッド！」

真墨「迅き冒険者！ボウケンブラック！」

蒼太「高き冒険者！ボウケンブルー！」

菜月「強き冒険者！ボウケンイエロー！」

さくら「深き冒険者！ボウケンピンク！」

映土「眩き冒険者！ボウケンシルバー！」

ズバーン「ズバーン！」

暁「果て無き冒険スピリッツ！」

ボウケンジャー・ズバーン「轟轟戦隊、ボウケンジャー！！」（ズバーン！！）

ゴセイナイト「地球を浄める宿命の騎士！ゴセイナイト！」

カイム「ゴーカイキング！」

ジーク「ゴーカイレッド！」

フィオネ「ゴーカイブルー！」

メルト「ゴーカイイエロー！」

エリス「ゴーカイグリーン！」

ティア「ゴーカイピンク！」

アイム「ゴーカシルバー！」

ゴーカイジャー「海賊戦隊、ゴーカイジャー！」

ゴーカイジャー・ボウケンジャー・ゴセイナイト・ズバーン

我ら！スーパー戦隊！！（ズバーン！！）

それを見た他のメンバーは、驚きと一緒に感激の声を上げた。

スバル「すごい！」

ティアナ「こんな光景めつたに見れるもんじゃないわよ！」

エリオ「今回は僕達の出番はなさそうですね。」

キヤロ「頑張つて、お父さんたち。」

ヴィヴィオ「パパ、ティアママ、エリスママ達、みんな頑張れ！」

カイク「さて・・・」

ジーク「派手に行くぜ！」

暁「アタック！」

そう言つて、全員で敵に向かっていった。

まず、さくら、蒼太、ティア、フィオネの4人がシルバ、ブラジラ、闇のヤイバに向かっていった。

さくら「ハイドロシューター、シューターハリケーン！」

蒼太「ブrouナックル、ナックルキャノン！」

ティア・フィオネ「ゴーカイキャリバー、レーザースラッシュ！」

今の一撃で敵は倒され、その直後にキーの状態に戻った。

真墨、菜月、メルト、エリスサイド

4人はリュウオン、マリアージュに向かっていった。

真墨「ラジアルハンマー、ハンマーブレイク！」

菜月「バケットスクーパー、スクーパーファントム！」

メルト「ゴーカイサーベル、ゴーカイスラッシュ！」

エリス「ゴーカイガン、ゴーカイブラスト！」  
4人も敵を全滅させた。

映士、アイム、ゴセイナイト、メタルダーサイド

このメンバーはガイ、レイ、さらにスカルナイトを相手にしていた。

映士「サガスピア、サガスラッシュ！」

アイム「ゴーカイスピア、ゴーカイシューティングスター！」

ゴセイナイト「レオンレイザーソード、ナイトメタリック！」

メタルダー「メタルトルネード！」

スカルナイト「カラカラカラ！！！！」

映士達は、一気に敵を全滅させた。

カイク、暁、ジーク、ズバーンサイド

カイクがスカルソルジャーの大群に一人で対峙していた。

カイク「ゴーカイデリンガー、エネルギーチャージ！ゴーカイデリンガーファイナルキャノン！」

スカルソルジャー「ガガガ！！！！」

100体近くいたスカルソルジャーを全て撃破した。

ジーク「さすがカイクだぜ。」

暁「俺達も行くぞ、ボウケンジャベリン、ジャベリンクラッシュ！」

ジーク「行くぜ、ゴーカイダブルスラッシュ！」

ズバーン「ズババン！！」

D・デスペラート「……………！！」

D・デスペラートは今の一撃で吹き飛ばされた、全員が集結した。

ルシフェル「馬鹿な、どういうことだ、昔我々と戦った時よりも強くなっている……………」

暁「教えてやるう、カイクやジークたちが俺達のレンジャーキーを受け継いだだけじゃなく、俺達の持っていた力も受け継いだんだ、

だからカイクたちが強くなると俺達も強くなるのさ。」

アスラ「な、なんだと！？」

ルシフェルとアスラは驚きを隠せなかった。

ジーク「さつさと片付けるぜ。」

暁「デュアルクラッシュャーだ！アクセルテクター、ドリルヘッド！」

映士「サガスナイパー！」

ジーク「ゴークイストリーマー、ゴークイキャリバージョイント！

レンジャーキーセット、マキシムモード！」

ゴークイストリーマー「マキシムモード！」

カイク「レンジャーキーセット、ゴークイガンセット、ゴークイデ

リंगाーファイナルウェーブモード！」

ゴークイデリंगाー「ファイナルウェーブ！」

ゴークイジャー「「レンジャーキーセット！」」

ゴークイサーベル・ゴークイガン・ゴークイスピア「ファイナルウ

ェーブ！」

ゴセイナイト「ナイトダイナミックカード、断罪のナイツテイクパ

ワー……」

暁「ゴーク！」

映士「サガストライク！」

ジーク「ファイヤー！」

カイク「ゴークイデリंगाー、ファイナルウェーブ！」

ゴークイジャー「「ゴークイスクランブル！」」

カイク「ゴークイスーパーノヴァ！」

ゴセイナイト「パニッシュ！」

全員の一斉攻撃でD・デスペラートは完全に粉碎された。

ルシフェル「これで終わりと思うな、こうなったらこちらの奥の手

を使わせてもらう、D・クラーゲン！」

D・クラーゲン「キイキイキイ！」

D・クラーゲンはマリアージュの残骸をD・デスペラートに吸収さ

せてから巨大化させた、そのためD・デスペラートの身体が少し変

化をして、体中から様々な武器が出てきた。

カイク「こ、これは!?!」

ルシフェル「これこそ私が遺伝子シンセサイザーで改良したD・クラーゲンの本当の力だ、ありとあらゆる生物を一つに纏め上げさらに強くする力だ、ではまた会おう。」

そう言つて、ルシフェル、アスラ、クールギン、ガウ、シュバリエはアンチレンジャーキーを回収し、撤退した。さらに置き土産といわんばかりにスカルソルジャーの大群を出した。

映士「くそ！また逃げられたか。」

暁「今それよりもデスペラートを倒すしかない、カイクム！」

カイクム「ああ、スバルお前達もこい！」

スバル「はい！」

そう言つて、フォワード陣とルーテシアが来た。

カイクム「ルーテシア？」

ルーテシア「私も一緒に戦わせて、お兄ちゃん。」

カイクム「．．．わかった、それじゃスバル、サイレンビルダーのキングキーを。」

スバル「はい！」

そう言つて、カイクムにキングキーを渡した。

カイクム「それじゃ行くぜ！キングインストラー！」

キングインストラー「ダイボウケン、サイレンビルダー、ダイボイジャー！」

暁「よし、俺達はダイボウケンとサイレンビルダーで行く、カイクムたちはダイボイジャーで応戦してくれ。」

カイクム「わかった。」

そう言つて、カイクム、フォワード陣、ルーテシアはダイボイジャーに乗り込んだ。

ゴーカイジャー「完成！ゴーカイオー！」

アイクム「完成！豪獣神！」

ゴセイナイト「ゴセイグランド！」

総勢6体のロボットが現れた。

真墨「明石、久しぶりだなこの感じ。」

暁「ああ、行くぞ！」

ボウケンジャー「フアーస్తుギア・イン！」

アイルムとゴセイナイトはスカルソルジャーの大群を相手にし、他のメンバーでD・デスペラートに向かっていった。

アイルム・ゴセイナイト

ゴセイナイト「シールオンキック！」

アイルム「はあ！」

スカルソルジャー「ガガガ！」

アイルム「ゴセイナイト、一気に決めるぞ！」

ゴセイナイト「わかった！」

アイルム「レンジャーキーセット！必殺豪獣トリプルドリドリーム！」

ゴセイナイト「グランドラスティック！」

スカルソルジャー「ガガガ！」

スカルソルジャーは全滅した。

ゴーカイジャー・ボウケンジャー

D・デスペラートからの攻撃にかなり苦戦をしていた。

ゴーカイジャー「うわああ！」

暁「まだだ、カイル！」

カイル「わかった！キングインストラー！」

キングインストラー「ゴービークル！」

カイルがキングキーを通じて、他のNo.6～No.10までの「ゴービークル」を呼び出した。

ボウケンジャー「究極轟轟合体！」

新たに現れたビークルとダイボウケンが全て合体した。

ボウケンジャー「アルティメットダイボウケン合体完了！」

暁「カイル、お前達も意識を集中させる、それで俺達のマシンの真の力が発動する。」

カイクム「わかった！」

そう言うのと全員意識を集中させた瞬間、ロボットのパワーが一気に急上昇した。

カイクム「こ、これは!?!」

ティアナ「す、すごい、パワーがどんどん上がってます。」

映士「それがネオ・パラレルエンジンの真の力だ！」

エリオ「ネオ・パラレルエンジン？」

キャラ「何ですかそれは？」

暁「ネオ・パラレルエンジンは、元々はロストロギアに込められた人の想いを現実のものとして力を発揮する、しかし、搭乗者が意識を集中させることでロストロギア無しで自身の想いの力で無限の力を発揮する。」

スバル「それがネオ・パラレルエンジンの力・・・」

ルーテシア「ロストロギアにも人の想いが込められている・・・」

ジーク「さあ、ここから反撃開始だ！」

そう言うて、全員で総攻撃を始めた。

映士「ビルダークラッシュ！」

ボウケンジャー「オーバートップギア・イン、アルティメット  
ブラスター！」

ゴーカイジャー「ゴーカイスターバースト！」

カイクム・5人「ハイパーチャージ、アドベンチャーダブルスク  
リュー！」

D・デスペラートは今の攻撃でかなり怯んだ。

暁「今だ！カイクム！」

カイクム「了解！」

そう言うのとダイボイジャーはゴーゴーボイジャーに変形し、さらにその上にゴーカイオーに乗った。

暁「ジーク！受け取れ！」

そう言うのと轟轟剣をゴーカイオーに渡した。

ジーク「使わせてもらっぜ！」

暁「行くぞ！ズバーン！」

ズバーン「ズバーン！」

そう言うとズバーンは巨大化し、剣の状態になってアルティメットダイボウケンがそれを持った。

ボウケンジャー「「大聖剣斬り！！」」

ズバーン「ズババババーン！！」

映士「トリプルリキッドボンバー！」

D・デスペラートに攻撃を与え、さらにゴーゴイジャーとその上に乗ったゴカイオーが轟轟剣を持って突っ込んできた。

カイク「これでとどめだ！」

ジーク「派手に行くぜ！」

ゴカイジャー・5人「「ゴカイライディングアドベンチャードライブ！！」」

D・デスペラートは今の攻撃で完全に倒された。

ジーク「イクス．．．」

ジークはみんなに聞こえないような声で囁いた。

その後、イクスを連れて地球に戻ったが、マリエル、シャマル、エリスの診断結果、今の医療技術では目覚めさせることが出来ないとわかった。

ジーク「くそ！何とかならねえのかよ！」

菜月「大丈夫だよ、ジーク君、はいこれ。」

そう言つて、あるものを渡したそれはなんとレムリアの太陽だった。

マリエル「これは？」

レオナ「それはレムリアの太陽つて生命発生装置で、イエローちゃんを現代に生かしたレムリア文明のロストロギアだよ。」

リンディ「現代に生かしたつて、まさか菜月さん、あなたは．．．」

真墨「ああ、菜月は古代レムリア人だ、両親の手でそのレムリアの太陽を使い眠りについたんだ．．．菜月に未来で幸せになつてもらうためにな．．．」

カリム「そうだったんですか……」

シャツハ「いいご両親ですね……」

さくら「菜月、いいんですね？」

菜月「うん、さくらさん、この子にも幸せになる権利があるはずだから……」

蒼太「菜月ちゃん……」

映士「そうだな……どうやら冥王って異名も迷信だったみたいだしな……」

暁「伝承とはそういうものが多いものだ。」

そう言つて、マリエルにレムリアの太陽を渡した、それをイクスのところへ置き発動させたと強大なエネルギーがイクスの身体に注がれ、機械の方も正常値になるのもそう時間がかからなかった。

イクス「……う、うん……ここは？」

ジーク「イクス！目覚めたか？」

イクス「お、お父様……わ、私は……」

戸惑いながらもイクスはジークに抱きついた。

カイル「……よかったな、ジーク。」

マリエル「すごいロストロギアですね、ところで本当にこちらで預かっていいんですか？」

菜月「ええ、レムリアの太陽は平和利用のために使うべきものなんですよ。」

暁「菜月の言うとおりだ、ロストロギア、その真の意味は、未来へと受け継がれる人類の生きた証、常に未知の世界を求める冒険者の魂だ。」

カイル「先輩……」

ユーノ「……たしかに今なら危険な物ってだけじゃないってわかる気がする。」

クロノ「……今更ながら、ロストロギアの真の意味を理解した気がするな……」

リンディ「そうね……わかりました……それではこのレムリア

の太陽は私達が責任を持って預かります。」  
カリム「はい、絶対に悪用なんてさせません。」  
クロノ「ああ、こういった力はそういう目的のために使うべきものだな……。」  
シャツハ「明石さん、ロストロギアの本当の意味を教えてくださいませんか。」  
「ありがとうございます。」  
はやて「ホンマ、今回は何かから何までありがとうございます。」  
牧野「とにかくお疲れ様でした、皆さん。」  
さくら「ありがとうございます、牧野先生。」  
蒼太「これで僕達の力も解放させてもいいかな。」  
真墨「何言ってるんだ、元からそのつもりだろう。」  
映土「まあ、後輩たちの実力を確認できたし、俺様は満足だな。」  
菜月「チーフも今のゴーカイジャーは合格？」  
菜月との質問に明石は頷いた。  
暁「ああ、こいつらはまさにマーベラスたちの後継者で、俺達が認めた立派な冒険者だ、そうだな、さくら？」  
さくら「はい、私達の後輩にも相応しいですね、暁さん。」  
カイル「ありがとうございます、先輩達。」  
カイルは明石達に礼を言った。  
暁「まあ何かともあれ、これで本当にミッション完了だな。」  
明石の一言で今回の事件は幕を閉じた。  
主要メンバーはボウケンジャーからレムリアの太陽を預かった。  
その後、ボウケンジャーたちから大いなる力を解放してもらい、レオンジャーキーを返還された後、ささやかながらイクスの歓迎会を行った、その中でイクスにはやては自分のことを「お母様」呼んでもらうようお願いした。歓迎会の後、ボウケンジャーは元の世界に戻り、イクスはジークの正式な養子になりイクスヴェリア・グラードとなった、さらにイクスはすぐにヴィヴィオとも仲良くなり、ヴィヴィオと同じ学校に通うことになった。

### 第38話 古代の冥王と偉大なる冒険者達（後書き）

どうも今回はちょっとした特別な話にしました、イクスは眠らせずにジークの娘になってもらいました、そして、ヴィヴィオと同じ年扱いで行きます、さらに今回から敵が使うアンチレンジャーキーというものを今後も出して行きたいと思います。それでは次回は少しほのぼのとした話にしたと思っています、次回は本当に早めに更新したいです。

### 第39話 ある休日の訓練（前書き）

どうも、最近の忙しさで更新が遅れてしまいました、今回は短めで些細な日常を描きました。

### 第39話 ある休日の訓練

デカベース 食堂

前回のミッドの事件の後、ジークの養子になったイクスはヴィヴィオと同じクラスになり、リオとコロナとも友達になった、そして、今二人が休みのある朝食の時間のこと。

ヴァイス「へえ、やっぱり旦那達もすっかり有名になったな。」  
シグナム「何を見ているんだ？」

ヴァイス「あ、シグナム姉さん、これを見てくださいよ。」  
そう言つて、ヴァイスはシグナムに見ていた雑誌を渡した。

その雑誌に群がるようにゴークイジャー以外のメンバーが集まった。ヴィータ「なにになに、噂の海賊戦隊ゴークイジャー特集スペシャル」、つてカイクたちのことじゃんか。」

シヤマル「やつぱり、ミッドでも地球でも注目されますね。」  
リンディ「仕方が無いわ、伝説の英雄たちの力を使っている以上、注目されるのは必然よ。」

はやて「ところで、何が書いてあるんや？」  
シグナム「はい、え」と、「今回は戦士達の素顔に迫る」と書いてあります。」

なのは「それじゃ、カイクさんたち本人のこと書いてあるのかな？」  
その言葉が気になり、みんなもその雑誌に目を通した。

フェイト「そうみたいだよ、え」とまずはティアさんからだね、「ユースティア・アストレア、ゴークイジャーのゴークイピンクで天使の力を受け継ぎゴークイキングことカイクさんとは家族のような関係で、メンバーの中では最年少ながら芯はしっかりしているが時たま能天気なところがある。」だつて。」

リンディ「たしかにそうね、時たま天然なところがあるものね、彼女は。」

なのは「次は、エリスさんだね」「エリス・フローラリア、ゴークイ

ジャーのゴーカイグリーンで医者免許を持ち、スタイル抜群で美人だが、男に関してはゴーカイキングことカイクムにしか目を向けない。「って書いてあるよ。」

カイクム「それだけカイクムさんを愛しているってことですね。」

はやて「次はメルトさんやな」「メルト・ログテイエ、ゴーカイジャーのゴーカイイエローで元は故郷の酒場の女主人で、面倒見がいい博愛主義者、ゴーカイレッドことジークさんとゴーカイキングことカイクムさんとは古くからの付き合い。」「やて。」

シヤマル「やっぱり元娼婦だつてことは書かれていませんね。」「シヤツハ「さすがにそれはまずいでしよう。」「。」「

シャリー「まあ気を取り直して、次はフィオネさんですね。」「フィオネ・シルヴァリア、ゴーカイジャーのゴーカイブルーで元は故郷の近衛騎士団長を務めていて、生真面目な性格で融通が利かないが戦闘能力においては女性メンバーの名ではピカイチである。」「ですつて。」

ヴィータ「そうだよな、実力はカイクムやジークたちが信頼するほどだもんな。」「

マリエル「え」と、次はジークさんですね。」「ジークフリード・グライド、ゴーカイジャーのリーダー格のゴーカイレッドで故郷にいた頃から組織の頭としての立場にいて、実力もさることながら判断力にも優れている、ゴーカイキングことカイクムさんとはその組織の下で働いていた頃からの付き合いで、お互いに唯一無二の親友である。」「ですつて。」

はやて「やっぱり、ジークさんも結構でっかく載ってるわ。」

リン「次は、アイクさんですね、え」と「アイク・アストレア、ゴーカイジャーのゴーカイシルバーでゴーカイキングことカイクムさんの実の兄で、昔のある事件で生き別れになっていたが、再会した時は、色々と袂を分かつことになっていたが、最終的には弟と一緒に戦う道を選んだ。」「だそうです。」

リン「なるほど、彼らにも色々あったということか。」「

リンディ「次はいよいよカイクくんね、「カイク・アストレア、ゴーカイジャーのもう一人のリーダーにしてゴーカイジャー最強の男で、歴代のスーパー戦隊の力を全て使うことが出来るゴーカイキング、銀河一刀流の免許皆伝であるが、元はナイフを主体に戦うのが得意で長剣はあまり得意ではなかったが先代のデカレンジャーの司令官でもあり、剣の師匠でもあるドギー・クルーガーから直々の修行のおかげで今の剣のスタイルを身に付け、さらに自分の最愛の娘に対しては厳しくも優しく接している。」そうよ。」

シャツハ「カイクさんって始めからあの剣のスタイルじゃなかったんですね。」

シグナム「ええ、聞きましたが昔は先代の近衛騎士団長相手に勝てなかったそうです。」

フェイト「でも、今はシグナムですら勝てないくらいに強くなったんだよね。」

ヴィータ「まったくだぜ。」

リン「そういえば、カイクたちは今どこだ？」

なのは「カイクさんたちは今、ゴーカイジャーのメンバーで連携プレイの確認をしている最中で、フォ

ワードのメンバーは見学だよ。」

デカベース 訓練場

今ゴーカイジャーは連携のプレイの確認をしていた。それをフォワード陣とギンガが見学していた。

ティア「メルトさん！」

メルト「ティア！」

ティアはメルトにゴーカイサーベルを渡し、メルトはティアにゴーカイガンを渡してシミュレーション

用の雑魚を片付けていった。

フィオネ「エリスさん！」

エリス「ええ、わかってる！」

そう言つて、二人もエリスはフィオネにゴーカイサーベルを渡し、フィオネはエリスにゴーカイガンを持って攻撃をしていた。

ジーク「ゴーカイキャリバー、パルスガン！」

アイム「ゴーカイスピアガンモード！」

ジークとアイムは連携して、攻撃を加えた。

ジーク「カイクム！」

カイクム「キングソードベガ！」

そう言つて、カイクムはジークとアイムの肩を借りてジャンプして向かつていった。

カイクム「ベガトルネード！」

カイクムは回転しながら、ベガスラッシュを食らわせた。

カイクム「ゴツチューー！」

カイクムの一言の後、敵は全て全滅した。

スバル「すつごい！」

ティアナ「相変わらず、いいコンビネーションですね。」

エリオ「僕達も負けていられませんね。」

キャロ「そうだね、エリオ君。」

ギンガ「私も含めて、みんなにいい刺激になったね。」

その後、カイクム以外のメンバーはクールダウンした後、それぞれ部屋に戻り、カイクムはヴィヴィオといつものトレーニングを始め、それに流星も付き合つて一日が終了した。

### 第39話 ある休日の訓練（後書き）

どうも、今回は短めですみませんでした、次回はちゃんと戦闘ありの話にしようと思いますのでよろしくお願いします。

第40話 宇宙から来た小さい訪問者？（前書き）

どうも、今回はあるアニメの人気キャラが出てきますのでよろしく  
お願いします。

## 第40話 宇宙から来た小さい訪問者？

イクスを救出した事件以来、妖魔の活動がおとなしくなった、しかし、その代わりに宇宙からアリエナイザーが来るようになりその対処をしていた。

カイク「キングソードベガ！」

ジーク「オラ！」

アリエナイザー1「ぐああ！」

なのは「カイクさん、できるだけ捕まえるようにしてください！」

カイク「わかつてる。」

アイク「なら、これで行くぞ！」

そう言つて、アイクはタイムファイヤーのレンジャーキーを取り出した。

ジーク「そうだな、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「タイムレンジャー！」

ゴークイセルラー「タイムファイヤー！」

カイク「キングテクター！DVディフェンダー！」

ゴークイジャーのメンバーはタイムレンジャーの変身し、カイクはキングテクターを纏い、タイムファイヤーのDVディフェンダーを出した。

ジーク「行くぜ、ボルブラスター！」

ファイオネ「ボルランチャー！」

メルト「ボルバルカン！」

エリス「ボルパルサー！」

ティア「ボルスナイパー！」

タイムレンジャーにチェンジしたメンバーはそれぞれの武器を取り出した。

ジーク「ビルドアップ！」

ゴークイジャー「「ボルテックバズーカ！」」

5人の持っていた武器を合体させた。

ジーク「行くぜ！プレスリフレイザー！」

アリエナイザー1「うあああ！」

アリエナイザーは攻撃を食らった後、小さくなって圧縮冷凍された。

アィム「カィム！」

カィム「ああ、行くぞ！」

カィム・アィム「DVRリフレイザー！」

アリエナイザー達「ぐあああ！」

カィムとアィムは一気に残りのアリエナイザーを圧縮冷凍した。

それ以外のアリエナイザーも六課のメンバーで取り押さえて、任務完了した。

デカベース

ヴィヴィオ「パパ！」

イクス「お父様！」

二人は帰ってきたカィムとジークに駆け寄ってきた。

カィムとジークは二人を抱っこした。

はやて「お疲れ様です、なのはちゃん達もご苦労様。」

なのは「ありがとう、はやてちゃん。」

そう言っつて、はやてが労いのの言葉をかけた。

カィム「しかし、最近アリエナイザーが多いな。」

エリス「そうね、でも妖魔に比べるとたいしたこと無いからいいん

だけど……」

ティア「でも妖魔は、最近姿を現しませんね？」

ジーク「おそらくエージェント・アブレラが時間稼ぎのためにアリ

エナイザーどもを地球に向かわせているんだろう。」

クロノ「まあ、ともかくタイムレンジャーの圧縮冷凍システムは高

性能だな、これなら敵を確実に拘束できる。」

フィオネ「たしか、マリエルさん、シャリーさんが牧野先生からそのデータを受け取って、デバイスにも持たせるって言っていました

けど……」

フェイト「たしかにそうしてもらえるとバインドを使う回数も減りますしね。」

リンディ「二人の話だと牧野先生がGGGにもデータ送ったそうなので、GGGの方でも使えるようになるわね。」

カイル「さて、ヴィヴィオ今日もトレーニングに行くか？」

ヴィヴィオ「うん！」

そうやって、カイルはヴィヴィオと一緒に部屋を後にした。

ジーク「それじゃ、俺達も行くかイクス。」

イクス「はい、お父様。」

そうやって、二人も出て行った。イクスも自ら志願してジークから拳法系の基礎を学んでいた。

カイルとヴィヴィオは海辺のところまで訓練をしていた。

カイル「それじゃ、ヴィヴィオ今日はいよいよ基礎的な技を教えるぞ。」

ヴィヴィオ「うん！」

カイル「よし、行くぞ！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

ヴィヴィオ「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「デカレンジャー！」

カイルはデカブレイクに変身して、ヴィヴィオは子供のままデカブライトに変身した。

カイル「ブレスロツトル！高速拳ライトニングフィスト！」

カイルはヴィヴィオに技を見せた。

カイル「よし、ヴィヴィオやってみろ。」

ヴィヴィオ「うん！行くよ、ブレスロツトル！高速拳ライトニングフィスト！」

ヴィヴィオは見事にライトニングフィストを放つことに成功した。

カイル「よし、合格だ、偉いぞヴィヴィオ。」

そう言つてヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「えへへへ」

ヴィヴィオはカイクに撫でられて嬉しそうな顔をした。

とその時、カイクが海に打ち上げられていた宇宙船らしきものを発見した。

カイク「これは宇宙船か？」

ヴィヴィオ「パパ、ハッチが空いてるよ？」

カイク「ホントだ、ヴィヴィオ、俺から離れるなよ。」

ヴィヴィオ「うん。」

そう言つて中に入つて行こうとしたその時、中から丸くかわいらしい生き物が出てきた。

ヴィヴィオ「かわいい！」

そう言つてヴィヴィオはそれを抱き抱えた。

その後、宇宙船からそれらがゾロゾロと出てきた。

カイク「．．．なんだこの生き物は？」

すると1体だけ違う生き物が出てきた。

???「ふう、助かった、まさかアリエナイザーに襲われるとは思わなかつた．．．あれ？あなた達は誰ですか？」

カイク「．．．お前こそ何者だ？」

???「す、すみません、申し遅れました私はワドルドウと申します、そして、彼らはワドルデイと申します．．．」

すると、急に全員元気が無くなった。

カイク「どうした？」

ワドルドウ「も、申し訳ありません、ちよつとお腹が減つて．．．」

ヴィヴィオ「パパ．．．」

ヴィヴィオはカイクを見つめた。

カイク「わかつてる、ついて来い、飯を食わせてやる．．．マジマジユナ！」

そう言つて、カイクは転移魔法ですぐに宇宙船ごとデカベースに戻り、全員に事情を説明し、ワドルドウとワドルデイに食事を与えた。

ジーク「．．．しかしよ、このワドルディって奴らはいったい何人いるんだよ．．．」

シャーリー「調べたところ、約1000人はいるかと．．．」

はやて「まさか、ここの食堂が満員になるとは思わなかったわ．．．

」

リイン「でも、かわいいです。」

ヴィータ「たしかにかわいいたら、かわいいんだがよ．．．」

シグナム「しかし、いったいどうすればいいんだ？」

ティア「今カイクさんがドギーさんところへ連絡して、彼らのことを聞いていますよ。」

その頃、カイクはドギー・クルーガーのところへデータスを使い連絡をしていた。

カイク「一種の渡り鳥？」

ドギー「（そうだ、元々は宇宙の辺境惑星である、ポップスターと呼ばれるところに生息する種族でな、特徴はしゃべることは出来ないんだが、とにかく働き者でな、一宿一飯恩義を受けるとそこに住み着くといわれている．．．）」

カイク「．．．まさか、このまま住み着くんじゃ．．．」

ドギー「（だが、彼らは人畜無害だ、心配することも無いだろう、むしろ人手が増えたと思った方がいい．．．）」

カイク「．．．わかった、こいつらの対処は俺達がする、ありがとうボス。」

ドギー「（いや、役に立てたんなら光栄だ、それじゃカイク。）」

そう言っつて、通信を切り、カイクはみんなのところへ行き事情を説明した。

なのは「そ、そうだったんですか．．．」

はやて「ほなら、このままここにおいても問題は無いやろう？」

カリム「そうね、それにこのまま追い出したらヴィヴィオたちが悲しむわ。」

フェイト「そうですね、騎士カリム。」

クロナ「とりあえず、何名かはGGGのオービットベースにも行ってもらおう、あっちも結構人手不足だろうしな・・・」  
そう言っつて、話し合いの結果、400人ほどのワドルディはオービットベースに行き、残りの約600人とワドルドゥはデカベースとターポビルダーに別れて、住むことになった（ちなみに10人ほど翠屋の方にも住み込みで働くことになった）寮母のアイナさんは働きの人手が増えて大助かりだったという。  
ちなみに後日、遊びに来たりオとコロナもワドルディのことを気に入ったのはまた別の話。

第40話 宇宙から来た小さい訪問者？（後書き）

どうも、今回は星のカービィより、ワドルドゥとワドルデイを登場させました、次回は大きな力を解放する話にしたいと思っていますのでよろしくお願いします、それではまた次回。

#### 第41話 これから先も交通安全（前書き）

どうも、今回はようやくこの戦隊の力の解放です、キングキー無かったらあまり意味の無い力ですが、ちなみに今回はフィオネが中心で結構暴走気味になっています。

## 第41話 これから先も交通安全

ワドルドウとワドルデイがアリエナイザーの襲撃に巻きまれ地球に不時着した。その後住む場所を求めていた彼らはオービットベース、デカベース、ターボビルダーに住み込みで働くことになってから1週間が経過した。

フィオネ「ふう〜、一人でいるなんて久しぶりですね・・・」  
今フィオネは非番を利用して、街に息抜きに来ていた。  
とそこへ、若い複数の男がフィオネに声を掛けてきた。

男1「へい彼女、今一人？」

男2「俺達と遊ばない？」

フィオネ「結構です、今は一人でのんびりしたいので。」

男3「そんなこと言わないでさ、俺達いいことしようよ？」

フィオネ「何度も言わせないください、まったくカイクさんならともかく、いや、カイクさんならこんな情けないことなんてしませんよね・・・」

このフィオネの情けないことという言葉をも男達は聞き逃さなかった。

男1「なんだと、このアマ！」

男2「舐めたこと言ったことを後悔させてやるぜ！」

そう言つて、男達は殴りかかろうとした。

フィオネ「遅い！」

しかしフィオネはすばやく避けて、男達の手を掴んで投げ飛ばした。

男1「ぐああ！」

男2「うああ！」

フィオネ「まだやりますか？」

男3「に、逃げる！」

そう言つて、逃げようとした男の一人が信号無視して道路の向こうへ逃げようとした。

フィオネ「は！コラ！」

そう言つて、フィオネはその男を捕まえて、歩道へ戻した。

男「ひ、ひい．．．お、お許しを．．．」

フィオネ「あなた！今信号無視しようとしたでしょう！だめじゃないですか、大の大人が．．．」

そう言つて、フィオネはその男に説教を始めた。

デカベース

そして、その後戻つてきたフィオネはカイクとジークに先ほどのことを話し始めた。

フィオネ「まったく、最近の方々はどうしてこうも交通安全に無頓着なんでしょうか．．．」

カイクとジークはため息をつきながら話を聞いていた。

フィオネ「そうだ！カイクさん、ジークさん、こうなったら警察の方に協力して、交通安全を推奨しましょう。」

カイク「お、おい、フィオネ．．．」

ジーク「いくらなんでも冗談じゃねえよ、最近妖魔が出ないとはいえ、俺達は大いなる力を解放しなきゃいけないんだぜ、だからよ．．．」

．おい鳥野郎！

ナビィ「ダカラ、鳥ジャナイつてば、ソレジャ久しぶりノ、レッツ、お宝ナビゲート！．．．フム、交通安全するべし．．．ダッテサ。」

その言葉にカイクとジークは頭を抱えた。

カイク「マジか．．．？」

ジーク「なんでこんなタイミングで．．．」

フィオネ「ナビィの占いの結果がそうなら問題はないですね、それじゃ行きましょう。」

その後、フィオネを先頭にゴーカイジャーと機動六課のメンバー総出で警察の交通安全運動の手伝いをする事になった。

街中

なのは「その君、信号が青になつてもちゃんと確認してね？」

男の子「うん！」

フェイト「横断歩道は手を上げて渡ろうね？」

女の子「うん！」

そう言つて、全員で交通安全の指導を行っていた。

カイル「なんで、俺達がこんなことを．．．」

ジーク「やる気が出ないぜ．．．」

アイム「さすがに俺もな．．．」

そう言つて、3人は渋々やっていた。

メルト「ちよつと、その3人、真面目にやりなさい！」

ティア「そうですよ、ヴィヴィオやイクスも手伝っているんですから．．．」

そう言つて、ヴィヴィオはエリスとイクスははやと一緒に交通安全の呼びかけをしていた。

エリス「偉いわよ、ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオ「えへへへ」

はやて「イクスもいい子やで。」

イクス「ありがとうございます、お母様。」

3人はまじまじと見せ付けられる形になった。

フィオネ「カイルさんとジークさんは父親なんですから、ちゃんとやってください！」

カイル「しょうがない．．．」

ジーク「娘の前でサボつたら、示しがつかないしな．．．」

アイム「これも大いなる力の解放のためだ．．．」

そう言つて、3人は無理やりやる気を出して呼びかけを行った。

その後、一通りの呼びかけを終え、みんなで休憩していた。

カイル「とりあえず、一応やることはやったが．．．」

アイム「こんなことで、本当に力が解放されるのか？」

とその時、ゴーレム兵が現れた。

ゴーレム兵「ゴオオオ！」

子供達にゴーレム兵が襲い掛かる、それにいち早くフィオネが動き、

それにカイクたちも続き敵を倒していた、さらにそこへバンドーラが現れた。

バンドーラ「お久しぶりだね、ゴーカイジャーと魔導師たち。」

ジーク「てめえはバンドーラ!」

フィオネ「何のようです!?!」

バンドーラ「あたしは子供が大嫌いなんだよ、だからこんな交通安全全なんて滅茶苦茶にしてやるよ、現れよドーラチャリオット!」

そう言うのと戦車の形をしたドーラモンスターが現れた。

バンドーラ「これだけじゃないさ、グリフォザー、ラミィ、あんな達もだよ。」

グリフォザー「はは!」

ラミィ「お任せを!」

そう言つて、二人もドーラチャリオットと共に臨戦態勢に入り、バンドーラは高みの見物を始めた。

バンドーラ「さて、ルシフェルが新たに生み出した粘土から作ったドーラモンスターの力を見せてもらおうかい。」

フィオネ「とにかく行きましよう!」

ゴーカイジャー「「豪快チェンジ!」」

モバイレーツ「ゴーカイジャー!」

ゴーカイセルラー「ゴーカイジャー!」

流星「怒る!」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

カイク「ゴーカイキング!」

ジーク「ゴーカイレッド!」

フィオネ「ゴーカイブルー!」

メルト「ゴーカイイエロー!」

エリス「ゴーカイグリーン!」

ティア「ゴーカイピンク!」

アトム「ゴーカイシルバー!」

カイク・ジーク「海賊戦隊！」

ゴーカイジャー「『『ゴーカイジャー！』』」

カイク「さて．．．」

フィオネ「派手に行きます！」

そう言つて、なのはたちに市民の避難を任せ、メタルダーとトップガンダーはグリフオーザー、ラミイに向かつていき、それ以外のメンバーはドーラチャリオットに向かつていった。

しかし、ドーラチャリオットは通常のドーラモンスターよりも大きく攻撃がほとんど効かない状態であった。

メルト「さすがにゴーカイガンでもあまり効果が無いわね．．．」

ティア「別の力を使いましょうか？」

とその時、カーレンジャーのレンジャーキーが光りだした。

そして、ゴーカイジャーの目の前にはカーレンジャーのメンバーとシグナルマン、ダップとその父であるVRVマスターがいた。

カイク「あ、あんた達は？」

恭介「俺達は激走戦隊カ〜〜レンジャーだ。」

ジーク「．．．なんだ、その発音は．．．」

直樹「まあ、いいじゃないですか。」

実「そや、細かいこと気にしたらアカンで。」

VRVマスター「そんなことより、これを受け取れ。」

そう言つて、キングキーを渡してきた。

カイク「これがカーレンジャーのキングキーか．．．」

アイム「ところでカーレンジャーの大いなる力を解放してもらえるのか？」

菜摘「それならもう解放したわよ。」

ティア「え！？」

洋子「レンジャーキー光ってるでしょう？」

そう言われてレンジャーキーを確認してみるとたしかに光っていた。

エリス「本当だわ．．．」

ダップ「カーレンジャーの大いなる力は戦う交通安全ダップ。」

カイク「そ、それだけ？」

フィオネ「何を言っているんですか、素晴らしいことじゃないですか。」

シグナルマン「うむ、君はいい事言うな、本官は気に入ったぞ。」

恭介「まあなんだ、とにかく頼むぞ後輩。」

そう言うつと光が消えて、ゴーカイジャーのメンバーは元の場所に戻った。

メルト「まったく突然ね・・・」

ジーク「とにかくあいつを倒すぞ、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「カーレンジャー！」

カイク「しょうがない、俺はこれで行くか、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「シグナルマン！」

ゴーカイジャー「『戦う交通安全！激走戦隊、カ〜〜レンジャ

ー！！』」

フィオネ「行きます！」

そう言うつて、全員で向かっていった。

カイク「シグナイザー！」

ジーク「フェンダーソード！」

フィオネ「マフラーガン！」

メルト「サイドナックル！」

エリス「エンジンキャノン！」

ティア「バンパーボウ！」

みんなそれぞれの武器で攻撃をして、ドーラチャリオットを吹き飛ばした。その後、カイクだけ元の姿に戻った。

ドーラチャリオット「ゴオオオ！」

フィオネ「今です！」

ジーク「よし、ギガブースター！キャノンモード！」

ジークたちはギガブースターを呼び出してセットアップを始めた。

さらにカイクは15個のレンジャーキーを出してゴールドアンカーキーを生み出した。

アイム「豪快チェンジ！」

ゴーカイセルラー「ゴーカイルバー、ゴールドモード！」

アイム「ゴーカイルバー、ゴールドモード！レンジャーキーセツト！」

カイク「キングソードベガ！レンジャーキーセツト！」

キングソードベガ・ゴーカイスピア「ファイナルウェーブ！」

ゴーカイジャー「イグニッション！」

アイム「ゴーカイレジェンドリーム！」

ゴーカイジャー「ブースターキャノン！」

カイク「ベガトルネード！」

ドローチャリオット「ゴオオオ！？」

ドローチャリオットは粉碎された。

バンドーラ「おのれ、こうなったら、ドローチャリオットを大きくしてやるよ、大地に眠る悪霊たちよ、ドローチャリオットに、はあ！力を与えよ！」

バンドーラは杖を投げつけドローチャリオットを巨大させた。

カイク「早速使ってみるか、キングインストラー！」

キングインストラー「VRVロボ！」

ゴーカイジャー「完成！ゴーカイオー！」

アイム「完成！豪獣神！」

ドローチャリオット「ゴオオオ！」

巨大化したドローチャリオットは無数の砲撃をしてきた。

ゴーカイジャー「ぐあああ！」

アイム「巨大化しても砲撃は強烈ってわけか……」

カイク「なら、俺に任せろ、ビクトリーツイスター！」

そう言つて、異次元空間から現れたビクトレーラーからVバルカンとVバズーカが転送され、それを使ってドローチャリオットに攻撃をした。

ドローチャリオット「ゴオオオ！」

ドローチャリオットは吹き飛ばされた。

ジーク「よし、派手に行くぜ！ゴーカイ激走斬り！」

ゴーカイオーは回転しながら、ドーラチャリオットを斬りつけた。

アーム「とどめだ！レンジャーキーセット！ゴーカイ電撃ドリルスピン！」

豪獣神は右手のドリルでドーラチャリオットの身体を貫き、ドーラチャリオットを倒した。

ドーラチャリオット「ゴオオオ！？」

バンドーラ「あゝ、頭が痛くなる、グリフォージャー、ラミィ、帰るよ。」

そう言つて、バンドーラたちは撤退した。

トップガンダー「逃げられたか・・・」

メタルダー「しかし、何事も無くよかった。」

トップガンダー「そうだな・・・」

こうして、多少のトラブルに見舞われたが交通安全を通じてカーレ  
ンジャーの力が解放された、しかし、フィオネ、ティア以外のゴー  
カイジャーのメンバーはあまりにも期待はずれの力だったためちよ  
つとがっかりしていた。

その後、フィオネに感化されたのかティアやフォワード陣のメンバ  
ーもしばらくの間交通安全にうるさくなつたのはまた別の話。

#### 第41話 これから先も交通安全（後書き）

どうも、今回はちょっとフィオネがちょっとシグナルマンに拍車をかけた感じになりましたが、元々融通が利かない性格になるのでこんな感じにしました、次回は大きいなる力はまだにして、オリジナルの話しにしたいと思います、それではまた次回よろしくお願いします。

第42話 特別編 歴代スーパー戦隊の歴史 前編（前書き）

どうも、今回は前から考えていたスーパー戦隊の特別編にしました、今回はゴレンジャー〜カクレンジャーまでの戦隊を紹介したと思いますのでよろしく願いします。

## 第42話 特別編 歴代スーパー戦隊の歴史 前編

デカベース

今、ロゼ・アプロヴァール国連事務総長、大河総裁は妖魔に対抗するための話し合いのためここに来ていた、さらにGGGのオービットベース、ミッドの管理局の伝説の三提督も通信越しで話し合いに参加していた。

クロノ「それでは、これから主要メンバー全員を交えての話し合いに移りたいと思います、それではまず大河総裁・・・」

大河「うむ、我々はこれまで世界を守ってきたこのレジエンド戦隊のことについて、あまりにも知らないことが多かった、そこでこのたび、牧野先生、レオナ君やゴーカイジャーの皆に協力してもらって、レジエンド戦隊・・・いやスーパー戦隊のことを知るためにこのような席を設けさせてもらった。」

ロゼ「その通りだよ。」

カリム「妖魔はこれまでスーパー戦隊の方々が倒した筈の方を復活させたりしている状態です。」

リンディ「彼らに対抗するには、やはりもつと色々とスーパー戦隊のことや彼らが戦った敵のことを知っておきたいの・・・」

クロノ「だからこそ、今回はこのような話し合いのを設けさせてもらった・・・それでは、お願いするよカイム・・・」

カイム「ああ、わかった。」

そう言つて、カイムたちを始めたとしたスーパー戦隊を知っているメンバーが前に立ち、前に使ったレンジャーキーの記録を見ることが出来る機械を使って説明し始めた。

海城「ゴー！」

海城「アカレンジャー！」

新命「アオレンジャー！」

大岩「キレンジャー！」

ペギー「モモレンジャー！」

明日香「ミドレンジャー！」

ゴレンジャー「ゴトイヤー！」

海城「5人揃って！」

ゴレンジャー「ゴレンジャー！」

カイム「まずは、スーパー戦隊第1号、秘密戦隊ゴレンジャーだ、彼らは「黒十字軍」という組織に対抗するために組織された、国連の秘密防衛機構「イーグル」って組織の日本ブロックの生き残りで黒十字軍に対抗するために組織されたスーパー戦隊だ。」

凱「ここから、スーパー戦隊の戦いが始まったのか・・・」

牧野「彼らが戦った組織である黒十字軍は、世界制服をもくろむ科学者であった黒十字総統が総帥として君臨し、幹部には日輪仮面、鉄人仮面テムジン将軍、火の山仮面マグマン将軍、ゴールドン仮面大將軍の4人が居て、それぞれ配下の仮面怪人を使ってゴレンジャーに戦いを繰り広げました。」

レオナ「ちなみに先代のゴカイジャーは、この黒十字軍の親玉だった「黒十字総統」こと「黒十字王」となって復活して戦ったことがあったの、まあ倒したけどね・・・」

火麻「悪党がしぶといのはいつの時代も同じってわけか。」

牧野「では、次は・・・」

桜井「スピードエース！」

東「ダイヤジャック！」

カレン「ハートクイーン！」

大地「クローバークィング！」

番場「ビックワン！」

ジャッカー電撃隊「我ら、ジャッカー電撃隊！」

ジーク「次は、2番目ジャッカー電撃隊だ、このメンバーは全員、創設者である国際科学特捜隊日本支部長官である鯨井大助長官に改

造されたサイボーグ戦士だ、「犯罪組織クライム」と戦ったんだ。」  
ルネ「こんな昔にサイボーグ技術があつたのね．．．」

獅子王博士「スーパ―戦隊の技術力の高さが伺えるな．．．」  
データス「ちなみにリーダーのビツクワンさんは一人で他の4人の  
力である核・電気・磁力・重力の4つを持っていて、だからジャッ  
カー電撃隊最強だつたんデス。」

ヴィヴィオ「ビツクワンって、まるでパパみたい！」

そう言われ、カイムはヴィヴィオの頭を撫でながら少し照れた顔を  
した。

牧野「彼らが戦つたクライムは、鉄の爪を首領アイアンクローに置き、世界各地で  
デビルロボットと呼ばれる戦闘ロボット使い犯罪行動を行つていた  
組織です、後に鉄の爪アイアンクローより上の真の支配者であつた、シャインと呼  
ばれる異星人が居たそうです．．．」

命「この頃からすでに異星人がこついつた組織に関わつていたので  
すね．．．」

レオナ「次はね．．．」

伝「ファイバー！」

伝「バトルジャパン！」

志田「バトルフランス！」

神「バトルコサック！」

曙「バトルケニア！」

マリア「ミスアメリカ！」

バトルファイバーJ「バトルファイバー！！」

フィオネ「次は、3番目バトルファイバーJです、彼らは「秘密結  
社エゴス」に戦つた、国防省とFBIからの精鋭を集めて結成さ  
れたダンスの達人で編成されたスーパ―戦隊です、さらに初めて巨  
大口ボットである「バトルファイバーロボ」を使って戦つた方々で  
す」

ヴィータ「ダンスで戦うのかよ．．．」

シグナム「うむ、戦い方には色々あるということだな．．．」  
レオナ「彼らが戦った、エゴスは、首領のサタンエゴスを神と崇められる謎の存在の元、エゴス教と呼ばれる宗教を媒体に暗躍していた秘密組織だよ、ちなみに敵の怪人は皆、サタンエゴスが生み出した自身の子供の様な存在で、指揮官であり神官でもあったヘッダー指揮官も彼らには頭が上がらなかったようだよ．．．」  
パピヨン「いわゆる宗教集団に近い組織ですね。」  
データス「そして、次はデスね．．．」

赤城「デンジスパーク！」

赤城「デンジレッド！」

青梅「デンジブルー！」

黄山「デンジイエロー！」

緑川「デンジグリーン！」

あきら「デンジピンク！」

赤城「見よ、電子戦隊！」

デンジマン「『デンジマン！』」

メルト「次は、4番目電子戦隊デンジマンね、大昔に地球に来たデンジ星人の末裔達が、3000年前に自分のご先祖の星を滅ぼした「ベーター族」と戦ったスーパー戦隊ね、彼らはデンジ犬アイシーと呼ばれるロボット犬と一緒に戦ったの。」

ソルダート「なんと、この時代からすでに異星人の技術が使われていたのか。」

データス「そうデス、ちなみに彼らが戦ったベーター族は異次元宇宙に潜む別世界の住民で、ヘドリアン女王を支配者に置き、その下にヘドラー將軍、側近のミラー、ケラーが居たそうデス、彼らは人間が美しいと思うものを醜いと感じるんです、ですから彼らは地球をヘドロのような星にしようとしたそうデス。なお、デンジマンとの戦いの終盤でバンリキ魔王と名乗る敵が現れて、ベーター族の城を乗っ取られ、最後はバンリキ魔王がデンジマンに倒されると、

その時すでに部下が全て死んだため、ヘドリアン女王はこの時、デ  
ンジマンの前から姿を消したそうデス。」

フェイト「おそらく、大事な仲間がいなくなったから戦う戦意を失  
ったんですね．．．」

牧野「そして、次は．．．」

飛羽「バルイーグル！」

鮫島「バルシャーク！」

豹「バルパンサー！」

飛羽「輝け、太陽戦隊！」

サンバルカン「サンバルカン！！」

エリス「次は、5番目太陽戦隊サンバルカンね、彼らは北極に本拠  
を置く機械帝国ブラックマグマと戦った、国連サミット直属組織・

地球平和守備隊所属のスーパージョー戦隊唯一の3人チームよ。」

シャツハ「3人だけで戦い抜いたんですか、すごいですね。」

牧野「彼らが戦った機械帝国ブラックマグマは邪悪な「黒い太陽神」

と呼ばれる存在を崇め、世界征服を目論む機械生命体の帝国です、

支配者の「全能の神」の元、実質的な指導者であるヘルサターン総

統を筆頭に、なんとデンジマンとの戦いで姿を消したヘドリアン女

王も機械人間となって、新たな行動隊長であるアマゾンキラーと共

に、ブラックマグマに居座り、後にブラックマグマを乗っ取るうと

したそうです。」

戒道「やはり、野心があるもの同士が手を組むと大抵そうなるな．

」

猿頭寺「しかし、前の戦隊が戦った敵とまで戦ったんですね、この

サンバルカンは．．．」

大河「うむ、それでも戦い抜いたとは、まさに彼らも勇者と言えよ  
う。」

レオナ「そして、次は．．．」

赤間「ゴークルレッド！」

黒田「ゴークルブラック！」

青山「ゴークルブルー！」

黄島「ゴークルイエロー！」

ミキ「ゴークルピンク！」

赤間「戦え、大戦隊！」

ゴークルファイブ「ゴークルファイブ！！！！」

ティア「次は、6番目大戦隊ゴークルファイブですね、彼らは暗黒科学帝国デスダークと呼ばれる敵と戦ったスーパー戦隊です、彼らは未来科学といわれる当時の最先端科学技術と新体操を戦い取り入れて戦ったんです。」

マリエル「ホントに色々なものを戦いに取り入れるですね。」

レオナ「彼らが戦った暗黒科学帝国デスダークは、大昔から科学技術を悪用した通称「悪魔の科学」を用いて多くの災いをもたらし、いくつかの文明を滅ぼしたことがあるとされる暗黒科学者の集団で、大昔から人類の歴史の背後で暗躍を続けてきた組織だよ、首領は暗黒科学が生み出した究極にして最強の遺伝子でもある総統タブー、さらに最高幹部のデスマルク大元帥、その下の実質的な戦闘指揮官デスギラー将軍、女スパイのマスルカがいたそうだよ。」

高之橋博士「いつの時代でも科学を悪用しようとする人と正しいことに使う人に別れますね。」

獅子王博士「仕方が無い、それが知識人の宿命と言うものですよ、高之橋博士。」

データス「そして、次はデスね．．．」

弾「ダイナマン！」

弾「ダイナレッド！」

星川「ダイナブラック！」

島「ダイナブルー！」

南郷「ダイナイエロー！」

レイ「ダイナピンク！」

弾「爆発！科学戦隊！」

ダイナマン「ダイナマン！！」

アイム「次は、7番目科学戦隊ダイナマン、地底からの侵略者「ジャシンカ帝国」と戦った戦士だ、彼らは若き科学者の5人でそれぞれ科学、天文学、海洋学、植物学、コミュニケーション研究の専門だったんだ。」

シャマル「ば、爆発つて、すごい方々ですね．．．」

データス「何しろ必殺技が、皆さんが竜巻状に集まりながら1つの巨大な火の玉になって敵に向かっていくスーパーダイナマイトで、さらに敵の進化獣の強化型のメカシンカに対抗するために編み出された新必殺技ニユースーパーダイナマイトがありましたから。」

牛山「とにかく爆発なんですね。」

牧野「それと敵のジャシンカ帝国は、はるか古代に地球に落下した隕石に付着していた生命体が独自の進化を遂げた有尾人一族と呼ばれる種族で、地底においてジャシンカ帝国を築いたそうです、彼らは尻尾が多いものほど位が高く、支配者の帝王アトン、指揮官の軍神カー將軍、女將軍ゼノビア、帝王アトンの息子で後に帝王の後を継いだメギド王子、さらにその従兄妹キメラ王女が居たそうです。」

ティアナ「生まれた時から階級が決められているなんて．．．」

スバル「そんなのよくないよ、絶対に。」

牧野「え〜と、次が．．．」

郷「バイオマン！」

郷「レッドワン！」

高杉「グリーンツー！」

南原「ブルースリー！」

ジュン「イエローフォー！」

ひかる「ピンクファイブ！」

郷「ワン！」

高杉「ツー！」

南原「スリー！」

ジュン「フォー！」

ひかる「ファイブ！」

郷「超電子！」

バイオマン「バイオマン！！」

ジーク「次が、8番目超電子バイオマンだ、バイオマンは遠い昔に科学をめぐるトラブルから滅びた、バイオ星のバイオ粒子エネルギーを浴びた、5人の地球人の子孫がバイオ粒子エネルギーを受け継いだものは身体能力が高くなり、それを生かして「新帝国ギア」と戦ったんだ。」

エリオ「この戦隊も宇宙人の力を使っているんですね。」

レオナ「彼らが戦った新帝国ギアは、総統ドクターマンを筆頭に大幹部であるビツクスリーのメイスン、フアラ、モンスターにさらに下にジューノイドと呼ばれる中幹部のメツサージュウ、サイゴーン、ジュウオウ、メツツラー、アクアイガーが居て、さらにフアラのボデイガードにフアラキャットがいた組織です、しかも第3勢力でバイオハンター・シルバという戦闘ロボットが現れたんです。」

シルバの映像を見せるとフォワード陣、カリム、シャツハ、流星が気が付いた。

流星「こ、これは！？あの時、ルシフェルが召喚していた・・・」

ゴセイナイト「その通りだ、バイオ星の「バイオ星平和連合」は元々平和利用のためにバイオ粒子エネルギーを平和利用のために作り出したが、しかしそれを兵器を作るために使っていると考えた者たちが出た、それが「反バイオ同盟」だったんだ、こいつはその時にその反バイオ同盟によって作られた戦闘ロボットだ、奴はバイオ粒子エネルギーを感知するとどんなものでも攻撃するロボットだ、しかも奴には巨大ロボットバルジオンというロボットが居て、そのバルジオンの強さはバイオマンの巨大ロボットバイオロボを上回っていた、しかし最終的にはバイオロボの隠された力が発動し、奴を倒

すことに成功したんだ．．．」  
カリム「．．．もしかしたら、我々も一歩間違えば同じ運命を辿る  
かもしれないですね．．．」  
シャツハ「そうですね、騎士カリム．．．」  
レオナ「さて、次は．．．」

剣「レッツ、チェンジだ！」

4人「OK!!」「」

チェンジマン「チェンジマン!!」「」

剣「チェンジドラゴン！」

疾風「チェンジグリフォン！」

大空「チェンジペガサス！」

さやか「チェンジマーメイド！」

麻衣「チェンジフェニックス！」

剣「電撃戦隊！」

チェンジマン「チェンジマン!!」「」

アイム「次は、9番目電撃戦隊チェンジマンだ、彼らは全宇宙の脅  
威「大星団ゴズマ」から地球のみならず全宇宙の平和を守った地球  
のアースフォースの力を使って戦ったスーパー戦隊だ。」

なのは「ぜ、全宇宙って．．．スケールが大きいですね．．．」  
キャラ「ところで、アースフォースって何ですか？」

レオナ「地球自身が危険を感じたときに発する未知のエネルギーだ  
よ、チェンジマンはこの力を浴びたメンバーだけがなれたの、ちな  
みに司令官の伊吹長官は異星人でゴズマを倒すために地球へ逃れて、  
チェンジマンを結成したの．．．」

ギンガ「それほどの敵だったんですね、その大星団ゴズマは．．．」  
牧野「大星団ゴズマは全宇宙征服を目的とする異星人の混合軍団で、  
支配者は聖王バズーで彼はゴズマスターと呼ばれる地球よりも遙か  
に大きい惑星型巨大生命体で、色々な惑星を食らって巨大になった  
そう、幹部もほとんどバズーに滅ぼされた星の出身で、自分達の

星の返還を条件に戦っていたようで、幹部にはギラス星人ギルーク司令官、アマゾ星の女王だったアハメス女王が実質的な作戦指揮を取り、副官に宇宙海賊ブーバ、アマンガ星の王女で後に裏切ってチエンジマンと一緒に戦ったシーマがいました。」

トモロー「さしずめ恐怖政治で人を支配していたと言うことが．．．

ソルダートJ「力で屈服させるなど笑止、私も凱達に出会いそれを理解できたからな．．．」

凱「J．．．」

データス「え〜と、次がデスね．．．」

ジン「みんな、プリズムフラッシュだ！」

4人「OK!!」「」

フラッシュマン「プリズムフラッシュ!!」「」

フラッシュマン「シャットゴーグル!!」「」

ジン「レッドフラッシュ!!」

ダイ「グリーンフラッシュ!!」

ブン「ブルーフラッシュ!!」

サラ「イエローフラッシュ!!」

ルー「ピンクフラッシュ!!」

ジン「超新星!!」

フラッシュマン「フラッシュマン!!」「」

カイク「次は、10番目超新星フラッシュマンだ、彼らは子供の頃

「改造実験帝国メス」に協力していたエリアンハンターに地球から誘拐された5人の子供で、彼らはフラッシュマン星の人に助けられて、

20年間フラッシュマン星で戦士として育ち、帰ってきて改造実験帝国メスと戦った、宇宙帰りのスーパー戦隊だ。」

フェイト「私達は、あの時カイクさんたちから聞きましたけど、まさか妖魔がここに関わっていたなんて．．．」

キャラ「20年間も別の星で育ったんですね、この人たちは．．．

「カイクム「ああ、しかし、メスと戦っていたのは彼らだけじゃない、さらに約百年前のフラツシユ星の英雄タイタンと呼ばれる存在がいて、フラツシユキングが破壊された時に100年間地球に来て眠りについていたメスを裏切った彼の親友であるレー・バラキがフラツシユマンにフラツシユタイタンと呼ばれる新しい巨大マシンを渡したんだ、その関係で彼らが始めて2体目のロボットを使って戦ったんだ。」

エリオ「あれ？でもお父さんが使ってるキングキーでフラツシユキングはありますか、フラツシユタイタンはありますかよね？」

カイクム「ああ、俺が最初に持っていたのはこのフラツシユキングのキングキーでそれ以外のキングキーはその都度、手に入れたからな、だからまだフラツシユタイタンのキングキーが無いんだ。」

シグナム「なるほど、だからフラツシユキングしか使わなかったじゃない、無かったから使えなかったのか・・・」

カイクム「そして、彼らが戦った改造実験帝国メスは、宇宙を渡り歩き、様々な星の生命体を捕らえては生命改造実験を繰り返し、その本当の目的は支配者である大帝ラー・デウスを完全な生命体にして全宇宙に君臨することで、そのことはラー・デウスしか知らなかったらしい、大帝ラー・デウスの下に大博士リー・ケフレン、さらにケフレンに作られたレー・ワンダ、レー・ネフェル、レー・ガルス

の幹部とその下の幹部のウルク、後に獣戦士に改造されたキルトが居て、さらに彼らに協力していたエイリアンハンターのリーダーのサー・カウラーがいた、このサー・カウラーがフラツシユマンをそれぞれ

の両親から誘拐した張本人だ、だが後に自分の仲間を獣戦士に改造されたことと片腕であるポー・ガルダンが駆けつけたことをきっかけにメスと手を切ったそうだ・・・ちなみにフラツシユマンはメスを倒した後、ある事情により地球から去って行ったそうだ・・・

「シャマル「ある事情といいますと・・・？」

レオナ「彼らは、フラツシュ星で育ったものだけが持つてしまう現象、反フラツシュ現象と言うものが発生してしまったの。」  
シャーリー「なんですかそれは？」

レオナ「これは、フラツシュ星系で育った人間が他の惑星で長期間過ごす、体が現地の環境に拒絶反応を起こす現象で、体調が悪化し、水も受け付けなくなったり現地の動植物に触れようとすると感電したような感覚に襲われるようになり、そのまま惑星に滞在すると症状が悪化し死亡してしまうの、だからなんとか地球に留まる時間ギリギリでメスを倒したんだけど、その後すぐにフラツシュ星に戻っていったの・・・」

マリエル「・・・そうだったんですか悲しいですね、せっかく故郷の星に帰ってきたのに留まれないなんて・・・」  
ザフィーラ「その話を聞くと、なんともやりきれない気持ちになるな・・・」

シグナム「そうだな・・・」  
牧野「それでは、次は・・・」

タケル「オーラマスク！」

タケル「レッドマスク！」

ケンタ「ブラツクマスク！」

アキラ「ブルーマスク！」

ハルカ「イエローマスク！」

モモコ「ピンクマスク！」

タケル「光戦隊！」

マスクマン「マスクマン！！」

フィオネ「次は、11番目光戦隊マスクマンです、彼らは人間、誰しもが持つ力オーラパワーを武器に「地底帝国チューブ」と戦ったスーパー戦隊です、さらに彼らはそれぞれ空手、剣技、古武術、テコンドー、カンフー、中国武術、拳法、忍術、拳法、太極拳と言った武術の達人の方々です。」

凱「オーラパワーか、確かに聞いたことがあるが、しかしそれを最大限に引き出せる人たちがスーパー戦隊にいたのか．．．」

牧野「ちなみにこのマスクマンが使っていたロボットなんですけど、グレートファイブとギヤラクシーロボの２体があったのですが、そのうちギヤラクシーロボには会話機能は無いのですが超AIが搭載されていました。」

猿頭寺「なんと、この時代にすでに超AIがあったとは．．．」

ジーク「そして、マスクマンが戦った地底帝国チューブは元々、地上とは違う文明を築いた地底人が作り上げた世界だったんだが、突然現れた帝王ゼーバがそこを支配したんだ、さらに地上を侵略しようとする様々な敵を送り込んできたんだ、幹部にはゼーバに暗殺された先代の地帝王の血を引く地王子イガムに副官地帝忍フーミン、さらに前線の指揮を任されていた地帝司令バラバにその副官的存在地帝忍オヨブー、さらに長老格の地奇地奇獣アナグマス、盗賊騎士キロス居たんだ、ちなみにこのイガム王子は男ではなく女で跡取りとして育てられたんだ、さらには双子の妹にイアル姫と言う人がいて、このイアル姫はレッドマスクと恋仲になったんだ。」

なのは・フェイト・カリム「（私もいつかカイクさんと．．．  
／／／／／）」「」

はやて「（うちもジークさんと．．．／／／／／）」

そんな中で一部のメンバーは別の世界旅立っている間にカイクが説明に戻った。

カイク「ちなみにこの帝王ゼーバの正体は数百年前に最も強く最も残酷な地底獣として恐れられ、地底世界の王になろうとし地底世界を荒し回った地底獣リサールドグラの息子だったんだ、当時イガムとイアル姫の先祖が多くこの犠牲を払って倒したが、死んでおらず最後に卵を産み、その卵から生まれた自分の息子こと帝王ゼーバ  
「リサールドグラ」2世が誕生し、最後に自分の身体を食らわせて強大な力と怨念を吸収し、先代の地帝王を殺し地底を支配したんだ。」

トップガンダー「執念もここまで来ると恐ろしくなってくるものだな．．．」

スプリンガー「まったくだぜ。」

データス「次はデスね．．．」

ライブマン「『ライブマン！』」

勇介「レッドファルコン！」

鉄也「ブラックバイソン！」

純「グリーンサイ！」

丈「イエローライオン！」

めぐみ「ブルードルフィン！」

勇介「超獣戦隊！」

ライブマン「『ライブマン！』」

メルト「次は、12番目超獣戦隊ライブマンね、彼らは元々は最初3人で「武装頭脳軍ボルト」と戦っていて、後に3人の親友の2人の弟がメンバーに加わって、5人で戦ったスーパー戦隊よ。」

華「どうして、親友の弟だったんですか？」

メルト「．．．お兄さんとお姉さんをそれぞれ殺されたの、ライブマンが戦っていた武装頭脳軍ボルトは大教授ビアスを首領に置き、人類の大部分を下等な存在と考え、世界は優秀な天才が支配すべきだと考えていた一団で、彼らにとって生命は全くの無意味・無価値で優れた頭脳のみが必要だと思っていたらしいの、そして側近にガイドノイド・ガッシュ、そして、ビアスの教え子だったドクター・ケンプ、ドクター・マゼンダ、ドクター・オブラーの3人は、元々はライブマンの3人がいた科学アカデミアに通う親友だったんだけど、悪魔の囁きに乗ってしまってピアスの所へ行っちゃったの、さらにその時それ見つけたのがライブマンの3人とブラックバイソンとグリーンサイのお兄さんとお姉さんだったの、その際に3人を庇って、殺されてしまって3人はこの2人の仇を討ち、なおかつ生きとし生けるものを守る戦士である、ライブマンになったの、ちなみ

にボルトには後、ドクター・アシュラ、ギルド星人ギルドス、チ  
ブチ星人ブッチーが居たの、もつとも異星人の二人は実はピアスが  
作ったロボットだったんだけどね・・・」

グリフィス「なんという・・・」  
クロノ「友の仇を取るためか・・・」

ジーク「ちなみにこの時、ライブロボとライブボクサー2体のロボ  
ットが合体したスーパーライブロボと言う強力なロボットが誕生し  
たんだ。」

そう言つて、ライブロボ、ライブボクサー、スーパーライブロボの  
映像を見せた。

ヴィヴィオ「かっこいい!」

スバル「ホント、強そう。」

カイル「ちなみにボルトはこのスーパーライブロボに終始圧倒され  
ていたそうだ。」

ヴィータ「そいつはすげえ!」

レオナ「それで、次は・・・」

ターボレンジャー「ターボレンジャー!!!」

カ「レッドターボ!」

大地「ブラックターボ!」

洋平「ブルーターボ!」

俊介「イエローターボ!」

はるな「ピンクターボ!」

カ「高速戦隊!」

ターボレンジャー「ターボレンジャー!!!」

エリス「次は、13番目高速戦隊ターボレンジャーね、約2万年間  
に人間と妖精によって封印されていた「暴魔百族」と戦ったスーパ  
ー戦隊初の高校生スーパー戦隊よ。」

スワン「学校に通いながら戦ったんデスね、凄いデス。」  
護「年齢的には今の僕達より下で戦ったんだ。」

ヴィヴィオ「たしか、妖精の守護獣の聖獣ラキアが居たんだよね？」  
カイル「そうだ、よく覚えてるな、偉いぞヴィヴィオ。」  
そう言つて、カイルはヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「えへへへ」

エリス「そして、このターボレンジャーは無公害エンジンを開発した  
太宰博士と妖精の生き残りの妖精シーロンとともに戦つたの、彼ら  
は子供の頃に妖精からある力をもらつて、その力のおかげでターボ  
レンジャーに変身できるようになったの。さらに彼らの5台のターボ  
マシーンが合体してターボロボ、さらにターボラガーと合体してス  
ーパーターボロボに合体できて、そしてターボビルダーと合体して  
スーパーターボビルダーになるの、ちなみにターボレンジャーの口  
ポットにも精霊の力が宿つていたの。」

リンディ「なるほど、妖精の力を使って戦つたのね。」

アイム「ターボレンジャーが戦つた暴魔百族は、暴力と魔力を尊び、  
世界支配を目論む悪魔の種族で、万年前に人間と妖精に敗れ、本拠  
地の暴魔城ごと封印されていたが、環境の悪化によつて妖精のパワ  
ーが衰えたため蘇つてターボレンジャーと戦つたんだ、支配者は暴  
魔大帝ラゴーンで後に一度ターボレンジャーのスーパーターボビル  
ダーに敗れ、少し間を置いてネオラゴーンとなつて復活したんだ、  
さらに暴魔博士レーダ、姫暴魔ジャーミン、暗闇暴魔ジンバ、かつ  
とび暴魔ズルテンという幹部が居たんだ、さらに人間と暴魔の間に  
生を受けた混血の者で流れ暴魔というものたちが居たんだ、流れ暴  
魔にはヤミマル、キリカが居て最初は暴魔百族とターボレンジャー  
の両方と戦つたんだが、最後はターボレンジャーと和解し、人とし  
て生きる道を選んだそうだ。」

大河「うむ、生きるためには力よりももっと大事なものがわかつた  
と言つてことか・・・」

ロゼ「そうだね、ようは心の問題だからね。」

牧野「それでは、次は・・・」

ファイブマン「ファイブマン!!!」

学「ファイブレッド!」

健「ファイブブルー!」

文矢「ファイブブラック!」

数美「ファイブピンク!」

レミ「ファイブイエロー!」

学「地球戦隊!」

ファイブマン「ファイブマン!!!」

ティア「次は、14番目地球戦隊ファイブマンです、彼らは5人兄弟でさらに同じ小学校の先生を務め、銀帝軍ゾーンと銀河超獣バルガイヤーから全宇宙の平和を守ったスーパー戦隊初の兄弟戦士です。」

牛山「5人兄弟ですか．．．家の兄弟よりも多いんだな．．．」

ファイオネ「彼らは元々、父親である星川博士とともに命が死に絶えた星に緑を蘇生させる研究をしていたんです、家族で地球を離れ惑星シドンで現星人と共に惑星開拓を行っていたんです、そしてようやくその兆しが見えてきたときにこの銀帝軍ゾーンが襲ってきて、次々と生命体がいる星を滅ぼしていったことがわかったんです、その時、星川博士は奥さんと一緒におとりになり、サポートロボットのアーサーG6に5人の子供たちをマグマベースに乗せて地球に帰って来たんです。」

凱「彼らもフラッシュマン達と同じで、両親と離れ離れになったのか．．．」

ヴィヴィオ「パパ．．．パパは居なくなったりしないよね?」

そう言つて、ヴィヴィオはカイムのこと見た。

カイム「大丈夫だ、俺はヴィヴィオのことを置いて行ったりしない。」

「そう言つとヴィヴィオは笑顔になりカイムにくっついた。

ティア「でもこの方々のご両親は後で生きていたことがわかったんですよ、グンサーという方がファイブロボの兄弟ロボのスターファ

イブを持ってきたことで両親が生きているんじゃないかと思ったそうです、ちなみにファイブロボとスターファイブは合体してスーパーファイブロボに合体でき、さらにマグマベースと合体するとマツクスマグマになるんです。」

レオナ「そして、この銀帝軍ゾーンのことだけど、ここは元々地球に来る前にすでに命ある惑星を999個も滅ぼしているの。」

トモロー「データを確認した、たしかに遠い昔、宇宙にはそんな奴らが存在したと言う記録が．．．」

レオナ「彼らは地球を1000個目の標的に選んで、攻撃を仕掛けてきたのもいつかゾーンが地球に来るんじゃないかという考えがあつて、ファイブマンになるために20年間訓練したの、表向きの支配者は銀河皇帝メドーだったんだけど、実は本当は巨大戦艦でもあるバルガイヤーが本当の正体だったの、彼は命ある星が滅びた時に発生する死のエキスを吸収し、全宇宙の支配する神になるうしたの、彼が影武者に仕立てたメドーはね、本当は彼が愛した一人の女性で死んだ後も自分の体内に亡骸を祭壇と共に安置したの、そして艦長には現在妖魔の仲間として復活した、初代艦長のシュバリエ、そしてその時の艦長だったガロア、銀河剣士ビリオン、銀河博士ドルドラ、銀河の牙ザザ、銀河商人ドンゴロスが幹部として居たそうだよ。」

ソルダート「．．．話を聞くと恐ろしい敵だなこの銀帝軍ゾーンというのは．．．」

カイル「ちなみにバルガイヤーには致命的な弱点があつたんだ、それがこのシドンの花だ。」

そう言つて、カイルは植木鉢に入れてあるシドンの花を見せた。

獅子王博士「なんと、あれだけの化けのものがこの花を恐れていたとは．．．」

ジーク「聞くところによるとこの花には不思議な力があつたそうだ。」

凱「なるほどな．．．小さな命にも様々な力があると言うことか．．．」

データス「え〜と、次はデスね．．．」

竜「クロスチェンジャー！」

竜「レッドホーク！」

凱「ブラックコンドル！」

雷太「イエローオウル！」

香「ホワイトスワン！」

アコ「ブルースワロー！」

竜「鳥人戦隊！」

ジェットマン「『ジェットマン！！』」

ジーク「次は、15番目鳥人戦隊ジェットマンだ、ジェットマンは地球防衛軍スカイフォースが誕生させた特殊部隊だ、ジェットマンは「次元戦団バイラム」という様々な次元世界を滅亡させた集団相手に戦った人間の身体能力を強化することの出来るバードニックウエーブという力を浴びたスーパー戦隊だ。」

ソルダートJ「ほう、私にも勝るとも劣らない空の戦士だな、このジェットマンは。」

牧野「ジェットマンにはジェットイカロスとジェットガルーダ、そしてその2体が合体したグレートイカロスのロボットが居たんです、さらに3体目のロボットしてテトラボーイと言うロボットが居たんです。」

猿頭寺「ほう、このロボットは自分の意思を持っているようですね。」

カイル「そして、彼らが戦ったバイラムは、裏次元伯爵ラディゲ、マリア、グレイ、トランことトランザ4人幹部居たんだ、一応支配者で女帝ジューザという存在がいたんだが、ラディゲがジェットマンと協力して、葬ったそうなんだ、ちなみにこのマリアはレッドホークの元恋人で、本当は彼女もジェットマンのメンバーになるはずだったんだが、最初の基地でバイラム襲撃の際に次元の歪みに吸い

込まれてしまつて、敵に洗脳されてしまつたんだ、その後、記憶を取り戻したんだが結局命を落としたんだ……」

華「本当に……」

その話に二人を始めとした女性陣は複雑な顔をした。

レオナ「そして、次はね……」

ゲキ「ダイノバツクラー！」

ゲキ「ティラノレンジャー、ゲキ！」

ブライ「ドラゴンレンジャー、ブライ！」

ゴウシ「マンモスレンジャー、ゴウシ！」

ダン「トリケラレンジャー、ダン！」

ボーイ「タイガーレンジャー、ボーイ！」

メイ「プテラレンジャー、メイ！」

ゲキ・ブライ「恐竜戦隊！」

ジュウレンジャー「ジュウレンジャー！！」

アイム「次は、16番目恐竜戦隊ジュウレンジャーだ、1億7千万年前の古代の恐竜人類だ、今妖魔に味方をしている「魔女バンドーラー味」と戦つた伝説のスーパー戦隊だ。」

なのは「い、1億7千万年前!？」

フェイト「そ、そんな昔の人たちだったんですね……」

カイル「エリオには、話したよな？」

エリオ「はいお父さん、僕のレンジャージャケットの力になつてますからね、ティラノレンジャーのゲキさんとドラゴンレンジャーのブライさんは兄弟なんですよ、さらにジュウレンジャーの守護獣は神なんですよ、5体の守護獣が合体して大獣神、さらにドラゴンシーザーがティラノザウルス、プテラノドン以外の守護獣と合体した剛龍神、さらに6体の守護獣が合体した獣帝大獣神、そして獣騎神キングブラキオンも加えた大獣神の本当の姿でもある究極神、究極大獣神がいたんですよ。」

アイム「ちなみにドラゴンレンジャーは、実は永い眠りの間に落盤事故で肉体と命を失っていて、時間限定の命を与えられていたため、ほとんどジュウレンジャーと一緒に戦うことが出来なかったんだ、そして最後は死ぬ間際に自分のドラゴンアーマーと獣奏剣を弟に託して死んだんだ．．．」

クロノ「自分の命を顧みず、そこまでして戦い抜いたのか、ドラゴンレンジャーは．．．」

リンディ「限られた命で全力で生き抜いたのね．．．」  
ルネ「．．．生きていることをホントの意味で理解しなきゃいけない。」

カイク「そして、バンドーラー一味だが、元々バンドーラーは古代人類の一つ、ダル族の女王だったが、息子・カイが恐竜の卵を壊して遊んでいたところを怒った恐竜に追いかけられ、逃げる途上で足を踏み外して崖から転落し、自業自得の形で命を落としたんだが、それを知らずバンドーラーは、カイを殺した恐竜を憎むようになり、大サタンに魂を売って史上最大の魔女になったんだ、そして人類を滅ぼし、地球を無の星にしようとしたが守護獣によって惑星ネメシスに封印されていたんだが、当時の宇宙飛行士が封印を解いてしまったため復活したんだ、メンバーはバンドーラー、トットパット、ブックバック、プリプリカン、グリフオーザー、ラミイが居たんだ、さらに地獄から舞い戻ったバンドーラーに力を与えた大サタンも復活したんだ、さらにバンドーラーの息子のカイを復活させたんだ、しかし、その後、ジュウレンジャーに大サタンごとカイを倒されて、バンドーラーが涙を流したことにより大サタンとの契約関係で魔法が使えなくなつて封印され、宇宙へ追放されたんだ。」

カリム「でも、彼らは妖魔に協力している時、魔法がまた使えましたよね？」

カイク「おそらく、妖魔が何らかの形で魔法が使えるようになったんだろう。」

シャツハ「厄介ですね、あの妖魔獣士などを巨大化できる力は．．．

「イクス「そうですね、あのような魔法は古代ベルカでもありませんでしたし……」

牧野「それでは、次は……」

亮「気力転身、オーラチェンジャー！」

コウ「気力転身、キバチエンジャー！」

亮「リュウレンジャー！天火星、亮！」

大五「シシレンジャー！天幻星、大五！」

将児「テンマレンジャー！天重星、将児！」

知「キリンレンジャー！天時星、知！」

リン「ホウオウレンジャー！天風星、リン！」

亮「天に輝く、五つ星！」

ダイレンジャー「「五星戦隊、ダイレンジャー！！」」

コウ・白虎真剣「「吼新星、キバレンジャー！」」

カイク「次は、17番目五星戦隊ダイレンジャーだ、彼らは中国奥地から蘇った「ゴーマ」と戦った気力と中国拳法を武器に戦ったスーパー戦隊だ。」

スバル「このスーパー戦隊は私達のレンジャージャケットの元になつてるんだよね。」

ギンガ「そうね、スバル。」

カイク「ダイレンジャーを結成した道士・嘉羽は元々、ゴーマの間だったが強硬派と対立し離反したんだ、その後、敵に奪われたキバレンジャーの白虎真剣を取り返すためにゴーマに戻ったんだ。」

ジーク「あとダイレンジャーの気伝獣は5体合体して、大連王になり、さらにウオントイガーが龍星王以外と合体した牙大王になり、そして、超気伝獣ダイムゲンも加えて7体合体した重甲気殿がいたんだ。」

レオナ「ダイレンジャーが戦ったゴーマは、6000年の時を経てよみがえったダオス帝国を形成する3つの部族の1つでね、ちなみ

にダイレンジャーの先祖であるダイ族もその一つだったの、その中で強硬派・穏健派で対立していたものの、強硬派によって世界支配を目論んでたの、民族全体の指針はゴーマ皇帝と政治機関たる元老院が決定して、皇族の血を引く者が皇位継承権を持ち、継承者が2人以上いればその者同士で対決し、勝者が次期皇帝となれる。即位には「大地動転の玉」が皇帝の証として受け継がれるけど、正式な即位は前皇帝が引退してからでなければならぬの、ゴーマの主要人物はゴーマ十五世、田豊將軍、阿古丸、そして実質的な指揮を取っていたのはシャダム中佐、ガラ中佐、ザイドス少佐の3人が中心になつていたの。」

データス「でも、このゴーマには不思議なことがあるんです。」

大河「不思議なこと？」

火麻「なんだそれりゃ？」

カイル「実は、ゴーマの主要人物はみんな泥人形だったんだ、実は6000年前の戦いの時に実はゴーマの主要人物はほとんど死んでいて、皇位継承があるシャダム中佐が自分が皇帝になるために裏で暗躍していたと思われたんだが、実はそのシャダム中佐も泥人形だったんだ……」

はやて「……なんとなく、妖魔が絡んでる気がする話やな……」

シャマル「そうね……」

リン「私もそう思う。」

カイル「まあ、実際のところはよくわかってないがな……」

レオナ「それで、次は……」

サスケ「スーパー変化、ドロンチェンジャー！」

サスケ「ニンジャレッド、サスケ！」

鶴姫「ニンジャホワイト、鶴姫！」

サイゾウ「ニンジャブルー、サイゾウ！」

セイカイ「ニンジャイエロー、セイカイ！」

ジライヤ「ニンジャブラック、ジライヤ！」

ニンジャマン「ニンジャマン！」

サスケ「人に隠れて悪を斬る！」

カクレンジャー「カクレンジャー戦隊、カクレンジャー見参！！」

メルト「次は、18番目忍者戦隊カクレンジャーね、彼らは退魔を専門とする忍者集団「隠流」の使い手の末裔なの、彼らは「妖怪軍団」と戦って封印したの。」

ティアナ「妖怪なんて居たんですね・・・」

レオナ「ええ、元々カクレンジャーの司令官的存在の三神将は元々は人間の賢者として、2000年前の妖怪と戦い、そして、今の姿になったの、三神将はそれぞれ「心・技・体」を司り、無敵将軍が「体」ツバサマルが「心」隠大将軍が「技」を司っていたんだよ、ちなみにカクレンジャーに協力していたニンジャマンは彼らの弟子だったの。」

ティア「ちなみに彼らが戦った妖怪は、人の心に潜む怒りや憎しみの情念が生み出した姿で、それぞれ個々に動いたんですが、後に妖怪の支配者である妖怪大魔王の息子である貴公子ジュニアことガシヤドクロが現れてから妖怪同士で共同戦線を張るようになったんです、さらに妖怪軍団の主要人物の中にはニンジャホワイトのお父さんが居たんです、自分の家来を守るためにあえて敵に寝返ったフリをしていたんです、その後色々あってニンジャホワイトと親子同士で和解できたんです、そして、妖怪大魔王は人の負の感情そのものなので倒すと倒された妖怪たちが復活してしまうので、再び封印の扉に封印したんです。」

流星「人の心は、複雑だからね、まさに人の心の戦いと言っても過言ではなかったと言うことか・・・」

凱「そうだな、流星の言うとおりだ、俺達もゾンダーメタルを見てきたからわかる気がする・・・」

とその時、ワドルドゥが来た。

ワドルドゥ「あゝ、そろそろ一旦食事休憩なされてはいかがですか？」

はやて「せやね、そろそろ食事の時間やな、ほならみんな休憩しようか？」

そう言っつて、ワドルデイが食事を運び、一旦食事休憩することになった。

第42話 特別編 歴代スーパー戦隊の歴史 前編（後書き）

どうも、今回は前編です、残りのスーパー戦隊は次回に出します、なおターボレンジャーは本当は個別の名乗りは無かったんですが、全員の名前を出したかったためこのようにしました、それではまた次回の後編をよろしくお願いします。

第43話 特別編 歴代スーパー戦隊の歴史 後編（前書き）

どうも、やっと更新できました、後編はオーレンジャー〜ゴーカー  
ジャーまでのスーパー戦隊の特集です、あと最後に宇宙警察の長官  
が出てきますが、設定としてはオリジナルですがデカレンジャーに  
出てきたのヌマ・O長官の子孫です。

第43話 特別編 歴代スーパー戦隊の歴史 後編

デカベース

みんなで食事休憩を1時間後、再び残りのスーパー戦隊の紹介に戻った。

クロノ「それじゃ、続きを頼む・・・」

レオナ「ええ、それじゃ続きね、次はね・・・」

吾郎「超力変身！」

リキ「超力変身！」

吾郎「オーレッド！」

昌平「オーグリーン！」

裕司「オーブルー！」

樹里「オーイエロー！」

桃「オーピンク！」

吾郎「超力戦隊！」

オーレンジャー「オーレンジャー！！！」

リキ「キングレンジャー！」

ティア「次は、19番目超力戦隊オーレンジャーです、彼らは6億年前の超古代文明が残したオーバーテクノロジーである超力という力を使って戦う、国際空軍（U・A）のメンバーからの選抜チームで「マシン帝国バラノイア」と戦いました。」

大河「な、なんと、6億年前だと・・・！？」

ロゼ「そ、そんな古代に文明が存在したというのかい？」

ティア「事実です、その証拠にオーレンジャーの方々協力していたキングレンジャーは、6億年前の古代人です、その関係でキングレンジャーのスーツを元にオーレンジャーのスーツが作られたんです。」

ユーノ「・・・たしかに無限書庫にも、僅かながら6億年前の地球

にそのような文明が残っていたという記録が残っています。」

クロノ「無限書庫にあると言うことは、どうやら本当のようだな．．

」

ティア「オーレンジャーはテトラヒートロンTHエネルギーと言うものをエネルギーにしていたんです、これは空気や大地などあらゆる場に満ちる大自らのエネルギーで、いわゆる「ピラミッドパワー」も、THエネルギーの一種で、生物の細胞を活性化させる作用がありますが、ある種の適性を持った人間に限り、THエネルギーによって内在的な力が引き出され、特別な能力を発揮できるようになります、この力を超力といいます、この超力は人間の身体能力を30〜40倍にも高める他、様々な超常現象を引き起こし、死者を蘇らせることさえあるそうです。」

パピヨン「死者を蘇らせることができるなんて．．．」  
猿頭寺「すごい力だ．．．」

アイム「さらにオーレンジャー達が使ったマシンは5台の超力モビルが合体したオーレンジャーロボ、さらにその2年前に作られていたレッドパンチャーが居てこの2体が合体してバスターオーレンジャーロボに合体する、そして、5体のプロッকারロボが合体してオープロッকারにサポートロボットのタックルボーイがあり、キングレンジャーには超古代文明が作り出したピラミッド要塞で、これとオープロッকারまたはオーレンジャーロボとレッドパンチャーと合体することでバトルフォーメーション二変形できる。」

ソルダート「なんとという巨体だ、我がキングジェイダーに匹敵しているぞ．．．」

ジーク「この他にもガンマジンって言うキングレンジャー曰く6億年前に一度だけ現れたという不思議な魔神が居たそうだ、こいつは普段は岩状になって封印されているが、呪文を唱えながら頭の鍵穴に鍵を回すと目覚め、その者の願い事をかなえろと言われている、ただ人を傷つけたりするような願いは受け付けないし、自分が気に入らない願いごとについては受け入れない事もあり、目覚めさせ

た者にだまされた場合はその者におしおきを加えることもあるそう  
だ。」

カイル「ちなみにこの超力という力は、神使いとされるドリンとい  
う少女が源で、彼女は超力の故郷とされる特殊な宇宙空間から地球  
へ来たとされている、そのためキングレンジャーは彼女を守るため  
のナイトだったんだ、そのためバラノイアとの最終決戦の際に彼女  
が倒れたことで変身できなかつたんだが、その後、なんとか力を取  
り戻して戦ったんだ。」

レオナ「そして、彼らが戦ったマシン帝国バラノイアは、地球を支  
配し、人間を奴隷にしようと企む機械生命体の帝国で、起源は古代  
地球文明が作り出した一体の機械生命体を始祖としているの、彼ら  
は人間に反乱を起こしたんだけど当時のキングレンジャーが彼らを  
地球から追放したんだけど、この時代に地球に戻ってきたの、支配  
者はキングレンジャーによって地球から追放された皇帝バツカスフ  
ンドに妻の皇妃で後に皇太后ヒステリア、さらに息子で後の皇帝の  
ブルドントにその妻皇妃マルチーワ、執事のアチャとコチャ、バツ  
カスフンドが信頼する幹部のケリスが居て、さらにかつてバツカス  
フンドに反逆し宇宙へ逃れ、バツカスフンドの死を知って、戻り一  
時的とはいえ皇帝の座に就いたボンバー・ザ・グレートが居たの、  
彼らは人間や動物などの有機生命体は一切存在せず、無機物のみ  
よって構成されているのそのため寿命で死ぬことが無いから命の概  
念に対しては無頓着なのが多いんだけど、人間と同じように子を成  
すことも出来て、ヒステリアに関してはブルドントとマルチーワの  
間に出来た子供で孫のジュニアの世話をしているうちに命の尊さに  
気付き始めて、最後はジュニアは何の罪も犯していないと言って、  
自分は今までの罪を償うために自爆して死んだの、オーレンジャー  
にジュニアを託したの・・・その後ジュニアはガンマジンが引き取  
ったの、ついでに根性を叩きなおすとか言つてアチャとコチャまで  
連れて行ったの。」

炎竜「たとえどんな機械でも、心があるということか・・・」

氷竜「私達のように、正しい教育を受けていなくても、自然に気付いてくれるということか．．．」

ボルフォッグ「それは全てのロボットにおいて共通だった．．．」

風竜「それが知れただけでもよかった．．．」

雷竜「まったくだぜ．．．」

凱「ああそうだな、みんな．．．」

牧野「えくと、次は．．．」

恭介「激走、アクセルチェンジャー！」

恭介「レッドレーサー！」

直樹「ブルーレーサー！」

実「グリーンレーサー！」

菜摘「イエローレーサー！」

洋子「ピンクレーサー！」

カーレンジャー「『戦う交通安全！激走戦隊、カ〜〜レンジャ

〜！〜！〜！』」

シグナルマン「シグナルマン！」

フィオネ「次は、20番目激走戦隊カーレンジャーです、彼らはハザード星の生き残りの少年ダップに選ばれた元々は自動車会社ペガサスで働いていた一般市民でハザード星に伝わる正義の星座伝説であるクルマジックパワーを武器に「宇宙暴走族ボーゾック」と戦って、最終的には彼らを改心させ、黒幕の「暴走皇帝エグゾス」を倒して全宇宙の平和を守った戦う交通安全のスーパー戦隊です。」

ヴィータ「．．．なんなんだよ、その戦う交通安全はよ．．．」

シグナム「．．．私に聞くな．．．」

ティア「え〜とですね、彼らの使ったクルマジックパワーは夢の力です、ダップさんが楽しい夢を見ようとすると心が力になるんです、ちなみに他にも彼らの協力者の中にシグナルマン・ポリス・コバーンさんという宇宙警察の方が居て、さらにダップさんのお父さんでVRVマスターと言う方々が居たんです。」

命「宇宙警察はこの時期にも地球に来ていたんですね。」  
メルト「後カーレンジャーの巨大ロボは5台のレンジャービークルという巨大な車が合体してなるRVロボが居て、さらにVRVマスタワーが持ってきてくれた、5台のVRVマシンとそれを運ぶビクトレーターにさらにVRVマシンが合体してVRVロボになるの、ちなみにこの2体のロボットはパーツを組み替えることが出来るようになっていて一度だけそれを使う状況があったの それとシグナルマンにもサイレンダーという巨大パトカーから変形するロボットを持っていたの。」

フィオネ「そして、彼らが戦ったポーゾックは宇宙各地の荒くれ者が、総長であるガイナモを中心に集まって結成された宇宙暴走族。健康と馬鹿が取り柄らしくて、平和な星を面白半分で襲い、花火のように爆発させ滅ぼす事を楽しみにしていたらしく、ダップさんの故郷の星であるハザード星を滅ぼした後、地球も花火にしようとして地球に来たそうです、メンバーは総長のガイナモを始め、副長ゼルモダ、発明家グラッチ、後にレッドレーサーさんと相思相愛の仲になったゾンネットさんことバニティミラー・ファンベルトさんというファンベル星の第一王女という方が居て、さらに一時的に総長を追い出して総長の座についていたリッチリッチハイカー教授がいたそうです、ちなみにポーゾックのほとんどの方々は後に地球に住んだそうです。」

火麻「...馴染み過ぎだろう...」  
フィオネ「そして、暴走皇帝エグゾスはカーレンジャーの力の源でもある、正義の星座伝説と対を成す悪の星座伝説の力を持つ存在で、その正体はそれはスピード違反は当たり前、交通事故も起こし放題の「恐怖の大宇宙ハイウェイ」を建設することを目論む宇宙の地上げ屋で、ハイウェイの建設予定地にハザード星や地球等の惑星が点々と存在している事を邪魔に思い、まずハザード星を占い師スゾグエという偽名を使ってガイナモに「『ハ』で始まる星を滅ぼすと良い事があるでしょう」という年賀状を送って、ハザード星を滅ぼ

させるよう仕向け、さらに地球も消滅させようとしたのですが、ポーゾックの不甲斐ない姿を見て前に現れたそうです、ちなみにエグゾスは1度カーレンジャーの力の源である5つの正義の星座を体内に取り込んで変身不能に追い込んだそうです、その後、力を取り戻したカーレンジャーが戦いを挑んだんですが、圧倒され絶体絶命だったんです。」

ティアナ「どうやって倒したんですか？」

レオナ「...信じられない話だけど、腐った芋羊羹を食べさせたからパワーダウンして、その時に倒したの。」

その話に一同絶句した。

凱「...そんな馬鹿な...というか、なぜ芋羊羹？」

レオナ「話によるとね、ポーゾックのメンバーは和菓子屋「芋長」

の芋羊羹で巨大化できるの、ちなみにコンビニの芋羊羹を食べると小さくなってしまふの、最後の戦いの時にガイナモが食べて巨大化して戦おうとしたんだけど、それが賞味期限切れしていてすぐに元に戻ったんだけど、ガイナモがそれでエグゾスに食べさせたら案の定、お腹を壊して、逆転につながったの...」

シャマル「...なんと行っていいのかしら...」

はやて「そんなアホらしい方法でやられたんか...」

ザフィーラ「まったくだ...」

その言葉に全員、啞然とするしかなかった。そして、牧野先生が空気を变えるべく声を出した。

牧野「ま、まあ、気を取り直して、次は...」

健太「インストール、メガレンジャー！」

デジタイザー「3、3、5、Enter！」

裕作「ケイタイザー、インストール！」

ケイタイザー「2、5、8、0、Enter！」

健太「メガレッド！」

耕一郎「メガブラック！」

瞬「メガブルー！」

千里「メガイエロー！」

みく「メガピンク！」

裕作「メガシルバー！」

健太「電磁戦隊！」

メガレンジャー「メガレンジャー！！！！」

エリス「次は、21番目電磁戦隊メガレンジャーね、彼らはターボレンジャーと同じ高校生なの、まあ6人目は違うけど、世界科学者連邦（I・N・E・T）という組織直属のチームで、異次元からの侵略者「邪電王国ネジレジア」と戦ったスーパー戦隊よ。」

クロノ「別世界からの支配か、スーパー戦隊はホントに色々な敵と戦ったんだな・・・」

エリス「このメガレンジャーが使った強化スーツを始めとしたのは元々は宇宙開発に使われるはずだったものだったの、でもネジレジアの侵略がわかって急遽このような形で使われることになったのよ、そしてメガレンジャーが最初の頃、拠点にしていたメガシップがメガシャトルと合体することでギャラクシーメガになり、さらに新たに開発されたデルタメガと合体することでスーパーギャラクシーメガになるの、そして、メガシルバーが責任者になって進んでいた「スペースメガプロジェクト」という計画で作られたスーパーギャラクシーメガよりも強力な5体のボイジャーマシンが合体したメガボイジャーにメガシルバー専用口ボメガウインガーを使って戦ったの。」

レオナ「そして彼らが戦った、ネジレジアは異次元世界・ネジレ次元に本拠地を置き、支配者の邪電王ジャビウス1世がこの世界を形成していたの、指揮官にはメガレンジャーの指揮官にして生みの親とも言うべき久保田博士の親友の鮫島博士ことDr・ヒネラーが作戦を立て、それをDr・ヒネラーが生み出した部下のシボレナ、ユガンデが前線で指揮を取り、さらにネジレ獣やサイコネジラーを巨大化させるビビデビにさらにジャビウス1世の直属の部下のギレー

ルが居たの。」

ユーノ「たしか無限書庫の記録によると、ジャビウス1世が消滅したことでそのネジレ次元が消滅したという記録が残されています。」  
牧野「ええ、その通りです、そして、Dr・ヒネラーはまず自分の部下であるユガンデがギレールの騙されて重傷を負われた時、今度はギレールを騙して自我を失って、メガレンジャーに倒されるきっかけを作ったそうです、さらにジャビウス1世の細胞を母体に取り出した邪電戦隊ネジレンジャーという悪の戦隊を使って、メガレンジャーともどもジャビウス1世を葬ろうとしたんです、このネジレンジャーは力を使えば使うほどジャビウス1世が苦しむように仕組まれていたようで、その関係でネジレンジャーが全てメガレンジャーに倒されたことによりジャビウス1世は消滅し、彼がネジレジアを支配したそうです。」

八木沼長官「しかし、不思議ですねDr・ヒネラーは、どうして彼はそのネジレジアに協力したんですか？」

牧野「．．．実は、このネジレンジャーの強化スーツなんです、普通の人間には到底耐えられない構造になっていて、そのためDr・ヒネラーこと鮫島博士は自分の娘で人体実験を行ったんです、その結果、実験は失敗して娘を死なせ、世間からの非難が集中したんです、その上久保田博士が発明したメガスーツが成功して実用化が決定してしまっただんですよ、その結果逆恨み同然で、久保田博士を裏切ってネジレジアに行ってしまったんです．．．」

獅子王博士「．．．科学者として、彼はもつとも大事なものを置いていってしまったんじゃない．．．」

ルネ「じじい．．．」  
凱「叔父さん．．．」

データス「それでは、次はデスね．．．」

リヨウマ「銀河転生！」

ヒュウガ「騎士転生！」

リヨウマ「ギンガレッド、リヨウマ！」

ハヤテ「ギンガグリーン、ハヤテ！」

ゴウキ「ギンガブルー、ゴウキ！」

ヒカル「ギンガイエロー、ヒカル！」

サヤ「ギンガピンク、サヤ！」

ヒユウガ「黒騎士ヒユウガ！」

リヨウマ「銀河を貫く伝説の刃！星獣戦隊！」

ギンガマン「「「ギンガマン！！」」」

ジーク「次は、22番目星獣戦隊ギンガマンだ、彼らは星の力アースという力を武器に星を守る神秘の生物である星獣と共に「宇宙海賊バルバン」と戦った、約3000年以上前から存在する伝説の戦士だ。」

シヤマル「私のレンジャージャケットの力の元のスーパー戦隊ね。」

レオナ「アースはね、地球の自然から与えられる星を守る力でチェンジマンのアースフォースに似て非なる力だね。」

トモロー「...星獣か、聞いたことがあるな、やはり、前々から思っていたが、この地球には宇宙全体を探しても不思議な力に恵まれている星はそうは無いな。」

アイム「ギンガマンは、元々3000年前に星獣たちとともにバルバン封印のため戦ったギンガの森の戦士で、このギンガの森は結界が張られていて、その関係で場所がわからず、いつしか伝説となっていたんだ、彼らは第133代目の戦士なんだ。」

イクス「...私が眠りつく前の時代よりも前から存在していたんですね、お父様。」

ジーク「ああ、そうだイクス、それとギンガマンと共に戦った星獣は、ギンガレオン、ギンガルコン、ギンガリラ、ギンガベリック、ギンガットが居て、これらが自在剣・機刃の力を受けると銀星獣というメタリックなボディになり、5体が合体するとギンガイオーになるんだ、さらに後に外宇宙より黒騎士ブルブラックが地球に持ち込んだ超エネルギー「ギンガの光」の力でギンガマンと共にパワー

アップした姿の超装光ギンガイオーになるんだ、そのほかに銀河の光を地球に持ち込んだ黒騎士ブルブラックも後にギンガレッドの兄である、ヒュウガ先輩に自分の命と引き換えに力を渡し、黒騎士ヒュウガになったんだ、そして、その相棒の重星獣ゴウタウラスと合身して合身獣士ブルタウラスになるんだ、その他にも鋼星獣と言つて、かつてバルバンに滅ぼされた星を守護していた星獣が、バルバンに協力していた闇商人ビズネラによつて捕らえられ、改造された姿で、ビズネラによつて操られ、ギンガマンと敵対していたが、ギンガマンと星獣たちの説得で正義の心を取り戻して味方になったんだ、鋼星獣にはギガライノス、ギガフェニックス、ギガバイタスが居たんだ。」

凱「星獣にも色々いるんだな・・・」

カイル「そして、彼らが戦つた宇宙海賊バルバンは、かつて銀河の星々を荒らし、滅ぼしまわつた魔人海賊集団で、魔獣ダイタニクスの背中に彼らの城である荒くれ無敵城を築き、魔獣要塞ダイタニククという母船にし、約3000年前に地球に襲来したが、初代のギンガマンと星獣達によつて海底に封印され、このギンガマンの代に地震によつて封印が解かれて復活したんだ、メンバーは船長のゼイハブ船長を筆頭に、実質上のNo.2の操舵士シエリンダ、さらにその下の魔人を指揮する4軍団が居てその隊長が銃頭サンバツシユ、剣将ブドー、妖帝イリエス、破王バツトバスと後にバツトバスの参謀になった闇商人ビズネラが居て、さらに後にバルバンを裏切つた樽学者ブクラテスがいたんだ。」

華「どうして裏切つたんですか？」

カイル「実は、このイリエスはブクラテスの姪で、1度手柄を取られるのを嫌がつた彼女のためにブドーを陥れたんだ、まあこの時はゼイハブは見逃したんだけどな、しかし、その後イリエスがギンガマンに敗れた時に無断で復活させようとして見切りを付けられて、始末されたんだが生きていてゼイハブを倒そうとしてヒュウガ先輩を利用したんだ、ちなみにゼイハブは3000年前の戦いで星獣た

ちに瀕死の重症を負わされた際に「星の命」というものの影響で不  
死身の身体になっていたんだ、それに対抗するために一度それに対  
抗するための武器であるナイトアックスという武器を使っただ、  
しかし、この武器はアースの力を持っていると使うことが出来ない  
から先輩は一度アースを捨てたんだが、最後の戦いで力を取り戻し、  
兄弟の力で「星の命」の力を無力化したんだ。」  
牛山「．．．最後は、兄弟の力で打ち勝ったんだな．．．」  
アコース「絆というものは、どんな時でも強い力になるものだね。」  
レオナ「え」と、次はね．．．」

マトイ「着装！」

マトイ「ゴーレッド！」

ナガレ「ゴープール！」

シヨウ「ゴージェーン！」

ダイモン「ゴイエロー！」

マツリ「ゴープィンク！」

マトイ「人の命は地球の未来！」

ナガレ「燃えるレスキュー魂！」

シヨウ「救急戦隊！」

ダイモン「ゴー！」

マツリ「ゴー！」

ゴーゴーファイブ「「ファイブ！」」

マトイ「出場！」

ティア「次は、23番目救急戦隊ゴーファイブで、彼らは実の  
父である巽博士によって作られた、アンチハザードスーツを纏い、  
「災魔一族」相手に人の命と地球の未来を守った、レスキューソル  
ジャーです。」

スバル「救助隊志望の私には非常に興味のあるスーパー戦隊ですね。」

ティア「彼らは元々首都消防局レスキュー隊員、首都消防局化学消

防班員兼研究スタッフ、首都消防局航空隊ヘリコプター部隊員、首都警察巡查、国立臨海病院所属救急救命士で、この人たちの父である巽博士は宇宙のマイナスエネルギーがもたらす大災害を予見し、10年間家族と離れてゴーゴーフアイブの装備を独力で開発していたそうです。しかし、8年前に夫を探して奥さんまで行方不明になつていたんですが、最後の戦いの際に生きることがわかつて、戦いの後に再会したそうです。」

獅子王博士「...きつと、巽博士は家族を巻き込みたくなかったから、そのような行動を取ったんじゃない...」

カイム「そして、ゴーゴーフアイブの戦力としては、ゴリライナーとそれから運搬されてくる5台の99マシンが合体して完成するビクトリーロボとマックスシャトルから変形するAIを搭載しているライナーボーイと合体してマックスビクトリーロボとゴリライナーが合体してなるグランドライナー、他にマーズマシンという宇宙空間での仕様を前提に作られているマシンが合体して、ビートルマーズになり、さらに変形してビクトリーマーズになるんだ、そして、最後の切り札としてコクピット内のケーブルでつながれた操縦者の精神力を動力とするブラックマックスビクトリーロボが存在したんだ。」

閻竜「こうしてみるとこの人たちのロボットはレスキュー用のロボットが多いですね。」

光竜「なんか、氷竜お兄ちゃんたちみたいだね。」

アイム「なにしろ、どんなに小さい一つの命でも必死に救おうとする精神だったんだ、モットーが人の命は地球の未来だからな。」

炎竜「くう、いい事言うじゃねえか。」

氷竜「まったくだ、我々も負けてられないな。」

カイム「そして、彼らが戦った災魔一族は破壊そのものを目的とする悪魔の種族でしょうかは妖魔と同じ魔族だな、大いなる災いをもたらす惑星配列グランドクロスを利用して、地球に大災害をもたらそうとしていたんだ、

支配者は大魔女グランディーヌでその正体は宇宙のマイナスエネルギーの結合体で、敵の幹部は皆、グランディーヌの子供の災魔4兄弟といわれていた、それぞれ長男から冥王ジルフィーザ、次男獣男爵コボルダ、長女邪霊姫ディーナス、さらにグランディーヌがもつとも可愛がっていた三男童鬼ドロップこと龍皇子サラマンデスにさらに執事の呪士ピエールがいたんだ、ちなみにこの4兄弟には実はもう一人居たんだ、それは本当の長男であった闇王ギル、こいつは生まれてすぐに母親であるグランディーヌの命を狙ったため、すぐに闇地獄と呼ばれる場所に落とされたんだが生き延びていて闇地獄を支配していたそうだ・・・」

フェイト「・・・生まれてすぐに実の親を殺そうとするなんて・・・」

「  
エリオ「・・・恐ろしいですね・・・」

カイル「あとそのせいか、グランディーヌは自分の子供を捨石にしか考えてなかったようだ、まあサラマンデスに対しては失敗するまでは目を掛けていたようだがな、その関係で兄弟思いのジルフィーザが反逆しようとしたそうだ、最後はエネルギーの状態でシルフィーザとサラマンデスの肉体を使って心を持たない2大破壊神にして、ゴーゴーフアイブを追い詰めたんだが、最後は巽博士が作ったブラックマックスビクトリーロボと兄弟の絆の力で戦いに勝利したんだ。」

戒道「・・・親に恵まれなかったんだな、その災魔兄弟の奴らもなんだか哀れに思えてきたな・・・」

ソルダート「そうだな、アルマ・・・」

牧野「え〜と、次はですね・・・」

竜也「クロノチェンジャー！」

直人「タイムファイヤー！」

竜也「タイムレッド！」

ユウリ「ピンク！」

アヤセ「ブルー！」

ドモン「イエロー！」

シオン「グリーン！」

タイムレンジャー「タイムレンジャー！！！！」

直人「タイムファイヤー！」

アイム「次は、24番目未来戦隊タイムレンジャーだ、彼らは1000年先の未来から逃亡してきた未来の犯罪者集団「ロンダースフアミリー」と戦い、彼らを逮捕し、そして大消滅という局面を止めて未来を変えた未来から来たスーパー戦隊だ。」

高之橋博士「なるほど、彼らの圧縮冷凍システムは未来の技術だったんですね。」

データス「ええ、彼らのうちタイムレッドとタイムファイヤーだけがその時代の人間で、それ以外のメンバーは未来の人間なんです、元々タイムレンジャーは不法な歴史修正などを監視する公的機関「時間保護局」に所属する時間保護局員なんです、彼らはロンダースフアミリーを追って、この時代に現れたんです。」

エリス「そして、彼らの戦力としては5機のタイムジェットが合体した巨大戦闘機のタイムジェット、さらに巨大ロボット形態としてはタイムロボ、タイムロボとさらに自律型戦闘ロボットでタイムロボと合体することができるタイムシャドウがいたの、そしてタイムファイヤーが使うロボットで恐竜型生体自律ロボのブイレッツクスがいたの。」

ジーク「そして、このタイムレンジャーが戦ったロンダースフアミリーは犯罪者ドン・ドルネロを首領とする組織で、金目当てのために犯罪活動をする未来から来た犯罪者集団だ、主要人物には首領のドン・ドルネロ、側近で機械化人間のギエン、ドルネロの情婦のリラがいたんだが、それ以外のメンバーは基本的に犯罪者同士であるだけでドルネロとは特につながった関係でもなかったんだ、ちなみにドルネロは側近のギエンに昔、対立組織に追われていたドルネロを匿ったことでギエンは瀕死の重傷を負ったことで、彼に恩義を感

じたドルネロによつて、高密度の 2000 と電子頭脳を大量に使用した機械化人間として再生されたそうだが、しかしその代償で電子頭脳の使い過ぎによつて年月とともに人格は失われていき、金儲けよりも破壊活動を好むようになっていき、最終的には破壊衝動を抑えきれなくなつたことでドルネロに見限られ、制御キーを差し込まれ機械化以前の性格に戻されたんだが、ある人物の手によつて解放され、ドルネロを殺害して、ネオ・クライシスという巨大ロボを使つて破壊の限りを尽くしたんだ、まあタイムレンジャーの手によつて止められたんだがな．．．」

カイク「．．．そしてここからが本題だ、実はこのギエンの暴走を招き、さらにある意味全ての真の黒幕といつていいのはタイムレンジャーの上官でもあるリュウヤ隊長だつたんだ、彼は実は本当のタイムファイヤーで、昔ブイレックスの試作ロボットのGゾードの間移動実験に失敗して自分の死ぬ歴史を見たんだ、そのため自分が助かる歴史にしようと思ったんだ、さらにドルネロたちが逃亡した件もこの男が絡んでいたようだ。」

クロノ「．．．身内に敵がいるか．．．なんだか他人事のような気がしないな．．．」  
はやて「せやね．．．」

カイク「ちなみにこのリュウヤ隊長は、結局色々あつて死んで自分の運命を変えることが出来なかつたんだ．．．」  
スプリンガー「自分の都合で、歴史を変えようとした報いを受けたつてとこか．．．」

流星「．．．言葉は悪いけど、その通りなのかもしれないな。」  
データス「それでは、次はデスね．．．」

走「ガオアクセス！サモン・スピリット・オブ・ジ・アース！」

走「灼熱の獅子！ガオレット！」

岳「孤高の荒鷲！ガオイエロー！」

海「怒涛の鮫！ガオブルー！」  
草太郎「鋼の猛牛！ガオブラック！」  
牙「麗しの白虎！ガオホワイト！」  
月麿「閃烈の銀狼！ガオシルバー！」  
走「命あるところ、正義の雄叫びあり．．．」  
ガオレンジャー「百獣戦隊、ガオレンジャー！！」  
フィオネ「次の方々は、25番目百獣戦隊ガオレンジャーです、彼らは大自然の精霊である聖なる獣パワーアニマル選ばれた戦士で、邪悪な鬼「オルグ」と戦った戦士の方々です。」  
ザフィーラ「俺も彼らの力を受けた身だからな．．．」  
ティア「彼らと共に戦うパワーアニマルは、地球の生命力そのものが、地球上のさまざまな物質や元素を吸収し地上の動物の姿を取って実体化した大自然の精霊で、さらに鉄などの金属系の元素を多数取り込んだため金属質な体表になっているんです、確認されているパワーアニマルとしてはリーダーのガオライオン、ガオイーグル、ガオシャーク、ガオバイソン、ガオタイガー、ガオウルフ、ソウルバード、ガオエレファント、ガオジュラフ、ガオベアー、ガオポラー、ガオゴリラ、ガオハンマーヘッド、ガオリゲーター、ガオライノス、ガオディアス、ガオマジロ、ガオファルコン、ガオパンダ、ガオコング、ガオマウス、ガオステイングレイ、ガオホース、ガオピーコック、ガオエイブという種類のパワーアニマルが居たそうです、そしてこれらのパワーアニマルが合体することでガオキングを始めとする精霊王とも呼ばれる形態になるそうです、さらに1000年前のガオレンジャーのパートナーでもありパワーアニマル達の守り神・ガオゴッドに合体する、ゴッドパワーアニマルが居たそうです、それがガオレオン、ガオコンドル、ガオソーシャーク、ガオバッファロー、ガオジャガーの5体が居たそうです。」  
キャロ「ガオライオンは、ゴークイオーに合体してるから、知っていましたが、他にも居たんですね。」  
カイル「そして、ガオレンジャーが戦ったオルグは、この世に漂う

邪悪な思念や衝動が持つパワーが実体化した魔物で俗にいう鬼の一種だ、こいつらは言うなれば地球にとつては病原菌みたいな存在で、オルグを放っておけば地球上のあらゆる生命体は絶滅してしまうんだ、あとオルグ達はいずれも角を持っていて、角の数が少ないほど高位かつ強力なオルグになっている、主要なオルグは、ハイネスデュークといわれる最高位の位の奴には、シュテン、ウラ、ラセツの3人が居て、その下のデュークオルグには、ツエツエ、ヤバイバ、プロプラ、キュララ、ドロドロ、さらにある事情で姿を変えていたガオシルバーこと狼鬼が居たんだ、そして、後にオルグの巫女になったツエツエの手によって3人のハイネスデュークの亡骸を融合させた、至高にして究極のハイネス・唯一絶対のオルグの王であるセンキが居て、1度すべてのパワーアニマルを全滅させたぐらいの奴だ。」

凱「なんだつて、あのガオライオンを含めた百獣たちを全滅させた奴がいたのか・・・」

護「やっぱり敵も一筋縄じゃいかないね。」

レオナ「そして、次はね・・・」

ハリケンジャー「「忍風、シノビチェンジ！」」

ゴウライジャー「「迅雷、シノビチェンジ！」」

シュリケンジャー「「天空、シノビチェンジ！」」

鷹介「風が吹き、空が怒る、空忍ハリケンレッド！」

七海「水が舞い、波が踊る、水忍ハリケンブルー！」

吼太「大地が震え、花が歌う、陸忍ハリケンイエロー！」

鷹介「人も知らず・・・」

七海「世も知らず・・・」

吼太「影となりて悪を討つ！」

鷹介「忍風戦隊！」

ハリケンジャー「「ハリケンジャー！」」

鷹介「あゝ参上！」

一甲「深紅の稲妻、角忍カブトライジャー！」

一鍬「蒼天の霹靂、牙忍クワガライジャー！」

一甲「影に向かいて影を斬り……」

一鍬「光に向かいて光を斬る……」

ゴウライジャー「電光石火ゴウライジャー、見参！」

シュリケンジャー「I am ニンジャ・オブ・ニンジャ！緑の光弾、天空忍者シュリケンジャー、参上！」

エリス「次は、26番目忍風戦隊ハリケンジャーよ、彼らは戦国時代から続く忍者の流派である疾風流の伝説の後継者で、さらにライバルの流派の迅雷流のゴウライジャーや疾風流・迅雷流双方の忍術を極めている宇宙統一忍者流の使い手である天空忍者シュリケンジャーと共に宇宙忍者集団「宇宙忍群ジャカンジャ」と戦ったスーパー戦隊よ。」

ボルフォッグ「カクレンジャーと同じ、忍者の力を使うのですね。」  
カイル「ちなみにシュリケンジャーは疾風流・迅雷流を統べる「宇宙統一忍者流」の領導者である覚羅またの呼び名を御前様と呼ばれる人直属の忍者だったんだ。」

アイム「彼らの戦力としては、シノビマシンと呼ばれる3体のメカが合体して旋風神になる、またゴウライジャーの2体のシノビマシンが合体して轟雷神になり、あとカラクリ武者・風雷丸を中心に旋風神と轟雷神が2体が轟雷旋風神に合体する、あとシュリケンジャーには天空神と巨大なカラクリマシンであるリボルバーマンモスがあつたんだ、さらに旋風神・轟雷神・天空神が宇宙伝来のカラクリジェットと合体して誕生する天雷旋風神があり、他にも様々なバリエーションの合体があつたそうだ。」

エリオ「色々な合体のパターンがあるんですね。」  
メルト「そして、このハリケンジャー達が戦った宇宙忍群ジャカンジャは宇宙をさすらう邪悪な宇宙忍者の集団で、彼らの目的は忍者の究極奥義とされる当初は「アレ」と称されていた邪悪なる意志を手に入れることだったの、ちなみにジャカンジャの主要なメンバー

は、首領タウ・ザントにさらに敵の幹部には暗黒七本槍と呼ばれる7人の上忍がいたの　メンバーとしては、一の槍フラビージョ、二の槍チユウズーボ、三の槍マンマルバ、四の槍ウエンディーヌ、五の槍サーガイン、六の槍サタラクラ、七の槍サンダールの7人が中忍と呼ばれる部下を使ってハリケンジャーと戦ったの　後この邪悪なる意志と呼ばれる存在は実はジャカンジャを陰で操っていた存在で、ブラックホールに潜む世界を創り変えるほどの力を持つ異次元のエネルギー体だったの、目的は全てを無にした後に自身が支配する世界の創造で、最終決戦ではタウ・ザントやジャカンジャ幹部達の体を甦らせ、それに憑依してハリケンジャー達と戦って破れ消滅したの。」

トモロー「たしかに邪悪なる意志という存在は確かに私のデータにも曖昧だが登録されている、なるほどこの地球で倒されたというのか・・・」

ソルダートJ「そう考えると、恐ろしい相手と戦っていたのだな、このハリケンジャーも・・・」  
牧野「そして、次はですね・・・」

凌駕「爆竜チエンジ！」

凌駕「元気莫大！アバレット！」

幸人「本気爆発！アバレブルー！」

らんる「勇気で奮進！アバレイエロー！」

アスカ「無敵の竜人魂！アバレブラック！」

壬琴「ときめきの白眉！アバレキラ！」

凌駕「荒ぶるダイノガッツ！」

アバレンジャー「爆竜戦隊、アバレンジャー！！」

メルト「次は、27番目爆竜戦隊、アバレンジャーね、彼らは太古の力である精神エネルギーダイノガッツの戦士で、「エヴォリアン」相手に恐竜から進化した爆竜と呼ばれるパートナーと戦ったスーパー戦隊よ。」

ヴィータ「あたしのレンジャージャケットの力になっている連中だからな、このアバレンジャーは。」

アーム「このアバレンジャーの相棒の爆竜は太古の昔、恐竜が生息していた時期、地球に隕石が落下した時の衝撃で次元の歪みが生じ、地球は俺達が住む地球「アナザーアース」と異次元空間にある地球「ダイノアース」に分裂し、ダイノアースでは恐竜は滅びずにこの爆竜と呼ばれるより強靱で人間と同じくらいの知能を持つ生物に進化したんだ。」

炎竜「俺と氷竜も過去に飛ばされたことがあったが、まさか地球がそんな風に分かれたなんてな・・・」

氷竜「おそらく、私達と共に落下した隕石とは違うタイプの隕石だろうな・・・」

ジーク「そして、この爆竜達だが、ティラノサウルス、トリケラトプス、プテラノドン、ブラキオサウルス、バキケロナグルス、ディメノコドン、パラサロツキル、アンキロベイルス、ステイラコサウルス、トツプゲイラー、ステゴスライドンという種類の爆竜が居て、そこからアバレンオー、キラオー、マックスオージャと言った、爆竜が合体した戦闘巨人や様々な爆竜達と合体する爆竜コンビンなどがあつたんだ。」

フィオネ「そして、アバレンジャーの方々が悪ったエヴォリアンは6500万年前に地球に衝突してアナザーアースとダイノアースを発生させる原因となった巨大な隕石に付着していたのが、エヴォリアンの神デズモゾーリヤで、彼はダイノアースで部下となる邪悪な生命体・邪命体を生み出して大軍団を結成して、ダイノアースを滅ぼした後に地球に侵攻してきた生命体の軍団です、ちなみに支配者の邪命神デズモゾーリヤは地球とダイノアースにそれぞれ自分の魂を残しており、ダイノアースの魂は後にアバレブラックさんことアス力先輩の娘に当たる黎明の使徒リジエに、そして、地球の方はアバレキラさんこと仲代王琴先輩にそれぞれ宿していたんです、ちなみに幹部にはアス力先輩の恋人で後の奥さんの破壊の使徒ジャン

又ことマホロさん、創造の使徒ミケラ、無限の使徒ヴォツファ、暗黒の使徒ガイルトンがいたんです、ちなみに仲代先輩はなんとかデズモゾーリヤを身体から消滅させることに成功したんですけど、結局アバレキラールへの変身に必要なダイノマインダーが欠陥品のため爆発して、彼のパートナー爆竜でもあるトップゲイラーと共に死んでしまったんです・・・」

クロノ「・・・その男も自分の運命に弄ばれたと言うことが・・・」  
リンディ「そうね、悲しい結末ね・・・」  
データス「え」と、次はデスね・・・」

ドギー「チェンジ、スタンバイ！」

デカレンジャー「ロジャー！」

デカレンジャー「エマーゼンシー、デカレンジャー！」

テツ「エマーゼンシー、デカブレイク！」

ドギー「エマーゼンシー、デカマスター！」

スワン「エマーゼンシー、デカスワン！」

バン「一つ！非道な悪事を憎み！」

ホージー「二つ！不思議な事件を追って！」

セン「三つ！未来の科学で捜査！」

ジャスミン「四つ！よからぬ宇宙の悪を！」

ウメコ「五つ！一気にスピード退治！」

テツ「六つ！無敵が何かいい！」

デカレンジャー「SPD！」

バン「デカレッド！」

ホージー「デカブルー！」

セン「デカグリーン！」

ジャスミン「デカイエロー！」

ウメコ「デカピンク！」

テツ「デカブレイク！」

ドギー「百鬼夜行をぶった斬る！地獄の番犬デカマスター！」

スワン「真白き癒しのエトワール！デカスワン！」

デカレンジャー「「特捜戦隊、デカレンジャー！！」」

カイル「次は、28番目特捜戦隊デカレンジャーだ、彼らは宇宙警察通称「SPD」の地球署の刑事たちで、当時のアリエナイザーから地球の平和を守った、俺達が最初に大いなる力を解放してもらったスーパー戦隊だ。」

ティアナ「このスーパー戦隊は、私のレンジャージャケットの元になっっているですよ。」

ティア「彼らの内、デカブレイクさんこと始良鉄幹先輩は、宇宙警察本部直属の捜査機関の特別指定凶悪犯罪対策捜査官で通称特キヨウと呼ばれていました。」

リンディ「そっか、この間こられた宇宙警察の方もたしかここ所属だっって言ってたわね。」

ジーク「ちなみに、後にデカレッドこと赤座伴番先輩は、これよりも上の権限を持つ特殊チームファイヤースクワッドへ移動になったんだ。」

エリス「そして、このデカレンジャーの戦力としては、ゴーカイオーの力にもなっているパトストライカーを含む5台のデカマシンが合体したデカレンジャーロボにデカブレイク専用マシンのデカバイクロボが合体したスーパーデカレンジャーロボ、そのほかにもこの私達が拠点にしているこのデカベースの変形形態のデカベースロボ、そして、スワットモード専用マシンの5台のパトウイングが合体したデカウイングロボがあつたの。」

凱「最初に見せてもらったな、このデカウイングロボは・・・」

命「でもまさかあんな巨大な銃に変形するのは驚きましたけどね・・・」

アイム「そして、このアリエナイザーども相手に商売をしているのが、今妖魔の仲間になっているエージェント・アブレラだ、こいつは様々なアリエナイザーに犯罪を斡旋してきた宇宙の武器商人で、巨大メカの怪重機のレンタルや巨大化保険など守備範囲は広く私兵

も有して、金儲けのためだけに多くの銀河・星々を滅ぼしながら自分の正体は完璧に隠してきており、当時、宇宙警察のパンスペースクライムファイルにも記載されておらず、正体がわからなかったんだが、後にレイン星人と呼ばれる異星人であることがわかったんだ。

トモロー「レイン星人か、データによればレイン星人は宇宙で一番頭が良く、改造やドーピングによる超進化を繰り返したため一人一人が異なったルックスを持つと言われるそうだ。」

アイム「その通りだ、しかもその中でもその中でもアブレラは特に頭がいいと言われているそうだ、奴は度重なる商売の妨害により、累計損失額が100億を超えたことによる逆恨みの怒りから宇宙警察への報復を決行し、手薄となっていたデカベースを怪重機と多数のドロイドと最強最悪の傭兵軍団によって占拠し、さらにルーレットによって決めたターゲットの街をデカベースに破壊させるなど、宇宙警察に対する信頼の失墜をも目論んだそうだ、しかし、デカレンジャーのメンバーの奮闘により、最終的にはデリートされたそうだ……」

ゲンヤ「金儲けだけのために犯罪を繰り返してきたつてのか、ふてえ野郎だぜ……」

はやて「ナカジマ三佐、うちもそう思います……」  
レオナ「それじゃ、次はね……」

マジレンジャー「……天空聖者よ、我らに魔法の力を！ 魔法変身

！ マージ・マジ・マジロー！」「」

ヒカル「天空変身！ ゴール・ゴル・ゴル・ゴルディーロー！」

勇「天空変身！ ゴール・ゴル・ゴル・ゴルディーロー！」

勇「猛る烈火のエレメント！ 天空勇者ウルザードファイヤー！」

ヒカル「輝く太陽のエレメント！ 天空勇者マジシャイン！」

深雪「煌く氷のエレメント！ 白の魔法使い、マジマザー！」

詩人「唸る大地のエレメント！ 緑の魔法使い、マジグリーン！」

芳香「吹きゆく風のエレメント！桃色の魔法使い、マジピンク！」

麗「揺蕩う水のエレメント！青の魔法使い、マジブルー！」

翼「走る雷のエレメント！黄色の魔法使い、マジイエロー！」

魁「燃える炎のエレメント！赤の魔法使い、マジレッド！」

マジレンジャー「「「勇気の絆が未来を拓く！ 我ら魔法家族！

魔法戦隊、マジレンジャー！！」」」

アイム「次は、29番目魔法戦隊マジレンジャーだ、彼らは天空聖界マジトピアから魔法を力を与えられた5人兄弟とその両親に父の弟子であり、後のマジブルーの夫になったマジシャインの魔法使いの家族で、「地底冥府インフェルシア」と戦ったスーパー戦隊だ。」

キャロ「私のレンジャージャケットはこのマジレンジャーの力が宿っているんで、その関係でマジレンジャーの魔法を私は使うことができるんですよ。」

ティア「そして天空聖界マジトピアは、地上よりもはるか上空にある、雲の上に築かれた魔法の国で、全世界の魔法使いを統治していたそうで、さらにこのマジレンジャーが戦っていた時期よりさらに15年前にマジレンジャーのお父様のフレイジェルさんが率いる当時の5聖者守護隊が戦ったそうです。」

イクス「マジトピア・・・古代ベルカにおいても太古の昔に全ての世界の魔法の基礎となったと言われている魔法の都ですね。」

ユーノ「たしか、無限書庫においても管理局の使われている魔法文法は元を辿ればマジトピアから来ているそうですね、あとすべて魔法の元となっているためか、このマジトピアから直接生まれた魔法に関してはAMFがまったく影響が出ないそうですけど。」

シグナム「なるほど、だからマジレンジャーの力を使ってもスカリエッティの事件の際にはまったく影響が出なかったのか・・・」

カイク「そして、マジレンジャーの魔法の中には巨大化して戦うものもあって、それがマジマジンといって、マジフェニックス、マジガルーダ、マジマーメイド、マジフェアリー、マジタウロスがマジレンジャーの5人兄弟が巨大化変身した姿で、その内マジフェニッ

クス以外のマジマジンが合体した姿がゴークイオーの力にもなっているマジドラゴンになり、さらに5体が合体してマジキングになり、そしてマジシャインが使う別世界を行き来するために俺も使う魔法特急トラベリオンエクスプレスが変形して魔法鉄神トラベリオンになり、他にマジレンジャーがレジェンドフォームになったときに巨大化変身したマジファイヤーバード、マジライオンが合体した姿のマジレジェンドがあっただ、まあこれらは今俺のキングキートして使えるようになってるけどな。」

牧野「そして、彼らが戦った地底冥府インフェルシアは地底の奥深くに存在する闇のベールに包まれた世界で、力が支配する冥獣と冥獣人の帝国で、この戦いの15年前に地上支配を目論み侵攻しようとしたのですが先ほどの話の通りフレイジェルが自分の弟子達と共にインフェルシアの支配者は封印された上、地上へ続く冥府門の扉も閉ざされたんです、ちなみにこの時仲間の一人だったライジェルというものが裏切りそれが原因でフレイジェルは敵に洗脳されてしまったんです、インフェルニシアは力のある強者には地位と榮譽を与え、力なき弱者には過酷な世界と死を与える、弱肉強食の徹底的な完全実力主義社会で、主要なメンバーはフレイジェルに封印された、支配者でありインフェルシアの最高の冥獣にして、後に完全復活したときにインフェルシアの全てを司る恐怖の絶対神になった絶対神ン・マ、そのほかに実質的な最初の司令官でもあった凱力大将ブランケン、次の司令官にしてマジトピアを裏切ったライジェルこと魔導神官メーミィ、そしてフレイジェルが姿を変えられた魔導騎士ウルザード、後にマジレンジャーたちに味方した妖幻密使バンキュリアことナイとメア、さらにインフェルシアの伝説に伝わる巨大な姿を持つ、怒りと災厄の邪悪な神々の冥府神がいたんです、彼らは二極神、三賢神、五武神が居てそれぞれが圧倒的な力を持っていたそうです、冥府神には、スレイプニル、ドレイク、ダゴン、スフィンクス、ゴゴン、ティターン、ワイバーン、トード、サイクロプス、イフリートが居て、このうちティターンはン・マの魂が依

り代にされてしまい、スフィンクスはマジレンジャーたちとの戦いで気と絆の力の素晴らしさに興味を持ち絶対神ン・マに反旗を翻したそうです。」

アコース「敵も一枚皮じゃないのは、どこも同じと言うわけか．．．」

シャツハ「そうね、ロツサ、どんな世界でも正しいことを理解してくれる人もいるということね。」

データス「え」と、次はデスね．．．」

暁「レディ、ボウケンジャー、スタートアップ！」

映土「ゴーゴーチエンジャー、スタートアップ！」

暁「熱き冒険者！ボウケンレッド！」

真墨「迅き冒険者！ボウケンブラック！」

蒼太「高き冒険者！ボウケンブルー！」

菜月「強き冒険者！ボウケンイエロー！」

さくら「深き冒険者！ボウケンピンク！」

映土「眩き冒険者！ボウケンシルバー！」

ズバーン「ズバーン！」

暁「果て無き冒険スピリッツ！」

ボウケンジャー・ズバーン「轟轟戦隊、ボウケンジャー！！（ズバーン！！）」

フィオネ「次は、30番目轟轟戦隊ボウケンジャーです、この人たちは世界各地で失われかけている貴重な宝を集める民間団体・サージエス財団が大いなる力を秘めた古代の秘宝プレシャス今で言うところのロストロギアを悪用しようとする人たちから保護するために組織した精鋭部隊で、ネガティブシンジケートと戦ったスーパー戦隊です。」

カリム「この方々は、先日のイクスの件で協力してくださった方々ですね。」

カイル「その通り、彼らは元々レオナと牧野先生がいたスーパー戦

隊だからな、この二人から説明した方がいいだろう。」

レオナ「まかせて、キング君、私はここにいた頃はミスターボイスって姿でボウケンジャーのメンバーに指令を出していたの、ちなみに牧野先生はメカニックを担当していたの。」

牧野「私のほうはゴーゴービークルの説明をさせてもらいます、ゴーゴービークルはNo.1～No.18が存在して、主にNo.1～No.5が合体してダイボウケンになり、No.6～No.10までのビークルは基本、ダイボウケンの強化武装で、No.10以外のビークルが合体した姿がスーパーダイボウケン、さらにNo.1～No.10までのビークルが合体することでアルティメットダイボウケンになります、そして、No.11～No.13までのビークルはボウケンシルバー専用で、元々はサージエスレスキュー計画という災害や凶悪犯罪に対処するために用意され、その3体が合体し姿がサイレンビルダーです、最後がNo.14～No.18までのビークルがゴーゴーボイジャーになり、これは初期に他のビークルスタッフとは別のチームの手で開発されていたんです、本当はあまりの戦闘能力のため欠番にするつもりだったんですが、ある事情から正式に稼働させる羽目になり、ゴーゴーボイジャーが変形合体した姿がダイボイジャーになります。」

レオナ「ちなみにズバーンは大きさを自由自在に変えることが出来て、巨大化して戦うことも出来るの。」

牧野「そして、ボウケンジャーが戦ったネガティブシンジケートはプレシヤスを利益目的で収集する集団の総称で、複数の組織がいて一つがゴードムの心臓というプレシヤスの力で海を支配していた古代文明で、宇宙から飛来した破壊神ゴードムを信仰していたそうです、主要人物は大神官ガジャで彼はゴードム文明の指導者で4万年間眠りについていて彼を目覚めさせてしまいゴードム文明を復興しようとした、最終的にはボウケンジャーの事実上の最後の敵になりました、次はジャリユウ一族で、彼らは恐竜や伝説の動物のクローンを使いプレシヤスを強奪する集団で約200年前に誕生した

組織で、主要人物は創造王リユウオーンで彼はジャリユウ一族の長でその正体は元々は人間で、200年程前まではレムリア文明を調べる学者であったんですが、財宝に目が眩んだ仲間により裏切られ無人島に置き去りにされるて、このことがきっかけで人類を憎み滅ぼそうと決意し、自身が集めたレムリア文明の文献を調べる過程でレムリアの秘宝である幻獣の製造方法とプレシヤスである「レムリアの兜」を発見し、その技術を利用してこのような姿になりました。次はダークシャドウで「影の衆」と言われる忍者の末裔たちで、現代科学を凌駕する忍術を使いました、主な目的はあくまでも商取引による経済的利益であり、プレシヤスの獲得目的もプレシヤスそのものやその力により生み出される何かを商取引の材料とするためであるため、人類を滅亡させる考えは基本的には一人を除いて無かったようです、主要人物は頭領の幻のゲツコウ、副頭領にして後に裏切つて闇の三ツ首竜を使い世界を闇の世界に変えようと企んだ闇のヤイバとのくノ一で後に二番手兼次期頭領になった風のシズカです、最後に猿人が人類へ進化する過程で別系統の進化を辿った人間で、世界各地で生息したため今日の悪魔や妖怪といった様々な怪物などの伝承の元となったアシュというものが居てそのほとんどが「百鬼界」という空間に追放されたようで、その中でボウケンジャーで確認されていたアシュが怒りの鬼神ガイ、大いなる獣レイ、ヒョウガ、西の一族の長のオウガが居て、そしてその中でガイとレイは後にガジヤの手によってゴードムエンジンを埋め込まれ復活し、クエスターという探索者の意を持つ存在になったんです。」

「流星」．．．しかも、ここのメンバーの一部はあの時、ルシフェルが召喚していたものたちばかりだ．．．」

カリム「死してなおもその肉体を利用しようとするんですね、妖魔は．．．」

カイル「ああ、まったくもって恐ろしい奴らだよ．．．」

レオナ「そして、次がね・・・」

ジャン・レッツ・ラン「「滾れ獣の力！」」

ゴウ「響け獣の叫び！」

ケン「研ぎ澄ませ獣の刃！」

ゲキレンジャー「「ビースト・オン！」」

理央・メレ「「臨気外装！」」

ジャン「身体に漲る、無限の力、アンブレイカブル・ボディ！ゲキ  
レッド！」

ラン「日々是精進、心を磨く、オネスト・ハート！ゲキイエロー！  
レッツ「技が彩る大輪の花、ファンタスティック・テクニック！ゲキ  
ブルー！」

ゴウ「紫激気、俺流、わが意を尽くす、アイアン・ウィル！ゲキバ  
イオレット！」

ケン「才を磨いて、己の未来を切り開く、アメイジング・アビリテ  
イ！ゲキチョッパー！」

理央「猛きこと獅子の如く、強きこと、また獅子の如く、我が名は  
理央、黒獅子！」

メレ「理央様の愛のために生き、理央様の愛のために戦うラブウオ  
リアー、臨獣カメレオン拳使いのメレ！」

ゲキレンジャー「「燃え立つ激気は正義の証！獣拳戦隊ゲキレン  
ジャー！」」

メルト「次は、31番目獣拳戦隊ゲキレンジャーね、彼らは獣の力  
を心に感じ、獣の力を手にする拳法である獣拳の使い手、激獣拳ビ  
ーストアーツの戦士で彼らは相対する二つの流派の「臨獣拳アクガ  
タ」と戦い、後に一つの流派を纏め上げて、諸悪の根源の「無間龍  
ロン」を封印したスーパー戦隊よ。」

凱「たしか、俺達の潜在能力を引き上げた力、獣力開花はこのゲキ  
レンジャーの力だったな。」

アイム「その通りだ、元々獣拳の創設者ブルーサー・イーの元に集

まった拳法使いが、ゲキレンジャー達の師匠である七拳聖の7人が居たんだ、彼らが動物の姿をしているのは、ブルーサー・イーを暗殺し、臨獣拳アクガタを作った三拳魔と戦ったのちに「激臨の大乱」と呼ばれる戦いで禁断の技「獣獣全身変」によりそれぞれが持つ獣拳に該当する動物の姿を半擬人化した姿となったんだ。」

シヤマル「だから、猫の姿だったのね、あのマスター・シャンフーは……」

カイル「そして、ゲキレンジャーには、獣拳の力の源である「激気」を使い、最初は敵でのちに仲間になった臨獣拳アクガタの当主だった理央先輩とメレ先輩の二人は「臨気」という力を使って戦っていたんだ、そして、彼らは巨大化した敵に対抗する際には激気をゲキビーストをつくるゲキワザ「来来獣」を召喚でき、その種類としてはゲキタイガー、ゲキチーター、ゲキジャガー、ゲキジャガー、ゲキエレファント、ゲキバット、ゲキシャーク、ゲキゴリラ、ゲキペンギン、ゲキガゼル、ゲキウルフが居て、それらが合体して、ゲキトージャ、ゲキトージャウルフ、ゲキファイヤーになる、そのほかにゲキチョッパーが操り、俺が今もっているこの操獣刀で操ることが出来るブルーサー・イーの魂が宿る獣拳の神である獣拳神サイダインが変形して、獣拳巨神サイダイオーになるんだ、また理央先輩とメレ先輩のリンライオンとリンカメレオンがゲキトージャウルフと合体したゲキリントージャウルフ、さらにサイダイン、ゲキトージャ、ゲキウルフ、リンライオン、リンカメレオンが一つに合体したサイダイゲキリントージャがあつたんだ。」

ジーク「そして、このゲキレンジャーが戦った「臨獣拳アクガタ」は元々、大地の拳魔マク、空の拳魔カタ、海の拳魔ラゲクの3人が元々はブルーサー・イーに師事していた10名の獣拳使いの中で、邪な心に囚われた3名が悪へと走り離反した連中で、後に七拳聖によって封印されていたんだが、復活したが獣力開花を果たしたゲキレンジャーに敗れたんだ、ちなみにさらなる黒幕として、幻獣である無間龍ロンが居て、奴は永遠の時を生きる存在であるがゆえに日常

に退屈し、その退屈な時間を紛らわせるために幻獣王「破壊神を誕生させ、世界を滅ぼそうと画策し、手始めにマクに臨獣殿を築かせ、破壊神の素質を持つ者として選んだ理央先輩の家族を殺し、さらにゲキレッドことジャン先輩の実の父であるダンさんを闇討ちすることで理央が現在の状況に置かれるように仕向け、ダンさんにまつわるものを消すためにジャンの村も襲った、最悪の野郎だ、こいつは理央先輩が命を落としてまで倒そうとしたんだが、不死身にこいつを倒すことが出来ず、最終的にはこいつを封印することにしたんだ。」

護「退屈しのぎのためだけに、世界を滅ぼそうとするなんて・・・」  
戒道「まさに最悪の考えの持ち主だな・・・」

牧野「そして、次はですね・・・」

走輔「チェンジソウルセット！レッツ、ゴーオン！」

走輔「メットオン！」

走輔「マツハ全開！ゴーオンレッド！」

連「ズバリ正解！ゴーオンブルー！」

早輝「スマイル満開！ゴーオンイエロー！」

範人「ドキドキ愉快！ゴーオングリーン！」

軍平「ダツシュ豪快！ゴーオンブラック！」

大翔「ブレイク限界！ゴーオンゴールド！」

美羽「キラキラ世界！ゴーオンシルバー！」

ゴーオンジャー「正義のロードを突き進む！炎神戦隊、ゴーオンジャー！！」

ゴーオンウイングス「テイクオフ！ゴーオンウイングス！」  
エリス「次は、32番目炎神戦隊ゴーオンジャーよ、彼らは別の世界であるマシワールドからやってきた乗り物と動物が一体化した生命体「炎神」に選ばれた戦士で、全ての世界を汚染して自分達が住みよい世界に変えようとした「蛮機族ガイアーク」と戦った、スパー戦隊よ。」

ユーノ「たしか、マシンワールドは無限書庫によると地球経由でなければ行くことが出来ない11のワールドの一つとされる平行世界ですね。」

レオナ「そうなの、元々はそんなことはなかったんだけど妖魔との戦いの際に妖魔の君ジーンの力でそうなってしまったの。」

データス「そして、このゴーオンジャーの方々の炎神は、通常は10分間しか活動できないんですけど、今は改良されて他の世界でもある程度戦えるようになってるデス、まあキングキーがないから先の話デスけど・・・」

ティア「炎神の方々には、スピードル、バスオン、ベアールV、バルカ、ガンパードが通常の炎神で、ジャイアン族のキャリゲーター、さらに空を飛ぶウイング族でゴーオンウイングスのパートナーのトリプター、ジェットラス、そしてウイング族とゴーオンウイングスの教官でウイング族とジャイアン族の双方に属するジャン・ボエール、そして古代炎神族と言われ彼らのご先祖であるキシヤモス、テイライン、ケライン、また炎神ではないんですがサポートメカのゴロダーGTがいたんです、そしてこれらの炎神が合体した姿で、エンジンオー、ガンバルオー、セイクウォー、キョウレツオーになつて、さらに合体して、エンジンオーG6、エンジンオーG9、エンジンオーG12に合体できるんです。」

火麻「合体のバリエーションが多いんだな。」

レオナ「そして、彼らが戦ったガイアークは、ジャンクワールドを起源とする汚染された環境を好む悪の機械生命体の種族でね、元々は彼らもマシンワールドの住人で、炎神からは絶滅したと思われていたの、彼らがこの世界で戦ったガイアークはその一部でね、それ以外の世界にも色々いたらしいの、この世界で戦ったガイアークの主要メンバーは、害地大臣ヨゴシュタイン、害気大臣キタネイダス、害水大臣ケガレシアの3人が最初は主で、ヨゴシュタインの部下の害地副大臣ヒラメキメデスがいたの、彼らは基本的に仲間意識が強かったんだけど、その後出てきた害地大臣ヨゴシュタインの実の父

親の総裏大臣ヨゴシマクリタイン、掃治大臣キレイズキー、危官房長官チラカソーネの3人が現れたの彼らは目的のためなら仲間を平気で切り捨てる連中だったの、さらにこの戦いの後に別の世界へ旅立っていったゴーオンジャーがこの世界に戻ってきてシンケンジャーと一緒に戦った害統領バッチードがいたの。」

スバル「ひよつとすると、ガイアークはまだ生き残ってるかな？」

ジーク「おそらく生き残りはいるだろうが、そう簡単にもう下手なことは出来ないだろう、妖魔がいるしな・・・」

なのは「そうですね、彼らの恐ろしさはいくらガイアークでもわかるでしょうし・・・」

レオナ「そして、次はね・・・」

丈瑠「シヨドウフォン！一筆奏上！」

源太「スシチエンジャー！一貫献上！」

丈瑠「シンケンレッド、志葉丈瑠！」

流ノ介「同じくブルー、池波流ノ介！」

茉莉「同じくピンク、白石茉莉！」

千明「同じくグリーン、谷千明！」

ことは「同じくイエロー、花織ことは！」

源太「同じくゴールド、梅盛源太！」

丈瑠「天下御免の侍戦隊・・・」

シンケンジャー「シンケンジャー！！！！」

丈瑠「参る！」

ジーク「次は、33番目侍戦隊シンケンジャーだ、シンケンジャーは書かれた文字が司る力を具現化させる「モチカラ」という術を代々受け継ぎ、数百年前から外道衆と戦ってきた侍たちの末裔のスーパー戦隊だ。」

シグナム「私のレンジャージャケットの元になっているスーパー戦隊だ、何しろ当主のもっとも得意なモチカラが火だから私とは相性がよかったようだ。」

メルト「彼らは筆頭の志葉家を中心にその家臣の家系である池波・白石・谷・花織家の中からそれぞれ一人がシンケンジャーに選ばれて戦ったの、でも志葉家は17代目当主の時は外道衆との戦いでかなり追い詰められたの、そこで用意されたのが18代目当主の影武者である志葉丈瑠先輩だったの、その関係で家臣たちとは最初は若干距離を置いていたみたいなの、まあその後シンケンゴールドこと梅盛源太先輩が子供頃の約束で独学でシンケンジャーになって一緒に戦ったの、その後本当の志葉家18代目当主の志葉薫先輩が現れて、御役御免に丈瑠先輩はなっただけど、その後、薫先輩がなんと年上の丈瑠先輩を養子にして19代目当主として後を継がせて、外道衆の御大将血祭ドウコクを倒したの。」

命「と、年上の人を養子に!?!」  
華「す、すごいことしますね...」

カイル「そして、シンケンジャー巨大化した相手に戦うためにそれぞれシンケンジャーが所有する最新式の式神の折神が存在し、主に獅子折神、龍折神、亀折神、熊折神、猿折神の5体が合体して、侍巨人シンケンオーが誕生する、さらに兜折神、舵木折神、虎折神の3体はシンケンオーの強化武装になって合体して、ダイテンクウになり、上記の8体の折神が合体してテンクウシンケンオーになる、それ以外にも烏賊折神、海老折神と言ったシンケンゴールドが所持している折神もあり、海老折神が変形したダイカイオーとシンケンオーとダイカイオーが合体したダイカイシンケンオー、あと伝説の折神と呼ばれる恐竜折神、牛折神があつて、牛折神は変形してモウギユウダイオーになり、そして、恐竜折神以外の折神全てが合体したサムライハオーという切り札があつただ、そのほかにその提灯侍ことダイゴヨウがいるんだ。」

ダイゴヨウ「へい、おいらは変形することで巨大化することが出来るんで。」

フェイト「モチカラって、いろんなことが出来るんですね。」

ティア「でも、書き順が違つてと発動しないので漢字の使い方を覚え

ないとだめなんですよ。」

カイル「そして、シンケンジャーが戦った外道衆はあの世の三途の川に棲息する化け物たちで、この世とあの世の狭間に住む六道輪廻から外れた世界、冥府魔道の住人たちだ、奴らは自分たち外道衆による人間界の蹂躪・支配を目的としているが、三途の川から長く離れすぎると川の水が抜けて体が干上がってしまう「水切れ」を起すため、人間界での長時間の活動ができないことが障害となっており、三途の川は人間が苦しみ不幸になると水かさを増すことから、人々を襲い苦しめることで三途の川を人間界まで氾濫させることで、活動タイムリミットをなくして人間界を支配しようとしたんだ。そして、主な奴らは今妖魔の方で復活した外道衆の御大将血祭ドウコク、その知恵袋の骨のシタリ、さらにドウコクのお気に入りだった側近のはぐれ外道の薄皮太夫、さらにクサレ外道と言われる別の集団の脂目マンブク、さらに地獄を見たいという願望が強かった謎の外道衆の筋殻アクマロ、さらにどこにも属さないシンケンレッドと丈瑠先輩に戦いを挑んだはぐれ外道の腑破十臓がいたんだ、はぐれ外道は大半が三途の川でアヤカシとして生まれた存在の中でも希少な存在で、人間が外道に墮ちることによりアヤカシに変化した連中のことを指すんだ、ちなみに血祭ドウコクは外道衆の連中を押さえつける力を持っているため、外道衆の連中はまともに奴に逆らう奴はいなかったようだ、しかも圧倒的な強さを持っているためシンケンジャー封印する以外に他に方法がなかったようだ．．．」

なのは「わかる気がします．．．」

フェイト「そうだね、あの時、カイルさんがいなかったら私達ここに居なかったよね．．．」

はやて「なのはちゃんとフェイトちゃんとの二人が本気で圧倒される相手や、十分警戒せんとな。」

データス「え〜と、いよいよ次が．．．」

テンソウダー「ガッチャ！」

アラタ「チェンジカード！天装！」  
テンソウダー「チェンジ！ゴセイジャー！」  
アラタ「嵐のスカイツクパワー！ゴセイレッド！」  
エリ「息吹のスカイツクパワー！ゴセイピンク！」  
アグリ「巖のランディックパワー！ゴセイブラック！」  
モネ「芽萌のランディックパワー！ゴセイイエロー！」  
ハイド「怒濤のシーニックパワー！ゴセイブルー！」  
ゴセイナイト「地球を浄める宿命の騎士！ゴセイナイト！」  
アラタ「地球を護るは天使の使命！」  
ゴセイジャー「「天装戦隊、ゴセイジャー！！」」  
ティア「次は、34番目天装戦隊ゴセイジャーです、私の遠いご先祖と言つてもいい方で、太古の昔から人知れず悪の手から地球を護り続けている存在で通称「護星天使」って呼ばれています、彼らは当時見習いだったんですが、「宇宙虐滅軍団ウオースター」「地球犠獄集団幽魔獣」「機械禦慶帝国マトリンティス」そして、全て黒幕だった地球救星計画を進めていた「救星主のブラジラ」と戦い、地球を守り正式な護星天使になったスーパー戦隊です。」  
はやて「この人らの力が、うちのレンジャージャケットの力になつてるやつたな・・・」  
なのは「そうだね、はやてちゃん。」  
フェイト「使いこなせるようになってすぐに力が解放されたから、戦いやすくなつたね。」  
ゴセイナイト「元々護星天使は、古から地球を悪から守り続けている種族で、主にスカイツク族、ランディック族、シーニック族が存在し、彼らは本来姿を見られてはいけない存在だ、彼らが使うゴセイヘッドは、様々な生き物の頭部の形をした人造生命体で、自分の意志を持つており、大きさも変化する。普段は護星界にある誰も知らない秘密の島ヘッドアイランドで石化し待機しているが、ゴセイカード及び、カイクのキングキーで呼び出すことが出来る、ちなみに私は1万年前に当時の護星天使とともに幽魔獣と戦い、その

後行方不明になっていた最強のゴセイヘッダーのグランディオンヘッダーだったんだが、1万年間氷河の中で地球の力を受けて超進化したのが今の私だ、私はその関係で、すべて天装術を使えるのだが、ゴセイジャーとは違い、ゴセイパワーを自力で回復出来ず、蓄えたパワーを消耗する事で力を出していたため今私はヘッダーの状態になって、レンジャーキーにカイクたちが受け継いだゴセイパワーでエネルギーを確保しているんだ。」

データス「そして、ヘッダーは地球の乗り物の姿を借りて変化したゴセイマシンになるんデス、まずゴセイドラゴン、ゴセイフェニックス、ゴセイスネーク、ゴセイタイガー、ゴセイシャークの5体が合体した姿がゴセイグレートになるんデス、さらにゴセイナイトさんが元の姿に戻りグランディオン、シーレオンとスカイオンヘッダーの2体のナイトブラザーが合体してゴセイグランドに僕ことデータスが巨大化変形したデータスハイパーになって、さらに僕とゴセイグレートとスカイツクブラザー・ランディツクブラザー・シーイツクブラザーと呼ばれるヘッダーが合体してハイパーゴセイグレートになるんです、またゴセイグレートとゴセイグランドが合体してグランドゴセイグレートになります、そのほかにも究極のゴセイマシンであるゴセイアルティメットが変形したアルティメットゴセイグレートがありました、あと特別ですけどハイパーゴセイグレートとゴセイグランドがシンケンジャーの皆さんと力を集めて合体してグランドハイパーゴセイグレートになるんです。」

エリオ「ゴセイジャーの皆さんも色々な合体があるんですね。」  
アイム「そして、ゴセイジャーが戦った敵の最初の敵のウォースターは、インデベーターに乗って地球に飛来した宇宙人軍団で、大王モンス・ドレイクが宇宙の無法者を集めて結成した。宇宙の数多の星を侵略し、略奪と破壊の限りを尽くしてきた連中で、主要メンバーは首領の惑星のモンス・ドレイク、幹部の流星のデレプタ、彗星のブレドラン、衛星のターゲイトが居たんだ、さらに次に戦った幽魔獣は、数万年も長きにわたり生き続けている怪物の種族で、1万

年前当時の護星天使たちにより、ボス格の二人がエルレイの匣に封印され地中に埋められていたんだが、ある事情で封印が解けてゴセイジャーが戦ったんだ、こいつらは基本的に地球を汚染することが目的で主要メンバーはボス格のプロブの膜イン、ビッグフットの筋グゴンが居て、その下に彗星のブレドランが姿を変えたチュパカラの武レドランがいたんだ、そして、次に現れたマトリンティスは、元は平和を保ち繁栄した高度な古代文明で、4500年前に地殻変動で海に沈んだ大陸マトリンティスだが、生き残りであるロボゴグによって機械帝国として蘇り、人類の支配を企んだそうだが、主要メンバーはマトリンティスの皇帝の10サイのロボゴグ、秘書のエイジェントのメタルA、さらに幽魔獣との戦いで満身創痍だったブレドランが改造されたサイボーグのブレドRUNがいたんだ、そして、今回の事件の全ての黒幕がこのブレドランの正体でもある救星主のブラジラだったんだ、こいつは元は護星天使で、ゴセイナイトの元の主だったんだが、1万年前に幽魔獣との戦いで自分以外の護星天使の命を奪って自分の力にして、幽魔獣を倒したんだが、護星界の掟で如何なる理由があっても犠牲を出すことは許されないと、いう理由で拘束されたんだが、拘束を自力で破って未完成だった天装術「タイムトラブル」で一万年の時を越えてこの時の時代に来たんだ、しかし、その時の影響でこのような姿に変わってしまったわけだ、奴の目的はウォースターでは「武力」、幽魔獣では「幻術の力」、マトリンティスでは「技術力」と、新たな力を手に入れ、自らの生まれ持つ力を合わせることで更なる高みに昇華させようという論んで、地球を一度破壊し、新しい星を創る「地球救星計画」を画策し、そうして創った星の「命を導く者」として君臨することが目的だったんだ、まあゴセイジャーたちに阻まれて倒されたんだが、その魂が俺達の都市に深く関わっていたわけが・・・」

カイク「そして、こいつもまたルシフェルが力だけを利用して、使っているわけだが・・・」

クロノ「皮肉なものだな、自分が他のものを利用して、今

度は自分が利用されるとは．．．」  
ロゼ「でも、これだけのことをやってきたんだ今更同情の余地はないね。」

レオナ「そして、いよいよ最後が．．．」

マーベラス「派手に行くぜ！」

ゴークカイジャー「『豪快チェンジ！』」

モバイレッツ「ゴークカイジャー！」

ゴークカイセルラー「ゴークカイジャー！」

マーベラス「ゴークカイレツド！」

ジヨー「ゴークカイブルー！」

ルカ「ゴークカイエロー！」

ハカセ「ゴークカイグリーン！」

アイム「ゴークカイピンク！」

鎧「ゴークカシルバー！」

マーベラス「海賊戦隊！」

ゴークカイジャー「『ゴークカイジャー！』」

カイク「そして、最後は35番目のスーパー戦隊にして、現在俺達  
が変身している海賊戦隊ゴークカイジャーだ、ちなみに今のメンバー  
は先代のゴークカイジャーのメンバーだ、彼らは宇宙最大の宝物を求  
めて、レジエンド大戦の際に宇宙に散らばったレンジャーキーを集  
めて、地球に来た真正正銘の宇宙海賊だ、その関係で最初は戦う気  
は無かったんだが、結局メンバーみんながお人良しのせいか、自分  
達の意味で宇宙帝国ザンギャックに戦いを挑んだそうだ．．．」  
レオナ「宇宙帝国ザンギャックは宇宙の全てを我が物にしようとする  
帝国で、レジエンド大戦の時に数年後に戦力を整え、再び地球侵  
略を開始したんだけど、なんとか倒したの、この件については今は  
置いておいて、先代のゴークカイジャーのメンバーはシルバー君以外  
は異星人で宇宙を旅してきた宇宙海賊だったの、ちなみにシルバー  
君はアバレキラ、タイムファイヤー、ドラゴンレジャーがゴークカ

イセルラーとレンジャーキーを渡して、その後色々あつて仲間になつたの・・・」

ナビィ「まあ、色々アツタケドネ、ソレデモ楽シカッタヨ。」

ジーク「そして、ここでおさらいだ俺達が今開放しているスーパー戦隊の大いなる力は、古い順番からターボレンジャー、ジュウレンジャー、ダイレンジャー、カーレンジャー、タイムレンジャー、ガオレンジャー、アバレンジャー、デカレンジャー、マジレンジャー、ボウケンジャー、ゲキレンジャー、シンケンジャー、ゴセイジャーの13のスーパー戦隊のだ。」

レオーネ「それでもまだ、半分以上残っているんじゃない。」

ミゼット「しかし、それだけの人たちが戦つてたという証拠でもあるわけですよ。」

ラルゴ「そうだな・・・」

リンディ「とにかく、妖魔を倒すにはこの大いなる力を全て開放しなければならぬの。」

クロノ「焦つても仕方がないが、とにかく妖魔には十分注意した方がいい・・・」

とその時、GGGのオービットベースの警報がなり、さらにデカベースの警報もなつた。

カイク「なんだ!?!」

シャーリー「大変です、地球に未確認の宇宙船が近づいています。大河「どこのものかわかるか?」

命「待つてください、通信が入ってきました、デカベースに転送します。」

そこには鳥の顔をした人物が立っていた。

???「やあ、地球の皆さん、始めまして私はホルス星人のヌマ・O12世で、全宇宙の警察機構を統率する宇宙警察長官でもある、皆さんのことは本部所属のライとレン二人から聞いております、話し合いのために今回はこちらに来ましたが、よろしいですか?」  
それを聞いた、国連事務総長は頷いた。

ロゼ「わかりました、ではこちらが指定するところまで宇宙船を着陸させてもらえませんか？」

ヌマ・O12世「わかりました、それでは誘導をお願いします。」  
その後、緊急で宇宙警察のトップと国連事務総長との会見が行われ、正式に地球は宇宙警察の公認の惑星になり、さらにヌマ・O長官はさらにミッドの3提督とも通信越しに会見を行い、別世界の存在を認知し本部へ帰っていった、突然の事態に見舞われたが、今回のスーパージーン隊に関する会議は終了し、改めてみんなの訓練に熱が入ったというのは言うまでもない。

第43話 特別編 歴代スーパー戦隊の歴史 後編（後書き）

ようやく特別編が終了です、長くなりましたが次回からはまた戦闘を交えた話にしたいと思いますのでよろしくお願いします、それではまた次回お願いします。

#### 第44話 魔法を使う本当の勇氣（前書き）

どうも、今回は一話限りですが、はびねす！の世界に行きます、さらにエリオとキャラロの新装備が登場し、ある組織のメンバーが復活します。ちなみに時間軸はアニメの最終回後です。

#### 第44話 魔法を使う本当の勇氣

とある平行世界の地球

ルシフェル「ここだな、ここに死者を蘇らせることが出来るある口ストロギアともいえるものが眠っている。」

クールギン「ルシフェル様、ここは地球に似ていますが、いったい．．．？」

ルシフェル「ここは言うなれば平行世界だ、ゴーカイジャーどもがいる地球とは違う世界だ．．．」

クールギン「しかし、反魂の術を使えるルシフェル様が何もわざわざ出向く必要はないのではないのですか？」

ルシフェル「たしかにな、しかし魔族を蘇らすとなると話は別だ、魔族を蘇生させるには単純にやっただんでは、かなりのリスクがかかる、そう我々と同じ魔族である災魔一族をよみがえらす場合はな．．．」

「．．．」

そう言つて、二人は目の前にある学園に向かった。

元の世界 デカベース

その頃こちらでは、エリオとキャロに新しい装備が完成しそれを渡していた。

カイル「エリオ、キャロ、これがお前達の新装備だ。」

そう言つて、渡したのはなんとドラゴンレンジャーの獣奏剣とマジシャインのマジランプバスターだった。

エリオ「お父さん、これは獣奏剣ですよね？」

キャロ「これもマジランプバスターですけど．．．」

シャーリー「実はですね、これはカイルさんの力を借りて新たに作り上げたエリオとキャロ用の獣奏剣とマジランプバスターなんだよ。」

「．．．」

カイル「そうだ、俺は歴代スーパー戦隊の全員の力を受け継いでい

る、その関係で武器の力をイメージして、似せて作ったものと同じ力を吹き込むことが出来る、まあ本物より多少はさすがに劣るが使える機能は同じだし威力も十分だ、ちなみにマジランプバスターにさすがに何も入っていないが、魔力弾を発射することが可能だ、そして中に誰かを入れてアタックさせることも出来る。」

キャロ「それじゃ、いざとなったらフリードに頼もつかないか？」

フリード「キユクルー！」

マリエル「そして、エリオの獣奏剣は切り裂くだけじゃなくって、笛を吹くことで様々な機能を発揮するの、ストラードと一緒に使ってみてね。」

エリオ「はい！頑張って使いこなします、ありがとうございます。」  
とその時、クロノが来た。

クロノ「カイク、ちよつといいか？」

カイク「なんだ？」

クロノ「実は、別の世界へ行つて来て貰いたいんだが・・・」

カイク「別の世界？」

クロノ「ああ、その世界で妖魔の反応があつて、それでジークたちと話したんだが、君となのは、フェイトにいつてもらおうと言うという話になつたんだ、ゴーカイジャー全員で行くとなると大変だからな・・・」

カイク「たしかにここを留守にするわけには行かないな、わかつた、もし面倒だったらゴーカイガレオンも別の世界を行き来できるようになつてるし、いざとなつたら来てもらうことにするか・・・」

クロノ「ああ、それはもちろん構わないさ。」

カイク「それとエリオとキャロの二人もいいか？」

クロノ「エリオとキャロを？」

カイク「ああ、この二人の新装備が出来たんだ、その実践にもちよつどいいだろうしな、本物でトレーニング済みだしな・・・」

クロノ「・・・相変わらず強力そうな力だな、実際スーパージョウの力は一種のロストロギアだぞ・・・」

カイル「仕方がないだろう、これが無いと妖魔と戦えないしな．．．」  
クロノ「まあいいさ、それじゃ頼む。」

そう言つて、クロノは部屋を出て、カイルはなのは、フェイト、エリオ、キャロ、ヴィヴィオを伴つて、魔法特急トラベリオンエクスプレスに乗つて出発した。

エリオ「ところでお父さん、どうしてヴィヴィオも一緒なんですか？」

カイル「誘拐された一件以来、俺と一緒にのほうがいいと考えた結果だ。」

キャロ「なるほど、やっぱりお父さんは優しいですね。」

エリオ「そうですね。」

カイル「ありがとう二人とも。」

そう言つて、カイルは二人の頭を撫でた。

平行世界の地球

カイルたちは、到着早々サガスナイパーで妖魔の足取りを追つていった。

カイル「この先の建物から強力な妖魔反応があるな。」

なのは「え」と、「瑞穂坂学園」か、カイルさんこの世界には魔法が普通に存在するみたいですね。」

カイル「そのようだな．．．うん？この先の森の方でさらに強力な反応がある。」

とその時、森の方から爆発音が響いた。

フェイト「カイルさん！今爆発音が聞こえたような．．．」

カイル「．．．俺も聞こえたな．．．行くぞ。」

そう言つて、5人は森の方へ向かつていった。

瑞穂坂学園敷地内の森

ルシフェル「どうした？この程度か？」

そこにはアンチレンジャーキーで召喚された、冥府神ダゴン、冥府神ワイバーン、冥府神ドレイクの3体相手に戦っている魔法科の生徒と教師がいた。

杏璃「う、嘘、全然攻撃が効いてないなんて．．．」

雄真「くっ．．．いったいどうなってるんだこいつらは．．．」

春姫「雄真くん、大丈夫!？」

雄真「ああ、ありがとう春姫．．．」

伊吹「おのれ、我が家の秘宝になんのようにだ、貴様は!？」

ルシフェル「知れたことよ、あるものたちを復活させるためだ。」

鈴莉「あなたは秘宝の恐ろしさを知っているの？」

ルシフェル「恐ろしさか．．．たしかにお前らのような人間どもには過ぎた力だろつがな、魂の波動を自由に変えることが出来る我々妖魔には使えんことはないということだ．．．」

沙耶「妖魔？」

小雪「．．．人間ですらないと言うことですね。」

ゆずは「妖魔．．．たしかどこかの文献で聞いたような．．．」

信哉「ともかく、我々の力で秘宝を死守するしかない．．．」

ルシフェル「威勢がいいが、いつまで持つかな？行けダゴン、ワイバーン、ドレイク!」

そう言つて、攻撃を掛けようとしたその時、カイムたちが駆けつけた。

カイム「待て!ルシフェル!」

鈴莉「あ、あなた達は?」

ルシフェル「．．．カイムに、魔導師どもか．．．」

フェイト「やはり、あなただったんですね。」

ルシフェル「お前らの力を侮っていたからな、そのためさらに戦力強化をしようと来たんだ、お前らと遊んでいる暇はない、お前らの相手はこの3体が相手をする。」

そう言つて、ダゴン、ワイバーン、ドレイクの3体をカイムたちに向かわせ、自分は奥へ向かっていった。

カイル「・・・どうやらやるしかないようだな・・・ヴィヴィオ、ちよつと下がってる。」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言つて、ヴィヴィオを下がらせ、全員変身態勢に入った。

なのは・フェイト「レンジャージャケット！セットアップ！」

エリオ・キャロ「レンジャージャケット！セットアップ！」

カイル「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴークイジャー！」

カイル「ゴークイキング！」

その姿を見た、その他のメンバーは驚いた表情をした。

杏璃「な、なんなのこの人たちは？」

春姫「あの2人の女の人たちとあの子供達は二人は魔法使いみたいだけど・・・」

伊吹「しかし、あのようなマジックワンドは見た事がないが・・・」

信哉「しかし、あのゴークイキングという男のスーツはいつたい・・・」

雄真「・・・どことなく昔放送されていたスーパー戦隊に似ているのは俺だけだろうか・・・」

杏璃「まさか、いくらなんでも。」

そんな外野が言っている間にカイルたちは3体の冥府神に向き合った。

エリオ「お父さん、まさかあのマジレンジャーが戦っていた冥府神がいるなんて・・・」

カイル「・・・ルシフェルの奴、色々な手を使ってくるな・・・とにかく、派手に行かせてもらう！」

そう言つて、カイルはダゴンへ、なのはとエリオはワイバーンへ、フェイトとキャロはドレイクに向かっていった。

カイル「キングソードベガ！」

ダゴン「・・・！」

なのは「全力全開！スターライトブレイカー！」

エリオ「紫電一閃！」

ワイバーン「……！」

フェイト「ライオットザンバー・カラミティ！」

キャロ「フリード！マジランプバスター！」

フリード「キュクラー！」

ドレイク「……！」

それを見たメンバーは驚いた表情を浮かべていた。

ゆずは「す、すごい……」

鈴莉「変わってるけど、かなり強力な魔法を使ってるわ……」

カイル「……きりがないな、こうなったら……なのは、フェイト下がれ、これで一気に決める。豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ウルザードファイヤー！」

沙耶「姿が変わった!？」

雄真「あれ？あの姿どこかで見たことがあるような……」

なのは「確かにそれなら、エリオ、キャロ後退するよ。」

エリオ・キャロ「はい！」

そう言つて、4人は下がった。

カイル「マージ・ゴル・ジー・マジカ……」

鈴莉「こ、これは何、魔力数値が計測できない……」

伊吹「な、なんだと……」

カイル「ブレイジングストームスラッシュ！」

冥府神「……！」

カイル「チエツクメイト！」

カイルの一言と同時に3体の冥府神はアンチレンジャーキーに戻った。

杏璃「う、嘘、私達があれば手こずった相手を一撃で倒すなんて……」

信哉「いったい何者だ……」

とそこへ、ルシフェルが現れた。

ルシフェル「冥府神をも倒してしまうとはな……さすがだな。」

ルシフェル「冥府神をも倒してしまつとはな……さすがだな。」

ルシフェル「冥府神をも倒してしまつとはな……さすがだな。」

ルシフェル「冥府神をも倒してしまつとはな……さすがだな。」

カイク「ルシフェル！」

ルシフェル「どうやら、お目当てのものはここには無い様だな、まあいいさ、今日は様子見だ、それではまた会おう。」

そう言うのとアンチレンジャーキーを回収し、ルシフェルは消えた。

フェイト「．．．逃げられましたね．．．」

カイク「ああ」

なのは「しかし、ルシフェルはいつたいここに何の用があったんでしょうか？」

ヴィヴィオ「パパ！」

カイク「ヴィヴィオ。」

そう言つて、カイクはヴィヴィオを抱っこした。

とそこへ、雄真たちが恐る恐る聞いてきた。

雄真「あ、あの、あなた達はいつたい．．．」

フェイト「え」と、話せば長くなるので、とりあえずどこか落ち着いて話せる場所に移動してもらつてもいいですか？」

鈴莉「ええ、お願いするわ。」

そう言つて、全員魔法科の校舎へ移動した。

瑞穂坂学園内 カフェテリア「Oasis」

カイクたちは自分達のことを全て話した上で、警戒心を取り除きその後で御雑先生と高峰理事長から事情を聞いた。

カイク「なるほどな．．．となるとルシフェルの奴はその「秘宝」

とやらを狙つてたわけか．．．」

フェイト「たしかにあの男なら、使いこなせますね．．．しかし、いったい何を蘇らせようとしていたのでしょうか．．．彼ならそれを使わずとも蘇生させることが可能でしょうし．．．」

カイク「後で地球の方で牧野先生とレオナに確認を取ってみる必要があるな．．．」

鈴莉「それで、あなた方はこれからどうされるのですか？」

なのは「とにかくあの男を放っておくわけには行かないので、しば

らくはこの近辺で様子を伺いますが．．．」

ゆずは「それなら、学園の方で休まれてはいかがですか？」

フェイト「いいんですか？」

鈴莉「ええ、それにあなた方でなければ彼らに対抗できないのは先ほど身を持って知りましたしね、そちらの都合がよければ．．．」

カイル「いや、こちらこそ助かる、それでは世話になる。」

カイルたちが話をしている中、ヴィヴィオ、エリオ、キャラはOasisのチーフであり、雄真の義理の母である小日向音羽の料理を食べていた。

エリオ「おいしいです。」

キャラ「ホントに。」

音羽「ありがとう、どうヴィヴィオちゃんもおいしい？」

ヴィヴィオ「うん！おいしい。」

音羽「いや〜ん、かわいい、ヴィヴィオちゃんみたいな子も欲しかったな。」

そう言つて、音羽はヴィヴィオを抱きしめた。

その後、数日が経過したがルシフェルの動きが見えず、その間なのは、フェイト、カイルは魔法科の特別講師として授業に参加していた。

なのは「それじゃ、次はね実践的なものを教えるね、まずは神坂さんと柊さん、ちよつと前に出てきて。」

春姫・杏璃「はい！」

そう言つて、二人を前に出し、カイルが前に出た。

カイル「よし、行くぞ、豪快チエンジ！」

モバイレーツ「マジレンジャー！」

カイルはマジシャインの姿になった。

なのは「それじゃ、二人とも遠慮なしに攻撃系の魔法を校舎が壊れないようにやってみて。」

杏璃「それじゃ、行くわよ！オン・エルメサス・ルク・アルサス・エスタリアス・アウク・エルトラス・レオラ！」

春姫「エル・アムダルト・リ・エルス・デイ・アストウム・アダフ  
アルス！」

二人は複数の攻撃を一齐に発射して、カイクに攻撃を仕掛けた。  
カイク「マジランプバスター！」

カイクはマントを翻して、それらを全て防ぎ、さらにその間にマジ  
ランプバスターで攻撃を仕掛けてきた。

春姫・杏璃「きゃああ！」

なのは「はい、カイクさんも威力を抑えて飛ばされる程度でしかな  
いけど、今みたいに魔力の流れをうまくコントロールできれば、無  
駄なく目標に向かって攻撃ができるの、これはね攻撃以外の魔法に  
も当てはまるの。」

鈴莉「そうね、今のようは無駄なく攻撃が出来るってことは、それ  
だけ魔力を無駄なく効率よく使っている証拠ね、皆さんもカイクさ  
んのようにいかに効率よく魔力を使えるかを考えてみてね。」

春姫「カイクさん、なのはさんありがとうございます。」

カイク「何、基礎的なことを教えてただけだ。」

なのは「それにお世話になってるし、これくらいは……。」

杏璃「あ、後でトレーニングに付き合ってもらってもいいです  
か？」

なのは「うん、いいよ。」

鈴莉「はい、それじゃ今日の実技授業はこれまで。」

そう言つて、授業は終わった。その後、なのは、フェイトは春姫、  
杏璃の二人に魔法の指導を行った。

雄真「カイクさん。」

カイク「うん？君は確か御雑先生の息子の……。」

雄真「小日向雄真です、あ、お話が……。」

そう言つて、カイクは雄真に連れられてOasisへ行き、雄真の  
話を聞くことにした。

カイク「それで、俺に話とは？」

雄真「カイクさんは、どうしてそんなに強いんですか？俺ようやく

魔法を使う気になったの、この間のような状態で、カイクさんたちが来てくれなかったら、今頃は・・・」

カイク「・・・お前のことは御薙先生から聞いた、一つ教えてやるう、俺が知っている英雄の人たちが教えてくれた言葉、魔法それは聖なる力、魔法それは未知への冒険、そして魔法それは勇気の証。」  
雄真「勇気・・・」

カイク「そうだ、勇気と無謀は違うがどんな状況でも、自分が負けたと思わないことだ、そうすれば必ず限界以上の力が出てくるはずだ、それにお前はまだ魔法を始めなおしたばかりだ、そんな状態ですぐに使いこなせると思わないことだ、焦っても上達は出来ないからな・・・」

雄真「はい、ありがとうございました。」

カイク「気にするな、さてヴィヴィオのところへ行こうかな・・・」  
そう言つて、カイクはヴィヴィオのところへ向かい、雄真はそれに付き添つた。その道中ジークたちとなにやら連絡を取っていた。

瑞穂坂学園 占い研究会部室

小雪「へえ、それじゃそちらの世界では私達のマジックワールドは、デバイスと呼ばれているんですね？」

エリオ「はい、僕のはこのストラダーです。」

キャロ「私のはこのケリユケイオンです。」

そう言つて、みんなに自分達のデバイスを見せた。

沙耶「すごい、普段はそんな状態になつているんですね。」

タマちゃん「便利なもんやな。」

小雪「そうね、タマちゃん。」

伊吹「他の人たちのデバイスはなんと言うのだ？」

ヴィヴィオ「え」と、なのはママがレイジングハートで、フェイトママがバルディッシュです。」

その時、ヴィヴィオのママ発言にみんな驚いた表情を浮かべた。

すもも「え〜!?!あの二人はヴィヴィオちゃんのママだったんです

か？」

そこでエリオが全員に説明した。

信哉「なるほど、カイク殿の養子であったのか・・・」

キャロ「はい、私達の場合は、自然にそう呼ぶようになって、お父さんもいいよって言うてくれたので・・・」

すもも「そうなんですか、いい父さんだね。」

ヴィヴィオ「うん！でもなのはママもフェイトママもパパのことが好きなんだよ、後ティアママたちも。」

そう言つて、写真を見せ、ティア、エリス、カリムの3人のことを教えた。

小雪「へえ、モテモテのお父さんですね。」

とその時、カイクが雄真を連れてきた。

カイク「ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオ「あ、パパだ！」

そう言つて、ヴィヴィオはカイクに駆け寄つてきた。

とそこへ、ハチと準も来た。

ハチ「よ！雄真。」

準「あら？この人たちは？」

雄真は二人に説明し、お互いに自己紹介をした。

カイク「・・・ホントに男には見えないんだがな・・・」

エリオ「ホントですね・・・」

準「でもカイクさんもかつこいいですね。」

カイク「ああ、ありがとう。」

伊吹「そういえば、カイク殿、あなたが使っていたあのスーツはいつたい・・・」

とその時、持っていたセンサーに妖魔の反応があった。

カイク「どうやら、説明は後だな、エリオ、キャロ、ヴィヴィオ行くぞ！」

エリオ・キャロ「はい！」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言つて、4人はなのは達と合流して、目的地に向かった。さらに御雑先生、高峰理事長、そして雄真たちも後を追つた。

瑞穂坂学園敷地内の森

ルシフェル「どうやら、これが本物のようだな．．．それでは．．．

「  
そう言つて、5つのアンチレンジャーキーを取り出し、秘室に触れ作業を始めた。

そして、表の方ではカイクたちが駆けつけたが、そこにはクールギンが居た。

クールギン「来たか．．．メタルダーは居ないようだが、ルシフェル様のもとへ行かせるわけにはいかん。」

カイク「クールギン！」

フェイト「やはり、あなたも居たのですね．．．」

なのは「ここを通りしてもらおうよ！」

そう言つて、全員デバイスとカイクはモバイレッツとレンジャーキーを出した。

なのは「フェイト」「レンジャージャケット！セットアップ！」

エリオ・キャロ「レンジャージャケット！セットアップ！」

カイク「豪快チェンジ！」

モバイレッツ「ゴーカイジャー！」

カイク「ゴーカイキング！」

クールギン「．．．これを使わせてもらうか．．．」

そう言つて、アンチレンジャーキーを銃にセットして、実体化させた。

ユガンデ「．．．」

ビリオン「．．．」

ジンバ「．．．」

フェイト「今度は、ネジレジアのユガンデ、ゾーンのビリオン、さらに暴魔百族のジンバまで．．．」

カイル「クールギンは俺がやる、他の奴を頼む。」  
なのは「わかりました。」

そう言つて、カイルはクールギンへ、なのははユガンデ、フェイトはピリオン、エリオとキャロはジンバに戦いを挑んだ。

カイル「キングソードベガ！」

クールギン「やるな．．．さすがはゴーカイジャー最強の男．．．」  
なのはたちもそれぞれの敵と戦っている。

とそこへ、奥のほうからルシフェルが現れた。

ルシフェル「よくやった、クールギンよ、アンチレンジャーキーの連中を戻すぞ。」

クールギン「はは！」

そう言つて、アンチレンジャーキーを回収した後、奥の方から異形の姿をした者たちが現れた。

カイル「お、お前達は！？」

なのは「ま、まさか！？」

フェイト「災魔一族！？」

エリオ「あ、あのゴーゴーフアイブが戦った．．．」

キャロ「これが目的だったんですね．．．」

とそこへ、御薙先生達が来た。

鈴莉「まさか、あの秘宝を本当に制御したというの！？」

ゆずは「それにこの化け物は．．．」

驚いているメンバーを尻目に5人は名乗りを上げた。

ジルフィーザ「聞け！人間ども我は魔族、新生災魔一族長男ジルフイーザなり。」

コボルダ「俺は次男獣男爵コボルダだ。」

ディーナス「そして、私が長女邪霊姫ディーナス。」

サラマンデス「そして、我が三男龍皇子サラマンデス。」

ピエール「そして、私使用人の呪士ピエールと申します、以後よろしく。」

ルシフェル「（よし成功だ、サラマンデスの性格も調整してあるか

らな、とにかく足の引つ張りあいは話にならんからな．．．」  
ジルフィーザ「まずは腕鳴らしとさせてもらおうか．．．」  
雄真「カイクさん達は、大丈夫なのか？」

春姫「大丈夫だよ、雄真くん。」

八チ「でも、あの敵どこかで見たことがあるんだよな．．．」  
準「気のせいじゃない？」

そんな他のメンバーが気にしているところで、臨戦態勢に入ろうとしたその時

杏璃「な、何あれ!？」

小雪「海賊船ですね．．．」

伊吹「そんなもの見ればわかるわ!問題は敵か味方だ!」

カイク「ガレオン!」

なのは「ジークさんたちが．．．」

そう言つと、ジークたち6人が降りてきた。

ジーク「カイク!心配だから来ちまったぜ。」

アイム「なるほど、こういうことだったのか．．．」

メルト「とりあえず向こうにはシグナムたちがいるから大丈夫だ  
ど。」

フィオネ「変身しましょう。」

ティア「そうですね。」

エリス「異議はないわ。」

そう言つて、それぞれの変身道具を出した。

沙耶「あ、あなた達はいつたい．．．」

ゴークイジャー「『豪快チエンジ!』」

モバイレーツ「ゴークイジャー!」

ゴークイセルラー「ゴークイジャー!」

八チ「ええ!?なんかどこかで見たことがあるよな姿に．．．」

そんなことを言っている間に7人揃つて、名乗りを上げた。

カイク「ゴークイキング!」

ジーク「ゴークイレッド!」

ファイオネ「ゴーカイブルー！」

メルト「ゴーカイイエロー！」

エリス「ゴーカイグリーン！」

ティア「ゴーカイピンク！」

アイム「ゴーカイシルバー！」

カイク・ジーク「海賊戦隊！」

ゴーカイジャー「『ゴーカイジャー！』」

雄真「海賊戦隊！？」

ハチ「あれって、やっぱりスーパー戦隊だよな、でもあんなスーパー戦隊なんていたか？」

準「私に聞かないでよ。」

そんなことを言っている間に敵に向かっていった。

カイク「さて……」

ジーク「派手に行くぜ！」

カイクとエリオ・キャロはルシフェルとクールギンと戦い、ジークとアイムはジルフィーザと戦い、ファイオネとエリスはコボルダと戦い、メルトとティアはディーナスと戦い、なのはとフェイトがサラマンデスと戦い始めた。それでも苦戦していた。

ジーク「こうなったら、これで行くぜ！」

そう言つて、ゴーカイジャーのメンバーは別のレンジャーキーを出した。

ゴーカイジャー「『豪快チエンジ！』」

モバイレーツ「『ゴーオンジャー！』」

モバイレーツ「『ゴーオンウイングス！』」

ゴーカイセルラー「『ゴーオンウイングス！』」

その姿を見た、ハチは驚いた表情を浮かべた。

ハチ「ああ！？あれってゴーオンジャーじゃないのか？」

杏璃「あれ？ハチ、知ってるの？」

ハチ「知ってるも何もあれは子供たちに人気のアニメシリーズのスーパー戦隊シリーズだよ。」

すもも「知ってます、たしか数年前に34番目のゴセイジャーで終了したシリーズですよね。」

雄真「でも、変身の仕方が違うしな．．．」

春姫「そうなの雄真くん？」

雄真「ああ、俺もよく覚えてはいないんだけどな．．．」

そんなことを尻目に全員敵に向かっていった。

キャロ「エリオ君、フリード行くよ！」

エリオ「うん！わかったよ！」

フリード「キュクルー！」

そう言つて、二人はマジランプの中に吸い込まれていった。

キャロ「ルーマ・ゴー・ゴジカ！」

エリオ「エリオ・フリード・シャイニングアタック！」

フリード「キュクルー！」

なのは「全力全開！ナイト・スターライトブレイカー！」

フェイト「ナイト・トライデントスマッシュャー！」

ゴーカイジャー「ポールポジション！スーパーハイウェイバス

ター！炎神ソウルセット！」

カイクム・アイクム「アテンション！ウイングブースター！炎神ソウ

ルセット！」

ゴーカイジャー「ゴーオン！」

一斉攻撃で全員吹き飛ばされた。

ジルフィーザ「ま、まさか、このようなことが．．．」

コボルダ「人間ごときが．．．まさかゴーゴーファイブのような輩

が他にもいるとは．．．」

ディーンナス「ここは撤退した方がいいわね。」

サラマンデス「そのようですね、兄上、姉上．．．ピエール！サイ

マ獣を．．．」

ピエール「はは！出でよマグマゴレム！」

ピエールはマグマゴレムは等身大の大ききで出した。

ピエール「さきほど、復活させていただいた際に急遽呼び出したサ

イマ獣です、時間稼ぎにはなるかと・・・」

ルシフェル「それでいい、撤退するぞ。」

そう言つて、マグマゴレムを残し、全員撤退した。

それを見たカイムは変身を解除し、雄真を呼んだ。

雄真「カイムさん、どうしたんですか？」

カイム「あいつはお前が仕留める、これを使つてな。」

そう言つて、モバイレーツとマジレッドのレンジャーキーを渡した。

ジークはそれを横目で見て、頷いた。

ジーク「話はカイムから聞いたぜ、お前さんの勇気を俺たち見せてみる。」

雄真「・・・わかりました、それじゃ使わせてもらいます。豪快チエンジ！」

モバイレーツ「マジレンジャー！」

雄真「(わかるぞ、どんな呪文があるかが、これなら・・・)マー

ジ・ゴル・マジカ・・・ブレイジング・ストーム！」

マグマゴレム「ゴオオオ！」

雄真「チエツクメイト！」

なんと一撃でマグマゴレムを撃破した。

なのは「すごい、魔力数値だね。」

フェイト「ホント御雑先生が言つてたことはあるね。」

とその時、巨大化したスカルソルジャーの大群が現れた。

スカルソルジャー「ガガガガ！」

ジーク「往生際の悪い奴だぜ、ここは俺達がかたをつけてやるぜ！」

そう言つて、ゴーカイガレオンに乗り込み合体した。

ゴーカイジャー「完成！ゴーカイオー！」

ティア「それじゃ、これで行きましょうか？」

ジーク「ああ、行くぜ！レンジャーキーセット！」

ゴーカイジャー「レッツゴー！ゴーカイオールヘッダー大進撃！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

一気にすべてスカルソルジャーを撃破した。

伊吹「す、すごい．．．」

ゆずは「あんなロボットまであるなんてね．．．」

外野が驚いているのを尻目に今回の事件は終了した。

その後、秘宝は完全に封印するということでカイクがあるものを使おうとしていた。

カイク「よし、行くぞ．．．」

そう言って、カイクは文字を書き始め、「門」「悪」「滅」の合わさった漢字を秘宝に打ち込んだ。

カイク「はあ！」

鈴莉「す、すごい．．．これなら誰も手が出せないわね．．．」

その直後、さすがにカイクも少し膝をついた。

なのは「カイクさん！」

フェイト「大丈夫ですか？」

カイク「ああ．．．少し力を使っただけだ．．．」

ジーク「まったく、封印の文字を使うからだ．．．」

その後、3日間だけこの世界に留まり、その後、カイクたちはもとの世界に戻ることにした。

カイク「それじゃ、世話になったな。」

鈴莉「こちらこそ、ありがとうございました。」

ゆずは「まさか、スーパー戦隊の方だとは思わなかったわ。」

音羽「ヴィヴィオちゃんもまたいつか遊びに来てね。」

ヴィヴィオ「うん！ありがとうございます。」

なのは「それじゃ、行こうか。」

フェイト「そうだね。」

エリオ「ありがとうございました。」

キャロ「お元気で。」

フリード「キュクルー！」

とその時、カイクはあるものを出した。

カイク「忘れるところだった、雄真これを。」

そう言つて、腕輪のようなものを渡した。

雄真「これは？」

カイル「そいつはさっき俺達の世界から転送されてきた、お前用のデバイスだ、名前は「ブレイブスティック」通称「ブレイブ」だ、命令してみる。」

雄真「は、はい、ブレイブ。」

雄真が名を呼ぶとブレイブはマジスティックと同じ形になった。

ブレイブ「我がマスターよ、これからよろしく頼むぞ。」

カイル「そいつは、お前さんの魔法の使える範囲も計算してくれるから、暴走の心配はなくなるだろう。（性格はウルザードファイヤ―こと勇さんの性格を元に造つたつて言つてたからな．．．まあ彼の周りには女性はあるが、父親との接点が少ない分だけ父親代わりなればいいだろう．．．）」

春姫「よかつたね、雄真くん。」

雄真「ああ、春姫、ありがとうございます、カイルさん。」

カイル「礼なら、元の世界にいる技術スタッフに言つてくれ。」

雄真「それじゃ、その方々に伝えてもらつていいですか？」

カイル「ああ、伝えておくよ。」

雄真「はい、それじゃこれからよろしくなブレイブ。」

ブレイブ「うむ、任された。」

鈴莉「本当に何から何までありがとうございます。」

カイル「いや、こちらが勝手にしたことだ、それじゃ今度こそ．．．」

「

雄真「ええ、お元気で。」

そう言つて、カイルを含めたみんなはゴーカイガレオンに乗り込み元の世界に戻つた。

雄真「行つたか．．．」

春姫「雄真くん．．．」

雄真「春姫、俺やつと自分の魔法に自信がもてたような気がする．．．」

「

春姫「そうか、雄真くん、これからも頑張ろうね。」

雄真「ああ、それじゃ行こうか。」

春姫「うん！」

そう言つて、雄真は春姫と一緒に春姫の部屋に行った、この3日の間にカイク、ジークからテクニック伝授してもらい、それをさっそく春姫に対して実践したのは言うまでもない。

そして、それからの雄真はブレイブに色々魔法についての小言を言われながら魔法使いとして自分自身を高めるための日々が改めて始まった。

#### 第44話 魔法を使う本当の勇氣（後書き）

どうも今回はちょっと無茶振りだったところがあつたかもしれませんが、ご了承ください、ちなみにサラマンデスの性格は原作と違い兄弟想いになつてもらいました、それでは次回は大いなる力の解放を後にして、ティアナとスバルを主役にした話にしたいと思います。ます、それではまた次回。

## 第45話 母からももらった宝物（前書き）

どうも、今回はスバルとティアナメインの短めの話になっています、さらにカイクたちにアリエナイザーから賞金が懸けられます。

## 第45話 母からもらった宝物

その日、ティアナとスバルは非番でカイクたちから借りたマシンハスキーで街に遊びに来ていた。

ちなみにカイクは、ヴィヴィオ、なのは、ティアと一緒に遊園地に行っていた。

そして、二人は近くの公園でアイスクリームを買って食べていた。スバル「いや〜、久しぶりだよね、こんな非番は。」

ティアナ「そうね、最近は妖魔の活動が少ないからね。」

とその時、近くで子供たちの声が聞こえた。

子供1「オラ！寄せよ。」

子供2「そんなもん、お前に勿体ねえんだよ！」

子供3「や、やだよ・・・」

どうやら一人相手に二人組みの子供がいじめているようだった、それを見た二人はすぐさま向かっていた。

ティアナ「コラ！あんた達、男のくせに弱いものいじめしてみっともないわよ。」

スバル「そうだよ、自分がやられたらいやなことは他人にしちゃいけないんだよ。」

子供1「げ、大人だ！」

子供2「に、逃げる！」

そう言つて子供たちはスバルとティアナの前から逃げていった。

ティアナ「まったく・・・大丈夫？君、名前は？」

子供3「僕、上原雄二・・・助けてありがとうお姉ちゃん達・・・」

ティアナ「そっか、私はティアナ・ランスターよ。」

スバル「あたしはスバル・ナカジマだよ、よろしくね雄二君、ところで、何を取られそうになったの？」

雄二「うん、これ・・・」

そう言つて、その子は自分の持っていた小さいガラス細工のユニコ

ーンのペンダントを見せた。

スバル「綺麗だね．．．」

ティアナ「でも、あんまり見ないタイプだよね。」

雄二「これ僕の亡くなつたお母さんが作ってくれたの．．．」  
それを聞いた二人は静かに納得した。

スバル「．．．そっか、だから大事にしてたんだね．．．」

スバルは雄二君の頭を撫でた。

ティアナ「もう取られたりしちゃだめだよ？」

雄二「うん！ありがとうお姉ちゃん達！」

そう言つて、雄二君は帰ろうとした。

しかし、そこへ宇宙から飛来したアリエナイザーが現れた。

アリエナイザー「ふう〜、ここが地球か．．．」

ティアナ「あんた！アリエナイザーね？」

アリエナイザー「あん？お前らなんだ、この俺、宇宙の一匹狼ヴァン様は、新たに賞金首になつたこの7人の宇宙海賊の首をもらいに来たんだ。」

そう言つて、ゴーカイジャーのメンバーの手配書を見せた。

スバル「ど、どうして、カイクさん達の手配書が！？」

ティアナ「宇宙警察はたしか、カイクさん達に対して手配書は出してないはず．．．」

ヴァン「そんなことはどうでもいいさ、それよりもお前らはこいつらを知っているようだな、教えてもらおうか。」

ティアナ「．．．私達に勝つたらね．．．」

スバル「行くよ！」

ティアナ・スバル「レンジャージャケット！セットアップ！」

二人はレンジャージャケットを纏つた。

ヴァン「なんだ、てめえらは？」

雄二「お姉ちゃん達の姿が変わつた！？」

ティアナ「行くわよ！スバル！」

スバル「了解！」

そう言つて、二人は向かつていった。

ヴァンはデカイ斧で二人に襲い掛かってきた。

スバル「行くよ！天幻星・ゴーストランナー！」

スバルは多数の幻をたくさん作り出して相手をかく乱し始めた。

ヴァン「分身した？」

ティアナ「やるわね、私のお株を奪うなんて．．．ならこつちもエ  
ンドレスショット！」

ヴァン「ぐああ！」

ヴァンは後ろに吹き飛ばれた、しかし、吹き飛ばされた衝撃で雄二  
君の前に飛ばれた。

ヴァン「ちょうどいい、おい！お前ら動くところのガキの命はねえぞ  
！」

雄二「お、お姉ちゃん達．．．」

ティアナ「くつ．．．卑怯な．．．」

ヴァン「うん？なんだこの馬のような物は？」

雄二「か、返してよ！それは僕の大事な宝物なんだ。」

ヴァン「宝物だつて？こんなたいした金にもなりそうにならないも  
のがか？宝物つてのは金になるかならねえかなんだよ！」

スバル「違う！その子にとつては大事なものなんだよ！」

ヴァン「うるせえ！こんなもの！」

そう言つて、ユニコーンのペンダントを叩きつけた。

ティアナ「あ、あんだ、何てことするのよ！」

ヴァン「うるせえ！次はお前らの番だ！」

そう言つて、攻撃を掛けようとした時、カイクがヴァンにキングソ  
ードベガを使って吹き飛ばした。

ヴァン「ぐああ！」

カイク「大丈夫か？」

雄二「う、うん．．．ありがとう．．．」

カイク「ヴィヴィオ、この子を頼む。」

ヴィヴィオ「うん、わかったパパ、それじゃこつちへ．．．」

「．．．」

「．．．」

そう言つて、雄二君はヴィヴィオと一緒に避難し、さらにカイムのほかになのはとティアも来た。

なのは「大丈夫だった二人とも？」

スバル「はい！」

ティアナ「ありがとうございます。」

ヴァン「てめえらは、賞金首の・・・。」

なのは「賞金首？」

ヴァン「獲物がまさか、来てくれるとはな、しかもそのうち一人は一番最高額の5000万ゼニーの男までいるとはな、こいつは運がいい、覚悟しな。」

カイム「お前ごときにやられるか、行くぞ！」

カイム・ティア「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

なのは「レンジャージャケット！セットアップ！」

カイム「ゴーカイキング！」

ティア「ゴーカイピンク！」

カイム「さて・・・。」

ティア「派手に行きましょう！」

そう言つて、ヴァンに向かつていき、カイムはキングソードベガで攻撃を掛けた。

カイム「はああ！」

ティア「はい！」

ヴァン「ぐああ！」

なのは「デイバインシューター！」

カイム「ティアナ、スバル、お前達が決める、ちなみにそいつはデ

リート許可が下りているそうだ、ここに来る前に宇宙警察から連絡があつてな・・・。」

スバル「わかりました！」

ティアナ「行くわよ、スバル！」

スバル「了解！（今こそ、ジークさんに教えてもらった技を・・・）」

「ティアナ「クロスリボルバー転送！」

ティアナはクロスリボルバーにクロスミラーージュをセットした。

ティアナ「ヴァリアブルストライク！」

スバル「天火星秘技・流星閃光！」

ヴァン「ぐああああ！」

二人の総攻撃でヴァンは粉碎された。

カイル「まったく．．．この程度で俺達に挑戦してくるとは、随分と舐められたもんだな．．．」

ティア「まあカイルさん、とにかく被害が最小限で食い止められただけでもいいじゃないですか。」

なのは「ティアナもスバルもよくやったよ。」

ティアナ「ありがとうございます、なのはさん。」

スバル「すみません、なのはさんちよつと失礼します。」

そう言うときスバルとティアナは子供のところへ行った。

スバル「大丈夫だった。」

雄二「う、うん、ありがとう．．．」

そう言うとき、雄二君は頭を下げたが、手には地面に叩きつけられ傷がついたペンダントがあつた。

それを見たカイルはあるものを出して、スバルとティアナに渡した。

ティアナ「カイルさん、それってマジチケットじゃ．．．」

カイルは頷いて、二人に渡した。

スバル「ありがとうございます、それじゃ雄二君、ちよつとだけ目を瞑ってくれないかな？」

雄二「う、うん。」

そう言うとき、雄二君が目を閉じている間に呪文を唱えて、ペンダントを元に戻した。

ティアナ「もういいわよ。」

雄二「あ．．．直ってる！ありがとうお姉ちゃん達。」

スバル「気にしないで、それよりもこれから大事にしてね？」

雄二「うん、うん、ありがとうお姉ちゃん達、それじゃ。」

そう言つて、今度こそ帰つていった。

なのは「偉いよ、二人とも。」

ティアナ「いえいえ、なのはさんたちのおかげですし……」

スバル「それに最後はカイクさんのおかげですし……（お母さん

……か……）」

スバルは少し、母であるクイントのことを思い出していた。

ティアナ「ところで、どうしてなのはさん達がここに？」

なのは「うん、遊園地にいたんだけど、その時、はやてちゃんから連絡があつて、一番近くにいた私達が駆けつけたの。」

そう言つて、二人に説明した。

カイク「それよりも、いつの間にか俺達に賞金が懸けられていたんだな……」

ティア「そうですね、とりあえず帰りましょうか。」

カイク「そうだな、ヴィヴィオ帰るぞ。」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言つて、カイクはヴィヴィオを肩車して、デカベースに戻つた、その後、宇宙警察に連絡したら、アリエナイザーの間でカイクたちに賞金が懸けられていたことがわかつた。

カイク・アストレア 賞金5000万ゼニー

ジークフリード・グラード 賞金3000万ゼニー

フィオネ・シルヴァリア 賞金2000万ゼニー

メルト・ログティエ 賞金1500万ゼニー

エリス・フローラリア 賞金1200万ゼニー

ユースティア・アストレア 賞金1000万ゼニー

アイク・アストレア 賞金2500万ゼニー

という金額になっていた。それを聞いてジークは上等だと、得意げな笑みを浮かべていたのはまた別の話。

## 第45話 母からもらった宝物（後書き）

どうも、今回は短めにしました、さらに通貨はデカレンジャーにしました、ゴークイジャーの通貨はザンギヤックがないため、このようにしました、それでは次回はカイクがメインの話にしますのでよろしくお願いします。

第46話 剣豪対決！ゴーカイキングVS宇宙一の殺し屋（前書き）

どうも、今回はオリジナルですが、カイクと互角に戦える相手が出てきます、さらに相手が使う技はスターオーシャンシリーズから抜擢させてもらいました。

## 第46話 剣豪対決！ゴーカイキングVS宇宙一の殺し屋

ある辺境惑星にて

ライ「くっ．．．」

レン「だめだ．．．強すぎる．．．さすがは、宇宙最強の剣豪と名高い殺し屋ヘルキラー．．．」

ヘルキラー「ふん．．．宇宙警察の特キョウと聞いて、期待したが所詮この程度か．．．我が剣を越えるものはや居ないのか．．．」

「

アブレラ「居るぞ、地球という星にな．．．」

とそこへ、突然エージェント・アブレラが現れた。

ヘルキラー「貴様は、たしかアリエナイザーの間で噂になっているエージェント・アブレラか．．．」

ライ「お、お前が、エージェント・アブレラ．．．」

アブレラ「ふん、宇宙警察に用はない、それよりもヘルキラーよ、先ほど話だがな．．．たしかにいるぞお前に相応しい相手かな．．．」

「

ヘルキラー「．．．本当だろうな、その話は．．．」

アブレラ「ああ本当だ、この7人だ。」

そう言つて、ゴーカイジャーの7人の賞金リストを見せた。

レン「お、お前だったのか、ゴーカイジャーの手配書を作ったのは．．．」

そう言つと、アブレラはドロイドを差し向けた。

ドロイド「ウーン！」

アブレラ「話の途中だ、お前達にはそいつらの相手をしてもらおうか。」

ライ「くっ．．．」

レン「やるしかないのか．．．」

そう言つて、二人はドロイドに向かっていった。

アブレラ「どうだ？地球へ行くのなら、場所を教えるが。」  
ヘルキラー「手配書を一通り眺め顔を上げた。」  
ヘルキラー「．．．地球という星はどこだ？」  
そう言つて、アブレラはヘルキラーに地球の場所を教えた。

地球 海鳴市翠屋

カイムはヴィヴィオ、ティア、エリス、なのは、フェイト、カリムと一緒に翠屋に来ていた。

ヴィヴィオ「あ〜ん。」

カイム「おいしいか？」

ヴィヴィオ「うん！ほらパパも。」

そう言つて、自分が食べていたショートケーキをスプーンに盛つてカイムにあげた。

カイム「ありがとうヴィヴィオ。」

そう言つて、カイムはヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「えへへ〜」

エリス「ヴィヴィオ、ほら口にクリームが付いているわよ。」

そう言つて、エリスはヴィヴィオの口を拭いた。

ヴィヴィオ「ありがとうエリスママ。」

ワドルディ「（ポイ）」

ワドルディが別のデザートを持ってきた。

ティア「ありがとう。」

ワドルディ「（コク）」

ワドルディは頭を下げると厨房へ戻つていった。

なのは「すっかり馴染んじやったね、お父さん、お母さん。」

士郎「いや〜、働き者で助かるよ。」

桃子「そうね、それに近所の人達からの評判もいいのよ。」

フェイト「わかる気がする、これだけ愛らしいと．．．」

カリム「そうですね。」

とその時、シャーリーから通信が入った。

シャーリー「皆さん、街の中心部で突如ドロイドが現れました、先にジークさんたちが出撃したんですけど、一応皆さんも現場に急行してもらえませんか？」

カイル「わかった、それじゃカリム、ヴィヴィオを頼む。」

カリム「わかりました、カイルさん。」

ヴィヴィオ「パパとママ達も頑張っつてね。」

なのは「ありがとうヴィヴィオ。」

フェイト「それじゃ、行きましょう。」

ティア「そうですね。」

そう言つて、5人は現場に向かった。

#### 海鳴市中心部

こちらではジーク、フィオネ、メルト、アイルムの4人だけで戦い、ドロイドの大群を全滅させた。

ジーク「おわつたか・・・」

アイルム「しかし、アリエナイザーがいたわけでもないのになぜ現れたんだ？」

メルト「そうね、まだ終わりじゃないのかしら？」

フィオネ「とにかく、カイルさんたちが来るまで、ここで待機しましょう。」

そう言つて、4人は付近を警戒した。

それを建物の屋上で眺めていたアブレラとヘルキラーが居た。

ヘルキラー「・・・あれか、噂の海賊どもは・・・」

アブレラ「ああ、そうだ。」

ヘルキラー「なるほど・・・たしかに今まで見てきた奴らとは比べ物にならない強さを秘めているな・・・面白い・・・」

そう言つて、ヘルキラーはジークたちの前に現れた。

ジーク「誰だてめえは!？」

ヘルキラー「お初にお目にかかる私は、ヘルキラーという宇宙の殺し屋稼業をしているしがない剣豪だ・・・」

アイム「宇宙から来たのか・・・」

フィオネ「つまりアリエナイザーなのですか？」

ヘルキラー「宇宙警察はそう言っているが、私はただ強い相手と戦いたいただけだ、宇宙警察よりも貴様らの方が強いと聞いていたからこの星へ来たんだ・・・さあ楽しませてくれ・・・」

そう言つて、ヘルキラーは剣を鞘から抜刀した。

メルト「面倒なのに目を付けられたわね、私達つて・・・それでジークどうするの？」

ジーク「決まつてるだろう？・・・派手に行くぜ！」

ジークの一言を皮切りに4人はヘルキラーに向かっていった。

ジーク「オラ！」

フィオネ「はい！」

メルト「それ！」

アイム「はあ！」

ヘルキラー「くっ・・・やはり中々やるな・・・ならば、私も本気を出させてもらおうか・・・衝撃破！」

ヘルキラーは、回りに衝撃波を出してジークたち4人を吹き飛ばした。

ゴーカイジャー「・・・うあああ（きゃあああ）！！」「」

ジーク「やるじゃねえか、だったらこっちはこれだ。」

そう言つて、ジーク、フィオネ、メルトは別のレンジャーキーを出した。

3人「・・・豪快チエンジ！」「」

モバイレーツ「サンバルカン！」

ヘルキラー「姿が変わった!？」

ジーク「行くぜ！バルカンボールだ！」

そう言つて、3人は駆け出していった。

ジーク「行くぜ！ワン！」

メルト「ツー！」

フィオネ「スリー！」

ジーク「ゴー！」

ジークがそう言うつとフィオネとメルトが腕を組み、ジークは二人の肩を借りて高く飛んだ。

ジーク「アタック！」

そう言うつて、ジークはバルカンボールに対して強烈なスパイクを叩き込み、ヘルキラーに飛ばした。

ヘルキラー「ふん！」

しかし、ヘルキラーはバルカンボールを一刀両断した。

メルト「嘘!？」

フィオネ「バルカンボールが効かない!？」

ヘルキラー「ほう．．．今のは少々驚いたぞ．．．ならばこちらは．．．黒竜天雷破！」

そう言うつて、黒竜を召喚して、4人に召喚された黒竜からのプレス攻撃で4人は吹き飛ばされ、変身が解除され元の姿に戻ってしまった。

ジーク「くっ．．．つ、強い．．．」

アイム「まさか、これほどとは．．．」

とそこへ、カイク、エリス、ティア、なのは、フェイトが来た。

ティア「大丈夫ですか？」

ジーク「ああ、いいタイミングだぜ．．．」

エリス「とりあえず、この4人を下がらせた方がいいわね．．．」

なのは「そうですね。」

カイク「．．．ここは俺がやる、ジークたちを頼む．．．」

フェイト「はい、カイクさんも気をつけて．．．」

そう言うつて、なのは達にジークを任せて、カイクはヘルキラーと対峙した。

カイク「．．．（こいつ出来る．．．!）」

ヘルキラー「．．．（ほう、これほどの男がこんな辺境な星にいるとはな．．．）」

二人はお互いに相手の強さをすぐに理解した。

その直後、二人は剣を抜刀し、戦闘が始まった。

カイク「はああ！」

ヘルキラー「ふん！」

二人の剣術は一進一退の攻防で、目を見張るものがあった。

フェイト「カイクさん相手にここまで戦えるなんて．．．」

その後、二人は一旦距離をとった。

ヘルキラー「素晴らしいぞ、これほどまでの剣の使い手は今まで見たことがない、その強さに免じて、我が奥義を繰り出そう。」

カイク「ならこちららも必殺技を使わせてもらおう、行くぞ、ベガ。」

ベガ「イエス、マスター！」

そう言うと二人は剣を構え直した。

カイク「レンジャーキーセット！」

ベガ「ファイナルウェーブ！」

ヘルキラー「朱雀衝撃破！」

カイク「ベガスラッシュ！」

ヘルキラーは闘気をまとい朱雀の姿を成してカイクに突っ込んできた。  
た。

しかし、カイクはそれをもろともせず、ベガスラッシュをヘルキラーに叩き込んだ。

ヘルキラー「ぐああああ！」

ヘルキラーはかなり吹き飛ばされたが、それでも立ち上がってきた。

なのは「そ、そんな．．．カイクさんのファイナルウェーブ状態のベガスラッシュを叩き込んで立ち上がってくるなんて．．．」

ティア「なんて人なんですか．．．」

戦いを見届けていたメンバーはヘルキラーに対して驚きの表情を浮かべた。

ヘルキラー「まさか、我がここまで追い詰められるとはな．．．今日のところは私の負けだ、この場は一旦退かせてもらう。」

そう言って、ヘルキラーは剣を鞘にしまい、カイクの方を向いた。

ヘルキラー「．．．我が名はヘルキラー、貴様の名は！？」

カイクム「．．．カイクム・アストレア．．．ゴーカイキングだ．．．」  
ヘルキラー「その名前、覚えておくぞ．．．」  
そう言って、ヘルキラーは姿を消した。  
カイクム「ヘルキラーか．．．手ごわい相手だったな．．．」  
その後、カイクムはヴィヴィオとカリムを迎えに行き、全員でデカベ  
ースに戻り、宇宙警察からの連絡を聞き、ヘルキラーに対して警戒  
を高めることになった。

## 第46話 剣豪対決！ゴークイキングVS宇宙一の殺し屋（後書き）

今回は少し短めにしましたが、次回は今回の話がつながった話で新しいスーパージョウの戦隊の大いなる力の解放をメインにした話にしたいと思いますので、よろしくお願いします。

## 第47話 空を翔る戦士の魂（前書き）

どうも、今回は早めに更新できました、今回はジェットマンにしました、ちなみに主役はジークにしました、さらにフラッシュマンの敵を復活させましたので、よろしく願います。

## 第47話 空を翔る戦士の魂

デカベース訓練場

先日のヘルキラーの一件以来、ジークはいつも以上にトレーニングに励むようになっていた。

ジーク「はあ．．．はあ．．．くそ！あの時、カイクムが居なかったら、俺はやられていた．．．俺は自分が情けねえ．．．」

とそこへ、はやてとイクスが来た。

イクス「お父様。」

はやて「ジークさん。」

ジーク「イクスにはやてか．．．」

はやて「ジークさん、そろそろ切り上げた方がいいんじゃないですか？」

ジーク「いや、もう少しだけトレーニングをしてから戻る、お前達は先に戻ってる。」

イクス「はい、でもお父様、あまり無茶をなさらないでくださいな？」

ジーク「ああ、ありがとうイクス。」

そう言っつて、ジークはイクスの頭を撫で、その後二人は訓練場を後にした。

ジーク「くそ！娘にまで気を使わせちゃったぜ、情けねえ．．．」  
そして、さらに訓練を続けること30分後、カイクムから通信が入った。

ジーク「どうした？カイクム。」

カイクム「（ジーク、Gアイランドシティで妖魔反応だ。）」

ジーク「ああ、すぐに行く。」

そう言っつて、ジークは通信を切り、他のメンバーと合流してからヴアイスのヘリで現場に向かった。

G アイランドシティ

アスラ「さて．．ルシフェルからもらった、この妖魔獣士D・ガーダーでゴーカイジャーを血祭りに上げてくれる．．そして、お前たちにも十分働いてもらうぞ．．サー・カウラー、ボー・ガルダン。」

カウラー「お任せを、元よりルシフェル様により復活させてもらったこのご恩は忘れてはいません。」

ガルダン「私もです、また再びカウラー様と戦えることを感謝しています。」

アスラ「ふふふ．．頼むぞ（この二人の記憶から野心というものを完全に消去し、代わりに仲間意識と忠誠心を与えたからな．．）

「とそこへ、ゴーカイジャー、機動六課メンバー、流星、トップガンダー、GGGの凱、J、ルネ駆けつけた。  
カイク「アスラ！」

メルト「ルシフェルじゃなく、あんただったのね？」

アスラ「ゴーカイジャー、魔導師共、そしてGGGの諸君よく来たな．．紹介しよう、我が新たな配下を．．」

そう言つて、サー・カウラー、ボー・ガルダンの二人が全員の前に現れた。

カウラー「貴様らか．．フラッシュマンの力を含めたスーパー戦隊の力を使うという海賊戦隊ゴーカイジャーというのは．．」

ジーク「てめえらは!？」

凱「見たことがある、たしかフラッシュマンが戦ったエイリアンハンターのサー・カウラー、ボー・ガルダン！」

ソルダートJ「こいつらもルシフェルの手で復活したのか．．」

ガルダン「その通りだ、そして貴様らにはルシフェル様が誕生させた妖魔獣士D・ガーダーの力を思い知らせてくれる！」

アスラ「行け!D・ガーダーよ、ゴーカイジャー共々、奴らを蹴散らせ!」

D・ガーダー「ははは！」

D・ガーダーは身体を丸めて、全員に体当たりをし、吹き飛ばした。全員「うあああ（きゃあああ）！！！！」

すぐさまD・ガーダーは元の姿に戻った。

D・ガーダー「どうした？貴様らの力はこんなもんか？」

ジーク「やるう．．．上等だ、行くぜ！」

ゴークイジャー「豪快チエンジ！！」

モバイレーツ「ゴークイジャー！」

ゴークイセルラー「ゴークイジャー！」

流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

凱「アーマー、セットアップ！」

ルネ「イーキューブ！」

なのは・フェイト「レンジャージャケット！セットアップ！」

シグナム・ヴィータ「レンジャージャケット！セットアップ！」

フォワード陣「レンジャージャケット！セットアップ！！」

カイク「ゴークイキング！」

ジーク「ゴークイレッド！」

フィオネ「ゴークイブルー！」

メルト「ゴークイイエロー！」

エリス「ゴークイグリーン！」

ティア「ゴークイピンク！」

アイム「ゴークイシルバー！」

カイク・ジーク「海賊戦隊！」

ゴークイジャー「ゴークイジャー！！」

アスラ「スカルソルジャー、スカルナイト！」

スカルソルジャー「ガガガガ！！」

スカルナイト「カラカラカラ！！」

アスラは大量のスカルソルジャー、スカルナイトを呼び出した。

カイク「さて．．．」

ジーク「派手に行くぜ！」

そう言つて、全員で敵に向かっていった。次々に敵を撃破していく中で、ジークはサー・カウラーと戦っていた。

ジーク「オラ！」

カウラー「ふん！．．．ほう．．．中々やるな、だが貴様の心には焦りがある、その状態ではパワーアップして復活したこの俺を倒すことは出来ん！」

ジーク「なんだと！レンジャーキーセット！」

ゴーク「サイベル」ファイナルウェーブ！」

ジーク「ゴークイスラッシュ！」

しかし、いとも簡単にカウラーに防がれてしまった。

ジーク「何！？」

カウラー「ふん！」

ジーク「ぐあああ！」

ジークは吹き飛ばされてしまった。

カウラー「どうした？俺の知っているレッド、レッドフラッシュはもっと齒ごたえがあつたぞ。」

ジーク「うるせえ！」

ジークはがむしゃらにカウラーに向かっていくが、あしらわれている、そして、D・ガーダーと戦っているメンバーも相手の装甲の硬さに苦戦を強いられていた。

トップガンダー「なんと固い奴だ．．．」

カイク「ならば、キングテクター！サイブレード！」

カイクはサイブレードを出し、カッターモードにした。

カイク「行くぞ！メタルダー！」

メタルダー「わかった！レーザーアーム！」

カイク「サイブレードカッター・ゲキワザ鋭鋭刀！」

D・ガーダー「ぐあああ！」

二人の一撃で、D・ガーダーは装甲を破壊され、吹き飛ばされた。アスラ「やはり．．．ゴークイキングと超人機メタルダーは厄介だな．．．カウラー、ガルダン、D・ガーダー、一旦撤退するぞ。」カウラー「はは！」

ガルダン「命拾いしたな、ゴークイレッド、今の貴様ではカウラー様に勝つなど夢の話だな。」

そう言つて、4人は撤退して行つた。

その後、デカベースに戻つた後、ジークは黙つて出かけていった。ジーク「くそ！倒すどころか、あんなに無様な姿を見せちまうとは．．．」

とそこへ、はやてが来た。

はやて「ジークさん．．．」

ジーク「はやてか．．．どうした、仕事の方があるんじゃないのか？」

はやて「それやったら、もう終わりました、それにジークさんが心配で．．．」

ジーク「はははは．．．心配かけちまつたみたいだな．．．」

はやて「そんなことあらへんよ．．．前にオーリス三佐の時に私を励ましてくれたんはジークさんや．．．だから今度はジークさんの力になりたいんよ．．．だって、うちはジークさんが好きやから／＼／＼」

そう言つて、はやては顔赤らめながらジークに告白した。

ジーク「．．．知っていたよ、でもいいのか？こんな無様な戦いをした情けない男を．．．」

「???」「そうだな、敵に怯えて、自分を見失っている臆病者には勿体無い美人だぜ。」

そう言つと、そこにはバイクにまたがった一人の男が居た。

ジーク「．．．誰だ、あんたは？」

そう言つて、ジークは男に近づこうとしたが、その瞬間、不意を付

かれ殴り飛ばされた。

はやて「ジークさん！」

そう言つて、はやてがジーク駆け寄つた。

????「気安く近づくんじゃねえ！俺は納豆と男が大嫌いなんだよ！」

そう言つて、ジークの身体から離れたモバイレッツとゴーカイレツドのレンジャーキーを拾い上げ、ポケットの中に入れた。

ジーク「てめえ！それは俺のだ！」

????「お前には不要なものだ、まあ、どうしても返して欲しかったら、俺について来い。」

ジーク「．．．あんたいつたい何者なんだ？」

????「．．．結城凱だ。」

それを聞いたとき、ジークとはやては驚いた。

はやて「ええ！？じゃあ、あなたは鳥人戦隊ジェットマンの．．．」

ジーク「ブラックコンドル．．．」

凱「まあそうなるな、とにかくついてこい。」

そう言つて、ジークもマシンハスキーを使い、後ろにはやてを乗せて、凱の後を追つた。

ジークとはやては凱の後をついて行き、とある人気のない場所へ来た。

凱「ここなら、誰の邪魔も入らないだろう．．．」

ジーク「で、ここでいつたい何をさせようつてんだ？」

凱「俺と戦え。」

そう言つて、凱はジークにモバイレッツとレンジャーキーを返した。

凱はクロスチェンジャーを出現させた。

凱「クロスチェンジャー！」

そう叫ぶと凱はブラックコンドルに変身した。

ジーク「何！？レンジャーキーはこっちにあるはずなのに．．．はやて」「どういうことや？」

凱「．．．俺はな、レジェンド大戦や妖魔大戦以前に既に死んでいったんだ、その関係でレンジャーキーがなくても変身が出来るんだよ．．．さて、話は終わりだ、行くぞ！」

ジーク「．．．上等だ、行くぜ！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ジーク「ゴーカイレッド！」

そう言うて、はやてが見守るなか、ジークと凱の戦いが始まった。しかし、ジークが一方的に押されていた。

凱「どうした！？この程度でレッドを名乗っているのか？俺達のレッドはお前のような腑抜けじゃなかったぜ！たしかに俺とレッドはよく衝突はしたが、俺達のレッドはまさに最高の戦士だったぜ！」

ジーク「くっ．．．俺じゃ、レッドは荷が重かったのか．．．」

はやて「そんなことあらへん！ジークさんは最高のレッドやどんな時でも自分の意志で向かっていける人や、だからうちはジークさんが好きになつたんや！」

ジーク「はやて．．．そうか．．．忘れてたぜ、相手がどんなに強かろうと自分の道を行くのが俺だったな．．．何を今更怯えていたんだ、情けねえ、恐怖心なんてもんは自分で打ち破って自分の道を行くもんだぜ！」

凱「わかったようだな、ならば見せてみる、お前の力を！ブリンガーソード、コンドルフィニッシュ！」

ジーク「ゴーカイキヤリバー！レーザースラッシュ！」

二人の攻撃は同時に放たれ、先にジークのほうで膝をついたが、凱の方は変身が解除された。

凱「見事だぜ．．．手に入れたな、俺達ジェットマンの大いなる力を．．．」

ジーク「ああ、自分に打ち勝ち、壁を打ち破る力．．．それがジェットマンの力か．．．わかったぜ、先輩。」

凱「よせ、ケツが痒くなるぜ．．．」  
「????」そう言うな、凱。」

「????」そうよ、でもこれで私達の力を解放できたみたいね。」  
そう言うと、背後に4人の男女がいた、それはジェットマンの竜、  
香、雷太、アコがいた。

はやて「あなた達は、もしかしてジェットマンですか？」

竜「ああ、俺はレッドホーク。」

香「私はホワイトスワン。」

雷太「僕はイエローオウル。」

アコ「私はブルースワロー。」

そう言つて、4人はジークとはやての二人に紹介した。

竜「大いなる力を解放できたから、これを受け取ってくれ。」

そう言つて、ジークにキングキーを渡した。

凱「いい空だな...」

香「そうね...」

雷太「僕達や他の大勢の戦士たちが守つた空だ。」

アコ「でも、これからあなたたちが守るのはこの空だけじゃなく、

全ての世界の空を守つてね。」

ジーク「ああ、約束する。」

竜「その意気だ、頼むぞ後輩。」

凱「ふ...あばよ、後輩。」

そう言つと、5人は姿を消した。その直後、ジークとはやてに通信が入った。

リイン「はやてちゃん、ジークさん、たいへんです、またGアイ  
ランドシティで妖魔反応です。」

はやて「わかつたわ、今回は私も行くわ。」

そう言つて、通信を切った。

はやて「ジークさん、行きましょう。」

ジーク「ああ...とその前に...」

そう言つと、ジークははやての顔を掴み、顔を近付けてはやての唇  
にキスをした。

はやて「んんん...じ、ジークさん!?!?!」

ジーク「これが俺の答えだ、こんな俺でよければ俺についてきな。」  
はやて「・・・はい！」

そう言うのと、はやては笑顔でジークに答えた。

G アイランドシティ

既に到着して戦っていたメンバーはカイクムはカウラー、ガルダンの二人相手に戦い、メタルダーはアスラと戦い、それ以外のメンバーはスカルソルジャー、スカルナイト、さらに強化されたD・ガードーと戦っていた。

カイクム「はあ！」

カウラー「さすがは、ゴーカイジャー最強の男だな・・・」

ガルダン「だが、我らが力を見せてくれる！」

そう言うつて、カイクムは1対2で戦っていた。

それ以外のゴーカイジャーのメンバーでD・ガードーと戦っていた。

D・ガードー「どうした、この程度か？」

フィオネ「やはり、攻撃が効きませんね・・・」

メルト「メタルダーはアスラと戦ってるし、カイクムは二人と戦ってるし、ジークが早く来てくれないかしら・・・」

とそこへ、ジークとはやてが駆けつけた。

ジーク「遅くなった！」

エリス「ジーク、どこへ行つてたのよ!？」

なのは「あれ?どうして、はやてちゃんと一緒に?」

はやて「色々あつてな、それよりもジェットマンの人達に会ったから、大いなる力が解放されたんや。」

ティア「それは本当ですか?」

ジーク「ああ、だからさっそくこれで行くぜ！」

そう言うつて、5人はジェットマンのレンジャーキーを取り出した。

ゴーカイジャー「・・・豪快チェンジ!」

モバイレーツ「ジェットマン!」

ジーク「行くぜ!バードブラスター!、ビークスマツシャー!」

ジークたち5人は二つの銃を合体させた。

ゴークイジャー「ッスマツシュボンバー!」

D・ガードー「ぐあああ!」

D・ガードーは吹き飛ばされた。

ジーク「まだだ!行くぜ!ジェットストライカー!」

そう言うのと、どこからともなくジェットストライカーが現れた。

ジーク「ファイヤーバズーカ、スタンバイ!スコープロック!」

ゴークイジャー「ファイヤー!」

D・ガードー「ぐあああ!」

D・ガードーはファイヤーバズーカの直撃を受けたがまだやられない。

メルト「まだやられないの?」

アスラ「D・ガードーは鉄壁の妖魔獣士だ、そう簡単に倒すことは出来んぞ。」

ジーク「上等だ!だったら、これだ、行くぞ!」

そう言うって、5人は空に舞い上がり、空中で巨大な火の鳥になった。

ゴークイジャー「ジェットフェニックス!」

D・ガードー「ぐあああ!」

今度こそ、D・ガードーは倒された。

アスラ「馬鹿な...あのD・ガードーが倒されるとは...D・クラーゲン!」

D・クラーゲン「キイキイ!」

アスラはD・クラーゲンを召喚して、倒されたはずのD・ガードーを巨大化させて復活させた。

アスラ「撤退するぞ、カウラー、ガルダン。」

カウラー・ガルダン「ははは!」

そう言うって、3人は撤退した、そして大量の巨大スカルソルジャーを出していった。

ジーク「往生際が悪い野郎共だ!カイム、ここは俺達がやる!」  
カイム「ああ、頼む。」

そう言つて、ゴークカイガレオンを呼び出した。

アイルムも豪獣ドリルを呼び出した。

ゴークカイジャー「完成！ゴークカイオー！」

アイルム「完成！豪獣神！」

とそこへ、デカベースロボに乗ったはやてが来た。

メルト「はやて？」

はやて「うちも戦わせてもらいます！」

ジーク「ああ、頼むぜ！」

そう言つて、豪獣神がスカルソルジャーの大群を蹴散らしていった。アイルム「一気に決める、アイルム「レンジャーキーセット！必殺豪獣トリプルドリルドリーム！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

アイルムは必殺技で一気に敵を全滅させた。

そして、D・ガードーと戦っている、ゴークカイオーとデカベースロボは連携攻撃で敵を翻弄している。

ジーク「行くぜ！レンジャーキーセット！」

ゴークカイオー「牙吠！ガオリオン！」

ゴークカイジャー「完成！ガオゴークカイオー！」

ジーク「まだだ、さらにレンジャーキーセット！」

ゴークカイジャー「完成！シンケンゴークカイオー！」

D・ガードー「調子に乗るな！くらえ！」

D・ガードーは身体を丸めてシンケンゴークカイオーに向かってきた。ジーク「上等だ！烈火大斬刀！」

ゴークカイジャー「ゴークカイ侍斬り！」

D・ガードー「ぐあああ！」

D・ガードーは今の攻撃で吹き飛ばされた。

ジーク「はやて！今だ！」

はやて「了解！行くで！」

リイン「パトエネルギー全開です！」

シャーリー「ヴォルカニック・バスター発射！」

D・ガーダー「ぐああああ!!」

今の一撃で完全にD・ガーダーは消滅した。

ジーク「やったぜ・・・見たか先輩達・・・」

そうジークが呟き、今回の事件は終了した。

それを遠くのビルの屋上でジェットマンのメンバーが見ていた。

凱「たく、手間取らせやがって・・・」

竜「そう言っな、俺たちだって同じようなものだっただろう?」

香「そうね、本当に。」

雷太「まあ、これで任せられるんじゃない。」

アコ「そうだよ、それじゃ私達は帰ろっか?」

竜「ああ、そうだな。」

凱「それじゃ、今度こそホントにあばよ、後輩。」

そう言うと5人はその場から姿を消した。

そしてその後、ジークはイクスをシャマルに任せて、はやてと出かけた。

はやて「あの、ジークさんどこへ行くんですか?」

ジーク「ホテルだ、これからたっぷり可愛がってやるよ。」

はやて「え!?で、でも、うち初めてやから・・・ノノノノ」

ジーク「そうなのか?だったら、忘れられないくらいに可愛がってやるぜ。」

そう言っつて、二人はホテルの中に消えていった。

ちなみにカイクもその夜、フェイトにヴィヴィオを任せて、なのはとティアの二人を可愛がったというのはまた別の話。

## 第47話 空を翔る戦士の魂（後書き）

どうも、今回は最後ちょっと年齢制限的な話になりましたが、これで正式にジークとはやてをくつつけることが出来ました、次回は引き続き大いなる力の解放の話にしようと思います、ちなみに主役はメルトとシャマルにする予定にしたい考えです、それではまた次回。

## 第48話 海賊と古の森の戦士達（前書き）

どうも、やっと更新できました、今回はギンガマンの話にします、さらに彼らもボウケンジャーと同じで一緒に戦いますのでよろしくお願ひします。

## 第48話 海賊と古の森の戦士達

人里離れた森

ルシフェル「．．．ここだな、ギンガの森は、どうやら、ギンガマンはここに銀河の光を隠したようだからな、あれを手に入れることが出来れば、戦力強化が望める上にゴークカイジャーの奴らにとってもかなりの痛手になるはずだ．．．さて、まずはこの森の結界を破壊してからだな．．．」

そう言つて、ルシフェルは森の中に消えて行つた。

デカベース

そして、ルシフェルがギンガの森に向かうほんの1時間前、ジークたちはナビィにお宝ナビゲートさせようとしていた。

ジーク「それじゃ、鳥お宝ナビゲート。」

ナビィ「ハイナ！レッツ、お宝ナビゲート！」

そう言つて、ナビィは当てもなく飛び続け、壁にぶつかった。

クロノ「．．．相変わらず、不思議な占いだな．．．」

フェイト「まあ、私達はもう見慣れたし．．．」

なのは「それに、この占いは必ずつていいほど、私達を導いてくれるからね。」

そんな話をしている中、ナビィが語り始めた。

ナビィ「．．．フムフム、宇宙の奇跡の力が封印サレシ聖ナル森へ行き邪悪な力カラ守るべし．．．ダツテサ。」

シグナム「宇宙の奇跡の力？」

ヴィータ「聖なる森？」

ヴィヴィオ「パパ、もしかして星獣戦隊ギンガマンのギンガの森のことじゃないのかな？」

カイク「どうして、そう思うんだ？」

ヴィヴィオ「だって、ギンガマンの故郷のギンガの森は結界が張っ

てあつて、普通の人は入れないんだよね？だったら封印されたってことになるのかなって・・・」

レオナ「多分のヴィヴィオの言うとおりだと思つよ、おそらくその奇跡の力はギンガの光のことだと思つし・・・」

カイク「なるほど、よく気が付いたな、偉いぞヴィヴィオ。」

そう言つて、カイクはヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「えへへへ」

メルト「でも、邪悪なる力から守れつて言つのは・・・」

フィオネ「妖魔も狙っているのかもしれないね・・・」

ジーク「となると、早めに行つた方がいいな・・・牧野先生、場所はわかるのか？」

牧野「ええ、ちょうどこの辺りになります。」

そう言つて、モニターに地図を出した。

レオナ「ちなみにこの森は知つてると思つけど、ギンガマンの力がないと普通には入れないからね。」

カイク「わかつた、この近辺にきたら、ギンガマンの力で探し方がいいな・・・」

はやて「せやね、ほなら今回は私も一緒に行かせてもらいます。」

クロノ「ああ、こつちの指揮は僕達に任せてくれ。」

そう言つて、ゴーカイジャー、六課、さらにGGGのメンバーも現地で合流し、ギンガの森へ向かつた。

ギンガの森があると言われる森

ジーク「本当にこの辺りなのか？」

メルト「さっきの地図のデータだとこの辺りのはずだけど・・・」

はやて「シヤマル、探索魔法に反応はあるか？」

シヤマル「それがね、はやてちゃんこの辺りでたしかに反応があるんだけど・・・」

シグナム「つまりこの近くにあるということだな。」

はやて「せやけど、いったいどこに・・・うん？ヴィヴィオ、イク

ス、何読んでるんや？」

イクス「お母様、この本実際にギンガマンの人達の戦いを見ていた人が書いたといわれている絵本です。」

なのは「絵本？」

ヴィヴィオ「うん、ほらここにギンガマンや黒騎士ヒュウガさんが載っているの、レオナさんから借りたの。」

そう言つて、ヴィヴィオとイクスはその絵本を見せた。

フェイト「ホントだ、でもこれを見るとこの辺りになるね・・・」

カイル「・・・気付かないか？さっきからこの辺りを一周しているぞ。」

ティア「え！？」

アイル「やはりカイル、お前も気付いていたか。」

凱「ということは、ここが結界の張つてある場所だということなのか？」

とその時、その場所が突然、空間が割れ、そこから6人の男女が出てきた。

????「くぐあああ（きゃあああ）」

ソルダート「誰だ！？」

フィオネ「あなた達は！？もしかして・・・！」

この6人はなんと星獣戦隊ギンガマンのリョウマ、ハヤテ、ゴウキ、ヒカル、サヤ、ヒュウガの6人だった。

リョウマ「き、君達は！？」

ヒュウガ「明石達が言っていた、現在のゴーカイジャーか！？」

ティア「はい、そうです。」

ハヤテ「よかった、いいところに来てくれ・・・」

フィオネ「一体何があったというんですか？」

ゴウキ「妖魔が、ギンガの光を狙ってきたんだ・・・」

エリス「何ですって！？」

とその時、ルシフェルとクールギン、さらにアンチレンジャーキーで召喚されたゼイハブ、グレゴリ、シエリンダ、サンバツシュ、ブ

ドー、イリエス、バットバスがいた。

ルシフェル「ほう．．．ゴーカイジャー、魔導師ども、さらにGGの奴らまでいるとはな．．．」

ジーク「てめえだったの、ルシフェル。」

クールギン「ギンガの光を手に入れるのはお前達を倒してからだな．．．」

流星「クールギン！」

カイク「メルト、ティア、シャマル、三人はヴィヴィオとイクスの二人と一緒に先輩達を安全なところまで連れて行ってくれ。」

メルト「ええ、わかったわ。」

シャマル「さあ、こちらへ．．．」

そう言つて、ギンガマンを連れて、4人は下がった。

ジーク「行くぜ！」

カイク「ジーク・アイム」「豪快チエンジ！」

フィオネ・エリス「豪快チエンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ゴーカイセルラー「ゴーカイジャー！」

流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

凱「アーマー、セットアップ！」

護・戒道「アーマー、セットアップ！」

ルネ「イクアップ！」

なのは「フェイト」「レンジャージャケット！セットアップ！」

シグナム・ヴィータ「レンジャージャケット！セットアップ！」

フォワード陣「レンジャージャケット！セットアップ！」

ルシフェル「いいだろう、少し遊んでやるか．．．」

そう言つて、別のアンチレンジャーキーを出して、それらを実体化させた、さらにスカルソルジャー、スカルナイトも召喚して来た。

ブリッツ「．．．」

ボンゴブリン「……………」

サキユバス「……………」

カイク「アリナイザーのリバーシア星人のヘルズ兄弟か……………」

ジーク「おもしれえじゃねえか！派手に行くぜ！」

そう言つて、敵に向かつていった。

一方別のところへ移動したメンバーは……………」

サヤ「ありがとう、治療してもらつて……………」

シヤマル「いえ、これも私の仕事ですから……………」

ティア「それにしても、どうして先輩達がここに？確か先輩達はあの異世界にいるんじゃない？」

ヒュウガ「ああ、その通りだ、だが今回この森に封印してきたギンガの光を妖魔が狙つてることがわかつてここに来たんだ。」

メルト「それでギンガの光はどこに？」

リヨウマ「モークが管理しているから、滅多なことじゃない限り大丈夫なんだけど……………」

ゴウキ「相手は妖魔のしかもルシフェルかもしれないと思つて……………」

ハヤテ「だから、今回俺達が直接来たんだ。」

ティア「そうだったんですか……………」

ヒカル「それにしても、まさか海賊と戦つてた俺達が海賊に助けられるなんてね……………」

ヴィヴィオ「パパは悪い人じゃないもん！」

イクス「そうです、お父様達は宇宙海賊バルバンみたいな海賊じゃありません！」

そう言つて、ヴィヴィオとイクスがヒカルの発言に反論した。

ハヤテ「おいヒカル、仮にも俺達を助けてくれた人達だぞ、口を慎め。」

ヒュウガ「ハヤテの言つとおりだ。」

リヨウマ「ごめんね、別に君達のお父さんたちを悪く言つつもりは

なかつたんだ。」

サヤ「それにしても、この子達にここまで慕われてるなんてね、いいお父さんたちだね。」

ヴィヴィオ「．．．だって、パパのこと大好きだもん、パパはヴィヴィオがクローンだってわかった時、ヴィヴィオが居ちゃいけない子だって言ったら、パパは「生まれてきた命で生きていてはいけない命はない」って言うてくれて、その後優しく抱きしめてくれたの．．．」

イクス「私もヴィヴィオと同じです．．．お父様は私に「この世に生まれた以上は、誰にだって生きる権利はあるし、幸せになる権利だってある」って言うてくれました．．．」

ヒカル「そうだったのか．．．ごめんな。」

それを聞いた後、ヒカルは申し訳ない顔をして謝った。

メルト「．．．そうね、カイクやジークの二人は、たしかにぶつきらぼうなところがあるけど、人から信頼されていたわね．．．まあ私がいなくなった後ちよつと仲違いしてたみたいだけど．．．」

シヤマル「そうだったんですか？」

ティア「ええ、私とカイクさんが貴族のところへ行つた後、戻ってきた時に考え方が変わったって言うて、ジークさんと一回決別したそうですね、後で聞いた話だと私がいなくなった後、結局カイクさんはカイクさんだってわかって和解したそうです。」

メルト「結局、あの二人は似たもの同士ってわけよ。」

ヒユウガ「なるほど、それで君達はこれからどうするつもりなんだ？」

メルト「それは戻って一緒に戦うわよ。」

ティア「そうですね、仲間が戦っているのに私達がここで油を売っているわけにはいきません。」

リヨウマ「君達はどうして、そこまで戦うんだ？」

メルト「．．．私達は今まで、明日を生きること必死だったの、その関係で私はどうしても困っている人を見捨てることが出来ない

の。」

ティア「わかります、メルトさんはそういう人ですから、だからこそカイクさんやジークさんが信頼しているんですよ、ちよつと嫉妬しちゃいますけど……」

シヤマル「……私達もかつて、はやてちゃんの命を救うために多くの罪を犯しました、ですから今私たちが出来ることは、自分達の役目を果たすことだと思っんです。」

ティア「シヤマル先生……」

それを聞いた、ギンガマンのメンバーは全員顔合わせて頷いた。

リヨウマ「……君達の覚悟は聞いた、だからこそお願いする俺達も戦わせてくれ。」

ハヤテ「そうだな、このままやればなしつてのも癪に障るからな……」

それを聞いたメルト、ティア、シヤマルは顔を合わせて頷いた。

メルト「わかりました、一緒に戦ってください先輩。」

そう言つて、二人はギンガマンと黒騎士のレンジャーキーを渡した。

ヒュウガ「ありがとう、これで俺達も戦える。」

ヒカル「後輩にばかりいい格好はさせねえぜ。」

ゴウキ「妖魔に一泡吹かせてあげよう。」

サヤ「ええ、さあ行きましようみんな。」

そう言つて、全員でみんなのところへ戻つていった。

戦闘メンバーサイド

カイク「キングソードベガ！」

ジーク「オラ！」

アイム「はあ！」

残つたメンバーはアンチレンジャーキーで召喚された敵と戦つていた。

ルシフェル「しぶとい奴らめ……」

とそこへ、メルトたちがギンガマンのメンバーを率いてきた。

メルト「みんな！」

カイク「メルト、ティア！」

はやて「シャマル！その人達の怪我は．．．」

シャマル「大丈夫よ、はやてちゃんこの人達おもったより軽傷だったから．．．」

リヨウマ「後輩が戦っているのに俺たちが休むわけにいかないさ。」

ジーク「おもしれえ、それじゃ先輩達の戦いぶり見せてもらおうぜ！」

ヒュウガ「ああ、行くぞ！」

メルト・ティア「「豪快チエンジ！」」

モバイレーツ「「ゴーカイジャー！」」

ギンガマン「「「銀河転生！」」」

ヒュウガ「騎士転生！」

シャマル「レンジャージャケット！セットアップ！」

そう言つて、変身を完了させた。

そして、全員で改めてルシフェルたちの前に立った。

リヨウマ「ギンガレッド、リヨウマ！」

ハヤテ「ギンガグリーン、ハヤテ！」

ゴウキ「ギンガブルー、ゴウキ！」

ヒカル「ギンガイエロー、ヒカル！」

サヤ「ギンガピンク、サヤ！」

ヒュウガ「黒騎士ヒュウガ！」

リヨウマ「銀河を貫く伝説の刃！星獣戦隊！」

ギンガマン「「「ギンガマン！」」」

カイク「「「ゴーカイキング！」」」

ジーク「「「ゴーカイレッド！」」」

フィオネ「「「ゴーカイブルー！」」」

メルト「「「ゴーカイイエロー！」」」

エリス「「「ゴーカイグリーン！」」」

ティア「「「ゴーカイピンク！」」」

アイム「ゴーカイルバー！」  
カイク・ジーク「海賊戦隊！」  
ゴーカイジャー「「「ゴーカイジャー！」」」  
ゴーカイジャー・ギンガマン「「「我ら！スーパー戦隊！」」」  
ルシフェル「小賢しい．．．叩きのめせ！」  
とその時、ギンガの森から一つの光が来た。  
ルシフェル「こ、これは！？ま、まさか．．．」  
モーク「聞こえるか、ギンガマン、今君たちの元へギンガの光を戻した、これで本当に本気で戦えるはずだ。」  
リヨウマ「ありがとうモーク！それじゃみんな行くぞ！」  
ギンガマン「唸れ！ギンガの光！」  
そう言うと、ギンガマンの身体に特殊な鎧が装着された。  
リヨウマ「獣装光！」  
ルネ「す、すごい．．．」  
ヴィータ「これがギンガの光の力か．．．」  
カイク「さて．．．それじゃ．．．」  
ジーク「派手に行くぜ！」  
そうやって、敵に向かっていった。  
ゴーカイジャー「「「ゴーカイス克蘭ブル！」」」  
サンバツシュ「．．．．．！」  
ブドー「．．．．．！」  
カイク「ベガスラッシュ！」  
スカルナイト「「「カラカラカラ！」」」  
アイム「豪快チェンジ！」  
ゴーカイセルラー「ゴーカイルバー、ゴールドモード！」  
アイム「これで決める！レンジャーキーセット！」  
ゴーカイスピア「ファイナルウェーブ！」  
アイム「ゴーカイレジエンドリーム！」  
グレゴリ「．．．．．！」  
スバル「炎上破、デイバインバスター！」

ティアナ「ムーンサルトショット！」  
ギンガ「天重星・回転蹴り！」  
イリエス「……………！」  
キャロ「マジランプバスター！」  
エリオ「ストラードスラッシュ！」  
シグナム「レヴァンティン！百火繚乱！」  
シエリンダ「……………！」  
ヴィータ「面倒だ！一気に行くぞ！アイゼン！グランドインフェル  
ノ！」  
スカルソルジャー「ガガガ！」  
凱「行くぞ！」  
メタルダー「メタルボンバー！」  
ソルダード「はああ！」  
ルネ「食らいな！」  
護・戒道「はああ！」  
バットバス「……………！」  
なのは「フェイトちゃん、はやくちゃん一緒に行こう！」  
フェイト「うん！」  
はやく「わかつたで！」  
リン「私が援護する！ルナライト！」  
シャマル「嵐のはばたき！」  
なのは「フェイト・はやく」「ナイトトリプルブレイカー！パニ  
ツシュ！」  
ヘルズ兄弟「……………！」  
ヒュウガ「はあ！黒の一撃！」  
ギンガマン「銀河の戦光！」  
ゼイハブ「……………！」  
全員の一致攻撃で敵が怯みながら一箇所に集まった。  
ジーク「一気に決めるぜ！」  
カイル「メルト……………ちよっとこい。」

そうやって、カイムはメルトを呼び、メルトにキングテクターを纏わせた。

メルト「カイム、これって．．．」

カイム「レオナから聞いたからな、俺を通じて装着させるなら他のメンバーも使えるそうだ。」

メルト「なるほど．．．それじゃありがたく使わせてもらおうわ。」

シャマル「私も手伝います!」

メルト「ええ、お願いするわ。」

ルシフェル「なんということだ．．．まさか聖王の鎧にあのような使い方があったとは．．．」

ジーク「ゴークイストリーマー、ゴークイキャリバージュイント!

レンジャーキーセット、マキシムモード!」

ゴークイストリーマー「マキシムモード!」

メルト「レンジャーキーセット、ゴークイガンセット、ゴークイデ

リンガーファイナルウェーブモード!」

ゴークイデリンガー「ファイナルウェーブ!」

カイム「レンジャーキーセット!」

ベガ「ファイナルウェーブ!」

ゴークイジャー「レンジャーキーセット!」

ジーク「ファイヤー!」

メルト・シャマル「ゴークイデリンガー、ファイナルウェーブ!」

「

ゴークイジャー「ゴークイスクランブル!」

アイム「ゴークイレジェンドリーム!」

カイム「ベガスラッシュ!」

ギンガマン「新獣撃棒!閃光獣撃弾!」

この一撃で敵は一気にアンチレンジャーキーに戻った。その後、カ  
イムの元にキングテクターが戻った。

メルト「ありがとね、カイム。」

カイム「どういたしまして。」

ルシフェル「おのれ．．．こうなつたら、D・クラーゲン！」

D・クラーゲン「キイイキイイ！」

出現したD・クラーゲンはなんとアンチレンジャーキーの敵を再度  
実体化させて巨大化させた。

ルシフェル「引き上げるぞ、クールギン！」

クールギン「ははは！」

そう言つて、二人は引き上げて行つた。

ジーク「まったく色々なことしてきやがるぜ！」

モバイレーツ「ゴークイガレオン！」

ゴークイセルラー「豪獣ドリル！」

リヨウマ「カイクム！」

リヨウマはカイクムにキングキーを渡した。

カイクム「ああ、わかつたキングインストローラー！」

キングインストローラー「ギンガイオー、ゴウタウラス、ブイレック

ス！」

その後、ギンガマンがギンガイオーへ、ヒュウガはゴウタウラスと  
合身し、カイクムはブイレックスに搭乗した。

ギンガマン「超装光ギンガイオー！」

ヒュウガ「合身獣士ブルタウラス！」

ゴークイジャー「完成！ゴークイオー！」

アイクム「完成！豪獣神！」

全員戦闘態勢に入った。

カイクム「よし、まずは俺からだ！DVディフェンダー！マックスバ  
ーニング！」

サンバツシュ・ブドー・イリエス「．．．．．！」

アイクム「次は俺だな、レンジャーキーセット！必殺豪獣トリプルド  
リルドリーム！」

バットバス・シェリンダ「．．．．．！」

メルト「今度はこつちね。」

ジーク「ああ、派手に行くぜ！」

「ゴーカイジャー」「レンジャーキーセツト!」「  
「ゴーカイジャー」「ゴーカイ大ゲキゲキ獣!」「  
ヘルズ兄弟」「!」「  
「リヨウマ」「行くよ! 兄さん!」  
「ヒュウガ」「ああ、行くぞ! リヨウマ!」  
「リヨウマ」「銀河大獣王斬り!」  
「ヒュウガ」「野牛鋭断!」  
「ゼイハブ・グレゴリ」「!」「  
「一気に蹴散らしたが、その後ピエールがアンチレンジャーキーを回  
収しに来て、撤退した。」

ギンガの森

「リヨウマ」「今回は本当にありがとう。」  
「メルト」「気にしないでいいわ。」  
「ジーク」「そうだな、俺達の力も解放してもらったしな...」  
「ティア」「でも本当にいいんですか? ギンガの光を私達が持っていて  
も...」  
「ヒュウガ」「ああ、この力は今は君達が持っていたほうがいい...」  
「ハヤテ」「その代わりこれからも頼むぞ。」  
「フィオネ」「任せてください。」  
「ゴウキ」「これなら大丈夫ですね。」  
「ヒカル」「ああ、頼むぜ後輩。」  
「サヤ」「それじゃ、私達はこれで...」  
「そう言つて、ギンガマンの6人は光となってその場から消えた。  
「エリス」「さて... とりあえず目的は果たしたけどこれからどうす  
るの?」  
「カイル」「ヴィヴィオたちがこの場所を気に入ったようだから、もう  
少しここでゆつくりして行くか。」  
「なのは」「そうですね、少しはみんなのんびりした方がいいですね。」  
「フェイト」「それじゃ、夕暮れまでここにいまししょうか。」

はやて「せやな、ほならクロノ君たちにも連絡しておくわ。」  
そう言って、カイルたちは束の間の休息を取った。  
ちなみにヴィヴィオとイクスはモークからギンガマンの詳しい話を  
聞いていたという。

## 第48話 海賊と古の森の戦士達（後書き）

今回はこのような話にしました、もう少しメルトとシャマルを絡ませたかったのですが、それはまた別の話にします、次回は大いなる力と関係のない話にしようと思いますので、よろしくお願いします。

## 第49話 護りたいものを護る力（前書き）

どうも、今回はまたあの殺し屋ヘルキラーが登場します、さらにかつて出てきたスーパー戦隊の人達が助っ人で出てきます。



ヘルキラー「失礼する、これをお前達の主達に渡してくれ．．．」  
そう言つて、カイク・アストレア様へと書かれた手紙をワドルディに渡すと姿を消した。

そして、帰つてきたワドルディたちはそれをワドルドウに渡した。

ワドルドウ「あゝの、失礼します。」

ワドルドウはデカルム来た、そこにははやて、フェイト、ジーク、クロノがいた。

ジーク「どうした？ワドルドウ。」

ワドルドウ「はい、実は買出しに行かせたワドルディが変な男からこの手紙を預かつたんですが．．．」

そう言つて、先ほどのカイク宛の手紙を渡した。

フェイト「カイクさん宛ですね。」

はやて「差出人は．．．ヘルキラーやて!？」

クロノ「あの殺し屋から!？」

ジーク「．．．とりあえず、カイクを呼ぶか．．．」

フェイト「それなら私が呼びます。」

そう言つて、フェイトは通信を使って、ヴィヴィオとトレーニング中のカイクに通信で呼び出した。

さらにトレーニング中だったなのはたちもカイクとヴィヴィオと一緒に来た。

カイク「．．．確かに俺宛だな．．．」

ヴィヴィオ「パパ、なんて書いてあるの?」

カイク「ああ．．．ちよつと待つてろ、何々．．．」  
「拝啓 カイク・

アストレア改めゴーカイキング殿へ、貴殿の強さには恐れ入った、  
そこで我は貴殿と一対一の真剣勝負がしたい、貴殿の故郷である都市の荒野にて待つ．．．」  
「ヘルキラーより．．．か．．．」

エリオ「これつて、お父さんへの．．．」

キャロ「果たし状じゃ．．．」

シグナム「間違いなくそうだろうな．．．それで、どうするカイク?」

カイル「・・・名指しで指名された以上は行かないわけには行かないだろう・・・」

クロノ「しかし、畏かもしれないぞ・・・」

ジーク「その心配はないだろう、この間の宇宙警察の話じゃ、奴は実力を認めた相手には真つ向から挑む性格だそうだ。」

カリム「ですがカイルさん・・・」

カイル「心配してもらってすまないが、俺なら大丈夫だ。」

ヴァイス「・・・カイルの旦那、出勤にはゴーカイガレオンがあれば何とかなるし、俺が送りますよ・・・」

カイル「ああ、頼むヴァイス。」

そう言つて、カイルが立ち上がり行こうとしたその時、ヴィヴィオがカイルのズボン裾を掴んだ。

カイル「ヴィヴィオ・・・」

ヴィヴィオ「パパ・・・」

ヴィヴィオが不安そうな顔して、カイルを見ていた。

なのは「だめだよヴィヴィオ、カイルさんはこれから決闘に行かないといけないのに邪魔しちゃ・・・」

ヴィヴィオ「ごめんなさい・・・でも・・・」

フェイト「ヴィヴィオ、カイルさんが心配なんだよね。」

ヴィヴィオ「うん・・・」

それを見たティアとエリスは何かを思いついた。

エリス「だったら、なのはもヴィヴィオと一緒にカイルについて行つたらどう？」

なのは「え!？」

ティア「そうですね、見届け人ということでヴィヴィオの傍になのはさんがいてもらえば安全だと思いますし・・・」

リンディ「そうね、それならヴィヴィオも連れて行ってもいいんじゃないのかしら・・・」

ジーク「カイルとなのはの抜けた分ぐらい俺達で何とかするさ・・・」

「

アイム「ああ、それにGGGのメンバーもいるしな。」  
フィオネ「ですから、カイクさんたちはヘルキラーに集中してください。」

メルト「その代わりなのは、カイクことお願いね。」  
なのは「は、はい、ありがとうございます。」

カイク「わかった、それじゃなのはとヴィヴィオも一緒に連れて行かせてもらう。」

そう言つて、次の日4人でヘルキラーの待つ場所へ向かった。

現在

カイク「はああ！」

ヘルキラー「ふん！」

二人は一進一退の攻防が続いていた。

ヘルキラー「貴様に聞きたいことがある……。」

カイク「なんだ!？」

ヘルキラーは突然、戦いの中でカイクに問いかけてきた。

ヘルキラー「貴様は何のために剣を振るう？」

カイク「……お前はどうかんだ？」

ヘルキラー「我は、自分の強さを高めるため……ただそれだけだ……。」

……

カイク「……俺は、自分の護りたいものを護る為に剣を振るうだけだ。」

ヘルキラー「……護りたいものとは、あの娘か？」

カイク「……ヴィヴィオだけじゃない、俺は大切な仲間や友人を護る為に戦う……。」

ヘルキラー「そうか……それが貴様の信念か……面白い、我も本気を出す、貴様も我に本当の力を見せてもらおう……。」

そう言つて、まるで死神をイメージしたかのような漆黒の鎧を身に纏った。

なのは「あんなものまで、あつたなんて……。」

カイク「なるほど．．．そんな隠し玉を持っていたのか．．．ならばこちらも．．．キングテクター！」

ヴィヴィオ「パパもキングテクターを使った．．．」

そう言つて、二人は自らの切り札を出して真剣勝負に入った。

ヘルキラー「七星双破斬！」

カイク「ベガトルネード！」

お互いに技を相殺した。

ヘルキラー「やるな、ならば．．．蒼龍醒雷斬！」

カイク「ならこつちは、破邪百獣剣！邪気退散！」

カイクは破邪百獣剣でヘルキラーが放つた蒼龍を消滅させた。

ヘルキラー「なんと！．．．ならばこれでどうだ緋竜天雷破！」

カイク「目には目だ！ブレイジング・ストーム！」

カイクはキングソードベガでヘルキラーの技をかき消した。

ヘルキラー「やはり．．．貴様は一筋縄ではいかないか．．．」

カイク「お前もな．．．」

ヘルキラー「だが、勝つのは我だ、行くぞ。」

そう言つて、ヘルキラーは剣を構えなおした。

カイク「ならこちららも全力で応戦させてもらつ、行くぞベガ。」

ベガ「イエス！」

カイク「レンジャーキーセット！」

ベガ「ファイナルウェーブ！」

するとカイクの背後に大いなる力が解放された歴代スーパー戦隊のエンブレムが浮かび上がった。

なのは「カイクさんの背後に歴代スーパー戦隊のエンブレムが．．．」

ヴァイス「これが旦那の全力．．．」

ヴィヴィオ「パパ．．．」

ヘルキラー「奥義、黒竜天雷破！」

カイク「はあ！ベガスラッシュ！」

ヘルキラーの黒竜の激しい攻撃をもるともせず、カイクはヘルキラ

ーに必殺技を叩き込んだ。

ヘルキラー「ぐあああ！」

ヘルキラーの纏った鎧は砕け散り、以前ヘルキラーに食らわせた以上の威力のベガスラツシュでヘルキラーに勝利した、しかしカイクもキングテクターを解除した直後、黒竜天雷破を食らい膝を付きそうになった。

カイク「くっ．．．やはり、ただじゃすまなつたか．．．」

ヘルキラー「私の負けか．．．見事だ、お前の勝ちだ．．．」

とその時、カイクに対して複数の攻撃が飛んできた。

カイク「ぐあああ！」

ヴィヴィオ「パパ！」

なのは「カイクさん！」

ヴァイス「旦那！」

とそこには、エージェント・アブレラがいた。

アブレラ「ふん、ゴーカイキングを倒せんとはな．．．まあいい、奴をこれだけ消耗させただけでもよしとするか．．．」

そう言つて、後ろからアンチレンジャーキーで召喚されたヘルズ兄弟、スペリオン星人ジェニオがいた。

ブリッツ「．．．．．」

ボンゴ布林「．．．．．」

サキユバス「．．．．．」

ジェニオ「．．．．．」

ヘルキラー「エージェント・アブレラ．．．貴様、始めからこういうつもりで．．．」

アブレラ「私はあくまでビジネスの一環として、お前にゴーカイジャーの情報を教えたに過ぎない、これから先はお前には関係のないことだ。」

ヘルキラー「貴様．．．！」

なのは「カイクさん！大丈夫ですか！？」

なのは、ヴィヴィオ、ヴァイスの3人がカイクの元へ駆け寄った。

カイル「ああ．．．なんとかな．．．」

ヴィヴィオ「パパ．．．」

なのは「．．．ヴァイス君、ヴィヴィオ、カイルさんをお願い．．．」

「

ヴァイス「わかりました。」

ヴィヴィオ「なのはママも気をつけてね．．．」

そう言つて、二人はカイルを連れて下がった。

なのは「許さない．．．私の大切な人をこんな風に痛めつけるなんて．．．エージェント・アブレラ！あなただけは絶対に許さない！行くよ！レイジング・ハート！」

レイ「イエス！」

なのは「レンジャージャケット！セットアップ！」

アブレラ「やれ！」

そう言つて、ヘルズ兄弟、ジェニオとさらにドロイドをなのはに差し向けた。

なのは「アクセルシューター！」

ドロイド「ウイーン！」

なのは「邪魔だよ！クロスファイアシュート！」

カイル「な、なのは．．．」

ヴィヴィオ「パパ！」

ヴァイス「旦那はここにいてください、俺が援護します、行くぞ！」

ストームレイダー！」

レイダー「イエス！」

そう言つて、ヴァイスはなのはの援護に行つた。

その時、3つの光が現れた。

アブレラ「な、なんだ、この光は．．．」

そこから現れたのはなんとドギー・クルーガー、白鳥スワン、リサ・ティーゲルの3人が現れた。

なのは「クルーガーさん、スワンさん！？」

ヴァイス「それにあなたは．．．」

リサ「私は元宇宙警察本部所属の特別指定凶悪犯罪対策課、特キヨウ一班チーフ、リサ・ティージェルです、君たちの事は鉄幹やクルーガー署長から聞いています。」

ドギー「大丈夫か？カイク。」

カイク「ええ、でもどうしてボス達が．．．」

スワン「アブレラが絡んでるとわかったからこんなことじゃないかと思ってきたのよ。」

アブレラ「ドギー・クルーガー．．．貴様が．．．まさかここで貴様の顔を見るとはな．．．」

ドギー「それはこつちのセリフだ、お前には色々と聞きたいことがあるからな、カイク！俺達のレンジャーキーを！」

カイク「ロジャー！」

そう言つて、カイクはデカマスター、デカスワン、デカブライトのレンジャーキーを渡した。

ドギー「エマーゼンシー、デカマスター！」

スワン「エマーゼンシー、デカスワン！」

リサ「エマーゼンシー、デカブライト！」

3人はすぐに変身を完了させた。

ドギー「百鬼夜行をぶつた斬る！地獄の番犬デカマスター！」

スワン「真白き癒しのエトワール！デカスワン！」

リサ「なみいる悪を、白日のもと暴き出す！光の刑事、デカブライト！」

ドギー「なのは、我々も加勢する。」

なのは「ありがとうございます。」

リサ「スワンさん、あなたはカイクくんのところへ．．．」

スワン「わかつたわ。」

そう言つて、ドギー、リサの二人がなのはとヴァイスの加勢に行き、スワンがカイクとヴィヴィオのところへ行つた。

ドギー「ディーソードベガ！」

リサ「ブレスロツトル！雷撃拳サンダーフィスト！」

なのは「デイバインシューター！」

ヴァイス「オラ！」

アブレラ「おのれ、こうなったら．．．」

そう言つて、アブレラは大量の怪重機を出撃させた。

ドギー「アブレラめ．．．あんなものまで．．．」

とその時、ゴーカイオー、豪獣神、Gガオガイガー、キングジェイダーが来た。

凱「カイク！」

ジーク「あれ？どうしてボスたちまで？」

ドギー「話は後だ、ジークそいつらを頼む。」

アイク「了解、こっちは俺達に任せろ。」

ソルダート「お前達は、そいつらを片付けてくれ。」

なのは「わかりました。」

そう言つて、怪重機の方は、ジークたちが相手をする事になった。

ジーク「行くぜ！レンジャーキーセット！」

ゴーカイジャー「完成！デカゴーカイオー！」

ゴーカイジャー「ゴーカifulブラスト！」

アイク「レンジャーキーセット！必殺豪獣トリプルドリルドリーム！」

ドロイド「ウーン！」

凱「行くぞ！ガジェットツール！ボルディングドライバー！」

ソルダート「5連メーザー砲！」

ドロイド「ウーン！」

怪重機をあっという間に全滅させた。

そして、下で戦っていたメンバーはというと。

なのは「全力全開！ナイトスターライトブレイカー！」

ドギー「ベガスラッシュ！」

リサ「至高拳ハイエストハンマー！」

ブリッツ「．．．！」

ボンゴブリン「．．．！」

サキュバス「……………！」

ジエニオ「……………！」

今の攻撃で、4体はアンチレンジャーキーに戻った。

アブレラ「どうやらこれまでだな……また会おう諸君。」

そう言つて、アンチレンジャーキーを回収してアブレラは逃げた。

ドギー「逃げられたか……」

その後、カイクとヘルキラーの治療を行った。

ヘルキラー「なぜ我まで助けた？」

カイク「死ぬことはいつでもできる、だがお前は強さ以外での生き方を見つけてほしいんだ。」

ヘルキラー「強さ以外での生き方……」

ドギー「カイクの言うとおりだ、お前がなぜカイクに勝てないかわかるか？お前は自分の強さを求めるだけだが、カイクは誰かのために戦っている、誰かのために戦うことで自分は強くなってはならないと思うからこそ窮地に追い込まれても立ち向かえるんだ、ようは愛なんだ。」

ヘルキラー「……我はしばらく考えさせてもらう、答えが見つかったここにまた来る。」

カイク「ああ、その時を楽しみしているさ。」

リサ「宇宙警察本部には私達が連絡しておいたから、もうあなたに関わることはしないでしようし……」

ヘルキラー「感謝する……」

そう言つて、ヘルキラーは去つていった。

スワン「さてカイク、なのはに後でお礼をしなさいね。」

カイク「わかつてますよ、ありがとうスワンさん、ボス、リサチーフ。」

リサ「気にしなくていい、私達は自分の意志で来たんだから。」

ドギー「リサチーフの言うとおりだ、それとカイク見事の戦いぶりだったぞ。」

カイク「ありがとう、ボス。」

なのは「本当にありがとうございました。」

ヴィヴィオ「ありがとうございました。」

スワン「あら、しばらく見ないうちがいい子になったわね、ヴィヴィオ。」

そう言つて、スワンさんはヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「えへへへ」

ヴィヴィオは嬉しそうな顔をした。

ドギー「何はともあれ、これにて一件コンプリートだな。」

そう言つて、今回の騒動は終了した。

その後、カイル達はデカベースに戻り、その夜カイルはなのはをベツトで一晩中可愛がったのは言うまでもない。さらにカイルの賞金額が5000万ゼニーから1億ゼニーに上がったという。

#### 第49話 護りたいものを護る力（後書き）

どうも、今回はこのようにしました、次回は大きいなる力の解放の話にします、ちなみに本編でバスコに奪われた大いなる力の話も個別にします、後これは私事なのですがお気に入りのファイブマンは奪われずにちゃんとした話をして欲しいです。それではまた次回お願います。

第50話 受け継がれる地球の神秘の力と平和を願う心（前書き）

どうも、今回から更生組のナンバーズも正式に地球に来ます、さらにチェンジマンの力が解放され、またチェンジマンのゆかりの人達も登場し、あと最後にカイクが大変なことになりますのでよろしくお願ひします。

## 第50話 受け継がれる地球の神秘の力と平和を願う心

ヘルキラーの一件から2週間が経過した、その間にJS事件の際に海上隔離施設で更生プログラム受けていたナンバーズ更生組のメンバーが出所し、こちらに来た、ちなみにメンバーの内チンク、ノーヴェ、デイエチ、ウエンデイの4人はナカジマ家の養子になっており、さらにセイン、オットー、デイドの3人は聖王教会の一員になっている。そして、現在ノーヴェはカイルから格闘技の手ほどきを教えてもらっていた。

ノーヴェ「はあ！」

カイル「中々だが、もう少し敵の動きの流れを読み、こんな風にな！」

そう言つて、カウンターでノーヴェに攻撃を叩き込んで吹き飛ばした。

ノーヴェ「うああああ！」

ジーク「そこまでだ！」

審判のジーク合図と共に手ほどきは終了し、カイルはノーヴェに手を差し伸べた。

カイル「大丈夫か？」

ノーヴェ「ああ、いや、色々と学ばせてもらったよ、ありがとうカイルの旦那。」

そう言つて、二人は握手を交わした。

その後、ヴィヴィオとイクスの二人が学校から帰ってきた、さらに学校が長期休みに入ることもありデカベースヘリオとコロナの二人がお泊りに来た。

カイル「いらつしやい、二人とも。」

リオ「お邪魔します。」

コロナ「これから数日間、よろしくお願いします。」

ノーヴェ「旦那、この二人がヴィヴィオとイクスの友達か？」

リオ「あの、どなたですか？」

カイル「ああ、紹介がまだだったな、こっちは最近こっちに来た、

ノーヴェ・ナカジマだ。」

ノーヴェ「よろしくな。」

リオ「そうだったんですか、始めまして、私はリオ・ウエズリーです。」

コロナ「私は、コロナ・ティミルです、よろしくお願いします。」

ノーヴェ「ああ、よろしくな。」

カイル「ノーヴェには、俺が忙しい時にヴィヴィオのトレーニングを見てもらっているんだ。」

ノーヴェ「まあ、あたしもカイルの旦那の弟子の身だから、基礎だけだけだな。」

リオ「そうなんですか、すごいですね。」

とその時、通信が入った。

シャーリー「カイルさん、今オービットベースから連絡があつて、地球に未確認飛行物体が2体ほど接近しています、そのうち一つが追われているようなんです・・・」

カイル「わかった、ノーヴェ、ヴィヴィオたちを頼む。」

ノーヴェ「ああ、わかった旦那。」

ヴィヴィオ「パパ、気をつけてね。」

カイル「ああ、行ってくる。」

そう言つて、カイルは他のメンバーと一緒に出撃した。

富士山 樹海

不時着した宇宙船から二人の女性が脱出してきた。

「???」大丈夫ですか？」

「???」はい、大丈夫です・・・」

「???」なんとか、地球にたどり着きましたね・・・」

「???」ええ、でも地球に来たところで、私達が眠りについてもう数百年以上・・・剣さんたちはもういないのに・・・」

???「ナナさん．．．」

とそこへ、ドロイドの大群が押し寄せてきた。

ドロイド「ウーン！」

アブレラ「もう逃がさんぞ、リゲル星人ナナ．．．メルル星人さくら、私と一緒に来てもらおうか．．．」

ナナ「エージェント・アブレラ．．．」

さくら「なぜ私達を狙うのですか？」

アブレラ「知れたことよ、お前達には利用価値があるからだ．．．やれ！」

ドロイド「ウーン！」

ナナ「助けて．．．剣さん．．．」

ナナが手を合わせてそう呟いた時、ドロイドに攻撃が飛んできた。

アブレラ「誰だ!？」

ジーク「俺達だ！」

そう言つて、ゴークイジャーと六課のメンバーが駆けつけた。

ティア「大丈夫ですか？」

さくら「はい、ありがとうございます。」

ナナ「あなたたちはいつたい．．．」

エリス「今はそれよりも傷の手当てをするわ。」

そう言つて、エリスが二人に応急処置を施し、全員でアブレラに向き合った。

フエイト「エージェント・アブレラ、あなただったのね。」

ヴィータ「てめえ、この人達に何しやがる！」

アブレラ「お前たちの相手をしている暇はないというのに、仕方がない．．．」

そう言つて、アブレラは4つのアンチレンジャーキーを取り出し、それらを銃にセットして実体化させた。

スパーギルーク「．．．」

アハメス「．．．」

ユガンデ「．．．」

ギレール「……………」

ナナ「え！？ギルークにアハメスがどうして!?!」

ナナが驚いた表情を浮かべた。

カイル「どうやら、やるしかないようだな……」

なのは「そうですね。」

ジーク「行くぜ!」

ゴーカイジャー「……豪快チェンジ!」

モバイレーツ「ゴーカイジャー!」

ゴーカイセルラー「ゴーカイジャー!」

なのは・フェイト「……レンジャージャケット!セットアップ!」

シグナム・ヴィータ「……レンジャージャケット!セットアップ!」

フォワード陣「……レンジャージャケット!セットアップ!」

カイル「ゴーカイキング!」

ジーク「ゴーカイレッド!」

フィオネ「ゴーカイブルー!」

メルト「ゴーカイエロー!」

エリス「ゴーカイグリーン!」

ティア「ゴーカイピンク!」

アイム「ゴーカイスilver!」

カイル・ジーク「海賊戦隊!」

ゴーカイジャー「……ゴーカイジャー!」

その姿を見た、ナナとさくらの二人は驚いた表情を浮かべた。

ナナ「海賊戦隊ゴーカイジャー!?!」

さくら「もしかして、チェンジマンさん達のことをしているんじ

ゃ……」

カイル「さて……」

ジーク「派手に行くぜ!」

そんな驚いている二人を尻目に全員で敵に向かっていった。

ジーク「オラ!」

カイル「はあ!」

ドロイド「ウーン！」

なのは「邪魔だよ！アクセルシューター！」

フェイト「プラズマランサー！」

メルト「ちよっと、きりがいいわね。」

フィオネ「だったら、これで行きましょう！」

そう言つて、チェンジマンのレンジャーキーを取り出した。

ジーク「いいね、乗ったぜ、豪快チェンジ！」

モバイレーツ「チェンジマン！」

その姿を見たナナとさくらは驚きを隠せなかった。

さくら「チェンジマン！？」

ナナ「どうして、剣さんたちの姿に！？」

二人が驚いていることを気にせず、ジークたちは敵に向かっていった。

ジーク「行くぜ！ドラゴンアタック！」

フィオネ「ペガサスイナズマスパーク！」

エリス「グリフォンマグマギャラクティ！」

メルト「ティア、行くわよ！」

ティア「はい！メルトさん！」

メルト・ティア「ダブルソードオーロラシューティング！」

ドロイド「ウーン！！！」

一気にドロイドを全滅させた。

そして、5人は元の姿に戻った。

カイル「よし、後は俺達がやる。レンジャーキーセット！」

アイム「レンジャーキーセット！」

ベガ・ゴーカイスピア「ファイナルウェーブ！」

カイル「ベガスラッシュ！」

アイム「ゴーカイスューティングスター！」

スバル・ギンガ「炎上波！ダブルリボルバーキャノン！」

エリオ「紫電一閃！」

キャラ「ルーマ・ゴー・ゴジカ、フリード・シャイニングアタック

！」

フリード「キユクルー！」

ヴィータ「アイゼン！ギガントハンマー！」

シグナム「レヴァンティン！飛竜一閃！」

なのは「エクセリオンバスター！」

フェイト「ジェットザンバー！」

スーパージルーク「.....！」

アハメス「.....！」

ユガンデ「.....！」

ギレル「.....！」

今の一斉攻撃で、敵はキーの状態に戻った。

アブレラ「おのれ、一旦ここは退かせてもらおう。」

そう言つて、アブレラは逃げていった。

その後、二人を保護して、デカベースに戻った。

デカベース デカルーム

デカベース戻ったメンバーは二人からチェンジマンとゆかりのある人物だと言つことがわかり、こちらオービットベースと連絡を取りゴーカイジャーのことを説明し、情報交換した。

クロノ「.....なるほど、あなた達はザンギャックがいた頃に眠りについていたと言つのですね.....」

ナナ「はい、伊吹長官がザンギャックから私達を守る為に眠りつかせてくれたんです.....」

さくら「そして、少し前に眠りから覚めたときに突然エージェント・アブレラに襲われたんです.....」

トモロー「なるほど.....たしかリゲル星人には、成長する段階でそれを浴びた者をパワーアップさせるリゲルオーラを発すると聞く、そしてメルル星人は人間の戦う心を無くす力を持ちという.....アブレラが狙う理由もわかる.....」

ナナ「でも驚きました、まさか剣さん達の力を使う人達がいるなん

て・・・」

さくら「ところで、先ほどの話は本当なんですか、チェンジマンの皆さんを始めとしたスーパー戦隊の方々が特殊な異世界にいるという話は・・・」

牧野「ええ、まあでもチェンジマンの方々は力が解放されていないのでおそらくまだあの世界で眠りについていてと思いますよ。」

リンディ「あら、そうなんですか？」

レオナ「ええ、だから解放されていない戦隊の方々とは連絡が取りにくいんですよ、ボウケンジャーは私たちとゆかりがあるから別だけど・・・」

とその時、シャーリーから連絡が入った。

シャーリー「大変です、東京都心で、妖魔獣士が現れ、リゲル星人とメルル星人を連れてこない町を無差別に破壊すると・・・」

はやて「なんやて!？」

ジーク「上等だ、ここは俺達が行く、六課のメンバーと流星たちは万が一に備えて待機してくれ。」

なのは「わかりました、気をつけて。」

流星「でも何かあったら、すぐに行かせてもらおうよ。」

ナナ「待つてください、私達も行きます。」

さくら「そうです、相手は私達を狙っているんです。」

フェイト「し、しかし・・・」

カイル「大丈夫だ、俺達が必ず守る。」

はやて「せやな、頼みますジークさん、カイルさん。」

ジーク「ああ、行くぜ!」

そう言つて、ゴーカイジャーの面子は出撃した。

## 東京都心

敵の妖魔獣士D・スフィックスの前にゴーカイジャーとナナ、さくらの二人が駆けつけた。

D・スフィックス「来たか・・・」

ジーク「随分とくだらねえことしてくれたな．．．行くぜ！」  
ゴークカイジャー「『豪快チエンジ！』」  
モバイレーツ「ゴークカイジャー！」  
ゴークカイセルラー「ゴークカイジャー！」  
カイク「ゴークカイキング！」  
ジーク「ゴークカイレッド！」  
フィオネ「ゴークカイブルー！」  
メルト「ゴークカイイエロー！」  
エリス「ゴークカイグリーン！」  
ティア「ゴークカイピンク！」  
アイム「ゴークカイシルバー！」  
カイク・ジーク「海賊戦隊！」  
ゴークカイジャー「『ゴークカイジャー！』」  
D・スフィンクス「やれ！スカルソルジャー、スカルナイト！」  
スカルソルジャー「『ガガガガ！』」  
スカルナイト「『カラカラカラ！』」  
カイク「さて．．．」  
ジーク「派手に行くぜ！」  
そう言つて、敵の撃破に向かつて行つた。  
その中で、D・スフィンクスはナナとさくらに近づいていった。  
ティア「ナナさん、さくらさん！」  
カイク「邪魔だ！」  
スカルナイト「『カラカラカラ！』」  
アイム「だめだ、敵が多すぎる！」  
ナナ「皆さん、私達に構わず、被害を食い止めてください。」  
メルト「で、でも．．．」  
とその時、5つの光がナナとさくらの前に現れた。  
D・スフィンクス「な、なんだ！？」  
その中から一人の男が、D・スフィンクス目掛けて蹴りを入れた。  
剣「てやあ！」

D・スフィンクス「ぐあああ！」

ナナ「剣さん!？」

さくら「それに皆さんも．．．」

疾風「大丈夫? ナナちゃん、さくらさん。」

大空「よくもこの二人に手を出してくれたな。」

そこにいたのは電撃戦隊チェンジマンの5人だった。

ジーク「先輩！」

エリス「どうして、ここに？」

さやか「誰かに呼ばれている気がして、眠りが覚めたの．．．」

麻衣「この二人は私達を守るから、あなた達は妖魔を．．．」

剣「後輩、俺たちの力を使え、力は解放しておいたぞ。」

そう言うと、ジークたちはチェンジマンのレンジャーキーが光っていることに気付いた。

ジーク「サンキュー! 先輩! 早速使わせてもらうぜ。」

ゴーカイジャー「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「チェンジマン！」

ジーク「チェンジドラゴン！」

エリス「チェンジグリフォン！」

フィオネ「チェンジペガサス！」

メルト「チェンジマーメイド！」

ティア「チェンジフェニックス！」

ジーク「電撃戦隊！」

ゴーカイジャー「チェンジマン!」「」

ジーク「行くぜ! チェンジソード！」

ゴーカイジャー「電撃ビクトリービーム!」「」

D・スフィンクス「ぐああああ！」

ジークたちがD・スフィンクスと戦っている間にカイルとアイムが雑魚を相手にしていた。

アイム「カイル、一気に決めるぞ！」

カイル「ああ、行くぜ! キングテクター！」

アイム「豪快チェンジ！」  
ゴークアイセルラー「ゴークアイシルバー、ゴールドモード！」  
アイム「ゴークアイシルバー、ゴールドモード！」  
カイク・アイム「レンジャーキーセット！」  
ベガ・ゴークアイスピア「ファイナルウエーブ！」  
カイク「ベガスラッシュ！」  
アイム「ゴークイレジェンドクラッシュ！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
スカルナイト「カラカラカラ！」  
二人は一気に一気に片付けた。  
ジーク「よしこつちも行くぜ、パワーバズーカだ！」  
そう言つて、それぞれの武器を取り出した。  
ジーク「ドラゴンズーカ！」  
フィオネ「ペガサズーカ！」  
メルト「マーメイドズーカ！」  
エリス「グリフォンズーカ！」  
ティア「フェニックスズーカ！」  
ゴークアイジャー「パワーバズーカ！」  
ジーク「セット！」  
ジークは聖獣の力が込められた金色の弾丸を装填した。  
メルト「マーク！」  
ジーク「ファイアー！」  
D・スフィンクス「ぐああああ！」  
D・スフィンクスは跡形もなく粉碎された。  
そこにルシフェルが現れた。  
ルシフェル「チェンジマンのアースフォースの真の力が発揮されたか・・・D・クラーゲン！」  
D・クラーゲン「キイイキイイ！」  
D・クラーゲンの力で倒されたD・スフィンクスが巨大化して復活した。

さらに巨大スカルソルジャーが現れた。

スカルソルジャー「ガガガガ！」  
とそこへ、GGGの機動メンバーが来た。

ジーク「凱たちか？」

凱「カイク、ジークここは俺達に任せろ。」

マイクサウンダース13世「久しぶりの出撃ダゼ！カモンロックン  
ロール、ディスクPセットオン！キラギランVV！」

超竜神「一気に行くぜ！一斉発射！」

撃龍神「唸れ疾風、轟け雷光！双頭龍！」

天竜神「光と闇の舞！」

ビックボルフオッグ「必殺、大回転魔弾！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

凱「ウィルナイフ！」

ソルダート「反中間子砲！」

D・スフィンクス「ぐあああ！．．．こうなったら、スカルナイト  
ども！」

D・スフィンクスがそう言うのと今度は巨大なスカルナイトが複数現  
れた。

スカルナイト「カラカラカラ！」

凱「やはり、巨大なスカルナイトもいたのか．．．」

ソルダート「凱、こいつらは私がやる、お前は奴を倒せ！」

凱「わかった、J！」

そう言つて、二人は二手に分かれた。

ソルダート「一気に決める、ジエイクオース！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

Jは一気にスカルナイトを全滅させた。

D・スフィンクス「食らえ！ファイヤーストーム！」

凱「プロテクトシールド！」

凱は敵の攻撃を防ぎきった。

凱「これで決める、ガジェットツール！」

そう言うと、凱の指先に黒いパーツが装着された。

凱「ヘル・アンド・ヘヴン！」

そう言うと凱はヘル・アンド・ヘヴンの態勢に入った。

凱「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォー．．．ふん！」

凱「ウィーター！！」

D・スフィンクス「ぐああああ！」

D・スフィンクスはヘル・アンド・ヘヴンの威力の前に完全に倒された。

ルシフェル「やられたか．．．仕方がない、最後の作戦を実行してから戻るとしよう．．．」

そう言って、ルシフェルは姿を消した。

そして、その後GGGのメンバーも交えてチェンジマンのメンバーと話をし、ナナとさくらもチェンジマンたちと一緒に彼らがいる異世界に行くことになった。

ナナ「本当に色々ありがとうございました。」

さくら「別の世界であなた達の無事を祈っています。」

フィオネ「気にしないでください、それにチェンジマンの方々にも会えましたし．．．」

疾風「気にするなよ、後輩。」

大空「しかし、俺たちの力をあんなに簡単に使いこなすなんてな．．．」

さやか「それだけ優秀だつてことですね。」

麻衣「そうだね。」

疾風「じゃあ、そろそろ俺達は行くから後を頼むぜ。」

ジーク「ああ、任せろ。」

さやか「あとあなたにこれを渡さないかね．．．」

そう言って、さやかはカイクムにキングキーを渡した。

カイクム「ありがとう、先輩。」

剣「それじゃ、頼んだぞ、海賊戦隊ゴーカイジャー。」

そう言つて、チェンジマン、ナナ、さくらはその場から消えた、ちなみにその際ナナは剣に寄り添っていた。

ティア「ナナさん、剣先輩とうまくいくといいですね．．．」

エリス「大丈夫でしょう、あれなら。」

その後、流星、トップガンダー、ヴィヴィオが来て、ヴィヴィオがカイクに駆け寄ってきた。

ヴィヴィオ「パパ！」

カイク「ヴィヴィオ。」

そう言つて、カイクが駆け寄ろうとしたその時、何かヴィヴィオ目掛けて放たれたのをカイクが気付いてカイクはヴィヴィオを抱きかかえるようにして守った。

ヴィヴィオ「パパ!？」

凱「カイク！」

カイク「ぐっ．．．」

カイクに何か接触した後、カイクは倒れこんだ。

ティア「カイクさん！」

エリス「しっかりして、カイク！」

とそこへ、ルシフェルが現れた。

ルシフェル「よし、作戦成功だな．．．」

ソルダート「ルシフェル！」

ヴィヴィオ「パパ、しっかりして！」

カイク「．．．．．」

流星「意識がない．．．どういうことだ？」

カイクは目を閉じたまま動かなかった。

メルト「あなた、カイクにいったい何を．．．」

ルシフェル「そいつにはちよつと別の世界に行ってもらっただけだ．．．」

カイク「別の世界だと．．．」

ルシフェル「そうだ、私の作り上げたD・サキュバスの力で精神を奴が作り出した夢の世界へといざなつたんだ、だから今カイクには

意識はない。」

トップガンダー「さてはお前、わざとヴィヴィオを狙って、カイクを誘導したな。」

ルシフェル「その通りだ、奴はその娘を可愛がっているからな、そうすれば必ず盾になると思ったからな．．．」

ジーク「てめえ．．．レンジャーキーセット！」

ゴークアイサーベル・ゴークアイガン「ファイナルウェーブ！」

ゴークアイジャー「ゴークアイスクランブル！」

ルシフェル「ふ．．．妖魔外装．．．」

ルシフェルは前に見せたものよりさらに強力な鎧を身にまとい攻撃を受け止めて攻撃を跳ね返した。

ゴークアイジャー「うあああ（きゃあああ）！！！」

今の一撃でアイクとカイク以外のゴークアイジャーに攻撃が直撃し、5人の変身が解けてしまった。

凱「大丈夫か！？」

アイク「ルシフェル、お前その姿は．．．」

ルシフェル「どうだこれが私の新しい力だ、もちろんアスラとバデインの鎧も大幅に強化してある、それではまた会おう。」

トップガンダー「逃がさん！」

しかし、トップガンダーの狙撃が間に合わず、ルシフェルは姿を消した。

凱「くそ！逃げられたか．．．」

ジーク「くそ！」

ジークは拳を地面に叩きつけた。

その後、デカベースに戻ったがカイクに意識は戻らず、全員のシヨックは大きかった。

ヴィヴィオ「パパ．．．ヴィヴィオのせいで．．．」

ティア「それは違うよ、ヴィヴィオ。」

エリス「そうね、元々あいつはヴィヴィオじゃなくてカイクを狙っ

てたみたいだから・・・」

「ヴィヴィオでも・・・」

イクス「ヴィヴィオ、信じましょうカイクムおじ様を・・・だってヴィヴィオのお父様でしょ？」

「ヴィヴィオ、ありがとうイクス・・・」

そう言つて、ヴィヴィオは空元気を出した。

しかし、ゴークアイスクランブルが通用しなかったこととカイクムの戦線離脱は今後の戦いにおいてのメンバーの士気に影響を与えることになった。

## 第50話 受け継がれる地球の神秘の力と平和を願う心（後書き）

どうも、今回から少しの間カイクには戦線離脱してもらいます、今回出てきたナナとさくらの二人はチェンジマンに協力していた人達です、最後にプロフィールを載せておきますので、呼んでいただけると幸いです、次回も連続で大いなる力の話しにします。

リゲル星人ナナ

初登場は全55話中第13話、天才的な頭脳を持つテクノ惑星リゲルの少女で、父親そっくりの地球人・熊沢博士を本物の父親と信じ、ゴズマに協力する熊沢博士に騙されしまうが、博士の死後、地球で平和に暮らしていたが、リゲル星人は成長する段階でそれを浴びた者をパワーアップさせるリゲルオーラを発するため、その力を求める敵幹部のギルクとアハメスに狙われた、初登場時は幼い少女だったがリゲルオーラを放出して一気に成長し、成人の姿になった。ちなみにチェンジドラゴンこと剣飛竜に助けられて以来彼を想うようになった、ゴズマ壊滅後は伊吹長官と一緒にゴズマに滅ぼされた星の再興のためにシャトルベースに乗って宇宙へ旅立って行った。

メルル星人さくら

初登場は第16話、天使のような翼を持つメルル星人の少女で、メルル星人は人間の戦う心を無くす力を持っており、それ故にゴズマの支配者である星王バズーに真つ先に狙われ滅ぼされたが、メルル星人はメルル星が滅ぶ時、その子孫をさまざまな星へ脱出させ、彼女もその一人で地球で普通の人間として暮らしていたが、メルル星人が残したメモリードールによってメルル星人としての記憶と能力が復活し、メモリードールと一緒に宇宙へ旅立って行ったが、最終決戦でチェンジマンに協力するために駆けつけ、彼女もまたナナと一緒にシャトルベースにちなみにチェンジグリフォンことの疾風翔

の片想いの相手だった。

## 第51話 親と子の絆、輝けフラッシュタイタン！（前書き）

どうも、今回はお気に入りのお戦隊なので特別な話にしました、さらにヴィヴィオたちのデバイスも早いですが登場させます、イクスのデバイスはオリジナル仕様でユースティアに関する名前をもじったものにしました、後オーレンジャーの力はまだですが、本編よりも強力なゴーカイガレオンバスターの強化版が出てきますのでよろしくお願ひします。

## 第51話 親と子の絆、輝けフラッシュユタイタン！

デカベース 訓練場

前回カイクがヴィヴィオを庇い、妖魔獣士D・サキユバスによって、精神を夢の世界に飛ばされてから2日が経ち、その間、ヴィヴィオは流星、ノーヴェの二人のトレーニングを受けているが、あまりトレニングに集中できない状態である。

ノーヴェ「どうした？ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオ「え！？な、なんでもないよ。」

それを見た流星は、ヴィヴィオ心情を察した。

流星「・・・ヴィヴィオ、今日のトレーニングはここまでだ、そんな状態でやったら怪我の元だ。」

ヴィヴィオ「でも、流星さん・・・」

スプリンガー「流星の言うとおりだ、カイクが心配なのはわかるが、もしヴィヴィオに怪我でもさせたらそれこそカイクに言い訳ができないんだ。」

ノーヴェ「流星の旦那の言うとおりだ、ヴィヴィオ今日は休め。」

ヴィヴィオ「うん・・・」

そう言つて、ヴィヴィオは訓練場を後にした。

スプリンガー「あの子の気持ちはわからないでもないがな・・・」

流星「そうだな、あの子は元は古代ベルカの聖王のクローンだ、その関係で決まった両親と言うものが存在しない、だから余計にあの子にとって義理とはいえ父であるカイクの存在は大きいものなんだ。」

ノーヴェ「カイクの旦那も早く目覚めて欲しいな・・・ヴィヴィオのことそうだけど、あたしも旦那にはもっといろいろなことを教えて欲しいしな・・・」

そう言つて、3人はヴィヴィオのこと気遣っていた。

デカベース ラボ

マリエル「牧野先生たちのおかげで、予定よりも早く完成しそうですよ。」

牧野「いえいえ、私達はただ単にデータを提供したに過ぎませんから．．．」

シャーリー「でも、マリーさん、後はコアのクリスタルですけど．．．」

マリエル「うん、それなんだよね、できれば特別仕様のものが欲しいんだけどな．．．」

レオナ「それなら、心当たりがあるよ、歴代スーパー戦隊の人達の中に強力なクリスタル．．．いやプリズムの力で戦っていた戦士が．．．」

マリエル「ほ、本当ですか！？誰ですか？」

レオナ「ちよつと待ってね、え」と、大いなる力が解放されていない．．．つまり眠っているスーパー戦隊と連絡取るのは結構面倒なんだよね．．．」

そう言つて、レオナはデータスを使い、誰かに連絡を取った。

デカベース 医務室

カイク「．．．．．」

前回の戦い以来、カイクは未だに意識が回復せずベットの上で眠っている。

ヴィヴィオ「パパ．．．」

シャマル「ヴィヴィオ、来てたのね。」

ヴィヴィオ「シャマル先生、パパは大丈夫だよ？」

シャマル「．．．正直言うと医学的な問題じゃないから、私にはなんとも言えないわ、だから今はカイクさんを信じるしかないの。」  
ヴィヴィオ「うん．．．」

ヴィヴィオはシャマルの言葉に頷き、医務室から出て行った。

シャマル「．．．ショックでしょうね、あの子にとっては．．．そ

して、ティアさんやなのはちゃんたちにとっても．．．  
シヤマルはヴィヴィオと他のメンバーの心情を察した。  
そうカイムの意識不明は多くの人達に影響を及ぼしていた。

## 訓練場

スターズサイド

スバル「なのはさん！」

なのは「え！ど、どうしたの、スバル？」

ティアナ「どうしたじゃありませんよ、訓練中なのにぼんやりして

．．．」

なのは「ごめんね．．．訓練中にぼんやりするなんて教導官失格だよね．．．」

スバル「そんなことありませんよ．．．カイムさんがあんなことになっただからです．．．」

ティアナ「正直言いますと、私達も結構シヨックですからね．．．  
なのは「スバル．．．ティアナ．．．う．．．カイムさん．．．」  
なのはは泣き出し、スバルとティアナがなのはが泣き止むまで傍にいた。

ヴィータ「なのは．．．そこまでカイムのことを．．．」  
ヴィータはそれ黙ってみているしか出来なかった。

ライトニングサイド

フェイト「きゃあ！」

フェイトはキャロのマジランプバスターの攻撃を防げずに吹き飛ばされた。

キャロ「フェイトさん、大丈夫ですか？」

フェイト「ええ、大丈夫だよ．．．」

シグナム「テストロッサ、どうしたお前ならいくらマジランプバスターの魔力弾でもある程度は防げた筈だ．．．」

エリオ「フェイトさん．．．やっぱりお父さんのことで．．．」

キャロ「フェイトさん．．．」  
フェイト「心配かけてごめんね．．．だめだよ、いつもカイクさんに励ましてもらっていたのに．．．こんな時に何も出来ないなんて．．．」

そう言つて、エリオとキャロを抱きしめて静かに涙を流した。

フェイト「カイクさん．．．」

エリオ「フェイトさん．．．」

キャロ「．．．フェイトさんもお父さんのことで我慢してたんですね．．．」

シグナム「テストアツサ．．．カイク、私は、自分の無力さが悔しい．．．」

そう言つて、シグナムも黙るしかなかった。

デカベース 屋上

ティア「．．．．．」

エリス「．．．．．」

カリム「．．．．．」

3人は空を見上げて、心ここにあらずな顔をしていた。

アイム「ティア．．．」

メルト「エリス．．．」

アコース「カリム．．．」

フィオネ「．．．皆さんの気持ち、よくわかります．．．」

アイム「まさかカイクがあんなことになるなんて．．．」

ジーク「くそ！カイクが戦闘不能になるなんて．．．」

シャツハ「ジークさん、ご自分を責めないでください．．．」

はやて「せや、それにうちらがここにいてことはまだ負けたわけじゃないで。」

ジーク「そうだな、ありがとよ、はやて。」

そう言つて、はやてを抱き寄せて頭を撫でた。

はやて「おおきに．．．ジークさん．．．／／／」

メルト「こっちは大丈夫そうだけど、問題はこっちよね．．．」  
そう言つて、メルトはティアたちのことを考えると複雑そうな顔をした。

とその時、シャーリーから連絡が入った。

シャーリー「大変です、海鳴市の市街地にて妖魔反応です。」  
はやて「なんやて！」

ジーク「．．．ここは、俺、フィオネ、メルト、アイムの4人で行く、ティアとエリスはともじゃないが戦える状態じゃねえ．．．」  
はやて「．．．ジークさん、こっちは私とリン、シグナム、ヴィータ、ギンガ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロのメンバーで行きます．．．正直、今のなのはちゃんとフェイトちゃんじゃ．．．」  
アイルム「確かにな．．．その方がいいだろう．．．あと流星、トッブガンダーもだな．．．」  
メルト「決まりね。」

フィオネ「早く行きましょう。」

そう言つて、一部のメンバーを除いて出撃した。

その後、なのはとフェイトも屋上に来て、5人で空を見上げていた時、マリエルが来た。

マリエル「あれ？ヴィヴィオとイクスはどこへ行つたのかしら？」  
なのは「マリーさん、どうしたの？」

マリエル「いやね、ヴィヴィオとイクスに渡すものの件で、まだ完成してないんだけど．．．後はあるものが届けば完了するんだけど．

．．．肝心の二人がいないんから．．．」

フェイト「二人がいないんですか？」

ティア「もしかして、何かあつたんじゃ！」

エリス「カイルが動けないのにあの子にもしもの事あつたら、カイルに言い訳できないわ。」

カリム「急いで、探しましょう。」

シャツハ「はい、カリム。」

そう言つて、ここに居たメンバー総出で二人を探し始めた。

出撃メンバーサイド

町のと真ん中では、シュバリエ、サー・カウラー、ボー・ガルダンがいた。

ジーク「てめえらか！」

カウラー「来たか．．．」

シュバリエ「どうやら、カイクだけでなく他にもいないメンバーもいるようだな．．．まあいい、では私が新たに作り上げた妖魔闘士D・バジリスクギンだ。」

ガルダン「そして、これがルシフェル様が新たに作り上げた妖魔闘士D・サイクロプスだ。」

はやて「敵の幹部3人と2体の怪物を相手にせなあかんのか．．．シグナム「主、迷っている場合ではありません、私達は負けるわけにはいかないのですから．．．」

ジーク「シグナムの言うとおりだ、相手が誰であれ派手に行くだけだ。」

はやて「せやね、ほなら行くで！」

ゴーカイジャー「『豪快チェンジ！』」

モバイレーツ「『ゴーカイジャー！』」

ゴーカイセルラー「『ゴーカイジャー！』」

はやて「レンジャージャケット！セットアップ！」

シグナム・ヴィータ「『レンジャージャケット！セットアップ！』」

フォワード陣「『レンジャージャケット！セットアップ！』」

流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

シュバリエ「ふん、かかれスカルソルジャー、スカルナイトども。」

スカルソルジャー「『ガガガガ！』」

スカルナイト「『カラカラカラ！』」

ジーク「上等だ！派手に行くぜ！」

そう言つて、全員で敵に向かつていった。

一方ヴィヴィオはカイムの様子を見た後、イクス、コロナ、リオと一緒に近くの公園に来ていた。

コロナ「元気出して、ヴィヴィオ。」

リオ「そうだよ、カイムおじさんなら絶対によくなるつて。」

ヴィヴィオ「うん．．．ありがとうコロナ、リオ．．．」

そう言つたが、ヴィヴィオはまだ落ち込んだままだつた。

イクス「ヴィヴィオ．．．」

とそこへ、二人の男女がヴィヴィオたちの所へ歩いて来た。

???「ねえ君、どうしてそんなに悲しい顔をしているの?」

???「そうだ、よかつたら話してごらん。」

二人はヴィヴィオに話しかけてきた。

ヴィヴィオ「お姉さんとお兄さんは誰?」

イクス「そうですね、見たことない人達です。」

???「そうかまだ名乗つてなかつたね、ごめんね、私はサラ。」

???「俺の名はジンだ。」

コロナ「サラさんと．．．」

リオ「ジンさん?」

ジン「ああ、そうだ。」

サラ「それで、さっきに話だけど教えてくれるかな?」

ヴィヴィオ「．．．うん。」

そう言つとヴィヴィオは二人にカイムのことを話した。

サラ「．．．そっか、お父さんがそんなことになつて心配なんだね．

．．．」

ヴィヴィオ「うん．．．パパ、ヴィヴィオを助けたせいで．．．」

サラ「それは違うよ、お父さんにとってはあなたが助かったことこ

そが嬉しかつたんだよ．．．」

ジン「そうだ、たとえ血は繋がっていなくとも親というものは子供のためだからこそ、そういうことが出来るんだ．．．そして、親は

子供と一緒に生きたいと願うことが出来るんだ……」

イクス「……わかる気がします……」

ジン「……実はね、俺達はある悪い奴らに子供の頃に誘拐されて、まったく別のところで20年もの間、両親と離れ離れで育ったんだ……」

リオ「20年間も!？」

サラ「うん……私達はある人達に助けられて、20年間育てて貰ったの……いつかお父さんとお母さんに逢えると信じて……」

ヴィヴィオ「サラお姉ちゃん……」

とそこへ、3人の男女が来た。

???「ジン、サラ!」

ジン「ダイ、ブン、ルー!」

サラ「どこへ行っていたの?」

ブン「わりい、どうもこつちに来る時に場所がずれたみたいでさ……」

「」

イクス「あのく、こちらの方々は?」

ジン「ああ、彼らは俺たちの仲間だ。」

ダイ「俺はダイだ。」

ブン「俺はブンって言っただ。」

ルー「私はルーって言っただ、よろしくね……」

ヴィヴィオ・イクス「(あれ?ジン、サラ、ダイ、ブン、ルーってどこかで聞いたような気が……)」

リオ「どうしたの二人とも?」

ヴィヴィオ「え!?な、なんでもないよ……ねえイクス。」

イクス「う、うん、そうだよ、ヴィヴィオ。」

そう言っただ、二人ははぐらかした。

その間に3人は2人から事情を聞いて、ヴィヴィオに話しかけた。

ルー「そっか、お父さんが心配なのね……実はね、私達もジンとサラと同じでね、子供の頃に誘拐されて5人とも同じ場所で育ったの……」

ダイ「まあ、厳密に言えば5人ともそれぞれ異なった環境の中で育てられたんだけどね。」

コロナ「どうして、そんなことになったんですか？」

ブン「そうすることで、より強靱な力を俺達が手に出来るかと育て親が思ったからさ・・・」

イクス「そうだったんですか・・・」

ジン「ああ、そして俺達は故郷に帰ってきたんだが、ある事情から限られた期間しか故郷にいられなかった、でもそんな中でサラだけは本当の両親に会えたんだ、サラの父は誘拐された時、赤ん坊だったサラを助けようとして独学でタイムマシンを作ったんだ。」

リオ「タイムマシン！？す、すごいですね・・・」

サラ「ホントよ、最初は私に関することを誘拐犯に記憶を消されていたから、僅かに残った記憶だけを頼りに過去へ行って確かめようとしたの・・・」

ル「でも、結局それがわかった時は私達は故郷に留まることが出来なかったの・・・」

ジン「俺達は結局サラを両親と引き合わせてやることが出来なかった・・・」

サラ「違いわ、みんなは私を両親に人目会わせてあげようとしてくれた、私はその気持ちだけで十分だった・・・」

ダイ「サラ・・・」

ブン「お前・・・」

ヴィヴィオ「サラお姉ちゃん・・・わかった、私もパパを信じる、絶対にパパは目覚めてくれるって、信じる！」

サラ「うん、そうだよ、あなたがお父さんがどれだけ大好きなのか私たちにもよくわかるから、きつと大丈夫だよ。」

そう言つて、サラはヴィヴィオを優しく抱きしめた。

ダイ「さて・・・話は終わったから、俺達は俺達の成すべきことをするか。」

イクス「成すべきこと？」

ブン「ああ、後輩達に俺達の力を解放してやらないとな．．．」  
リオ「力の解放？」

ヴィヴィオ「もしかして、お姉ちゃん達は．．．」  
とそこへ、マリエル、ティア、エリス、なのは、フェイト、カリム、シャツハのメンバーが来た。

ティア「ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオ「あ、ママ達だ！」

サラ「え！？ママたちって．．．あの二人は、もしかして．．．」  
イクス「どうして、ここが？」

エリス「簡単よ、だってヴィヴィオはカイクとお揃いのモバイルーツを持っているでしょ？」

なのは「だから、そのモバイルーツの反応を追ってここまで来たの。」

フェイト「ヴィヴィオ、その人達は．．．」

ヴィヴィオ「うん、ヴィヴィオを励ましてくれた人達なの。ジンさん、サラさん、ダイさん、ブンさん、ルーさんって言うの．．．」

カリム「そうでしたか、ヴィヴィオがお世話になりました．．．」

サラ「いえ、ヴィヴィオちゃんの話の聞いていると他人事のように思えなくって．．．」

それを聞いたティアとエリスは5人の正体に気付いた。

ティア「もしかして．．．先輩達じゃ．．．」

シャツハ「え！？それじゃ、この人達は．．．」

ジン「その通りだ、俺達は超新星フラッシュマンだったんだ、俺はレッドフラッシュ。」

ダイ「俺はグリーンフラッシュ。」

ブン「俺はブルーフラッシュ。」

サラ「私はイエローフラッシュ。」

ルー「私はピンクフラッシュ。」

エリス「先輩達が来たということは、フラッシュマンの大いなる力を解放してもらえるの？」

ル「ええ、それもそうなんだけど、もう一つ用事があってね。」  
カリム「もう一つの用事？」

それを聞いたマリエルがすぐに反応した。  
マリエル「もしかして、レオナさんたちが言っていたクリスタルを持ってきてくれたんですか？」

サラ「ええ、はいこれです、ちなみにレオナからデータを貰ったんで、4つ分のこの特殊プリズムにはインストール済みです。」

そう言つて、5人のプリズムを一つにした形4つのクリスタルをマリエルに渡した。

マリエル「ありがとうございます、これでようやく完成しました。」  
そう言つて、4つのクリスタルを何かにセットした。

フェイト「マリーさん、それは？」

マリエル「これは、カイクさんに頼まれてたヴィヴィオたち専用のデバイスよ。」

ティア「ヴィヴィオたちのというと？」

なのは「ヴィヴィオ、イクス、リオ、コロナの4人のデバイスだよ。」

エリス「あら、なのはは知ってたの？」

なのは「ええ、カイクさんから相談されて、短期間とはいえ基礎が終わったし、万が一つてことがあるからデバイスは持たせたほうがいいだろうって・・・。」

シャツハ「カイクさんらしいですね・・・。」

みんなが話している間にマリエルはクリスタルをデバイスセットし完成させた。

マリエル「はいみんな、これがみんなのデバイスだよ。」

そう言つと、リオには八卦鏡の形のペンダント、コロナには腕輪、イクスにはゴーカイジャーのマークのペンダント、そしてヴィヴィオにはなんとウサギのぬいぐるみが渡された。

ヴィヴィオ「ウサギ？」

ティア「これって、ヴィヴィオのぬいぐるみ？」

なのは「それは、外装、というかアクセサリだよ。」

マリエル「中の本体は今回のクリスタルを使用したクリスタルタイプだから。」

二人が説明し終わるとウサギのぬいぐるみが動き出して、ヴィヴィオにアピールした。

ヴィヴィオ「うわ、すごい。」

リオ「私とコロナの分も．．．」

コロナ「ありがとうございます。」

イクス「カイクおじ様、わざわざお父様をイメージしてゴーカイジャーのマークをかたどってくれたんですね．．．」

なのは「みんなの特性とかを色々リサーチして、作ったマリーさん、シャリー、牧野先生、レオナさんによる最新式なんだよ、でもまだ中身がない状態だから名前もないの。」

ヴィヴィオ「そうなんだ．．．でもそれだったらもう名前は決まってるもん。」

イクス「そうです、前々から決めてた名前があるんです．．．」

マリエル「ちなみにカイクさんから頼まれて、みんなのデバイスにはヴィヴィオがやりたがっていたのも出来るよ。」

ヴィヴィオ「ホント！やった、ありがとうございます！」

フェイト「ねえなのは、なんのこと？」

なのは「見てればわかるよ。」

そう言うと、4人は自分達のデバイスを起動させ始めた。

ヴィヴィオ「マスター認証、ヴィヴィオ・アストレア、術式はベルカ&ミッドハイブリッド、デバイス固体名称登録、愛称はクリス、正式名称「セイクリッド・ハート」！」

リオ「マスター認証、リオ・ウエズリー、術式は近代ベルカ式、デバイス固体名称登録、愛称はソル、正式名称「ソルフェージュ」！」

コロナ「マスター認証、コロナ・ティミル、術式はミッドチルダ式、デバイス固体名称登録、愛称はブラン、正式名称「ブランゼル」！」

イクス「マスター認証、イクスヴェリア・グランド、術式は古代ベ

ルカ式、デバイス固体名称登録、愛称はジャンヌ、正式名称「ノー  
ヴアス・ジャンヌ」！」  
ヴィヴィオ「それじゃ、行くよ！」  
4人「セツトアップ！」」  
そう言うと、4人の姿が変わり、ヴィヴィオにいたってはかつての  
聖王としての姿でいた。  
イクスも似たような格好で、髪形だけ違う状態で、リオとコロナも  
それぞれ体格に適した大人の格好になっていた。それを見たフェイ  
トとティアはかなり動揺していた。  
フェイト「な、なのは．．．ヴィヴィオが．．．」  
なのは「落ち着いて、フェイトちゃん。」  
ティア「で、ですが．．．」  
エリス「あら、ティアは知らなかったの、私はカイクムから聞いてい  
たからね．．．」  
カリム「実は私もです．．．」  
フェイト「ひよつとして、知らなかったの私とティアさんだけ!？」  
みんな「まあ、そうだね。」  
それを聞いた二人は少しいじけた。  
マリエル「ま、まあ、それはさておき、後レオナさんからイクス、  
リオ、コロナにあとこれを．．．」  
そう言うと3人に特殊なカラーリングのモバイルーツを渡した。  
イクス「これはモバイルーツですよね？」  
マリエル「そう、それがあればレンジャーキーで色々な戦士に変身  
できるの、カイクムさんとジークさんがトレーニングをする時、これ  
があつたほうがいいだろうって．．．」  
リオ「これで私達もヴィヴィオと一緒に色々できるんだ。」  
コロナ「ありがとうございます。」  
マリエル「お礼はレオナさんに言ってね。」  
ジン「さあ、次は大いなる力だ、俺達のレンジャーキーを．．．」  
そう言うと、ヴィヴィオが自分のゴーカイバツクルからフラッシュ

マンのレンジャーキーを出して、ジン達に渡した。

エリス「ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「お願いします、もうヴィヴィオ落ち込まないもん、パパは絶対に目覚めてくれるヴィヴィオはパパを信じて待つ。」

それを聞いた、ティア、エリス、なのは、フェイト、カリムの心に強く響いた。

なのは「．．．だめだな、ヴィヴィオが頑張ってるの．．．」

ティア「そうですね．．．」

エリス「そうよ、カイムはあんなことで死ぬような男じゃないのに．．．」

フェイト「．．．私達は、カイムさんに甘えすぎていたんですね．．．」

カリム「私達は私達の成すべきことをしないと、目覚めたカイムさんに呆れられてしまいますものね。」

そう言つて、5人の目つきが変わった。

サラ「．．．どうやら、もう大丈夫そうだね。」

ジン「そうだな、ゴーカイキングのことは俺達でもなんとも出来ないが、彼ならきつと大丈夫だ、なにせあの地獄の番犬と呼ばれたドギー・クルーガーが認めた男だ。」

ダイ「さあ、話は終わりだ、早く仲間の元へ行ったほうがいいんじゃないのか？」

ティア「そうですね、行きましょう。」

そう言つて、ジン達はレンジャーキーを渡そうとした時、エリスがジンに言った。

エリス「先輩達も一緒に戦いませんか？」

ジン「．．．そうだな、目覚めたばかりだからな、無性に身体を動かしたくなつたな。」

ダイ「決まりだな、行こうぜ！」

その言葉に続くようにヴィヴィオがティアとなのはたちに言った。

ヴィヴィオ「ママ達、今回はヴィヴィオも戦うよ、パパも分まで。」

リオ「私達もいきます。」

コロナ「ヴィヴィオが頑張っているの、見てるだけは嫌なんです。」  
イクス「私もです、今こそお父様の手助けがしたい。」

ヴィヴィオ達は真剣な目つきでなのはたちに言った。

なのは「・・・わかった、だけど無茶はだめだよ。」

ヴィヴィオ「うん！」

ブン「それじゃ、後輩の戦いぶりを見せてもらおうか。」

サラ「あ、それとヴィヴィオちゃん、これを・・・」

そう言つて、キングキーを渡した。

ヴィヴィオ「これは、キングキーだよ。」

サラ「そう、それがフラッシュユタイトンのキングキーだよ、パパの分まで頑張ろう。」

ヴィヴィオ「うん、ありがとうお姉ちゃん。」

ジン「それじゃ、今度こそ行こう。」

そう言つて、全員ジークたちの所へ向かつていった。

出撃メンバーサイド

全員で応戦していたが、その中で敵は執拗にジークとアィムを集中的に狙つてきている。

シグナム「奴らめ、ジークとアィムばかりを狙っているな。」

シュバリエ「ジーク、アィム、カィムが倒れた今、貴様ら二人を倒せばゴーカイジャーなど恐れるに足らん。」

ジーク「そういうことか、だがよそう簡単に負けられるかよ、ゴー

カィストリーマー、ドリルモード！」

アィム「その通りだ、ゴーカィスピア、ガンモード！」

メルト「随分な言い草ね、私達も舐められたものね。」

フィオネ「カィムさんは、絶対に目覚めます、それまで私達で食い止めます。」

そう言つて、戦闘を続行していたが苦戦を強いられていた。

カウラー「前より強くなつたなゴーカィレッド、だがなおのこと貴

様に攻撃を集中すればいいことだ！」

D・バジリスクギン「食らえ！」

ジーク「しまった、ゴーカイストリーマーが!？」

サー・カウラーの鞭とD・バジリスクギンの溶解液でゴーカイストリーマーが損傷した。

ガルダン「切り札を失った、貴様に我らに勝てると思ってるの!？」  
しかし、ジークは余裕の笑みを浮かべた。

ジーク「ふん、余裕だぜ、ゴーカイキャリバー！」

D・サイクロプス「ふん！」

D・サイクロプスは衝撃波を出して全員吹き飛ばした。

全員「くくああああ（きゃああああ）!!」「」

シュバリエ「奴らに止めを刺せ！」

D・サイクロプス・D・バジリスクギン「はは!!」「」

とその時だった。どこからともなく閃光が放たれた。

シュバリエ「誰だ!？」

サラ「シヨツキングビーズ！」

ルー「シヨツキングハート！」

スカルソルジャー「くくガガガガ!」「」

カウラー「お、お前達は!？」

ジン「カウラー、ガルダン、久しぶりだな。」

ガルダン「馬鹿な、フラツシユマンだと・・・!？」

ジーク「先輩！」

メルト「それにみんなも大丈夫なの？」

ティア「大丈夫よ、カイクさんが起きた時に情けない姿は見せられ

ませんし・・・」

エリス「遅れた分だけ派手に行かせて貰うわよ。」

ヴィヴィオ「私も行くよ！」

はやて「ヴィヴィオにイクス、それにリオとコロナ!？なんで大人  
になってるんや？」

イクス「お母様、これは変身魔法の一種で先ほどフラツシユマンの

方から貰ったクリスタルで完成したデバイスのおかげで・・・」  
シグナム「なるほどな・・・マリエル技官達が何かしていると思っ  
たがそういうことか・・・」  
ヴィヴィオ「リオ、コロナ、イクス、はいこれ。」  
そう言うのと3つのレンジャーキーを渡した。  
リオ「あたしはこれにする。」  
コロナ「私はこれ。」  
イクス「私はこれです。」  
そう言つて、それぞれのレンジャーキーを受け取つた。  
なのは「行くよ、ヴィヴィオ。」  
ヴィヴィオ「うん！」  
フェイト「危なくなつたら下がつてね。」  
3人「・・・はい!」  
ダイ「それじゃジン、久しぶりに行くこうぜ!」  
ジン「ああ、みんな、プリズムフラッシュだ!」  
4人「・・・OK!」  
フラッシュマン「・・・プリズムフラッシュ!」  
フラッシュマン「・・・シャットゴーグル!」  
ティア・エリス「豪快チェンジ!」  
4人「・・・豪快チェンジ!」  
モバイレーツ「ゴーカイジャー!」  
モバイレーツ「ジークジャンヌ!」  
モバイレーツ「デカレンジャー!」  
モバイレーツ「マジレンジャー!」  
なのは・フェイト「・・・レンジャージャケット!セットアップ!」  
全員変身を完了させた。  
カウラー「まさか、お前達とまた会うことになるとはな・・・」  
サラ「カウラー、あなたは私の両親のことを教えてくれた・・・だ  
けど、妖魔に味方をするのなら、容赦はしないわ。」  
カウラー「いいだろう、今度こそケリをつけてくれる。」

ジン「それじゃ、行くぞ後輩。」

ジーク「ああ、行くぜ！」

ジン「レッドフラッシュュ！」

ダイ「グリーンフラッシュュ！」

ブン「ブルーフラッシュュ！」

サラ「イエローフラッシュュ！」

ルー「ピンクフラッシュュ！」

ジン「超新星！」

フラッシュュマン「「フラッシュュマン！！」」

ジーク「ゴークイレッド！」

フィオネ「ゴークイブルー！」

メルト「ゴークイイエロー！」

エリス「ゴークイグリーン！」

ティア「ゴークイピンク！」

アイム「ゴークイシルバー！」

ヴィヴィオ「ゴークイキング！」

ジーク「海賊戦隊！」

ゴークイジャー「「ゴークイジャー！！」」

イクス「ジークジャンヌ！」

リオ「なみいる悪を、白日のもと暴き出す！光の刑事、デカブライ

ト！」

コロナ「煌く氷のエLEMENT！白の魔法使い、マジマザー！」

フラッシュュマン・ゴークイジャー・4人「「我ら、スーパー戦隊

オールスター！！」」

シュバリエ「どうやら、これも使ったほうがいいようだな．．．」

そう言つて、シュバリエたちはアンチレンジャーキーを取り出し、

召喚してきた。

レー・ワンダ「．．．．．」

レー・ネフェル「．．．．．」

レー・ガルス「．．．．．」

ビリオン「……………」

ガロア「……………」

カウラー「かかれ！」

そう言うのとスカルソルジャー、スカルナイトを筆頭に敵が押し寄せてきた。

ジン「行くぞ！」

ジーク・ヴィヴィオ「派手に行くぜ！（派手に行くよ！）」

そう言うて、敵に向かっていった。

ティア「えい！」

ルー「プリズムブーツ、スーパータップ！」

スカルソルジャー「ガガガガ！！」

ティア「さすがです。」

ルー「あなたもね。」

メルト「はああ！」

サラ「プリズムバトン、プリズムバトン・スーパーバージョン！」

スカルソルジャー「ガガガガ！！」

メルト・サラ「イエーイ！」

二人は手を合わせた。

フィオネ「ゴーカイスラッシュ！」

ブン「プリズムボール、スーパーサイクロン！」

スカルソルジャー「ガガガガ！！」

フィオネ「ありがとうございます。」

ブン「いや、こっちこそ。」

エリス「ゴーカイブラスト！」

ダイ「プリズムカイザー、スーパーピストン！」

スカルソルジャー「ガガガガ！！」

エリス「見事な動きですね。」  
ダイ「君もたいしたもんだよ。」

ジーク「オラオラ！」

ジン「プリズム聖剣、スーパーカッター！」

レー・ネフェル「……………」

レー・ガルス「……………」

ジーク「やるじゃねえか、先輩。」

ジン「それはこっちのセリフだ、ジーク。」

ヴィヴィオ「キングテクター！ブレスロットル！」

リオ「ブレスロットル！」

ヴィヴィオ・リオ「高速拳ダブルライトニングフィスト！」

ピリオン「……………」

コロナ「マジ・マジユナ、ブリザードクラッシュ！」

イクス「ジークソード！」

ガロア「……………」

4人「……やった！！」

4人は全員で手を合わせた。

アィム「面倒だ、これで決める、豪快チェンジ！」

ゴーカイスルラー「ゴーカイスルバー、ゴールドモード！」

アィム「ゴーカイスルバー、ゴールドモード！レンジャーキーセッ

ト！」

ゴーカイスピア「ファイナルウェーブ！」

アィム「ゴーカイレジェンドクラッシュ！」

レー・ワンダ「……………」

アィム「ゴツチューー！」

スカルソルジャーとアンチレンジャーキーの敵を倒したメンバーが

集まり、敵に向かい合った。

ジーク「後は、あいつらだけだ。」

ゴーク「カイサーベル・ゴークイガン」「ファイナルウェーブ！」

ジン「行くぞ！プリズムシューター！」

フラッシュマン「合体スーパースピア！」

ゴークイジャー「ゴークイスクランブル！」

D・バジリスクギン「ぐああああ！」

カウラー「くっ……」

ガルダン「カウラー様！」

シグナム「レヴァンティン！百火繚乱！」

ヴィータ「アイゼン！ぶち抜け！」

リン「ライトクロス！」

スバル「リボルバーキャノン！」

ギンガ「ナツクルバンカー！」

ティアナ「ヴァリアブルストライク！」

エリオ「ストラダ、ソードモード！ストラダスラッシュ！」

キャロ「フリード、マジランプバスター！」

フリード「キュクルー！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

なのは「フェイト・はやて」「トリプルブレイカー！」

D・サイクロプス「ぐあああ！」

スカルナイトは全滅したが、D・サイクロプスとD・バジリスクギンは立ち上がってきた。

なのは「これでもまだやられないの？」

ジーク「くそ、ゴークイストリーマーは故障しているからマキシムモードは使えないし……」

とその時、レオナから連絡が入った。

レオナ「（レッド君、大丈夫だよ、やっとゴークイジャー用の合体武器の改良が終わったから、ゴークイバツクルを開いてみて。）  
そう言うと、ゴークイバツクルを開くと武器が転送されてきた。

はやて「これは？」

レオナ「（以前ゴーカイジャーが使っていた武器をさらに強化した武器だよ、名付けて「スーパーゴーカイガレオンバスター」だよ。）

「  
ジーク「なるほどな、これならいけるぜ。」

ヴィヴィオ「よし、こっちはゴーカイデリンガーで・・・」  
レオナ「（待つてヴィヴィオ、ヴィヴィオの身体じゃいくら大人モードになっていてキングテクターをつけていてもゴーカイデリンガーのファイナルウェーブモードの衝撃に耐えられないよ。）」  
ヴィヴィオ「え！？そうなの？」

イクス「だったら、私達が支えれば何とかなるんじゃないんですか？」

レオナ「確かに可能だけど・・・」

リオ「だったら、やるうよ。」

コロナ「ヴィヴィオの友達だもん、友達とは助け合っのが当たり前だよ。」

ヴィヴィオ「みんな・・・うん、よし行くよ、レンジャーキーセット

ト、ゴーカイガンセット！」

ゴーカイデリンガー「ファイナルウェーブ！」

ゴーカイジャー「レンジャーキーセット！」

スーパーゴーカイガレオンバスター「レッドチャージ！」

ジン「よし、こっちもローリングバルカンだ！」

4人「OK！！！」

フラッシュマン「ローリングバルカン！！！」

ジン「イエローフラッシュ、サーチだ！」

サラ「OK！」

ジン「よし！ローリングバルカン！」

ジーク「ド派手に行くぜ！」

ゴーカイジャー「スーパーゴーカイガレオンバスター！！！」  
スーパーゴーカイガレオンバスター「スーパーライジングストライ

ク！」

アイム「ゴーカイレジェンドリーム！」

4人「「「ゴーカイレディングファイナルウェーブ！」」」

D・サイクロプス・D・バジリスクギン「「ぐああああ！」」

2体は今の一斉攻撃で完全に倒され、一同はスーパーゴーカイガレオンバスターの威力に言葉を失った。

はやて「す、凄過ぎや．．．」

シグナム「うむ、ゴーカイストリーマー以上ですね、主．．．」

カウラー「なんとこの威力だ．．．恐るべし、スーパーゴーカイガレオンバスター．．．」

シュバリエ「まだ終わりではない、ゴルリンMr．？7号、8号カモン！」

そう言うと、ゴルリンMr．？が2体現れて、D・サイクロプス、D・バジリスクギンの2体の残骸を吸収して自分の身体を母体に復活させた。さらにおまけと言わんばかりにスカルソルジャー、スカルナイトの大群を出してきた。

スカルソルジャー「「ガガガガ！」」

スカルナイト「「カラカラカラ！」」

ジーク「上等だ！」

ヴィヴィオ「こつちもキングインストラー！」

モバイレーツ「ゴーカイガレオン！」

ゴーカイセルラー「豪獣ドリル！」

キングインストラー「フラッシュキング、フラッシュタイタン、

ゴセイアルティメット、大獣神！」

ロボットを出撃させ、それぞれフラッシュマンはフラッシュキングへ、ゴセイアルティメットにははやて、シグナム、ヴィータ、リンが乗り、大獣神にはギンガとフォワード陣の5人が乗り込み、フラッシュタイタンにはヴィヴィオ、なのは、フェイト、イクス、リオ、コロナが乗り込んだ。

ゴーカイジャー「「海賊合体、完成、ゴーカイオー！！！」」

アイム「完成、豪獣神!!」  
はやて「一気に行くで、アルティメットチャージカード!」  
4人「アルティメットストライク!」  
スカルナイト「カラカラカラ!」  
エリオ「恐竜剣ゴッドホーン!」  
5人「超伝説・雷光斬り!」  
大獣神「超伝説・雷光斬り!」  
スカルソルジャー「ガガガガ!」  
ジーク「一気に決めてやるぜ、レンジャーキーセット!」  
ゴーカイジャー「完成、マジゴーカイオー!」  
ゴーカイジャー「レッツゴー、ゴーカイマジバインド!」  
D・バジリスクギン「う、動けん...!」  
アイム「よし、レンジャーキーセット!必殺豪獣トリプルドリルド  
リーム!」  
D・バジリスクギン「ぐああああ!」  
ヴィヴィオ「フラッシュターン!タイタンボーイ!」  
そう言うところ前方の部分が分離・変形してロボットになった。  
6人「完成、タイタンボーイ!」  
ジン「キングミサイル!」  
ヴィヴィオ「ラジアルボンバー!」  
D・サイクロプス「ゴオオオ!...おのれ...これでも食らえ、  
アースクエイク!」  
そう言うところ大地震を起こした上に衝撃波をぶつけてきた。  
フラッシュマン「うあああ!」  
6人「きゃあああ!」  
D・サイクロプス「どうだ、貴様ごときにやられる俺ではない。」  
ジン「まだだ、イエローフラッシュ、コスモソードだ!」  
サラ「OK!」  
ジン「フラッシュキング、ジャンプ!」  
フラッシュキングはジャンプして、スターコンドルから射出された

コズモソードを受け取った。

ヴィヴィオ「こっちも切り札使うよ。フラッシュターン、グレート  
タイタン！」

そう言うと、タイタンボーイは残っていた後部のトレーラーと合体  
してさらに巨大なロボットになった。

6人「完成、グレートタイタン！」

フラッシュマン「スーパーコズモフラッシュ！」

6人「タイタンノバ！」

D・サイクロプス「ぐああああ！」

2体のロボットの斉攻撃でD・サイクロプスは完全に止めを刺さ  
れた。

シュバリエ「おのれ．．．」

カウラー「長居は無用だな、シュバリエ、ガルダン、引き上げるぞ。

」

ガルダン「は！」

シュバリエ「やむもえまい．．．」

そう言って、3人は撤退した。

その後、フラッシュマンたちはレンジャーキーをまたジークたちに  
渡した。

ジーク「助かったぜ、先輩。」

ジン「なに、気にしなくていいさ。」

ダイ「それよりも後は頼むぜ。」

ブン「カウラーもそうだけど、妖魔は手ごわいぜ。」

サラ「ただあなた達ならきつと大丈夫よ。」

ルー「だって、私達の後輩だもの。」

ティア「ありがとうございます。」

エリス「それにしても、レオナも人が悪いわよね、あんな武器があ  
ったなんて．．．」

レオナ「ごめんね、元々この武器は先代のゴーカイグリーンがオー

レンジャーの力を使って作ったものだったの、だけど力がこつちはまだ解放されてないから、改良して歴代スーパージョウの力をついにしたものにしたの、つまり力が解放された数が多ければ多いほど、威力が上がっていくの。」

メルト「へえ、道理だね。」

ヴィヴィオ「サラお姉ちゃん、バイバイ。」

サラ「ヴィヴィオちゃんも元気でね、お父さんはきつと大丈夫だから。」

ヴィヴィオ「うん！ヴィヴィオはパパを信じる。」

サラ「うん、それでいいんだよ、それじゃまた会おうね。」

ジン「それじゃ、ゴーカイジャーまた会おう。」

そう言うフラッシュマンの5人は消えた。

ジーク「行ったか・・・まあおかげでティアたちが元気になったからな、助かったぜ先輩・・・。」

そう言うて、今回の事件は無事解決した。

ちなみにヴィヴィオもトレーニングに集中できるようになり、見違える動きを見せていた。

さらにリオとコロナもヴィヴィオとイクスのトレーニングに付き合いようになったという。

第51話 親と子の絆、輝けフラッシュタイタン！（後書き）

今回は、思ったよりも長い話になってしまいました、次回はカイクムの復活と大いなる力の解放にしますので、よろしくお願いします。

**第52話 目覚めるカイクム！人の神秘のカオーラパワー！（前書き）**

どうも、今回ようやくカイクムが復活及びマスクマンの大いなる力が解放されます、さらにスーパーゴーカイガレオンバスターの更なる使い方が出てきます。

## 第52話 目覚めるカイク！人の神秘のカオーラパワー！

デカベース ラボ

牧野「ジークくん．．．ゴークイストリーマーなんですけど．．．しばらくオーバーホールが必要ですね．．．」

ジーク「マジかよ！？まあスーパーゴークイガレオンバスターがあるからまだいいけどよ．．．」

レオナ「ええ、スーパーゴークイガレオンバスターの威力はゴークイデリンガーのファイナルウェーブモードに匹敵しているの、まあ力が解放されればさらに威力が上がるから、こっちの方が強くなるけどね。」

アイム「それと、さっきナビーに登録させたこのゴークイバックル3つだが、渡すんだろう？」

ジーク「ああ、そうだった、何かあるとも限らねえからな．．．たしか今、3人とも訓練場だったな．．．」

そう言っ、ジークはラボを後にした。

### 訓練場

一方、ヴィヴィオ、イクス、リオ、コロナの4人は流星とノーヴェからトレーニングを受けていた。

流星「よし、休憩だ。」

リオ「ふゝ、前からカイクおじさんから基礎トレーニングやってるからついていけるけど、キツイね。」

コロナ「でも、思ったよりついていけるからすごいよね。」

ヴィヴィオ「それはパパがね、「人はその体を鍛えれば鍛えるほど強くなる。そして人智を超えた力、想像を絶した力を引き出すことができる」って言ったの。」

ノーヴェ「へえゝ、旦那がね．．．」

イクス「でも、わかる気がします、お父様も同じことを言ってます

たし．．．」

ジーク「まあ、正確に言えば今の言葉は光戦隊マスクマンの姿長官の言葉だけだな．．．」

とそこへ、ジークが来た。

イクス「お父様！」

ヴィヴィオ「ジークおじさん！」

流星「どうしたんだ？」

ジーク「ああ、イクス、リオ、コロナの3人にこのゴーカイバツクルを渡そうと思ってな．．．」

そう言つて、3人にゴーカイバツクルを渡した。

ジーク「それがあれば、頭の中で出したいレンジャーキーを浮かべただけで宝箱の中のレンジャーキーを出せる。」

イクス「ありがとうございます、お父様。」

そう言つて、3人はレンジャーバツクルを巻いた、するとバツクルは自然とサイズにフィットするように調整された。

ノーヴェ「すげえ、仕掛けだな．．．」

ジーク「試しに出したい、レンジャーキーを浮かべてみな？」

ジークにそう言われて、3人は目を閉じて考えるとバツクルからそれぞれイクスはダイレンジャーのキバレンジャー、リオはゲキレンジャーのゲキエロー、コロナはマジレンジャーのマジシャインを出した。

リオ「すごい、こんな仕掛けになつてるんだ！」

コロナ「ありがとうございます。」

とその時、シャーリーからの通信が入った。

シャーリー「大変です、妖魔反応です。」

ジーク「わかった、すぐに行く。」

そう言つて、ジーク、流星、ヴィヴィオは出撃した。

カイムのいる精神世界

カイム「くっ．．．」

カイムはD・サキュバスが作り出した精神世界で変身も出来ずに磔にされていた。

D・サキュバス「強情な男だね、堕ちた方が楽になれるのにな．．．」

カイム「．．．大事な娘や仲間が待っているんでね．．．」

そう言うとカイムは目を閉じた、するとカイムの周りに不思議な力があふれ出し始めた。

D・サキュバス「な、なんだい、この力は．．．」

カイム「これは、オーラパワーだ．．．」

D・サキュバス「オーラパワー!？」

そう言うと、カイムを拘束していたものが解かれた。

カイム「食らえ!ゴッドハンド!」

そう言つて、手にオーラパワーを纏つた正拳突きを叩き込んだ。

D・サキュバス「きゃあああ!」

D・サキュバスは今の一撃で吹き飛ばされ、姿を消した。

カイム「はあ．．．はあ．．．」

その直後、カイムの前に6つの光が集まった。

カイム「誰だ!？」

タケル「やつと、見つけたぞ後輩、俺達は光戦隊マスクマンだ、そして俺がリーダーのタケルだ。」

ケンタ「俺はケンタ、ブラックマスクだ。」

アキラ「俺はアキラ、ブルーマスク。」

ハルカ「私はハルカ、イエローマスクよ。」

モモコ「私はモモコ、ピンクマスクよ。」

リョオ「そして、俺は飛鳥リョオ、マスクマン第1号のX1マスクだ。」

カイム「どうして、先輩達がこの世界に？」

タケル「この間、眠りから覚めたときにレオナと牧野さんから連絡を受けてね、俺たちの力で君のオーラパワーを探していたら、突然強力なオーラパワーを見つけたんだ。」

ケンタ「さあ戻ろう、仲間が待つてるぜ。」  
カイル「先輩……」  
タケル「俺達は今回は見届け人になろう……君たちの力をたっぷりと見せてくれ。」  
カイル「ああ、任せてくれ。」  
そう言うと、周りの景色が消えて、カイルの意識は遠のいき、次の瞬間デカベースの医務室にいた。  
カイル「ここは？」  
シャマル「カイルさん！？気がついたんですね。」  
その後、6人の男女が現れて、シャマルは驚いたがカイルが事情を説明して納得した。

現場

ルシフェル「来たか……」  
バディン「ゴーカイジャーども……」  
ジーク「ルシフェル！バディン！」  
ヴィヴィオ「よくもパパを……」  
ルシフェル「どうやら、まだ目覚めないようだな……さすがに私が特別仕様として完成させた妖魔獣士だ……」  
なのは「ふざけないで！カイルさんをあんなにした償いは取ってもらうよ！」  
フェイト「あなたのような、命を弄ぶ人を絶対に許しません！」  
バディン「ほざけ、カイルがいないお前らなど敵ではない！」  
シグナム「それはこっちのセリフだ！」  
ティア「行きましょう！」  
ゴーカイジャー「……豪快チェンジ！！」「」  
モバイレーツ「ゴーカイジャー！」  
ゴーカイセルラー「ゴーカイジャー！」  
ヴィヴィオ「行くよ、クリス、セイクリッド・ハート！セットアップ！」

なのは・フェイト「レンジャージャケット！セットアップ！」  
シグナム・ヴィータ「レンジャージャケット！セットアップ！」  
フォワード陣「レンジャージャケット！セットアップ！」  
ヴィヴィオ「まだだよ、続けて、豪快チェンジ！」  
モバイレーツ「ゴーカイジャー！」  
流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

ルシフェル「お前達の相手をするほど私は戦闘凶ではないのでな・・・妖魔獣士D・マンティス！」

D・マンティス「はは！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

ジーク「派手に行くぜ！」

そう言つて、敵に向かっていった。

D・マンティス「食らえ！ブラックセイバー！」

ティア・エリス「きゃあああ！」

D・マンティスの攻撃を受け、ティアとエリスは吹き飛ばされた。

ヴィヴィオ「ティアママ、エリスママ！」

なのは「大丈夫ですか!？」

ジーク「野郎！食らえ！」

D・マンティス「甘い！」

ジークはゴーカイガンで攻撃したが、D・マンティスは目に止まらぬ速さで攻撃をかわした。

メルト「速い！」

D・マンティス「違うな、貴様らが遅すぎるのだ！」

とそこへ、GGGのメンバーも来た。

ジーク「凱達か!？」

凱「大丈夫か!？」

ソルダート「なるほど、面白いその妖魔獣士の相手は私がしよう。」

「そう言つて、」はD・マンティスと戦いを始めた、お互いにスピードが速すぎて、一部のメンバー以外は目で追うことすらできない。

D・マンティス「ほう．．．やるな．．．」

「ソルダート」「貴様もな．．．（くっ．．．だが、奴はこれだけのスピードを持ちながら身体がかなり強靱だな．．．そう簡単にダメージを与えられそうにもないか．．．）」

「ルシフェル」「D・マンティスでも、ソルダート」相手ではスピードは互角か．．．なら、これも出すか．．．」

「そう言つて、アンチレンジャーキーを出し、それらをライフル銃にセツトして実体化させた。」

バラバ「．．．．．．」

オヨブー「．．．．．．」

アナグマス「．．．．．．」

キロス「．．．．．．」

ジーク「地底帝国チューブの幹部クラスの連中かよ．．．」

「ヴィヴィオ」だけど、パパが起きるまで負けないもん！」

ティア「その通りだよ、ヴィヴィオ！」

「そう言つて、敵に向かつていった。」

全員で敵に向かつていこうとした時、先制とばかりにアナグマスが持っている杖で玉をゲートボールのように飛ばしてきて、それらの攻撃がヴィヴィオに向かつてきた。

「ヴィヴィオ」きゃあああ！」

「なのは」ヴィヴィオ!？」

「ヴィヴィオはアナグマスのボール攻撃で吹き飛ばされた。」

さらにそれに追い討ちをかけるようにキロスが鎖鎌でヴィヴィオを攻撃してきた。

「エリス」あいつら、さつきからヴィヴィオばかりを．．．」

「ジーク」くそ、助けに行きたいが敵が多すぎる．．．」

「ジークはバラバ、アイムはオヨブー、フィオネ、メルト、エリス、」

ティアはスカルソルジャーの大群と戦い、なのはたちもスカルソルジャー、スカルナイト、さらにアナグマスのボール攻撃に翻弄されて、ヴィヴィオに近付けない状態である。

フェイト「ヴィヴィオ！」

ヴィータ「ルシフェル、てめえ！」

ルシフェル「そろそろ、聖王の器も邪魔になつてきたのでな．．．カイムには悪いが、あの小娘には消えてもらうことにする．．．無論、お前達もな．．．サザンクロス！」

ルシフェルは紋章術のサザンクロスを使い、流星を六課メンバーに食らわせた。

六課メンバー「きゃああああ（うああああ！！！！）」  
今の攻撃で、六課のメンバーは吹き飛ばされた。

メタルダー「みんな!？」

バディン「余所見をしている暇があるのか、メタルダー！」

メタルダー「くっ．．．こつちもバディンがいるから、ヴィヴィオの加勢に行けそうにもない．．．」

凱「なら、こいつを早く片付けてヴィヴィオを助けに行くしかない。」

バディン「ほざけ！」

そう言つて、メタルダーと凱はバディンと戦っていた。

デカベース デカルーム

はやて「こりゃ、アカンで！」

トップガンダー「こうなつたら、待機していた俺も行くぞ。」

はやて「待つてな、トップガンダーさん、うちも行くわ。」

とその時、デカルームに誰かが入ってきた。

カイム「待て、俺が行く。」

ライン「カイムさん!？」

カリム「カイムさん、目覚めたんですね!？」

そう言つとカリムはカイムに抱きついた。

カイル「ああ．．．心配かけたなみんな．．．」  
クロノ「．．．信じていたよ、君のことだからね．．．」  
リンディ「それで、カイルくん、目覚めたばかりなんだけど、大変なことになってるの．．．」  
カイル「ああ、わかってる．．．娘のピンチに俺が出ないわけには行かないだろう．．．」  
ゲンヤ「いい目をしてやがるぜ、頼むぜ。」  
はやて「せやな、カイルさん頼みますわ。」  
トップガンダー「よし、俺も一緒に行こう。」  
とそこへ、6人の男女が来た。  
タケル「俺達も行かせて貰うよ。」  
はやて「あなた達は？」  
とそこへ、シヤマルが来た。  
シヤマル「はやてちゃん、その人達は光戦隊マスクマンの方よ。」  
それを聞いたメンバーは驚きを隠せなかった。  
クロノ「あなた達がスーパー戦隊の一つの．．．」  
ケンタ「ああ、だけど今回は俺達は見届けさせてもらうよ、後輩の戦いを．．．」  
アキラ「それにマスクマンの大いなる力も解放しておいたしね。」  
リンディ「そうですね、ありがとうございます。」  
カリム「これで、半分のスーパー戦隊の方々の力が解放されたことになりましたね。」  
アコース「そうだね、カリム。」  
ハルカ「さあカイル、早く行きましょう。」  
モモコ「あの子が待っているわ。」  
リョオ「絶対を守るんだ。」  
カイル「ああ、わかってる。」  
そう言っ、カイル、トップガンダー、マスクマンのメンバーは現場に向かった。

現地

ヴィヴィオは敵の執拗な攻撃でゴーカイキングの変身が解除されてしまった。

ヴィヴィオ「くっ．．．ま、負けないもん．．．だってヴィヴィオはパパの．．．子供だから！」

ルシフェル「父を思う、娘の思いか．．．中々面白いが、そろそろ終わりにしてやろう、キロス！」

キロス「．．．．．（コク）」

キロスはヴィヴィオにとどめを刺そうとしていた。

なのは「ヴィヴィオ！」

フェイト「だめ、間に合わない！」

ティア「カイクさん．．．！」

とその時だった。

カイク「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「X1マスク！」

カイク「はああ！」

X1マスクにチェンジしたカイクがキロスの前に現れて、キロスを吹き飛ばした。

ヴィヴィオ「も、もしかして、パパ？」

カイク「ああ俺だ、ヴィヴィオよく頑張ったな。」

ヴィヴィオ「パパ．．．うわああああん！」

そう言つて、ヴィヴィオはカイクに抱きついて泣きはじめた。

スバル・ティアナ「カイクさん！」

エリオ「やつぱりお父さんだ！」

キャロ「よかった．．．」

ジーク「カイク、やっとお目覚めかよ！」

アイム「待つていたぞ、カイク。」

フィオネ「もう大丈夫なんですか？」

カイク「ああ、すまないみんな心配かけて．．．」

なのは「いえ、信じていましたよ。」

フェイト「なのはの言うとおりです。」

エリス「カイクがああ程度やられる男じゃないってわかってたから。」

ティア「．．．お帰りなさい、カイクさん。」

4人はカイクにそれぞれ言葉をかけた。

カイク「．．．ああ、ただいまみんな。」

メルト「それじゃ、カイクも復活したことだし、ド派手に行きましよう。」

ジーク「ああそうだな、派手に行こうぜ！」

ルシフェルは驚きを隠せなかった。

ルシフェル「馬鹿な．．．あのD・サキュバスの精神攻撃を跳ね除けたというのか．．．」

とそこへ、D・サキュバスが来た。

D・サキュバス「申し訳ありません．．．奴が突然、摩訶不思議なオーラパワーなる力を発動させて．．．」

ルシフェル「オーラパワーだと．．．まさか!？」

シグナム「ところでカイク、その戦士は？」

カイク「これは、X1マスクだ。」

なのは「ティアさん、X1マスクって？」

ティア「X1マスクさんは、光戦隊マスクマンのプロトタイプ．．．つまりマスクマン一番目の戦士なんですよ、まあレジェンド大戦の時はずでに变身能力を失っていたんですけど、妖魔大戦の時にまた变身できるようになったみたいなんです．．．」

ヴィータ「そうだったのか．．．」

とそこへ、トップガンダーとマスクマンのメンバーも現れ、カイクは元の姿に戻った。

トップガンダー「どうやら、間に合ったようだな．．．」

メタルダー「トップガンダー！」

ルシフェル「き、貴様ら!？」

ジーク「あれは先輩!」

スバル「先輩ということとは、あの人達も？」  
フィオネ「ええ、あの方々は光戦隊マスクマンの方々です。」  
タケル「ゴーカイジャー！俺たちの力を使え！」  
そう言うともスクマンのレンジャーキーが光りだした。  
ジーク「サンキュー、先輩！」  
メルト「ありがたく、使わせてもらっわ。」  
ヴィヴィオ「パパ、これ．．．」  
そう言うて、カイクにゴーカイキングのレンジャーキーを渡した。  
カイク「ありがとうヴィヴィオ。」  
カイクはヴィヴィオからレンジャーキーを受け取り、自分のモバイルーツを出した。  
カイク「豪快チェンジ！」  
ゴーカイジャー「「豪快チェンジ！」」  
モバイルーツ「ゴーカイジャー！」  
カイク「ゴーカイキング！」  
ジーク「レッドマスク！」  
フィオネ「ブルーマスク！」  
メルト「イエローマスク！」  
エリス「ブラックマスク！」  
ティア「ピンクマスク！」  
ゴーカイジャー「「光戦隊マスクマン！！」」  
ルシフェル「小賢しい．．．D・サキュバスやれ！」  
D・サキュバス「はは！食らいなさい！ナイトメア・イリユージョ  
ン！」  
そう言うとも5人は摩訶不思議な空間に引きずりこまれた。  
D・サキュバス「さて、どう料理してあげようかい？」  
ジーク「それはどうかな？行くぜ！」  
そう言うとも、5人はそれぞれを手を異なる形で構えて精神を集中させた。

ゴーカイジャー「メディテーション！」

D・サキュバス「これは、カイムの時と同じ!? ぎゃあああ！」

5人のオーラパワーにD・サキュバスの作り出した空間はいとも簡単に崩れた。

その間、カイムはJに加勢した

カイム「待たせたな、ベガ！」

ベガ「この時を楽しみしていましたマスター。」

カイム「行くぞ、ベガスラッシュ！」

D・マンティス「ぐっ．．．ば、馬鹿な．．．俺の動きについてくれるとは．．．」

ソルダートJ「カイムの動きが私に匹敵している．．．」

カイム「どうやら、あの状態になるまでトレーニング漬けの毎日だったから、休んだことで一気に身体に眠っていたものが、一気に解放されたらしい．．．」

ルシフェル「な、何だと．．．!?」

ジーク「さすがはカイムだけ、こつちも負けてられねえな！ 行くぜ！」

そう言うと5人はマスクマンの専用武器を取り出した。

ティア「マスキーリボン！」

メルト「マスキーローター！」

フィオネ「次は私達です！ マスキートンファー！」

エリス「マスキーロッド！」

バラバ「．．．．．！」

4人の連携攻撃でバラバはアンチレンジャーキーの状態に戻った。

アイム「これで決める！ 豪快チェンジ！」

ゴーカイセルラー「ゴーカイシルバー、ゴールドモード！」

アイム「ゴーカイシルバー、ゴールドモード！ レンジャーキーセット！」

ゴーカイスピア「ファイナルウェーブ！」

アイム「ゴーカイレジェンドリーム！」

オヨブー「……………！」

オヨブーもアンチレンジャーキーに戻った。

ジーク「次は俺だ、ジェットカノン！」

そう呼ぶとどこからともなく小型ジェットが現れて、ジークはそれに飛び乗り相手に体当たりを食らわせた。

D・サキュバス「ぎゃあああ！」

ジーク「まだだ、マスクーブレード！マスクークラッシュ！」

ジークはさらにジェットカノンから飛び降りて、マスクーブレードで斬りつけた。

D・サキュバス「ぎゃあああ……………ぐつ……………お、おのれ……………」

その後、ジェットカノンは変形し、マスクマンにチェンジしたメンバーがそれを持った。

ジーク「クロスターゲット！メディテーション！」

5人が瞑想をするとオーラパワーがジェットカノンに注がれた。

ジーク「発射！」

D・サキュバス「ぎゃあああ……！」

D・サキュバスはジェットカノンの一撃を受けて倒された。

スバル・ギンガ「気力ボンバー！」

ティアナ「ハリケーンショット！」

エリオ「行くよ、フリード！」

フリード「キュクルー！」

エリオ「紫電一閃！」

キャロ「ジー・マジカ、ブルースプラッシュ！」

シグナム「レヴァンティン、火炎の舞！」

ヴィータ「アイゼン、ストームインフェルノ！」

なのは「スカイツクエクセリオンバスター！」

フェイト「ハーケンブレイク！」

アナグマス「……………！」

スカルソルジャー「……………ガガガガ！」

なのは達も敵を全滅させた。

その後、ゴーカイジャーは元の姿に戻り、全員集まった。ジーク「ようやく全員揃ったし、いつものやつやるぜ。」  
そう言っつて、7人は名乗りを上げた。

カイル「ゴーカイキング！」

ジーク「ゴーカイレッド！」

フィオネ「ゴーカイブルー！」

メルト「ゴーカイエロー！」

エリス「ゴーカイグリーン！」

ティア「ゴーカイピンク！」

アイルム「ゴーカイスルバー！」

カイル・ジーク「海賊戦隊！」

ゴーカイジャー「『ゴーカイジャー！』」

凱「やっつと、全員揃ったな。」

メタルダー「これでゴーカイジャーらしくなったな。」

バディン「舐めやがって……」

カイル「ジーク、今こそスーパーゴーカイガレオンバスターの真の力を使うときだ！キングテクター！」

ジーク「ああ、わかっている。」

そう言っつと、ゴーカイバツクルからスーパーゴーカイガレオンバスターが転送されてきた。

ルシフェル「そ、その武器は！？」

カイルがスーパーゴーカイガレオンバスターを持ち、残りの6人が横に立った。

ゴーカイジャー「『レンジャーキーセット！』」

スーパーゴーカイガレオンバスター「キングチャージ！」

なんと7人のレンジャーキーをセットした。

ルシフェル「馬鹿な、以前はセットできるレンジャーキーは5つだったはず……」

アイルム「甘いな、これがスーパーゴーカイガレオンバスターと呼ばれる理由だ。」

カイク「これこそが、仲間の力を一つにするということだ。」

D・マンティス「ルシフェル様、バディン様！」

D・マンティスが二人の前に立ち、二人も2重の結界を張った。  
ルシフェル「この結界を敗れるものか！」

ジーク「上等だ！」

ジーク・カイク「ド派手に行くぜ！」

ゴークイジャー「スーパーゴークイガレオンバスター！！」  
スーパーゴークイガレオンバスター「ファイナルライジングストラ  
イク！」

D・マンティス「こ、これは．．．！」

ルシフェル「何だと、結界がまるで役に立たない．．．！」

バディン「D・マンティス！」

D・マンティス「ぐあああああ！！」

ルシフェルとバディンは間一髪、回避したが、D・マンティスは跡  
形もなく粉碎された。

ヴィヴィオ「やった！」

ルシフェル「おのれ、レオン・ジオルダーナめ、このような切り  
札を持っていたとは．．．D・クラーゲン！」

D・クラーゲン「キイイキイイ！」

D・マンティス「貴様ら、このままではすまんぞ！」

D・サキュバス「私を傷つけた罪は償ってもらわよ！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

敵は巨大化した上に、さらに雑魚の大群も出てきた。

ジーク「知ったことかよ！」

カイク「それに借りを返すのは俺の番だ！キングインストラー！  
モバイレーツ「ゴークイガレオン！」

ゴークイセルラー「豪獣ドリル！」

キングインストラー「ギヤラクシーロボ！」

凱「ギヤレオン！」

ギャレオン「ガオオオオ！」

ソルダートJ「Jアーク！」

それぞれ巨大マシンを呼び出し乗り込んだ（ちなみにギャラクシーロボにはヴィヴィオ、なのは、フェイトがカイクと一緒に乗り込んだ。）

ゴーカイジャー「海賊合体、完成ゴーカイオー！」

アイム「完成！豪獣レックス！」

命「ジエネシツクドライブ！」

凱「ファイナルフュージョン！」

ソルダートJ「メガフュージョン！」

凱「ガオガイガー！」

ソルダートJ「キングジェイダー！」

D・マンティス「何体出てこようと同じことだ！食らえ！烈風陣！」「そう言うとD・マンティスはかまいたちを繰り出すかのような攻撃を全員に与えてきた。」

ソルダートJ「甘い、ジエネレーティング・アーマー出力最大！」

トモロー「了解！」

キングジェイダーが前に立ち、盾になって攻撃を防いだ。

D・マンティス「何！？」

ジーク「今度は、こつちの番だぜ、レンジャーキーセット！」

ゴーカイオー「牙吠！ガオライオン！」

ゴーカイジャー「完成！ガオゴーカイオー！」

ジーク「さらにこれだ！」

ゴーカイジャー「レンジャーキーセット！」

ゴーカイジャー「完成！シンケンゴーカイオー！」

ジーク「食らえ！ゴーカイナギナタ！」

D・マンティス「ぐああああ！」

ソルダートJ「ジーク決めるぞ！」

ジーク「ああ、行くぜ！烈火大斬刀！」

ソルダートJ「ジエイクオース！」

ゴーカイジャー「「「ゴーカイ侍斬り!!」」」

D・マンティス「ぐああああ!!」

D・マンティスは2体の攻撃により倒された。

アトム「豪獣レーザー!!」

凱「ブロウクンマグナム!!」

スカルソルジャー「「「ガガガガ!!」」」

アトム「後は、スカルナイトだな、レンジャーキーセット!!」

豪獣レックス「豪獣神!!」

アトム「完成!豪獣神!!」

アトム「レンジャーキーセット!!」

凱「ガジェットツール!!」

アトム「豪獣トリプルドリルドリーム!!」

凱「ボルテイングドライブ!!」

スカルナイト「「「カラカラカラ!!」」」

二人は雑魚を全滅させた。

D・サキュバス「また眠りにつかせてあげるわよ。」

カイク「そうは行くか、ギャラクシーバズーカ!!」

D・サキュバス「ぎゃあああ!...おのれ...こうなったら、

ナイトメア・イリュージョン!!」

なのは「これは?」

フェイト「カイクさん!!」

カイク「大丈夫だ、このギャラクシーロボは自力でオーラパワーを  
体得したロボットだ、この程度の幻想空間は問題にならない、変形  
ランドギャラクシー!!」

そう言うと、ギャラクシーロボは変形して、巨大トレーラー・ラン  
ドギャラクシーになった。

カイク「オーラロードスパート!!」

カイクがそう叫ぶとランドギャラクシーは幻想空間から消えた。

D・サキュバス「消えた!?!」

D・サキュバスは空間を元に戻したが、ランドギャラクシーの姿は

なかった。

D・サキュバス「どこへ行った？」

D・サキュバスが元の空間で消えたランドギャラクシーを探している間にカイクたちはオーラロードの上を走っていた。

ヴィヴィオ「パパ、ここは？」

カイク「ここは、オーラロードだ。」

なのは「オーラロード？」

カイク「ああ、オーラパワーが満ちている空間だ、ちなみにオーラパワーは人間誰でも持っているんだ、俺はもちろんのこと、なのは、フェイト、そしてヴィヴィオもな。」

フェイト「私たちにそんな力が・・・」

カイク「そして、このギャラクシーロボも鍛錬により、ロボットでありながらオーラパワーを体得したロボットだ、オーラパワーは一種の様々な可能性というところだ・・・」

なのは「可能性・・・」

カイク「話は終わりだ、一気に決めるぞ。」

ヴィヴィオ「うん、パパ！」

そう言うと、ランドギャラクシーはオーラロードでオーラパワーを蓄えて元の世界に戻り、さらにギャラクシーロボに戻った。

D・サキュバス「見つけた！」

なのは「もう遅いよ！カイクさん！」

カイク「ああ、行くぞ！」

ヴィヴィオ・フェイト「はい（うん！）！」

4人「鉄拳オーラギャラクシー！」

D・サキュバス「ぎゃあああ！ルシフェル様！」

D・サキュバスは倒され、ギャラクシーロボは手を合わせて合掌した。

バディン「おのれ、後一步のところでは小娘を倒せたものを・・・ルシフェル「撤退するぞ。」

そう言って、二人は撤退した。

デカベース

その後、全員マスクマンのメンバーにお礼を言った。

リンディ「本当にありがとうございます。」

タケル「いや、彼は俺達が駆けつける前に自力で敵を追っ払ったんだ。」

クロノ「それでもマスクマンの大いなる力を解放していただいたんです、ありがとうございます。」

ケンタ「俺達は自分の果たすべきことをしただけさ。」

アキラ「そうそう、後輩の戦いぶりを見れたし。」

ハルカ「妖魔は手強いけど。」

モモコ「あなた達なら、きつと勝てると思ってるわ。」

リヨオ「それじゃ、頑張れよ。」

ジーク「ああ、任せてくれ。」

そう言っつて、6人は光となってその場から消えた。

その後、カイムはしばらく寝たきりだったので風呂に入っていた。

カイム「ふう〜．．．まさかこんなことになるとは思わなかったな．．．」

とそこへ、ヴィヴィオが入ってきた。

ヴィヴィオ「パパ、身体洗ってあげる。」

カイム「ヴィヴィオ!?!?とていかなんで大人の姿なんだ?」

ヴィヴィオ「だって、この方がパパの身体を洗いやすいし．．．パパ．．．だめ?」

ヴィヴィオはカイムを見つめながら言った。

カイム「はあ．．．好きにしろ。」

ヴィヴィオ「やった!」

カイムは諦めて、ヴィヴィオに自分の身体を洗ってもらった。

カイム「ヴィヴィオ、お前にクリスを渡すように頼んだのは俺だが、約束しろ、その力を絶対にイタズラ目的で使わないことを。」

ヴィヴィオ「うん! わかってる、姿が大人になったからって、心ま

で大人になるわけじゃないもん、ヴィヴィオはまだ子供だから、順を追って成長していくよ、いつか本当にこの姿になった時にパパの子供だって誇れるように。」

カーム「子供のくせに言うようになったな・・・。」

そう言いながらもカームはヴィヴィオの頭を撫でて、ヴィヴィオも嬉しそうな顔をした。

カーム「（しかし、これだけ出来た娘だと、嫁にやりたくはないな・・・）」

というカームは親バカなことを思っていた。

その後、エリオとキャロも入ってきて、子供3人と一緒に裸の付き合いをしたのはまた別の話。

**第52話 目覚めるカイク！人の神秘のカオーラパワー！（後書き）**

どうも、今回でカイクが復活させました、さらにカイクの親バカ的なところを出しました、次回は力の話から離れて、オリジナルの話にしたいと思いますので、次回またよろしくお願いします。

### 第53話 夏だ！海だ！特訓だ！？（前書き）

どうも、今回は本格的な戦闘は無しで、休息とトレーニングの話で短めの話にしました、ちなみにナンバーズのメンバーにもそれぞれレンジャージャケットを持たせたので、よろしくお願いします。

### 第53話 夏だ！海だ！特訓だ！？

海鳴市 海岸

今日、デカベースの駐屯メンバーは、一部のメンバーを除いてGGのメンバーと一緒に海水浴に来ていた。（なお一部のメンバーとは牧野先生、レオナ、スプリンガー、トツプガンダーで、牧野先生とレオナはゴーカイガレオンのメンテの件と通信係として残り、トツプガンダーは少し落ち着きたいとのことで、スプリンガーは見たいテレビがあるからと言って残った。）

来て、準備運動の後、ヴィヴィオ、イクス、リオ、コロナの4人は海に入って遊んでいた。

カイク「元気だな・・・」

ティア「いいじゃないですか、元気な証拠ですし・・・」  
なのは「そうですよ、カイクさん。」

エリス「それよりカイク、日焼け止め塗ってくれない？」

フェイト「あ、あの、私も・・・塗ってください・・・」

ティア「あ！ずるいです、カイクさん、私も！」

なのは「そ、それなら私も！／／／」

カリム「あ、あの私も・・・／／／」

それを他のメンバーは面白そうに見ていた。

ジーク「相変わらず、モテるなカイクは。」

はやて「あ、あの、ジークさん、うちにも日焼け止めを塗ってもら

えへんかな？／／／」

ジーク「うん？ああ、いいぜ。」

凱「命、塗ってやるよ。」

命「ええ、お願い凱。」

華「護君、私も塗って・・・／／／」

護「うん、いいよ。」

スバル「いや、みんな仲がいいな。」

ティアナ「でも、あの中心には居たくはないわね、ただでさえ暑い  
のにもっと暑くなるし．．．」

ヴィータ「それは同感だな。」

シグナム「まあ、主が満足ならそれでいいが．．．」

シャマル「私達は私達でのんびりしましょう。」

シャツハ「そうですね。」

そう言つて、みんなのんびりしていた。

流星「スプリンガー達も来ればよかったのに．．．」

ウエンディ「仕方ないツスよ、全員で出かけるわけには行かないし

．．．」

ギンガ「まあ、その分お土産を買つていかないかね。」

チンク「ギンガの言つとおりだ。」

ノーヴェ「とにかく、残つたメンバーの分もあたし達が楽しまない

とね。」

デイエチ「そうだね。」

すずか「あ、あの～アイムさん．．．／／／」

アイム「うん？なんだ？」

アリサ「わ、私達と一緒に泳ぎませんか？」

アイム「ああ、良いが。」

そう言つて、二人はアイムを連れて海へ行つた。

セイン「いや、やつとのんびりできる。」

ちなみにヴィヴィオたちにはお目付け役としてオットー、デイド

が付いている。

オットー「陛下、あまり無茶はしないでくださいね。」

ヴィヴィオ「もう、陛下つて言うの禁止だつて言ったでしょう。」

デイド「ですが．．．」

カイル「ヴィヴィオ、言わせてやれ、この二人にとって敬意と好意

の表現だからな．．．」

ヴィヴィオ「うん、パパがそう言うなら．．．」

オットー「ありがとうございます、カイル様。」

カイル「...まあいいか...」

そんなこんなで、みんなそれぞれ最近の忙しさをリフレッシュしている。

ゲンヤ「いや、若い奴らは元気だね。」

リンディ「ふふふ、そうですね。」

クロノ「まあ、こんな日もたまには必要ですからね。」

エイミー「クロノ君、カレルとリエラの様子を見てくれない？」

クロノ「ああ、わかった。」

そう言つて、クロノは双子の面倒を見た。

その後、カイルはヴィヴィオに頼まれて、子供たちのトレーニングに始めた。

カイル「それじゃ、水中で戦いについてのトレーニングを始めるから。」

4人「...はい!」

エリオ「お願いします、お父さん。」

キャロ「頑張つてエリオ君。」

カイル「それじゃ、水中での戦いにつけてつけの対戦メンバーを出すからな。」

そう言つて、ゴーカイバツクルから複数のレンジャーキーを出した。ヴィヴィオ「パパ、それどうするの?」

カイル「こうするんだよ。」

そう言つて、カイルはレンジャーキーを握り締めた後、レンジャーキーを投げた、すると次の瞬間、レンジャーキーの戦士が実体化した。

バルシャーク「.....」

ガオブルー「.....」

ハリケンブルー「.....」

カイル「この人数だと、これくらいが妥当だろう...」

それにみんなは驚きを隠せなかった。

ジーク「お、おい!カイル、これはいったいどういことだ?」

カイル「慌てるな、これはレオナ曰く俺の能力の一つだそうだ、この間の一件で目覚めたらしい・・・」

ヴィヴィオ「すごい、パパ！」

ゲンヤ「あいつは本当に何でもありだな・・・」

カイル「とりあえず、本来の力とは程遠い状態に調整しておいたから、殺傷設定はないから全力でぶつかれ！」

4人「っはいいい！！」

エリオ「行きます！」

そう言つて、4人とエリオはカイルが召喚した3人の戦士に向かつていった。

エリオはハリケンブルーに向かつていき、ヴィヴィオとコロナはガオブルー、リオとイクスはバルシャークに向かつて行った。

ノーヴェ「お、やってるな。」

カイル「ノーヴェか、どうだお前もやるか？」

ノーヴェ「そうだな、旦那頼む、あたし達もレンジャージャケットを用意してもらったからな、できれば基となった戦士の戦い方を見たいしな・・・」

カイル「・・・わかった、それじゃまずは少し強い設定にして、お前のレンジャージャケットの基にしたマスクマンからレッドマスクと戦ってもらおう。」

ノーヴェ「OK！頼むぜ！」

そう言つて、カイルは今度はレッドマスクを召喚した。

レッドマスク「・・・」

ノーヴェ「行くぜ！」

そう言つて、ノーヴェはレッドマスクに向かつて行った。

チンク「すまないな、カイル、わざわざ・・・」

カイル「気にするな、それにノーヴェにはヴィヴィオのことで世話になつてるしな・・・」

デイエチ「それでカイルさんは、ヴィヴィオをどう見てます？」

カイル「・・・正直言つと格闘には向いてはいない、その理由は防

御も攻撃もそれほど高くはないからだ、それに「聖王の鎧」は力が解放されて俺が「キングテクター」として持っているわけだから、無いに等しいからな．．．」

なのは「そうですね、タイプ的には学者型の中後衛型ですしね。」カイク「だが、ヴィヴィオは視野が広くて距離を掴むのが上手い、さらにそれに合わせて反応速度がいい、だからこそヴィヴィオが格闘戦をやるのならダメージを受け流してのカウンター攻撃があいつの利点だ、だからこそ俺はあいつには正拳アクセルブローの格闘スタイルがいいと思ったわけだ．．．」

フェイト「さすがカイクさんですね、一番ヴィヴィオのことを見えますね。」

カイク「後は、クリスがヴィヴィオを上手く補助することができれば、いい感じになると思う．．．」

なのは「そうですね、カイクさんには適いませんね．．．ところで、お願いなんですけど、今度訓練の時、さっきのレンジャーキーで召喚した方々を使わせてもらっていいですか？」

カイク「ああ、本物でトレーニングしたほうが色々気づくこともあるだろうしな．．．」

そう言つて、カイクとなのははそんな話をしていた。

フィオネ「仲がいいですね。」

メルト「そうね、まあ私達は私達でのんびりしましょう。」

フィオネ「そうですね。」

そう言つて、二人はパラソルの中でのんびり横になっていた。

一方、ヴィヴィオたちは

ガオブルー「．．．．．」

ガオブルーは獣皇剣を使つて、ヴィヴィオとコロナを狙ってきた。

コロナ「は、速い！」

ヴィヴィオ「さすが、鮫をモチーフなってるだけはある、だけどパパから教えてもらったこの正拳アクセルブローは負けない！」

コロナ「私だつて、負けないよ！」

ヴィヴィオは接近戦でコロナはゴーレムでガオブルーに向かって行った。

バルシャーク「……………」

バルシャークが海の中で奇襲をかけてきた。

リオ「わ！危ない！」

イクス「さすがは力を抑えているとはいえ歴戦の勇士です……ですが負けません！」

リオ「イクスの言うとおりだよ。」

二人はバルシャークに向かって行った。

エリオ「はああ！」

ハリケンブルー「……………」

ハリケンブルーは地面から巨大な水柱を作り出して、エリオの攻撃をかわした。

エリオ「さすがです、でも負けませんよ！」

エリオはストラダーを構えなおして、ハリケンブルーに向かって行った。

レッドマスク「……………」

ノーヴェ「くっ……さすがは、空手の達人つてだけの事はあるわ……だからこそ、色々と学ぶことも多いつてもんだ！」

そう言つて、二人は激しい打ち合いになっていた。

そして、30分後、それぞれ戦つた相手を倒すことに成功した、その直後、レンジャーキーはカイムのところへ飛んでいった。

カイム「……30分か……思ったより早く終わったな……お疲れさん。」

ヴィヴィオ「パパ、疲れた。」

カイム「よしよし、今はやてたちを中心にバーベキュウの準備をしてるから少し休んでろ。」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言つて、ヴィヴィオはカイムの膝の上で寝そべった。

ヴィヴィオ「えへへへ」

ティア「（いいな．．．）」

エリス「（いいな．．．）」

なのは「（いいな．．．）」

フェイト「（いいな．．．）」

カリム「（いいな．．．）」

5人ともヴィヴィオをうらやましく見ていた。

流星「ところでカイク、追加で完成させたレンジャージャケットつて誰がどのスーパー戦隊の力をモデルにしてるんだ？」

シャーリー「それは私から説明します、まずノーヴェはさっきの言った通りマスクマンを基にして、チンクはメガレンジャーを基にして、デイエチとウエンディはティアナを同じでデカレンジャー、セインはボウケンジャー、オットーとディートはフラッシュマン、そしてシスターシャツハはハリケンジャーを基にしているんですよ。」

流星「へえ、そうなんだ。」

マリエル「皆さんの特性を見定めて、それに合わせて選んだです。」

カイク「まあ、使いこなせるかは本人達次第だな．．．」

そんな会話をしている中、昼食の準備が整い、みんなで食事で楽しく頂いて、つかの間の休息を味わった。

### 第53話 夏だ！海だ！特訓だ！？（後書き）

どうも、考えた結果この組み合わせでレンジャージャケットの選別になりました。あとカイクは、バスコのようにラッパラッター無くても自分の力だけでレンジャーキーの戦士を実体化させることが出来るようにしました、次回は準レギュラー的な位置で別のギャルゲーの話を持ってきて、さらに前に登場したスーパー戦隊も登場させて一緒に戦いますのでよろしくお願いします。

## 第54話 精霊？いえ太転依です（前書き）

どうも、今回はギャルゲーのタユタマのキャラを出します、時間軸的にはましろエンドのエピソードです、ちなみに主要メンバーは全員生きている設定にしました、さらにメタルダーはオーラパワーを体得したという設定にし、さらに独自の設定でカイクたちの強さを表示しました、さらにカイクは特別なランクをつけました。

## 第54話 精霊？いえ太転依です

海に来ていた一行は、現在旅館で各々のんびりと過ごしていた。

カイル「ふう、さっぱりした。」

ジーク「そうだな、レオナ達には悪いけど、たまにはのんびりさせてもらおうか。」

そう言つて、二人は温泉に浸かった後、マッサージチェアでのんびりしていた。

とそこへ、温泉から上がってきたヴィヴィオ達が来た。

ヴィヴィオ「パパ！」

ヴィヴィオはカイルに駆け寄り、カイルの膝の上に座った。

イクス「し、失礼します、お父様．．．／／／／」

そう言つて、イクスもジークの膝の上に座った。

その様子を微笑ましくみんな見ていた。

ノーヴェ「そういうえば、ずっと気になっていたんだけど旦那達って強さだとどれくらいのランクがあるんだ？」

ウエンディ「あたしも知りたいツス。」

リンディ「それなら、私達が教えてあげるわ、この間ね、ゴーカイジャーの皆さんには試験をもらつて、検査したの。」

チンク「そうだったのか？」

クロノ「ああ、正直大変だった．．．何しろ、35のスーパー戦隊の特殊な力を持っているからな、その関係で魔力も持っているけど、それ以外の力があるものだから、レアスキルとして測定したんだ．．．」

エイミー「お疲れ様、クロノ君。」

そう言つて、エイミーはクロノを労った。

デイエチ「それで、結果は？」

カリム「一応変身前と変身後を測定したんですが、このような結果になりました。」

アコース「正直ビックリするよ、特にカイムにはね・・・」  
そう言つて、7人の表を出した。

カイム ゴーカイキング

(変身前) S +

(変身後) S S S -

(キングテクターモード) EX

ジーク ゴーカイレッド

(変身前) A A A +

(変身後) S S +

フィオネ ゴーカイブルー

(変身前) A A +

(変身後) S S -

メルト ゴーカイイエロー

(変身前) A -

(変身後) S +

エリス ゴーカイグリーン

(変身前) A -

(変身後) S +

ティア ゴーカイピンク

(変身前) A -

(変身後) S +

アイム ゴーカイシルバー

(変身前) A A A +

(変身後) S S +

(ゴールドモード) S S S +

なおカイムに関しては、測定不能に付き、急遽このようなランクが付けられた。

その結果に結果を始めて知ったメンバーは言葉を失った。

スバル「す、凄い・・・」

ティアナ「ところで、カイムさんのこのEXってランクは・・・？」

フェイト「．．．これはね、カイクさんの力が強すぎて、正確に計測できなかったから、こうしたの．．．」

エリオ「お父さんが凄いのは知ってましたけど．．．」

キャロ「まさか、ここまで．．．」

ゲンヤ「俺も最初に見たときは、機械の故障じゃないかって思ったぜ。」

マリエル「まあ、私もこれ見たときは驚きましたから．．．」

シャーリー「でも、これは前代未聞でしたからね。」

はやて「せやな、なにせ管理局始まって以来やで、SSS以上の新しいランクが付けられるなんて．．．」

ヴィヴィオ「パパって、やっぱりって凄い！」

ヴィヴィオは自分のことのように喜び、それを見たカイクは膝の上に座っている自分の娘の頭をそつと優しく撫でた。

ギンガ「こうしていると、子供に優しいお父さんにしか見えませんがね．．．」

なのは「でも、だからこそ私やフェイトちゃん、そして騎士カリムもカイクさんのことが好きになっただよ．．．／／／」

そう言つて、フェイトとカリムも赤くなって、なのはの言葉に頷いた。

リオ「やっぱり、カイクおじさんはモテるよね。」

コロナ「でも、わかる気がする、これだけ素敵な人だもん。」

そう言つて、二人もカイクのことを褒めた。

シャツハ「しかし、カイクさんはもちろんのことですけど、それ以外の方々もすごいですよね。」

イクス「カイクおじ様もすごいですけど、やっぱりお父様もすごいです。」

ジーク「ははは、ありがとよ、イクス。」

そう言つて、ジークも膝の上に座っている娘の頭を撫でた。

凱「改めて考えると、ゴーカイジャーのメンバーはすごいな。」

命「そうね、変身できる能力があってもあの力を上手く使いこなせ

ないといけないしね。」

とその時、カイムの耳にどこからともなく、声が聞こえた。  
「????」（誰か来てくれ……）」

カイム「ん？」

流星「どうしたんだい、カイム？」

カイム「今、誰かが呼んだ気がしたんだが……」

アイルム「俺には聞こえなかったが……」

ジーク「俺もだ……」

なのは「気のせいじゃないですか？」

カイル「……気になる……ちよつと出かけてくる。」

そう言つて、カイルは立ち上がつて出かけようとした。

流星「待つてくれ、僕も行こう。」

エリス「私も行くわ。」

ティア「あ、私も。」

ヴィヴィオ「パパ、私も一緒に行つてもいい？」

カイル「……いい子にしてるのならいいぞ。」

ヴィヴィオ「うん！」

なのは「ヴィヴィオと一緒に行くのでしたら、私も一緒に行きます。」

カイル「わかつた、それじゃジーク、はやて後は頼む。」

ジーク「ああ、任せろ。」

はやて「カイルさんたちも気をつけて……」

そう言つて、カイルたちは、流星が運転するメタルチャージャーMk-?で出かけた。（ちなみに見た目は大人数用のワゴン車でカラーと機能及び燃料は初代と同じであるため、エネルギー補充の必要はない。）

カイル「しかし、流星のこのメタルチャージャーのおかげで助かつた。」

流星「牧野先生達を作ってくれたこのメタルチャージャーは大人数の人を乗せられるからね。」

エリス「ホントに便利よね。」

流星「それにしても、カイムの言うとおりだったね、さつきメタルチャージャーのセンサーを調べたら、普通じゃないエネルギー数値を計測したんだから……」

カイム「となると、何かがあるな……」

ティア「そうですね……」

ヴィヴィオ「あれ？」

なのは「どうしたの、ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「あっちの方で、何か光ったような気がして……」

カイム「流星！」

流星「ああ、みんなしっかり掴まっててくれ。」

そう言つて、メタルチャージャーMK-?の翼を出して、そこへ急行した。

とある場所

骨のシタリ「しかし、まさかあんたらがまだ生きていたとはね……」

ドウコク「まあ、不老不死の連中だ、生きていても不思議じゃねえがな……久しぶりだな、八衢の末裔、そして綺久羅美守毘売……」

裕理「文瑠達が倒した筈の血祭ドウコクがどうして……」

ましる「裕理さん、いくら私達でもドウコク相手では……」

裕理「……ましる、僕が囷になるからその隙に……」

ましる「何を言っているんですか！私達は夫婦ですよ、夫を置いて行けるわけがないじゃないですか！」

裕理「ましる……」

ドウコク「仲がいいようだが……そろそろ消えてもらおうか！」

そう言つて、ドウコクが刀を振りかざそうとしたその時、カイムがキングソードベガで受け止めた。

ドウコク「て、てめえはカイムか!?!」

カイク「．．．久しぶりだな、ドウコク．．．」

遅れて、それ以外のメンバーが来た。

なのは「大丈夫ですか？」

ましろ「ええ、大丈夫です．．．」

裕理「あなたたちはいつたい．．．」

カイク「行くぞ、みんな！」

カイク・エリス・ティア「『豪快チエンジ！』」

モバイレーツ「『ゴーカイジャー！』」

流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

なのは「レンジャージャケッツ！セツトアップ！」

ヴィヴィオ「クリス、セツトアップ！」

ヴィヴィオは大人モードになった。

ヴィヴィオ「さらに豪快チエンジ！」

モバイレーツ「キバレンジャー！」

その姿を見た、裕理とましろは驚きを隠せなかった。

裕理「『ゴーカイジャー！』？」

ましろ「でも、ゴーカイジャーはもう500年以上前に．．．」

裕理「それに、あの女の人の変身の仕方はまるで魔法少女のようだし、それにあの男の人は機械の身体になるなんて．．．」

そんな驚いている二人を尻目にカイクたちは名乗りを上げた。

カイク「『ゴーカイキング！』」

エリス「『ゴーカイグリーン！』」

ティア「『ゴーカイピンク！』」

ヴィヴィオ「吼新星、キバレンジャー！」

ドウコク「スカルソルジャーども！」

スカルソルジャー「『ガガガガガ！』」

カイク「派手に行くぞ！」

そう言っ、カイクとメタルダーはドウコクへ、なのは、ヴィヴィ

オはシタリへ、ティアとエリスはスカルソルジャーに向かって行った。

エリス「面倒ね、ティア、これで行くわよ。」

ティア「はい、エリスさん。」

そう言つて、別のレンジャーキーを取り出した。

エリス・ティア「豪快チエンジ！」

モバイレーツ「ゲキレンジャー！」

エリス「激獣ウルフ拳、ゲキワザ、輪輪拳！」

ティア「サイブレードフィンガー、ゲキワザ、捻捻弾！」

スカルソルジャー「ガガガガガ！」

二人はスカルソルジャーを全滅させた。

シタリ「あたしも、まだ若いもんには負けないよ、くらいな！」

そう言つて、シタリは触手でヴィヴィオの身体に巻きつけて身動きを封じた。

なのは「ヴィヴィオ!？」

ヴィヴィオ「くっ．．．負けないもん!白虎真剣！」

白虎真剣「気力技、吼新星・乱れやまびこ！」

ヴィヴィオ「レッツゴー!やまびこバンド！」

ヴィヴィオは、ハードロック系の音楽の音波攻撃を使いそれがシタリに炸裂して、ヴィヴィオの拘束が解除された。

シタリ「くっ．．．小娘かと思つたら、やるじゃないかい。」

なのは「ヴィヴィオ、大丈夫？」

ヴィヴィオ「うん、ありがとうなのはママ。」

なのは「今度は私だよ、クロスファイアシュート！」

シタリ「くっ．．．!!」

二人は連携して、シタリと戦っていた。

カイル「キングソードベガ！」

ドウコク「ふん！」

一進一退の攻防を繰り返している。

ドウコク「強くなつたな．．．カイル！」

カイル「相変わらず、とんでもない強さだな。」

メタルダー「僕もいることを忘れるな！」

そう言つて、メタルダーもカイルと連携してドウコクと戦っている。

ドウコク「小賢しい、D・ホムラコギ！D・マリゴモリ！」

D・ホムラコギ「へい！」

D・マリゴモリ「え、行くの、まあいいけどね・・・」

そう言つて、新たに復活させた妖魔アヤカシのD・ホムラコギとD・マリゴモリを差し向けた。

メタルダー「こいつらは僕がやる、カイルはドウコクを・・・」

カイル「わかった。」

そう言つて、二手に分かれて、戦っていた。

カイル「なぜあの二人を襲う!？」

ドウコク「その様子じゃ、どうやら知らねえ様だな、特別に教えてやる、あの二人は人間じゃねえ、太転依と呼ばれる存在と神通力によつて不老不死になつた特別な人間だ！」

なのは「太転依？」

エリス「なんのそれ？」

メタルダー「たしか、悠久の時を生きる霊的存在だと、牧野先生の持つていた資料にあつたな・・・」

裕理「牧野先生!？」

ましろ「牧野先生がいらつしやるのですか？」

ティア「あなた達は、牧野先生たちを知っているのですか？」

とその時、突然、7つの光が現れた、そこにいたのはなんとシンケンジャーのメンバーだった。

カイル「先輩！」

裕理「丈瑠！源太！」

ドウコク「シンケンジャー!？」

丈瑠「大丈夫か、裕理、ましろ。」

源太「よお、裕ちゃん、それにましろちゃん。」

ましろ「どうして、丈瑠さんたちはあの時・・・」

丈瑠「詳しい話は後だ。」

薫「丈瑠の言うとおりだ、カイク、私達のレンジャーキーを！  
カイク「わかった！」

そう言つて、シンケンジャーレンジャーキーをシンケンジャーのメンバーに向かつて投げた。

丈瑠「行くぞ！」

シンケンジャー「シヨドウフォン、一筆奏上！」

源太「スシチエンジャー、一貫献上！」

薫「シンケンレッド、志葉薫！」

丈瑠「シンケンレッド、志葉丈瑠！」

流ノ介「同じくブルー、池波流ノ介！」

茉莉「同じくピンク、白石茉莉！」

千明「同じくグリーン、谷千明！」

ことは「同じくイエロー、花織ことは！」

源太「同じくゴールド、梅盛源太！」

薫・丈瑠「天下御免の侍戦隊……」

シンケンジャー「シンケンジャー！！！！」

薫・丈瑠「参る！！」

シタリ「まさか、シンケンジャーとまた会うとはね……」

丈瑠「相手がドウコクたちなら、手加減無用だな。」

そう言つて、丈瑠は恐竜ディスクを使い、ハイパーシンケンレッドになり、薫を始めとしたメンバーはインロウマルを使い、スーパーシンケンジャーになった。

千明「源ちゃんも源ちゃん専用のインロウマルのおかげでこのモードになれるからな。」

源太「おうよ、行くぜ！」

そう言つて、茉莉とことはなのはたとヴィヴィオの加勢に行き、流ノ介、千明、源太はメタルダーの加勢に行き、丈瑠と薫はカイクの加勢に行き、さらにティアとエリスもメタルダーの加勢に入った。

丈瑠・薫「はあ！！」

ドウコク「くつ．．．以前とは比べ物にもならねえ程の強さだな．．．」

カイル「俺もいることを忘れるな、レンジャーキーセット！」

ベガ「ファイナルウェーブ！」

カイル「はあ！ベガスラッシュュ！」

ドウコク「ぐあああ！」

ドウコクはカイルの一撃で吹き飛ばされた。

シタリ「ドウコク、どうやら潮時みたいだね．．．」

ドウコク「仕方がねえ、おいてめえら、後は任せた。」

D・ホムラコギ「へい！」

D・マリゴモリ「うん、わかったよ．．．」

そう言つて、ドウコクとシタリは撤退した。その代わりにスカルナイトが現れた。

スカルナイト「カラカラカラ！」

カイル「逃げられたか．．．」

薫「今は、あのアヤカシを倒そう。」

丈瑠「はい、母上。」

そう言つて、カイルたちも残つた雑魚に向かつて行つた。

D・マリゴモリ「お前ら、不幸になつちやえ！」

そう言つて、丸くなつて突つ込んできた。

流ノ介・千明「うあああ！」

エリス「大丈夫ですか!？」

源太「何なんだよ、あいつは．．．」

千明「相変わらず、トリツキーな奴だな．．．」

流ノ介「だが、負けられるか！」

メタルダー「ここは僕に任せろ。」

そう言つと、メタルダーは精神を集中させた、するとメタルダーの身体からオーラパワーが溢れ出た。

なのは「これは、オーラパワー!？」

ヴィヴィオ「どうして?」

カイク「驚くことはないさ、マスクマンのロボットのギャラクシーロボも鍛錬によってオーラパワーを体得できたんだ、流星のようなこれだけ精神力の高いロボットだ、体得で出来ていてもおかしくはないさ……」

メタルダー「レーザーアーム！」

メタルダーはレーザーアームを丸くなったマリゴモリに叩き込んだ。D・マリゴモリ「ぐああああ！」

なんとマリゴモリの丸くなった身体に傷を与えた。

流ノ介「なんと!？」

千明「嘘だろう!」

茉莉「私達でも連携して、やっと破ったのに……」

ことは「す、すごい……」

他のメンバーが驚いているのを尻目に他のメンバーはスカルナイトを片付けていった。

丈瑠「キョウリユウマル・天地一閃！」

薫「スーパージンケンマル、真・火炎の舞！」

カイク「獅子咆哮波！」

エリス・ティア「ゴーカイブラスト！」

なのは「エクセリオンバスター！」

ヴィヴィオ「白虎一閃！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

D・ホムラコギ「スカルナイトもやられたか……マリゴモリ、撤退するぞ。」

D・マリゴモリ「今度会ったら、必ず、お前ら不幸にする！」

そう言い残して、2体のアヤカシは撤退した。

丈瑠「逃げたか……」

ティア「それによりもどうして、先輩達が？」

薫「それは、後で話そう、それよりも久しぶりだな、泉戸裕理、泉戸ましろ……」

ましろ「薫さん……」

源太「裕ちゃんも久しぶりだな。」

丈瑠「また会えて嬉しいぞ、裕理。」

裕理「丈瑠、源太……」

茉莉「再会を懐かしむのは後にして、とりあえず話ができる場所へ移動しよう。」

エリス「そうね、その方がいいわね。」

そう言つて、全員変身を解除し、全員で旅館へ戻った、すると見覚えのない人物たちがいた。

裕理「みんな！」

美冬「裕理、どうやら無事のようだな……」

アメリカ「まったく、念話が聞こえたから急いで待ち合わせ場所に行こうとしたのに……」

ゆみな「まあ、お兄ちゃんたちが無事でよかったです……」

ましる「ご心配おかけしました……」

アリサ「それにしても、まさか幻の如月財閥の名誉会長に会えるとは思わなかったな……」

すずか「しかも、神通力で不老不死になっているなんてね……」

美冬「私達は、大切な友人を守りたいと思っただけだ……」

鶴「その通りじゃ、八衢も白い獣も大切な友達じゃからな……」

応龍「やれやれ、手間のかかる奴らだぜ……」

カイル「……ジーク、彼らは？」

ジーク「ああ、実は……」

ジークはカイルたちが出て行った後にここで裕理たちと待ち合わせをしていた仲間だということを知った。

美冬「紹介が遅れて申し訳ない、私は如月美冬、如月財閥の名誉会長を務めている。」

アメリカ「あたしは河合アメリカだよ、よろしくねゴーカイジャー。」

ゆみな「私は小鳥遊ゆみなです。」

鶴「わしは鶴じゃ、白い獣と同じ太転依じゃ。」

応龍「……俺は応龍だ。」

アメリカ「こら！ヨリトモ、ちゃんと挨拶しなさい！」

応龍「あゝ、うるせねえな！」

裕理「すみません、いつもああなので・・・」

ゆみな「あとこちらが鳳凰さんたちです。」

そう言つて、ゆみなの頭の上に乗っていた2羽の鳥が挨拶をした。

その後、こちらのメンバーも自己紹介をした。

ジーク「しかしよ、まさか先輩達も一緒だとは思わなかったぜ・・・」

丈瑠「裕理たちの声が聞こえたからな・・・」

フィオネ「丈瑠先輩のお知り合いなんですか？」

源太「ああ、俺と丈ちゃん、裕ちゃんとは幼馴染だから・・・」

メルト「え！？そうなの。」

裕理「ええ、僕は色々あつて、不老不死になつた上に、妖魔との戦

いがあつたから丈瑠たちとはもう会うことはないと思つたけど・・・

でも、再会できて嬉しいな。」

アメリカ「しっかし、タケもゲンも全然変わつてないな。」

丈瑠「当たり前だ、俺達は別の世界で特別な存在になつているんだ

からな・・・」

源太「それよりもアメリカやゆみなちゃんたちまで生きてるとは思わ

なかつたぜ。」

薫「まあ、つもり話もあるだろうが、とにかく裕理たちを狙つてき

た目的が知りたいが・・・」

茉莉「とりあえず、それがわかるまで、私達も一緒にいさせてもら

うから。」

アイム「感謝する、先輩。」

リンディ「そうですか、それじゃ、今この旅館は私達の貸切なので、

好きに休んでください。」

薫「感謝する。」

とそこへ、遅れて日下部彦馬、丹波歳三が来た。

丹波「姫！殿！」

彦馬「遅くなりました。」

薫「丹波、日下部……」

丈瑠「じい……」

カリム「あの、この人達は？」

丈瑠「ああ、この二人は、志葉家の家臣だ。」

丹波「初めまして、私は丹波と申します。」

彦馬「始めまして、私は日下部彦馬と申します。」

はやて「これはまたご丁寧……」

そう言つて、はやてを始めとしたメンバーは挨拶をした。

丈瑠「じい、今回のことが解決するまで、こいつらと一緒に行動するぞ。」

彦馬「わかりました。」

丹波「短い間ではございますが、どうかよろしくお願いします。」

凱「いえ、こちらこそ。」

護「色々と話を聞かせてください、シンケンジャーの方々。」

千明「おう、任せろ。」

流ノ介「千明！」

ことは「まあ、流さん。」

裕理「お久しぶりです、彦馬さん。」

彦馬「おお、裕理か、立派になったな……それと相変わらず、夫婦仲がいいようだな……」

ましろ「い、いえ……ノノノ」

ましろは真つ赤になつて嬉しそうな顔をした。

源太「それよりもこつちも色々と話したいことがあるな。」

丈瑠「そうだな、それじゃ今日のところは一旦、自由にして明日また話し合おう。」

カイル「わかった。」

シグナム「（後で、手合わせしてもらいたいものだな……）」

ヴィータ「シグナムの奴、いつもの奴が始まったな……」

アギト「やれやれ。」

「シャマル」まあまあ。

こうして、シンケンジャーと裕理たちはゴージャイジャー達と行動を共にすることになった。

第54話 精霊？いえ太転依です（後書き）

どうも、今回の話は二つに分けました、ちなみにシンケンジャーと裕理たちは知り合いという設定にしました。次回はこの続きの話題になりますのでシンケンジャーのメンバーも引き続き出てきますので、よろしく願います。

**第55話 海賊と侍、いざ派手に参る！（前書き）**

今回は少し早めに更新できました、前回の続きで、今回はナンバーズのオリジナルの技や武器、さらに隊長陣のスーパードモードが出てきます、さらに妖魔の3巨頭のうちの一人の子供が登場し、それが新幹部になります、そして今回からスカルナイトよりも上位の強力な戦闘兵が出てきます。

## 第55話 海賊と侍、いざ派手に参る！

### 妖魔の居城

シタリ「面目ないねえ、ルシフェル．．．」

ルシフェル「気にするな、それに奴らをあの土地から遠ざけることが出来たのだ、そのおかげで作戦が成功しやすい。」

ドウコク「ということは、あの辺りの太転依の連中を回収して、さらならアヤカシを誕生させることが出来るわけだな。」

ルシフェル「ああ、今回はご苦労だったドウコク。」

ドウコク「気にするな、お前とアスラとは付き合いが長いからな．．．」

ルシフェル「さて、後はアスラが回収しているはずだからな、こちらにはホムラロギとマリゴモリの強化を行うか．．．」

D・マリゴモリ「え、またなんかするの？」

シタリ「文句言うんじゃないよ、またやられたいのかい？」

D・マリゴモリ「わかったよ．．．」

ルシフェル「それと今度出撃する時は、このスカルキラーを持って行ってくれ。」

そう言うと、死神の風貌をした集団が現れた。

シタリ「これは？」

ルシフェル「これは、我ら上級妖魔配下の親衛隊で戦闘兵の中で最高位の兵だ、下手な妖魔どもより強い．．．」

ドウコク「確かに雑魚にしては異常な力を感じるぜ．．．」

スカルキラー「シャアアア！ルシフェル様、いつでもご命令を！」

シタリ「し、喋るのかい、こいつらは？」

ルシフェル「言ったはずだ、こいつらはスカルソルジャーとスカルナイトどもとは、格が違うんだ．．．」

ドウコク「．．．なるほどな．．．こいつは使えそうだな．．．」

シタリ「こりゃいい、まだこんな戦力を持っていたなんて。」

ルシフェル「ふ．．．切り札というものは取っておくものだ．．．  
あと隠し玉もな．．．」  
そう言つて、ルシフェルは笑みを浮かべた。

## 旅館

前回の一件の後、みんなで個々にのんびりしていた。

丈瑠「しかし、500年近くたってからようやく隠居か．．．」

アメリカ「ホント、ユウとまるまるは真面目過ぎだつて。」

丈瑠「お前は、逆にもう少し真面目になったほうがいいと思うがな．．．」

裕理「ははは、それは言えてる。」

アメリカ「笑うな！それとタケ、あんたもしばらく見ないうちに冗談を言うようになったわね！」

丈瑠「ふ．．．流ノ介たちのおかげだな．．．」

源太「お待たせ、ほら久しぶりの俺特製の寿司だぜ。」

ましる「まあ、お寿司ですか。」

丈瑠「どうしたんだ、源太これは？」

源太「いや、ちよいと厨房を借りて作ったんだ、それでどうだ？」

アメリカ「．．．普通だね、相変わらず。」

源太「（ガク）」

裕理「確かに普通だな。」

丈瑠「まあ、源太らしいがな。」

源太「おい丈ちゃん、裕ちゃん、そりゃないぜ。」

ゆみな「まあまあ、源太さん。」

そう言つて、ゆみは源太をフォローした。

美冬「しかし、丈瑠達もホントに変わっていなくて懐かしいな。」

茉莉「美冬さんも元気そうで何よりです。」

ことは「ホンマやは、ところでカームはんは？」

ジーク「ああ、あいつは子供たちと一緒に基礎練習の真っ最中だ。」

そう言つと、カームたちは魔法の箱庭の中でトレーニングをしてい

た。

カイク「それじゃ、最後は組み手だ、ヴィヴィオはゲキチョッパー、リオはリュウレンジャー、コロナはマジレッド、イクスはテンマレンジャーだ。」

4人「はい！（うん！）」

カイク「それじゃ、行くぞ！」

そう言つて、カイクはレンジャーキーを握り締めてから、それらを投げて実体化させた。

ゲキチョッパー「……………」

リュウレンジャー「……………」

マジレッド「……………」

テンマレンジャー「……………」

ヴィヴィオ「行くよ！」

そう言つて、4人はそれぞれの相手に向かつて行つた。

カイク「ヴィヴィオ、ゲキチョッパーの激気研鑽は激気をダイヤモンドのように硬く練りこみ、鋭く研ぎ澄ますことだ、ゲキチョッパーの動きから激気研鑽のヒントを見つけろ。」

ヴィヴィオ「うん、わかつたパパ！」

なのは「コロナ、マジレッドの魔法は練成魔法が基本だから、ゴーレムの練成が基本のコロナはこのマジレッドの魔法の使い方をよく覚えてね。」

コロナ「はい！」

ノーヴェ「リオ、リュウレンジャーは拳法の達人だ、だから威力もある上に無駄がない、だからリュウレンジャーの動きをよく見て、自分の格闘技に参考になるものは積極的に取り入れる。」

リオ「はい！」

イクス「……………動きにくい……………」

イクスはテンマレンジャーの天重星・重力逆転破で動きが鈍くなつた。

ジーク「イクス、重力がかなりきついだろうが、その状態だからこ

そ、敵の動きを無駄なく動かないと相手の攻撃を避けることは出来ねえ、それを自分の肌で感じる。」

ジークは箱庭の外からイクスにアドバイスをした。

イクス「はい、お父様！」

そう言つて、4人は1時間近くトレーニングをして、温泉に入つてリフレッシュしていた。

カイクム「ふう〜。」

フェイト「お疲れ様です。」

フェイトはカイクムに飲み物を渡した。

カイクム「ああ、ありがとうございます。」

千明「お前もよくやるよな、あの戦いの後だつてのに・・・」

流ノ介「だが、その様子だとまだ余裕そうだな、我々も見習わなければな・・・」

薫「そうだな、それとクルーガー署長から話を聞いたが、カイクムお前の剣の腕は相当なものだ、おそらく私や丈瑠でも歯が立たないだろうな・・・」

丈瑠「たしかに・・・カイクムの剣捌きは、もはや俺達のみならず、クルーガー署長や他の歴代戦士でも歯が立たないだろうな、しかし、だからこそ頼もしい存在でもある。」

裕理「そうだな、あのドウコク相手に互角に戦える人がいるなんて思いもよらなかつたよ。」

とそこへ、温泉から出てきたヴィヴィオ、なのは、イクス、ノーヴェが来た。

ヴィヴィオ「パパ！」

そう言つてヴィヴィオはカイクムのところへ駆け寄り、カイクムはそんなヴィヴィオの頭を優しく撫でた。

ヴィヴィオ「えへへ〜」

それを見たイクスは羨ましそうな顔をした、それに気づいたジークもイクスの頭を撫でた。

イクス「あ、ありがとうございます、お父様・・・／／／」

茉莉「．．．いいお父さんたちだね。」

ことは「ホンマやね。」

カイル「そういえば、リオとコロナはどうしたんだ？」

なのは「今、家のほうに連絡してます。」

カイル「そうか。」

彦馬「殿、姫、夜も深けてきました、あと少ししたらお休みなられた方がよろしいかと．．．」

薫「そうだな。」

丹波「それでは、私達は寢床の準備を手伝ってきます．．．」

文瑠「ああ、頼む。」

そう言つて、彦馬、丹波は黒子と一緒に従業員の手伝いをしにいった。

その後、リオとコロナも来て、少し時間を潰した後、みんな休息を取った。

#### 旧葦原町

アスラ「よし、これで充分だな．．．ん？誰だ？」

太転依の霊を回収していたアスラの前に一人の女性が現れた。

「お久しぶりです、アスラおじ様．．．」

アスラ「お前は！？．．．そうか、お前も来たのか、久しぶりだな．

．．．ルシファー．．．」

ルシファー「おじ様やお父様が苦戦なさっていると聞いたものですから．．．」

アスラ「お前が来たとは、心強い．．．一旦ルシフェルの元へ引き上げるぞ．．．」

ルシファー「はい．．．私もお父様に見てもらいたいものがありますので．．．」

そう言つて、二人は引き上げて行った。

そして、次の日、メンバー一同旧葦原町に来ていた。

ジーク「ここが、あんたらの故郷か．．．」

ましろ「ええ、ここはかつて葦原町と呼ばれていました．．．」

カイクム「．．．妙だな．．．昨日と雰囲気が違う気がする．．．」

エリス「どういうこと？」

裕理「たしかに．．．太転依の力が弱い．．．」

丈瑠「まさか．．．裕理たちを襲った理由は．．．」

とそこへ、ルシフェルとシタリが現れた。

シタリ「また会ったね、シンケンジャー、ゴーカイジャー、それに魔導師ども。」

薫「ルシフェル！」

源太「それに骨のシタリも！」

ルシフェル「こうして顔をあわせるのもは久しぶりだな．．．シンケンジャー．．．」

丈瑠「こつちもな．．．さてはお前、太転依を捕獲するのが目的だったようだな．．．」

ルシフェル「さすがはシンケンレッドだ、よくわかったな、そうだな奴らは霊体だけあって、色々と利用価値がある．．．」

アメリカ「そんなことのために．．．」

美冬「相変わらずだな．．．」

ゆみな「これ以上、太転依の皆さんを利用させません。」

薫「ゆみなの言うとおりだ、今度こそ貴様を倒す！」

ルシフェル「出来るかな．．．スカルソルジャー、スカルナイト、スカルキラー共！」

スカルソルジャー「ガガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

スカルキラー「シャアアア！」

ヴィータ「ち、ちよつと待て、あの死神みたいなのは何のなんだ！？」

凱「見た事がない．．．」

千明「ちよつと待て、あいつ、スカルキラーまで出してきやがった

のか！」

エリス「知ってるの？」

流ノ介「あいつは上級妖魔直属の親衛隊兵．．．つまり戦闘兵の最高位の兵だ、下手な妖魔よりも遙かに強い．．．」

ルシフェル「それだけではない．．．」

そう言うと、ルシフェルの後ろからアスラと共に一人の女性が現れた。

アスラ「シンケンジャーども．．．」

茉莉「アスラまで！」

ことは「それに、あの女の人は、まさか!？」

ルシファー「久しぶりね、シンケンジャー．．．そして、ゴーカイジャーに魔導師の皆さんは始めましてね。」

鶴「まさか、ルシファーじゃと！」

応龍「あの野郎まで来やがったのか．．．」

なのは「あの女性はいったい誰なんですか？」

丈瑠「．．．あいつは、ルシフェルの娘だ．．．」

全員「「「ええ!？」」「」」

全員驚き隠せなかった。

薫「ああ、しかもルシフェルの才能をそのまま受け継いだ恐ろしい奴だ．．．」

シタリ「それじゃ、さっそく相手をしてもらおうよ、行っておいで。」

D・ホムラコギ「お呼びで！」

D・マリゴモリ「今度こそ、お前ら不幸にしてやる。」

ルシファー「お父様、私の作ったものも出撃させますわ。」

ルシフェル「ああ、わかった。」

ルシファー「さあ行きなさい、G・オーガ！」

G・オーガ「はは！」

そう言うと、メタリックボディの巨人が出てきた。

ティアナ「ちよつと、なんなのあいつ!？」

ルシファー「これが私が新たに開発した機械を取り入れた改造妖魔

獣よ。」

フェイト「．．．父親と同じで、命をここまで弄ぶなんて．．．」

ルシファー「黙りなさい！お父様の侮辱は絶対許さないわ！」

そう言つて、戦闘態勢に入ろうとしたがルシフェルが止めた。

ルシファー「お父様？」

ルシフェル「やめる、お前は私にとって大切な存在だ、軽々しい真似はよせ．．．」

ルシファー「．．．はい．．．」

そう言つて、ルシファーはルシフェルの言葉に従つた。

アスラ「ルシファー、お前はまだ鎧の調整が終わっていない、無茶はするな．．．ここはこいつらも行かせる．．．」

そう言つて、アンチレンジャーキーから4つのキーを出して、それらを杖にセットして実体化させた。

アクマロ「．．．．．」

不破十蔵「．．．．．」

ダゴン「．．．．．」

ワイバーン「．．．．．」

薫「どうやら．．．やるしかないようだな．．．」

裕理「今回は僕達も万全だ、一緒に戦わせてもらう。」

丈瑠「ああ、行くぞ！」

ジーク「当然だぜ！」

そう言つと、全メンバーの前に黒子とワドルディが現れて、一瞬で全員の着替えを済ませた。

凱・護「「アーマー、セットアップ！」」

ゴーカイジャー「「「豪快チェンジ！」」」

モバイレッツ「「ゴーカイジャー！」」

ゴーカイセルラー「「ゴーカイジャー！」」

シンケンジャー「「シヨドウフォン、一筆奏上！」」

源太「「スシチェンジャー、一貫献上！」」

ヴィヴィオ達4人「「「セットアップ！」」」

ヴィヴィオ達4人「「豪快チエンジー!!」」

モバイレーツ「デカレンジャー!」

モバイレーツ「ダイレンジャー!」

モバイレーツ「マジレンジャー!」

モバイレーツ「ゲキレンジャー!」

なのは・フェイト・はやて「レンジャージャケット!セットアップ!」

シグナム・ヴィータ「レンジャージャケット!セットアップ!」  
フォワード陣その他「「レンジャージャケット!セットアップ!」」

流星「怒る!」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

ヴィヴィオ「無法な悪を迎えうち、恐怖の闇をぶち破る! 夜明けの刑事、デカブレイク!」

リオ「リュウレンジャー、天火星!」

コロナ「燃える炎のエLEMENT!赤の魔法使い、マジレッド!」

イクス「身体に漲る、無限の力、アンブレイカブル・ボディ!ゲキレッド!」

カイク「ゴーカイキング!」

ジーク「ゴーカイレッド!」

フィオネ「ゴーカイブルー!」

メルト「ゴーカイイエロー!」

エリス「ゴーカイグリーン!」

ティア「ゴーカイピンク!」

アイム「ゴーカイシルバー!」

カイク・ジーク「海賊戦隊!」

ゴーカイジャー「「ゴーカイジャー!」」

薫「シンケンレッド、志葉薫!」

丈瑠「シンケンレッド、志葉丈瑠!」

流ノ介「同じくブルー、池波流ノ介！」  
茉莉「同じくピンク、白石茉莉！」  
千明「同じくグリーン、谷千明！」  
ことは「同じくイエロー、花織ことは！」  
源太「同じくゴールド、梅盛源太！」  
薫・丈瑠「天下御免の侍戦隊．．．」  
シンケンジャー「シンケンジャー！！」  
シンケンジャー「いざ．．．」  
ゴークアイジャー「派手に．．．」  
ゴークアイジャー・シンケンジャー「参る！！」  
そう言つて、全員各個撃破に向かつて行つた。

丈瑠・薫「烈火大斬刀、百火繚乱！」  
ジーク「ゴークアイスラッシュ！」  
アクマロ「．．．！！」  
不破十蔵「．．．！！」  
ジーク「やるじゃねえか。」  
薫「よく言つ。」  
丈瑠「お前だつて相当なもんだ。」

フィオネ・エリス「豪快チェンジ！」  
モバイレーツ「ギンガマン！」  
流ノ介「ウォーターアロー、明鏡止水！」  
千明「ウツドスピア、大木晩成！」  
フィオネ「激流一刀！」  
エリス「疾風一陣！」  
ダゴン「．．．！！」  
フィオネ「やりましたね。」  
流ノ介「そつちもお見事。」  
千明「ああ、やるな。」

エリス「そつちもね。」

メルト・ティア「豪快チエンジ！」

モバイレーツ「オーレンジャー！」

茉莉「ヘブンファン、迫力満天！」

ことは「ランドスライサー、奮闘土力！」

メルト「光速スプラッシュユイリュージョン！」

ティア「閃光ミラクル気功弾！」

ワイバーン「……！」

茉莉「やつぱり、すごいね。」

ことは「ホンマやね、茉莉ちゃん。」

メルト「それを言うなら先輩達もね。」

ティア「ありがとうございます、先輩。」

源太「久しぶりだな、ダイゴヨウ。」

ダイゴヨウ「おう、親分、存分に行きましょう！」

アイム「行くぞ、先輩、豪快チエンジ！」

ゴーカイセルラー「アバレンジャー！」

源太「おうよ、ダイゴヨウ！」

ダイゴヨウ「秘伝ディスク乱れうち！」

アイム「はああ、ウイングペンタクト！」

スカルソルジャー「ガガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

源太「やったな。」

アイム「ああ……」

源太「なんだよ、テンションの低い奴だな。」

アイム「（あんたのテンションが高いだけだろう……）」

G・オーガ「食らえ！」

そう言っつて、G・オーガは衝撃波をフォワード陣にぶつけてきた。

フワード陣「きゃあああ！」

裕理「……………」

裕理は意識を集中させて、神通力を使いG・オーガを攻撃した。

G・オーガ「くっ……こ、こいつ、妙なものを使いやる……」  
「ましろ「大丈夫ですか？」

スバル「は、はい、ありがとうございます……」

ティアナ「助けてもらってるばかりじゃ、カッコがつかないでしょ、みんな行くわよ！」

エリオ「はい！」

キャロ「行きましょう！」

ギンガ「私も行くわ！」

ノーヴェ「あたしにも忘れるなよ！」

スバル「気力・ディバインバスター！」

ギンガ「リボルバーギムレット」

ティアナ「クロスミラージュ、ハイブリッドモード！マグナムエク  
スキューション！」

エリオ「ストラーダスラッシュ！」

キャロ「ジルマ・ジー・マジカ、フリード・ブルーシャイニングア  
タック！」

フリード「キュクルー！」

G・オーガ「ぐああああ！」

G・オーガは思いつき吹き飛ばされたが、立ち上がってきた。

ティアナ「嘘、あれだけの攻撃を受けたのに……」

ルシファア「そりゃ、私が作った改造妖魔だもの……そいつに  
はガジェットに装備されたものより強力なAMFが搭載されてい  
るんだから……」

スバル「AMFが！？」

なのは「この妖魔獣に！？」

ルシファア「驚くことはないわ、元々この基礎を作ったのは私だけ  
らね。」

フェイト「何ですって!?!」

ルシファア「スーパー戦隊の力を使っているから効いてるけど、以前の状態だったら、あなた達の魔法じゃまったく効かなかったわよ。」

はやて「...なるほどな、ならうちら隊長陣の奥の手を使わせてもらうわ...」

シグナム「はい、主。」

ヴィータ「ようやく、使えるのかよ!」

なのは・フェイト・はやて「「スーパーモード移行!」」

シグナム・ヴィータ「「スーパーモード移行!」」

デバイス「「イエス!」」

そう言うと、なのは、フェイト、はやての3人はゴセイジャーのスーパーゴセイジャーさながらの黄金のアーマーを纏い、シグナムはスーパーシンケンジャーと同じように羽織を纏った状態の姿で、ヴィータはアバレッドのアバレマックスモードを髭髯とさせるようなの姿になった。

アスラ「な、なんだ、あれは!?!」

ルシフェル「...まさか、あのようなものまであったとは...」

ルシファア「お父様達が苦戦するのも納得しました...」

ノーヴェ「え!?!おい、スバル、あれはなんだ?」

スバル「あれはね、隊長たち専用の強化ジャケットだよ。」

ティアナ「私達じゃ、まだ使いこなせないからデバイスには登録されてないけどね...」

エリオ「でも、今はこの力を使いこなして全力で戦います!」

キャロ「エリオ君の言うとおりだよ。」

チンク「...エリオたちの言うとおりだ、私達は私達のすべきことをするだけだ!」

ノーヴェ「ああ、チンク姉、みんな行くぜ!」

そう言って、全員でG・オーガに向かって行った。

スカルキラー「「「「シャアアア！小娘どもが！」「」」」」  
4人「きゃあああ！」

スカルキラーのすばやい動きにヴィヴィオたちは翻弄されていた。  
カイル「キングソードベガ！」

スカルキラー「ぐああああ！」

カイル「はあ！」

そこへ、カイルがスカルキラーの前に立ち4人を助けた。

カイル「大丈夫か？無理をするな。」

ヴィヴィオ「わかつてる、任せてパパ！ブレスロツトル、電撃拳エレクトロフィスト！」

リオ「天火星・稲妻炎上破！」

コロナ「マジ・マジカ、レッドファイヤー！」

イクス「ゲキワザ、咆哮弾！」

カイル「ベガスラッシュ！」

スカルキラー「「「ぐあああああ！」「」」」

カイル「たしかに、他の雑魚とは違うな・・・」

ヴィヴィオ「でもやっぱり、パパ凄い！」

イクス「そうですね、それをもろともせず倒すなんて・・・」

カイル「話は後だ、他のメンバーの応援に行くぞ！」

4人「「「うん！（はい！）」「」」」

D・ホムラコギ「行くぜ！」

D・マリゴモリ「みんな不幸になっちゃえ！」

そう言うと、ホムラコギは車輪を使い、マリゴモリは丸くなって、突っ込んできた。

メタルダー「メタルトルネード！」

メタルダーはメタルトルネードで応戦したが吹き飛ばされた。

メタルダー「うあああ！」

凱「大丈夫か、メタルダー？」

メタルダー「ああ、あいつら前よりも強くなってる・・・」

護「まずは、あいつらの動きを止めないと・・・」

リン「私に任せろ、グレイブ！」

リンは地面から土の刃を出して2体の動きを止めた。

凱「よし、行くぞ、護、メタルダー！」

メタルダー「わかった。」

護「了解！」

3人「はああ！（やああ！）」

そう言つて、3人は2体に一斉攻撃をかけて吹き飛ばした。

D・ホムラコギ・D・マリゴモリ「ぐああああ！（うああああ！）」

「」

その後、全員が一斉に集まり、敵と対峙した。

薫「よし、我々も本気を出さず、恐竜ディスク！」

丈瑠「インロウマル！」

そう言つと、薫はハイパーシンケンレッドになり、それ以外のメン

バーはスーパーシンケンジャーになった。

丈瑠「スーパーシンケンマル・・・」

源太「スーパーサカナマル・・・」

シンケンジャー「真・螺旋の太刀！はあ！」

D・ホムラコギ「ぐああああ！」

薫「キョウリユウマル・天地一閃！」

D・ホムラコギ「ぐああああ！」

シゲナム「レヴァンティン！真・紫電一閃！」

ヴィータ「マキシマムハンマー！」

G・オーガ「ぐあああ！」

はやて「なのはちゃん、フェイトちゃん行くで！」

なのは「フェイト「了解！」」

なのは「フェイト・はやて「ミラクルトリプルブレイカー！」」

「」

G・オーガ「ば、馬鹿な！？」

G・オーガは3人の一斉攻撃で粉碎された。

丈瑠「これで決める、スーパーモウギユウバズーカ！」

スーパーモウギユウバズーカ「最終奥義ディスク！」

丈瑠「外道覆滅！」

D・ホムラコギ「ぐあああ！」

ジーク「こつちも決めるぞ！」

ゴークカイジャー「スーパーゴークカイガレオンバスター！」

カイク「キングテクター！」

ゴークカイジャー「レンジャーキーセット！」

スーパーゴークカイガレオンバスター「キングチャージ！」

ジーク・カイク「ド派手に行くぜ！」

ゴークカイジャー「スーパーゴークカイガレオンバスター！！！」

スーパーゴークカイガレオンバスター「ファイナルライジングストラ

イク！」

D・マリゴモリ「そ、そんな、僕の身体を貫くなんて・・・うああ

ああ！」

D・マリゴモリはファイナルライジングストライクを受けて倒され

た。

ティアナ「ヴァリアブルストライク！」

スバル・ギンガ「炎上破、デイバインバスター！」

エリオ「ストラータトルネード！」

キャロ「マジ・マジユナ、ブリザードクラッシュ！」

チンク「シャドウブレイザー、ガンモード！」

ノーヴェ「ゴッドハンド！」

デイエチ「イノーメスカノン！」

ウエンディ「エアリアルキャノン！」

スカルキラー「シャアアア！！！」

全員敵を全滅させた。

鷓「ほ、なんとという奴らじゃ・・・」

応龍「ニンゲンも侮れなくなってきたな・・・」

美冬「いや、これは彼らが特別なだけだろう・・・」

アメリ「みつふいの言うとおりだね．．．」  
ゆみな「でも、頼もしいです。」  
それを見ていたメンバーは口々に感想を言った。  
ルシファー「まさか、これほどとは．．．」  
シタリ「スーパーゴーカイガレオンバスターかい．．．まさかマリ  
ゴモリの硬い身体を一撃で粉碎するとはね．．．」  
ルシフェル「あの武器は本当に規格外だな．．．だがこれで終わり  
ではない、D・クラーゲン！」  
D・クラーゲン「キイイキイイ！」  
G・オーガ「貴様ら、踏み潰してやる！」  
D・ホムラコギ「まだまだ、働けるぜ！」  
D・マリゴモリ「よくも僕を不幸にしたな！」  
ジーク「知ったことか。」  
モバイレーツ「ゴーカイガレオン！」  
ゴーカイセルラー「豪獣ドリル！」  
薫「カイク、頼む。」  
カイク「了解、キングインストラー！」  
キングインストラー「折神！ゴセイアルティメット！」  
丈瑠「真侍合体！」  
シンケンジャー「『ダイカインケンオー、天下統一！』」  
薫「モウギユウダイオー、天下一品！」  
ダイゴヨウ「ダイゴヨウ大変化！」  
凱「ギャレオン！」  
ギャレオン「ガオオオオ！」  
ゴーカイジャー「『海賊合体、完成ゴーカイオー！』」  
アイム「完成！豪獣神！」  
命「ジエネシツクドライブ！」  
凱「ファイナルフュージョン！」  
凱「ガオガイガー！」  
カイク「ゴセイアルティメット！」

シンケンジャーは薫以外がダイカイシンケンオーに乗り、薫がモウギユウダイオーに乗り、ゴセイアルティメットにはなのは、フェイト、はやて、ヴィヴィオが乗り込んだ。

スカルキラー「……シャアアア！」

スカルナイト「……カラカラカラ！」

スカルソルジャー「……ガガガガガ！」

ジーク「オラ！」

アイム「トライデントモード！」

凱「ウィルナイフ！」

スカルソルジャー「……ガガガガガ！」

丈瑠「二天一流乱れ斬り！」

薫「猛牛大回転砲！」

ダイゴヨウ「秘伝ディスク乱れ撃ち！」

カイル「アルティメットソード！」

スカルナイト「……カラカラカラ！」

カイル「残るは、スカルキラーと2体の妖魔アヤカシと改造妖魔獣か……」

そう言つて、それぞれ分かれて戦いを挑みに向かつて行つた。

G・オーガ「食らえ！アースクエイク！」

ゴークイジャー「……うああああ！」

メルト「パワー馬鹿な戦法ね。」

フィオネ「でも、侮れませんね。」

エリス「さつさと決めた方がいいかもね……」

ティア「では、ジークさん、アバレンジャーのレンジャーキーを使いましょう。」

ジーク「そうだな、奥の手だアイム！」

アイム「わかった。」

ゴークイジャー「……レンジャーキーセット！」

ゴークイジャー「……完成！豪獣ゴークイオー！」

スバル「凄い、豪獣神とゴークイオーが合体した！」

ティアナ「どれだけの力があるんだろう？」

G・オーガ「食らえ！」

ジーク「オラ！」

G・オーガの一撃を豪獣ゴーカイオーは受け止めた。

G・オーガ「何！？」

ジーク「今度は、こつちの番だぜ！ゴーカイ電撃ドリルスピン！」

G・オーガ「ぐあああ！」

アイルム「一気に決めるぞ！」

ゴーカイジャー「『ゴーカイレックスドリル！』」

G・オーガ「ぐああああ！！！」

G・オーガは倒された。

D・ホムラコギ「行くぞ！」

D・ホムラコギは車輪を使って、ゴセイアルティメットに向かってきた。

カイルム「あまい！」

カイルムはアルティメットソードでそれを受け止めた。

D・ホムラコギ「何？」

カイルム「はあ！」

D・ホムラコギ「ぐあああ！」

ヴィヴィオ「パパ、一気に決めよう！」

カイルム「ああ、ヴィクトリーチャージカード！」

5人「『アルティメットストライク！』」

D・ホムラコギ「ぐああああ！！！」

はやて「やったで！」

スカルキラー「『シャアアア！』」

凱「くっ．．．やはり、他の奴らとは違うか．．．なら一気に決めるだけだ！ガジェットツール！」

凱「ヘル・アンド・ヘヴン！」

凱「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォー．．．ふん！」

凱「ウイータ！！！」

スカルキラー「ぐああああ！」

凱はヘル・アンド・ヘヴンでスカルキラーを全滅させた。

薫「残るは、あのアヤカシだけだ、丈瑠！」

丈瑠「はい、母上、全侍合体！」

シンケンジャー「サムライハオー、天下統一！」

鶴「おお、久しぶり見たぞ、サムライハオー。」

アメリカ「相変わらず、色々と合体してるだけあって、見た目は動きにくそう。」

美冬「だが、強いことは間違いない。」

D・マリゴモリ「食らえ！」

D・マリゴモリは転がってきた。

薫「一撃で決める！」

そう言つて、必殺技の体制に入った。

シンケンジャー「モチカラ大弾丸！」

D・マリゴモリ「うああああ！」

D・マリゴモリはモチカラ大弾丸の一撃で倒された。

ルシフェル「これで終わったと思うな・・・D・クラーゲン！」

D・クラーゲン「キイキイキイ！」

D・クラーゲンは倒されたD・マリゴモリ、D・ホムラコギ、G・オーガを合体させた。

合体妖魔獣「ガガガガ！」

千明「おい！マジかよ！？」

茉莉「でも、やるしかない。」

丈瑠「もう一度、行くぞ！」

シンケンジャー「モチカラ大弾丸！」

合体妖魔獣「ガガガガ！」

しかし、合体妖魔獣はモチカラ大弾丸で倒せない。

ことは「嘘！？」

流ノ介「モチカラ大弾丸で倒せない！？」

合体妖魔獣「ガガガガ！」

合体妖魔獣の強力な攻撃にさすがのサムライハオーも押され始めた。  
シンケンジャー「くくくああああ！（うああああ！）」  
ジーク「先輩！」

丈瑠「大丈夫だ・・・」

源太「こうなつたら・・・丈ちゃん、奥の手だ。」

丈瑠「ああ、母上、恐竜ディスクを！」

薫「そうか、その手があつたか」

そう言つて、恐竜ディスクを丈瑠に渡し、インロウマルにセツトした。

インロウマル「恐竜ディスク！」

シンケンジャー「はああ！」

合体妖魔獣「くくくガガガガ！」

合体妖魔獣は恐竜刀で攻撃を弾かれ、斬り付けられ怯んだ。

シグナム「なんと、あの合体妖魔獣を圧倒している。」

ヴィータ「凄えぜ、これならいける！」

丈瑠「よし、今だ！」

シンケンジャー「くくく12折神・大侍斬り！」

合体妖魔獣「くくくガガガガ！」

合体妖魔獣はサムライハオーの大侍斬りで倒した。

裕理「やった！」

ましろ「サムライハオーが勝ちました！」

源太「やったな、それじゃ久しぶりに勝利の一本締めだ！」

ヴィータ「一本締め？」

シグナム「勝利の儀式のようなものか？」

凱「なんかすごいな・・・」

源太「それでは、ゴーカイジャーも六課や他の皆様方もお手を拝借、  
よーお！」

バン！という音が鳴り響き、全員が一本締めをした。

ティアナ「・・・なんなの、これ？」

ノーヴェ「あたしも流れでやっちゃったけど・・・」

ウェンディ「でも、なんかいいツス！」

スバル「そうだよ、なんか楽しいし。」

ヴィヴィオ「なんか面白い！」

なのは「ヴィヴィオが喜んでるからいいかな・・・」

フェイト「そうだね・・・」

はやて「うちはええと思うけどな・・・」

カイク「・・・まあ、いいか・・・」

ジーク「たまには悪くねえか・・・」

アメリ「でも、久しぶりにやるとスツキリするね。」

美冬「ふふふ、そうだね、悪くない。」

鶴「わらわも楽しいぞ。」

ゆみな「鳳さんも鳳さんも楽しいって言ってます。」

そんな感想を口々に言っている間に丈瑠と薫の二人は同時に口を開いた。

丈瑠・薫「これにて一件落着。」

最後は二人のシンケンレッドの二人の言葉で幕を閉じた。

ルシファア「昔よりも強くなっていますね・・・」

ルシフェル「とりあえず、今回は折神どもの力を見れたと思えばいいか・・・」

アスラ「撤退するぞ。」

シタリ「そうだね。」

そう言っつて、敵は撤退した。

## 旧葦原町

戦闘終了後、これ以上この太転依を利用されないようにゴーカイジャー、シンケンジャー、六課のメンバー、裕理やましろたちの手によって結界が張られた。

ましろ「どうもありがとうございました。」

カイク「気にするな。」

丈瑠「それじゃ、俺達はこれで、失礼する。」

薫「カイク、ジーク、後は頼む。」

ジーク「ああ、任せろ。」

流ノ介「また何かあれば、私達はいつでも駆けつける。」

千明「まあ、今のお前らなら大丈夫そうだけだな。」

茉莉「でも、油断はしないで、何せ妖魔は以前のゴーカイジャーを含めたすべて歴代スーパー戦隊がこういう形になったのに封印しか出来なかったから・・・。」

ことは「ホンマ気をつけてな。」

源太「ほんじゃ、ダイゴヨウも頑張れよ。」

ダイゴヨウ「へい、任せてください親分。」

丹波「それでは、そろそろ・・・。」

彦馬「ゴーカイジャーの諸君ら一同、どうか気をつけて・・・。」

丈瑠「裕理、みんなまた会おう。」

裕理「うん、また会おう丈瑠。」

アメリカ「タケもゲンも元気だね。」

ゆみな「いつでも来てください。」

美冬「また君たちに会えてよかった。」

鶴「絶対にまた来るのじゃ。」

応龍「世話になったな・・・。」

ましる「それじゃ、お気をつけて。」

丈瑠「ああ、お前らもな・・・。」

そう言つて、シンケンジャーの一同は光になってその場から消えた。ファイオネ「行ってしまいましたね・・・。」

裕理「なに、また会えるよ・・・。」

ましる「そうですね。」

メルト「それで、あなた達はこれからどうするの?」

ましる「とりあえず、この土地に残ります、新しく建てた八衢神社で暮らします。」

美冬「私も財閥からは実質引退した身だから、ここに住むことにしようと思つた。」

ゆみな「私もです。」

アメリカ「あたしも、てゆうか私達は普通の人とは違うからね。」

裕理「でも、もし何かあったらいつでも連絡してください、僕達はいつでも協力します。」

ジーク「ああ、その時が来たらな・・・。」

はやて「それじゃ、休暇が中途半端になったけど、あと少しの間、休んだら帰ろうか。」

その一言で、全員旅館に戻り、残りの休息を満喫した。（ちなみに裕理たちも一緒に同伴して、その後、こちらのメンバーが帰るときに、神社に戻って行った。）

## 第55話 海賊と侍、いざ派手に参る！（後書き）

どうも、今回から登場しましたオリジナルキャラ、ルシフェルの娘のルシファーについてちょっと掲載しておきます。

ルシファー 身長170cm スリーサイズB88W56H86  
体重（秘密）（笑）

ルシフェルの一人娘で髪型はロングのポニーテールで髪の色はパールの絶世の美女、父であるルシフェルを心から尊敬し、ルシフェルもまた彼女を溺愛している、彼の教えを余すことなく受け継ぎ、生物と機械を完全な形で融合させることを目的として研究を続けている、彼女の妖魔外装の鎧はルシフェルのものによく似ており、翼が片方しかない状態でルシフェルのものとは左右非対称になっている、ちなみに彼女の母は妖魔大戦の際に亡くなっていて、そのためスーパー戦隊に対して敵意むき出しである。

次回はスーパー戦隊の大いなる力を解放する話にしますのでよろしくお願ひします。

第56話 宇宙忍者復活！伝説の後継者再び（前書き）

どうも、今回はハリケンジャーが登場し、さらに暗黒七本槍の一人が新幹部として復活します、さらにルシファー、ルシフェル、妖魔の君ジーンの関係も明らかになり、そのほかにもメンバーの新武装や改良があります。もちろんシュリケンジャーも登場します、なお変身前の姿はレギュラーキャラの一人に変装します。

## 第56話 宇宙忍者復活！伝説の後継者再び

異世界 妖魔の居城

ジーン「よく来たな．．．ルシファーよ．．．」

ルシファー「お久しぶりです．．．ジーン様．．．」

ジーン「よせ．．．他人行儀の言い方は．．．私とお前の仲ではな  
いか．．．」

ルシファー「．．．はい、お祖父様．．．」

バンドーラ「なんだって、アスラということだい？」

アスラ「．．．ルシフェルの妻は、ジーン様の娘だったのだ．．．  
つまり、あいつはジーン様の義理の息子に当たるわけだ．．．」

ルシフェル「ところで、ルシファー、お前の影にいるのは誰だ？」

ルシファー「さすがはお父様です、今紹介しようと思っていました  
の、出てきなさい。」

そう言うとルシファーの影から一人の男が出てきた。

アスラ「こ、こいつは!？」

???「これは、お初目にお目にかかる、私は元宇宙忍群ジャカン  
ジャ所属の上忍・暗黒七本槍が七の槍サンダーだ、以後お見知り  
おきを．．．」

ルシファー「私が蘇らしたの．．．もちろん復活させる際には野心  
を消して、私達への忠誠心を持たせてね．．．」

サンダー「ルシファーお嬢のガードは私に任せてもらおう。」

ルシフェル「（なるほど．．．いまのこいつの思考を確認したが、  
以前のような野心などは一切ないようだな．．．）いいだろう．．．  
ガウもつける．．．二人でルシファーをサポートしろ。」

ガウ「あいよ、ルシフェルの旦那。」  
サンダー「心得た。」

ルシファー「それでは、お祖父様、お父様、今回は私が出撃させて  
もらうわ．．．」

ルシフェル「．．．いいだろう、だが油断するな．．．」  
ルシファー「ええ、わかってるわ、お父様。」  
そう言つて、ルシファーはガウとサンダーを伴い、自分の研究室へ寄つてから出て行つた。

デカベース

この前の事件から1週間以上が経ち、みんな各々トレーニングや鍛錬に励んでいた。(リオとコロナも最近は頻繁にトレーニングに来るようになった。)

牧野「ジーク君、お待たせしました、ゴーカイストリーマーの修理が完了しました。」

ジーク「やつと直つたのか、ありがとよ牧野先生。」

レオナ「それと、キング君、借りてたベガ返すよ。」

カイル「ああ、それじゃ俺もゴーカイサーベルとゴーカイガンを．．．」

「  
そう言つて、カイルは自分が最初に使つていたゴーカイサーベルとゴーカイガンをレオナに渡した。

ジーク「ところで、ベガにどんな改良をしたんだ？」

牧野「ベガに変形機構とゴーカイデリンガーにセットアップできるように改良したんです。」

レオナ「とりあえず、物は試しだから、キング君、やってみて。」

カイル「わかつた、ベガ、ガンモード。」

ベガ「イエス。」

「  
そう言つと、キングソードベガは剣から銃に変形した。

ジーク「なるほど、まるでカイルのゴーカイスピアみたいだな．．．」

「  
カイル「そうだな、カイルはこの武器以外ほとんど最近使わないから、この方が効率がいいだろうし．．．」

レオナ「とりあえず、キング君のゴーカイサーベルとゴーカイガンは予備でこつちで預かつておくから、あとベガをセットすればゴー

カイデリンガーも以前のようにファイナルウェーブモードに移行できるからね。」

カイル「ああ、わかった、二人とも色々手間をかけたな。」

牧野「いえいえ、あとこの間皆さんが休暇中の間に、スワンさんが来られて、このマーフィーK9の改良も終わりました。」

カイル「どんな改良をしたんだ？」

レオナ「実はね、フォワードのみんなのレンジャージャケットに装着して自身の能力を大幅に強化できる強化アーマーに変形・装着できるように改良したの、さらに以前デカレンジャーが使っていたデューバズーカも10倍の威力にしたVデューバズーカにパワーアップさせたの。」

アイル「なるほどな、ならこれはいざとなったらフォワードのメンバーの必殺武器になるってわけか・・・。」

マーフィー「ワン！」

スプリンガー「まさか、俺と同じ犬型ロボットの改良を手伝うことになるとは思わなかったぜ。」

レオナ「本当はもっと後のほうがいいと思ったんだけど、スカルクラーヤルシフェルの娘のルシファーが現れるとは思わなかったから・・・。」

牧野「とにかくあのルシファーには気をつけてください、何しろかつての妖魔大戦の時に彼女は母をスパー戦隊に倒されていますので、そのせいでスパー戦隊に対して恨みを持っているようです・・・。」

ジーク「なるほどね・・・いわば、あいつにとって俺達は母親の仇討つてことか・・・。」

とそこへ、ノーヴェが来た。

ノーヴェ「カイルの旦那、そろそろトレーニングやらねえか？」

カイル「ああ、わかった、すぐに行くから先に行っててくれ。」

ノーヴェ「わかった。」

カイル「というわけだ、後は頼む。」

ジーク「ああ、俺達はもう少し、ここに居たら、鳥にお宝ナビゲートをさせるぜ。」

アイルム「ようやく、あと半分だからな．．．」

牧野「とりあえず、大いなる力自体は君達が持っているので、奪われることはないの．．．」

レオナ「昔は、無理やり大いなる力を奪う男がいたから、先代のゴージャーカイジャーは大変だったんだよ．．．」

ジーク「．．．ふざけた野郎がいたもんだ、俺なら会った瞬間、ぶっ飛ばすぜ．．．」

レオナ「まあ、その男も結構強いからね、まあ今のゴージャーのメンバーうちレッド君、シルバー君、キング君の3人なら、倒せるでしょうけど．．．」

スプリンガー「それに昔の話だろう、妖魔が復活させない限り、会うことはないだろうし．．．」

牧野「まあ、ルシフェルの性格上、彼を復活させることはあり得ないでしょうし、彼はあの手の人物が嫌いなようでしたから．．．」

アイルム「なるほど、だから面倒な奴は少し思考を弄ってから復活させたのか．．．」

レオナ「そういうことだね、まあ、あの男らしいけどね。」

そんな話をして、作業を続けているレオナ、牧野先生、スプリンガーとそれを見届けるジークとアイルムだった。

その後、カイルはトレーニングを終え、ヴィヴィオ、フェイト、エリオ、キャロを連れて商店街へ来ていた。

カイル「さて．．．まずはどこへ行こうか？」

キャロ「私は洋服が見たいです。」

ヴィヴィオ「私も。」

フェイト「私も、新しい服を新調したいです。」

カイル「わかった、それじゃ行こうか。」

エリオ「はい、お父さん。」

そう言つて、4人はブティックへ行き、全員の服をカイクが買つてあげた。(ちなみにエリオはカイクに頼み、男らしい服をコーディネートをしてもらった。)

その後、4人は公園でクレープを食べて過ごしていた。

エリオ「最近、みんな調子がいいですね。」

キャロ「ホントだね、エリオ君もお父さんから鍛えてもらつてから一段と頼もしくなつたよ。」

エリオ「そ、そうかな．．．／／／」

フェイト「そうだね、エリオも頼もしくなつてきたよね。」

ヴィヴィオ「うん、ヴィヴィオもそう思う、ねえパパ？」

カイク「ああ、エリオ、過信はするな、だけど過信と自信は違う、自信も強くなるためには必要だ。」

エリオ「はい、ありがとうございます、お父さん！」

とそこへ、ルシファーが現れた。

ルシファー「随分と仲がよさそうね、カイク・アストレア、いやゴ―カイキング．．．」

フェイト「あ、あなたは、ルシファー!？」

ガウ「少し、遊ばないかい？」

カイク「ガウもいるのか．．．」

ルシファー「それだけじゃないわ、出てきなさい。」

そう言つと、ルシファーの影からサンダールが現れた。

エリオ「え!？あ、あれは確か．．．」

ヴィヴィオ「ハリケンジャーが戦つてた．．．」

フェイト「たしか宇宙忍群ジャカンジャの幹部、暗黒七本槍の．．．」

サンダール「サンダールだ、以後お見知りおきを．．．なるほど、たしかにハリケンジャー以上に骨がありそうだ、これは楽しませてもらえるかな？」

カイク「．．．どうやら、やるしかないようだな、ヴィヴィオ、お前はまだ危険だから少し下がつてろ、クリス、ヴィヴィオのフォロ

」を頼む。」

ヴィヴィオ「う、うん！」

そう言うのとヴィヴィオは下がり、クリスはヴィヴィオの周りに結界を張った。

カイクム「行くぞ！豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

フェイト「レンジャージャケット、セットアップ！」

エリオ・キャロ「レンジャージャケット、セットアップ！」

カイクム「ゴーカイキング！」

サンダール「ガウ、私はゴーカイキングの力が知りたい、お前は他の奴らと戦ってくれ。」

ガウ「わかったよ、今回は特別にカイクムはあんたに譲るよ。」

そう言うて、サンダールはカイクムに向かって行き、ガウはフェイト、エリオ、キャロと戦闘を開始した。

サンダール「さて．．．さっそく、ルシファー様より頂いたこの真・赦悪彗星刀の力を試してみるか．．．」

カイクム「ベガ！」

ベガ「イエス！」

そう言うて、二人は一進一退の攻防を繰り返した。

サンダール「やるな．．．さすがはゴーカイジャー最強の男．．．私を楽しませてくれる．．．」

ルシファー「（サンダールには他の暗黒七本槍のメンバーはもちろんのこと、首領だったタウ・ザントの力も与えたというのに、互角に戦うとは．．．それにお父様から話聞いた、切り札をまだ出してすらいないのにこの強さ．．．想像以上に恐ろしい男ね．．．）」

カイクム「はあ！」

サンダール「ふん！」

二人の剣が激しくぶつかり合い、火花を散らす。

フェイト「はああ！」

ガウ「へえ、中々やるじゃないかい、あんた。」

エリオ「はああ！」

キャラ「フリードリヒ！」

フリードリヒ「キュクルー！」

ガウ「くっ．．．子供だと思ったけど、やっぱりカイクが鍛えてるだけあって、侮れないね．．．だったら、少し本気を出させてもらうよ、サウザンドウィップ！」

ガウの持っている鞭が複数に見えるくらいのスピードで攻撃を繰り返してきてきた。それをフェイトが前に立ち攻撃を軽減した。

フェイト「くっ．．．さすがは、ゴーカイジャーになる前とはいえ、カイクさんですら勝てなかった相手．．．エリオ、キャラ、二人とも下がって、今の二人じゃ、適わないから．．．」

エリオ・キャラ「はい！」

ガウ「賢明ね、しかし、初めてみせたこの攻撃を最小限で軽減するなんて、あんた相当なもんね。」

フェイト「．．．カイクさんが戦っているのに、私も負けるわけにはいかないよ、行くよガウ！」

そう言つて、フェイトとガウの二人は激しい攻防戦を繰り返した、エリオとキャラは、二人の戦闘を見ていた。

そして戦いの様子を見学していたルシファーが口を開いた。

ルシファー「．．．どうやら、ここまでね．．．あなた達の実力を見せてもらったわ．．．サンダール、ガウ、撤退するわよ。」

ガウ「あいよ。」

サンダール「ゴーカイキング、いやカイク・アストレア、その名前覚えておくぞ。」

そう言つと、3人は姿を消した。

カイク「．．．行つたか．．．」

フェイト「．．．すごいことになりましたね．．．」

とその時、フェイトの手から血が流れた。

エリオ「フェイトさん、あの時、僕達を庇つた時に．．．」

キャラ「フェイトさん．．．」

ヴィヴィオ「フェイトママ、大丈夫？」

フェイト「うん、大丈夫だよ、ヴィヴィオ、心配してくれてありがとね、エリオ、キャラ。」

カイル「...フェイト、手を出せ。」

フェイト「は、はい。」

そう言うと、カイルはマジチケットを出して、それをフェイトの手に当て、呪文を言うとフェイトの傷が治った。

カイル「これで大丈夫だ。」

フェイト「...カイルさん...ありがとうございます... / /」

ヴィヴィオ「あ、フェイトママのお顔が赤くなってる！」

フェイト「ヴィ、ヴィヴィオ！ / /」

そう言つて、フェイトは嬉しくも恥ずかしい顔をした。

デカベース

その後、全員デカベースに戻ってきたメンバーは、全員に先ほどの状況を説明した。

リンディ「なるほどね...また新しい敵が...」

ジーク「しかも、よりによって、暗黒七本槍最強の男が復活したとはな...」

カイル「しかも、俺の見立てだと、どうやらジャカンジャの他の幹部とかの力を与えられたようだ...」

レオナ「...まずいわね...キング君がいたからいいけど...」

宇宙忍者者つていうのは危険だよ...しかもサンダールは、ハリケンジャー、ゴウライジャー、シュリケンジャーの6人が初めて戦った時、手も足も出せなかった相手だよ、しかも、ゴーカイジャーも息子のサンダールと戦ったことがあるの...」

なのは「そ、そんなに強いんですか...!？」

ゴセイナイト「ああ、聞くとところによる、奴は一人で星を滅ぼしたこともあるそうだ...」

ヴィータ「ま、マジかよ．．．」  
シグナム「．．．我々も心してかからねば．．．」  
とその時、ナビィが飛んできた。

ナビィ「レッツお宝ナビゲート！」  
はやて「どうしたんや、ナビィ？」

リイン「それが、急にお宝ナビゲートして．．．」  
クロノ「待てよ、もしかしたらこちらの戦力強化になるかもしれない．．．」

メルト「とりあえず、聞いてみましょう。」

ナビィ「．．．フム、伝説ノ後継者ユカリノ地へ行け．．．ダツテサ。」

スバル「伝説の後継者？」

セイン「なんのことかな？」

チンク「牧野先生、わかりますか？」

牧野「そのキャッチフレーズとなりますと、おそらく「忍風戦隊ハリケンジャー」だと思いますよ、彼らは伝説の忍者流派「疾風流」の後継者で、さらに一緒に戦った「電光石火ゴウライジャー」もそれと対をなす「迅雷流」の後継者です。」

データス「おそらくデス、ハリケンジャーの忍の里へ行けと言って  
るかも知れないデス。」

フィオネ「それは、どこにあるんですか？」

レオナ「昔のデータだと、この辺りだね。」

そう言つて、レオナはデータを表示した。

ジーク「よし、行くぜ。」

そう言つて、ゴーカイジャー、六課のメンバーは出動した。

## 旧忍風館

カイル「ここだな．．．」

デイト「陛下、お気をつけて．．．」

ヴィヴィオ「うん、ありがとう。」

オットー「イクス様も大丈夫ですか？」

イクス「はい、ありがとうございます。」

ジーク「しかし、あいつらも随分と馴染んだな・・・」

シャツハ「ええ、礼儀正しくて、助かります。」

ティア「それで、どこへ行けばいいんでしょうか？」

とその時、カイムの足が止まった。

カイム「・・・どうやら、招かれざる客が来たようだ・・・」

ジーク「・・・そのようだな・・・隠れてないで、出てきやがれ！」

そこへ現れたのは、ルシファーとサラマンデスがいた。

ルシファー「さすがね・・・」

サラマンデス「また会ったな、人間ども・・・」

メルト「ルシファーにサラマンデス!？」

サンダー「それだけではない・・・一部のメンバーにはお初目にかかる・・・私は元宇宙忍群ジャカンジャ所属の上忍・暗黒七本槍が七の槍にして、現在はルシファー様直属の忍者、サンダーだ。」

ガウ「また会ったわね、ゴーカイジャー。」

そう言つて、ルシファーの影から出てきた。

なのは「あ、あなたが、サンダー・・・」

シグナム「・・・(こ、こいつ、相当な実力だ・・・!)」

ルシファー「ここに来たということは、どうやらハリケンジャーの大いなる力を解放するってことね、でもそう簡単には行かないわ、行きなさい、改造妖魔獣G・バット!」

G・バット「御意!」

サラマンデス「こちらも行かせて貰う、妖サイマ獣D・ソルゴイル!」

D・ソルゴイル「はは・・・」

スカルソルジャー「ガガガガガ!」

スカルナイト「カラカラカラ!」

スカルキラ「シャアアア!」

カイク「ここは、俺がやる、みんなは早く、忍風館跡地へ．．．」  
アイム「俺も残る。」

なのは「私達も残ります、ティアさんたちはヴィヴィオたちと一緒に先へ．．．」

ジーク「頼むぜ、カイク。」

そう言つて、カイク以外のゴーカイジャー、ヴィヴィオ、シャツハ、オットー、ディート、セインのメンバーが先へ向かった。

カイク「行くぞ！豪快チェンジ！」

アイム「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ゴーカイセルラー「ゴーカイジャー！」

なのは・フェイト「レンジャージャケッツ！セットアップ！」

シグナム・ヴィータ「レンジャージャケッツ！セットアップ！」

フォワード陣その他「レンジャージャケッツ！セットアップ！」

「」

流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

カイク「ゴーカイキング！」

アイム「ゴーカシルバー！」

ガウ「今日は、カイクは私が相手させてもらうよ。」

サンダー「よかるう、なら私は他の奴らを相手しよう、宇宙忍法・

自在縄！」

そう言つて、フォワード陣の動きを封じた。

スバル「な、なにこれ？」

ティアナ「う、動けない．．．」

サンダー「そら！」

フォワード陣「うわああ！」

サンダーはそのまま、フォワード陣を地面にたたきつけた。

ヴィータ「大丈夫か？」

エリオ「は、はい．．．」

なのは「よくも、みんなを．．．アクセルシューター！」  
サンダー「なんの、宇宙忍法・縄頭蓋！」

そう言うのと突然出現した巨大鯨に乗り、サンダーは突撃してきた。  
なのは「ヴィータ」「きゃあああ！（うわあああ）！」「  
なのはとヴィータは吹き飛ばされた。

フェイト「なのは！ヴィータ！」

シグナム「おのれ、レヴァンティン！」

サンダー「ふん！」

シグナムのレヴァンティンを背中の中・赦悪彗星刀で軽々と受け止めた。

シグナム「何！？」

サンダー「ほう．．．少しは骨がありそうだな．．．だが、まだやらせんよ！ふん！」

そう言うて、シグナムを吹き飛ばした。

シグナム「ぐああああ！」

スバル「う、嘘！？」

ティアナ「シグナム副隊長が！？」

エリオ「剣で吹き飛ばされるなんて．．．」

キャロ「強すぎます．．．」

サンダー「どうした？ルシフェル様たちが手を焼く魔導師と聞いていたが、所詮はこの程度か？」

ヴィータ「な、なんだと！」

シグナム「よせ、ヴィータ！」

ヴィータ「アイゼン！ぶち抜け！」

サンダー「ふ．．．宇宙忍法・置転換！」

そう言うのと、なんとサンダーとギンガの位置が入れ替わり、攻撃がギンガに直撃した。

ギンガ「きゃあああ！」

スバル「ギン姉！」

ヴィータ「ギンガ！」

フェイト「大丈夫？」

ギンガ「は、はい、大丈夫です……」

ヴィータ「すまねえ、ギンガ……」

サンダール「どうした、これで終わりか？あまり私をがっかりさせないでくれよ？」

なのは「みんな、どうやらバラバラじゃ、とても適わないよ。」

フェイト「だから、ここはみんなでフォーメーションを組んで行くよ。」

フォワード陣「はい！」「」

サンダール「ほう……まだやるか、面白い相手になってやる。」

ヴィータ「いつまでも、調子に乗ってるんじゃないやねえ！」

シグナム「行くぞ！」

そう言つて、なのは達はサンダールに向かって行つた。

ジークサイド

ジーク「ここか……」

ジークたちはようやく忍風館の跡地へ来た。

「待っていたぞ。ゴーカイジャー。」

エリス「誰！？」

そこにいたのはなんとカイムだった。

シャツハ「カイムさん！？」

ヴィヴィオ「どうして、パパがここに？」

カイム「いや、俺は君のパパじゃない、この姿を借りてるだけさ。」

……

ティア「もしかして、あなたはシュリケンジャーさんですか？」

カイム「そうだ、君達を待っていた、もっとも待っていたのは俺だけじゃないけどね。」

そう言つと、どこからともなく5人の男女が出てきた。

フィオネ「先輩！」

鷹介「後輩、待つてたぜ。」

七海「でも、あんまりのんびりしている暇は無いようね。」

吼太「まさかサンダールまで復活するなんて．．．」

一甲「しかも、随分と都合のいいように人格を変えやがった．．．  
一鍬「だから、早くレンジャーキーを．．．」

そう言うとジークはレンジャーキーを渡し、力を解放してもらい、  
キングキーと一緒にまた受け取った。

ジーク「よし．．．これで急いで戻るぞ。」

とその時、鷹介が口を開いた。

鷹介「ジーク、俺たちにも戦わせてくれないか？」

ティア「先輩？」

鷹介「ここは、俺達の思い出の地だ、それを荒らす奴らを絶対に許さねえ！」

それを聞いた、ジークはさつき再度受け取ったレンジャーキーを渡した。

ジーク「おもしれえ、頼むぜ、先輩！」

鷹介「ああ、任せろ！」

シャツハ「それでは戻りましょう、どうやら苦戦しているようです。」

ジーク「よし、行くぜ！」

そう言つて、ハリケンジャー、ゴウライジャー、シュリケンジャーを伴い、急いで戻った。

カイクサイド

カイク「くっ．．．ガウが居るから助太刀に行けない．．．」

ガウ「この前はサンダールに譲ったけど、今回はあたしが行かせないよ。」

アイム「はあ！」

D・ソルゴイル「ふん！」

メタルダー「イヤー！」

トップガンダー「ふん！」

G・バット「はあ！」

他のメンバーもそれぞれの敵と交戦していて、なのはたちの援護に回れないでいた。

サンダー「さて．．．そろそろ、引導を渡してやるつか．．．」

フェイト「っ．．．強すぎる．．．」

シグナム「まさか、これほどは．．．」

ヴェイター「くそ．．．」

サンダー「とどめだ！」

とその時、目にも留まらぬスピードでサンダーを吹き飛ばして、誰かが現れた。

サンダー「ぐおおお！」

カイル? 「どうやら、間に合ったようだな．．．」

スバル「カイルさんが二人？」

ティアナ「どうなってるの？」

ギンガ「ジークさんたちです！」

そこへ、ジークたちが駆けつけた。

ジーク「随分と仲間を痛めつけてくれたな．．．」

サンダー「ゴーカイジャーどもか、それにハリケンジャー、ゴウ

ライジャー、それにさっきの動きはまさか．．．!？」

鷹介「また会ったな、サンダー！」

七海「でも、あの頃の私たちだと思ったら大間違いよ。」

吼太「そうだ、今こそそれを見せてやる。」

一甲「覚悟しろ、行くぞ、一鍬！」

一鍬「わかってるよ、兄者！」

カイル? 「今こそ、御前様の仇を取ってやる！」

サンダー「き、貴様ら!？」

サンダーの驚いているのを尻目に変身体制に入った。

鷹介「行くぜ!みんな！」

ハリケンジャー「っ」忍風、シノビチェンジ! 「」

ゴウライジャー「迅雷、シノビチェンジ！」

カイル「天空、シノビチェンジ！」

ゴーカイジャー「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

シャツハ「レンジャージャケツト、セットアップ！」

3人「レンジャージャケツト、セットアップ！」

ヴィヴィオ・イクス「セットアップ！」

イクス「まだ行きます。」

ヴィヴィオ・イクス「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゲキレンジャー！」

モバイレーツ「キングレンジャー！」

変身を完了させた後、カイルとアイムも集まり、全員で名乗りを始めた。

鷹介「風が哭き、空が怒る、空忍ハリケンレッド！」

七海「水が舞い、波が踊る、水忍ハリケンブルー！」

吼太「大地が震え、花が歌う、陸忍ハリケンイエロー！」

鷹介「人も知らず……」

七海「世も知らず……」

吼太「影となりて悪を討つ！」

鷹介「忍風戦隊！」

ハリケンジャー「ハリケンジャー！」

鷹介「あゝ参上！」

一甲「深紅の稲妻、角忍カブトライジャー！」

一鍬「蒼天の霹靂、牙忍クワガライジャー！」

一甲「影に向かいて影を斬り……」

一鍬「光に向かいて光を斬る……」

ゴウライジャー「電光石火ゴウライジャー、見参！」

シュリケンジャー「I・a・m ニンジャ・オブ・ニンジャ！緑の光

弾、天空忍者シュリケンジャー、参上！」

カイル「ゴーカイキング！」

ジーク「ゴーカイレッド！」  
フィオネ「ゴーカイブルー！」  
メルト「ゴーカイイエロー！」  
エリス「ゴーカイグリーン！」  
ティア「ゴーカイピンク！」  
アイム「ゴーカイシルバー！」  
カイクム「ジーク「海賊戦隊！」  
ゴーカイジャー」「」「ゴーカイジャー！」」「」  
ヴィヴィオ「才を磨いて、己の未来を切り開く、アメイジング・ア  
ビリテイ！ゲキチョッパー！」  
イクス「キングレンジャー！」  
ルシファー「まさか、ハリケンジャーどもまで・・・」  
ジーク「それじゃ、先輩、派手に・・・」  
鷹介「シュシュツと行くぜ！」  
そう言つて、全員がそれぞれ分かれて戦いを仕掛けた。

一鍬「スタッグブレイカー！」  
一甲「ホーンブレイカー！」  
エリス・ティア「」「ゴーカイブラスト！」  
スカルソルジャー「」「ガガガガガ！」」「」  
エリス「雑魚は一掃ね。」  
ティア「お見事です。」  
一鍬「いや、そつちもいいコンビネーションだ、なあ兄者？」  
一甲「ああ、まったくだ一鍬。」

吼太「超忍法・地雷撃！」  
七海「超忍法・水流破！」  
フィオネ「はい！」  
メルト「はあ！」  
スカルナイト「カラカラカラ！」

七海「一気に決めよう！」

吼太「OK！」

吼太「疾風流剣技・大地斬！」

七海「疾風流剣技・激流斬！」

メルト・フィオネ「レンジャーキーセット！」

ゴーカイサーベル「ファイナルウェーブ！」

メルト・フィオネ「ゴーカイスラッシュ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

七海「よし！」

吼太「やった！」

フィオネ「お見事。」

メルト「これがセイバイバイってやつ。」

アイム「ゴーカイスピア、ガンモード！」

シュリケンジャー「ファイヤー剣！」

D・ソルゴイル「ぐああああ！」

シュリケンジャー「行くぞ、大逆転、フェイスチェンジ！ファイヤ

ーモード！」

アイム「ゴーカイスピア、レンジャーキーセット！」

シュリケンジャー「行くぜ！超忍法・秘打ミラクル千本ノック！」

D・ソルゴイル「た、玉が多すぎる、ぐああああ！」

アイム「今度はこつちだ、ゴーカイシューティングスター！」

D・ソルゴイル「ぐああああ！」

D・ソルゴイルは吹き飛ばされた。

シュリケンジャー「ユー、中々やるな。」

アイム「あんたもな。」

鷹介「ハヤテ丸！」

ジーク「オラ！」

サンダー「くっ……やるなゴーカイレッド……そして、強く

なつたなハリケンレッド！」

鷹介「あの頃の俺達じゃねえぜ。サンダール！行くぜ、疾風流奥義・大空斬！」

ジーク「ゴーカイダブルスラッシュュ！」

サンダール「くっ．．．」

G・バット「サンダール様！ここは、私にお任せを．．．」

サンダール「頼むぞ。」

そう言つて、サンダールは下がった。

メタルダー「ジーク！」

ジーク「メタルダー、トップガンダー！」

トップガンダー「行くぞ！」

なのは「行くよ。」

なのは・フェイト「スーパーモード移行！」

シグナム・ヴィータ「スーパーモード移行！」

デバイス「イエス！」

ティアナ「こっちも、マーフィー！」

マーフィー「ワン！」

そう言つと、マーフィーが分離して、ティアナのジャケットに装着された。

ティアナ「パトライズモード！」

セイン「まずは、あたしからサガスナイパーショット、サガストラ

イク！」

オットー「今度はこっちです、プリズムカイザー！ローリンググナッ

クル！」

デイト「プリズムツインブレイズ！ダブルカッター！」

スカルキラ「シャアアア！」

なのは「次はこっちだよ、ミラクルストライク・スターズ！」

フェイト「スーパープラズマブレイク！」

シグナム「レヴァンティン！真・百火繚乱！」

ヴィータ「アイゼン！グランドインフェルノ！」

ティアナ「行くわよ、ヴァリアブルストライク・フルドライブ！」  
スバル「旋風振動拳！」

ギンガ「天重星・回転蹴り！」

エリオ「ティラノサンダーレイジ！」

キャロ「フリード！ルーマ・ゴー・ゴジカ！フリード・シャイニン  
グアタック！」

フリード「キュクルー！」

スカルキラ「「「シャアアア！」」」

シグナム「よし、後はあの2体の妖魔怪人だけだな・・・」

ヴィータ「なのは、フェイトはカイムの援護に行った方だいいだろ  
う・・・」

なのは「わかったよ、ありがとうヴィータちゃん。」

フェイト「行こう、なのは。」

そう言つて、二手に分かれて向かつて行った。

カイム「はあ！」

ガウ「また一段と強くなつたね、カイム！」

カイム「そう言つお前もな！」

二人が戦っている間に、シャツハ、ヴィヴィオ、イクスの3人がル  
シファーと戦っていた。

ヴィヴィオ「ゲキワザ、鋭鋭刀！チエスト！」

イクス「キングビクトリーフラッシュ！」

シャツハ「烈風雷撃斬！」

ルシファー「くっ・・・やるじゃないの・・・子供だと思つて甘く  
見たわね・・・」

とそこへ、サンダーが来て、3人を吹き飛ばした。

カイム「ヴィヴィオ！はあ！」

カイムはガウを弾き飛ばすと、ヴィヴィオを抱えた、さらにイクス  
はジークが助け、シャツハは鷹介が助けた。

カイル「大丈夫か？ ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「うん！ ありがとうパパ！」

イクス「あ、ありがとうございます、お父様．．．／／／」

ジーク「気にすんな、娘を守るのは親の務めだ。」

シャツハ「助かりました．．．」

鷹介「気にすんなって、それより行けるか？」

シャツハ「はい、もちろんです！」

その後、全員が一斉に集まった。

シュリケンジャー「一気に行くぜ！ 超忍法・分身魔球！」

メタルダー「メタルボンバー！」

一甲「カブト雷撃破！」

一鍬「迅雷流剣技・雷牙一撃！」

G・バット「ぐああああ！」

鷹介「超忍法・影の舞！」

七海「ソニックメガホン！」

吼太「クエイクハンマー、超忍法869号！」

D・ソルゴイル「ぐああああ！」

鷹介「今だ！」

シュリケンジャー「ニンジャミセン、ガンモード！」

鷹介「五重連！」

ハリケン・ゴウライ「『ビクトリーガジェット！』」

ジーク「こつちも行くぜ、カイル！」

カイル「わかった、キングテクター！」

カイル「スーパーゴークイガレオンバスター！」

ゴークイジャー「『レンジャーキーセット！』」

スーパーゴークイガレオンバスター「キングチャージ！」

シュリケンジャー「宇宙統一忍者流の名の下に．．．」

鷹介「最強奥義．．．」

一甲「天風雷撃波！」

鷹介「身に染みる！」

ゴーカイジャー「スーパーゴーカイガレオンバスター!」  
ハリケン・ゴウライ・シュリケン「パニツシュ!」  
スーパーゴーカイガレオンバスター「ファイナルライジングス  
トライク!」

D・ソルゴイル・G・バット「ぐああああ!」

二つの合体攻撃により、2体の怪人は粉碎された。

鷹介「セイ...」

ゴーカイ・ハリケン・ゴウライ・シュリケン「バイバイ!」

ルシファー「...まだ、終わりじゃないわよ...D・クラーゲ  
ン!」

D・クラーゲン「キイイキイイ!」

サラマンデス「ピエール!」

ピエール「はい、かしこまりました、はあ!闇の世界の力よ、最後

の力を...アミアス!アミアス・アミクロス、災魔復活!」

D・ソルゴイル「ゴオオオ!」

G・バット「まだこれからだ!」

スカルキラ「シャアアア!」

スカルナイト「カラカラカラ!」

スカルソルジャー「ガガガガガ!」

ジーク「往生際の悪い野郎だ...」

鷹介「ジーク!使え!」

そう言つて、鷹介達はレンジャーキーをジークたちに渡した。

ジーク「ああ、わかった!」

カイク?「カイク、君にはこのニンジャミセンを...」

カイク「わかった、こい!リボルバーマンモス!」

モバイレーツ「ゴーカイガレオン!」

ゴーカイセルラー「豪獣ドリル!」

ゴーカイジャー「海賊合体、完成ゴーカイオー!」

アイク「完成!豪獣神!」

とそこへ、Gガオガイガー、キングジェイダー、ビックボルフォッグが来た。

ジーク「凱たちか!?!」

凱「どうやら、こつちの出番のようだな・・・」

ソルダート「雑魚は私達が相手をする、お前達は、あいつらを・・・」

「」

アイルム「わかった。」

そう言うて、二手に分かれて、戦闘を開始した。

凱「ガジェットツール!ボルテイングドライバー!」

スカルソルジャー「ガガガガガ!」

ソルダート「反中間子砲!」

ボルフォッグ「必殺、大回転魔弾!」

スカルナイト「カラカラカラ!」

凱「よし、後はスカルキラーだけだ!」

スカルキラー「シャアアア!」

しかし、スカルキラーのすばやい攻撃で3体とも吹き飛ばされた。

凱「な、なんて奴らだ・・・」

ソルダート「ジェネレーティング・アーマーでも防ぎきれないと

は・・・」

ボルフォッグ「凱隊長、」隊長、ここは一気に決めた方がいいかと

・・・」

トモロー「ボルフォッグの言うとおりだ、」。

ソルダート「わかった、行くぞ凱!」

凱「おう!ブラウクンマグナム!」

ボルフォッグ「超分身殺法!」

スカルキラー「シャアアア!」

ボルフォッグ「今です!」

ソルダート「わかった、ジェイクオース!」

凱「ガジェットツール!」

凱「ヘル・アンド・ヘヴン！」

凱「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォー．．．ふん！」

凱「ウィータ!!!」

スカルキラー「ぐああああ!!」

凱「よし！」

ソルダート「後は、ジークたちだな．．．」

ジークサイド

ジーク「早速使わせてもらうぜ！」

ゴーカイジャー「レンジャーキーセット!!」

ゴーカイジャーがハリケンジャーとゴウライジャーのレンジャーキーを使うと、どこからともなく1体のロボットが現れた。

???「ニンニンニン、ニンニンニンニンニン！」

ヴィヴィオ「あれは？」

鷹介「風雷丸！」

風雷丸「拙者、風雷丸、助太刀いたす！」

フィオネ「お願いします。」

風雷丸「ゴーカイジャー殿、合体でござる！」

ジーク「行くぜ！」

風雷丸「海賊と忍者、ひとつになりて、天下御免の手裏剣装備！」

そう言うと、風雷丸がゴーカイオート合体をした。

風雷丸「ハリケンゴーカイオー、推参！」

G・バット「そんなこけおどしに！」

メルト「だったら食らってみなさい！ゴーカイ無限手裏剣！」

G・バット「ぐああああ！」

エリス「お次は、シュシュツと手裏剣チェーン！」

G・バット「ぐああああ、お、おのれ！」

ティア「そろそろ、とどめと行きましょう。」

ジーク「ああ、行くぜ！」

ゴーカイジャー「レンジャーキーセット!!」

ゴーカイジャー「「「ゴーカイ風雷アタック」」」

風雷丸「春はまだ先でございませうが、必殺奥義・乱れ桜！」

そう言うのと、風雷丸が複数に分身した。

風雷丸「参らん！」

そう言うのと、風雷丸と分身が手裏剣でG・バットに攻撃を繰り返した。

G・バット「ぐああああ、ルシファー様！」

カイク「マンモスビーム！」

リボルバーマンモス「パオオオ！」

D・ソルゴイル「ゴオオオ！」

アイム「よし、後は俺がやる、トライデントモード！」

D・ソルゴイル「ゴオオオ！」

アイム「とどめだ、レンジャーキーセット！必殺豪獣トリプルドリルドリーム！」

D・ソルゴイル「ゴオオオ!？」

D・ソルゴイルは粉碎された。

サンダー「お嬢、ここは引き際かと・・・」

ルシファー「そうね、サラマンデス、ガウ、帰りましょう。」

サラマンデス「そうですね、姉上。」

ガウ「あたしは楽しめたからいいけどね・・・」

そう言うて、敵は撤退した。

その後、みんなまで直にハリケンジャーのメンバーと会った。

鷹介「よくやったな、後輩。」

フィオネ「いえ、先輩達おかげです・・・」

七海「でもサンダーは強いから、油断しないでね。」

エリス「ええ、わかっているわ。」

吼太「あと風雷丸をよろしくね。」

メルト「それは任せて、というか、ヴィヴィオたちがすっかり仲良しになってるし・・・」

そう言つて、ヴィヴィオ、イクスを乗せて風雷丸は宙を待っていた。  
ヴィヴィオ「うわー！すごい！」

イクス「ホントです！」

風雷丸「お嬢さん方、気に入ったかな？」

ヴィヴィオ「うん！こんな風に風を受けて飛んだことなかったから。」

イクス「ありがとうございます、風雷丸さん。」

そう言つて、ヴィヴィオとイクスは嬉しそうな顔をした。

一甲「どうやら、問題なさそうだな・・・」

一鍬「そうだな、兄者。」

カイル？「それじゃ、俺達はこれで・・・」

カイル「それはいいが、いつまで俺の姿のままなんだ？」

ジーク「まあいいじゃねえか、カイル。」

鷹介「じゃあ、またな！」

そう言つて、ハリケンジャー、ゴウライジャー、カイルの姿をした  
シュリケンジャーは帰っていった。

なのは「それじゃ、帰りましょうか・・・」

カイル「ああ、そうだな・・・」

シグナム「あのサンダール・・・強敵だったな・・・」

ヴィータ「ああ、あたしらもつと強くならねえとな・・・」

その言葉に全員頷き、デカベースに帰っていった。

第56話 宇宙忍者復活！伝説の後継者再び（後書き）

どうも、今回はサンダールが猛威を振るっていましたが、最初の頃6人がかりで手も足も出なかつたので、こうしました、後サラマンデスがルシファアのことを姉上と呼んでいるのは、復活した災魔兄弟はルシフェルが父であるためです、その関係でルシファアはジルフィーザより上の存在になっています、次回からはしばらく連続で大いなる力の解放にします。

## 第57話 古代の魔神と機械生命体（前書き）

どうも、久しぶりに時間が空いて、続きを早い段階で投稿することが出来ました、最近の話にしては短いと思いますが、今回はオーレンジャーの力が解放されます、後、まだ本格的な活躍は先ですが、ガンマジンとブルドントの息子も仲間になります。（ついでにアチャとコチャも）

## 第57話 古代の魔神と機械生命体

デカベース AMO:00 デカルームにて

カイク「よし、まずは、これだな．．．」

そう言つて、カイクはクリスに歴代スーパー戦隊の戦いのデータを見せていた。

とそこへ、なのはが来た。

なのは「あれ？カイクさん、それにクリスも、まだ起きていたんですか？」

カイク「なのはか、お前こそどうしたんだ？もしかして起こしてしまつたか？」

なのは「いえ、私は、明日の訓練の準備していたら、珍しく遅くなつてしまつて．．．」

カイク「そうか、早く休んだ方がいい、いつ何時出勤があるかわからんからな．．．」

なのは「そういうカイクさんは休まないんですか？」

カイク「俺は、ちょっとやる必要があるんでな．．．」

なのは「いつたい、何をしているんですか？」

カイク「いや、クリスの奴がな、どうすればヴィヴィオをもつと守れるのかつて、俺に相談してきてな、それで、歴代スーパー戦隊の記録の中から参考になるデータを見せていたんだ。」

なのは「．．．やっぱり、カイクさんは優しいですね．．．厳しくもヴィヴィオのためを思つて、そういうことができる人はそんなにいませんよ．．．」

カイク「．．．俺とて、できれば、ヴィヴィオを巻き込みたくはないが．．．ヴィヴィオが自分で決めたことで、それに妖魔はヴィヴィオも狙つてくることもあるからな、それにいつでも俺が守れるわけでもない、だからこそ、俺に出来ることは、ヴィヴィオが自分の力で自分の身を守るくらい力を与えてやらないとな．．．」

なのは「．．．カイクさん、私もお手伝いしてもいいですか？」  
カイク「いいのか？明日の訓練もあるんだろう？」

なのは「いえ、実は明日の訓練は、ヴィータちゃんとシグナム副隊長たちに一任してあって、私はその準備だけをしてたんです．．．」  
カイク「そうか．．．わかった、それじゃ協力してもらおうか。」  
なのは「はい！」

カイク「それと、終わった後にご褒美もやらないとな．．．」  
なのは「え、は、はい、お、お願いします．．．／／／／」

なのはカイクの言葉に顔を赤くして嬉しそうな顔をした、その後、二人はその後1時間くらい、クリスマスへのデータ閲覧を手伝った後、部屋に戻り、カイクは一晩中なのはを可愛がったという。

そして、この一件から3日後、ヴィヴィオ、イクス、リオ、コロナの4人は学校に行き、学校が終わり近くの公園に居た。

ヴィヴィオ「あゝ、せつかくの休みももう終わっちゃった。」  
イクス「あつという間でしたね。」

コロナ「楽しい時間って、過ぎるのが早いよね．．．」

リオ「ホント、でもカイクおじさんたちのトレーニングなんかは休みが終わっても出来るからいいけどね。」

とそこへ、何かが近づいてきた。

???「パク！待って、どこへ行くの？」

パク「キイイ」

???「だめじゃない、勝手にどこかへ行っちゃ．．．」

そこには、トカゲによく似た生き物と一人の少女が居た。

ヴィヴィオ「あれは？」

リオ「女の子だけど．．．あの生き物って、トカゲかな？」

コロナ「でもなんだろう、ちょっと違うような気がする．．．」

イクス「何なんでしょう？」

とそこへ、スカルソルジャーとスカルナイトが現れた。

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

「????」

リオ「あれって、妖魔？」

コロナ「どうして、妖魔が？」

とそこへ、一人の男が現れた。

「????」

ドリン「リキ！」

コロナ「あれ、あの人は？」

イクス「誰なんでしょう？」

リキ「妖魔め、僕のドリンに指一本触れさせないぞ、行くぞ！」

スカルソルジャー「ガガガガガ！」

リキ「てや！」

リキは一人でスカルソルジャーを倒していった、

スカルナイト「カラカラカラ！」

リキ「うわあああ！」

しかし、スカルナイトには勝てず、吹き飛ばされた。

ドリン「リキ！」

パク「キイイ！」

リキ「くそ... 変身さえ出来れば、こんな奴らなんか...

それを見ていたヴィヴィオたちが顔を合わせた。

ヴィヴィオ「みんな、行こう！」

3人「うん！」

そう言つて、4人はリキの前に立った。

ドリン「あなた達は？」

リキ「よせ、子供のかなう相手じゃない！」

ヴィヴィオ「大丈夫だよ、行くよ！」

4人「セットアップ！」

そう言つて、4人とも大人モードになった。

ドリン「ええ!？」

リキ「いったいどうなってるんだ!？どうして、あの子達が大人に

？」

驚く二人を尻目に4人はモバイレーツとレンジャーキーを取り出した。

4人「「「豪快チエンジ！」」」

モバイレーツ「メガレンジャー！」

4人はそれぞれ、ヴィヴィオはブラック、イクスはブルー、リオはイエロー、コロナはピンクにチエンジした。

ドリン「メガレンジャー！？」

リキ「それにそれはモバイレーツ、まさか君達は……！？」

ヴィヴィオ「行くよ！メガロッド！」

イクス「メガトマホーク！」

リオ「メガスリング！」

コロナ「メガキャプチャー！」

スカルソルジャー「「「ガガガガ！」」」

スカルナイト「「「カラカラカラ！」」」

イクス「ヴィヴィオ、一気に決めましょう！」

ヴィヴィオ「わかった、みんな行くよ！」

そう言つて、4人は持っている武器を合体させた。

ヴィヴィオ「マルチアタックライフル！」

イクス「ターゲツト！」

リオ「ロツクオン！」

4人「「「シユート！」」」

スカルソルジャー「「「ガガガガ！」」」

スカルナイト「「「カラカラカラ！」」」

4人は合体武器で一気に敵を全滅させた。

コロナ「やった！」

4人は変身を解除した直後、カイムとなのはが来た。

カイム「ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオ「あ、パパ、なのはママ！」

なのは「どうしたの？」

イクス「実は．．．」

そう言つて、4人は説明した。

カイク「なるほどな．．．リキ先輩だな、俺はカイク、ゴーカイジャーのゴーカイキングだ。」

リキ「そうか、君がゴーカイジャーの．．．」

なのは「ちなみにオーレンジャーの方は、基地に居ます。」

ドリン「ホント!？」

カイク「ああ、さつき俺達の大いなる力を解放させてくれたんだが、二人がこつちに来る際に居なくなつたと聞いて、探してたんだ．．．

」

リキ「そうか、僕達もオーレンジャーを探していたんだ、なら手間が省けた、連れてつてくれないか？」

なのは「わかりました、案内します。」

カイク「それにしても、よくやったなヴィヴィオ、みんな。」

そう言つて、ヴィヴィオの頭を撫でながら、4人を褒めた。

ヴィヴィオ「えへへへ」

ヴィヴィオは嬉しそうな顔をした。

デカベース

吾郎「リキ、ドリン!」

昌平「無事だったか？」

リキ「みんな!」

ドリン「よかつた．．．」

パク「キイイ!」

裕司「パクも大丈夫そうだな。」

樹里「それにしても、ドリンが狙われるなんて．．．」

桃「きつと、上級妖魔のうちの誰かね。」

ジーク「それより、ありがと先輩、これでスーパーゴーカイガレオンバスターの最終リミッターが外れたからな．．．」

吾郎「気にするな、それよりも、あと君達がある場所へ、案内した

いんだ。」

フィオネ「ある場所？」

リキ「ああ、そこには君たちの力になる新たな仲間がいる。」

ジーク「それじゃ、カイムの奴も呼んでくるか・・・」

昌平「彼はどこに？」

メルト「いつもの日課で・・・」

そう言つて、カイムとなのはがヴィヴィオとトレーニングをしている場所へ行つた。

カイム「よし、ヴィヴィオ、やってみる。」

ヴィヴィオ「うん！行くよ、クリス！」

そう言つて、ヴィヴィオはシュミレーション用のスカルソルジャーに向かつて行つた。

ヴィヴィオ「はああ！光速スプラッシュイリジヨン！」

スカルソルジャー「「ガガガガ！」」

樹里「嘘！あれつて、私の技？」

エリス「それだけじゃないわ。」

なのは「次、来るよ！」

ヴィヴィオ「わかつた、はあ！閃光ミラクル気功弾！」

桃「今度は、私の？」

ティア「実は、カイムさんがヴィヴィオの戦闘スタイルを壊さずに取り入れられそうな技を調べたものを、ヴィヴィオに教えているそうです。」

アイム「ちなみにあのウサギのぬいぐるみの形のデバイス・・・クリスが技の体制に入った時に、身体能力において、技を繰り出す際にその部分の強化とフローをしているんだ・・・だから変身しなくても繰り出せるんだ・・・まあもつとも、さすがにオリジナルに比べれば、威力は落ちるが・・・」

裕司「それでもすごいぜ！」

吾郎「だが、どうしてあの子はそこまで強くなるうするんだ？見たところ、自分の意志のようだが・・・」

ティア「・・・ヴィヴィオは、カイクさんに強い子になるって約束のために頑張ってるんです。」

ドリン「強い子？」

ジーク「ヴィヴィオは初めて会った時は、カイクやなのは達にくつついて離れようとしなくてな、しかも転んだらすぐに泣いちまう様な、泣き虫だったんだ、でもカイクはヴィヴィオを助けた、その時に思ったそうだ、いつか自分がカイクが大変な時に自分がカイクを助けられるようになりたいそうだ・・・」

昌平「・・・そうか・・・いい子だな・・・」

樹里「でも、きつとそうなれるよ、あの子なら・・・」

桃「私もそう思うよ。」

その後、少しの間トレーニングを見学した後、オーレンジャーとゴーカイジャーのメンバーである場所へ向かった。

とある遺跡跡地

吾郎「変わってないな・・・」

昌平「隊長、反応からすると、もうすぐです。」

メルト「それにしても、ここにいったい何があるの？」

リキ「それは、見てからのお楽しみ・・・」

とその時、スカルソルジャー、スカルナイトが現れた。

裕司「隊長！」

吾郎「ああ、どうやら先回りされたようだな・・・」

とそこへ、バディンが現れた。

バディン「ゴーカイジャー、それにオーレンジャーどもか・・・」

ジーク「随分と久しぶりだな・・・」

フィオネ「なぜあなたがここに？」

バディン「知れたことよ・・・オーレンジャーがこっちの世界に来たことはわかってた、そこでドリンに道案内させようと思って、こいつらを差し向けたわけだ・・・」

エリス「なるほどね・・・それをヴィヴィオたちに邪魔されたから、

今度はこっちの動きを監視していたわけね．．．セコイわね。」  
バディン「黙れ！だが、これでようやくガンマジンが手に入る。」  
吾郎「馬鹿な！お前達ではこの先には進めない、それにたとえ進め  
てもガンマジンはお前達の命令を聞くわけがない！」  
バディン「安心しろ、貴様らオーレンジャーのレンジャーキーが必  
要であることは知っているし、あとやつ力さえ奪って手に入れら  
れれば十分だ．．．」  
リキ「相変わらず、用意周到な奴だ．．．」  
バディン「さあ、レンジャーキーを渡してもらおうか？」  
ジーク「．．．おい、俺達がお前に渡すと思うか？」  
バディン「安心しろ、渡さないのなら貴様らを倒して手に入れるま  
でだ、こい妖魔獣士D・バイソン！」  
D・バイソン「ははは！」  
アイム「やるしかないようだな．．．」  
ジーク「．．．下がってる、先輩、俺達の戦いぶりをたっぷり見せ  
てやるぜ！」  
吾郎「ああ、任せたぞジーク！」  
そう言つて、オーレンジャー、リキ、ドリンは下がった。  
ジーク「行くぜ！」  
ゴーカイジャー「『豪快チェンジ！』」  
モバイレッツ「『ゴーカイジャー！』」  
ゴーカイセラー「『ゴーカイジャー！』」  
カイク「『ゴーカイキング！』」  
ジーク「『ゴーカイレッド！』」  
フィオネ「『ゴーカИБルー！』」  
メルト「『ゴーカイエロー！』」  
エリス「『ゴーカイグリーン！』」  
ティア「『ゴーカイクレール！』」  
アイム「『ゴーカシルバー！』」  
カイク・ジーク「『海賊戦隊！』」

ゴーカイジャー「「「ゴーカイジャー!」」」  
カイル「さて・・・」

ジーク「派手に行くぜ!」

スカルソルジャー「「「ガガガガ!」」」

スカルナイト「「「カラカラカラ!」」」

ジーク「オラ!」

カイル「はああ!」

フィオネ「はい!」

メルト「えい!」

エリス「邪魔!」

ティア「はい!」

アイル「はああ!」

敵の雑魚を片付けていったが中々数が減らず、しかもスカルキラ  
まで現れた。

スカルキラ「「「シャアア!」」」

カイル「面倒だ・・・ジーク!雑魚は俺がやる、お前達はあの妖魔  
獣士を頼む。」

ジーク「ああ、わかった!」

そう言つて、二手に分かれた。

カイル「はああ!」

スカルナイト「「「カラカラカラ!」」」

スカルキラ「「「シャアア!」」」

カイルは残りの雑魚を次々と片付けていった。

カイル「一気に決めてやる・・・キングテクター!レンジャーキ  
セツト!」

ベガ「ファイナルウェーブ!」

カイル「ベガスラッシュ!」

スカルナイト「「「カラカラカラ!」」」

スカルキラ「「「シャアア!」」」

カイル「ゴツチュー!」

カイクは雑魚を全滅させた。

ジークサイド

D・バイソン「食らえ」

D・バイソンは猛烈な勢いで突進してきた。

ゴークカイジャー「うわあああ！（きゃあああ！）」

D・バイソン「どうだ、海賊どもめ。」

ジーク「上等だ、だったら先輩から貰ったこの力を早速使うか……」

そう言つて、オーレンジャーのレンジャーキーをセットした。

ゴークカイジャー「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「オーレンジャー！」

ゴークカイセルラー「キングレンジャー！」

ジーク「オーレッド！」

エリス「オーグリーン！」

フィオネ「オーブルー！」

メルト「オーイエロー！」

ティア「オーピンク！」

アイム「キングレンジャー！」

ゴークカイジャー「超力戦隊オーレンジャー！」

D・バイソン「それがどうした、食らえ！」

そう言つて、D・バイソンは頭の角から光線を放ってきた。

ジーク「食らうかよ！行くぜ！」

ゴークカイジャー「キングスマッシュャー！」

D・バイソン「ぐああああ！」

エリス「まだまだ行くわよ！スクエアクラッシュャー、電光・超力クラッシュャー！」

フィオネ「デルタトンファ、稲妻・超力トンファ！」

D・バイソン「ぐおおお！」

メルト「次は、私達の番よ、ツインバトン、炸裂・超力バトン！」

ティア「サークルディフェンサー、疾風・超力ディフェンサー！」

D・バイソン「うああああ！」

ジーク「行くぜ！スターライザー！オラ！」

アイム「キングステイク！」

D・バイソン「ぐおおおお！．．．おのれ．．．」

ジーク「秘剣・超力ライザー！オラ！」

アイム「キングビクトリーフラッシュ！」

D・バイソン「ごおおおお！」

バディン「D・バイソン！」

ジーク「よし、6人で行くぜ！」

そう言うと、6人は中に舞い回転し始めた。

ゴーク「超力ダイナマイトアタック！」

バディン「ぐああああ！」

D・バイソン「バディン様！」

ジーク「てめえには、これだオーレバズーカ！」

そう言うと、どこからともなくオーレバズーカが転送された。

ジーク「ハイパーストレージクリスタルセットオン！チャージ！」

ゴーク「オーレバズーカ、オーレ！ファイアー！」

D・バイソン「ぐああああ！」

D・バイソンは粉碎された。

吾郎「見事だ。」

リキ「まさかここまでやるとは．．．」

バディン「おのれ．．．ガンマジンはもういい．．．だが、このま

ま黙って、終わりにするつもりはない．．．D・クラーゲン！」

D・クラーゲン「キイキイキイ！」

D・クラーゲンの光線でD・バイソンは巨大化して復活した。

D・バイソン「まだまだ終わらねえぜ！」

ジーク「しつこいだよ！」

モバイレーツ「ゴークイガレオン！」

ゴーク「豪獣ドリル！」

ゴーカイジャー「「海賊合体、完成ゴーカイオー！」」  
アイルム「完成！豪獣神！」  
D・バイソン「食らえ！」  
そう言つて、角からまた光線を放つてきた。  
ジーク「っ．．．やるじゃねえか．．．」  
アイルム「ここは俺がやる！シールドモード！」  
D・バイソン「何！？」  
ジーク「とつと決めるぜ、風雷丸、レンジャーキーセット！」  
風雷丸「ニンニンニン、ニンニンニンニンニン！お任せください、  
海賊と忍者、ひとつになりて、天下御免の手裏剣装備！ハリケンゴ  
ーカイオー、推参！」  
アイルム「豪獣電撃ドリルスピン！」  
D・バイソン「ぐああああ！」  
エリス「ゴーカイ無限手裏剣！」  
D・バイソン「ぐおおおお！」  
ティア「お次は、手裏剣チエーンです。」  
D・バイソン「ぐああああ！」  
ジーク「とどめだ！」  
ゴーカイジャー「「ゴーカイ風雷アタック！」」  
風雷丸「どんどん増えます、必殺奥義・乱れ桜！参らん！」  
D・バイソン「ば、馬鹿な！！！」  
風雷丸の分身攻撃でD・バイソンは粉碎された。  
バディン「おのれ．．．撤退する。」  
風雷丸「ふうう、いい汗かいたでござる。」  
そう言つて、戦闘は終了した。  
そして、カイルとも合流して、再度奥へ行き、そこにはカプセルが  
2つと人面岩の形の置物があつた。  
裕司「どうやら、大丈夫だったようですね．．．」  
エリス「なるほど、これが噂のガンマジンか．．．」  
樹里「ええ、妖魔大戦の時にまた現れて、一緒に戦ったんだけど、

その後、最後の戦いの前に眠りについてもらったの、いつか来るべき日のために．．．」

フィオネ「そうだったんですか．．．」

メルト「このカプセルは？」

桃「これは、ブルドント2世とその世話係でガンマジンに根性を叩き直されたアチャとコチャなの。」

カイル「バラノアの皇帝の息子と、執事の二人か．．．」

ティア「どうして、そんな人達が？」

リキ「彼は、ガンマジンのおかげで、立派な戦士に成長したんだ、だから彼もガンマジンと同じ理由で眠りについたんだ．．．」

吾郎「まあ、彼らは機械生命体だから老衰で死ぬことはないんだが、時を待つという意味でここに眠っていたんだ．．．」

ジーク「なるほどな．．．」

ドリン「オーレンジャー、リキ、早く起こしてあげましょう。」

リキ「そうだな、オーレンジャー。」

昌平「わかってる。」

そう言つて、装置を弄り、カプセルが開いた。

ブルドント2世「うん、ここは、あれから僕はどれだけ眠っていたんだ．．．うん？オーレンジャー！キングレンジャーも、どうしてここに？」

裕司「どうやら、元気そうだな、2世。」

ドリン「驚かないで聞いてね、実は．．．」

その後、全てのことを説明した。

ブルドント2世「そうか．．．そんなことが．．．」

樹里「2世、あなたはこれからこのゴーカイジャーと一緒に戦ってほしいの．．．」

ブルドント2世「わかった、そのためにここまで眠りについていたので、任せてくれ。」

桃「お願いね。」

カイル「．．．ところで、あっちのカプセルの二人は寝たままだが．

ブルドント2世「．．．あの二人は後で僕が説明する、あなた達は師匠を連れてきてくれないか？師匠の力を借りるのはまだ先のような気がする．．．」

リキ「そうだな、まだ眠らせておいたほうがいい．．．」

そう言つて、アチャとコチャをカイムの転移魔法で転送し、デカベースに戻り、事の次第を説明し、正式に2世、アチャとコチャは仲間を迎え入れられた。

その後、オーレンジャー達は少し残り、ヴィヴィオたちのトレーニングにしてあげた。

吾郎「ヴィヴィオ、君がお父さんをいつか助けたいって想い、絶対に忘れちゃだめだぞ、そうすればきっと君は強くなれる。」

ヴィヴィオ「はい！パパはヴィヴィオのことを大事な娘だつて言ってくれたから、そのパパの自慢の娘になれるまで、絶対に強くなります。」

昌平「そっか．．．」

裕司「ひたむきだな．．．」

樹里「ホントね．．．」

桃「それじゃ、ホントの私達の技の見本を見せてあげるね。」

ヴィヴィオ「ありがとうございます！」

リオ「スーパー戦隊の人達の技を見れるなんて．．．」

コロナ「私も格闘技は初歩的なものだけど、興味あります。」

イクス「わくわくします。」

そして、オーレンジャーのメンバーは必殺技をヴィヴィオ達に見せた。

その後、オーレンジャー、リキ、ドリン達はヴィヴィオたちにある程度のことを教えてから元の英雄の聖地の世界に戻っていった。

## 第57話 古代の魔神と機械生命体（後書き）

どうも、今回は本編で出番がなかったガンマジンを出しました、眠りから覚ますのはもう少し先にします、次回も大いなる力の解放の話にして、さらに意外な人物が登場します。

## 第58話 生きとし生けるものを守る戦士（前書き）

どうも、前回に引き続き早めに投稿できました、今回はライブマンです、ちなみに前回言っていた意外な人物は本来なら死んだはずのメンバーが蘇ります、さらにフィオネのカイムに対しての言葉遣いが原作と違っていましたが、この話で戻ります。

## 第58話 生きとし生けるものを守る戦士

異世界 妖魔の居城

???「お久しぶりです、ルシフェル様。」

ルシフェル「お前は．．．バロンか．．．」

ルシファー「あらバロン、あなたまだ生きていたの？」

バロン「．．．貴様も居たのか、ルシファー．．．私は、自分の才能が貴様より上だと証明するまで、死なんさ．．．それより、ルシフェル様、今度の作戦、私に一任していただけませんか？」

ルシフェル「何か策があるのか？」

バロン「はい、奴らに精神的なダメージを与える最高の策です。」

ルシファー「へえ、自信満々ね、まああなたの場合、その自信たっぷりな時ほど、足元をすくわれるのよね．．．」

バロン「黙れ！ルシファー！ルシフェル様の娘だからといって、いい気になりおつて、今回の作戦が成功した暁には、貴様などより私のほうが優秀であることを証明してくれる！」

ルシフェル「．．．いいだろう、やってみる．．．バロン、成功した暁にはお前は私の右腕に抜擢しよう。」

ルシファー「お、お父様!？」

バロン「はは！ありがき幸せ．．．では．．．」

そう言つて、バロンは出て行った。

ルシファー「お父様！どういふことですか!？」

ルシフェル「落ち着け、後で説明する．．．今は退室しろ．．．」

ルシファー「．．．はい、わかりました．．．」

そう言つて、ルシファーは渋々退室した。

ルシフェル「サンダール．．．」

サンダール「はは、ここに。」

ルシフェル「サンダール、こつちへこい．．．」

サンダール「御意」

そう言つて、ルシフェルはサンダールになにやら耳打ちした。

アカデミア島

今、カイク、フィオネ、なのは、スバル、ティアナ、ギンガのメンバーは獅子王博士、如月美冬に頼まれ、科学アカデミアに来ていた。  
(途中GGGから凱とルネも合流。)

カイク「ここが科学アカデミアか．．．」

フィオネ「ここは、たしかライブマンの方々、ゆかりの地ですからね．．．」

美冬「ああ、そうだ、話によると昔武装頭脳軍ボルトの攻撃で大勢の犠牲者を出したそうだ．．．」

獅子王博士「僕も聞いたことがある、しかし、如月名誉会長の学生の頃には、立派に再建され、本来の姿になったそうだ．．．」  
なのは「そうなんですか。」

凱「ああ、でもある場所には当時の犠牲者の墓や慰霊碑があるところがあるんだ．．．」

鶴「それにわしも感じる、ここには犠牲になったものたちの霊が眠っているのを．．．」

とそこへ、ユーノが来た。

なのは「ユーノ君。」

ユーノ「なのは。」

カイク「ユーノか、元気そうだな．．．」

ユーノ「カイクもね、ヴィヴィオは元気？」

カイク「ああ、おかげさまでな．．．お前には、ヴィヴィオがいつもちよくちよく無限書庫には世話なってるしな．．．」

ユーノ「いいよ、ヴィヴィオみたいな本が好きな子なら大歓迎だよ。」

フィオネ「ところで、今回は特別講師で来られたのですよね？」

ユーノ「ええ、今回、無限書庫の記録と牧野先生たちから頂いた記録にある科学の発展における過ちというもので．．．獅子王博士の

助手ということだ．．．」

獅子王博士「．．．なにせ、ここは科学の追及で過ちを犯した者たちが居たからね．．．」

ルネ「じじい．．．」

美冬「うむ、だからこそ、知ってもらいたいんだ、科学の発展には忘れてはいけないものがあるということだ．．．」

カイル「ああ、それはきつと先輩達が望んでることだな．．．」

フィオネ「そうですね．．．」

ユーノ「とりあえず、科学アカデミアの科学博覧会の期間は、一般の人達も来るしね．．．」

カイル「そうだな、今日はその前日だからな、とりあえず、子供たちも明日以降、見学に来る予定だ．．．」

なのは「ヴィヴィオも楽しみにしてましたからね。」

フィオネ「そうですね．．．」

とその時、会場に設置してあった花瓶の花の花びらが一枚が落ち、それに合わせてカイルの表情が険しくなった。

美冬「どうしたんだ、カイル。」

カイル「．．．どうやら、誰かが来たようだな．．．」

なのは「え!？」

鶴「ほんとか?」

その直後、外で待機していたティアナから連絡が来た。

ティアナ「なのはさん、大変です、妖魔が現れて．．．」

凱「なんだって!？」

ルネ「カイル．．．あんたって、最近本当に人間離れしてきたね．．．」

カイル「この間の一件で、どうやらさらに色々な感覚や知識が身に付いたらしくてな．．．とにかく行くぞ。」

なのは「はい!」

フィオネ「そうですね。」

そう言っつて、この場に獅子王博士、美冬、鶴を残して、外のメンバ

「のところへ行った。」

科学アカデミア 屋外

外のスバル、ティアナ、ギンガの3人だけでスカルソルジャー、スカルナイトを全滅させた状態だった。

スバル「これで、あなたただだよ。」

バロン「ほう．．．やるな．．．」

ティアナ「舐められたものね、雑魚相手に負ける相手じゃないわよ。」

ギンガ「でも、あの余裕はいつたい．．．」

とそこへ、カイクたちも来た。

なのは「みんな、よくやったよ。」

ルネ「でも、あたしら出る幕はなかったみたいね．．．」

バロン「馬鹿め、これで終わりと思うな、これからが本番だ、出でよ、愛憎の仮面、復讐の仮面、不動の仮面。」

そう言うと、3人の仮面をつけた敵が現れた。

愛憎の仮面「．．．．．」

復讐の仮面「．．．．．」

不動の仮面「．．．．．」

凱「こ、これは？」

バロン「彼らは、私の忠実なる僕だよ、さあ、行きたまえ。」

そう言つて、向かつて行き、カイク、フィオネが不動の仮面、なのは、凱、ルネが復讐の仮面、スバル、ティアナ、ギンガが愛憎の仮面と戦っていた。

カイク「！．．．（この男の動き、どこかで．．．）」

凱「この仮面の男は、いつたい誰なんだ？」

ギンガ「（この動きは、どこかで見たような．．．）」

バロン「くくくく．．．正体を知ったときの驚きが楽しみだ．．．」

カイク「面倒だ、フィオネ、ゴーグルファイブで行くぞ！」

フィオネ「わかりました。」

カイク・フィオネ「豪快チェンジ！」  
モバイレーツ「ゴークルファイブ！」  
カイク「ゴークルレッド！」  
フィオネ「ゴークルブルー！」  
フィオネ「行きます！ブルーリング！」  
カイク「レッドロープ！」  
不動の仮面「……………！」  
今の一撃で仮面が割れた。  
フィオネ「あ、あなたは！？」  
カイク「ま、まさか！？」

なのは「デイバインシューター！」  
復讐の仮面「……………！」  
凱「ルネ！」  
ルネ「わかつてるよ！」  
凱「ルネ」「はああ！」  
二人の攻撃で仮面が割れた。  
凱「あ、あなたは！？」  
なのは「まさか！？」

ティアナ「クロスファイアシュート！」  
愛憎の仮面「……………！」  
ギンガ「スバル！」  
スバル「わかつてる！」  
スバル・ギンガ「ダブル・ナックルバンカー！」  
敵の仮面が二人の同時攻撃で割れた。  
スバル「え！？」  
ギンガ「まさか！？」

全員一同、驚きを隠せなかった。

カイク「ヴァリアス!?」

凱「騎士ゼスト!?」

スバル・ギンガ「母さん!?」

なんと、3人の正体はカイクとフィオネの故郷の元近衛騎士団長のヴァリアス、ルーテシアとアギトの仲間のゼスト、そして、最後はスバルとギンガの母のクイントだった。

なのは「フィオネさん、スバルのお母さんとゼストさんはわかりますけど、あの男の人は?」

フィオネ「あの人は、私達の故郷の近衛騎士団長でガウと相打ちになつて、死んだはずなのですが・・・」

ティアナ「あんた、いったいどういふつもり!?」

バロン「おい、そんな言い方はないだろう、せつかく戦闘機人としてだが、蘇らしてやったんだぞ、もつとも、今は私の傀儡だから・・・」

「

ルネ「なんですって!?」

スバル「母さん!私だよ、スバルだよ!」

クイント「・・・」

ギンガ「だめよ、スバル、今は意識がない状態よ。」

スバル「で、でも・・・」

それを見たカイクは、なのはに耳打ちした。

なのは「・・・わかりました・・・スバル、今はやるしかないよ、倒さない程度に戦うよ。」

そう言つて、全メンバー渋々ながら戦いをはじめ、しばらく戦つていると、カイクがベガに念話を送った。

カイク「(ベガ、どうだ?)」

ベガ「(マスター、今解析が完了しました。)」

カイク「(よし、それなら・・・)」

それを聞いた、カイクはベガを構えなおした。

カイク「ベガ、ガンモード!レンジャーキーセット!」

ベガ「ファイナルウェーブ!」

カイク「ベガストライク！」  
カイク攻撃をバロンに食らわせた。  
バロン「ぐああああ！．．．おのれ、私を狙ってくるとは．．．ま  
あいい、今日のところは退こう。」  
そう言つて、敵は撤退した。

その後、アカデミアの建物の中に戻った、メンバーはカイクのベガ  
が解析したデータを見ていた。

獅子王博士「ふむ．．．なるほど、確かに戦闘機人だな．．．」  
カイク「しかし、まだあいつの手から解放する手がある。」  
なのは「ホントですか！？」

獅子王博士「ああ、しかし、ちょっと難しい作業になるがの．．．」  
カイク「そういえば、スバルはどこへ？」

ティアナ「スバルなら、さっきギンガさんと一緒に外の方へ行きま  
したけど．．．」

スバルサイド

スバル「お母さん．．．」

ギンガ「スバル．．．」

スバル「どうしたらいいの．．．母さんには、私の声が届かなかっ  
た．．．でも、諦めきれないよ．．．」

フィオネ「それは当たり前よ。」

ギンガ「フィオネさん。」

フィオネ「スバル、あなたがお母様のことをどれだけ慕っていたか  
は先ほどの戦いを見ればよくわかるわ．．．私も父と兄を失った身  
だからよくわかるわ．．．」

ギンガ「フィオネさんにお兄さんが居たんですか？」

フィオネ「ええ、私の兄は昔、故郷の一部の上流階級の不正を知つ  
たがために人ではない存在にされたんです．．．その後、再会した  
時、カイクさん．．．いえ、カイクが私の代わりに兄さんを苦しめ

から救ってくれたんです……」  
ギンガ「そ、それって……」  
フィオネ「はい……二人の想像通りですね……」  
スバル「フィオネさん……」  
フィオネ「私は、兄さんをあのような形でしか、救うことが出来なかった……だけど、まだ僅かでも可能性があるならもう少し、足掻いて、スバル。」  
「???」  
「そうね、彼女の言う通りよ。」  
とそこへ、一人の女性が3人の前に現れた。  
フィオネ「あなたは！もしかしてめぐみ先輩!？」  
ギンガ「ええ!?それじゃ、あなたはスーパー戦隊の方ですか？」  
めぐみ「ええ、私は岬めぐみ、超獣戦隊ライブマンのブルードルフインだったの……ねえ、あなた達、ちょっと付いてきてくれる？」  
スバル「どこへ行くんですか？」  
めぐみ「……私達の友人の眠る場所よ……」  
そう言つて、めぐみは3人を案内した。

アカデミア島 とある海岸

そこには、4人の男性が居た。

めぐみ「勇介、丈、鉄也、純一。」

勇介「めぐみ、来たか。」

丈「ところで、その3人は？」

めぐみ「実はね……」

そう言つて、4人に事情を話した。

鉄也「そうか……君が今のゴーカイジャーか……」

純一「そして、君達がゴーカイジャーの仲間の魔導師か……」

勇介「自己紹介が遅れたね、俺は天宮勇介、レッドファルコン。」

丈「俺は、大原文、イエローライオン。」

鉄也「俺は、矢野鉄也、ブラックバイソン。」

純一「僕は、相川純一、グリーンサイ。」

ギンガ「どうも、こちらこそ．．．ところで、こちらの4つのお墓は？」

勇介「．．．俺達の友人の墓だ．．．」

フィオネ「もしかして、鉄也先輩、純一先輩の兄さんと姉さんとポルトの幹部だった月形剣史さんと仙田ルイさんの．．．」

丈「ああ、そうだ。」

鉄也「俺達の兄貴は、勇介さんたちを庇って、命を落としたんだ。」

純一「だから、俺達も君達の気持ちはよくわかるよ。」

勇介「だが、死んでしまつては敵であつても関係ないさ．．．」

丈「そして俺は、戦いを終えた後、ここに戻つて足掻いてた、若さで突つ走つた学生が同じ過ちを繰り返さないように．．．あいつらもそれを望んでるんじゃないかと思つてな．．．あいつらの魂だけでも救つてやりたいと思つたからな．．．」

スバル「魂だけでも．．．」

とその時、通信が入つた。

ティアナ「ちよつと、スバル、あんたどこにいるのよ、カイクさんたちが探してるわよ。」

スバル「ティア！？」

なのは「スバル、ギンガ、クイントさんを助けられるかもしれないよ。」

ギンガ「ほ、ホントですか！？」

フィオネ「急ぎましょう、先輩達も。」

めぐみ「ええ、行きましょう。」

そう言つて、全メンバーで科学アカデミアに戻つた。

## 科学アカデミア

フィオネたちは戻つた時には、ジークたちを始めとした他のメンバーも来ていた。さらにライブマンのメンバーも伴っていたため、さすがに驚かれたが、その後、ライブマンのメンバーも含め、作戦会議が行われた。

カイル「実はな、さっきの戦闘の際にベガの奴に、3人の身体を分解させていたんだ。」

獅子王博士「うむ、それで、今調べた結果、彼らの首の裏のところにある鉱石が埋め込まれていることがわかったんじゃないよ。」

カイル「調べたところ、この鉱石から奴の脳髄からの指令を受けるようになっていることが判明した。」

めぐみ「つまり、この鉱石を破壊すれば、元に戻るの。」

スバル「ホントですか!？」

アギト「旦那を助けられる・・・。」

シグナム「アギト・・・。」

勇介「だが、この鉱石を破壊するには、力の加減が難しい。」

丈「ああ、下手に威力のある技を叩き込むと、助けるべき人間を殺すことになる。」

ギンガ「そ、そんな・・・。」

カイル「・・・とりあえず、ヴァリアスは俺が何とかする。」

シグナム「・・・騎士ゼストとは縁がある、ここは私がやる。」

フェイト「でも、問題なのはクイントさんなんだよ・・・。」

ギンガ「・・・ここ私が・・・。」

ギンガが言おうとしたとき、それを遮るかのようにスバルが口を開いた。

スバル「あたしがやる、あたしが絶対に母さんを助ける!」

ゲンヤ「スバル・・・。」

ジーク「・・・決まりだな、スバル、やるなら絶対に成功させる、

俺達の信条だ、欲しいものはすべてこの手で掴みとる、それが海賊だ!」

スバル「はい!」

鉄也「どうやら、大丈夫そうだな。」

純「そうだね、鉄ちゃん。」

フィオネ「・・・カイル・・・。」

カイル「・・・久しぶりだな、その呼び方は・・・。」

フィオネ「ええ、私も自分の気持ちに素直になることにするから、これからはこの呼び方に戻すわ。」

カイクム「．．．そうか、お前がそうしたいんならそうすればいいさ．．．」

そう言つて、カイクムはフィオネの頭を撫でた。

フィオネ「．．．もう、相変わらず兄さんと同じことをするのね．．．  
．／／／」

そんなこんなで、作戦会議が終わり、次の日、全員で警備を固めていた時、またしても、バロンが襲来してきた。

バロン「諸君、ごきげんよう。」

勇介「バロン！お前だったのか！？」

バロン「おや？ライプマンまでいるとはな．．．」

ジーク「先輩、あいつはいったい誰だ？」

丈「あいつは、上級妖魔のバロンつてやつだ、ルシフェルを崇拜している、もつとも娘のルシファーには対抗意識を燃やしつつ、いつも負けてるみたいだけだな．．．」

バロン「黙れ！あんなルシフェル様の娘というだけで、才能は私のほうが上だということを証明してやる、出でよ我が3人の僕。」

そう言つて、3人を出してきた。

クイント「．．．．．」

ゼスト「．．．．．」

ヴァリアス「．．．．．」

ゲンヤ「く、クイント．．．」

アギト「だ、旦那．．．」

カイクム「．．．今、救つてやる．．．行くぞ！」

ゴーカイジャー「『豪快チェンジ！』」

モバイレーツ「『ゴーカイジャー！』」

ゴーカイセルラー「『ゴーカイジャー！』」

凱「『アーマー、セットアップ！』」

ルネ「『イークイップ！』」

なのは・フェイト「レンジャージャケット！セットアップ！」  
シグナム・ヴィータ「レンジャージャケット！セットアップ！」  
フォワード陣その他「レンジャージャケット！セットアップ！」  
「」

流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

カイル「ゴークイキング！」

ジーク「ゴークイレッド！」

フィオネ「ゴークイブルー！」

メルト「ゴークイイエロー！」

エリス「ゴークイグリーン！」

ティア「ゴークイピンク！」

アイム「ゴークイシルバー！」

カイル「ジーク「海賊戦隊！」

ゴークイジャー「ゴークイジャー！」

バロン「奴らだけでは厳しいか．．．こうなったら、私も．．．改造

妖魔獣G・スパイダー！」

G・スパイダー「ははは！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

カイル「さて．．．」

フィオネ「派手に行きましょう！」

ジーク「カイル、シグナム、スバル、お前達はあの3人を何とかしろ。」

フィオネ「あの改造妖魔獣は、私達が．．．」

カイル「．．．わかった、頼むぞ。」

シグナム「アギト！」

アギト「おうよ、ユニゾンイン！」

なのは「私達も援護に行くよ！」

フワード陣「はい！」「」

スバル「絶対に助ける！」

そう言っつて、二手に分かれた。

カイク「行くぞ．．．！」

そう言っつて、カイクは「縛」のモジカラで動きを封じた。

カイク「ヴァリアス、少し手荒いが我慢しろ！キングテクター！」

カイクは「ヴァリアスの首の後ろに手を置いた。

カイク「ブレスロツトル！必殺拳ソニックハンマー！」

ヴァリアス「．．．．．！」

カイクが繰り出したソニックハンマーの衝撃でヴァリアスの身体に組み込まれた、鉱石が砕け散った、その瞬間、ヴァリアスの意識が戻った。

ヴァリアス「っ．．．私は、いつたい．．．」

カイク「どうやら、成功したようだな．．．」

ヴァリアス「お前は、誰だ！？」

カイク「わからないか？あんたには剣で借りを返し損ねた奴だよ。」

ヴァリアス「！まさか、その声はカイクか！？だが、その姿は？」

カイク「話は後だ、他の奴らを片付けてくる、あんたは少し休んでる。」

そう言っつて、カイクは雑魚の相手に向かって行つた。

ヴァリアス「．．．前と剣の動きが違う．．．もはや、私など足元

にも及ばないだろう．．．強くなつたな、カイクは．．．」

ヴァリアスは常々痛感した。

シグナムサイド

キャロ「マジランプバスター！」

フェイト「プラズマバレット！」

ゼスト「．．．．．！」

フェイト「今だよ、シグナム！」

シグナム「心得た！」

エリオ「獣奏剣！」

エリオは獣奏剣を奏で、それによりシグナムの周りに特殊な結界を張ってシグナムを援護した。

シグナム「エリオ、助かる！」

アギト「（旦那！）」

シグナム「騎士ゼスト、目覚める！真・飛竜一閃！」

シグナムの一撃により、ゼストの身体の鉱石が破壊された。

ゼスト「ぐ．．．ここ、ここは、俺は確かに死んだはずだ．．．」

アギト「旦那！」

ゼスト「アギト！？私はいつたい．．．？」

シグナム「説明は後だ、今は少し休んでてくれ。」

ゼスト「．．．わかった、そうさせてもらう。」

そう言つて、シグナムとフェイトはエリオとキャロにゼストを任せ、他の雑魚退治に向かった。

スバルサイド

なのは「デイバインシューター！」

ティアナ「ヴァリアブルシュート！」

ヴィータ「アイゼン！」

クイント「．．．．．！」

ギンガ「スバル！今よ！」

スバル「うん！わかった、欲しいものはすべてこの手で掴みとる！」

スバルはクイントに向かって行つた。

スバル「天火星秘技・流星閃光！」

スバルは威力を調整しつつ、クイントの首の裏の部分に攻撃を集中させ、鉱石を破壊した。

クイント「っ．．．」

クイントは崩れ落ちるように倒れた。

スバル・ギンガ「母さん！」

ゲンヤ「クイント！」

3人はクイントに駆け寄った。

クイント「うん、こ、ここは？あれ？あなた、それにスバルにギンガ？」

スバル・ギンガ「母さん！」

二人は感激のあまり、クイントに抱きついた。

ティアナ「よかったわね、スバル・・・」

それを見た、バロンは驚きを隠せなかった。

バロン「ば、馬鹿な、どうやって!？」

カイル「簡単な話だ、前の戦闘の際にデータを俺のこの剣である、ベガに解析させていたんだ、その後、さらにくわしく解析したところ、彼らの首の裏のところにある鉱石が埋め込まれていることがわかった、だから、そこを狙って、攻撃をかけて鉱石だけを破壊したのさ。」

バロン「馬鹿な、倒すよりも困難な手段を用いたというのか、下手をすれば、まったく無駄な努力になるものを・・・」  
フィオネ「残念でしたね、私達は海賊です。」

ジーク「欲しいものはすべてこの手で掴みとる、それが海賊つてもんだ！」

メルト「そういうことね。」

エリス「あとは、あんたを倒すだけよ。」

ティア「そうです。」

バロン「くっ・・・この私の辞書に敗北という文字はない！」

フィオネ「だったら、今日この場で叩き込みます！」

めぐみ「ゴーカイジャー！私たちの力を使って！」

ジーク「おう！わかったぜ！」

ゴーカイジャー「『豪快チェンジ！』」

モバイレーツ「ライブマン！」

ジーク「レッドファルコン！」

ティア「ブラックバイソン！」

エリス「グリーンサイ！」

メルト「イエローライオン！」  
フィオネ「ブルードルフィン！」  
フィオネ「私達、生きとし生けるものを守る戦士……」  
ジーク「超獣戦隊！」  
ゴーク「ライジャ―」「ライブマン！」  
G・スパイダー「しゃらくさい！」  
ゴーク「ライジャ―」「ライブラスター！」  
G・スパイダー「ぐああああ！」  
G・スパイダーは5人のライブラスターで吹き飛ばされた。  
アイルム「こつちも、行くぞ！豪快チェンジ！」  
ゴーク「カイスルバー」「ゴークカイスルバー、ゴールドモード！」  
アイルム「ゴークカイスルバー、ゴールドモード！レンジャーキーセツ  
ト！」  
ゴーク「カイスピア」「ファイナルウエーブ！」  
カイルム「レンジャーキーセツト！」  
ベガ「ファイナルウエーブ！」  
アイルム「ゴークカイレジェンドクラッシュ！」  
カイルム「ベガスラッシュ！」  
メタルダー「メタルボンバー！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
スカルナイト「カラカラカラ！」  
3人は一気に雑魚を粉碎した。  
フィオネ「次はこれです！ドルフィンアロー！」  
メルト「ライオンバズーカ！」  
G・スパイダー「ぐつ……」  
ティア「次は、私達です、バイソンロット！」  
エリス「サイカッター！」  
G・スパイダー「ぐつ……」  
ジーク「次は俺だ！ファルコンセイバー！」  
G・スパイダー「ぐつ……おのれ……」

ジーク「食らいな！ファルコンブレイク！」

G・スパイダー「ぐあああああ！」

ジーク「よし、トリプルバズーカだ！」

フィオネ・メルト「OK！」

そう言うのと、ファルコンセイバー、ドルフィンアロー、ライオンバズーカの3つの武器を合体させた。

ジーク「オラ！」

G・スパイダー「ぐあああああ！」

ジーク「よし、バイモーションバスターだ！」

ジーク声に反応して、ライブマンの必殺武器バイモーションバスターが転送されてきた。

G・スパイダー「あ、あ．．．」

ゴークイジャー「バイモーションバスター！」

G・スパイダー「ぐあああああ！」

G・スパイダーは完全に倒された。

バロン「ば、馬鹿な．．．」

そう言うのと、バロンは逃げようとしたが、急に動けなくなった。

バロン「う、動けん．．．」

とそこへ、サンダーが現れた。

凱「お前は！？」

カイク「サンダー！」

バロン「サンダー、貴様これは？」

サンダー「私が貴様に影縫いの術を使ったからだ．．．」

バロン「な、何のために！？」

サンダー「それは、貴様は落とし前をつける前に消えようとしたからだ．．．相手に戦力強化を促しただけの失敗だ、ルシフェル様の怒りも相当なものだ．．．」

バロン「ば、馬鹿な、私にもしものことがあれば、どれだけ妖魔に損失が．．．」

サンダー「これのことか？」

そう言って、ある石を出した。

バロン「そ、それは!？」

なのは「何、あの石は!？」

勇介「あれは妖魔石!？」

アイム「妖魔石？」

めぐみ「あの石は、上級妖魔が死んだ時、誕生するもので、あれにはその上級妖魔の力がすべて詰まっているの……」

とその時、ルシファー、ルシフェルが現れた。

ルシフェル「サンダール、よくやった」

サンダール「はは!」

ルシファー「バロン……あなた随分とふざけたことをしてくれたわね……よくもお母様の妖魔石を……」

丈「なんだって!？」

鉄也「あれは、ルシファーの母のヘレンの妖魔石だったのか!？」

純「……ということは、まさか!？」

バロン「ル、ルシフェル様……」

ルシフェル「……よくも貴様、我が最愛の妻、ヘレンをこのような姿に変えてくれたな……わかってるだろうな……」

バロン「……こ、これは……その……」

ルシフェル「サンダール、後は任せる。」

サンダール「はは!」

そう言って、サンダールは近づいていった。

バロン「まさか、その剣で私を斬るつもりか？」

サンダール「それには及ばん。」

ルシファー「あんななんか、サンダールの刀の錆にもならないわ。」  
サンダール「……お嬢の敵は、私の敵だ……だから、早いとこ

逝け!」

そう言って、サンダールは持っていた鉄扇でバロンを一刀両断にした。

バロン「ぐああああ!」

サンダール「ふん！」

バロンは死にそこには、妖魔石が落ちていた。

ルシフェル「．．．これで、少しは足しになる、そいつらに関しては我々は手は出さん、だがこれで終わりにはせん、D・クラーゲン！」

D・クラーゲン「キイイキイイ！」

そう言つて、G・スパイダーを巨大させた。

G・スパイダー「まだやられはしない！」

ルシフェル「さらに私の妖魔獣士、D・ワイバーンよ！」

D・ワイバーン「ははは！」

スカルキラ「「「「シャアア！」」」

スカルナイト「「「カラカラカラ！」」」

スカルソルジャー「「「ガガガガガ！」」」

そう言つて、巨大化した妖魔獣士と雑魚を出してから撤退していった。

ジーク「上等だ！」

カイク「キングインストローラー！」

キングインストローラー「ライブロボ！ライブボクサー！」

モバイレーツ「ゴークイガレオン！」

ゴークイセルラー「豪獣ドリル！」

凱「ギャレオン！」

ギャレオン「ガオオオオ！」

ゴークイジャー「「「海賊合体、完成ゴークイオー！」」」

アイム「完成！豪獣神！」

命「ジエネシツクドライブ！」

凱「ファイナルフュージョン！」

凱「ガオガイガー！」

カイク、なのは、フェイトがライブロボへ、スバルとギンガがライブボクサーに乗り込んだ。

アイム「雑魚は、俺と凱でやる、お前達は、あいつらを．．．」

ジーク「わかったぜ！」

そう言つて、二手に分かれて戦いを始めた。

アトム「豪獣電撃ドリルスピン！」

スカルソルジャー「ガガガガガ！」

凱「ガジェットツール！ボルディングドライバー！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

スカルソルジャーとスカルナイトは全滅した。

スカルキラー「シャアアア！」

アトム「くっ．．．相変わらず、面倒だな、だがこれで決める、行くぞ凱！」

凱「わかった、ガジェットツール！」

アトム「レンジャーキーセット！」

凱「ヘル・アンド・ヘヴン！」

凱「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォー．．．ふん！」

凱「ウイータ！」

アトム「豪獣トリプルドリルドリーム！」

スカルキラー「ぐああああ！」

二人の同時攻撃でスカルキラーは全滅した。

カイク「超獣剣！」

カイク・なのは・フェイト「ストロングクラッシュダウン！」

「

ゴーカイジャー「ゴーカイケン！ゴーカイスラッシュ！」

G・スパイダー「ぐあああ！」

スバル「次はこっこの番だよ！行くよ、ギン姉！」

ギンガ「ええ！行くわよ、スバル！」

スバル「ミラクルビッグブロー！」

G・スパイダー「ぐあああ！」

G・スパイダーは倒された。

D・ワイバーン「おのれ、食らえ、マグナムトルネード！」

そう言つて、3体のロボットに竜巻攻撃を繰り返して来た。

ゴーカイジャー「うわああ！」

カイル・なのは・フェイト「きゃあああ！（うわああ）」

スバル・ギンガ「うわああ！」

ゴーカイオー、ライブロボ、ライブボクサーの3体は吹き飛ばされた。

カイル「こうなったら．．．スバル、ギンガ！」

スバル「わかりました！」

スバル・ギンガ「合体！スーパーライブディメンション！」

合体コードを入力して、ライブロボとライブボクサーは合体した。

カイル「完成！」

5人「スーパーライブロボ！」

ジーク「よし、こっちもだ！」

ゴーカイジャー「レンジャーキーセット！」

ジーク達はライブマンのレンジャーキーを使うと、もう一体のスーパーライブロボが出現した。

D・ワイバーン「何!？」

ジーク「ド派手に行くぜ！」

ゴーカイジャー・4人「ダブルスーパービッグバースト！」

D・ワイバーン「ぐああああ！」

D・ワイバーンは、2体の同時攻撃で一撃で撃破された。

スーパーライブロボ「ガオオオオ！」

科学アカデミア

戦闘終了後、クイント、ゼスト、ヴァリアスが事情を聞き、それぞれ礼を言った。

ゼスト「ありがとう、シグナム。」

アギト「旦那．．．」

ヴァリアス「カイル、すまなかった．．．」

カイル「気にするな、あんたには借りがあったからな．．．」

クイント「ギンガ、スバル．．．大きくなったわね．．．」

スバル「母さん．．．」

ギンガ「母さん．．．」

クイント「あなたも、ギンガとスバルを育ててくれてありがとう．．．」

．．．

ゲンヤ「クイント．．．」

美冬「よかった．．．」

鶴「そうじゃな．．．」

ジーク「さて、俺達は失礼するか．．．」

ルネ「そうだね。」

その後、それぞれ積もる話をして、それ以外のメンバーは席をはずし、カイムはヴィヴィオたちを迎えにいった。

ヴィヴィオ「パパ！」

カイム「ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオはカイムに抱きつき、抱っこをせがんできたのでカイムはヴィヴィオを抱っこした。

ヴァリアス「カイム、この娘は？」

ヴィヴィオ「パパ、この人誰？」

ヴァリアス「ぱ、パパ！？お前の娘か？」

カイム「ああ、養子だが、俺の大事な娘だ、それより、これからどうするんだ？」

ヴァリアス「．．．できれば、私は陛下の元に戻り、お前たちの代わりに都市を守ろうと思う。」

カイム「．．．わかった、それじゃ、俺が送って行こう。」

とその時、フィオネが来た。

フィオネ「待って、カイム、私もつれて行ってくれないかしら？」

カイム「ああ、構わないが．．．」

ヴィヴィオ「あれ？どうして、フィオネさん、パパのことを呼び捨てにしているの？」

フィオネ「ふふふふ．．．それはね、私も自分に正直になろうと思

っただけ．．．ヴィヴィオも私のことをママって呼んでもいいのよ？」

ヴィヴィオ「ホント、パパ、ママがまた増えた！」

ヴィヴィオは嬉しそうだが、カイムは内心、あとが大変だなと思っていた。

めぐみ「．．．どうやら、大丈夫そうね。」

勇介「ああ、彼らなら守れるさ、生きとし生けるものを．．．」

丈「命の大事さを理解しているからな．．．」

鉄也「そうだな、そろそろ俺達は帰ろうか。」

純「そうだね、戻ろうよ。」

そう言つて、5人は光となってその場から消えた。

その後、ライブマンのメンバーが帰った後、カイムはヴァリアス、フィオネ、アイム、ヴィヴィオを伴つて、故郷へ戻っていた。その後、ヴァリアスが生き返ったことにはリシアも驚いていたが、その後フィオネは団長の地位を退任して、ヴァリアスが騎士団長の地位に戻った。アイムもまたルキウスではなくアイムとして生きることをリシアに告げた。

リシア「うむ、もはやお前の罪を咎める気はない、それよりもカイムたちと一緒に戦ってくれ。」

アイム「はは、陛下！」

リシア「それより、ヴィヴィオも元気だったか？」

ヴィヴィオ「はい、パパのおかげです！」

リシアは初めて連れてきた時以来、ヴィヴィオのことが大層気に入った。

その後、リシアたちがヴィヴィオのことを可愛がっている間にフィオネに連れられて、カイムはフィオネの兄のクーガーの墓参りに来た。

フィオネ「兄さん．．．」

カイムも墓の前で手を合わせて、冥福を祈った。

その後、フィオネがカイクに抱きついてきた。

カイク「フィオネ？」

フィオネ「．．．お願い、少しだけ、このままで居させて．．．」  
カイク「．．．ああ、わかった。」

そう言つて、カイクはそつとフィオネを抱きしめ返した。

その後、カイクたちは海鳴市に戻り、ゼストはその後、ルーテシアの母のメガーヌと結婚し、二人と一緒に異世界カルナージに住み、この二人を守ることにした。（ちなみにこの3人にもレンジャージャケットが渡され、3人ともマジレンジャーをベースにした。）そしてクイントは、娘達と一緒に戦うことを選んだ。（ちなみにクイントのレンジャージャケットはゲキレンジャーをベースにした。）

## 第58話 生きとし生けるものを守る戦士（後書き）

どうも、今回の大いなる力のスーパーライブロボは別扱いにしました、そして、フィオネもヴィヴィオのママになりました、今回復活したメンバーも今後とも活躍する場面が出します、次回はかなり前のスーパー戦隊の大いなる力にしようと思しますのでよろしくお願ひします。

## 第59話 見よ！デンジの力と謎の赤き戦士（前書き）

どうも、今回はデンジマンと古いスーパー戦隊にしました、さらにマニアックな特撮ヒーローも別のオーガスト作品のキャラに出ますのでよろしくお願いします。

## 第59話 見よ！デンジの力と謎の赤き戦士

デカベース

ジーク「おい鳥、お宝ナビゲート！」

ナビィ「ハイナ！レッツお宝ナビゲート！．．．痛テ！．．．フム、アンパン、アンパン、アンパン大好き、ミンナモ一緒ニアンパン食べヨウ．．．コンナンデマシタケド。」

リンディ「あ、あんパン？」

クロノ「あんパンって、あのあんパン？」

アコース「だろうね．．．でも、何のことなんだろう？」

カイル「．．．レオナ、牧野先生、わかるか？」

牧野「うーん、一人心当たりがないわけではないのですが．．．」  
とその時、ヴィヴィオ、イクスが帰ってきた、後リオとコロナも一緒に来た。

ヴィヴィオ「パパ、ただいま！」

イクス「ただいま戻りました、お父様。」

リオ「お邪魔します。」

コロナ「お邪魔します。」

すると4人の手には袋に入ったパンがあった。

カイル「ヴィヴィオ、そのパンはどうしたんだ？」

ヴィヴィオ「これはね、帰りがけにね．．．」

数時間前

ヴィヴィオたちは、帰りがけに公園で少し身体を動かしていた。

ヴィヴィオ「ふうー、ちょっと休憩したら、帰ろうか？」

イクス「そうですね。」

リオ「それじゃ、私達も今日もトレーニングの日だから、一緒に行くね。」

コロナ「最近、結構慣れてきたから、楽しみになってきたよね。」

と4人がベンチに座っていた時、パンの屋台を引いた男が近づいてきた。

「????」やあ、お譲ちゃんたち、今お帰りかい？」

イクス「あ、あの、あなたは誰ですか？」

「????」あ、自己紹介がまだだったね、ごめんごめん、おじさんは青梅大五郎って言うんだ、君達、お腹空いてないか？よかつたら、これをどうぞ……」

そう言つて、2袋のあんパンをヴィヴィオに渡した。

ヴィヴィオ「ありがとう、おじさん。」

コロナ「でも、いいんですか？私達お金は……」

青梅「いいんだよ、君たちの喜ぶ顔が見れば、それじゃ、他の子供たちにも届けなきゃ。」

そう言つて、青梅大五郎は、「デンジパン」と書かれた、屋台を引いて、去つていった。

イクス「……いい人ですね……」

リオ「ホント。」

ヴィヴィオ「それじゃ、みんなで食べようか？」

3人「……うん！」「」

そう言つて、4人はあんパンを一つずつ食べた。

現在

ヴィヴィオ「……というわけなの。」

カイクム「……青梅大五郎……たしか、電子戦隊デンジマンの……」

レオナ「キング君、正解、そうデンジブルーだったの、青梅さんはとにかくあんパンが大好きで、あんパンの匂いなら犬以上の嗅覚で嗅ぎ分けるくらいなの……」

ヴィータ「……なんか、いろんな意味ですごいな……」

メルト「でも、どうして、屋台を引いていたのかしら……」

牧野「青梅さんは、戦いの後、あんパンを子供たちに配っていたら

しいんです、青梅さんは孤児だった経験から、子供には非常に優しい人だったので・・・」  
「シャツハ」お優しい方なんですな・・・」  
「はやて」せやな、ほならその「デンジパン」って屋台を探そうや。」  
「なのは」そうだね、みんな行こう。」  
「そう言つて、メンバーは「デンジパン」の屋台を探しに行った。」

海鳴市

みんなで手分けして、探しに出たメンバー

メルト「居ないわね・・・」

ティア「子供が多く居るところに行けば居ると思つたんですけど・・・」

とその時、二人の目にあんパンを配っている、男を発見した。

青梅「はい、どうぞ。」

子供「ありがとう。」

母親「どうも、すみません。」

青梅「いえ、子供たちの笑顔が見ればいいんですよ。」

そう言つて、子供たちにパンを配っていた。

メルト「・・・居たわね・・・」

ティア「そうですね・・・」

そう言つて、二人は青梅に近づいた。

青梅「うん？君達は！」

メルト「ええ、そうですねよ、青梅先輩。」

ティア「さつき、ヴィヴィオたちがお世話になりました。」

青梅「ヴィヴィオ？」

そこで、二人は、ヴィヴィオたちのことを説明した。

青梅「そうか、さつきの子が・・・」

メルト「ええ、ヴィヴィオがカイクの娘で、イクスがジークの娘なんです。」

ティア「あと、リオとコロナは二人のお友達なんです。」

青梅「そうだったのか、道理であの子達、いい目をしていると思っ  
たよ．．．あ、そうだよかったら、これ食べるか？」

そう言つて、二人にあんパンをくれた。

ティア「ありがとうございます。」

二人は青梅から貰ったあんパンを食べた。

メルト「おいしいわね、このパン。」

ティア「そうですね、これって、どうやって作ったんですか？」

青梅「おお、興味があるのか？」

ティア「はい、私ももっとヴィヴィオ達の喜ぶ顔が見たんです、よ  
かったら教えてもらえませんか？」

青梅「よし、わかった、それじゃ教えてあげよう。」

そう言つて青梅は、二人に「デンジパン」特製のアんパンの作り方  
を教えた。

その後、二人は青梅にお礼を言った。

メルト「ありがとうございます。」

青梅「いやいや、こつちこそ楽しかったよ．．．よし、次は、大い  
なる力を解放してやらないとな．．．」

ティア「お願いします。」

そう言つて、ティアとメルトは青梅にデンジマンのレンジャーキ  
ーを渡した。

メルト「これでデンジマンの力も解放されたわね．．．」

ティア「残るスパー戦隊は、あと12ですね。」

とその時、子供たちの前にスカルソルジャーとゴーレム兵が現れた。

スカルソルジャー「ガガガガ！」

ゴーレム兵「ゴオオオ！」

子供「きゃああ！！！」

ティア「スカルソルジャーとゴーレム兵！？」

メルト「行くわよ！」

青梅「俺も行くぜ。」

メルト・ティア「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

メルトとティアはそれぞれ変身して、青梅は生身で敵に向かって行った。

メルト「はあああ！」

ティア「はい！」

青梅「といや！」

スカルソルジャー「ガガガガガ！」

ゴーレム兵「ゴオオオ！」

3人は敵を各個撃破していった。

とそこへ、突然攻撃が飛んできた。

3人「きゃああああ！！（うわあああ！！）」

バンドーラ「あはははは！」

メルト「バンドーラ！？」

青梅「バンドーラ？あれ？ヘドリアン女王じゃないのか？」

ティア「ヘドリアン女王って、たしか、ベーター一族の女王ですよ、あれはジュウレンジャーが戦った魔女バンドーラですけど……」

青梅「そうだったのか……いや、よく似てるな……」

青梅がまじまじとバンドーラを見て言った。

メルト「バンドーラ、あんたどういうつもり？」

バンドーラ「うるさい！あたしは子供の喜ぶ顔が大嫌いなんだよ、だから邪魔してやるのさ！グリフォーター、ラミィ！」

グリフォーター・ラミィ「ははは！」

バンドーラ「そして、現れよドーラデュラハン！」

ドーラデュラハン「かしこまりました！」

そう言っつて、バンドーラはドーラデュラハン、グリフォーター、ラミィの3人を差し向けた。

ドーラデュラハン「はああ！」

メルト「てい！」

ドーラデュラハン「やるな……だがこれならどうだ！」

そう言つて、自分の手に持った首を投げ、それから光線が放たれた。  
メルト「きゃああああ！」

ティア「メルトさん！」

グリフォーザー「ゴオオオ！」

ティア「きゃああああ！」

ティアがメルトに気を使った直後、グリフォーザーの攻撃を食らった。

青梅「二人とも、大丈夫か!？」

ラミィ「人の心配をしている場合かい? 変身出来ないあんたが勝てるわけないだろう、そら！」

青梅「うわああああ！」

メルト・ティア「青梅さん！」

二人は急いで、青梅に駆け寄る。

メルト「大丈夫ですか？」

青梅「ああ、大丈夫だ．．．」

ティア「やつぱり、私達3人だけじゃ．．．」

とその時、一人の男が現れた。

???「直美、あの人達か？」

直美「うん、パパ。」

???「なおくん、あの人達つて、ゴーカイジャーじゃ．．．」

直樹「．．．娘を助けてもらったからな．．．それにここで黙つてみていたら、力をくれたあの人達に申し訳ないからな．．．保奈美．．．  
．．．今回は俺だけで行つてくる。」

保奈美「うん．．．でも気をつけてね．．．」

直樹「心配するな．．．行つてくる．．．」

そう言つて、直樹は保奈美に唇に口付けをした後、向かつて行った。  
直樹「ふん！」

そう言つて、上着を投げ捨てた。

直樹「ジューピター・ビット！」

そう言つと、周りが突然暗くなり、直樹の身体に赤い色のスーツが

装着された。

バンドーラ「な、なんだい？」

メルト「ど、どうして、空が暗く？」

青梅「何が起こっているんだ？」

とそこへ、一人の男が現れた。

バンドーラ「誰だい、あんた!？」

直樹「ジユピタービット!」

メルト「ジユピタービット?」

ティア「青梅さん、あの方知っていますか?」

青梅「まさか．．．サイバーコップのあのジユピターなのか?」

メルト・ティア「サイバーコップ?」

頭の中でクエスチョンマークが出ているのを尻目に敵に向かって行った。

直樹「はあああ!」

グリフォーザー「ぐあああ!」

ラミィ「ダーリン!」

ドーラデュラハン「おのれ、食らえ!」

そう言つて、またしても頭を飛ばして攻撃してきた。

直樹「うわああああ!」

直樹は吹き飛ばされた。

バンドーラ「ドーラデュラハン、その変な奴に止めを刺しておやり!」

ドーラデュラハン「ははは!」

そう言つて、直樹に再度攻撃を加えようとした時、突然攻撃が飛んできた。

ドーラデュラハン「ぐああああ!」

カイク「大丈夫か?」

直樹「ああ、助かった．．．」

ジーク「メルトとティアも無事みたいだな．．．」

メルト「ええ、助かったわ。」

エリス「それにしても、まさか青梅先輩と一緒にとはね・・・」  
フィオネ「まあ、私達は他の方々と一緒でしたけど・・・」  
そう言つて、他のデンジマンのメンバーとなのはたちが来た。

赤城「青梅、ここに居たのか？」

青梅「赤城、みんな！」

黄山「相変わらずだよな。」

緑川「まあ、そこがいいところだけだな・・・」

桃井「とにかく、合流できてよかった・・・」

なのは「とにかく、子供たちは全員避難させたんで、今は敵を倒しましょう。」

フェイト「そのあなたもいいですよね？」

直樹「ああ、構わない。」

カイル「行くぞ！」

ゴーカイジャー「「「豪快チェンジ！」」」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ゴーカイセルラー「ゴーカイジャー！」

なのは・フェイト「「レンジャージャケット！セットアップ！」」

フォワード陣その他「「「レンジャージャケット！セットアップ！」」」

「」

流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

カイル「ゴーカイキング！」

ジーク「ゴーカイレッド！」

フィオネ「ゴーカイブルー！」

メルト「ゴーカイイエロー！」

エリス「ゴーカイグリーン！」

ティア「ゴーカイピンク！」

アイム「ゴーカイシルバー！」

カイル・ジーク「海賊戦隊！」

ゴーカイジャー「「「ゴーカイジャー!」」」

バンドーラ「こうなったら、ゴーレムキング!」

そう言うとゴーレム兵よりも強力そうな敵が現れた。

ゴーレムキング「「「ゴオオオオ!」」」

アイム「また、新しい雑魚か．．．」

メタルダー「相手もよく考えるな．．．」

ジーク「どうでもいい、ようは倒せばいいだろう．．．派手に行くぜ!」

そう言つて、分かれて向かつて行った。

赤城「ゴーカイジャー、俺たちの力を使え!」

フィオネ「わかりました!」

そう言つて、デンジマンのレンジャーキーを取り出した。

ゴーカイジャー「「「豪快チェンジ!」」」

モバイレーツ「デンジマン!」

ジーク「デンジレッド!」

フィオネ「デンジブルー!」

メルト「デンジイエロー!」

エリス「デンジグリーン!」

ティア「デンジピンク!」

ジーク「見やがれ!電子戦隊!」

ゴーカイジャー「「「デンジマン!」」」

バンドーラ「くう、相変わらず、色々な姿になって、ドーラデュ  
ラハン!やつておしまい!」

ドーラデュラハン「ははは!」

ジーク「そうは行くかよ、食らえ、デンジ真空蹴り!」

フィオネ「ブルースクリューキック!」

エリス「グリーンスピッキック!」

ドーラデュラハン「ぐああああ!」

メルト「次はこっちの番よ。」

ティア「行きます!」

メルト・ティア「デンジパンチ、デンジアッパー！」

ドーラデュラハン「ぐああああ！」

直樹「よし、こっちも行くぞ！」

ドーラデュラハン「ぐああああ！．．．おのれ、図に乗るな！」

そう言つて、ドーラデュラハンは持っていたランサーで直樹を攻撃して吹き飛ばした。

直樹「うわあああ！」

保奈美「なおくん！」

直美「パパ！」

ドーラデュラハン「ははは、思い知ったか！」

直樹「こ、この．．．許さねえ！！」

そう言つと突然目が光だし、さらに上空の空間がゆがみ始めた。なのは「な、なに、これ！？」

フェイト「もしかして、彼がこれをやったというの？」

直樹「サイバー・ギルティ！」

周囲の驚きを尻目に直樹のスーツから様々なパーツが解放され、さらに歪んだ空間から不思議なエネルギーが降りそそがれた。

スバル「ええ！？」

ティアナ「何、あれは！？」

クイント「それに、あのエネルギーはいつたい．．．」

直樹「サンダー・アーム！」

そう言つと、アームのような武器が現れ右手に装着された。

エリオ「あ、あれは！？」

キャロ「み、見たことないデバイスです．．．」

ギンガ「スーパージョウ戦隊やGGGの方々の武器とも違いますし．．．」

ジーク「おもしれえじゃねえか、こっちも行くぜ、デンジブーメランだ！」

そう言つと、5人は持っていたデンジスティックを合わせた。

直樹「ローリング・チャージャー！」

そう言つて、直樹はサンダーアームが装着された腕を回してエネルギー

ギーを溜め始めた。

ゴーカイジャー「デンジブーメラン！」

そう言つて、デンジブーメランがドーラデュラハン目掛けて飛んでいった。

直樹「サンダー・マグナム！」

直樹も同時にサンダーアームからエネルギー弾を放った。

ゴーカイジャー「スパーク！」

ドーラデュラハン「ぐああああ！」

同時攻撃で一気に全滅した。

バンドーラ「おのれ、こうなつたら……大地に眠る悪霊たちよ、ドーラデュラハンに、はあ！力を与えよ！」

そう言つて、杖を大地に投げつけて、ドーラデュラハンを巨大化させた。

ファイオネ「また、巨大化しましたね。」

カイク「ジーク、ここは俺達が相手をする、お前達はあいつを頼む。」

「

ジーク「ああ、任せるぜ！」

モバイレーツ「ゴーカイガレオン！」

ゴーカイジャー「海賊合体、完成ゴーカイオー！」

ドーラデュラハン「行くぞ！海賊ども！」

ジーク「それはこっちのセリフだ！」

そう言つて、ゴーカイオーはドーラデュラハンと戦いを始めた。

その間に下のほうでは残った敵と戦っていた。

カイク「キングテクター！」

アイク「豪快チェンジ！」

ゴーカイセルラー「ゴーカイシルバー、ゴールドモード！」

アイク「ゴーカイシルバー、ゴールドモード！レンジャーキーセツ

ト！」

カイク「ゴーカイデリンガー、ベガ・レンジャーキーセツト！」

ベガ「ファイナルウェーブ！」

アイム「ゴーカイレジェンドリーム！」

カイク「ゴーカイデリンガー、ファイナルウェーブ！」

なのは「ナイト・デイバインバスター！」

フェイト「ナイト・トライデントスマッシュャー！」

ゴーレムキング「「ゴオオオオオ！」」

スバル「よし、みんな行くよ！」

ティアナ「マーフィー！」

マーフィー「ワン！」

そう言つて、ティアナはマーフィーにキーボーンをくわえさせ、V  
ディーバズーカに変形し、ティアナ、スバルが左右に立ち、クイン  
ト、ギンガが後ろで支え、エリオとキャロがその二人の背中に手を  
置いた。

フォワード陣その他「「Vディーバズーカ！ストライク・アウト  
！」」

ゴーレム兵「「ゴオオオオオ！」」

グリフォォーザー「ぐあああああ！」

ラミィ「きゃあああ！」

バンドーラ「グリフォォーザー、ラミィ！二人とも引き上げるよ！」

グリフォォーザー・ラミィ「「ははは！」」

そう言つて、敵は撤退した。

ゴーカイオーサイド

ドローデュラハン「食らえ！」

ゴーカイジャー「「うわあああ！（きゃあああ！）」」

ドローデュラハンのランサーでゴーカイオーは少し後ろに下がった。

ドローデュラハン「次はこれだ！」

そう言つて、今度は首を飛ばしてきた。

ジーク「上等だ！派手に行くぜ！」

ゴーカイジャー「「ゴーカイ電子満月斬り！」」

そう言つて、ダイデンジンの電子満月斬りに似た技を繰り出して、

首を一刀両断した。

ドーラデュラハン「ぐああああ！」

その瞬間、ドーラデュラハンは苦しみ出した。

メルト「どうやら、連動してたみたいね。」

ティア「一気に決めましょう。」

ゴーカイジャー「レンジャーキーセット！」

風雷丸「ニンニンニン、ニンニンニンニンニン！お任せください、

海賊と忍者、ひとつになりて、天下御免の手裏剣装備！ハリケンゴ

ーカイオー、推参！」

ジーク「行くぜ！」

ゴーカイジャー「ゴーカイ風雷アタック！」

風雷丸「どんどん増えます、必殺奥義・乱れ桜！参らん！」

ドーラデュラハン「ぐああああ！！！」

風雷丸の分身攻撃でドーラデュラハンは粉碎された。

風雷丸「ふうふう、いい汗かいたでござる。」

風雷丸の一言で、戦いは終わった。

その後、デンジマンのメンバーは帰っていき、直樹もいざことなく、

去っていった。

カイル「サイバーコップ？」

ジーク「なんだそりゃ？」

メルト「青梅先輩が言ってただけなんだけど……」

ティア「もしかしたら、ブルドントさんたちが知ってるかも……」

エリス「そうね、彼らなら何か知っているかも……」

なのは「それじゃ、デカベースへ戻りましょうか。」

そう言って、メンバーはデカベースに戻って行った。

直樹サイド

保奈美「……なおくん、よかったの？」

直樹「ああ、俺には保奈美と直美という家族を守らないといけないからな……」

直美「パパ・・・」

保奈美「・・・なおくんが決めたことなら、それでいいよ。でもね、いざとなったら私もルシファー・ビットになって戦うから・・・」

直樹「保奈美・・・」

保奈美「だって、私達は家族でしょ？」

直樹「・・・ああ、それじゃ、今度あいつらが俺達に接触してきたら考えようか・・・」

そう言って、3人は家路へついた。

## 第59話 見よ！デンジの力と謎の赤き戦士（後書き）

どうも、今回登場したサイバーコップを登場させました、簡単な詳細は後で乗せますので、知らない方は見ていただけると幸いです、今回は、続けて大いなる力と直樹達が正式に仲間になる話にします、それではまた次回。

電腦警察サイバーコップとは、1988年10月2日から1989年7月5日まで日本テレビ系で放送された、特撮ヒーローで、時は1999年、世界の中心都市TOKYOシティーでは、より凶悪化した犯罪が多発した時代で警視庁はそれに対処すべく特殊部隊ZAC（ザック、ZERO-SECTION ARMED CONSTABLE 0課装甲警察部隊）を編成し、ビットスーツと呼ばれるパワードスーツを身に纏うサイバーコップたちが、日夜犯罪摘発に明け暮れつつ、犯罪組織デストラップと言われる組織と熾烈な戦いを繰り広げるとい話です。

第60話 新たな仲間と未来科学の力（前書き）

どうも、今回は直樹と保奈美が力を手に入れた経緯を描きました、その関係で今回は長くなってます、そして今回はゴージェルファイブの力が解放され、さらに正式に直樹達が仲間になります。ちなみに直樹と保奈美の娘はヴィヴィオと同じ年にしました。

## 第60話 新たな仲間と未来科学の力

8年前 蓮美市

保奈美「なおくん、ほら起きて。」

直樹「うくん、後5分・・・。」

保奈美「もう、早くしないとご飯食べる時間がないよ。」

直樹「うくん、キスしてくれたら起きる。」

保奈美「もう、しょうがないな・・・チュウ！」

そう言つて、保奈美は直樹の頬にキスをした。

直樹「・・・唇じゃないのか？」

保奈美「だって、指定はなかったでしょう？」

直樹はしてやられたという顔をしながら、ベットが出て、保奈美と一緒に食事を取り始めた。

直樹と保奈美は高校卒業と同時に結婚し、さらにその後、保奈美の妊娠もあったが、周囲の協力などもあり、無事に2人はキャンパスライフを楽しんでいた。

直美「うくん・・・う、うわあああん！」

保奈美「どうしたの直美、ほら、よしよし。」

そう言つて保奈美は、突然泣き出した、我が子を抱いてあやし始めた。

直樹「・・・しかし、いつまでもお義母さんに任せるわけには行かないよな・・・。」

保奈美「そうだよね、でも私達まだ学生だし、こうして家族で暮らせるのもお母さんたちのおかげだからね・・・。」

直樹「・・・いつか、本当に家族で暮らせるようになりたいな・・・。」

保奈美「そうだね、なおくん・・・。」

その後、泣き止んだ直美を連れて、保奈美の実家に行き、保奈美の母親に直美を預け、2人は大学へ行き、その後、蓮美台学園の時計

塔に行き、恭子先生のところへ行った。

恭子「よく来たわね、新婚さん。」

結「すみませんね、お子さんもいるのに．．．」

保奈美「いえ、お気になさらないでください．．．」

直樹「ところで、今日はどっいった用件で？」

恭子「うーん、実はね、時空転移装置に変なメッセージがあったの。」

保奈美「メッセージですか？」

結「これなんですよ。」

そう言つて、2人に紙を見せた。

”2つに分かれていた若者よ、ここに記されている場所へ、パートナーと共にこい？と書かれた紙と何かの座標が書かれていた紙があった。

直樹「なんだこれ？」

保奈美「これって．．．」

恭子「うん、間違いなく、くずみのことを指してると思うの．．．」

結「あの、あの事件のことを思い出させるようなことをしてしまって申し訳ありませんが．．．」

保奈美「いえ、気にしないでください．．．それに今はなおくんとずっと一緒にいることが出来るから、今となつては、悲しいものでしたけど、思い出の一つですから．．．」

そう言つて、保奈美は直樹に寄り添った。

直樹「保奈美．．．」

玲「あらあら、また随分と仲がよろしいのですね？」

直樹・保奈美「玲さん（り、理事長先生）！？」「」

そこには、なんと未来へ帰還したはずの宇佐美玲理事長先生が居た。保奈美「どうして、理事長先生が！？」

直樹「確か、未来に帰ったはずじゃ．．．」

玲「実は、帰ったのはいいのですが．．．あまりにも向こうで英雄扱いされて、嫌気がさして、私もこの時代に残ることを選びました。

「恭子「まあ、そういうことだから、2人ともよろしく。」  
二人はあっけに取られていた。」

玲「まあ、それはさておき．．．とりあえず、この手紙はどうも私たちの居た時代から送られてきたものでは無いようなんです．．．」  
結「断定は出来ませんが、おそらく別の世界から届いたものだと思います．．．」

恭子「．．．何の確証もないのに、2人を危険な目に合わせるわけにもいかないから、今回は2人に知らせるだけにしようと思って、来てもらったの．．．」

結「あまりにも危険なので、どこの世界から来たものなのかが特定するまでは、」

玲「ましてや、私達ですら知らない世界からのものですからね．．．」

「それを聞いた直樹は、保奈美と向き合い、二人は頷いた。」

直樹「．．．恭子先生、その座標にはすぐに飛べるんですか？」

恭子「くずみ！あなた人の話を聞いていたの！？下手をしたら一生帰ってこれなくなるかも知れないのよ！」

結「そうですね、久住君はお父さんになつたばかりなんですから．．．」

「．．．玲「．．．いきなり、子供を親の居ない子にしないでください．．．」

「直樹「わかってますよ．．．でも、今回はどうしても行かなきゃいけない気がするんです．．．多分それは、俺達の想像を遥かに超える何かのような気がしてならない．．．」

保奈美「．．．先生、私もなおくんと同じです．．．今行かないと取り返しが付かないことになると思うんです．．．」

2人は真剣な目で3人に言った。

恭子「．．．負けたわ．．．いいわ、行きなさい、ただし、絶対に戻ってくるのよ！私達も全力でサポートするから．．．」

直樹「先生．．．」

保奈美「ありがとうございます！」

結「お礼を言いたいのは、私達の方です。」

玲「そうですね、お2人のおかげで謎が解けるかもしれないんですから．．．」

恭子「それじゃ、準備に30分くらいかかるから、それまで向こうで休んでて。」

そう言われて、2人は一度部屋から出て行き、呼ばれるまで時間を潰した。

そして30分後、2人は時空転移装置の上に載った。

結「それじゃ、行きますよ。」

直樹「お願いします。」

恭子「まあ、藤枝．．．じゃなくって、保奈美がいるから．．．大丈夫でしょうけど．．．」

玲「でも、気を付けてくださいね？何かあるのか検討がつかないので．．．」

保奈美「大丈夫です．．．なおくと一緒ですから．．．／／／」

直樹「保奈美．．．／／／」

恭子「あゝ、もう、そこイチャイチャしない！ほらさっさと行きなさい！」

そう言って、恭子先生は転送した。

結「ち、ちよつと、恭子！？」

玲「いくらなんでも、いきなり過ぎますよ！」

恭子「しまった．．．つい勢いでやっちゃった．．．」

そう言って、恭子先生はやっちゃったという顔をした。

英雄の聖地の世界

直樹達が飛ばされたのは、なんと過去のスーパー戦隊のメンバーが眠っているはずのあの英雄の聖地の世界に居た。

直樹「ここはどこだ？」

保奈美「少なくとも、知らないところだよね．．．」

直樹「ああ、でもなんだろう、安心感を感じる．．．」

保奈美「なおくんも？」

直樹「保奈美もか？」

保奈美「うん．．．なんだろうね、この感じ．．．」

とそこへ、3人の人影が現れた。

直樹「誰だ!？」

???「ようやく来たか、待ちくたびれたぜ。」

そこには、男2人と女1人が立っていた。

保奈美「あ、あなた達は？」

???「俺は武田真也、またの名をジユピター。」

???「私は上杉智子、よろしくね。」

???「そして俺は、ルシファーだ。」

上杉「私達は、サイバーコップだったの。」

直樹・保奈美「サイバーコップ?」

ルシファー「まあ、俺はちょっと手助けしてただけだよな。」

保奈美「あ、さっきから話についていけないんですけど．．．」

武田「おっと、ごめん、順を追って説明するよ。」

そう言つて、2人にかつて遠い昔にスーパー戦隊と妖魔との戦いがあつたことを話し、そして、スーパー戦隊と一緒に戦つた戦士が他にもいたことと自分達がそのうちの戦士だったと話した。

直樹「．．．にわかに、信じられない話だな．．．確かにスーパー戦隊つてのは聞いたことがあるけど、ただであれはおとぎ話だろう。」

ルシファー「なるほど、今だとそういうことになつてるのか、だが事実だ、彼らは妖魔との戦いで俺達ともども奴らの親玉を封印するためにこの世界で眠りついたんだ．．．」

保奈美「ほ、本当に、そんなことが．．．」

上杉「すぐには信じられないでしょうけど、でもね真実なの、そして、あなた達をここに呼んだのは、武田君とルシファーの力をあな

た達に与えるために呼んだの。」

直樹「あんたたちの力？」

武田「ああ、俺達のサイバービットと装備一式を君達に渡す。」

ルシファー「妖魔の親玉は、特殊な方法で、復活の時間を早めた、このままだとあと数年後には確実に復活する。」

上杉「だから、あなた達にこの力を託すの。」

直樹「ち、ちよつと待て、どうして俺たちなんだ!？」

ルシファー「・・・お前達は、どんなに引き離されても決して切れない絆で強く結ばれている・・・」

武田「その絆の強さは、俺達や歴代の戦士たちでも見たことがない強さを持っている・・・」

上杉「だから、あなた達ならきつと未来を切り開ける、そう確信したからここにあなた達を導いたの・・・」

直樹「・・・俺達にそんな力があるのか？」

ルシファー「まあ、今のままじゃ、たとえ力を与えても宝の持ち腐れだな、道を切り開くのはお前達自身だ。」

保奈美「私たち自身・・・」

上杉「心配しないで、あなた達はただ自分の守りたいものを守ればいいの・・・」

そう言つて、上杉は二人の肩に手を置いた。

その後、2人は同時に頷き、3人に向き合った。

直樹「・・・わかった、先輩、やってやる。」

保奈美「私もです・・・」

武田「・・・ありがとうございます、本当は君達にこんなことを背負わせたくないけど・・・」

ルシファー「俺達は、この世界から自由に出ることが出来ないからな・・・」

上杉「でも、もし何か困ったことがあつたら、連絡してね、連絡が取れるように通信端末を渡しておくから。」

保奈美「ありがとうございます、上杉先輩。」

武田「さて、それじゃ、直樹、君には俺のジュピター・ビットの力を渡そう。」

ルシファー「お嬢さんには、俺のルシファー・ビットの力を．．．そう言つて、2人は武田とルシファーからそれぞれの力を受け取つた。」

上杉「あと、このブレスを渡しておくね、このブレスにはこのブラツクチエンバーを転送できるようにしてあるから．．．」

ルシファー「あと、俺達の持っている知識なども渡しておいたから、もし機械トラブルがあつても自分達で何とかできるだろう．．．」

直樹「ああ、道理でさつきから頭の中がすっきりしたと思つたら．．．」

上杉「それじゃ、あとはよろしくね。」

武田「妖魔が復活するのは、まだ時間がかかるけど．．．」

ルシファー「それまでの間、俺達の与えた力を使いこなせるようにしておいてくれ。」

直樹「ああ、必ず使いこなしてみせる。」

上杉「うん！その意気だよ。」

保奈美「はい、ありがとうございました。」

武田「それじゃ、戻るんだ元の世界へ．．．」

そう言つと、2人の背後に不思議な空間が現れた。

ルシファー「それを通れば、元の世界に戻る。」

上杉「それじゃ、また会いましょう。」

直樹「ああ、必ず！」

保奈美「本当にありがとうございました！」

そう言つて、2人は空間の中へ飛び込んでいった。

上杉「．．．行っちゃったね．．．」

武田「まあ、何とかなるだろう。」

ルシファー「ああ、俺達の後輩だ、無様な真似はしないだろう．．．」

上杉「それじゃ、二人とも、私達も行きましょう。」

そう言つて、3人も光の中へと消えていった。

蓮美台学園 時計塔

直樹と保奈美は元の世界に戻ってきた。

恭子「くずみ！」

結「無事だったんですね？」

玲「よかった．．．」

直樹「俺達は、戻ってきたのか．．．」

保奈美「そうみたいだね．．．なおくん．．．」

恭子「ところで、いったい何があったの？」

直樹「そのことなんですけど、実は．．．」

そう言つて、2人は3人にすべてを説明した。

恭子「．．．にわかには信じられない話よね．．．だいたいスーパ

ー戦隊なんて、時空転移装置でも存在が確認できなかったんだから

．．．」

結「あ、あの、そのことなんですけど．．．実はこの時代から約

500年前ぐらいの時代で何年の間、空白の区間があつて、この時

代に何があつたのが歴史上まったくわからない時期があるんです

．．．」

恭子「嘘!？」

玲「．．．今確認しましたけど、確かに500年以上前の数十年間、

この時代に関わる記述が一切残されていません．．．」

直樹「．．．やっぱり、武田さんたちが言っていたことは本当だっ

たのか．．．」

結「でも、これは、ある意味とんでもないことかもしれません．．．

」

保奈美「何がですか？野乃原先生。」

結「もし、スーパ―戦隊の方々やその他の方々が総出で戦つたのに

封印しか出来なかったということは、とんでもない存在かもしれな

いということですよ．．．」

玲「．．．そうね、下手したらマルバスなんか比べ物にもならない  
くらいの脅威になるかもしれないわね．．．」

直樹・保奈美「．．．．．．」

その言葉に二人は黙った。

恭子「くずみ達は、その危険な道を進む覚悟はあるの？」

恭子先生は真剣な目つきで二人に聞いた。

直樹「．．．そうじゃなかったら、力を受け取ってきませんよ．．．」

保奈美「私もなおくんと同じです．．．大丈夫です．．．」

それを聞いた3人は目を合わせて頷いた。

恭子「．．．よくわかったわ、それなら私達は止めないわ、でもその代わり、条件があるわ。」

直樹・保奈美「条件？」

結「私達にも手伝わせてください。」

直樹「せ、先生達が？」

玲「そうですね、もしその恐ろしい存在が残るようなことがあれば、

未来もマルバス以上の脅威になるかもしれません．．．」

恭子「だからこそ、私達が全力でサポートしてあげるわ。」

それを聞いた二人は顔を合わせた後、3人に頭を下げた。

直樹・保奈美「よろしくお願いします。」

恭子「よし、任せなさい！それじゃ、まずは、貰ってきたデータを見せて．．．」

結「私にも、お願いします。」

そして、二人は、直樹達から武田達から受け取ってきたサイバークップのデータを閲覧した、そして、その後、今回のことは周りの親しいメンバーの知るところとなり、彼らも自分たちのできる範囲で二人に協力することを誓った。

現在 蓮美市 久住家

直樹「．．．夢か、久しぶりだな、あの夢．．．」

保奈美「なおくん、朝だよ．．．あれ？起きてたの？」

直樹「ああ、保奈美か、おはよう。」

保奈美「う、うん、おはよう、どうしたの今日は？」

直樹「．．．昔の夢を見てな．．．俺達がこの力を受け取った日のことを．．．」

保奈美「．．．そつか、早いよね、あれから8年だもんね．．．」

直樹「その間、色々あったな．．．裕理さん、ましろさんたちのおかげでこの力を満足に使いこなせるようになったし．．．」

保奈美「そうだよな．．．ましろさんたちは今頃何やってるんだろうね？」

直樹「わからない．．．でも、あの人達も俺達みたいに夫婦円満にやってるんじゃないのか？」

保奈美「そ、そうだね．．．ノノノ」

直樹「さて．．．今日は、ユーノの奴と会ったな．．．」

保奈美「うん、今度の学会の件で、直美はお母さんのところにいるから、行く時、迎えに行こう。」

現在、直樹は蓮美台大学の考古学の教授をしていて、保奈美はその補佐をしている。

直樹「そうだな、それじゃご飯食べたら、行こうか？」

保奈美「うん！」

そう言つて、二人は仲良く一緒に食事を取り、出かけていった。

デカベース

先日の一件で、ジュピターの戦闘データをベガやレイジング・ハートの記録したデータから分析していた。（GGGのメンバーとも通信で状況を報告していた。）

はやて「どうや、シャーリー？」

シャーリー「はい．．．まず、あの空間がゆがんだ時に彼の身体に降りそそがれたエネルギーはSクラス以上のエネルギーが発生しました。」

フエイト「Sクラス!？」

カイク「なるほど．．．それほどのエネルギーなら、あのような現象が起こっても不思議じゃないか．．．」

マリエル「さらに、あの腕に装着されたアームから繰り出されたエネルギー弾は最低AAAクラスの威力があります。」

ヴィータ「あれだけのエネルギー弾で最低AAAクラスだって!?」  
アイム「なるほど、だからあのドーラモンスターが粉碎されたわけか．．．」

シャーリー「しかも、調べたところ、あのエネルギー弾は連射が可能のようです．．．」

シグナム「あれだけの威力で、連射が可能だというのか．．．」  
なのは「．．．すごいのは、見たときからわかっていただけ、まさかここまでだったなんて．．．」

リンディ「でも、いま気になるのは、あの人は一体何者なのかということね．．．」

クロノ「そうですね、本当に彼が味方なのかそれとも敵なのか．．．」

カリム「牧野先生、レオナさん、教えてください、あの方は一体誰なんですか?」

牧野「．．．それをお話しする前に、実はみなさんに伝えなくてはいけないことがあります．．．」  
アコース「伝えなくてはいけないこと?」

レオナ「実はね．．．妖魔との戦い．．．のちに言われる妖魔大戦の時、妖魔と戦っていたのはスパー戦隊だけじゃないの．．．他にも多くの戦士たちが戦ったの。」

シャツハ「いつたい、どのような方々がいらしたのですか?」  
ブルドント2世「．．．それに関しては、実際に見てもらったほうがいいだろうね．．．アチャ、コチャ!」

アチャ「はいはい、若。」  
コチャ「お任せください。」

そう言つて、映像を出した、そこには様々な戦士が映し出されていた。

ノーヴェ「こ、こいつらは？」

データス「今説明するデス、まずは、仮面ライダー、ウルトラマン、宇宙刑事ギャバン、シャリバン、シャイダー、ジャスピオン、スピルバン、戸隠流正統・磁雷矢、ジバン、ウインスペクター、ソルブレイン、エクシードラフト、ジャンパーソン、ブルースワット、ヒーファイター、怪傑ズバット、イナズマン、キカイダー兄弟、サイバーコップ、そして、その仲間の方々・・・」

その映像を見たメンバーは、驚きを隠せなかった。

凱「す、すごい・・・」

チンク「・・・スーパー戦隊以外にもこれほどの戦士たちが居たのか・・・」

ジーク「・・・俺達でも、知らねえ戦士が居たのか・・・」

ブルドント2世「まあ、全員があの世界にいるわけじゃない、たしか、ウルトラマンは自分達のいる世界に戻つたらしい・・・」

ゴセイナイト「ただ、宇宙刑事ギャバン、シャリバン、シャイダーとその仲間は、あの世界にも居らず、今も行方不明になっているだ・・・」

流星「・・・もしかしたら、僕もこの中にいたのかもしれないな・・・」

スバル「流星さん・・・」

ソルダートJ「ところで、そのサイバーコップというのは、いったい・・・」

レオナ「いま説明するから・・・えっとね、サイバーコップは西暦1999年ごろに、多発する凶悪犯罪に対抗するために組織された警察の特殊部隊だったの、そして、彼らはこのビットスーツと呼ばれる強化スーツを使って活動していたの・・・そして、このジュピターのビットスーツはこの時代の100年後の世界の技術で、ある事故が原因でこの時代にルシファーという人と一緒に飛ばれてきた

の・・・」

命「そうなんですか・・・」

護「それじゃ、その人がまた来たの？」

牧野「いえ、それはないと思います、サイバーコップのメンバーもあの異世界にいますので、おそらく誰かに力を渡したんだと思いますよ・・・しかし、そうなるにあの時、参加していたのはジュピターさん、ルシファーさんとサイバーコップの司令塔だった上杉智子さんだったはずなので、おそらくルシファーさんの力も誰かに渡していると見たほうがいいですね・・・」

戒道「なるほど・・・しかし、手がかりはないのか？」

レオナ「ごめんね、スーパージョウについて、連絡が取れるんだけど、それ以外の戦士に関しては私達でも無理なの・・・」

猿頭寺「我々で、独自に探すしかありませんね・・・」

パピヨン「そうね、それしかないわね、耕助。」

ジーク「上等だ、簡単に見つかったら、面白くねえしな・・・」

カイル「とりあえず、探しに行くか・・・」

クロノ「待ってくれ、カイル。」

とその時、カイルをクロノが呼び止めた。

クロノ「すまないカイル、君には頼みたいことがあるんだ。」

カイル「俺にか？」

クロノ「そうだ、ユーノの護衛を頼みたいんだ。」

カイル「なるほど・・・無限書庫の司書長となれば・・・色々狙われそうな感じだな・・・わかった。」

ヴィヴィオ「パパ、私も行ってもいい？」

カイル「ああ、いいぞ。」

ジーク「それじゃ、残ったメンバーで行くか。」

そうやって、一部のメンバーで情報集めを始めた。

そして、カイルはヴィヴィオを連れて、ユーノとの待ち合わせに向かった。

蓮美市

ユーノは待ち合わせの喫茶店で、カイクたちを待っていた。

ユーノ「カイク、ヴィヴィオ。」

カイク「待たせたな、ユーノ。」

ヴィヴィオ「こんにちは、ユーノさん。」

ユーノ「ああ、こんにちは。」

そう言つて、3人は少し話をして時間を潰した後、ユーノと一緒にある場所へ向かった。

カイク「ユーノ、一体どこへ行くんだ？」

ユーノ「うん、実は僕にとっては先輩の優秀な考古学者の教授と会う約束をしていたんだ、その人とは、用があつて蓮美台学園つてとこで会うことになつてるんだ。」

カイク「お前が優秀つて言うんだから、相当な人間なんだろうな。」

ユーノ「うん、確かに優秀ではあるんだけど、一言で言うつてすごい人だよ、何しろ高校卒業と同時に結婚して、さらにヴィヴィオと同じ年の子供も居て、さらに1度眠ると奥さん以外の人は起こせないつて人だよ。」

カイク「．．．なんだろうな、どう答えたらいいのか、わからん．．．」  
ユーノ「まあ、会えばわかるよ。」

そう言つて、3人は蓮美台学園に向かった。

蓮美台学園 カフェテリア

恭子「くずみ、保奈美から聞いたわよ、あんたあのゴーカイジャーと一緒に戦つたんだつて？」

結「そ、そうなんですか？」

直樹「否定はしませんよ、事実です、それに娘にあんパンをくれて、助けてくれた人達を見捨てることは俺には出来なかつただけですよ．．．」

保奈美「なおくん．．．」

直美「パパ．．．」

玲「．．．久住君らしいですね．．．」

恭子「まあ、それでも、二人は自分で大変な道を選んだわけだからね．．．」

美琴「でも、いいな、二人とも変身できて．．．」

結「天ヶ崎さん、お二人はその代わり大変なことをしているんですよ。」

美琴「わかってますよ、結先生。」

そんな話をしているとき、カイル、ユーノ、ヴィヴィオが来た。

ユーノ「直樹さん！」

直樹「ユーノ、久しぶりだな。」

保奈美「ホントに久しぶりだね。」

ユーノ「ええ、最近色々あって．．．皆さんもお久しぶりです。」

恭子「ええ、相変わらずね。」

美琴「元気そうだね。」

結「ところで、そちらの方は？」

ユーノ「ああ、今回、同行してもらった僕の知人です。」

カイル「カイル・アストレアだ、よろしく。」

ヴィヴィオ「私はヴィヴィオ・アストレアです、よろしくお願いします。」

保奈美「あれ？同じ性ってことは．．．」

カイル「ああ、俺の娘だ、養子だがな．．．」

直樹「そうだったのか．．．こつちも自己紹介が遅れたな、俺は久住直樹。」

保奈美「私は久住保奈美、なおくんの妻です。」

カイル「へえ、あんたら夫婦だったのか、見たところ若そうだが、長いこと夫婦でいるみたいだな．．．」

直樹「あんたよくわかったな？ああ、俺達は結婚して8年経ってるからな．．．」

ユーノ「でも、喧嘩らしい喧嘩してるの見たことないです．．．」  
恭子「まあ、それだけラブラブだって事ね．．．話を戻すけど、私はこの養護教師の仁科恭子よ、よろしくね。」

美琴「私は、天ヶ崎美琴、よろしく。」

玲「私は、この学園の理事長をやっている宇佐美玲です、よろしく  
お願いします。」

結「私は、古典担当の野乃原結です。」

その言葉を聞いた、カイルとヴィヴィオは結をまじまじと見た。

カイル「．．．こつちの子は、飛び級でもしたのか？」

結「わ、私は子供じゃありません！」

恭子「．．．残念ながら、私の同僚よ．．．」

ヴィヴィオ「す、すごい．．．」

ユーノ「．．．二人が驚くのは無理ないよ、僕も最初は驚いたからね．．．」

カイル「まさか、ヴィータよりも小さいのを見るとはな．．．」

直美「私は、久住直美です、よろしくね、ヴィヴィオちゃん。」

ヴィヴィオ「うん、よろしくね。」

そう言つて、ヴィヴィオと直美はすぐに仲良くなった。

カイル「．．．子供のほうはどうやら、大丈夫そうだな．．．」

とその時、外の方にスカルソルジャーが現れた。

スカルソルジャー「ガガガガガ！」

結「あ、あれは!？」

ヴィヴィオ「妖魔!？」

ユーノ「でも、どうして妖魔がここに？」

カイル「理由はどうでもいい．．．出てきたのなら、叩くまでだ．．．」

ヴィヴィオ「パパ、私も行くよ。」

カイル「危ないと思ったら、迷わず下がるんだ。」

ヴィヴィオ「うん!」

そう言つて、二人は、前に出た。

直樹「おい、あんたら！」

保奈美「危険だよ。」

ユーノ「大丈夫ですよ、彼らなら・・・」

ヴィヴィオ「行くよ、クリス、セイグリットハート・セットアップ！」

ヴィヴィオはそう言って、いつもの変身魔法で大人モードになった、その姿を見たユーノ以外のメンバーは驚きを隠せなかった。

仁科「ええ！？」

美琴「あの子が、大人になっちゃった？」

結「しかも、スタイルいいです・・・」

それを見た結先生は凹んだ。

玲「ま、まあ、元気を出してください野乃原先生・・・」

それを見た理事長先生は結を慰めた。

そして、カイムはベガを取り出して、二人でスカルソルジャーに向かって行った。

カイム「はあ！」

スカルソルジャー「ガガガガガ！」

ヴィヴィオ「てい！」

スカルソルジャー「ガガガガガ！」

保奈美「す、すごい、あの二人・・・」

直樹「戦いなれしてるな・・・」

とその時、改造妖魔獣が現れた。

G・スカル「ふん、やはり、雑魚どもでは役に立たんか・・・しかし、ルシファー様からの命令だ、この町で以前バロンの奴が何かに邪魔されていたみたいだからな、その原因を探らせてもらおうか。」  
そう言って、敵はスカルナイトを出してきた

スカルナイト「カラカラカラ！」

ヴィヴィオ「パパ、今度は改造妖魔獣だよ。」

カイム「わかつてる、こうなったらヴィヴィオ、行くぞ！」

ヴィヴィオ「うん！」

そう言つて、二人はモバイレーツを取り出した。

直樹「あ、あれは!？」

カイル・ヴィヴィオ「豪快チェンジ!」

モバイレーツ「ゴーカイジャー!」

モバイレーツ「マジレンジャー!」

カイル「ゴーカイキング!」

ヴィヴィオ「輝く太陽のエLEMENT! 天空勇者マジシャイン!」

それを見たメンバーは、驚いた。

恭子「ええ!？」

結「ゴーカイジャー!？」

玲「あの子は、別の方になりましたけど・・・」

カイル「ベガ!」

スカルナイト「カラカラカラ!」

ヴィヴィオ「行くよ、スモーキー!」

スモーキー「おうよ、久しぶりの出番だぜ、ヴィヴィオ、派手に行

くぜ!」

ヴィヴィオ「うん! マジランプバスター!」

スカルソルジャー「ガガガガ!」

G・スカル「おのれ・・・たかが二人で、私に勝てると思っている

のか! 食らえ!」

ヴィヴィオ「え!？」

そう言つて、G・スカルはヴィヴィオに炎攻撃をかけてきた。

ユーノ「ヴィヴィオ!」

保奈美「危ない!」

カイル「豪快チェンジ!」

モバイレーツ「ゴセイナイト!」

カイル「レオンセルラー!」

カイルはすぐさま、ディフェンストリームカードで水流の壁を作り、

ヴィヴィオを守った。

ヴィヴィオ「ありがとうパパ。」

G・スカル「くっ．．．おのれ、ならばそっちの娘だ！」

そう言つて、今度は直美に攻撃を仕掛けてきた。

保奈美「直美!?!」

直美「きゃあああ!」

直樹「ちい!」

そう言つて、直樹は上着を投げ捨てて、サイバービットを装着した。

直樹「ジユピター・ビット!」

カイル「なに!?!」

ヴィヴィオ「あの人つて、メルトさんとティアママが言つてた．．．

「  
ユーノ「な、直樹さん!?!」

スモーキー「ど、どうなつてるんだ?」

直樹「くっ!」

直樹が直美の前に立って守った。

直美「パパ!」

保奈美「なおくん!」

そう言つて、保奈美は手を掲げると、保奈美もサイバー・ビットを

装着した。

保奈美「ルシファー・ビット!」

ユーノ「保奈美さんも!?!」

恭子「あっちゃく、やっちゃったか．．．」

美琴「でも、この人達ならいつかは、ばれるような気がしますけど．

．．．」

カイル「大丈夫か?」

直樹「ああ、とにかく今はあいつを倒すだけだ．．．てめえ．．．

俺の娘に手を出すとは、許さねえ!」

ジユピターが危機的状況に陥ったとき

異次元からミラクルなパワ

ーが送り込まれてくる

これをサイバー・ボミングと呼ぶ。

カイル「これは、あの時と同じ．．．」

直樹「サイバー・ギルティ―！」

スモークキー「これは、確か．．．」

レオナ「サイバー・ボミングだね。」

ヴィヴィオ「レオナさん!？」

ユーノ「どうして、ここに?」

レオナ「話は後、キング君、レッド君たちも別のところで戦ってるから、レッド君がね、キング君は彼のことを頼むって．．．」

カイル「．．．わかった、行くぞヴィヴィオ!」

ヴィヴィオ「うん!」

そう言つて、カイルも向き合った。

直樹「サンダー・アーム!」

保奈美「ギガマックス!」

カイル「ベガ、レンジャーキーセット!」

ベガ「ファイナルウェーブ!」

ヴィヴィオ「スモークキー、ルーマ・ゴー・ゴジカ。」

スモークキー「スモークキー・シャイニングアタック!」

直樹「ローリング・チャージャ―、サンダー・マグナム!」

保奈美「ギガマックス・ヘビーガン!」

カイル「ベガスラッシュ!」

G・スカル「ぐああああ!」

G・スカルは全員の斉攻撃で倒された。

その後、お互いに変身を解除して、向き合った。

カイル「．．．話、聞かせてもらおうか?」

保奈美「なおくん．．．」

直樹「．．．ああ、わかった．．．」

そう言つて、カフェテリアに入り、話し合いになった。

ジークサイド

カイルたちがユーノ達一緒にいる間、こちらの方は、探索中に妖魔と出くわした。

D・デーモン「海賊に魔導師ども、一網打尽にしてくれる。」  
ジーク「やれやれ．．．またかよ．．．しょうがねえ．．．行くぜ！」

ゴーカイジャー「豪快チエンジ！」

モバイレーツ「ゴーカイジャー！」

ゴーカイセルラー「ゴーカイジャー！」

なのは・フェイト「レンジャージャケット！セットアップ！」

シグナム・ヴィータ「レンジャージャケット！セットアップ！」

フォワード陣その他「レンジャージャケット！セットアップ！」

「」

流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

ジーク「ゴーカイレッド！」

フィオネ「ゴーカイブルー！」

メルト「ゴーカイエロー！」

エリス「ゴーカイグリーン！」

ティア「ゴーカイピンク！」

アイム「ゴーカイシルバー！」

ジーク「海賊戦隊！」

ゴーカイジャー「ゴーカイジャー！」

D・デーモン「かかれ！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

スカルキラ「シャアア！」

ジーク「派手に行くぜ！」

そう言つて、それぞれ戦いを始めた。

とその時、5つの光が現れた。

D・デーモン「な、なんだ!？」

そこには、なんとゴーグルファイブの5人が居た。

ファイオネ「先輩!?!」  
赤間「ゴークイジャー!」  
黒田「俺たちの力を使うんだ!」  
そう言うと、ゴークルファイブのレンジャーキーが光った。  
メルト「力が解放された...」  
エリス「でも、どうして、先輩達がここに?」  
青山「君達が探している人の元の持ち主に頼まれて...」  
黄島「それに、俺達の力を解放する時期だと思ったからな...」  
ミキ「とにかく、あの妖魔獣士を倒してからよ。」  
ティア「わかりました!」  
なのは「こっちは、私達がやります!」  
アイム「頼むぞ!」  
ゴークイジャー「ゴークイジャー!」  
モバイレーツ「ゴークルファイブ!」  
ジーク「ゴークルレッド!」  
エリス「ゴークルブラック!」  
ファイオネ「ゴークルブルー!」  
メルト「ゴークルイエロー!」  
ティア「ゴークルピンク!」  
ジーク「戦え、大戦隊!」  
ゴークイジャー「ゴークルファイブ!」  
アイム「豪快チェンジ!」  
ゴークイセルラー「ゴークイシルバー、ゴールドモード!」  
アイム「ゴークイシルバー、ゴールドモード!」  
なのは「フェイト「スーパーモード移行!」」  
シグナム・ヴィータ「スーパーモード移行!」  
デバイス「「イエス!」」  
スバル・ギンガ「「気力ボンバー!」」  
ティアナ「ヴァリアブルエクスキュージョン!」  
エリオ「獣奏剣・ストラダ、2連撃!」

キャロ「ジー・ジジル、イエローサンダー！」  
クイント「ゲキワザ、瞬瞬弾！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
シグナム「レヴァンティン、真・火炎の舞！」  
ヴィータ「アイゼン、ストームインフェルノ！」  
スカルナイト「カラカラカラ！」  
なのは「ミラクル・エクセリオンバスター！」  
フェイト「ミラクル・ライオットブレード！」  
スカルキラー「シャアアア！」  
なのはたちは、雑魚を全滅させた。  
D・デーモン「食らえ！シャドウフレア！」  
D・デーモンは、紋章術で攻撃をかけてきた。  
アイム「させるか！ゴーカイレジエンドクラッシュュ！」  
そう言うて、アイムは攻撃を相殺した。  
ジーク「今度は、こっちの番だぜ、レッドスカイパンチ！」  
D・デーモン「ぐあああ！」  
エリス「お次は、こっちよアイアンアーム、アイアンアタック！」  
ティア「ピンクリボン、ピンクフラワーリボン！」  
D・デーモン「ぐあああ！」  
メルト「次は、こっちよ、イエローオパールメガトンボール、スク  
リュー投げ！」  
フィオネ「ブルーリング、ブルードラゴン！」  
D・デーモン「ぐあああ！．．．だが、まだだ．．．」  
そう言うつと、傷が再生し始めた。  
ジーク「しぶとい奴だぜ。」  
赤間「ゴーカイジャー、奴の頭のクリスタルだ！」  
アイム「なるほど、再生能力はあのクリスタルか！」  
ジーク「だったら、これだ、ゴーグルゴールデンスピアだ！」  
ゴーカイジャー「ゴーグルゴールデンスピア！」  
そう言うつと5人はゴーグルサーベルを一つにして、スピアにした。

ジーク「レッド！」

エリス「ブラック！」

フィオネ「ブルー！」

メルト「イエロー！」

ティア「ピンク！」

そうやって、5人はそれぞれ空中で順番にゴールデンピアを軸に回転をし、エネルギーを溜めた。

ジーク「行くぜ！」

そうやって、4人がスクラムを組み、それを踏み台にして、ジークがそれをD・デーモンの目掛けて投げた。

ジーク「アタック！」

D・デーモン「ぐああああ！こ、これでは、再生が出来ない。」

その後、ジークたちは元の姿に戻った。

ジーク「これで、決めてやるぜ！」

ゴークカイジャー「スーパーゴークカイガレオンバスター！」

ゴークカイジャー「レンジャーキーセット！」

スーパーゴークカイガレオンバスター「レッドチャージ！」

アーム「レンジャーキーセット！」

ゴークカイスピア「ファイナルウェーブ！」

ゴークカイジャー「スーパーゴークカイガレオンバスター！」

アーム「ゴークカイレジェンドリーム！」

スーパーゴークカイガレオンバスター「スーパーライジングストライク！」

D・デーモン「ぐあああああ！」

D・デーモンは倒された。

ルシファア「．．．まさか、再生能力に気づくなんて．．．まあいいわ、今回は時間稼ぎだったから．．．それにしても、まさか、サイバー・コップがバロンの邪魔をしていたなんて．．．まあいいわ、とりあえず、巨大化させてから撤退しましょう．．．D・クラーゲン！」

D・クラーゲン「キイイキイイ！」

D・デーモン「まだ、終わらんぞ！」

そう言つて、ルシファーはD・デーモンを巨大化させてから撤退した。

ジーク「しぶといぜ！」

とそこへ、GGGのメンバーが来た。

凱「後は、俺達がやるぜ！」

ジーク「頼むぜ！」

そう言つて、GGGのメンバーはD・デーモンに向かって行つた。

D・デーモン「おのれ、出でよ！兵士達よ！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

スカルキラー「シャアア！」

超竜神「隊長、ここは、私たちがやります！」

凱「頼むぞ！」

超竜神「一気に行くぜ！一斉射撃！」

ボルフォツグ「必殺！大回転魔弾！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

撃龍神「唸れ疾風、轟け雷光！双頭龍！」

天竜神「光と闇の舞！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

マイクサウンダーズ13世「新型のディスクの力、見せてやるぜ、

カモンロツクンロール、ディスクGセットオン！ギラギラーンVV

！」

そう言つと、なんとGガオガイガーのエネルギー体がヘル・アンド・ヘヴンで突っ込んでいった。

スカルキラー「シャアア！」

機動隊は雑魚を全滅させた。

D・デーモン「食らえ！ブラックセイバー！」

凱「ふん！プロテクト・シールド！」

Gガオガイガーが前に立ち、攻撃を防いだ。

D・デーモン「なに！？」

ソルダートJ「再生能力を持たない、お前など敵ではない！」

凱「ガジェットツール！」

ソルダートJ「とどめだ！」

凱「ヘル・アンド・ヘヴン！」

ソルダートJ「ジェイクオース！」

凱「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォー．．．ふん！」

凱「ウィータ！！」

D・デーモン「ぐあああああ！」

D・デーモンは同時攻撃で粉碎された。

その後、ジークたちは赤間達から、事情を聞いた。

ジーク「なるほどな．．．」

赤間「彼は、きつと大丈夫だ。」

黒田「それに今、レオナが行ったし。」

なのは「レオナさんが？」

青山「ああ、でも、ゴーカイキングがいる以上大丈夫だろうな．．．

」

メルト「どうして、そう思えるんですか？」

黄島「サイバー・コップの人達が、ゴーカイキングも見ていたけど、

彼と似ているそうだ．．．」

ミキ「だから、待っていればいいよ．．．」

赤間「科学の発展において、人の心の中にはそれを悪用する人達が

出てくる、だけど君達の子供たちが進む未来が素晴らしい世界にな

っていることを、俺達は祈ってる．．．」

黒田「だからこそ、君達は妖魔に勝たなければならない．．．」

ジーク「わかってるよ、先輩．．．イクスやヴィヴィオたちの未来

は俺達が絶対に守ってやるぜ．．．」

赤間「ああ、頼むぞ、それじゃ、俺達は行くよ。」

ティア「またお会いしましょう、先輩。」

そう言つて、ゴーストファイブは光となつて姿を消した。

カイクサイド

カイク「．．．なるほどな．．．」

直樹「．．．だけどお前達を見てみると、俺は妖魔と戦えるのかつて不安に思つてな．．．」

カイク「．．．お前がそんな状態じゃ、絶対に妖魔には勝てない．．．」

直樹「!？」

カイク「．．．俺たちの信条だ、欲しいものはこの手ですべて掴みとる．．．それが海賊だ．．．」

直樹「欲しいものは．．．」

保奈美「この手ですべて掴みとる．．．」

カイク「そして最後に決めるのは、お前だ!」

恭子「カイクくん．．．」

結「私達より、若いのによく出来てる方です．．．」

玲「それだけ、様々なことを経験してきたということですね．．．」

ヴィヴィオ「パパ．．．」

直樹「なあ、俺達も一緒に戦つていいか？」

保奈美「なおくん．．．私からもお願いします．．．」

カイク「言つたはずだ、決めるのはお前だつてな．．．」

レオナ「それにね、仲間つて作るもんじゃなくて、できるもんじやないかなつて私は思うの。」

ユーノ「レオナさん．．．」

美琴「どうやら、決まつたみたいだね、直樹、保奈美。」

直樹「ああ、カイクさん．．．いや、カイク．．．俺達を仲間にしてくれ。」

カイク「ああ、わかつた、お前は俺たちの仲間だ!」

直美「よかつたね、パパ、ママ。」

ヴィヴィオ「それじゃ、一旦デカベースに戻るの?」

カイル「そうだな、みんなに紹介しないとだからな・・・」  
ユーノ「それじゃ、僕も行くから、そこで直樹さんと打合せしようか。」

直樹「ああ、それじゃ、頼む。」

保奈美「これから、よろしくお願いします。」

そう言つて、ここにいるメンバーは全員、一旦デカベースに向かい、自己紹介され、正式に仲間になり、直樹達は一旦、蓮美市残り、敵が現れたら、合流するという形になった。

## 第60話 新たな仲間と未来科学の力（後書き）

今回は、直樹達が中心になった話でした、そして、今回はマイクサ  
ウンダースにオリジナルのディスクを登場させました、さらに妖魔  
大戦に参加したヒーロー達は全員は絡ませるか、まだ未定ですが、  
ある程度は出したいと思っています、次回も大いなる力の話になる  
のでよろしくお願いします。

## 第61話 大爆発！怒りの超必殺技（前書き）

今回は、ダイナマンの力の解放と、さらに夜明け前のキャラも少し出てきます、彼らも戦える力を与えられた設定にしました、そして、マルバスに関してオリジナル設定をもたせました。

## 第61話 大爆発！怒りの超必殺技

デカベース

直樹達が仲間になってから1週間が経過し、直樹達はデカベースに来ていた。

恭子「へえ、大いなる力ね・・・」

リンディ「そうなの、すべてスーパー戦隊の大いなる力を解放しないと、妖魔を倒せないから、私達は大いなる力の解放することも任務になつてるの。」

結「大いなる力って、どんなものがあるんですか？」

クロノ「実際に見てもらったほうがいいでしょう。」

はやて「せやな、リン、リン頼むわ。」

リン「はい、主。」

リン「準備完了です、はやてちゃん。」

そう言つて、今まで解放したスーパー戦隊の大いなる力を見せた。

玲「す、すごいですね、これだけの力があるんですね・・・」

美琴「それで、あとどれくらいのスーパー戦隊の力を解放しないといけないんですか？」

ジーク「あとは、11のスーパー戦隊、ゴレンジャー、ジャッカー電撃隊、バトルフィーバーJ、サンバルカン、ダイナマン、バイオマン、ファイブマン、カクレンジャー、メガレンジャー、ゴーゴーフアイブ、ゴーオンジャーだな・・・」

恭子「まだ、これだけあるのね・・・」

結「まあ、それだけ歴史が深いということですね・・・」

玲「あれ？そういえばカイルさんは？」

アイム「ああ、あいつはここ最近ラボに籠って何かを作ってる。」

美琴「いつたい、何作ってるんだらう？」

そんな疑問を持ちつつ、お互いにいろいろなことを話していた。

一方、カイルはというと・・・

ヴィヴィオ「パパ、どお？」

カイル「ああ、ようやく完成だ．．．やれやれ、ゴーカイシリンダーを一から作るのは少々骨が折れたな．．．」

カリム「あ、カイルさん、一体何を作っていたらっしゃるんですか？」

カイル「こいつは、先代のゴーカイジャーと同じく、大いなる力を狙っていた奴が使っていたものを俺が独自に製作及び改良した「ラッパッター」だ。」

そう言つて、カイルは先代のゴーカイジャーが戦っていたバスコが使っていた「ラッパッター」に少しカラーリングが違うものを見せた。

シャツハ「いつたい、どんなことが出来るんですか？」

カイル「こいつは、このゴーカイシリンダーにレンジャーキーをセットして吹くと、セットしたレンジャーキーの戦士を実体化させることが出来るんだ、さらに俺が改良して登録した人間以外使えないようにしたんだ．．．とりあえず、カリム、これはお前用に作ったんだ。」

ヴィヴィオ「カリムママの？」

カリム「私のために？」

カイル「ああ、お前には、俺達のレンジャーキーの宝箱を預けてあるからな、あの宝箱は以前に何度もレンジャーキーが奪われそうになったことがあったから、特定に人間以外は触れられないようにしてあるとはいえ、念には念を入れて、いざとなったらそれを使ってレンジャーキーの戦士を実体化させてくれ。」

そう言つて、カイルは、カリムにラッパッターを渡した。

カリム「いいんですか、私が持つても？」

カイル「俺は、カリムだからこそ、持つてもらい．．．」

カリム「カイルさん．．．／／／」

カイルにそう言われて、カリムは顔を赤くして、嬉しそうな顔をした。

ヴィヴィオ「よかったね、カリムママ。」

カリム「うふふふ、ありがとうヴィヴィオ。」

そう言つて、カリムはヴィヴィオの頭を撫でた。

ヴィヴィオ「えへへへ」

カイル「まあ、物は試した、使つてみてくれ。」

そう言つて、カイルはマジシャインと黒騎士のレンジャーキーを出した。

カイル「まずは、黒騎士のレンジャーキーをシリンダーにセットして、吹いてみてくれ。」

カリム「わかりました。」

そう言つて、カリムは黒騎士のレンジャーキーをセットした後、ラッパラッターを吹いてみた、するとレンジャーキーの戦士が実体化した。

黒騎士「.....」

ヴィヴィオ「すごい！」

シャツハ「本当に実体化しましたね.....」

カイル「まだだ、こいつはもう一つ機能が付いているんだ、カリム横のスイッチをONにしてから今度はマジシャインのレンジャーキーをセットして、吹いてみてくれ。」

カリム「わかりました、これですね。」

カリムは、カイルに言われたとおりにスイッチを押してから吹いてみると、同じように実体化した。

ヴィヴィオ「パパ、何があるの？」

カイル「見てればわかる。」

ヒカル「ふう、久しぶりだね、この姿でいるのは.....」

シャツハ「ええ!？」

カリム「もしかして、本物のマジシャインさん。」

カイル「久しぶりだな、ヒカルさん。」

ヒカル「やあ、カイル、それと君がヴィヴィオかい？」

ヴィヴィオ「はい、始めまして、ヴィヴィオ・アストレアです。」

ヒカル「おお、君は礼儀正しいね、いい子だ。」

そう言つて、ヒカルはヴィヴィオの頭を撫でた。

カリム「カイクさん、これはいつたい．．．？」

カイク「ああ、この新型のラップバターはスイッチを押すと、持ち主の意識をあの異世界からここに呼び出すことができるんだ。」

シャツハ「なるほど、これなら悪用されるようなことが少なくなりますね。」

ヒカル「それに、こういう風に呼んでくれれば、僕達は自分たちの体を維持しやすいしね．．．」

カリム「そうだったんですか．．．ありがとうございます、ヒカルさん．．．そして、カイクさん。」

そう言つて、カリムはカイクに礼を言った。

その頃、デカベースの食堂では、朝練を終えた、メンバーが食事をしていた。

スバル「あれ？今日の料理、いつもよりもおいしい！」

ティアナ「ホント、一体誰が作ったんだろう．．．」

アイナ「実はね、保奈美さんが作ったのよ。」

エリオ「保奈美さんが？」

なのは「すごい、このケーキだつてうちのお父さんたちといい勝負だよ。」

直美「ママ、昔から料理が得意だったんだよ。」

キャロ「へえ、そうなんだ。」

フェイト「でも、これだけの料理を作れるなんて、よっぽど作るのに慣れているんだね．．．」

直美「ママはね、学生の頃からパパにお弁当を作っていたんだよ。」

ギンガ「その頃から付き合っていたのね．．．」

直美「うん、パパとママは、幼馴染だったの、パパが小学6年生の頃に事故で昔の記憶が亡くなった後、ママがずっとパパを起こしてから一緒に学校へ行つてたんだよ．．．」

クイント「ずっと一緒に行ってたの？」

保奈美「なおくん、1度寝ると中々起きなかったの、だから私が起こしに行っていたの．．．」

スバル「でも、すごいですね、毎日起こしに行っていたなんて．．．

ティアナ「でも、それだと遅刻とかしませんでしたか？」

保奈美「うん、たまにあっただけど、いざとなったらなおくんの自転車ですごい学校へ行ってたから．．．」

フェイト「でも、そこまでご主人の直樹さんのことが好きだったんですね．．．」

保奈美「．．．なおくんが記憶を無くしたのは、私がきっかけだったの．．．」

なのは「保奈美さんが？」

保奈美「．．．私がある丘へ、なおくんとなおくんのおじさんとおばさんと一緒にお花見に行こうって誘ったせいで、その時ちょうどお会いした時にお話した、時空転移装置の事故で、おじさんとおばさんは亡くなって、なおくんはそれ以前の記憶を無くしたんです．．．」

それを聞いた一同は少し言葉をなくした。

フェイト「．．．すみません、辛いことを聞いてしまって．．．」

保奈美「いえ、むしろ皆さんなら知っていて、欲しかったことです．．．」

直美「でもママ、パパが言っていたよ、自分はママに心配をかけちゃったから、せめて気持ちだけでいいから恩返しがしたいって．．．」

スバル「それって、どういう意味？」

クイント「それはつまり、奥さんを愛することでお礼がしたいって言ってるのよ、スバル。」

保奈美「なおくん．．．」

それを聞いた保奈美は、嬉しそうな顔をした。

ティアナ「なるほど、だからお二人は見ているこっちが熱くなるくらい仲がいいんですね。」

保奈美「／＼／＼／＼／」

そう言われて、保奈美は顔を赤くした。

そんな会話の中、直樹は別の部屋である人と連絡を取っていた。

直樹「こっちやって、連絡するのは久しぶりだな、達哉。」

直樹が連絡をしている人物は、体制が変わった月のスフィア王国の現国王、旧姓朝霧達哉ことタツヤ・テオ・アーシュライトだった。

達哉「そうだな、こっちも結婚してからようやく一年だからな。」

直樹「奥さんと子供は元気か？」

そう実は結婚した直後、フィーナは少し経ってからすぐに女の子を出産したのである。

達哉「ああ、フィーナもセフィリアも元気だ。」

とそこへ、達哉の妻である女王、フィーナ・ファム・アーシュライトが入ってきた。

フィーナ「達哉、誰と話しているの？」

達哉「ああ、フィーナか、今直樹と話をしているんだ。」

フィーナ「直樹と？」

直樹「やあ、元気そうだな、フィーナ。」

フィーナ「ええ、あなたもね、保奈美は？」

直樹「あいつは、今直美と一緒に朝食中だ。」

フィーナ「そうなの、あなたもそうだけど、保奈美にも久しぶりに会いたいわね。」

達哉「そうだな、やっと国政も安定して来たから、以前のような極端な忙しさはなくなったな・・・」

直樹「そうか、それじゃ今度、そっちに行かせてもらおうかな。」

フィーナ「ええ、歓迎するわ。」

達哉「そういえば、直樹、お前、噂の海賊戦隊ゴーカイジャーの仲間になったんだって？」

フィーナ「私も聞いたけど、どんな人達なの？」

直樹「なんだろうな．．．彼らのモットーが一言で言うと」「欲しいものはこの手ですべて掴み取る」って主義らしくてな、さらに気に入らないものは全部ぶっ潰す。」

ファイナ「．．．すごいわね。」

直樹「ああ、でもいい奴らだよ、二人にも会わせてやりたいもんだ。」

達哉「そうだな、それじゃ今度そのゴーカイジャーのメンバーも伴ってこれるように手配しておくよ。」

ファイナ「それじゃ、保奈美にもよろしく伝えておいてね。」

直樹「ああわかった、それじゃ、またな。」

そう言つて、通信を切った。

直樹「．．．達哉達のことは、直接会ったときに言えばいいか．．．あいつらも俺と保奈美と一緒に、力を．．．時空戦士スピルバンたちから力をもらったって．．．」

直樹は、一人そう呟いた。

その頃、ジークたちは、訓練を行っていた。

ジーク「行くぜ！」

ゴーカイジャー「」「豪快チェンジ！」「」

モバイレーツ「ダイナマン！」

ジーク「スーパーダイナマイトだ！」

そう言つて、5人は宙を飛んだ。

ジーク「爆発！」

エリス「爆発！」

フィオネ「爆発！」

メルト「爆発！」

ティア「爆発！」

5人は火の玉となって、一つにまとまり敵に向かって行った。シミュレーション用の50体のスカルソルジャーを粉碎した。シャーリー「ド派手な必殺技ですね。」

カイク「なに、これはほんの序の口だ、もつと強力な技がある。」  
マリエル「そういえば、あの時言っていましたよね．．．確か名前は．．．」

????「ニュースーパーダイナマイトだ。」

そこへ、5人男女が入ってきた、それは科学戦隊ダイナマンのメンバーだった。

カイク「先輩!？」

シャーリー「ええ!？それじゃ、あなた達は!？」

弾「ああ、俺達は科学戦隊ダイナマンだ。」

マリエル「あなた方がダイナマンの方々ですか．．．」

弾「ああ、俺は弾北斗、ダイナレッドだ。」

星川「拙者は星川竜、ダイナブラックでございます。」

島「俺は島洋介、ダイナブルー。」

南郷「南郷耕作、ダイナイエローさ。」

レイ「私は立花レイ、ダイナピンクよ。」

カイク「ところで、先輩がどうしてここに？」

シャーリー「もしかして、大いなる力を解放してもらえるんですか?」

弾「それもあるが、実は君達に急いで、大滝山へ行ってもらいたい。」

マリエル「大滝山?」

星川「実は、妖魔がそこにあるレトロ遺伝子を狙ってるでござる。」

シャーリー・マリエル「レトロ遺伝子?」

カイク「レトロ遺伝子は、先輩たちの司令官でもあった、夢野博士が若い頃作り出したものだ。」

島「ああ、その通りだ、この遺伝子は細胞をどんどん増やす働きがあり、最後には人の命を奪う作用があつたんだ．．．」

マリエル「そ、そんな、恐ろしいものがあるんですか?」

南郷「でも、夢野博士を恨まないでくれ、博士はその後償いで、子供たちのための発明を続けていたんだ．．．」

カイル「先輩．．．わかってるよ、そんなことくらい。」  
シャーリー「カイルさん．．．」  
レイ「ありがとう、それで急いで向かってもらいたいの、とにかく私たちの力も解放するわ。」  
カイル「ああ、頼む。」  
そう言つて、カイルたちは大いなる力を解放してもらい、前線メンバーを呼び出し、事情を話して、大滝山へ向かった。

大滝山

ルシファー「ここね．．．たしか遠山博士がレトロ遺伝子を破棄した場所は．．．確かに処分したでしょうけど．．．少しでもサンプルが残つていれば問題はないわ．．．ん？」  
とそこへ、ゴーカイガレオンが到着し、そこから全員出てきた。

ルシファー「ゴーカイジャー、それに魔導師．．．ダイナマンまでいるのね。」

フェイト「ルシファー、あなただったのね．．．」

直樹「こいつが、幹部の一人か．．．」

保奈美「そうみたいだね、なおくん．．．」

ルシファー「なるほどね、そこにいるのがサイバー・コップの力を受け継いだ者ね．．．でも、私はあなたたちの相手をしている暇は無いわ、このレトロ遺伝子のサンプル持ち帰りたいからね．．．」  
弾「やはり、レトロ遺伝子狙いか！」

ジーク「そう簡単に渡すかよ！」

なのは「みんな行くよ！」

そう言つて、みんな変身態勢に入った。

ゴーカイジャー「『豪快チェンジ！』」「『

モバイレーツ』」「『ゴーカイジャー！』」

ゴーカイセルラー「『ゴーカイジャー！』」

なのは・フェイト「『レンジャージャケット！セットアップ！』」

シグナム・ヴィータ「『レンジャージャケット！セットアップ！』」

フワード陣他「レンジャージャケット！セットアップ！」  
流星「怒る！」

剣流星の体内に秘められていた全エネルギーが感情の高まりとともに頂点に達した時、彼は超人機メタルダーに瞬転する。

直樹「ジユピター・ビット！」

保奈美「ルシファー・ビット！」

カイル「ゴークイキング！」

ジーク「ゴークイレッド！」

フィオネ「ゴークイブル！」

メルト「ゴークイイエロー！」

エリス「ゴークイグリーン！」

ティア「ゴークイピンク！」

アイム「ゴークイシルバー！」

カイル「ジーク「海賊戦隊！」

ゴークイジャー「ゴークイジャー！」

ルシファー「仕方がないわね．．．行きなさい、G・ポイズン！G・

マウス！」

G・ポイズン「ははは！」

G・マウス「行ってくるよ。」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

スカルキラー「シャアアア！」

カイル「さて．．．」

ジーク「派手に行くぜ！」

そう言って、向かって行った。

ティア「ジークさん、ダイナマンで行きましょう！」

ジーク「そうだな、せっかくだ、行ってみるか！」

ゴークイジャー「豪快チェンジ！」

モバイレーツ「ダイナマン！」

ジーク「ダイナレッド！」

エリス「ダイナブラック！」  
フィオネ「ダイナブルー！」  
メルト「ダイナイエロー！」  
ティア「ダイナピンク！」  
ジーク「爆発、科学戦隊！」  
ゴーク「ダイナマン！」  
ジーク「行くぜ！ダイナ剣！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
ジーク「ダイナ剣、ドリムギヤラクシー！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
エリス「クロスカッター、はあ！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
エリス「クロスカッター、ブーメランシャワー！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
フィオネ「ブルーfrisビー、行きます！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
フィオネ「ブルーfrisビー、スパークfrisビー！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
メルト「チェーンクラッシャー、行くわよ！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
メルト「チェーンクラッシャー、イエロー電光ボール！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
ティア「ローズサーベル、てい！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
ティア「ピンクスワンサーベルフラッシュ！」  
スカルソルジャー「ガガガガ！」  
ダイナマンにチェンジしたメンバーで一気に雑魚を片付けた。  
クイント「ゲキワザ、輪輪拳！」  
スバル「振動拳！」  
ギンガ「リボルバーギムレット」

ティアナ「クロスミラージユ、ハイブリッドモード！マグナムエクスキューション！」

エリオ「獣奏剣・ストラータ2連撃！」

キャロ「ジルマ・ジー・マジカ、フリード・ブルーシャイニングアタック！」

フリード「キユクルー！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

カイク「ベガトルネード！」

アイク「ゴーカイスーパーノヴァ！」

スカルキラー「シャアアア！」

なのは「フェイト」「スーパーモード移行！」

シグナム「ヴィータ」「スーパーモード移行！」

デバイス「イエス！」

なのは「ミラクル・エクセリオンバスター！」

フェイト「ミラクルライオットブレード！」

シグナム「レヴァンティン、真・火龍一閃！」

ヴィータ「マックス・ラケーテンハンマー！」

スカルキラー「シャアアア！」

G・マウス「食らえ！」

G・マウスは口から溶解液を出した。

直樹「危ねえ！」

なんとか、攻撃をかわした。

G・マウス「くっそ！かわされたか・・・これならどうだ！」

そう言つて、今度は火炎放射を吐いてきた。

メタルダー「僕に任せろ！」

そう言つて、メタルダーが特殊なバリアを張つて、直樹と保奈美を守った。

保奈美「今度はこっちから行くよ、パルサーカノン！」

G・マウス「うわあああ！」

ジューピター「次は俺だ、許さねえ！」

ジュピターが危機的状況に陥ったとき 異次元からミラクルなパワーが送り込まれてくる

これをサイバー・ボミングと呼ぶ。

直樹「サイバー・ギルティー！」

保奈美「ギガマックス！」

直樹「サンダー・アーム！」

保奈美「ギガマックス・ヘビーガン！」

直樹「ローリング・チャージャー、サンダー・マグナム！」

G・マウス「うわあああ！」

G・マウスは吹き飛ばされた。

メタルダー「一気に決めよう！」

直樹「ああ、行くぜ！」

メタルダー「レーザーアーム！」

保奈美「はあああ．．．サイバー・グラビトン！」

直樹「サイバニック・ウェーブ．．．はああ．．．チェスト！」

G・マウス「うわあああ！！！」

3人の一斉攻撃で、G・マウスは倒された。

ジーク「後は、てめえだけだ。」

G・ポイズン「ぬかせ、食らえ、我が毒を！」

そう言つて、身体から毒の霧を放ってきた。

ティア「そうはいかないです、フラワーシールド！」

そう言つて、ティアは取り出したシールドを回転させて、毒の霧を

相手に返した。

G・ポイズン「ぬ．．．お、おのれ．．．こしやかな真似を．．．」

ジーク「行くぜ、ダイナキック、ゴー！」

エリス「ゴー！」

フィオネ「ゴー！」

メルト「ゴー！」

ティア「ゴー！」

G・ポイズン「ぐああああ！」

ジーク「一気に決めるぜ！」

ゴーカイジャー「ニュースーパーダイナマイト！」

ジーク「レッド！」

エリス「ブラック！」

フィオネ「ブルー！」

メルト「イエロー！」

ティア「ピンク！」

そう言つて、5人は一つになり、身体を回転させた。

ゴーカイジャー「大爆発！！！！」

そう言つと、5人は巨大な火の玉になつてG・ポイズンに突っ込んでいった。

G・ポイズン「ぐあああああ！」

G・ポイズンは一気に倒された。

とそこへ、ルシファーが現れた。

ルシファー「もう終わったの？ やつぱり、今度はもつと強そうな奴を連れてきた方がいいわね．．．とりあえずサンプルは撮取できたから、これでマルバスの材料が揃ったわね．．．」

それを聞いた直樹が声を上げた。

直樹「マルバスだと！」

保奈美「もしかして．．．あ、あなたが、マルバスを生み出したというの．．．」

カイル「なんだ、そのマルバスというのは？」

保奈美「実は．．．」

そう言つて、全員に詳細なことを説明した。

エリス「．．．そんな恐ろしいウイルスが未来では存在するのね．．．」

ルシファー「あら、どうして、知っているの？、まだ研究中の細菌兵器なのに．．．まあいいわ、とりあえず、私は帰らせてもらうわ、これはほんの置き土産よ、D・クラーゲン！」

D・クラーゲン「キイイキイイ！」

G・ポイズン「まだ終わりじゃねえ！」

G・マウス「さあ、第2ラウンド行ってみよう！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

ジーク「上等だ！」

モバイレーツ「ゴークイガレオン！」

ゴークイセルラー「豪獣ドリル！」

ゴークイジャー「海賊合体、完成ゴークイオー！」

アィム「完成！豪獣レックス！」

キングインストローラー「オーレンジャーロボ、レッドパンチャー、

ダイナロボ！」

カィム、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータがダイナロボに乗り込み、フォワードとギンガがメンバーがオーレンジャーロボに乗り込み、クイントがレッドパンチャーに乗り込んだ。

アィム「豪獣レーザー！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

アィム「豪獣レックスドリル！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

アィム「レンジャーキーセット！」

豪獣神「豪獣神！」

アィム「完成！豪獣神！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

アィム「トライデントモード！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

アィム「これで終わりだ、豪獣トリプルドリルドリーム！」

スカルソルジャー「ガガガガ！」

アィムは一気に雑魚を一掃した。

エリオ「一気に行きます、スーパークラウンソード！」

スカルナイト「カラカラカラ！」

5人「クラウンファイナルクラッシュ！」

クイント「パンチャーガトリング！」  
スカルナイト「カラカラカラ！」  
クイント「マグナパンチャー！」  
スカルナイト「カラカラカラ！」  
クイント「一気に決めるわよ。」  
スバル「わかった、母さん！」  
ティアナ「超砲撃合体！」  
そう言うて、オーレンジャーロボとレッドパンチャーが合体した。  
6人「バスターオーレンジャーロボ！」  
キャロ「一気に決めましょう！」  
ギンガ「スバル！」  
スバル「わかってるよ、ギン姉！」  
6人「ビッグキャノンバースト！」  
スカルナイト「カラカラカラ！」  
スカルナイトはバスターオーレンジャーロボの攻撃で全滅した。  
カイク「ビートハンマー！」  
G・マウス「うわあああ！．．．よくもやったな、食らえ！」  
G・マウスは、火炎放射を使って攻撃してきた。  
カイク「くっ．．．」  
ヴィータ「よくもやりやがったな．．．」  
シグナム「カイク！」  
カイク「わかってる！ファイヤードラゴン！」  
そう言うて、ダイナロボは巨大な鉄球を投げつけた。  
G・マウス「うわあああ！」  
G・マウスは吹き飛ばされた。  
なのは「カイクさん！」  
フェイト「今のうちに！」  
カイク「ああ、行くぞ、ダイナミックジャンプ！」  
4人「ジャンプ！」  
そう言うて、ダイナロボは高くジャンプした。

カイク「科学剣！」

カイク「科学剣！稲妻．．．重力落とし！」

4人「重力落とし！」

G・マウス「うわあああ！」

G・マウスはダイナロボの必殺技で倒された。

G・ポイズン「食らえ！」

G・ポイズンは毒のガスをゴーカイオーにぶつけてきた。

ジーク「そうは行くかよ、風雷丸！」

風雷丸「風雷丸「ニンニンニン、ニンニンニンニンニン！お任せください！」

そう言つて、風雷丸はG・ポイズンを吹き飛ばした。

G・ポイズン「ぐああああ！」

ジーク「行くぜ！」

風雷丸「海賊と忍者、ひとつになりて、天下御免の手裏剣装備！ハ  
リケンゴーカイオー、推参！」

ティア「行きます、ゴーカイ無限手裏剣！」

G・ポイズン「ぐああああ！」

メルト「今度は、手裏剣チエーン！」

G・ポイズン「ぐああああ！」

エリス「そろそろ終わりよ。」

フィオネ「ジークさん。」

ジーク「ああ、行くぜ！レンジャーキーセット！」

ゴーカイジャー「ゴーカイ風雷アタック！」

風雷丸「どんどん増えます、必殺奥義・乱れ桜！参らん！」

G・ポイズン「ぐああああ！」

G・ポイズンは分身攻撃の前に倒された。

風雷丸「ふう、いい汗かいたでござる。」

弾「終わったな．．．」

星川「さすがは、拙者たちの後輩でござるな。」

島「これなら大丈夫そうだな．．．」

南郷「そうだな、俺たちの力を完全に使いこなしているからな。」  
レイ「もう、私達がとやかく言う必要はないわね。」  
弾「後は頼んだぞ、後輩。」  
その一言の後、ダイナマンのメンバーは光となって異世界に帰っていき、戦闘は終了した。

デカベース

メンバーはダイナマンのメンバーが帰った後、ルシファーの話を変えた。

玲「まさか．．．マルバスが妖魔が生み出したものだったなんて．．．」

恭子「ふざけてるわね．．．」

結「どうやら、妖魔を何とかしないと、未来を救うことにはならないようですね．．．」

直樹「絶対に倒す．．．」

保奈美「なおくん．．．」

ジーク「おい、俺達もいることを忘れるなよ．．．」

美琴「あれ？海賊だから、関係ないんじゃない？．．．」

カイル「気に入ったものは守る、気に入らないものは叩きのめす。」

アイル「それが海賊だ。」

直樹「カイル．．．みんな．．．」

はやて「まあ、ジークさんたちは極端やけど．．．うちらも同じですから、一緒に戦いましょう。」

保奈美「皆さん．．．」

玲「改めて、皆さんよろしくお願ひします．．．」

そう言っつて、直樹達は改めて、妖魔と本格的に戦うことになり、恭子先生たちも今まで以上に協力する事にした。

## 第61話 大爆発！怒りの超必殺技（後書き）

どうも、夜明け前のキャラには時空戦士スピルバンの力とそれを元にオリジナル要素をもたせる予定です、さらにカイクがカリムに渡したバスコが使っていたトランペットのラツパッターの改良型をカイクが作った設定にしました、次回は力の解放はひとまず休みにして、別の話にします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8389s/>

---

機翼のユースティア 殺し屋から英雄へ

2011年12月11日23時03分発行